昭和十四年版

續群書類從

第貳拾壹輯下

東京

續群書類從完成會

續群書類從第貳拾壹輯下目次

合戰部

続群書類従巻第六百十

合戰部四十

總撿挍保己一集

男源忠寶挍

里見代々記

安房里見家略系圖

人皇五十六代清和天皇九代後胤新田大炊介三男

里見太郎義俊

義康足利判官。

義房足利判官。

於宇治討死。

義清足利矢田判官。

仁木細川之先祖

義兼上總介。

義純

岩松畠山先祖。

義氏兼イ左馬頭。

母ハ北條時政カ女。

長氏
吉良先祖

泰氏 宮内少輔。幼名岩平丸。

基氏 加子六郎。
加子先祖。

家持 足利伊豫守。

眞氏 足利讃岐守

尊氏 征夷將軍。

辨若丸
父上謀反時。上洛之路ニテ浮島原ニテ奉殺。

直冬

義詮 征夷將軍。

滿詮

基氏 從三位。左馬頭。

氏滿 左衞門督。

滿兼 左兵衞佐。

持氏 從三位。兵衞督。
永安寺ニテ自害。

義久 大若君。
報恩寺ニテ自害。

春王
垂井ニテ被殺。

安王
垂井ニテ被殺。

義滿 征夷將軍。

義持 征夷將軍。

義量 征夷將軍。

早世

義教 征夷將軍。義滿（ナシイ）三男。

家基 足利刑部少輔。

結城合戰打死。

元祖
義實 足利刑部少輔。

生國下野足利。

扶殊院殿建岑興公居士。長享二戊申四月七日薨。行年七十二。菩提寺白濱。

第一
義成 里見刑部少輔。

生國房州安房郡白濱。

慈月院殿大幢勝公居士。永正二乙丑四月十五日薨。行年五十八。菩提寺白濱。

第二
義通 上總介。

生國同前。在城稻村。

天笑院殿高山正皓居士。永正十七庚辰二月朔日薨。行年三十八。菩提寺瀧田。

第三
實堯 上總介。

生國同前。在城初久留里之城代。後稻村。

延命寺殿一翁正眼大居士。天文二癸巳七月廿七日薨。行年五十。菩提寺始在稻村。後移本織。

第四
義豐 太郎。

生國 安房國 安房郡稻村。在城初岡本。後稻村。高岩院殿長義居士（初天笑院號。後改）。天文二甲午年四月四日薨。行年廿一。菩提寺瀧田。

第五
義堯 刑部少輔。

生國上總須西領久留里。在城上總久留里。

東陽院殿岱叟正五沙彌。天正二甲戌六月朔日薨。行年六十三。菩提寺本折村。

第六
義弘 左馬頭。

生國同前。在城上總洲西領佐貫。

瑞龍院殿在天高存居士。天正六戊寅五月廿日薨。行年四十九。菩提寺同前。

第七
義頼 安房太夫守。太郎。

生國同前。在城房州岡本。

太勢院殿勝岩泰英居士。天正十五丁亥十月廿六日薨。行年四十五。菩提寺同前。

第八
義康 安房守。四位。侍從。左馬頭。

生國安房國岡本村。在城房州舘山。

龍讃院殿傑山房英居士。慶長八癸卯十一月十六日薨。行年三十一。菩提寺同前。

第九
忠義 安房守。

生國同前。在城房州舘山。元和八壬戌八十五日。行年廿九。菩提寺同前。

里見代々記

抑安房國に里見の打入十代相續國を保給ふ。其元由を尋るに。人皇五十六代清和天皇九代の後胤。新田大炊助義重の三男。里見太郎の末孫。足利黨の末葉基氏の嫡男家基。其子足利刑部大輔義實と申せしは。安房里見元祖。足利尊氏は。人皇九十六代光嚴院。正慶二年癸酉五月七日に。京六波羅を攻落す。新田義貞は。北條高時か一族を討亡し。先帝を隱岐國より還幸復位し奉る。其賞として。尊氏を征夷大將軍に任せらる。三男義詮。その任をうけ。次には長子義滿。次長子義持。次に長子義量。子孫□都て五代相續して。京都將軍たり。然るに尊氏か四男從三位左馬頭基氏。五男左衛門督氏滿。六男左衛門佐滿兼管領職を給て。鎌倉に在任せり。然るに義量早世す。遺託して叔父滿兼か子持氏に。遺跡ゆつるへしと極め。正長元年戊申正月十八日に薨せらる。諡號を從二位將軍長德院と給はる。時の帝は。百二代稱光院にて御座候けるか。御心に持氏を嫌はせ給ひ。義滿か□男義敎を將軍に任給ふ。それに依て。持氏憤り給ひ。帝意を背く心出來たり。或日。家臣上杉憲實を召て申樣。我嫡男賢王丸元服の頃に至れり。我叔父基氏より次第に我に至るまて。元服には上洛せしかとも。此度は。上洛の思ひなし。天皇にも儀を曲て國土を治め給ふ。古語に君に（マヽ）君たれは臣も臣たりといへり。何そや一天をはこくむ君王の儀を曲給ふそや。我も左こそ行へきなり。更に上洛の思ひなし。只先祖義家の例に任せ。八幡宮の寶前にて元服させん。幸今日吉日なれば。いそき用意せよとそ申されける。憲實承はりて。御意左有事に候得共。上を輕んし私を重んするは逆也。只々先規に任せて上洛させ給へ。是ら御家の

吉事候はんと。再三諫けれは。持氏結構に思ひ。更に聞入れす。賢王丸を誘ひ。鶴岡に詣て自社前にて冠禮を行。大若君義久とぞ名付られける。是より上杉憲實は。君臣に間出來けれは。行末危思ひ。忍ひて都へ上り。將軍家へ參り。主君持氏。身持恣にして臣か諫言を用ひす。上を侮り下を放逸す。願は異見を加へ給へと言訴狀をもつて捧ける。將軍家には。此旨急き奏聞して。綸旨を申下し。卽時に御教書を諸國に廻はし。早軍勢を相催す。小笠原信濃守政康。今川上總介範忠を兩大將にて。鎌倉に發向す。上杉も一味して相隨ひ打向ふ。持氏戰敗れ。永安寺に入て自害す。義久は報恩寺にて自害しぬ。持氏の御子に。春王丸。安王丸とて二人御座ける。未幼稚なれは。母に伴ひ落行給ひぬる。爰に下總國司結城七郎朝氏は。鎌倉より國司を蒙り。結城の城主にて有けるか。今度鎌倉の沒落を無念に思ひ。足利刑部少輔家基を誘ひ。日光山に隱置。若君達を迎取。重代の主君なれは。取立申さはやとて。結城を固て楯籠る。小笠原。今川是を聞。急き結城に押寄。日夜攻戰ほとに。多勢に無勢叶はすして。城方散々に打敗られける。足利家基。今はかふよと思はれけれは。長子義實を諫て。汝は急き落行て。時を待て運を開候へとて。木曾。堀內を隨身させ。三浦方へと志て落けり。朝氏。家基諸共に。終に打死し給ひけり。去程に。城中に火掛りて。打漏されし軍兵共ちり〳〵に敗北しぬ。春王。安王も虜られ。鄉へ引上けるか。上意下りて。濃州垂井の道場にて二人共に失ひ申ける。此時。大合戰にて城方一萬餘人こそ討れける。去程に。義實は父の諫に任て。木曾左馬之允氏元。堀內藏人貞行を隨身し。三浦の方へ落給ひける。兩人に向て申されけるは。今は結

城も落城せり。後日の用意になる事もやあらん。先三浦を差置て。是より安房國へ渡らんとて。海人を頼て。濱地に下り給ひける。海人承はり。急ぎ船を浮ければ。折節順風吹送り。白濱といふ在所に著にけり。其頃。安房國には四人の郡主を立置れける。平郡には安西式部大輔勝峯。勝山に住す。安房郡には金餘左衛門介景春。神餘に住す。朝夷郡には丸右近介元俊。石堂谷に住す。長狹郡には東條左衛門督重永。永泉に住す。彼等四人。互に心を示し合せ。分内を守り居りける。然るに。金餘か家臣に。山下左衛門と云者あり。主君景春を討亡し。己郡主と押成りて。郡をも山下郡と名を改。放逸無慚に働けり。丸。安西は。是を見て。彼か無道國の汚也とて示合。山下を討て捨。郡内を分取。丸安西と口論出來り。又俄に戰起りて。暫く挑たりしか。安西。終に打勝たり。丸は此時滅亡せり。爰に金餘か浪人共。皆一同に言合。義實公を大將に頼たてまつり。奉公申はやといふ。木曾。堀内時至れりと悦んで。金餘か殘黨を招集る所に。三浦より志摩守義明といふ人。渡り來り給ひける。御大將に對面有て申されけるは。先年結城合戰に。足利の落人當國へ渡らせ給ふ處に。今度郡主共。俄に合戰仕出し。浪人共。貴殿を大將に奉頼之由。承はり及ひ。小勢なれとも軍兵二三百人引率し馳參る。無骨なれ共與力仕らんす。抑も我先祖も。往昔治承四年。頼朝公。伊豆の石橋山に旗を上給ふ時。與力仕たる三浦大助か末孫に候。その時頼朝公。小勢にて有けれは。主從たゝ七騎に打成され。一先。當國島崎といふ所へ渡り給ふとかや。先祖大助は三浦衣笠の城にて自害せり。その後。御運開けて。關八州の侍共。頼朝公に加勢し奉り。終に平家を討亡し。天下を掌に握り

給ふなり。我今。先祖大助か例にしたかひ。公に與力仕とその給ひける。大將にも御悦喜斜ならす。厚く過待ましゝける。かゝる所に。丸か浪人共馳參り。我々も奉公仕度候。召つかはれ給はれかしと。首を傾て望けり。義實公聞召。神妙なりとて御味方に加へらる。いさや安西を討取れとて。三浦殿には堀内貞行を差添へ。丸か勢を相從へ。御手元には木曾氏元を召具され。金餘か勢を引率し。千代と云所まで押出し。勢を揃へ見給ふに。步行武者五百人騎馬五十騎こそありける。步武者の中より根本兵七といふ若者。進み出て申樣。公には往昔の吉例に叶はせ給ふものかな。是なる橋を五十騎橋と申傳て候なり。其由來は鎌倉將軍賴朝公。石橋山より當國へ渡らせ給ふ時。當國の者共。先五十騎馳まいりたり。爰にて東勢を相待給ふ時に。此橋を五十騎橋と名付給ふと。今に申つたへ候。今日。初の御車に相從ふ騎馬の數。その昔にかはらす候事。目出度御吉相に候者をや。當國は申にや及はす。上總。下總まて御手に屬可申事。いと御心安かるへしとそ祝し奉りける。兩大將聞召　いしくも祝言申たり。今日より馬をゆるすと宣へは。忝さ身に餘り難有々々とて。御前を罷立。御出馬かくれなけれは。勝山安西式部大輔勝峰は。急き大勢を引率し。瀧田原に出張して待かけたりしか。如何思ひたりけん。甲を脫き弓弦をはつして。兩大將の御前に跪き。某は勝山に住する安西勝峯と申者にて候。自今以後。御手に屬せんため馳參し候と愼て申ける。兩大將御覽して。汝か望に任すへし。其儀ならば泉の東條か城へ先陣仕れと有けれは。畏て候とて。長狭郡へ發向す。東條左衛門重永は。上總の國大瀧の正木彈正と一味して。金山の城に楯籠。文安二年癸

巳六月八日に。合戰初り。明る九日に落城せり。東條重永は自害せり。正木彈正は。大瀧を指(捨イ)て引退く。同三年甲午正月廿七日。大瀧の正木か城を押取卷。晝夜攻戰程に。城方敗れて。正木降參したりける。夫より白濱へ引歸り。暫く事靜になりければ。義實公の給ひけるは。我十九歲にて當國へ渡り。纔五六年も旅住せし所に。不思議の合戰起りしより。當國を切隨ひ(へカ)。今は上總迄手に入たり。可然者の娘を娶らはやと仰ける。安西承。上總國眞里谷某か息女可然候とて。追付迎取。御前にそ定たり。角て御添合睦かりければ。御男子誕生まし〳〵ける。大將御悦かきりなく。千歲を祝ひ。春若丸と名付給ふ。月日來り過行程に。今年十五歲にならせ給ふ。御元服の御祝ありけり。義實公の給ひけるは。我足利を名乘れ共。元根は新田の三男里見也。其子足利なれは。我父家基末葉故。足利を名乘給ひしそかし。然は先祖の氏。里見を名乘ものなし。今日より汝元服せは。里見を名乘へしとて。里見刑部少輔義成とそ名付給ひけり。近習外樣に至る迄壽を祝し奉り。御祝甚賑ひたり。かくて年月を經(歷イ)るほとに。文明三年辛卯春。大將。刑部殿へ被仰けるは。足下にもはや廿五歲。軍大將にも立へき頃なりし。我は未五十餘歲。少も年の若き內。上總國を攻へきなり。急き勢を催して打立はやと仰ける。義成聞召。左こそ候へ。其義ならは二手に成て攻申さはやと宣ひける。左あらは討立とて。大將には。先眞里谷黨の內に。道觀入道と云者。峰上領に玉木の城と名つけ閉籠。己か領分の民を恣に惱す由。手初に。彼を攻潰さんとて向はせ給ふ。刑部殿には。道觀か一子眞里谷丹波といふ者。嘶海といふ所に城郭を搆へ。海陸の關所とし閉籠たりと傳へ聞。彼城を攻

落さんと。父子二手に成て出陣ある頃は三月十五日。玉木の城を攻給ふに。城中に人百計こそ見えにける。已に戰初りて首二三十切捨たり。殘る雜人原。皆ちり〳〵に落失たり。道觀入道を尋るに。行方更に知れさりけり。城中に火を掛て。夫より嘲海城を心掛。大峰通りにさし掛り。正木大膳を先手とし。血氣盛成若者共都合其勢二百餘騎。軍太鼓を叩き立。喊々聲を出して押たりける。義成公には安西勝峰を先手にて。明金迄押給ふ所に。丹波家臣に佐久間藤内と云者出張して居たり。安西是を見て。彼は定て海陸の關守と覺へたり。軍神の血祭りに。只矢軍せよ。刀汚すなもの共と下知すれは。大勢の軍兵共。指取引詰さん〳〵に射る。敵防戰。其隙に忍者を遣はして。案内を伺ひ見るに。鋸山に少々防勢を隱置。其外には人も見へす候と申。義成公聞召。今宵は陣所に燎絕す

なとて。夥敷燒立させ。ひそかに軍兵を引具して。船に取乘り金谷に漕廻し。後より攻給へは。明日早旦には。嘲海城を追取卷。一度に鬨を突と擧る。然るに眞里谷入道道觀は。昨日の軍に討負て。漸々忍出。此城へ逃込しか。迚も叶ましと思ひ。丹波と談合極め。一通りの文を認。峯上次郎清春と申者に持せて。里見殿へ遣しける。清春。文を持て御前に罷通り。是は此所の城主眞里谷丹波か使者にて候とて。一通を差上て歸りける。則披て御覽するに。兼而承及候に。里見殿には文武兩道に達者に御存也。誠に去ゝ御事候半は。此里の氣色。一時の間に百首の和歌に聯させ給へ。左候はゝ城を渡。降人に罷出。永々御旗下に可屬とそ書たりける大將御覽して。あはれ彼等か有樣を考るに。軍したらは討負は必定なり。無下に城を渡さんも。餘り本意なし。只直に望を懸命を助て。旗

下に付はやとの父子か談合こさんなれ。あさましき士の振廻かな。よし〳〵命を扶得させよ。いさ草臥やすめに我も聯ねんに。士共も思ひ〳〵に仕れとそ宣ひける。軍兵共も丹波か有樣。扨も是非なく望たりと思ひ〳〵つらぬる。大將の御歌に。

里を見よはけしき春の山あらし世をつくろふみにさはらさりけり

世をふるまてとふろふ坂と聞時はゆきゝの人の夜半のたよりか

討もせすうたれもせさるたひ人の百首の望つらねまいらせ

かやうの御歌連ね給ひける。人々の歌も取集め。百首揃へて丹波か方へ遣はさる。義實公は山路通を經て付せ給ひけるか。此體御覽有り。御滿悦限なく。先人馬を休んため一引々返し。長南は重て攻へしとて。白濱へ歸陣ある。同年八月には。久留里上總介を討取り。萬喜。勝浦。池和田。眞里谷。窪田。東金。佐貫。椎津等の城共。不殘御手に屬し給ふ。義成公仰けるは。斯段々に滔(ハビコ)りて。兩國を攻陷けるも。三浦殿の與力故なりとて。深く睦くそ思しけり。扨三浦殿にも。社(タカ)家公とて御子まし〳〵ける。去る文安三年。大瀧の正木を降參させしより。三浦殿御父子には。安西を執權として。勝山の城外田町と云所に。御殿を立後見し奉る。社家殿に安西か計にて。本國より御前を呼迎ひ給ひける。御父義明公は。去甲辰に七十二歲にて薨し給ひける。義成公未御前ましまさゝりければ。何と申內に。萬喜に先祖加子六郎なり。加子は足利の末孫なれば。元根里見足利一家なり。萬喜の息女を迎んとて。堀內木曾か計にて。いそき迎取奉り。御中淺からねは。若君誕生なされける。里見上總介義通公と申是なり。次に又乙

若出生被成ける。義成公の給ひけるは。子共段々成長す。城一ヶ所にて叶まし。普請せよとて稲村山を見立。文明十八年六月。新立始りける。或時仰られけるは。安西勝峰。三浦殿の後見せしか。勝峰も果ぬ。其後は我後見中。上總合戰に七年肝煎たるに。六七年以來少々心休に思しか。義明公には奉別。今取立る新城も。父上の御日に掛んと思へとも。御老衰御座は心元なしとそ仰ける。然るに義實公は。長享二年戊申四月七日。七十二才にて薨し給ひける。稲村の城も。其後六年の年月を經て延德三年辛亥夏。漸々成就しけり。其後。明應二年癸巳四月五日に。下總國木内判官友安か城攻とて。社家公と示合發向ある。三千餘騎にて城を圍み。鬨の聲をそ上たりける。城中兼て用意の事なれば。門を開て切て出。兩方互に入亂。四月六日の四ッ時より夜五ッ時迄。息をも續す戰しか。城方次第弱りによわりて。散々に切まくられ。過半討死したりけり。其外手負夥し。少し殘る雜人原。何國ともなく逃け散たり。木内判官是を見て。えゝ仕成たり口惜しやとて。腹攪破りて死たりける。兩大將御覽して。早々城に火を懸けよと下知し給へは。只一時の煙と焼にけり。義成公御覽して。大に笑はせ給ひ。結城木内めか鎌倉の上杉憲實かゆかりとて。結城の城を陥してより已來。下總國司となりしも。上杉か才覺也。結城落城も。早五十餘年そかし。父子二代の國司。今は煙の中に眞黒くろの黒しつと成ける快さよ。あれ／＼見給へや。我祖父亡靈瞋恚の忘執を晴れて。成佛し給へやと御回向あるそ理なる。扨末香取に巣田家か殘りたれ共。一先歸陣しかるへしとて。本國へ引返し給ひける。然る程に。上總下總兩國の武士共も。里見殿を大將と奉仰けり。又三浦殿に

は。生實の八幡に御殿を立。兩國の武士共圍繞渴仰し奉る。五六年も過て若君誕生ましく〳〵。三浦太郎祐家殿とそ申ける。里見殿には下總より御歸陣有て。直に新城へ御入ありて御移徙の祝儀あり。後永正二年乙丑四月十五日。生命五十八歲にて薨給ける。安房の里見の初祖は。此殿にそ在ける。

第二代義通公

第二代里見上總介義通公は。稻村に在城也。義成公の長子也。其御生れ付器量骨柄人に超。天晴武士の大將やと褒ぬ者もなかりしか。惜かな幼年より內症に痼疾在て。時を分す差發りし故。強き御働は叶はす。常に風寒を厭しめ給へとも。大將の御身なれは。社家公と諸共に所々の合戰に出陣ありて。軍奉行を被成ける。御子竹若丸には。中里源左衛門。木間八右衛門を守職とし。宮元城に置給ふ。舍弟上總介實堯をは。父義成公御時より十五歲にして。上總の久留里の城代として。今に至るまで居置れける。義通公數年の御病氣積りけん。今度の御惱には留るへしとは思はぬとて。上總介殿を呼迎へ。頓て登城なされける。御枕元へ被招。家臣木曾。堀內。御內室の家老本間。菅谷等を近く被召。被仰渡けるは。余數年の持病。今度は緊敷差發。醫藥祈誓も及はす。存命今を限りと覺ゆるそ。我無らん後は。竹若は十五歲に及なは。安房上總兩國の大將に定めよ。夫迄は實堯。此方へ引越て。城中を守り國民に成敗を加へ給へ。竹若十五歲に及て無相違被渡よ。其後は久留里に成共。宮本なりとも。實堯の心次第住るへし。兩所の家老共。慥に承はれと仰渡されなから。生命三十八歲にて。永正十七年庚辰二月朔日に薨しさせ給ひけり。

第三代實堯公

第三代里見上總介實堯公は。義成公の御二男也。十五歳の御時より。久留里の城代に被置けるか。御兄義通公御遺言にて。稻村の城主となり。安房上總兩國の大將たり。其頃天下大に亂。京都將軍には。大津坂本の邊に發向まし〱。諸國大名戰爭ひ休事なし。御隣國には相模の北條家。簮に咽て他國まで切込風聞專也。大將被仰出けるは。北條か振廻皆聞たりや。國へ入れては叶まし。いさ打立て追拂はん。先萬喜は。勝浦東金勢を引具し。三浦殿の防勢に加るへしとて。生實の八幡に向けられける。當國勢は無殘皆三浦へ押渡れ。里見家の軍術道具漕出させ。急けや〱と下知し給へは。正木安西を初とし。究竟の船手共。旗纒を押立々々。浪風に飜し。艫拍子蹈て推ほとに。三浦の沖に着にけり。北條方には船數百艘漕雙へ。勢揃へして居たり。正木。安西是を見て。あれ射潰せと下知すれは。早矢軍をそ初ける。本陣近くなりけれは。大將御覽し。それ軍法よと仰ける。毀て候とて。味方の舟底より大力の者共顯れ出。大石大木敵の舟へ擲掛々々攻入れは。舟も人も打碎れ。微塵と成て失にけり。殘る敵の船共叶しとや思ひけん。我先にと漕退。夫より二尉か島に陣取て。軍兵の息を休ける。斯る所に。俄に西風はけしく吹出し。伊豆の沖より來る浪は。雪の山の崩れ掛れることくなり。大將御覽して。天の時未た至らさりけり。重而恵もあるへきそ。一先引やとて。軍船を漕並へ。安房國へそ歸れける。大永六年の五月。大將仰出されけるは。去年三浦合戰に。北條方にて軍大將と呼るゝ芳賀。清水。內藤なとを討取られは。當年も又。漫ると聞へたり。去とは無念の次第也。此度は何國まても追掛押詰討亡さんものを。早々打立や者共と。はやり切てそ下知

し給ふ。正木。安西承はり。其儀にて候はゝ。上總勢を指添申へし。督ヶ島にて相待樣に示合申さん迚觸廻し。水主梶取急き御船をしつらへ。軍法道具を取積。一度に沖に漕出す。北條方には房州の大力共を揪落さん手立にや。先に進む舟共には。一人持の平材木を。舷にひしと打付。其陰に熊手。鳶口。突棒。叉子股。捩り掛輪などの取道具を持せて。雑人原らを取乘せたり。又侍らしき者共。甲冑を帶し。鑓長刀を取て。例の陣場へ漕出す。里見方には。是を見て日暮迄は。遠箭を射て時分を待てやとて。態と船を漕退け。遠矢を射てそ待たりける。早黄昏に及て。色目も分ぬ頃おひに成ぬれは。大勝すは時分は能そ。彼の土侍と下知し給ふ。味方には舟底より土にて燒たる人形を取出し。舟梁に立ならへ。船を靜に仕掛れは。敵方には是を見て。すは大力共か出たるは。餘すなと云ふまゝに。長道具を指伸々々。人形をそ攻たりける。味方の舟人心得て。哦や〳〵と押込で。時分は今そと窺見て。大力とも躍出。例の大石材木取揚々々投入れは。舟を微塵に打破られ。溺れ沈む者おひたゝし。此有樣に魂を飛し。側なる舟に飛乘るとて。蹈はつして落もあり。舟ふみかへしてかふるもあり。伏たる舟の敷に乘り。振へてぬめり落るもあり。漸々淺瀬に游付。陸を目かけて逃るもあり。海の面は手負死人。破船の板朱に染て漂たり。幌。旗。纒。陣大鼓有ゆる兵具。浪に淘れて狼藉たる有樣は。龍田の紅葉。大嵐に吹散て色香失せしに異ならす。かゝる所に。上總勢揉にもんて押寄る。大將御覧して。大勢に成けるそ。何國迄も追かけよと。已に陸地に攻上る。敵はひた引に引。味方は勝に乘て追懸る。大將下知し給ひけるは暫く待よ扣よ。北條か迯道は。大佛道にて

こそ有へきに。扇谷の方へ引取こそ不審なれ。必定盛り返すへき手立あり。味方も手立こそあれとて。精兵六十を引分。草深き山陰に隱置。相圖次第可然と下知して。しはらく休みおはします。案に違はす北條勢。小田原勢を加へ添て。按にもふて取てかへし。一文字に突て掛る。大將すはやと下知し給へは。相圖の太鼓をとう〳〵と打立れは。伏兵一度にとつと起り。敵陣の眞中へ割入り。無二無三に切て廻る。北條勢溜り得す。小田原さして逃け退く。追續て攻取らんとせし所に。敵の火歟味方の火かは知らねとも。八幡宮へ火掛り。社内不殘燒あかる。大將是を御覽して。あらいま〳〵し。かゝる折節。源氏の氏神の御社燒亡するこそ不吉なれ。いさ一先。本國へ歸らんとて。急き軍勢引まとひ。船押浮て歸らせ給ふ。或日。御供に出し者を不殘。御前へ被召出被仰るゝは。兩年の合戰に味方に不覺を取らさりしは。皆々御働き拔群なるかゆへなり。最早此上は事靜に可成に。何もくつろき休めとて。分々に隨て。知行加增。褒美。役替抔被仰付ける。皆御別恩難有御禮申上罷立。角て六七年も國中ゆたかに戶さゝぬ御世と。境内治り悅合へる。頃は天文二年癸巳七月廿七日の夜。御家の人々を御招き有て。涼の會を被成ける。茶湯酒宴おはりて。被出けるは。余の門葉にて久留里に城代勤しを。計らすも兄義通の逝去に遺言に依て。此城へ引移り。竹若か後見せし處に。北條か漫こるゆへ。征討防戰心の隙のなかりしか。此六七年は。境内事靜になれり。兄義通遺言にも。竹若十五歲に及なは。兩國を渡すへしとの事なり。竹若も早二十に及。元服して太郎義豊と名乘らすれは。當暮には國を渡し。大將と仰き武運長久の祭禮を行ふへしと思ふなりと宣

へは。人々承。御尤至極なり。誠に仁義の道なるへしと。一同に首を低れて返答申上られける。然るに宮本の城に在す太郎義豊公には。思召事あれは會合仕れとて。近習外様家中共へ廻文を廻されける。人々何事にやと一人も闕斷なく。同年同月の事なるに。日暮には皆々御前へ相詰らる。君被仰出けるは。今般會合の儀。餘の儀にあらす。其方達か知れる通り。我幼稚より中里源左衛門。本間八右衛門守職にて。此城に在る處に。不幸にて七歳の時。父上に奉離。父上公御末期に叔父實堯を被招。家老木曾。堀内。母の家老菅谷。本間を閑手に被成。竹若十五歳に及迄は。實堯後見被致。十五歳に及はゝ。兩國共に無相違可被相渡との御遺言なりき。然るに余もはや二十に成。元服してより後。外敵も鎮り境内も靜謐せり。疾にも國渡し可有筈なるに。一向汰沙なきは。面々如何思ふそやと宣へは。堀内新左衛門。本間刑部左衛門。中里源左衛門。眞田大學。勝山隼人。鎌田孫六抔を始。口々に申上けるは。されは候。稲村殿の御心さし。必定久留里にまし／＼。義堯殿に御讓可有之御心底と覺へ申候。若此方へ被渡へき思召に候はゝ。二三年以前より一度も御通達も可有之筈に候へ。其上當時御家中への被成方。偏頗の御振廻も有之候。去大永兩年三浦合戰に。古來よりの百騎か頭正木。安西。山田。黑川抔か働き計を御稱美被成。新參の者共の内。粉骨をつくし身命を投て。敵を討帳には記さるれ共。當座の役替御言葉の御褒美なとにて。御あひしらひ被成れは。新參者共は少も悦不申候。正木等か手柄は。御家御代々の軍術御傳授の書に詳なり。軍の色を見。軍法を仕懸るは御下知次第なれは。彼等功にも在へからす。只御近習御最負の者共なれは。偏に古來

の者共計。賞祿を行はせ給ふ。萬端御心任せにて。御國渡之儀可有とも覺へす。只早速押寄弓箭を以御取返させ給ふへしと。日々に勸たてまつる。御年若の氣情盛りに御座ければ。此等か申所甚御胸に叶。左こそ〳〵いしくも申たりとて御悅喜あり。木曾修理介。楠六左衛門愼て申上けるは。各か申處尤一理なきには候はす。乍然實堯公にも。よも人外にてはましまさし大將の御身として。苟も御兒の御遺言を黜し。我か子に與へんは。下民たもなす所にあらす。且遠く慮候に。今日本國中總に亂れて。彼方此方に戰爭ふ事休む事なく行末落居も不知時節に。御一門の中に合戰起らは。相摸下總の敵共。其隙に乘て起り來らは。御家の滅亡眼前也。我々か存るには。稻村殿は幾度も諫言仕へし。若叶はすとても。外に計ひ如何程も候へし。御叔父にて御座せは。弓矢は引れ候まし。御弓矢は眞平御止可被成と押返々々諫奏る。義豐公聞召。其方達か諫言更々用ひかたし。其諫言に隨はぬこそ我か面目たるへし。叔父たりといふとも。先殿御遺言違はるヽは讐敵にてはあらすや。稻村は諫言にも及はす今迄沙汰無きは子細なくては叶はす。但し義豐は兩國の大將には不足に思ふか。但し家臣郎黨共。物の用に立ましと侮ての事か。只押寄て勝負を決せんものをとの給へは。木曾修理介重て申けるは。今夜押寄て討取奉らんは手の内に握るか如くなれとも。久留里より。義堯公の寄せ來られんは自定なり。さあらは萬喜。眞里谷黨か起り加はり。且は安房上總の浪人共の子孫。未た野武士て居る者共夥し彼等を驅加へ攻來るものならは。味方はやりにはやる勇士たるとも。多勢に無勢の戰にて負軍に成らんは必定也。自然と味方も防き支へ。暫

く雌雄を爭ふとも。隣國隙を伺ひ襲ひ入らは。叔甥共に亡され。他人に國を奪はれんは眼前たり。能々御志慮を廻され。此軍は達て御休可被成と。手を挨て餘儀なく諫め奉る。義豊公聞召　扨々分けもなき云事哉。父の敵を討取んに。前後を顧るへきや。討ての後は如何樣に成へきとも。夫から夫迄よと御立腹甚しく。やあれ打立ぬかと。大聲擧て進み給へは。元よりはやる若者共。中里源太。三浦半四郎抔を初として。早勢揃へ乙仕たりけり。稻村には。其夜諸臣を集て御酒宴の上。正木。安西に勢付られけるは。近日吉日を撰み。當暮に國渡しの通達せよとて。甚御機嫌よく御酒宴酣に及ける所に。宮本方間近く押寄せ。大鼓をとう〳〵と打鳴らし。楯箙（エビラ）を叩き立。閧をとつと作りて御城を追取廻す。正木。安西是を聞。こは何條不思議出來るぞと。表の櫓に欠上り。さまを開て。何者なれは狼藉を仕ぞ。名乘や聞かんと呼はりたり。大勢の中より駒一陣に翔出し。鐙踏張り鞍蓋に突立上り。大音擧て罵る樣。我は宮本の城に隱なき中里源太金次也。我君義豊公。已に廿に成らせ給ふ迄。國を渡さぬ大欲無法の叔父實堯を恨ん爲。今夜を眼り寄られたり。御覺悟有へふ候とぞ呼たり。城中大に狼狽し。思はぬ相違出來たりと。上を下へと返す所へ。宮本勢。潮のすゝむか如く。挑灯。松明振立々々。早城中へ亂入。吼々聲出して切立る。城中の者は甲冑帶する隙もなく。立たる儘の素膚にて。有合打物押取々々渡り合。爰を最期と戰たり。俄事にて有けれは。何かもつて當るへき。城方忽に切散され。手負討死數知らす。中にも正木藏人。安西民部。黑川外記。忍足左京。堀江新藏。板倉源内。本田藤右衛門。山田佐左衛門。峰上小平治。柴田勘平抔究竟の兵共。素膚にて有け

れは。皆討死したりけり。實堯公御覧して。もふ是迄よ。是非なしとて。御心底を述らるゝ隙もなく。御腹めされけるぞ傷ましき。義豐公一戰に打勝給ひて。則稲村へ入らせ給ひけるか。惜ひかな義豐公。今すこし靜り給はゝ。御互に目出度渡らせ給ふへきに。實堯公にも未た五十歳にて生害まし／＼ぬ。義豐公には惡名を蒙らせ給ひ。終には滅亡させ申事。中里源太。三浦半四郎抔に天魔の精か入替り。罪なき叔父君を殺させ奉るは。則其御身を亡す基なり此罪。爭か遁るへけんや。頓て見よや亡へしと。上下私語あへりけり。

第四代義豐公

第四代里見太郎義豐公は。義通公の長子にて御座しける。七歳にして父上逝去ありし時。十五歳に及はゝ。國家相違なく渡さるへしとて。叔父實堯公を後見として御座しける處に。廿歳迄國渡しなきを憤りに思ひ。天文二年癸巳七月廿七日の夜。稲村城へ夜討して。實堯公を亡し。則宮本より稲村へ引移り。房總兩國の大將と成り給ひけるか。義豐公仰付られけるは。此度の様子。久留里の義堯聞ならは。押寄來るは自定也。城々を固へやとて。宮本の城へは宮本宮内。鎌田孫六。稲村には木曾修理介。眞田三河等を堅めさせ。勝山には大野宇兵衛。勝山隼人を差置て。龍崎外記。楠六左衛門には。加茂坂に燎を燒て待せらる。かやうに用心嚴しく。八月の初より極月末迄待けれ共。久留里より一圓沙汰もなかりけり。

第五代義堯公

第五代里見刑部少輔義堯公は。實堯公の長子にて久留里に在しけるか。天文三年甲午四月四日に家臣正木。山田。安西。山本。多賀抔を御前に被召仰出けるは。去年七月廿七日の夜。

從弟義豐。稻村を襲討。父實堯を奉亡しより已來。一日片時も憤り休む事なし。早速可討捨事なれ共。彼は道をも不知畜生なり。いつまで生け置とも。終には我手に懸る者なれは。急々にも及はす。今迄引延置たれ共。流石父の敵なれは。畜生たりともゆるすへきにあらす。明日討立て。安房の國へ寄せんと思ふはいかにと問せ給へは。皆々承はり。一同に申上けるは。此御儀。御尤にこそ候へ。今迄御延有事。不思議に奉存候也。實堯公御後見被成恩は重く。過はなし。御城は申に及はす。兩國の武士共へ。政道嚴敷被仰付。義豐か代に成ても。今の通りに勤よと常々仰付られし。何も耳に徹へて候なり。恩を得て恩とせす。却而是を害ふ。況や御叔父にて渡らせ給ふをや。鳩に三枝の禮あり。烏に反哺の孝ありとかや。鳥獸にも劣りて在し御人の。何之因緣にて。武門には生れ給ひしや。疾々御出陣候へし。房州の味方へも調すへしとて。磯村まで早飛脚を遣けり。いさ打立とて。四月五日の明方に。房州磯村まて押出す。かゝる所に。房州の味方より磯村まて馳來り。上總勢に出逢て申樣。稻村には久留里より押來るを傳へ聞。君の留主をねらひ。逆寄にせんとて山路を傳へ押し掛候也。御用意可有候と告申ける。いまた國の中なるへし。是より平久里通りに越やと　。磯村より山傳へに打越たり。明日六日の早天に。犬掛村にて犇と出合たり。兩方鬨を作り掛て。追つまくりつせり合しか。稻村方色めき立て。負軍になりしかは。先手に進む中里源太。三浦半四郎。菅谷彌八。木曾兄弟頭立たる若者共討れけり。殘る者共。腰ぬけて。ひた／＼と打取らる。雜人原は溜りもあへす。皆散り々々に逃失たり。宮本勝山には。瀧田に合戰ありと聞。我先にと翔來

る。味方。早や負戦に成て。右往左往に崩れ立。懐返すへき様もなし。[illegible]留て味方を引入[illegible]しけれ共。久留里勢は大勢也。[illegible]とも[illegible]せす。敵は一[illegible]文武のことく。[illegible]取て掛る間。寄手入替り[illegible]戻り[illegible]。新手味方を切散けさせ。勝山宮[illegible]見合[illegible]て[illegible]付さしてそ引取けり。久留里勢は[illegible]に乗[illegible]て攻来る。龍崎外記。稲六左衛門は畑茂坂に備へしか。味方の負軍を聞。さらは稲村と一つに成らんと取て返し。群る敵の眞中に喚き叫んて切て掛る。寄手はさすか強者とも思はけん。中を開て通しける。寄手も一先陣取て扣たり。城[illegible]も疲を休居たり。稲村方より所々に差向られたる者共も。皆一所に落合て籠しか。同日晝より合戦して。夜の四時迄揉合しか。又城方多く討れける朝の軍に究竟の者共は討れける。最早城方に入替るへきものもなかりけり。雑兵ともを割

入んと見返すに。いつの間にか逃失て一人も見へざりけり。大将を初め参り[illegible]り外はなし。[illegible]せはやと[illegible]出る。打[illegible]たる人々[illegible]内[illegible]田三河之丞。勝山隼人。大野[illegible]輔。[illegible]左衛門。木間瀬[illegible]西[illegible]門。木宮[illegible]。其外近習外様の侍共。最後の御軍は[illegible]なるとて。[illegible]に進んて[illegible]に扣たる義堯公の本陣に。一度に突と切て掛る。本陣には萬喜黨か備へしそ。油断はせぬに掛合せよと。聲々に呼はりたり。城方には悪き奴原か高慢かな。いて驅破り見せんすと。面も振らす突て入。手負死人を乗越飛越へ。死物狂ひに切立れは。寄手不叶とや思ひけん。四五町餘りもはつと引。傍には萬喜と正木か一つに成て扣しか。返して掛る城方を。中を割て押隔つ。其間に大将には備を直し置給ふ。城方。敵に撰な

く東西南北切掛りては切脱け。彼にかくれ此に顯れ。追つ捲つ暫戰ひ。颯と引て一つに成り。味方の勢を見てあれば。纔二十騎計りに討成さる。十騎餘は手負なり。寄手の內より案內知たる者共。城中に走り込。四方に火をそ掛たりける。君も數多深手負はせ給へは。急き御腹召れ候へとて。鎌田を附參らせ。又鋒を揃へて。山の小陰へ切脱て。中に。とつと喚て突て入。四方に發と追靡け。爰をせんとゝ防戰ふ。鎌田は君を肩に引懸け奉り。山陰にて御腹めさせ申。靜に御介錯して御首を深く隱し。山陰より一さんに走り出。修理三河等に申樣。君にも御生害ましく〱たり。いさや暇乞　軍せんとて。二人並て切て出而。思ふ儘に戰て。數十人薙伏て。何も深手負けれは。三河修理側へ颯と引。鎌田さらは跡より被參よとて。兩人立並て腹搔切て死たりけり。

寄手の者共。是を見て首を取らんと來る所を。鎌田悅ひ二人掬て左右の腰へ引挾み。閻魔殿への土産にせんとて。一〆して瀧川の淵へそ飛込んたり。後の世迄も。此淀みを鎌田か淵とそ呼傳ふ。水の色藍に染み見るにすさまじき淵なりけり。天文三年甲午四月六日の夜。義豐公。御年廿一歲にて生害ましく〱。稻村落城し。義堯公の御代とそ成にけり。この合戰に寄手にも名ある兵共。安西左京。山本淸六。宅間藤內。早川權之丞。御子神內藏助。宇都宮彥次。其外數多討れけり。義堯公。既に兩國を靜謐し。大將にならせ給ひけるか。其年の秋の頃。御法體の思召にて。御一門御家老に。此由御咄有けれは。皆々申上けるは。昔より大將の御身に法體數多ありといへとも。多くは不吉の例なり。士の行儀を苦に思ひ法體するも。信實の發心にあらねは。惡行日々に增長す。平相

國清盛。相摸入道宗鑑抔是也。又大將の威光を避て法體する吉例は。往昔の多田滿仲。北條時賴抔也。此御人々も年長の思出也。君には未た三十に足らせましまさて。何成事哉思召。御法體の御心懸在候そや。去とは苦勢に奉存候と。皆一同に申上る。大將聞召。されはとよ。我義豊を討事も。父の敵なれは是非に及す。左は有れと。嫡子方を責亡し。我大將とならん事。人倫にも背けり。天道憚や惡み給ん。我國の主となり。我身の名利に侈なは。必天罰を蒙りて。兩國共に他人に奪れ。先祖の苗裔を斷絶する基なり。不孝是に過たる事やある。自今以後は。義弘を大將に定むへし。面々も左樣思ひ。忠義を勵み給はれと。御涙を流してのたまひける。相詰めける一門御家人。あつと計に感し入奉り落涙に及ひける。同年十月。御法體ありて。里見入道泰叟正五沙彌とそ號し奉る。御年三十一歳とそ承はる。其後は軍ありといへとも。只御後見の爲。御出軍まし〱。大將をは義弘公に御定め被成ける。扨所々城々には。先規のことく守護を居給ひける。大瀧には正木大膳太夫。勝浦には正木左近督。池の和田には多賀藏人。萬喜には萬喜少弼。下總の國司巣田家黨の押へには。正木萬喜を定めらる。相州北條家の押へには。房州の木曾と鳥山とを置れたり。稲村合戰以後。龍崎。菅谷。安田等を。濱手の城々に置たり。かくて五年か間。境内靜謐に治りけるか。天文七年戊戌十月。相州北條家の大將氏康。氏政。大軍を催。下總の國鴻の臺に軍勢を押出す。三浦社家公。御子祐家殿防戰ふ。里見よりも入道殿。義弘公兩大將にて發向有。力を合せて戰給ふ。三浦殿御運是迄にや有けん。味方負軍に成て。祐家殿。北條淺右衛門尉か鑓先に掛りて。咽胸を被突貫。御年四十を

最後として。朝の雲に入り給ふ。御父祉家公にも。深手數多負ひ給ふ。浮世になからへ。せんもなしとて御自害なされけり。御年七十三歲。三浦殿三代にて。此の時滅亡したりける。上總も少々北條家に屬しけり。然るに上總の椎津の城主眞里谷信政。小田原となりて。十年餘一味同心したりけり。天文廿一年壬子(ノ)秋。里見家を亡さんとて。小田原と謀を示し合ける。小田原より萬喜か方へ言送りけるは。足下にも味方へ與力せられは。足下と眞里谷へ三浦の持添への知行を半分參らすへし。半分をは小田原へとるへしと云り。萬喜。心に思ひけるは。義弘公は我娘の養育せし君なれは。實の孫にはあらね共。外孫に隱れなし。且義弘公は。三浦祉家の聟なり。一度孫と結ひ。大將と仰たる甲斐もなし。爭か小田原に組すへき。思ひも寄ぬ事哉とて承引せす。正木と示合せ。信政めを打殺し。三浦殿の知行を奪返し。里見に付候はんものをとて。急き舘へ申上。萬喜。正木一門成大將出陣まし〳〵。入道殿御後見にて。同き年の十一月四日。椎津の城を押取卷。鬨の聲をそあけたりける。兼てより用心の爲に。小田原より軍兵多く附置たり。信政たのみ強く思ひて。掛よ引よと下知をなし。朝の四つより夜の五時まて。息をもつかす戰たり。里見方へは房州勢もかけ付て。新手を入替々々責立れは。城方も爰を詮度と防戰へは。正木か手にて。堀江。新藤。富田。大津。杉岡。西畑なと討死す。萬喜か手にて西野。山口。原田。金澤討れける。去れ共。里見方には新手の房州勢。虎豹獅象の狂ふか如く。命を際(限カ)に。死人の上を飛こへはね越へ切り立れは。城方に打物の功者名人と沙汰しける侍共。第一には武田左近。同四郎次郎。同丹波。第二には眞里谷源三郎。

同宇右衛門丞。同左京。高山左門。西川彦六抔と云兵共。命を惜ます働きけるか。次第に戰ひ勞れて。枕を並て討れける。信政は賴切つたる者共は討れぬ。今は是迄とや思ひけん。己と城に火を掛て。腹攪切て死たりけり。此合戰一千三百人の死人也。手負未死切らさる者夥し。從是以後。永祿七年に至迄十二年か間。上總路に事故なし。剩下總も大半は里見方にそくしけり。是偏に正木。萬喜か動功なり。然れは此度と二度治るなれは。最早無氣遣とて。諸人悅ひあへりけり。

第六代義弘公

第六代里見左馬頭義弘公は。義堯入道の長子也。初は西上總洲西佐貫村の城を守り在しか。父義堯公。從弟義豊を討亡し。父の仇を報し給ひけるか。世の巡逆を思召て。則入道まし〳〵大將の位を左馬頭殿へ讓り給ひけり。爰に小田原北條は。五年以前椎津の眞里谷里見家に攻落され。手負夥敷討せ。且領地を切取られし事。無念に思ひ。此度又上總路へ切入へき由風聞あり。里見家には。これを聞彼か寄さる先に。此方より切入とて。弘治二年丙辰三月十日。出陣あり。大將御發向あれは。入道殿御後見にて。萬喜少弼。正木大膳與力して。都合其勢五千餘騎。軍船數十艘に取乘り。船印。家印風に任て飜し。三浦の沖へ漕出す。北條方には是を見て此方より寄へきに。却て寄來るこそ嬉しけれ。愚人夏の虫。火に入らん事哀れさよと。氏康。氏政父子共に。尉か島に陣取て。矢尻を揃て待掛たり。大將御覽して。あれ射潰と下知し給へは。射手とも舷につき立上り。指取ひき詰射程に。早亂軍に成にける。敵味方。舟入違ひ漕違へ。互に飛乘り飛移り。命も惜ます戰ける。里見方に東條六郎。木曾又五郎とて大

剛の兵あり。元來水練の名人也けるか。敵の中に能武者と見へけるをは。引組ては舟より轉ひ落。水底へ沈み入。すはや雙方共に溺死と見てあれは。我身計浮み出。味方の舟へ跳揚る。六郎も又五郎も。かやうに働事三四度也。敵方に是を見て。きやつ曲者に有けるそ。射て取れと言ふまゝに。夫爰に浮たり。彼に出たるは。餘すな洩すなと云まゝに。矢先を支へて散々に射立るは。早風に雨の降るか如く也。大將御覽して東條討すな。木曾を討すな者共と。下知し給へは。味方大勢潛廻し。舟底より例の大力あらはれ出。大木大石取揚け々々々投懸れは。叶はしとや思ひけん。船おし退け逃散たり。六郎。又五郎は。事なふ遙の沖に浮出。先沖の合戰に勝たるそ。いさ島へ取掛り。本陣を攻落せとて。船をこき付々々飛下り々々々進む處へ。寄手の中に龍崎掃部。先へ進て乘出。敵の方より射矢に。足の甲を折目かけて射させ。馬よりとうと落死する體にもてなし。矢をは密に脱捨たり。敵是を見て。首を取らんと馳寄る所を。一人をなき伏。一人に手負せたり。立歸らんとする所へ。敵五人追來。足立庄九郎主従二人馳合。二人切伏。三人に手負せ引退んとす。敵の大勢。餘さしと押取まき。すてにあやうく見へけるを。味方。大勢わり込て。四方へ發と追散らし。大將正木。追懸々々攻給へは。北條父子怺へかね。島陰より小舟に乘り。小田原さして逃にけり。味方討取たる者共の內。名ある侍計を首帳に付けられける。北條淺右衛門尉、芳賀新左衛門。成田佐右衛門。今津嘉右衛門四人をは。萬喜の手にて討取ける。佐藤新次郎。荒川小八郎。山角右衛門。西條半彌。中條小六。右五人は。正木の手にて討取る。鈴木藤九郎を。黑川隼人か討。海老名小治郎を佐久間喜八か

討ち。尻崎加介を宅間萬吉か討。金澤七郎を早川右門か討つ。以上十三人の者共は。北條家にて鬼神と鬪へし兵也。其外の半武者共は。記すに遑まあらす。此戰に手負死人七百餘と聞へけり。其内には味方の者も有ならん。斯て三浦は攻落し。軍靜りけれは。三浦新井の城を修復して。家中のもの共を六七十人交る〳〵。番手に付置給ひけり。萬喜。正木を房總の旗頭になされ。先手椎津合戰に高名したる者ともをすくり立て馬のり士になされ。萬喜。正木に付られたり。下總の國を兩人之領に給はりける。角様なる間。諸人みな。追付北條家を打隨へん事うたかひなしと皆々悅ひあへりけり。

かゝりける所に。入道殿の御臺は。萬喜か娘にて在しか。先達て逝去まし〳〵ける。此間里見方。軍頻りに利を得て。地も廣まり味方も大に多かりける。入道殿御心如何迷ひ給ひけん。風度御心に被思けるは。扨も此程は夥敷味方かな。今の様に大勢の中には。却て敵となるへきも知られす。正木は母方の祖父なれは。孫彦によもや敵對は有まし。萬喜は緣者一編なれは。心は他人也。我は聟なり。義弘は孫とはいへ共。實の孫にはならす。惡人ありて中言するにや。此頃は萬喜か面色。何とか由味薄くと見ゆそ(る脫カ)。但娘か死去あれは。今は元の他人と思ふにや。更に合點行す抔と。うたかひを起させ給ひける。萬喜は思ひ不寄。登城の折柄。何事もなく御物語申に。入道殿心中に。自然に御面體に顯れける。萬喜怪み思ひ何事の有やらん。入道殿の御氣色。晴々敷も見へ給はす。但し娘は死ぬ。今孫のみなれ共實の孫にあらす。孫其御身は。元の他人なれは。節々の登城も入さる事に被思歟。此君には娘か死たりとも。一度大將と仰くからは。禮義は亂さし者を。況や孫と思

からは。爭か見分し奉るへき。近頃大將の御心には。不似合心底かなと。互に心を銜合せ。自染々としたる咄もなし。近習の者共。此體を見て。穴淺間敷。かゝる亂世に。羽翼に賴まるへき人を。何事もなきにへたて給ふ。入道殿には天魔や入替らんと。一門家臣見傳聞傳へ。苦々敷そ思ひける。尉か島合戰以後。何事なく治り。早九年を過き去たり。北條。此恨みをはらさはやと思ひけん。永祿七年甲子の夏の頃。萬喜と不和を聞傳へ。究竟の事よとて。頓て使に密書を持せて。萬喜方へ申遣しけるは。承はれは此程は里見と不快にまします由。實の事に候半は。此方と一味して。鴻の臺にて里見と一戰せられ候へ。御合力可申とそ言送り。樣々に口上にも進めける。少弼返答には。勿論里見と不和の樣には候へとも。戰ふ程の事にもあらす。但敵にも又味方にも付心なし只我は我にて分に成居るまて也と云居たり。北條。大に悅ひ龍虎風雲と云し里見。萬喜か。各別の心出來たるこそ。終には我手に可屬基也。時こそ至れ。いさ打立とて大軍を催し。鴻の臺に押出す。入道殿。義弘公。正木。萬喜諸共に。急き發向し給ひける。北條父子。是を見て。やれ掛合せよと下知し。敵味方入亂。火花を散して戰けり。里見方には。軍馴れたる兵共を先手に立て。薙立れは刹那か間に。五騎七騎薙伏す。正木か手にて。五十騎餘り討倒す。暫し戰ひ颯と分て見てあれは。萬喜は別れて扣たり。敵の方より萬喜へは。矢一筋も射懸けす。味方怪みためらへて居たりける。萬喜に付られし旗本とも。さつとわかれて正木に引付。味方利あらすと見てけれは。御父子の殿してひきとらせ申。大膳は討取首拾ひ集め。名を得たる者ともの首廿計撰出し。中間共に取持せ。優々と引取たり。北

條は是を見て。上總の道筋立塞き。是非とも大將を討留んとひしめきける。義弘公。大膳と一に打手を擣て。此彼より取ては返し々々々々々。追來る敵追拂ひ。廿町計りそ退たり。爰に陣取て。先朝軍に勝たる首帳に記せとて。實検あり。北條方先手の大將と名乘て出たる遠山丹波。富山三郎左衛門尉。又名高武士には。高木治部。山角越前。中條出羽。太田四郎左衛門尉。池沼三河。濱名近江。已上六人之外。記に不及。右八人は正木大膳太刀先なり。惣て壹千餘人の手負死人と聞たり。其外味方変りたり。人數二百人計も見えさりけり。北條も鴻の臺へ引退く。味方も夜中より戰ひ勞れし人馬を休めけるか。正木多賀と申けるは。小田原方には椎津合戰に加勢して人數を失ひ。三浦合戰も兩三度也。鴻之臺にも。今度ともに五度。手いたき合戰に能兵者共を大分討せ。今は名高き者には。太田兄弟計。侍頭と見へたりければ。よもや。安房上總まて向ふ事はあらし。最早軍も是切と覺ゆるそ。軍兵ともを得と休ませんとて。今夜八つの鐘を合圖に。本國へ御歸軍なりと。時觸をしたりけり。陣中是をきいて。いさ休まんとて。鎧兜を脫捨て。打物を枕とし。高鼾をかきて前後も忘れ臥したりけり。御本陣方にも。御くつろきと相見へて。御酒宴すきて音靜る。北條方より遠見を付けてや置たりけん。時分を伺ひ。取て返し。本陣を目掛て切て入る。寢入切たる味方之勢。此音に目を覺し。やれ太刀よ物具よと。太刀壹振りに鎧一領に。二人三人取付て我よ人よとせり合。甲計て出るも有。鎧着て空手て出る者もあり。敵味方入亂れ。上を下へと返しける。人をも更に見分けす。平切に切程に。同士討するもの夥し。敵の方にも。中山新藏。平澤源太。山名八郎。瀨

川小平六。宮崎介六抔六人の者ともは。小田原にて四天王。ひとり武士抔と呼れたる者なるか。枕を並へて討死す。味方には正木彈正。菅谷(源イ)彌八か子源次郎。多賀新九郎。本間刑部か子佐介等。名有者共を討せけれは。御父子叶はすと思召けれは。久留里をさして引給ふ。北條方勝に乗りて追來。池の和田の城を追取まき。箭軍をするのみにて。左して戰ひをも挑ます。日數をかさね居たりけり。入道殿。不思議に思召。何様味方の內に返り忠の者ありと覺ゆるそとて。所々に隱番人を付置き。池の和田の方へ通る者あらは。搦よとて夜な々々通るものを改めさせ給ひける。或夜。文持たる男一人通りけるを。文面を見るに。內通まきれなかりけり。忽搦取て御前へ引出す。入道殿御覽して。扨こそ。其强問(コウモン)させよと下知し給へは。未同類も無之。某一人計に候と。眞直に白狀す。頓而主從二人か首切て。獄門にそ懸られたり。北條方には。是を見て圍解て。本國へ引返す。味方には臆れを取し折なれは。引取敵を追掛る迄もなく。互に合戰を止て。池和田の矢軍計にて事止ぬ。里見方。此度の軍は。朝軍に勝たれともよもや敵返し來るへしとは思ひもよらす。油斷して不覺を取し無念さよと。臍を咬とも是非なき。小田原へ押寄て討果さんと思へ共。下總は北條か手に入ぬ。萬喜は心變しぬ。上總も大方萬喜方也。今は正木大膳計なり大將仰けるは。味方小勢に成たるを。敵目下に見成し寄來るは必定なり。油斷すなと下知し給ひける。此事。萬喜より小田原へ通しけれは。氏康。彌力を得て。里見勢よはふして。味方より寄せんを待と聞ゆるそ。いさや上總へ押寄先つ佐貫を蹈落し。直に久留里へ押寄へし。今度は臆れ里見か事なれは。己と引て亡ふへし。我向

ふまでもなし。氏政計りにて埒明くとて。其勢都て三千餘騎。永祿十年丁卯二月廿日に。小田原を打立て。同上總へそ押にける。明廿二日に佐貫に付。御船山と云は。半腹下は石山にて。峨々と聳へて。一人行の細道にて九曲(ツヽラヲリ)の難所あり。是れ究竟の陣所なりとちやうたいによし登。旗纏を靡へし陣取て扣へたり。城方是を見て。和田甚介と木曾庄兵衛を見分に被遣。此兩人は名譽の見分者なりける間。先遣はして。敵の樣子見せらるゝに。兩人罷歸りて申上けるは。得と見分仕候に。兩人今度の御軍は。先手の雜人原をは大勢にて追捲り。返而陣を居るならは。敵自定進み掛らん。其時横合より防勢を以て。中を制合て前後より討給へと申ける。さあらは其計に任んとて。入道殿堀(城カ)を固めて在す。正木大膳は。百騎黨を引率し。八幡山に隱置き。一防勢に定めらる。義弘は大將にて陣場に出させ給ふ。寄手大將氏政は。時分は能そ掛れや〳〵と下知したり。味方には敵を間近く待取て。同く鬨をそ合せける。矢軍初ると等敷。小田原にての功の者太田源六兄弟は。左京介か陣所へ眞一つに驅入て火水に成て戰ひける。未勝負は付さりけるか。鬪勞れて兩方颯と引。後陣にそ讓りける。二陣の掛合に寄手よわ〳〵と引返す。味方是を見て。急に推したり。彼か風情は。石山の坂中迄おひき込。取て返し切崩さんとの巧よな。追はすと扣へよとて。足を止て靜り居たり。北條には。これを見て。里見は鴻臺の軍に懲り。今度は臆病神に引されて。をめ〳〵と立居るそ。剰へ正木大膳にも。見捨てらるゝと見へて。正木黨は一人も見へぬそ。氣に乘りて討散らせと下知すれは。我先にと取て返す。飽まて敵に刄を付。手本近く寄付て。あら大膳は爰こ有と。大岩の

陰よりゆらめき出むかふ者とも。大向小額左右の小手。逃る者をは。幌付。高股。胴の骨。大袈裟小袈裟車切。唐竹わりと云物に。四尺二寸の大太刀に。三尺八寸の持添へ。左右に提け薙立れは。將棊倒に折重り。死人の山をつきたりけり。はつして逃る奴原は。義弘公。左京介備へを直して待懸けたり。敵案に相違して。心うろたへ立る所を。味方合圖にの勢共起出。三方より攻掛れは。引退んとするも。案内不知之難所へ懸りて。數多討死したりけり。就中。鵜沼の邊にて。手强く攻立られ。沼の中へ押はめられて。死する者數を知らす。太田源六兄弟も。此所にて討れける。氏政散々に打負て。手之者四五人引具し。馬に捨策うつて。小田原さして引返る。味方には鴻の臺の恥を雪き。勇悅事限りなし。討取たる首の內。頭立たる者計。首帳に記されける。藤澤外記首を木曾庄兵衛討。黑田丹波首黑川權平討。羽島內藏首正木大膳太夫討。西條佐右衛門首正木新藏討。仲條佐衛門首中里源左衛門討。平堀（塚イ）源次郎首南條小六郎討。右六人の者共は。北條家五十騎組々頭也。此外小身者共記すに及はす。此合戰に手負死人二千廿八人とそ聞ける。其內に五百三人は味方也。御大將を始奉り。正木大膳太夫。同左京介を始として。軍勢日出度々々とて。勝鬨とつと揚て。勇み悅ひ久留里へ歸らせ給ひけり。入道殿仰けるは。安房。上總。下總半國。三浦四十餘鄕を切隨へ。次第に發向すへかりしを。鴻の臺の夕軍に油斷せし故。下總は小田原へ取られ。上總も萬喜か手下は。小田原組になりぬ。無念に思ふ處に。剩へ三浦新井の城に付置たる番手の者迄。一人も殘らす鴻臺へ引來り。虛城と成たる故。小田原より番手を置と聞。返す々々も腹立なり。下總とは格別也

一所に取られては叶まし。早々番手を遣はして。小田原の番人共を叩き出して。番させよとて顔色替りて仰ける。義弘公も御家來方も。其事に氣の付す。今御返答に迷惑し。急き番人を撰はるゝ。其人々には里見左近丞。山本清兵衛。山田佐右衛門。堀江。板倉抔を遣しけるに。城者共何の子細なく。小田原へ引たりける。則房州の番人入替る。此時。里見の持ふん安房と上總半國。三浦の四十餘郷計なり。大分減少したりける。或時。家中の衆申上られけるは。此程。小田原より萬喜か方へ申送り。安房。上總西の濱邊。案内撿見仕由。別而房州多田良正木浦に氣を付體。百姓等能見知り申聞け候間。御用心あられ候へかしと申上る。大將聞召。急き入道殿へ御披露有。扨こそ予平生心に案せしに違はす。房州海邊に城少なし。内々岡本の内に。城をきつかんと思ひしに。急き用意せよとて。岡本兵部少輔氏元。城地を見立。元龜元年庚午夏。御普請初り。同三年壬申夏。成就したりけり。次に洲崎。瀧山。明金三ヶ所に番手を居へ置。海上に軍船數。又は亂妨取の船なと見來らは。相圖の太鼓を打て。百姓。町人。海士等に限らす。財寶妻子を山野に隱置。近邊出合追散し打殺せと仰付らる。かゝる節。手柄したる者共には田畑。山林。屋敷。又は相應の諸役等分々に應し御褒美あり。或時。大將御城御一見に御出有けるに。道の傍に何やらん高札立て有けるを。取らせて御覽あるに。

福原のみやこ人とは聞つれと年貢諸役のしなのわるさよと書て有。御歸り有て。田畑守方の代官福原信濃を召出され。汝か賄所の年貢の取付。十ヶ年以來の分持參せよと被仰。福原意に。大將の御身として。異なる事を尋させ給ふ者をとは思へども。仰なれば持參したり。則

御覽するに。其所の田畠帳中と下との土幷なり。繩水帳を御覽するに。他鄕の次也。然るに年貢の取付と引合すれは。夥敷高免也。剰へ每年の免狀同俵幷也。夫故に潰れ百姓共多出來て。中間奉公人或は日用取に成なり。則福原をは代官職を押上られ。無役にて御扶持方計を被下。其外惡き事やあると。其所の役人共に。御せんさく有けるに。それのみにて外に惡樣の事無之と申ける。惣領の長七郎と云者を。後に御奉公に被召出ける。かやうに御代々御慈悲深き君方に有けれは。百姓能馴付奉り。賤き男女迄。御本名を呼すして。唯萬年君樣とそ稱し奉りたる。實にや御父の仇義豐公を討給ひけるか。嫡子方を亡せる事を。不孝の罪に思召。且は義豐公菩提を訪はせ給はん爲に。御年若にて法體被成候て。其御子在しけれは。當君も民家の亂妨取に合さる樣に。所々に番手を居へられける。又勝手葬〻のためには。田畑取方を改られける。實にも萬年君と奉稱も理也。

是より一兩年以前。北條家は甲斐の武田信玄に被迫困窮す。氏康も逝去あり。また天正元年癸酉の春。駿河の德川家。信玄を亡し給ひ。北條家。彌國を迫められ。行末危く思ひけれは。里見と和睦せはやとて。五月中旬。使札を以申遣けるは。自今以後。永々和睦を調へ。相互に力を合せ國を保たは。互に行末賴もしからん。御許容に於ては家娘を遣はし。御嫡子義賴公の室に定めんと言送る。里見も兼々衰へたる上は。萬喜を始。他國の寄來らんも計らはれすと。危ふむ折なれは。不慮の爲には緣者なりとも。味方の廉こそ好けれとて。無相違返書に。使者を相添へて被遣ける。氏政大に悅て。六月中旬に。岡本へ使者を差越。追付婚禮可致。先祝儀を送りける已に吉日を定て。天正元年六

月廿八日に御婚姻相調ふ。扨北條家とは緣者たり。岡本に城を築き。所々に番手を居へし後は。亂妨取もなし。北條家と和睦の上は。萬喜か恨も有ましけれは。境内事なく治りける。明る天正二年甲戌六月朔日に。入道殿歳霜六十三にて逝去し給ふ。大將には久留里へ御歸り有て。佐貫へは番人三十騎宛。替り〳〵に付置給ひけり。

第七義賴公

第七代里見太郎義賴公は。義弘公の長子也。房州岡本に新城を築てより。房州の騷動を鎮めおはしけり。然るに正木左京介か娘。妻と成て若君二人在けり。壹人は千壽丸とて十五歳。次男は彌九郎丸とて。十二歳にならせ給ふ。此彌九郎丸殿。器量骨柄人に越へ。大力にて在ける。義賴公。或時久留里へ登城の折。義弘公の御前にて被仰けるは。彌九郎は後は軍大將にも成申さん。彼か母は正木氏に候得は。彌九郎をは安房の正木大膳と名乗らせ申さんは。如何候やと問はせ給ひける。父上然るへしとの給ひければ。是より安房の正木大膳殿と申ける。天正五年の春。大瀧正木大膳か謀反の由風聞あり。未露顯せされとも。御油斷なく御扣有けるゆへにや。何の沙汰なかりけり。然るに天正六年戊寅五月廿日に。義弘公。卒に御煩付被成。御年四十九歳にて薨しさせ給ひける。是より已後。上總には大將御在住なし。大瀧の正木大膳は。義弘公御逝去と聞よりも。天の與へと悅て。さあらは打立とて。七月五日に發向し。早房州へ切込て。濱荻村與崎の城代角田丹波を討て。長狹迄切て入。國本より軍兵大勢向ふと聞。上總へ引返し。上總の里見を攻にける。大膳。元來强惡無道の僻者にて。父彈正には似も不似。放逸無慈悲の行あれは。下々の者共。

なしかは親むへき家臣郎黨返り忠の者多し。眞里谷又四郎といふ國者。聊其風情も見せす。大膳か油斷を伺ひ。眞只中を一指刺て逃行けるを。下郎めやらしと追驅けるか。膽面を刺通され。大事の痛手に有けれは。心と足と相違して。次第弱りによはりける。又四郎立戻りて。やゝまた死さる歟と笑ひけれは。曳口惜しやとて。太刀取直し腹攪破て死にけり。是天道の惠み無ゆへに。下郎の手に掛りける淺間敷。扨大膳亂休て。家老も替り。山本。堀江。板倉。長谷川四人なり。義頼公家臣安西。角田。岡本。山本を召され。是より南に城なし。舘山の古城跡は。何樣能景山なり。殊要害の地なれば。かしこに城を築くへしと被仰出ける。來春より御普請あるへしして聞えける。實に此舘山と申は。昔平判官貞政と云し人の城跡なり。前は洋々たる大海にて。二つの島を浮めたり。しかも廻船の湊なり。八幡の浦に。富士の山の影移り。夕日にかゝやく有樣を。古より云傳へて。鏡が浦と名つけたり。向を遙かに見渡せは。三浦。小田原。眼の前なり。又南北より敵船の入來るも。居なから見ゆれは。要害の地。是に過たるはなし。去れとも急に御普請もなく。年月經るほとに。天正十五年丁亥十月廿六日に。義頼公御年四十五歳にて薨御まし〳〵ける。

第八代義康公

第八代四位侍從里見左馬頭義康公は。義頼公の嫡男。織田信長の聟君にそ御座ける。御家督相續の明年。家老四人を被召仰出されけるは。父上の御願に。舘山に城を築へき由。先家老へ被仰付所。大瀧の正木か反逆ゆへ延引せり。早速御願を可滿なり。急き普請を可企也と被仰出。天正十六年より企て。三年を經て。同十八年庚寅の夏に成就せり。然るに太閤秀吉。小田

原へ御發向ありて。北條一族を亡し給ふ。里見も太閤の旗本に被屬しかは。勳功ありて大坂より上總を給はり。三浦四十四鄉をは被上けり。依て又房總兩國の大將に極れり。其後。慶長五年庚子。德川家。濃州關ヶ原にて大戰し。石田か兇徒を討亡し給ふ。同八年己卯。江戶より國替へあるへしとて。上總國を取上け。鹿島において。纔三萬石給ひけり。是より里見家。貧弱に及けり。君臣齒咬し。胸を打て恨み憤れとも詮そなき。關ヶ原合戰に御發向有るならは。角はある間敷を。御病氣ましく〱けれは。江戶の御惡み掛りける。小田原合戰に。太閤より給はる知行なれは。江戶より自由に及ふ間敷けれ共。今は征夷將軍に上り給へは。御心の任に行はれ。病氣ゆへの不參を聞召分られす。御惜しみましく〱て。國を削り弱め給ふ事。無念言も有餘。時節なれは是非なし。君にも斯事共に。御心のふさかりける故。御病惱も色々變化して。醫藥祈禱も甲斐あらす。御年三十一にて。慶長八年庚卯十一月十六日に。薨しさせ給ひけり。

第九代忠義公

第九代四位侍從里見忠義公は。御歲九才にて義康公に後れ給ひ。家臣岡本。山本。堀江。板倉抔より後見にて守り育て奉り。慶長十六年には御年十八歲に成らせ給ふ。或日御母君四人の家老を被召。御相談有けるは。忠義君も早婚禮頃に至れり。我親類織田相模守氏長か娘を迎へとらは。一家も離れす。末々の賴にも成らん。皆々には如何思はるゝそと問給ふ。何も此儀。尤君の御爲にも成候半と同意申ける。頓而迎取て。御前にそ奉定ける。御附人には印藤采女正。同姓河內介兩人。御前の近習たり。角て年月經る內に。印藤采女御機嫌に入て。出頭

類なかりけり。古來の家老諸家中。頭を可揚樣もなし。然るに十九歳の御時。夏の頃。御舅君相摸守殿へ鐵炮百挺送り遣されけるとかや。諸家中誰共に樫（シカ）と知る者もあらさるに。或日。弓鐵炮の足輕共を。一人も不殘。白砂へ被呼付。仰られけるは。汝陰にて人の噂を噺しすると聞たり。重て左樣の事あらは。一々仕置に申付るそとて。水彈にて人々の面へ。水をはしき懸け給ふ。人々罷立て私語合へりけるは。是こそ彼の鐵炮の事なるへし。纔かに威勢を振廻。下々の口を留んとの巧にや。是も今度渡り申候新家老印藤目か。君へ敎へ申たるに疑なしとて。見傳へ聞傳へ。兎角此城に永々居たらは。（脫アラン）必定危うきあらんにとて。他國より渡りし能侍とも。大方浪人したりける。又是も。印藤か計にてやあらん。非人は國の費へ成とて。國中の非人。一人も殘らす打殺し給ひける。斯惡事を被成けれ共。古來の家老押へ申事も不叶。其職に空く居を恥。且は行末を思ひやりて。家老の內にも浪人する者もあり。纔の事にも御立腹ありて。扶持離さるゝ者もあり。諸事印藤か業とて。牙咬ぬ者なかりけり。角御心持給はゝ。御世如何あらんと堅唾を呑て日を送りける。又色々の凶事共顯れける。是も印藤か奉勸けん。鶴谷八幡宮へ御先祖足利義實公の奉納有し寶劒を。癸丑八月上旬の頃。申をろし。守家か打たる腰の物を。代りに立させ給ける其夜八幡宮。俄に震動する事夥し。又甲寅六月中旬の頃。御城の廻り。堀の眞中深さ貳丈餘りもや有らん所に。一夜の內に稻一叢生出たり。往來の者。怪異の事に思ひ。立留りて見る事夥し。日數廿日計過て。大き成穗二十本抜たり七月廿日過迄も有けるか。いつ枯るともなく失にけり。是等只事にあらすと。上下危み思

ひける。又元和元年丁卯正月元朝の御祝に。御座敷の盃臺。人も碍らす風なとの吹倒すにもあらて。くわら〳〵と砕け倒れけるとかや。御前に有合面衆給仕人計。見たる事なれは。外様へは隱し包しとなん。同五日の朝は。御臺所の大釜啼り吼る事夥し。又十一日の御具足祝には。座敷なる大火鉢炭火に。赤き茸三つ四つ生出たり。是も有合もの共計にて。あらはに云はさりける。去年よりの事とも多かりけるか。同年八月上旬に。江戸より上使あり。正木大膳殿へ國替可申とありけれは。大膳殿。急き出府せられけるか。江戸より直に備前國へ。預け人に成て下り給ひける。追付九月上旬には。忠義公へ上使あり。早速參着可有との事なれは。一時も早出府あらんとて。御支度有。常に秘藏せさせ給ひける馬右王(メウ)來左馬(キタサマ)とて。黑白二疋の馬あり。何も劣らぬ名馬なりける。先白の馬右王に被召。御城の大手の坂迄出させ給ひけるか。馬右王俄に身振せしか。辻跌して倒れ伏し。忽に死にけり。頓て黑の來左馬に被召て御出あり。晝夜御急きありて。八日暮に江戸屋敷へ當着なされける。明る九日に。御使者下りて渡城に不及。伯耆國へ配流被仰付。其故は其方舅相摸守。隱謀の企あり。其方一味同心にて。鐵砲百挺被送由。露顯明白也と被仰渡。忠義公にはとつと計御返答有て。御色變らせ給ひける。此日。如何成日そや。安房里見九代の相續。元和元年丁卯九月九日。忠義公廿二歳にて國除せられ。一(脱アラン)家落し給ひける。其後。岩城の內藤左馬頭大瀧の本田出雲守兩人馳向ひ。所々城々破却あり。忠義公の御前には。四歳に成らせ給ひける姫君を。御一所に江戸代官町の屋敷へ被召寄。百俵の御扶持米賜て在しか。後には姫君をは守人に御預け置。鎌倉の尼寺

へ引込給ひ。比丘尼に被成給ふ。大膳殿奥方には。美濃御前と申せしか。生國美濃國なれは。藤井より直に本國へ歸られけり。城中外の諸侍。盲目の杖に離れ。猿の住林を切荒されたる如にて。彼方此方に吟行き。依邊定ぬ有樣。目も當られす哀なり。或は幼子を持たる女房とも。昔に今は引替へて。民家に下りて雇となり。衣類洗濯仕立もの抔して。寒暑を忍て賃を取り。夫子共をはごくむ體。哀と云も餘り有。忠義公。御年若に御座けれは。左遷の憂に沉ませ給ひ。明暮御泪かはく隙もなし。御氣いとゝ鬱滕し。御病彌增して。御床に臥させ給ひしより。印藤。板倉か。樣々御看病せしかとも。次第に勞れさせたまひ。終に元和八年壬戌八月十九日に。廿九才を一生として。謫居の夢となり給ふそ悲しけれ。印藤。板倉御介錯申。無常の烟となし奉り。御骨を拾て高野山に納て。石碑を建て本國へ歸り。代々の菩提道場に。御位碑を奉立て。御追福の弔禮を執行申けり。天運今に驚へきにあらねとも。哀なりし事共なり。

頃日里見記と名付。所々方々より書出事澤山なり。披見に過半は北條五代記を取ませ。惡樣に而已書成せり。是里見北條は。寇敵なれは里見を能云はさるは理也。又一本には。義豐公。瀧田にて討死とあり。是菩提所瀧田に有樣推量して書たる也。是は里見浪人の咄に聞。自己の才覺にて書たると見ゆ。又一本に。北條。勝に乘り鴻の臺にて勝を得て。久留里へ追掛合戰有と記せり。是又大成僞也。此合戰の時。北條方。池の和田に追來り。矢軍少々して城を圍み。一兩日過ける時。入道殿。返り忠ありと悟りて。忽搦取梟掛られけ

私に云。永享九年。鎌倉持氏。逆心を企といへども。上杉憲實。强て諫む。持氏用ひす。ひそかに憲直直兼を召て。憲實を討せしむ。事あらはれて騒動す。持氏は過を憲實に謝し。暫く和睦す。同十年八月。管領持氏。謀叛を起して。先執事憲實を殺さんとす。憲實。上野國に赴て京都に注進す。十月。將軍義教。持氏追討の綸旨に。御教書を添て憲實に給ふ。上杉。京都の加勢を得て。關東多く持氏をそむく上へ。又持氏。和睦を請ふ。憲實。持氏を押籠て京都へ注進す。義教。赦免なければ持氏自害す。嫡男義久は。報國寺にて自害す。憲實。君を弑する罪を知て。剃髮して長棟と號す。管領を弟清方讓て。伊豆の國清寺に退去す。十二年。持氏の二男春王。三男安王。結城の氏朝を頼む。氏朝。同意して己か城に籠る。七月。上杉清方。持朝。持房等。義教の命を蒙りて。結城の城を圍む。

嘉吉元年四月十六日。上杉淸方。結城の城を攻落す。氏朝父子討死す。長尾因幡守。春王。安王を(虜イ)生捕て。五月。美濃垂井にて兩若君(ナシイ)を害す。此時。刑部少輔家甚討死す。嫡男義實は。三浦に落ち。夫より房州へ渡り給ふ矣。

一永正十三年丙子七月晦日。長狹郡の山の城主正木大膳討死す。法名正範といふ。

一天文六年丁酉。將軍義明公。政義公の御子息。四月二日發向。上總眞里谷信隆討る。同七年十月。國府臺にて。氏綱大弓を張て。御所義明公父子。舍弟元頼公三人を射殺す。

一天正八庚辰年七月四日に。義頼公。長狹へ發向。悉く放火。金山の城を取詰。程なく廿八日落城す。

一天文十三年。上總小多喜の城主朝信。八月七日。川原にて討負自殺す。

里見九代記第一

清和天皇の御末八幡太郎義家公の三男。式部大輔義國より十二代の後胤。刑部少輔家基公と申は。應永。永享の頃の武士也。其頃。天下大に亂れて。鎌倉の上杉も。臣として君を亡す。然る間。足利一家も。所々に落行給ふ。去程に。關東の諸士。上杉を憎み。結城に於て。足利春王殿。安王殿を大將として。嘉吉元年。義兵を起し。家基。味方に參らる。然れ共足利。終に討負て。家基討死也。其御子里見刑部少輔。義實公。結城より安房國へ落給ふ。是安房里見の元祖也。

里見刑部少輔義實公の事

結城より木曾右馬丞氏元。堀内藏人貞行御供にて。三浦へ落。三浦の兵を賴んて。安房の白濱へわたる其時。神餘か家臣山下佐左衛門。謀反を起して密に君を殺害し。神餘の郡の主となる。是より此郡を山下郡(マヽ)と號す。去る間。丸。安西。彼無道を憎んて。左衛門を討。此郡を分取るに付て。俄に合戰出來して。安西討勝。然る間。丸。神餘か家來とも。義實公を大將として。即神餘か勢を催して。千臺に打出給ふ時。御勢五十騎になり給ふ。其時の陣場の橋を。五十騎橋と名付けり。貞行三浦衆は。丸か勢を催し。千臺村に來て。安西の城に押寄んと馬を早む。安西も。瀧田河原まて打出陣取て居けるか。いかゝ思けん。降人に出しより。主従の契約在て。安西を(の誤カ)先手にし給ひ。東條に押寄す。東條は上総の大(ニイ)瀧正木と一味して。金山の城に楯籠り。文安二年六月八日。合戰初り九日の夜落城。東條は討死し。正木は敗北す。同三年正月廿三日。正木と合戰始り。廿五日に正木降參。合戰の次第は軍記に見へたり。義實公の御前は。上總國眞谷殿の御娘也。家老は木曾

堀內。三浦。安西也。義實公は長享二戊申四月七日。七十二歳にして逝去。杖珠院殿建實與公居士と號す。白濱に葬る。

里見刑部少輔義成公の事

上總國眞里谷丹波か籠たるつくろうみ（つゝみ）の城を攻給ふ。城方より空しく城を渡さん事無念也。里見殿は文武の達人と聞く。爾らは此所の體を。百首の歌に讀給はゝ。味方に參らんといふ。然る間。即時に百首よみ給ふ　其中に。

造綱（ツクロウミ）かけひき自由なりけれはかゝりし魚にひとしきは敵

夜をこめて灯籠坂を越ぬれは味方のひかり日の出ます〳〵

つくろうみ川瀬定るをりなれば下れる水はいはゝ大海

餘の歌。別にあり。如是百首讀遣されければ。則降參しぬ。社家樣十二歳の時。義成公を御賴有て。長南を攻め。明應二年四月五日。社家樣。義成樣。下總の國木の內殿を討給ふ。此木の內殿と申は。鎌倉の上杉より下總の國主を賜ふて。其頃の强敵也。同三年八月。上總介を討て。其外萬喜。勝浦。池の和田。丸谷。窪田。東金。佐貫。椎津の城。皆々兩大將の御手に付て。是より里見殿。兩國の大將となり。社家樣には下總の關宿幷生實の八幡に。御殿を作て御住居なり。義成公の御前は。萬喜左近殿の娘。家臣は木曾。堀內。勝山。安西也。永正二乙丑四月十五日。義成公逝去。五十七歳也。慰月院殿大幢勝公居士と號す。白濱に葬る。御在城は稻村也。

上野介義通公の事

社家樣と共に下總。武藏。常陸方々の軍に向。此事。義明公家書にあり。御居城は稻村也。宮本の城は舍弟實堯公住給ふ。義通公の御前は。

上總介殿の姪なり。家老は木曾。堀内。勝山。宮本なり。永正十七庚辰年二月朔日。十八歳にて逝去。天笑院殿高山正皓居士と號す。瀧田に葬る。

上總介實堯公の事

義成公の二男也。義成公の代に。宮本の城より上總の久留里に御移りあり。義通公逝去の時に。御子義豐公（漸七歳にならせ給ふ間。實堯公に兩國を預け置（竹若（義豐公幼名也。）十五歳にならば。兩國を渡されよとの御遺言也。依之實堯公は。稲村に移り給ひ。竹若殿は。中里。本間御守として。宮本の城へ移り給ふ。實堯公は。大永五年。北條と三浦にて合戰に勝利を得給ふ。同六年。同敵と鎌倉合戰に勝給ふ（事は脫カ）軍記に有り。實堯公の御前は。正木殿の御娘也。家老は正木。安西也。然るに。義豐公二十歳迄兩國を相渡し給はぬの間。天文二年七月廿七日。稲村合戰あり。實堯公討負。其夜四十五歳にて御生害也。延命寺殿一翁正源居士と號す。稲村に葬る。後に御子息義堯公。本織村延命寺に御廟を移る。

里見太郎義豐公の事

義通公の一子也。天文二年七月廿七日。稲村合戰に討勝給ふ事。軍記に見み。家老は木曾。堀内。勝山。宮本也。勝山の本氏は菅野谷也。宮本の本氏は本間也。天文三年四月六日。上總久留里に御在城也。義堯公と合戰。遂に廿一歳にして討死なり。高巖院殿長義居士と號す。瀧田に葬る。天笑院是より改寺。高巖院と稱號す。

刑部大輔義堯公の事

義豐公は。親父の敵なる故。天文三年四月六日の朝より夜に入まし。瀧田稲村の合戰あり。義堯公討勝給ふ。卽久留里へ歸らる。此時。大瀧は正木大膳。勝浦は同左近太夫。池の和田は多

賀。入。萬喜は少弼居住あり。義堯公ハ里見入道と號す。御前は萬喜少弼の息女也。家老は正木。山田。安西。山本。多賀也。稻村合戰の時。下總巢田家の押へには。萬喜。正木也。北條氏の押へには。木曾。鳥山を義堯公より出さる。合戰の以後は。龍崎。菅野谷。安西杯。海邊に城を持。北條の押へとして居住す。社家樣も此入道をうしろたてになされて。他國と戰ひ給ふ。正木。萬喜。山田抔か名を天下に揚て。隱れなかりしも此時也。天文七年十月。源義明公と倶に國府臺にて。北條氏康父子と合戰に打負。社家樣滅亡の以後。入道殿敗軍なれは。下總共外。社家樣御持の內。皆北條の手に付。上總にて少々小田原方に成る間。天文廿一年十月四日。椎津眞里谷信政を討てより。上總を二度治めたり。社家樣御存生の時里見殿に兩國の大將を賜はる。その後は。里見入道殿自身に治め給ふ。そのむねを知らさる人は。信政を討さる以前は。上總は里見家の持の內にて無之とおもへり。義堯公より永祿七年迄に。下總も大かた手に入。天正二年六月朔日。六十三歲にて逝去。東陽院殿岱叟正五沙彌と號す。本織村延命寺に葬る。

左馬頭義弘公の事

佐貫在城也。弘治二年に北條方と舟軍に打勝。城か島に陣を取て居たる氏政を追散す。永祿七年に。鴻の臺にて氏康氏政と合戰は朝の軍には勝。晩の軍には負給ふ事。軍記に見ゆ。北條家。勝に乘て池の和田の城を責。永祿十年。三船山の合戰に勝。二三ヶ年の間に。小田原よりせはめられたる所を。大かた取返す。御前は義明公の御娘也。家老は正木。多賀。山田。安西。山本也。天正六年五月廿日。四十九歲にして逝去。瑞龍院殿在天高存居士と號す。延命

寺に葬る。尊靈和睦の爲に。慰月院に位牌を立
也。

里見次郎（太イ）義頼公の事

岡本居城也。天正五年の夏。大瀧の大膳。謀叛を起す間。氏政と和睦。同六月上旬。氏政の息女を義頼へ嫁す。大膳謀叛あらはれざる間合戰なし。同六年。義弘公逝去ゆへ。大膳。俄に兵を起して。七月五日。濱荻村高ケ島（葛ケ崎イ）の城代角田丹後を討て。長狹迄攻入る。岡本より討手の人々。大勢向ふと聞へければ。先大瀧へ引返し。上總に居住の里見方のものを攻けり。然れ共大膳は。父に替り俄まで荒き人なれは。心かはりの者有て。終に滅亡せり。然に北條家と和睦の事。且の謀なり。又萬喜の心にも。如何なる事を謀るらん。只可爾軍大將を立へきとの評定にて。幸ひに二男彌九郎殿に。正木氏を名乘らせ。南條村の鳥山の古城を取立て移し

たゝ義頼公の家臣は。安西。角田。岡本。山本也。山本の城は。元龜三年御普請也。三浦勢やゝもすれば。多田良浦。正木浦を心掛。おし渡るゆへに。兩所の城御普請なり。天正十五年十月廿六日。三十三歳にて逝去。大勢院殿勝岩泰英居士と號す。

左馬頭四位侍從義康公の事

舘山在城也。此城は天正十七年に御普請也。同十八年。小田原へ發向。同十九年。上總國にて少々北條方に付所を。大坂より里見に賜る。三浦四十餘郷は替地に上たり。義堯公より義弘公に渡さる。安房。上總。下總半國。三浦四十四郷御持の內也。御前は信長公姪也。家老は山本。岡本。板倉。堀江なり。慶長八年霜月十六日。三十一歳にして逝去。龍潜院殿傑山芳英居士と號。延命寺に葬る。慶長三年に。國替なりとに上總國を取上られ。關ケ原の軍終て。鹿

島にて三萬石出たり

四位侍從忠義公の事

元和元年の秋。大膳殿を國替とて。備前國へ御預。五(九イ)月中旬。忠義公を伯耆國へ流罪。相模殿と同罪の故なり。御前は相模殿御息女家老は板倉。堀江。印東。黒川也。此公落去の事は新家老印東采女出頭の故に。譜代の諸士。悉く述懐奉公せしなり。又非人は國の費なりとて悉く打殺す。又相模殿と一味の事は。諸士は知らざれとも。其事に付。御威勢に可憚かを心ゑん爲に。或時は水はしきを以て。諸士の顔に水をそゝき見給ふ事。如此なる間。新出頭次第にはひこり。譜代の士は次第に浪人す。又相模殿へ鐵炮百挺遣されし事幷隱謀の事。江戸へ早々知れし事は。彼浪人共の口よりひろまりしならんか。又怪き事は。寅の年安房の八幡宮へ。御先祖より御納めなされたる寶劔を申下し。替りに高家(守イ)の御腰物を被納に。宮殿鳴動せし事おひたゝし。卯夏御城の堀に稻一かぶ生ひ出たるを。諸人羣集して見物す。同九日。忠義公。江戸へ出府。其時。井權に明星とて二疋の名馬あり。明星は辻跌して死す。故に北さまに召て御出あり。又鬼門の方に向て。大巖院といふ淨土宗を建られたるも。不吉の事なりといふ。御前は江戸代官町へ御越。公儀より百俵つゝの扶持を下さる。四歲に成たる姫君も御一所也。後。姫君を御守り人に預置。御前は鎌倉へ引込。比丘尼となりたまふ。三の御前と申は。簗井より美濃國へ越給ふ。上下の人々哀かしこと漂泊の體。哀と云ぬ人もなし。忠義公は元和八年六月十九日。二十九歲にして逝去。雲晴院殿前拾遺心叟賢凉居士と號す。御葬送は伯州にて執行す。御骨は高野山に納め。位牌を延命寺に建置也。天運とは云なから哀れなり

なりし事共なり。

右里見氏九代の有增は。此にてしるべし。合戰の次第は軍記に委し。

里見九代記第一終

里見九代記第二

法度之卷

一恩を知らさるものは。人たるべからざる故。孝行を専一相務。奉公に出て忠勤を専らとして。非番の時も。文道武藝心に掛。常に油斷有へからさる事。

一財寶は。民の困(勞カ)勢より出るもの也。遊興の爲に費すべからす。家は雨風を防ぎ。衣類は寒を防ぎ。食は身命を助く。兵具は敵を防く理を考て。無益のかさり仕へからさる事。

一民は。國の本也。民困窮しては財寶不足。故に賦斂を薄くして。民を使ふに耕作の隙を以てすべき事。

一將の命に巡て軍功あるは上勝也。抜掛は無類の高名あらば其過を宥免すへし。若又。一備を抜て敵を打破は上勝に付へし。討破ゝすは抜掛同前たるべし。或は敵俄に寄する

時は。早速手合を功とすへし。

一軍に舊功ある輩。自然知行を可減少程の過ある時は。加增知行を取上。本領にて差置へき事。

一火付。盜賊。人殺の罪は。舊好たる者といへとも。宥免すべからさる事。若隱置もの有之は同罪。見遁聞遁候はゝ。其過の輕重に隨ひ可行罪過事。

一大過小過刑罰に有輕重。可行如法。小過より中過までも。常々行儀能きものをば。訴訟人有は可言上。常々不行儀のものならは。訴訟者も可爲曲事也。

一常々諸法度趣觸れ聞せ。其上にて相背くものは各別。教誡せすしては。其過。品により組頭大組へも掛るべき事。

一上意之趣。背輕者申渡と云とも。不可疎略事。

一中間小者の衣類は百姓同意。座敷は上たるへし。足輕の衣類。組頭百姓と同意にて。座敷は名主の上たるへし。歩行者の衣類は。名主同前にて。座敷は代官と同意たるへし。代官の衣類は中小姓並にて。座敷は下たるへし。代官の下代は足輕並にて。此外義理正しく。常は言行共に謙り無他事可好。軍功牢人の外。百姓末民名主たり共。刀一切指へからさる事。

一喧嘩口論。皆我慢より起て。孝をそこなひ忠を破る。常々行儀よき者に。我慢無法なるもの。慮外の言を出し。他見の嘲難差置は討退にすへし。若あやまつて討れ。或は互に我慢にて討るゝか。或は他人の見さる時の喧嘩にて。理非分明ならさるは。兩方同罪たるへき事。

一評定所を立置。兩方吟味いたし。理非を分る

上に。私の沙汰仕るものは曲事たるへし。
一人の門戸に立て食を乞ふ者。寺社の外は。皆長吏か下知に随へし。若大儀有は。其所之名主に。長吏の方より差圖を可得事。堅く申付べし。
一行衛知れさる者有之は。其所にて搦捕。急度役人方へ可申出。若地下人の手に餘者ならは。近所之地頭へ可申上。令油斷越度有は。其所之名主組頭曲事たるへし。借宿候者は重科たるへき事。堅く相觸へき事。
一金銀錢等の掛之諸勝負。堅禁制仕るへきこと。譬へ月待日待たりといふとも。彌禁制急度下知すへし。
一高札は其時に當て。急に法度を出すへき事を書しるし立る者也。急度可相守。若背輩は重科たるへし。若又相止て可然法度有る時は。落書にて可申上。乍去人名指て。惡口を書候はゝ。譬へ有事を書たりとも重科たるへし。相手有て申旨ならは。評定所へ可申出事。
一諸法度之趣。家中百姓末民迄相觸。下々は五人組にて相守候樣に。諸頭より可申付。其五人組之中にて背くものは。譬は。一人ある時は。四人異見を加へへし。異見を用ひさる時は。組をはつし度由。組頭へ斷へし。油斷仕惡事出來の上は。役所へ引渡す間の入目金銀等五人組へ可掛事。
右之條々。常々相守へし。此外諸頭方より相觸法度。堅く相守。油斷すへからさる事。下々五人組の諸法度。別條に有之事也。
一評定の寺方は。宗々の本寺にてあまりたる沙汰。社人は八幡神主方にてあまりたる沙汰を。寺社奉行へ可申出。百姓浦方町方之ものの共。地頭にてあまりたる事を。其役人へ可

申上。藏入の百姓城付の町は。其代官所にてあまりたるを可申上。諸奉行の内寄合は。日限三日。十三日。廿三日。同立合評定の日限は。八日。十八日。二十八日には私宅にては宗老を以。見舞を請させ。諸奉行は登城目見終て。御次の間にて。或加増。或役替。惣吉事談合也。翌日には右の如く日見へ終て。加増役替惣吉事を御城にて執行也。十五日は。右之通日見終て。私宅に歸り。私宅の吉事執行へし。

一御目見の儀式は。御一門は諸ろ茶禮とて。大將と御目見之衆と。兩方へ茶を出す。家老と諸頭は片茶禮なり。御盃之禮は。御一門七度禮。五度禮有。別大老城代は三度禮。中老番頭一度禮。組頭之類へは御盃被下計にして。無禮御さし流し也。

一軍勝負の評定は。備頭の所にて餘りたる事は。彌九郎殿。老中立合にて究る也。然に諸役人被仰付事。譬如何程の手柄したるもの成とも。十惡のものは用ひ給さる事。本より十惡を仕出たるものは各別。當々の事にはあらす。十惡の氣さしある者の義也。十惡といふは。一は不忠二には不孝。三は佞人。四は奸人。五は邪欲。六は侈。七は重色欲。八は邪曲。九は僞。十は盗人也。

一義堯公御法體に付。御一門御家老中申上けるは。昔より大將の法體と成て惡行なる有り。淸盛高時の如く。又平人にては。大將の威勢なき故。法體なる有。又武士の行儀苦しく思ひ。法躰となるありといへとも。皆不吉也。君は如何思召と申せは。義堯公聞召。我。義豊を討事は。父の敵なれは是非なく討也。然に嫡子方を殺して。我大將とほこらんこと不悦也。故に法體すへし。去とも兩國を他

人に取れん事は。猶以不孝也。自今以後は。義弘を大將として各忠を勵まし給はれと。淚をなかして宣ひけれは。皆々感淚を押へて。御前を罷り立。其後の軍には。義堯公。後見のために出陣ありといへとも。大將は義弘公と御定め也。

一德必有隣習にて。爰に目出度論出來る。佐久間源次郎といふもの。末期弟源左衛門といふ者に家を預け置。子息十五才になり。奉公相勤へき時分家を相渡し。知行五分一相分。其方は各別に奉公致へしと相定死去す。其以後。國府臺の軍破し時。多賀藏人と一所に。池の和田の城に籠居て敵を防く。又三船山の合戰に大功あり。然る間知行一倍になりぬ。甥十五歲のとき。源左衛門は遺言の通。源五郎に家督を可渡よし申けり。源五郎申樣は。かく家繁昌は。源左衛門度々合戰に武功ありし故なり。一命不思議に助かり。我等を養育せられし事なれは。家は實子に讓り給へといふ。兩方ともに他人の異見を聞入さる間。大膳殿の備(侍イ)頭藏人公へ申上。內談窮て。本領五分一と加增を源左衛門に被下。遺言の知行は源次郎か息源五郎に相渡。源左衛門も兄の代官にて取たる加增なれは。惣高にて五分一申請と望けれは。大膳藏人。大將よりの仰なれは。我々兩人か計ふ事と思ふへからすとて。事極りける。初には一圓渡すへし。一圓に請へからすと論せしなり。世間珍敷事かと思ひ是に書しるす。

一義弘公。岡本の城出來の時。見分に御出馬ある所に。高札あるを取寄見給ふに。一首の歌あり。

福原の都人とはきゝつれと年貢につけて信濃あしさよ。と書たり。依之。福原信濃か

年貢の取様十(付イ)年程の間をならし御覽有に。尤高。又其所の田畑の上下改あるに。中世其時の田畑繩目改見給ふに。餘村なみ也。然れとも百姓つぶるゝ故に。代官役を押し上け。無役にて差置る。猶惡事あるかと穿鑿し給ふに。別して惡事なし。ゆへに子息善七郎。又御奉公を勤む。父は元來京のもの也。其身不幸故に此落首を見出されしか。

一常に無油斷。君は小田原方より舟にて狼藉に來る時は。速に防て。百姓浦人町人難儀なき様になされ。淵(洲イ)の崎に番所をすへ。軍船か賊船(亂暴取イ)か來る時は。早速相圖の太鼓を打つゝけ。北には瀧山みやうかね(とうかねイ)所々の番所より。相圖の太鼓を打つ。その時。妻子をは山入に忍はせ。家財を隱し。防く勢かけつけぬれは。百姓町人浦人も。時の大將の下知次第に。彼の狼藉を討也。百姓以下手柄のものには。御褒美被下しと也。

右御政道の大體也。此外。時に取り折に依て。御法度有と知るへし。此一巻は前四代の事にてもなし。亦忠義御代の事にてもなし。中四代の御法度也。中四代の内にも。岡本にての御政道也。此外御一門御家中下々へ分々の御法度狀有り。理非を押分而。根元此より外の儀無之。故に略記也。依如件。

里見九代記第二終

里見九代記第三

里見家に三略を用る事は。智仁勇の三德。聖賢の分は。生知。安行。學知。利行の四つ也。中人以下は。自三近道可入。故に三近の心持にて用之。加之八幡宮以來。數度功ある事。皆此三略の心持なり。又三種神器の相傳秘す所大事也。

三略傳書乾卷

一上略は。設禮賞別姦雄著成敗。故人主深曉上略。則能任賢擒敵。故以是類之事記之。義實公。初に必三吉相を心得ありて。安房國に渡給ふ折節も。地頭等貳人亡。安西。義實公に降參。東條は小田喜の正木と一所になるを。押寄せ討取り。正木も御手に付給ふ。是皆亂極て治を好む折から。名將渡り給ふゆへ。御下知に隨ひ人々和睦せり。義實公。常々上下に組を定め。組毎に長を立給ふ。軍の時は以之備を立る也。安房殿の七備と。世間に云傳るも子細あり。御旗本一備。先備一組。衝陣備左右二備。休陣備二組。以上六備。衝陣左備より先陣備にかはれは。休陣又替る。此外代々。或は十騎五十騎百騎計つゝ。何騎か黨とて。或時は伏勢となり。或時は鳥雲の陣をなし。自由に變化す。故に七備と云傳ふ。惣別備は。軍場の形にそなへて地の道也。戰は車の如く。替々に廻る日月星を象とる天の理也。大永五年の亂に。(止イ)百騎か黨。舟の上を強くはらせ。その內に大石を置て軍中へこみ入る。大力なる者とも。さねよき鎧を着。船の上に顯はれ出て。(士イ)舟底より調錬にて大石を上れは。上なる男聲をあけ引上け突おとすやうに見すれは。敵の船中へこかし入はね入れ。舟も人も打破れは。その舟より軍破れけり。石を上るも。敵の船へはね入るも。謀にて仕出たる事なれとも。おもひの外な

る大力ありと恐れおのゝきけり。此時。上總勢來るを。相圖の通。城ヵ島にて待給へは。折節西風烈して。時刻も移れは。天の未たゆるし給はぬにやとて。安房へ引返し給ふ。大永六年の軍に。又敵より例の大力出て討とれとて。先にすゝむ舟に。石うけの木をひしと打。其陰に鎗。長刀。太刀。熊手なとを持て待居たり。木曾。鳥山。三浦。勝山。鎌田。楠をはしめ百騎のものとも。今度は又。人形を作て隱し置。わさと矢軍して日を暮し。よき時分こそと相圖して。彼人形を舟の上に顯し押かくれは。案のことく長道具にて。彼人形をせめける所を。楯の陰より太刀を以。散々にきりけり。敵。案の外なりとて。あわてふためきける時。また舟中へ込み入し。其請支度なき船ともへ。先軍の如く石をはね入る。本より大力のものなれは。材木を手々に

投入て。舟人共に打殺す。乘損たる船より。大勢のもの共。餘の船へ乘るとて。舟共蹈み返し々々。上を下へと返すとき。究竟の海賊兵とも。勇み進んて追かくれは。いとゝ途方を失ふて。是より船破れけり。今度は味方も大勢なりとて。いつくまてもと追かけける。敵は鎌倉八幡宮に支へたり。小田原より荒手加りける。今度は百騎か黨。小田原の空にて二度目にすゝむを待とて。御旗本より兵をすくつて。以上三百餘騎。山中こたかき所にわけ入り待居たり。又正木。山田。眞里谷。忍足。本田。黒川黨と左備に居て。二の手にかわれは。鳥雲の陣を作て引分り。不思議の勝をせはやと待かけたり。斯て敵味方。おもひ／＼に戰ひけるか。北條方たくむ事ある故に。軍しところに成て備るを。正木。山田是を見て。脇より不慮につき入。さん／＼に

戰けり。北條方によき折とや思ひけん。引て見へけるを。はやりをのものとも。あまさしと追かける。敵。大佛越へはひかすして扇か谷の方へと引く。味方心得すとて。しはらく扣へて見えけるを。敵。かくては時うつるとやおもひけん。爰かしこよりあらはれ出て。一もみにと進みける。味方は荒手を入替て。正木が黨は引分り。すきまを見て突やふれと。休陣へは替すして。右備にて替りける。斯て敵。一もみにと進む故か。旗本しとろに成て見へたり。百騎か黨。よき時節と。思ひもよらぬ方より押寄る。北條方と見ると。近々と成て旗指上。大將の陣へこみ入〳〵戰けり。敵是を見て。前後を守て軍せよとしと〳〵に成てひしめく所。正木。山田時分はよきそ。突入れと一度にとつとかけ入戰けり。大將も時を見給ふて休陣すゝめ。旗本

にても和田。龍崎。木曾。武石等力を合よとて進て。下知を仕給ひけり。北條方叶はしとや思ひけん。小田原さして引返す。折節味かたの火か敵の火か。八幡宮へ付て焼拂ふ。實堯公仰けるは。かゝる凶事出來つる事。味方の氏神にておはしますに不吉也とて。本國へ引返さる。惣而安房國は。小侍國とて諸國の討もらされたる兵共。度々軍に馴たる兵共來り。籠り居て軍も隨分したりけるに。不慮に稲村亂出來り。古來のもいとも討死して。自弱國となりけり。新田。里見。鳥山に傳る所の兵書も。此書失ひはてゝ。三河國にや殘るらん。

一七字を備に取事。人間萬事塞翁馬と口傳す人と備組時は。旗本は間と組。萬と備組時は。旗本は事と組。塞と備時は。旗本は翁と組也。右是は別の分也。惣ては父馬の字に組



へし。只見樣にも心持有之。

鎌倉合戰備の事

一弓は。鐵炮の二か一組時の宜しきに任すへし。

一栖樓の組樣。竹たはの結樣立やう（ねこしの結樣立樣イ）。白人の才角にて仕たるは過て出來る有事也。鍛錬のもの丶差圖を受へし。又は鐵炮の書にて求むへし。

一相印相言葉。餘所より才覺して出すへからす。大將と老中軍法者と密に示し合せ出すへし。但夜討の相詞相印。其中間にて定て。其大將より不可出事。

一謀には專ら味方の助けを肝要とするものなれは。敵へもれさる樣に謀るへし。忍のもの丶相詞は一人別に可替事。

一町人百姓の謀よきものを用るとも。位を武士より乘越ぬ樣に計ひ。實をは可遣事。

一日取の事。軍勢の不疑樣に可申出。道理を以老ふる時は。疑のおこらさるもの也。

一城取の事。備も同し心。惣て此流は兵法太刀のかまへも。五調子陰陽六の位面八の切合ひ極意二の太刀。皆備と同し心也。委細口傳秘すへし。

一覺悟の定樣第一肝要也。何れも諸士は皆その心得有へければ。いふに及はす。生死貧福貴賤皆天命也。只願ふ所は。不義を嫌ひ。天理を樂み心正しく居れは可なりと心得へし。然らさる不義を働かは。樊噌か働をなして死したりとも犬死といふへし。

一中略差(著イ)德行審權變。故人主深曉中略。則能御將統衆人。臣深曉中略。則能全功保身。故以是類之事記之。義豊公まて四代の政道。人數家の子一人。軍大將二人。家老二人。若(中イ)老二人。諸役人の惣頭あり。小頭あり。寺社奉行二人。地方奉行二人。町奉行二人。勘定奉行一人。代官頭一人。社人頭一人。同一人。伊勢より來て。春每惣祭あり。此時は神の御位次第に定座。居常には京都の官位次第に定るなり。寺方は宗々の本末は不及申。惣而の宗は寺ある者は知行次第に。寺なき者知行なき時は年數次第也。遊民は長吏か下知にて法度下る。如此して持内のもの。外國へ出るには。關所にて判を合。又外より來るものは夫々の頭へ見舞。下知を受非人をは其所にて養育し。不審成もの無之樣に。法度ある故。持内に野武士無之也。楠正成。天下を動すも。此野武士數多ありし故也。存社稷維英雄には。野武士類。惣別無組頭者無之樣にすへし。行衞も知ぬ者共。世上に多出るは。無政道成故也。惣而國家を治に。智仁勇一つも欠ては叶へからす。智を以道を正し。仁を以

無行衛遊民無之樣に。下々迄めくみもれぬ樣にすへし。勇を以て二の事。おこたりなき樣にすへし。悪事起らは急に戒め。自より他まて善を好で餘事をかへり見すは。大軍の兵も一心の命に隨ふへし。然らさる時は諸人心々に成て亂に近かるへし。故に天の時は不如地利。地の利は不如人和と云へり。人の和睦する事。巧言令色を以すれは、來るものも早けれとも。退くも又早し。天の元德より君の仁德より。家老地頭情厚くして、政令正き時は。人長く和睦し天理を重んし節に死す。是仁者必有勇。勇者は必不有仁といへり。夫存祖稷には。先家を治。一門の交正きを専一とす。先祖の廟を守り給ふ役なれはなり。臣又君を敬ひ。諸役人も上を敬ひ下を憐む時は。身を立て先祖の廟も威をまし子孫繁昌也。是皆當然の理にして。私欲にあらす。又私欲の戰には一旦勝利あれとも。彼欲をとけんとして色々逆財におはれて、頓て大負を取事あり。楠正成。名を天下にあらはすは。始終共に道を守り。不道の働なき故也。

一下略は。陳道德察安危明賦(賊イ)賢谷(否イ)。故人主深曉下略則能明盛衰之源。審治國之紀。故以是類之事記之。夫日本は神國なれは。三種の神器を秘傳と定給ふ。是至く寶を傳給ふに非す智仁勇の三德か。大寶也との印證なり。然るに神璽を仁に合するに深理あり。あらましを云は、先天地之間にては人を大なりとす。人の中には。天神七代地神五代より打續き。天子より大なるはなし。其過にし御廟を至ふして。子孫絶さる樣に御守り有りて。其事を大名より小民に至るまて押ひろめ。物にまて種をのこす事を敎給ふは。仁の事也。故

に其德を御先祖より請。子孫へ御渡被成所の印也。寶劒は體用也。體は右の如くに和穩を。他人の爲に破られましと。道を以て守り給ふか孝なれは。家臣も是を守るを忠とす。忠孝を人々守て。自他ともに治るを體也とす。御鏡は此理を始め。事々物々の理を明に照らし。理非分明にして。日月の諸方を照らし給ふか如くなるへし。自ら明なれは明德の體也。民を新になさゝるは用なり。右三つを以て。五倫を治め萬民を安するを太平とす。然るに亂世程久しく。此傳吉野の皇居に破れ。新田家に相傳ありといへとも亡ひ。里見の家に殘るといへとも。稻村の亂に。古來の士討死の後。傳るものなし。斯失果ぬる事を悲み。愚案をも顧す。此のことく記置くもの也。後賢是を以て後世に傳ふへし。大古上御一人の傳なれとも。此義は吉野の御門より有功者に御許有也。然れとも新田。楠。里見各滅亡の後。若は三河國に殘らん。餘所に無之傳也。可秘々々。

三略傳書坤卷

一三略は始終智仁勇の心持有といへとも。分けて見る時は。上略は勇。中略は智。下略は仁の心持也。故に將の法攬英雄の心をといふは上略なり。

一賢者をあけて不肖者を悪むは。治國の體也。有功賞祿するは治國の用なり。爰に用を前に書て。體を後に書たるは。戰國の心持也。如何となれは。役定め人配り。常に定る故也。衆と心を一にするは。治國亂國ともに一也。

一柔剛弱强の事。柔の公成を德と云。私なるを善柔と云。剛の公成者は。萬物の上にして私欲に引れす。私なるは賊也。弱の公成は人

の助る所もあり。私なるは国制るゝ所也。強の公成は。国彰るゝ所なり。私なれは人の悪む所也。四ッともに公なれは。則国敵端的に敗北す。四つともに私成時は。卽も敵にあふて勁轉す。然は存亡の端有之。不可忽。

一察衆の心施百務事。本書に委し。其中に敵動かは伺へ。近は備へよ。強は下れの三つは。當家の秘す所。別して口傳有之。

一世能祖々鮮能下々と云り。誠下を悪。人數和睦し。民をつかふに時を擇て。薄賦斂時は則國富而家娯也。

一用兵之要。崇禮重祿にあり。禮正き家には。智士來り智臣至る。重祿とは財をおします。義の儘に賞功。賞功時をこすといへとも。義なるゆへに。義士忠にすゝむもの也。

一將の威とする所は號令也。戰の爲勝所は。軍の政也。士の戰を安んするは。命を用る故也。令は出して返らぬ樣にすへし。內にて理を盡し正して。外へ出すへし。大儀ならは大臣の外。譜代近習まて相談の上にて。士卒に令すへし。如斯なれは誤事有とも。臣下の恨有間敷もの也。

一良將の統軍。恕己治人といへり。己か欲する所を推廣めて。人に施を恕と云。然は賞を表とする理也。如是不忠不義をなす士卒を罰するを。裏と云へし。知不明ゆめ〳〵賞罰は不可明。敬て行ふべし。

一將は不奢不憂。謀深質なるへき事。

一將は賢明にして。又受諫聞訟。納人採言。知國俗國山川。小民言を思入て。謀をなし可制軍勢事。

一將之謀。欲密士衆欲一攻敵欲疾。攻敵疾時。則備不及設と云り。義經公の不意を討給ふこと。皆此心を專一に用らるゝと傳へ置所

也。
一慮（イナシ）勇勤恕は將の明誠也。
一用兵之要。察敵情度其粮食。其强弱。察其天地。伺其空隙可謀成也。味方に有事を。敵にはかられさる樣に心得へし。
一粮兵禮三寳禮本成事。
一佞奸を遠け賢知を近くる事は。諸書に載る所。可愼第一なり。善を善として不進。惡を惡としても不退時は。賢者は少し。衆は惡につき安きものなれは。必す賢者は隱蔽せらる。如斯不肖のもの位に在時は。國受其害。君と臣と賢明にして。謀及小民時は。則功可述。不謹あるへからさること。
右之條々。擧大略。士衆に廣く知するもの也。是に付て木曽を學ひ口傳得へし。口傳は上略は勇を本とす。先賢定置る。仁義血氣の二勇有り。彼稲村の亂起申事は。仁義を捨て血氣にほこりし故也。其源を尋るに。大永五年。同六年の合戰に。百騎か黨と。正木安西等か働と同し樣に賞祿ありしに。或夜。大津の城に會合して評定あるは。義豐公御幼少の時。御父の義通公の末期。稲村城を叔父實堯公に御預有之。政道を執り行給ふ。爾るに義豐公。十五才を限の御定なりしが。其時節過ぬれとも其沙汰なし。此義如何せんとありける時。堀内新左衛門。鎌田孫六。勝山隼人。本間刑部。眞田。中里を始として皆一同に申けるは。大永の合戰に。古來のもの大功あれとも。させる賞なし。正木。安西。山田。黒川等老功ありといへとも。軍の法を雅意にまかせぬれは。指て手柄とも難云けれとも。實堯公の近習なれは。一々彼等か手柄の樣になりたり。今のことくにては。國を公に渡さるへきとも覺へす。押寄弓矢を以。御取候へかしと申ける。中にも木曽修理之介。楠六左衛門申

けるは。各のの給ふ所一理ありと雖とも。日本國中に大軍起て落居不知折節。御一門の中にて軍あらは。相模下總の敵とも起て。御家の滅亡目前にあり。只我々稲村殿を幾度も諌言申へし。不叶とも御叔父にて候得は。合戰は御止め可然と申上る。義豐公聞し召。只押寄合戰し。不叶は腹切て死なんに。何の仔細可有と仰ける。木曾かさねて申樣。押寄て討奉らん事は。案の內にて候へとも。上總より義堯寄せ給はゝ。萬喜。眞里谷の人々加て戰はゝ。味方の負軍歟。左なくは兩方ともに。他人の爲に亡されん事。目前なるへしと申す。義豐公仰には。本望とけなは。其後如何樣になるとも。夫まて也。只押寄よと宣へは。元より進む若もの。中里。三浦の一揆我劣らしと勢を揃へ。天文二年七月廿七日。稲村へ押よせ。終に義豐公勝給ふ。城方にて討死の人々には。正木藏人。山田佐(ナシイ)右衛門。本田藤右(左イ)衛門。忍足左京。黒川外記。堀江新藏。板倉源內。安西式部。其外餘多討れけり。大將實堯公生害也。去程に上總の久留里にまします義堯公は。安房に殘りし味方のものと示し合。時節を伺ひ。翌年稲村へ寄んとて。萬喜。眞里谷の人々を語らひ。正木大膳を先手として。長狹まて押寄給ふ。義豐公も上總へ發向可被成おほし召。折節。上總の味方より其旨注進する間。大津の城には。宮本宮內。鎌田孫六。稲村の城には。木曾修理介。眞田三河。勝山には大野宇兵衛。勝山隼人をさし置て。龍崎外記。楠六左衛門に雜兵あまた差添。加茂坂に篝火を燒て待居たり。大將は堀內新左衛門。木曾新吾。同庄九郎。本間刑部。安西民部。中里。菅(谷イ)野屋をはしめ。ひそかに稲村を御出ありて。久留里の義堯公。大勢にて房州發向の留守を心掛て。山つたへに上總へ急かるゝ。內通のも

の。いつの間にか此事を。磯村まて早飛脚にてや告たりけん。 義堯。四月五日の夜半。久留里通を打越給ふ。兩方早旦に犬掛にて。はたと逢ひ一戰有る。義豐公。討負て稲村へ引給ふ。 先手の中里。菅野屋。木曾兄弟討れけり。 四月六日の晝より夜の四ッ迄。稲村にて合戰に。方々手分のもの共。皆稲村へ引返し。思ひ々々に討死す。大將義豐公も討死なされけり。寄手にも安西右京。山本清六。宅間藤内。早川權之丞。御子神内藏。宇都彦次郎。其外餘多討れけり。 兩方血氣い勇者故に。 兩年の合戰に勇士餘多討死して。弱國となりたること。兩方血氣の勇なる故也。後い合戰は最早止難き事也。前の合戰の起りは。敵に安西右京奢り。味方に中里血氣にはやりし故也。

中略の傳

一人の知に皇帝王の段々ありといへ共。 公になる事は一也。霸者は同し樣に見へても。私なれは心々のかわり有る也。

一智勇貪愚の四情を使ふ事。 智者は其功を立ん事を好み。勇者は其志を行ん事を好み。貪者は趨利。愚者は不顧死。因其情四ッ也。

一任利口。敵の美を語て勿惑衆。主財役人に慈悲過たるもよろしからす。 慈悲なきは尚悪し。巫祝を禁して。軍の吉凶を占せんとすへからす。只理の儘に働くへし。

一義士は義を以使はるへし。 財を以使るへからす。智者は與闇主不謀。明君と共に謀る。故に君臣無學文叶ふへからさる者也。

一高鳥死して良弓藏る。 敵國滅ひて謀臣亡ふと云り。故陶朱公は身を退て小舟に棹さす。霸者に此事あるは。君臣共に私有故也。王道には。太公望。伊尹のことし。 故に文もなく武もなく。天道を知らすして。安樂に住し油

斷せしめは、滅亡近かるへし。故に賢を用て士民を育し。社稷の名を後世にあけて。樂を子孫に傳ん事謀にあり。

下略の傳

一夫天下の扶危(愁イ)憂。安全になす事。學文なくては叶へからす。學文も雜學雜智は何の益あらむ。只文武の道而已學ふへし。尤私學を以不學を討つ者有といへとも。或一年か或五三年か。又は運により其身一代にて滅亡すへし。譬一代はもちたりとも仁義をしらす。二代迄も不治は。勝たる甲斐は不可有。仁者の功は申におよはす。小賢の功も一代にては不盡ものなり。

一治世の定器は禮樂也。樂非金石絲竹人々樂む。其家職も公私の二あり。能く押分て私を捨へきなり。

一安政には忠臣多。勞政には怨民多き事也。己か利根たてして。他人を欺き諫を用ひさるは。勞政の本なり。

一舍己教人逆也。正己教人順也。順逆は治亂の端也。

一道德仁義禮。四書五經に委細也。

一君より出るを命といふ。文章に顯すを令といふ。受て行ふを政と云。政不正時は邪臣勝つ。夫邪臣の姦佞は。膝下の敵也。退すは有へからす。

一一善を廢すれは衆善衰へ。一惡を賞すれは衆惡歸すといへり。

一淸白の士は。以爵祿不可得。節義の士は。以威勢おひやかすへからす。故に王政をしらすしては。無上の重寶賢臣を可難得。

一聖王の兵を用る事。非樂之以義討不義也。兵は不祥の器也。天道惡之。不得止用之。又天道也。

一人有道。魚之如有水。言尤不義而且盛者有といへとも。夫は生れ付福厚き故也。然共夫も福つきては。爭か禍不來乎。

一人の道無別條。用賢自ら不肖者は遠而道立也。聖賢内なる時は。邪臣は外也。邪臣内なる時は。賢臣は外也。邪正は常に敵味方也。謹て勿忘。我身の内に常正味方と邪敵とを。只味方專ら可養育事。第一の要心也。

里見九代記第三終

里見九代記第四

分限之卷

一里見九代の分限は。義實公一代は。安房一國に西上總少し。東上總は。正木一家殘らす味方と成。二代目より義豐公。義堯公迄も。社家樣より。兩國の大將を賜り。社家樣滅亡以後。義堯公。椎津の城を攻落し。兩國は不及申。下總三浦まで御手につけ給ふ。然る所に。小田原より萬喜の方へ。内通には此度國府臺の合戰に。小田原へ附き給はゝ。打取る所の國々の大將となし。過半知行に可給と。度々使を立つ。萬喜は名高き武士なれは。還て里見を攻んと催しけり。重て小田原より内通に。連々此方へ親み。此度の合戰には。里見へは加勢の分にて。合戰にはいろひ給はさる樣にと。度々賴まるゝ故にや。國府臺にて二度目の敗北に。正木は強く働とも　萬

喜は早く敗軍す。其後、三舟山の合戰、勝といへとも、下總を取返す事も叶はす。上總さへ萬喜の持内は、小田原方なりとて隨さるなり。其以後、大阪より三浦四十四郷と、上總を替地にして賜る。又其後、江戶より上總を取上、鹿島にて纔に三萬石賜る。然る間、義堯公、義弘公の御繁昌と、義康公と忠義公の衰へとの中を取、義頼公より義康へ相渡さるゝ。分限にて書記すもの也。御家の本名を名乘る事、堅き御法度なり。其故は、鎌倉（入イ）合戰に、小身者里見と名乘て、敵方へかけ込討れたるを、小田原方にて大將の御弟也といふその故なり

御一門之御事

一千石　義康公御袋樣。後には三千石にて御隱居也。　御前樣

一五千石　同御弟。後には八千石と成る　大膳殿。是舘山にて一萬石。　正木彌九郎殿

一千石　同斷後に三千石。駿河にて病死。　正木源七郎殿

一三千石　義頼公の舍弟。　薦野神五郎殿

一七千石　同伯父。本名御免也。後子息兩人に別る。　里見右京亮殿

一一萬石　同從弟也。是は義弘公より本名御免。後子息三人に別る。　里見下總守殿

一二千石　後に閑齋と申す。　正木八郎殿（セイ）

一二千石　神五郎殿御袋也。　オワイトウ樣

（トシイ）家老番頭

右之通、鎌倉合戰以來、御一門も里見と名乘る事。御免なくしては叶はさる也。

一二千石　大家老（家老番頭イ）　御一門也（山本清七

一二千石　同　堀江四郎左衞門

一千五百石　中家老　（板倉大炊助

一千五百石　同　長谷川隼人

一七百石（セイ）　寺社奏行　（正木藤九郎

一六百石　武具奉行　岡本兵部（左イ）

一五百石　地方並町奉行　（角田丹右衞門

一六百石　浦方迄諸沙汰を聞　（岡本半齋

一四百石　地方浦方町方　板倉手洗
一同　勘定吟味方　堀江三左衛門
一八百石　百人衆頭　安西中務
一同　忍足兵藏
一六百石　十人衆頭　御子神大藏
一七百石　二十人衆頭　宇都(部イ)彦四郎
一同　本間六郎左衛門
一同　宅間監物
一同　波田野庄助
一五百石　足輕大將　本多藤左衛門
一五百石　上野(野イ)内匠
一同　大島新藏
一同　安田市正
一四百石　歩行頭　赤垣丹後
一四百石　正木孫作
一四百石　小從人頭　山本權兵衛
一三百石　鳥(居イ)山五郎左衛門

一三百石　中小性(チシイ)頭　早川新左衛門
一同　石川五郎兵衛
一二百石　小扈從頭　大島左京
一二百石　岡本清七
一二百五十石　祐(右イ)筆頭　三浦半四郎
一二百五十石　武田七郎次郎
一三百石　舟手頭　安西又助

組頭衆

一五百石　馬乘廿五人頭　眞田信濃　名跡三九郎
一五百石　同　黑川源兵衛　名跡千勝
一同　同　和田甚(二右イ)九郎
一同　同　正木佐市左衛門
一同　同　早川右衛門
一同　同　眞田權之助
一同　同　正木丹後
一同　同(廿五イ)　細野修理
一四百石　馬乘廿人頭　角田忠右衛門

一四百石　馬乘廿人頭（廿五イ）　印東河内後式部と云
一同　同　眞田大學信濃子息
一同　同　長山刑部
一同　同後隱居樣へ附　木曾隱岐
一同　同　本間八右衛門
一同　同　中里源左衛門（右イ）
一同　同　加藤孫左衛門
一同　同　馬乳久七
一同　同　依田若狹
一同　同　中村織部（糸イ）
一同　同　岩原主計
一二百石　足輕三十人つゝ頭（二イ）　龍崎彌左衛門
一二百石　同　正木兵部
一同　同　土岐八郎右衛門
一同　同　加藤七藏（業イ）
一同　同　青木帶刀
一同　同　椎木丹右衛門

一同　同　佐久間五郎助
一同　同　井田信濃
一同　同　今井筑後
一同　同　三浦下野（作イ）
一同　同　竹田藤兵衛（右イ）
一同　同　平野又左衛門
一同　同　北見喜右衛門
一同　同　山梨孫九郎（右イ）
一同　同　本間彌左衛門
一同　同　澤田美作
一同　同　佐藤田勘右衛門
一同　同　萬喜權右衛門
一同　同　玉野豐前
一同　同　鶴見金太
一同　同　岡本五郎右衛門
一同　同　宮本出羽
一同　同　諸惡善右衛門

一同　同　佐保田角右衛門
一同　同　村上助右衛門
一同　同　小原越中（對イ）
一同　同　早川數馬（谷イ）
一同　同　糟屋又四郎
一同　同　近藤忠兵衛
一同　同　大串五郎兵衛

右足輕小頭也
諸（ナシイ）役人衆

一三百石　使番十人衆。又一役は小目付小從人方組内目付（ナシイ）　加藤左門
一同　同同　正木孫市
一同　同　岡本馬之助
一同　同　小曾根駿河
一同　同（使番亦イ）　新見角右衛門（左イ）
一同　同一役は小目付。歩行衆方内目付（ナシイ）　牛森（梅イ）惣右衛門
一同　同同　海田與九郎

一同　同同　印東長次郎
一同　同同　長山八郎
一同　同同　上野傳左衛門
一同　奏者面役大目付中小性方内役（ナシイ）　大島源次郎（左イ）
一同　同　安西七郎右衛門（田イ）
一同　奏者面役大目付百人衆方　安西彦右衛門
一同　同　關神平
一同　同　正木彌市
一百石　小從人目付本目付　原田兵藏
一百廿石　此外内目付前頭有（斷イ）　久留里源藏

百人衆

一百石　正木信濃
一同　三浦平五郎
一同　木戸孫九郎　後に下野と云
一同　寺尾權平
一同　志水治右衛門

一同　土肥小三郎（兵衞イ）
一同　網代久右衞門（左イ）
一同　武石庄右衞門
一同　御子神庄藏
一同　足立新三郎
一同　菅野屋左平治（橋イ）
一同　眞田孫吉
一同　櫛田惣右衞門
一同　勝山長門（左イ）
一同　佐貫藤右衞門
一同　豐崎九右衞門
一同　宮本上野
一同　高澤兵庫
一同　眞里谷源太
一同　秋山惣右衞門
一同　青葉新右衞門
一同　安西勝右衞門

一同　岡本豐前
一同　吉田半十郎（系イ）
一同　岩原與市（右イ）
一同　伊介左近（左イ）
一同　楠六右衞門
一同　山田遠江
一同　眞田三河（民イ）
一同　佐保田式部（和田イ）
一同　大田和與五右衞門
一同　代田彥八
一同　石田新兵衞
一同　朽木出羽
一同　佐久間主計
一同　森下丹波
一同　秋山五郎左衞門
一同　早川又七

一同　忍藤右衛門
一同　眞里谷佐右衛門
一同　豐崎主計
一同　行方隼人
一同　瀧(龍イ)崎兵庫
一同　眞田庄三郎
一同　大野太郎右衛門
一同　佐久間藤六
一同　本間三右衛門
一同　忍　土佐
一同　石堂原加右衛門
一同　山本宮内
一同　安西彌三郎
一同　石井大和
一同　今井大炊
一同　白井治郎助
一同　藤井(平)彥八

一同　長沼忠右衛門
一同　土波新十郎
一同　黑川太左衛門
一同　根岸藤右衛門
一同　丸佐右衛門
一同　栗原(彌イ)孫七
一同　本間式部
一同　海老名小三郎
一同　森　半彌
一同　吉田主膳
一同　豐崎庄右衛門
一同　法喜四郎左衛門
一同　吉田新四郎
一同　佐保田庄兵衛
一同　渡邊四郎兵衛
一同　關屋九郎兵衛
一同　有原小右衛門

一同　山井彦六
一同　加藤清（左イ）右衛門
一同　早川六兵衛
一同　佐野小傳八
一同　錦織加平
一同　沼佐（左イ）右衛門
一同　上野七（長イ）左衛門
一同　川壁金藏
一同　小隈佐傳次
一同　根本舍人
一同　神餘喜平次
一同　高梨紀伊
一同　佐久間長右衛門
一同　行貝半右衛門
一同　吉田與市郎
一同　宅間庄兵衛
一同　諏訪又右衛門

一同　石田久藏
一同　佐久間藏人
一同　栗原半兵衛
一同　白（佰イ）壁鄕右衛門
一同　印東内匠
一同　龍崎六郎兵衛
一同　森杢之助
一同　朝井金兵衛
一同　成川大藏
一同　石堂原八兵衛
一同　松浦半兵衛

以上百人衆。百俵つゝ也。地方過半あり。
右百人衆は。常（ナシイ）に方々番替に行軍の時は。
別して一備に組む。九代ともに同し。

一百石　歩行本目付此外に内目付前頭あり（斷イ）　森下彌左（右イ）衛門
一八十石　稻村新兵衛

一百石　長南源兵衛
一同　右筆(ナシイ)右之外切米七十俵宛十人　山本市左衛門
一百俵　書物奉行　善　清房
一八十俵　鳥山一平
一百五十石　兵法師源流　木曾庄九郎
一二百石　同　新當流　塚原五郎左衛門(ナシイ)
一百石　醫師頭　岡本源齋
一七十俵　醫師　大瀧陽三
一七十俵　田島道喜
右外五十俵つゝ五人有り
一七十俵　茶道頭　安藤松齋
一七十俵　印東惠齋
一三十五俵　右並合茶道六人有三十五俵宛　田村道喜
一三百五十石　御臺所奉行(俵イ)并藏勘定共　横小路將監
一三十俵　御買使　南條(中)角左衛門
一三十俵　同　田浦傳兵衛
外(ナシイ)三十人足輕並

一二百五十石　御臺所奉行并代官頭　糟屋源三郎
一四十俵　御料理人　宅間五兵衛
一同　同　荻原加右衛門
一百石　勘定藏共　三橋新右衛門
一百石　同　祭主新左衛門
一同　同　福原善七
一同　同　堀内庄左衛門
納方手代三人足輕並
一五十俵　同　石崎庄九郎
一五十俵　同　石崎勘兵衛
一同　拂方手代五人(ナシイ)足輕並　清水半左衛門
一同　拂方手代五人足輕並　宮崎小左衛門
一六十俵　代官神餘郡下代二人足輕並　中山(木イ)清左衛門
一六十俵　代官北郡下代二人　大瀧藤兵衛
一同　代官丸郡下代二人　初瀨甚兵衛
一同　代官長狹郡下代二人　難波三兵衛
此外十二人切米四十俵つゝ、上總の代官

あり。

一五十石　御馬屋別當（組下足輕並イ）　石井縫之助

一五十石（俵イ）　同組下足輕並（ナシイ）　鷹田次郎右衛門

一百石　舟手頭御座舟　向井勘助

一八十石　舟手頭　眞田七左衛門

一八十石　同　吉田新左衛門

一同　同　川名彦右衛門

一同　同　佐野才三郎

一五十石　中間頭組小頭　五人足輕並　根岸九郎兵衛（右イ）

一五十石　中間頭組鋭小頭　五人足輕並　杉藤左衛門

二十俵つゝは。足輕並の切米千（ナシイ）人也。

三十俵つゝは。歩行並の切米並に百人也。

三十五俵つゝは。小從人並切米百人也。

四十俵つゝは。馬乘衆切米並み四百四十人也。

四十五俵つゝは。中小姓衆切米並み五十人也。

五十俵つゝは。子小性衆切米並み廿五人也。

御仕着は。三十五俵つゝ出る也。

右之分。上御三人より外の衆は。江戸より上總取上られて。知行半分つゝに成り。人數も減少すと知るへし。鹿島を賜て。又人數少し增すといへとも。小從人組は。皆諸役へおひ込んで。外に組を立る事なし。又義堯公。義弘公の御時代には。諸家中の知行。此帳の一倍也。此外に御旗本もありと知るへし。正木と萬喜とは。御一門分にて此帳の外也。御一門の正木は里見也。家中に有之正木は。大田喜の正木と知るへし。

里見九代記第四終

里見九代記第五

軍(チシイ)之卷

一文安二年六月八日。東條合戰の事。初義實公。安房の國白濱へ渡り給ふとき。神餘。丸兩人は滅亡。安西は早く味方になる間。東條へ押寄合戰あり。東條七郎には正木加勢す。則金山の城にたて籠る。その日はたかひに戰ひ疲て休む。九日には。敵。城中より討出さる間　其夜荒川の住人高梨彌右衛門と云者を案内者として。木曾右馬之助氏元。堀内藏人貞行。三浦半左衛門。和田神九郎。村上七郎。大島右京。安西式部。神餘源太。丸新八以上十騎の武者共。その夜半計。城中へ忍入り。夜廻りものに打紛れ。爰彼所にてときの聲を揚け。前後左右に驅廻りけれは。城方の者とも。敵餘多打入たりと心得。友軍をはしたりけり。然而相圖の事なれは。安西も旗本も。時の聲をあけて攻寄する。城の兵共。あわてふためき。爰かしこに落行けり。正木彈正。心は武く思へとも。味方敗北する間。手勢の者共招き寄。安西か陣を切拔て。大瀧さして引て行。東條七郎も。是迄と思ひ切り。腹十文字にかき切つて死にけり。翌(ナシイ)三年正月には。如何おもひけん。終に正木彈正も降參して御味方となる。

一文明三年。峰上合戰は。眞里谷入道道環か城へ。正木を先手となされて。義實公向はるゝ義成公は眞里谷丹波か籠りたるつくろうみの城に向はる。義實公は大嶺より押寄て。其日に合戰をはしむ。義成公は明か根にて敵の臣下佐久間藤内と合戰し給ふ。其日は矢軍して。其間に忍の者を遣し。敵陣を伺はせらるゝに。鋸山に防兵を集め置て。其外の所には敵一人もなし。義成公は。其夜は陣中

には篝火を焚かせ置。密に舟にて金谷の浦へ廻り。後より攻給へは。敵一戰にも及はす落失けり。それより早旦につくら海の城へ。押寄給ふに。昨日道環負軍して。夜中百首へ内通あり。兩城の大將共に。里見へ降參せしなり。

一大永五年同六年の三浦合戰は。大形軍記に委しけれとも。殘る所をしるす也。前の合戰敵の大將は芳賀内匠。淸水平藏。內藤大和守也。總大將は三浦に御座す。味方の大將は賓堯公也。勝軍の次第は軍記にあり。討取る敵は。伊勢新助を味方の龍ケ崎外記討つ。三原源三郎を大島八郎討つ。安部平次郎を楠六彌太討つ。其外の小身は記すに及はす。後の軍も軍法書に見へたり。討取敵は。伊藤主膳を味方の木曾新五郎討取る。小笠原源左衛門を安西式部討。相河五郎を中里新七討つ。小山藤内を和田甚助討。高島彌平次を鳥山藤九郎討取る。其外の小身は記すに及はす。此合戰は他國より外の敵寄せると。社家樣へ聞ければ。萬喜をは國の押へ防き勢のためにと殘し置たり。

一稻村合戰兩年の事。軍記に見へたり。後の合戰方々手分け者共馳集次第。瀧田に合戰始ると聞へければ。勝山と宮本より兵者かけ付。荒手を入替へ戰といへとも。大勢の敵なれは。切れとも突とも物ともせす急攻掛る。新手の者とも。しんかりして稻村まてひき取けり。敵。勝に乘て責寄る處へ。龍崎外記楠六左衛門。加茂坂より引返しおめきさけんて切て懸れは。敵。中をわけて通しける。是より寄手も暫し陣を取て扣たり。暮方に又寄手入替々々攻けるに。城方は敵大勢にかけ合。又入へき兵なく。終日の合戰に疲

はてゝ。又々城にたて籠る。其夜中に城内より宮本宮内。鎌田孫六郎。眞田。三河。勝山隼人。大野宇兵衛。龍崎外記。楠六左衛門。本間刑部。安西式部。家臣堀内新左衛門。木曾修理亮。其外人々近習衆大將も。諸共殘らす只討死せんと心懸け。城中には唯雜兵を殘し置。義堯公の本陣へ夜討にかゝらせ給ふ。本陣近くなりて。鯨の聲をとつと上けて打つて入る。義堯公の本陣には。萬喜一つ所に居給ふ。軍に馴たる人々にて。兼て油斷はなし掛合て戰ひける。城方の者も命をおします。手負死人を乘越々々戰あいた。寄手も一町計引退く。爰に正木と眞里谷。一所に陣取つて居たりしか。追かくる城兵を中をわつて押隔。其間に義堯公も備を立直し給ふ。城兵今は叶はしと敵を嫌はす。只討死せよと大勢の中に割て入。東西南北に切拔しはし戰ひてさつと引いて見給へは。身方終に二十騎計になる。其内十騎計りは手を負たり。其間に案内知りたる者。城中に忍ひ入。火をかくれは。人々はいさや山かけに斬拔て御腹めされ候へとて。又一度にとつとかけ入り。一文字に掛け通り。城の後へ引かれけるに。大將も御手を負せ給けり。鎌田肩に引掛。山影へ引にけり。追かけ來敵兵は。修理助と三河とに防かせ。其外の人々は。おもひ〳〵に討死す。大將御腹召されけれは。鎌田かいしやく仕。御首をかくして。又三人共に切つて出。二人は討死す。鎌田一人殘りけれは。是迄とや思ひけん。貳人の敵を左右に脇はさんて。瀧川へ飛入死にける。此川の淀を鎌田か淵と云ひ傳ふは是なり。

一椎津合戰の事。天文廿一年の秋。椎津の信政萬喜小弼を小田原方となして。社家様の御

知行を過半は兩人へ渡し小田原へ殘る處を取らんとしたりける。然とも義弘公は。社家樣の御婿也。萬喜の爲にも實の孫にてこそなけれ共萬喜の御娘養育の君なれは。御好み深し萬喜正木との働故に社家樣の御跡を。里見殿へ付たりしに。眞里谷信政（ナシイ）小田原へ心を寄内通有し間。同十一月十四日に。椎津へ押寄合戰有之。其日の内に寄手打勝。信政は切腹せり。敵へは小田原より加勢あり。味方は例の萬喜正木。大將は父子共に出陣也討取敵は武田四郎次郎。同丹波。同右（左イ）近眞里谷源三郎。同宇右衛門。同左京。高山左衛門。西河彥六。正木の手にて堀江藤左衛門富田左平太。大澤甚平。（左イ）畑右近萬喜の手にて西彈正。山口新太郎。原田惣藏也。惣て手負死人千人と云程の大合戰なり。味方にも手負死人敵の三ヶ一も有へしと云。

弘治二年の軍は。敵は北條父子。味方は義堯公。義弘公なり。三浦の沖にて矢軍始り。程なく亂れ合て戰ける中に。東條六郎。木曾又五郎水練の達者にて大力なり。敵にてよき武士と見えたるをは。引組て海へとび込み。兩方死するかと見るに。六郎も又五郎も浮み出る事。二三度に及ひけり。敵これを見て矢尻を揃へて射たりけり。義弘公御覽して。あれを討すなと下知し給ふ。味方勇み進んて掛けるほとに。沖の軍には先勝にけり。それより本陣近く責寄する内に。龍崎掃部（加門イ）足のこうを折日をかけて射られ。馬よりとうと落て死たる眞似して。其矢を密にぬきすてける。敵二人かけ來り首を取んとする所を。一人を切伏。一人に手負せけり。又五人掛處。三人に手を負せけり。三人者共に重て大勢打てかゝり。危かりける所に。味方

掛合て追ちらす。是を軍の始めとして。兩大將打て掛り。萬喜。正木心を合せ攻かけ給へは。北條父子。小田原さして引返す。討取所の敵は。鈴木藤九郎を黒川隼人うつ。海老名小次郎を佐久間喜八討。尾崎加助を宅間萬喜討。金澤七郎を早川右衛門討けり(ナシイ)。其外。萬喜の手にして北條淺(今イ)右衛門之丞。芳賀新右衛門。成田佐右衛門。金澤加右衛門。正木の手にて佐藤新次郎。荒川小八郎。山角右衛門。西條半彌。中條小平次抔と云大剛の者を討取ける。其外の小身は記すに及はす。是より三浦にあらたに城を拵て。番替りに家中の者を置れける。國府の臺の合戰には。此城の者共。不殘下總へ行て明城にて置きければ。小田原衆。國府の臺の合戰に打勝。その勢ひに此城へも。北條方より番手を置きたりけり。其時里見右近殿。山本清兵衛之丞。山田佐右衛門。堀江。板倉抔指添馳向へは。城の番士ともは。みな小田原へ引返しけり(ナシイ)。

一永祿七年の合戰の事。少弼と大膳里見殿と兩士大將にて。義明公の御手下にての合戰にも。又は里見一分の合戰にも。度々其名を顯す。天下に隱れなき人々なり。然る間。安房。上總をは旗本に被成。下總を兩人にたまはる。天下は不知。小田原は打從へん事。案の内なるに。亂世の習にて。入道殿此人々大勢ならは。却て敵となるへきかと。心の置るゝゆへに。正木は一門の事なれは。替るこゝろなけれとも。萬喜は緣者一通りにて。殊義堯公の御前も死去なさるゝ間。互ひにこゝろを疑ひて。よしみも薄くなりけり。是を小田原にて聞傳へ。内通の使を立。萬喜を樣々賴みけり。され共少弼。名に恥て今更里見殿に敵對すへきに非らす。◓只(何イ)知らぬ分にな

らはやとの返事也。小田原より是を悦ひ。樣々計略を廻らしけり。此故に永祿七年に。國府の臺の合戰には。北條方强みの付事三つなり。第一には案內撿見の者。萬喜へ來也。是より安房と上總の樣子を伺ひける。第二は兩虎二龍と名を得たる少弼と。里見殿と不和。第三には此便を得て。小田原衆能き時節と勇み進む事一倍なり。然とも此軍にも手合には討勝けり。敵取て返すへきとは知らす。油斷の所へ。敵取て返し。不意を攻られて味方打負けり。爰にていつものことく。兩士大將働給はゝ。又味方强なるへきに。萬喜早く引れけり。敵よりも矢一筋射かけさるに。いとゝ味方疑ふ心出來り。敗北に及ひけり。此時までも入道殿。先手衆に心ゆるし給はす。椎津合戰に高名したるものを勝て。馬乘武士になされて。萬喜と正木に付られける。然に此者とも。此度の敗北に萬喜に付たるものも。皆正木に附。兩大將を後殿として難なく引取せ申けり。去に依て。此者ともを皆御旗本衆に被成けり。此合戰には大膳の手にて討取たる敵あまた也。先方衆一人にて。一騎二騎五騎三騎不討ものはなかりける。大膳五十騎計り討給ふ。中に廿一騎は首を取て。中間共に持せ靜々と引れけり。北條方の謀には。上總の道筋を差塞き。是非とも大將を討取んと勵みけり。然共大膳はしんかりす。義弘公も所々にて取て返し。射手を揃へて敵を射落し。近付は斬捨て。入道殿に引給へは。小田原衆も人馬を休めて。重て攻よとて。國府の臺へ立歸り。陣を取て扣へたり。是迄も先非を捨て萬喜を賴み給はゝ。又下總を取返すへきに。彌中惡く成給へは。

萬喜も里見殿より亡されしと。小田原と一味す。ゆへに下總は扨置。結句池の和田の城をさへ攻めたりけり。國府の臺にて朝軍に討取所の兵には。遠山丹波守。富永三郎左衛門兩先手の大將。其外高木治部。中條出羽。太田越前。山角四郎左衛門尉を始として。手負死人千人程と云傳ふ。晩の合戰に。中山新藏。平澤源次(チシイ)。山名八郎。瀨川小平六。宮崎助六。其外小身(谷イ)は記に及はす。討るゝものは。正木彈正。萱野屋勝山也。小身は記すに及はす。

一永祿十年三船山合戰は。萬喜こ(をイ)の時は。小田原方となりけれと。名に恥て里見殿を攻る程の事はなし。但し里見より寄來るを待つよし。小田原へ内通あり。北條。是に力を得て。いさや佐貫の城を攻落し。押付て久留里へ寄せはやとて。小田原の大勢。西上總へ押寄る。大將は氏政なり。此度は太田兄弟。國府臺にて里見に心を通する由。陣中に風聞ありし身。はれに是非ともよく働んと。手の者と示し合て寄せける。城方には和田神助。木曾庄兵衛(右衛門イ)なとゝ云先手衆敵の案内見すまして歸り。君に申上くる様は。此度の合戰には。先手を押散し引返して陣を取。敵の在所を伏勢を以て中を割。前後より討たまへかしと申上る。大將聞し召。尤面白き手立なりとて。入道殿は城を堅め。義弘公は出陣也。先手は里見右京殿。大膳には百騎衆を差添。八幡山に伏勢に置れける。敵。三船山へ上り陣を取る。城方の者共。相近く成て鬨の聲を上にけり。矢軍はしまるとひとしく。右京亮の陣へ。太田源六かけ合せ戰けり。兩方疲れて後陣に讓り引退く。二陣のかけ合に。小田原方弱々と引返す。山の坂中まて。揚けたて

切崩さんとの謀なり。城方兼て心得。行く敵を長追せすして静り返り扣へたり。敵。是を見て。里見方の者共は。下總にて負軍して。臆病神付たるぞ。その上。正木一家も見へさるに。いさ攻かけんと云儘に。山上より攻寄する。あくまて敵に名を（を近イ）付て。大膳とある山陰より静々と討てかゝる。前には義弘公右京亮備を堅め待給ふ。寄手案に相違して少し色めく所へ。相圖を定めし事なれは。三方より攻立られ。寄手たまらす引退く。敵は案内を知らされは。難所々々にて討れけり中にも蓮沼にて餘り強く攻られて。沼の中へ押落され。爰にて大勢討れけり。敵の太田源六兄弟も。爰にて討死したりけり。敵の藤澤外記な木曾庄兵衛討つ。羽島藏人を味方の黒川權平討。中條（波イ）佐右衛門を味方の中里源右衛門討。黒田丹後をは正木大膳討つ。西條佐右衛門を正木新藏討。大勢の事なれは是を略す。勝鬨をつくりて引き。悦勇て歸りける。

一天正六年七月五日に。正木大膳謀反の事あらはれ。濱狄の城の城代角田丹後を討て。長狹迄斬て入る。岡本より討手の大勢向ふと聞へけれは。先つ引返して。上總に居る里見方の者を攻けり。去とも父大膳には。ことかはりて情もなく荒き人なれは。返り忠のもの有て。早く滅亡せり。大膳をは眞里谷又四郎一刀刺通し逃けれは。大膳追かけゝれとも。只中を透されければ。次第に弱りて腹掻切て死にけり。大膳。謀反を企つと風聞ありしは。天正五年の春の頃なり。其頃は小田原は。徳川。武田よりせはめられ。里見へ和睦の使來りたり。内々願ふ折柄なれは和睦し給ふ。天正五年の夏なり。加様になりゆく上

は。又萬喜をはしめ。他國より攻寄る事有へしとて。二男彌九郎殿。幸御母儀正木氏にてまし／＼。器量も諸人に勝れ給へは。則正木大膳と名乘らせ。軍大將になされ。度々功ある者には加增知行を給はり。武具兵粮を貯へ。用心隙なかりけり。

一里見九代の大合戰は。右に記す通り也。此外。少々の小せり合は記すに及はす。異本に久留里合戰ありといへとも。實の義に非す。池の和田の合戰の心得そこなひに云傳へたる事を。このころ作り入たりと見へたり。北條父子。永祿七年の勝軍に。力を得て。池の和田の城を攻る由にて。城を取卷て日數を經て。その內。久留里へ忍の(ナシイ)者を入て。謀をそしたりける。里見入道殿。是はいか樣味方に心替りのものありと思召。隱し番をすへ置。池の和田の方より通る者を。夜々搦捕る事四五(度イ)人に及ひ。文持たる男一人搦捕見れは。味方より北條方への文なり。彼者と文とを入道殿へ披露す。入道殿さこそと宣ひて。彼者を拷問にかけ給へは白狀しけり。未同類もなく己か主一人也と申上る。卽彼を其夜にからめ捕て。首をはねられしかは。小田原の兩大將も。本國へひかれけり。里見方はおくれを取し折なれは。引行敵を追懸る迄もなく。互に合戰はなく。(文イ)彼池の和田にて矢軍少々有し計なり。天正七年の國府臺の合戰の類。惣て義明公の御下にての軍は。此本に記さす。又小田原陣は。太閤の旗先にての事なれは記さす。又關ケ原の軍の事も。家康公の御旗本にての事なれは。是又記さす。皆其家々の書にて見るへし。

一異本には。天文三年の稲村合戰に。義豐公。瀧田にて討死とあり。是は瀧田に御菩提所

の寺有るゆへに。此頃の人々。推量にて作りたるものなり。惣て異本には。先四代の事を相違して記す。後五代の事も。敵の書置たる北條五代記を用ひて書故に。味方を惡敷様に書たり。剰へ久留里合戰杯を作り入たり。久留里迄押つめは。北條五代記に委しく書置へきに。左はなし。又何そ佐貫を差置て。乘越て久留里を攻へきそ。旁以僞なり。又異本には。合戰殊に味方の軍兵の名を。義康公。忠義公の御代の名を書たり。(者もイ)尤安房にては祖父より父迄。同名を名乘ると有り。或は五代六代。同名を名乘る事もありと云へとも。殘らす皆先祖の名を付へき謂れなし。御前方の事は。御妾(手掛イ)の御前に直りたる事もあり。或は二番座の御前もあるへきなれは。異本にあるも實なるへし。又家老の義も。少し替りたる義もあるへし。

一德川里見の兩家は。父子をたつみし或子を害し候やうなる人倫の道に。大に違ひたるを嫌ひ。稻村合戰をさへ。實堯公(ナシイ)。義豐公の御恥なりとて。此事を他見せされとも。世間に澤山異本出る間。是非なく他見に實説をしるして知らするもの也。然間。此兩大將と忠義公を學へからすと申傳へたり。此外。七大將の分に。四五ケ國も切從へたりと罵る大將よりも。道理は益たりと知るへし。去は楠正成は南國の大將なれとも古今に隱れなき名將也。又慶長の家康公は。天下を治め日本を照らし給へとも。謙りて東を照すの神君と號す。然に不道の大將。めくら蛇に怖すとかや申す世話の如く。分にすき夥敷名乘りたて。能口にて名を求む。去は必利口の邦家をくつかへす事。むかしよりある習にて。大事の道を捨て彼不忠不孝の道を。人々學ふこ

そ悲しけれ。道より見れは。里見の七大將も。鏡とは成ましけれと。亂世の國主には好き大將と知るへし。その故は威勢のつよき大將にも恐るゝ事なく。衰へゆく公方の末を見立。(付し)天下の主と定め給ふまて。すなほに政道を被成候事。高家の威德と云へき也。

一里見忠義公御滅亡は。元和元年九月九日。國を御發足。同月中旬。伯耆の國へ御配流也。

右此本五冊者。房州國中明石村の住人里見與四郎義住。自先祖所持之。再三懇望借用而寫之者也。可秘藏耳。

以東京帝國大學藏本校合。且參照帝國圖書館(榊原芳野藏)本畢

里見九代記卷五終

續群書類從卷第六百十一

合戰部四十一

里見軍記

里見氏系圖

人王五十六代。清和天皇九代後胤。
新田大炊介三男號里見太郎義俊。

義康　足利判官。
義房　足利判官於宇治打死。
義清　足利矢田判官仁木細川先祖。
義兼　上總介。
義純　岩松畑山先祖。
義氏　左馬頭母北條時政女。

長氏。吉良先祖。
泰氏。宮内少輔號平石丸。
基氏。加子六郎加子先祖。家基。足利刑部少輔結城合戰打死。
家持。足利伊豫守。　義實。足利刑部大輔父任諫落行安房里見先祖。
政氏。足利讃岐守。　義成。父根元蓋里見今始胤。
尊氏。征夷將軍。　義通。里見上總介。
弁若丸。父謀叛時上洛之處浮島原被誅　實堯。里見上總介。
直冬　有子孫也。　義豐。里見太郎。
義詮。征夷將軍。　義堯。里見刑部大輔後入道號正五沙界
滿詮。　義弘。里見左馬頭。

基氏。從三位左馬頭。　義賴。里見左馬頭。
氏滿。左兵衛督。　義康。里見八郎。
滿兼。左兵衛佐。　忠義（四位侍從里見左馬頭）
持氏。從三位兵衛督京都ヲ輕故討手下入永安
寺自害。
義久。大若君父同心故入報國寺自害。

右里見九代之系圖尤相違上之力記處系圖悉相違于相見矣。

里見軍談記

於安房國里見家渡玉ヒシハ。人王五十六代清和天皇九代ノ後胤。新田大炊助義重ノ三男里見太郎義俊ノ末孫。足利等ノ侍ニ基氏ト云末葉有。彼カ嫡男ニ家基ト云者アリ。人王九拾六代光嚴院ノ御宇。正慶二年癸酉五月七日足利尊氏ハ六原ヲ攻落シ。同廿二日新田義貞ハ北條高時一族ヲ亡シ。先帝ヲ隱岐ノ島ヨリ復位シ奉故ニ尊氏征夷將軍ノ位ニ任ス。三男義詮其跡ヲツク。次ニ長子義滿次ニ長子義時次ニ長子義量。子孫スヘテ五代相續京都ノ將軍タリ而ルニ四男從三位左馬頭基氏。五男左衛門督氏滿。六男左衛門佐滿兼。賜官領職ヲ在住鎌倉而ニ義量早世スル故。遺跡ヲ叔父滿兼カ子持氏ト云者ニ可讓ト遺諸（託カ）シテ。人王百二代稱光院ノ御宇。正長元戊申正月十八日ニ薨玉フ。從帝賜謚號ヲ從一位將軍長德院。然ニ帝持氏

ヲ嫌玉ヒ。義滿ノ三男義教ヲ將軍ニ立玉フ。依之持氏憤不休。帝位ヲ背ク心出タリ。或日家臣上杉憲實ヲ召テ言シハ、我長子ノ賢王丸元服ノ比ニ至レリ。吾叔父基氏ヨリ次第シテ吾ニ至迄上洛シテ元服セシカトモ。此度ハ上洛ノ思ナシ。其故ハ天帝モ儀ヲ曲。恣ニ國土ヲ治メ玉フ也。吾モ亦左ノ如ク存ス。汝不知乎。古語ニモ君不足君。臣不足臣ト云ヘリ。何ソヤ一天ヲ育ム君王ノ儀トシテ。儀ヲ可曲ニアラス。故ニ京都ニ賴母子ナシ。吾思ニ。幸今日吉日ナレハ。先祖義家公ノ任例八幡宮ニテ元服サセントノ玉ヘハ。憲實承。御意ハ左有事ナレ𪜈。上ヲ輕シメ。私ヲ重ンスルハ逆也。只任世ニ上洛シ玉ハヽ家無難ナラン。是非上洛シ玉ヘト。再三諫ケレハ。持氏キツクハイニヤ思レケン。一子ヲ誘ヒ鶴岡ニ詣ケル。自神前ニテ冠禮ヲ行ヒ。大若公義久ト名付タリ。仍是上杉憲實蒙嫉ヲ。行末危ク思ヒ。忍テ都ヘ上リ。主君持氏恣ニ身ヲ持。臣カ諫言ヲ不用。上ヲ侮リ。下ヲ放逸ス。願クハ感言ヲ加ヘ玉ヘト云訴狀ヲ捧。故ニ將家奏シテ倫旨ヲ頂。幷ニ御教書ヲ諸國ニ廻シ。早軍勢ヲ催テ。小笠原信濃守政康。今川上總介範忠。兩大將ニテ鎌倉ニ發向ス。憲實モ隨之一味ス。持氏戰敗テ永安寺ニ入テ自害ス。子息義久ハ報國寺ニ入テ自害ス。持氏ノ子春王丸、安王丸トテモ有ケルカ。未幼稚ナレハ母ニ隨ヒ落行ケル。爰ニ下總國結城七郎朝氏ハ、鎌倉ヨリ國司ヲ蒙リ。結城ノ城主タリ、今度鎌倉ニテ足利トフ打負シ事無念ニ思ヒ。足利刑部少輔家基ヲ誘ヒ。日光山ニ到リ。隱置シ若君立ヲ迎取。重代ノ主君ナレハ取立申サハヤトテ。結城ノ城ヲカコンテ籠ケル。小笠原今川是ヲ聞。急結城ニ押寄。日夜戰程ニ。多勢ニ無勢ノ事ナレハ。城方散々ニ打敗ケル。

時ニ足利家基吾子義實ヲ諫テ。汝ハ三浦ノ方ヘ落行テ。木曾堀内ヲ隨身ニ付。朝氏家基諸共ニ打死コソシタリケレ。去程ニ城中ニ火起。打洩サレシ軍兵共。散々ニ敗北ス。持氏カ二人ノ子生捕レ都ヘ引上ル處ニ上意下テ。濃州タル井ノ道場ニテ二人共ニ誅セラレタリ。此時大合戰ニテ。城方一萬餘人打レタリ。扨足利刑部少輔家基ノ長子義實ハ。父ノ諫ニ隨ヒ。木曾馬之丞氏元。堀内藏人貞行ヲ隨身ニテ。三浦ノ方ヘ落玉フ。義實兩人ニ向ヒ申サレケルハ。結城ハ最早落タリト聞。若モ後ノ用心ニモナルヘキニ從之安房國エ渡ントテ。海人ヲ賴ミ。濱地ニソ下リ玉フ。海人承リ船ヲ浮ケレハ。折節順風ニテ房州白濱ト云處エ着ニケリ。其比當國ニ四人ノ郡主ヲ立置セ玉イテ國司ト定。民ヲ治メシム。平群郡ニハ安西式部太輔勝峰。勝山ニ住ス。安房郡ニハ金余左衛門介景春。神余ニ住ス。朝夷郡ニハ丸右近介元俊石堂谷ニ住ス。長狹郡ニハ東條左衛門督重永始ハ和泉ニ住シ。後ハ東條エ移ル。右ノ四人タカイニ示シ合。四郡ヲ守居ル處ニ。金余カ家臣山下左衛門ト云者アリ。主君景春ヲヒソカニ殺。己郡主トナリ。郡號ヲ山下郡ト名ツケ。放逸無慙ニ暮ス事隱レナシ。此事丸安西聞屆ケ。彼カ無道國ノ穢ナリトテ。山下ヲ討テ捨郡内ヲ配分スルニ付。互ニ口論出來。俄ニ合戰起。丸右近討負シカハ。金余カ浪人共皆一同ニ言合。義實公ヲ大將ト奉賴。木曾。堀内。金余カ勢ヲ集催ス處エ。三浦ヨリ志摩守義明ト云士渡來。義實ニ對面シ。今度結城合戰ニ足利ノ落人當國エ渡リシヨリ。急ニ合戰起ト承。小勢ナレトモ軍士二三百人引率シ。跡ヲシタイ渡リ候。無骨ナレトモ公ニ與力仕ント存追來候。吾先祖ハ往昔治承四年源氏ノ大將賴朝公。於伊豆國石橋山ニ旗

兵ヲ揚玉ヒシトキ。與力セシ三浦大助カ末孫也。頼朝方小勢ナレハ討負玉ヒ。主從七騎ニテ當國島崎ト云處エ渡玉フトカヤ。吾先祖大助ハ三浦衣笠ノ城ニテ自害セシ其時。關八州ノ諸士頼朝公ニ加勢シ。終ニ平氏ヲ亡シ玉ヲ。吾今先祖大助カ任例公カ爲ニ與力ヲ願ト云ケレハ。義實喜悦不淺處エ。丸カ浪人馳參シ　我々共ニ召具サレ候エカシト首ヲ地ニ付望ケル。義實聞召可然ト答玉イテ。先安西ヲ討取ント。三浦殿エハ堀内貞行ヲ指添。丸カ等ヲ引率スヘシ。吾手勢ニハ木曾氏元ト金余勢ヲ引具シテ。千代迄押寄テ勢兵揃見玉エハ。徒武者五百人。騎馬五十騎アリ。軍兵ノ中ヨリ根本兵七ト云者能出テ申樣。公ハ先例ニ叶ワシメ玉フ。昔源頼朝公平家退治ノ時。此處ニテ當國西ノ勢五十騎加勢仕リ。東ノ勢ヲ相待キ此橋ヲ五十騎橋ト名付玉フ。故ニ今ニ至迄申傳エ候

エハ公ニ隨フ騎馬ノ數昔ニカハラス候エハ。安房上總下總マテ御手ニ屬シ可申。目出度吉相見エ候ト愼テ申ケル。兩大將ハ聞召シ。忠アル彼カ祝言カナ。今日ヨリ馬ヲユルスト有ケレハ。難有ト御前ヲ立去程ニ。安西勝峰ハ此噪動ヲ聞ヨリモ。大勢ヲ引率シ。瀧田河原ニ出張シテ居タリシカ。如何ハ思ケン。甲ヲヌキ弦ヲハスシ。兩大將ノ御前ニ跪キ。某ハ勝山ニ住スル安西勝峰ト申者。自今以後御手ニ屬シ申サン爲降人ニ罷出候ト愼テ申ケル。兩將此由御覽シテ汝カ望ニ任スヘシ。其儀ニテ有ナラハ東條カ城エ先陣セヨ。畏リ候ト御前ヲ罷立。長狹エコソハ發向ス。東條左衛門重永ハ。上總國大田喜ノ正木彈正ト一味シテ。金山ノ城ニ楯籠リシカ。文安二年癸巳六月八日ニ合戰初リ。明ル九日ニ落城シタリ。東條重永自害セシカハ。正木彈正ハ小田喜ヲ指テソ引ニケル。同三

年甲午正月廿七日、小田喜ノ城ヲ押取卷、晝夜戰責ケレハ、城方散々ニ打敗、正木彈正降參シタリ、其ヨリ軍シツマリ白濱エ歸リ玉フ。足利義實申サレケルハ、吾十九歳ノ時當國エ渡リ。ワツカ五六年旅住スル處ニ。不思議ノ合戰ヲコリ。當國ヲ切取。今ハ上總マテ手ニ入ソメタリ。可然者尋サセ可妻ト有ケレハ。安西申上ル樣。上總國眞里谷カ娘ヲ御呼アリ可然ト云ケレハ。早速評議極レハ。ヤカテ迎取玉ヒ。御前ニソ定ケル。角テ添合不淺男子一人誕生ナサレシカハ。千歳ヲ祝ヒ。御名ヲ松若丸ト付玉フ。其ヨリ月日重レハ早十五歳ニ成玉フ。父義實申レケルハ。松若今ハ元服ノ比至レリ。吾ハ足利氏ヲ名乘レトモ。根元新田ノ三男里見ナリ。其子則足利ナレハ。吾父家甚ハ末葉故名乘ナリ。而ニ先祖ノ氏里見ヲ名乘者ナシ。今日ヨリ汝元服シテ。里見刑部大輔義成ト名乘ヘシト仰ケル。近習外樣ニ至迄。御祝儀甚賑ヒケル。角テ年月過シカハ。文明三年辛卯ノ春義實仰ラレケルハ。其方最早二十五歳、軍大將ニ可立比也。吾ハ五十ニ餘リヌレハ。少モ年ノ若キ内上總ノ國ヲ可攻也。早其用意ト有ケレハ、義成ハ聞召レ其儀ニテ有ナラハ。二手ニ成テ攻掛ヘシトノ玉ヘハ。義實ハ聞召シ。吾ハ眞里谷黨ノ内ニ。道觀入道ト云者アリ。彼峰上領ニ玉木ノ城ト名付テ。閉籠リ。領分ノ民ヲ恣ニ惱由聞傳エタリ。是ヲ可攻。其方ハ道觀カ一子眞里谷丹波ト云者。「刷海(ツクロウミ)ト云所ニ城郭カマエ居タリ。是ヲ攻ヨト既評儀定リテ。比ハ三月十五日玉木ノ城ヲ攻玉フニ。城中二百人計ソ見ニケル。然圧軍初リシカハ。首二三十切捨ラレ。不叶トヤ思ケン。殘ル雜人皆失タリ。道觀入道ヲ尋レ圧行方更ニ知レサレハ。城中ニ火ヲ掛テ。其ヨリ嗣海ノ城ヲ心掛、大峰通ヲ都合其勢

二百餘騎。正木彈正先手ニテ。血氣盛ノ若武者共。軍大鼓ヲ打タテ。吶々ト押ニケル。亦一方ノ義成公安西勝峰先手ニテ。ミヤウガネ迄押寄玉フ。爰ニ丹波カ家臣佐久間藤内ト云者。出張シテ居タリ。安西申ヤウ。彼ハ大方海陸兵ノ關守ナルヘシ。軍神ノ血祭ニ箭軍共仕レ。必刀汚スナト下知シ玉エハ。軍兵共指詰メ引取射間ニ。忍ノ者ヲツカワシテ。敵ノ案内ヲ窺セミルニ。鋸山ニ防勢ヲ隱シ置。外ニ人不見候ト申上レハ。義成公今夜ハ陳所ニ烽タヤスナトノ玉ヒテ。軍兵ヲ引率シ。ヒソカニ船ヲ催シテ。金谷エ上。後ヨリ攻玉エハ。一戰ニモ不向シテ皆散々ニ迯失タリ。早旦ニ成シカハ。剛海城ヲ押取卷。鬨ノ聲ヲ擧ニケル。而ルニ眞里谷入道ハ。昨日ノ軍ニ討負。漸ニ逃來リ。丹波ト内談窮ツヽ。里見ノ方エ使者ヲ立テ。兼テ承及候。里見家ハ文武兼備ノ由。誠ニテ有ナラハ。此處ノ躰一時ノ間ニ百首ノ詠歌ニツラヌ玉ハヽ。降參イタシ。御旗下ニ可附ト書狀認メ。峯上次郎淸春ニ持セ遣シケリ。淸春里見ノ前ニ跪キ。是ハ此處ノ城主眞里谷丹波カ使者ニテ候ト。彼一通ヲ指出シテソ歸ケル。大將ハ御覽シテ。彼ラカ有樣軍シテハ叶フマシト。無外ニ城ヲ渡ンヨリ。只望ヲ掛テ命ヲ助リ。旗下ニ付ヘキト云タクミナラン。淺間シキ士ノ振舞カナ。ヨシ〳〵命ヲ助ケ取センソ。サ有ハ皆々思々ニ聯ヨトソ仰ケリ。

是ニハ第一二三ノミ留ム。外ニヒラカナ一冊アリ。

大將ノ御詠歌

里ヲ見ヨハケシキ春ノ山嵐ハヲツクロフミ
ニサハラサリケリ

世ヲフルマテトフロウ坂ト聞トキハ行來ノ
人ノ夜半ノタヨリカ

討モセス討セモセサル旅人ノ百首ノ望ツラ
子マイラス
トアソハシケル。

去程ニ軍勢共丹波カ有樣承リ。是非ナクモ望シト打笑テソ連子ケル。彼是取合テ。丹波カ方エ送ラレケル。丹波親子ハソレヨリモ。降人ニコソ出ニケル。カヽル處。御父義實公山路ヲ傳付玉フ。義成公右ノ次第ヲ語ラレケル。義實公ハ聞召其儀ニテ有ナラハ。軍兵ヲ休ンタメ。先此度ハ引歸シ重テ長南ヲ可攻トテ。白濱エコソ歸ラルヽ。同文明三八月ニハ。久留里上總介ヲ討取。萬喜勝浦池ノ和田。眞里谷窪田東金佐貫椎津等ノ城。不殘御手ニ屬スレハ。義成公申サレケルハ。今度安房上總兩國ヲ攻落シケルモ。三浦殿ノ與力故也。三浦祉家殿ニハ。安西カ才覺ニテ本國ヨリ妻女ヲ呼御子アリ。吾ハ未タ妻アラネハ。末ノ賴母子如何セン。爰ニ萬喜カ先祖ハ加子六郎ト聞ク。加子ハ足利ノ末孫ナレハ。根元里見足利ハ父子ナリ。然ハ彼カ娘ヲ迎取。室女ト定メ申サント有ケレハ。木曾堀内承リ。ヤカテ迎取ニケル。角テ御寵愛不淺。若君誕生ナサレケル。御名ヲ里見上總介義通ト付玉フ。次又弟君出生アレハ。義成仰出サルヽハ。子共段々成長ス。城一ケ處ニテ叶フマシ。普請セヨトノ玉ヘハ。其ヨリ稻村山ヲ見立。文明十八年丙午六月釿立ソ始ケル。然ニ去ル文安三小田喜ノ正木ヲ討ショリ。三浦義明父子ヲハ安西ニ執權サセ。安西カ城外田町ト云所ニ。御殿ヲ立。後見仕シカ。安西膝峰老衰シテ七十九歲ニテ相果ケル。其後ハ吾後見セシカ。義明公去甲辰七十二ニテ薨玉フ。扨上總合戰ニ七年肝イリ候テ。六七年心休ム處ニ。義明公ニハ別レ。吾父義實ノ御目ニ掛ント存ル城モ。父ノ老シテ在ハ。心元ナク思ト御申成ケ

ル。然ニ御父義實公モ。長享二戊申四月七日七十二ニテ閉眼シ玉フ。其後稻村城モ六年ヲ歷テ延德三辛亥夏成就セリ。又宮本山ヲ見立サセ。隱居城トテ普請アリ。其後明應二年四月五日ニ。下總國ヲ可攻トテ三浦社家公ト云合。兩大將ニテ下總國木ノ內判官左安ガ城ヲ。三千餘騎ニテ押取卷。鬨ノ聲ヲソアゲニケル。城中ニハ兼テ用心シケル故。兩方互ニ入亂。四月六日ノ四ツ時ヨリ。夜ノ五ツマテ切立ラレ。城方過半ニ討レケル。其夜ノ手負夥シ。相殘リシ雜人共何國トモナク逃散タリ。木ノ內判官左安ハ。嗅仕損シタリ口惜ヤト。腹カキ破テ相果玉フ。兩大將御覽シテ。早々城ヲ燒捨ヨト下知シ玉エハ。只一時ノ煙トコソハ成ニケリ。義成公言ヒケルハ。木ノ內鎌倉上杉憲實ユカリトテ。結城ノ城ヲ落テヨリ以來。下總ノ國司ト成シモ。上杉カ才覺故ナリ。結城落城モ早五十餘年ナリ。親子共ニ二代ノ國司。今ハ煙ノ中ノ眞黑々ノ黑シトハ成タリ。アレ〳〵見給エ吾父祖亡靈心氣ヲ晴シ成佛シ玉エト。御廻向有コソ理リ也。大將重テ言ヒケルハ。香取ニ末葉田家カ殘タリ。先此度ハ歸ントテ。安房ノ國エソ歸ラル、。其程ニ上總下總兩國ノ武士。里見公ヲ大將ニ奉定。又三浦殿ヲハ御弓ノ八幡ニ御殿ヲ立。兩國ノ武士共圍繞渴仰シ奉ル。角テ五六年御繁榮ノ上ニ。若君誕生ナサレケル。三浦太郎社家ト名付玉フ。扨又義成公下總ヨリ御歸リ。直ニ新城エ御入移徙悅ソ始ケル。其後永正二乙丑四月行年五十八ニテ薨シ玉フ。

第二　里見上總介義通公病死之事　在城稻村

義通公ハ。義成公ノ長子ニテ。器量骨柄人ニ超天晴武士ノ大將哉トホメサル者ハナケレドモ。惜哉幼若ノ比ヨリ固疾有テ。時分ヲ弁ス起發スル故。强キ御働キ不叶。勿論寒風ヲ厭ハセ玉

エトモ。大將ノ御身ナレハ。社家公諸共ニ。所々ノ合戰ニ出陣有テ。軍奉行ヲナサレケル。一子竹若丸ニハ中里源左衛門。本間八右衛門守職ニ付。宮本城ニ置玉フ。舍弟上總介實堯ヲハ十五歲ノ時ヨリ。今ニ上總國久留里ノ城代ニヲカル。扨義通公數年ノ御病氣積ケン。此度ノ御惱必死トヤ思シケン。久留里ノ城代實堯ヲ急キ呼ト仰ケル。則使者ヲ立ケレハ。ヤカテ渡城ソナサレケル。大將御悅喜不淺。御枕元エ召レツツ。其外家臣木曾。堀内。室ノ家老本間菅ノ谷ヲ御座近ク召玉ヒ。我數年ノ持病。今度ハ惱嚴ク醫藥祈誓モ可及樣ナシ。存命今夜ヲマタスト思フ也。我滅テ後。竹若十五歲ニ及マテ。實堯此方エ引移リ。城中ヲ守。國民ニ成敗ヲ加エ。竹若成長イタシナハ。安上兩國ノ大將ト定。相違ナク渡サレヨ。其後ハ久留里ニ成ㇳ。宮本ニナリㇳ。實堯ノ心任ニ住玉エ。兩所ノ家老憐ニ開ケト仰ノ言ハ最後ニテ。行年三十八歲ニテ永正十七庚辰二月朔日薨シ玉フ。

第三　里見上總介實堯公

實堯公ハ義成公ノ二男ナレハ。十五歲ノ時ヨリ久留里城代ニ置レシカ。兄義通逝去セラレテヨリ稻村ノ城主ト成。安房上總兩國ノ大將タリ。其比天下大ニ亂テ。京都將軍ニハ大津坂本ノ邊ニ發向ナサレ。關東ニテハ北條家ノ若者他國マテ切込由。專ニ風聞イタス故。大將仰出サレケルハ。北條カ事皆聞ツラン。國ニ入テハ叶マシ。イサ打立テヤ兵共。先萬喜ハ勝浦東金勢ヲ引率シ。三浦殿ノ防ニ御弓マテ向ハレヨ。當國勢ハ殘ナク。里見家ノ軍法トモ早々取積濟出セト。幣振立下知シ玉エハ。正木安西ヲ初トシテ。急ケヤ急ケト下知シケレハ。究竟ノ海族共旗マイト押立テ。浪風ニヒルカヘシ。拍子ヲ蹈テ押程ニ。三浦ノ沖ニソ着玉フ。案ニ不

遠北條方ト相見エテ。數百艘擧リ寄、勢揃シテ居タリケリ。正木安西是ヲ見テ。アレ射潰セト下知スレハ。血氣盛ノ若武者共。弓押取テ射程ニ。已軍ソ始リケル。早本陣近ク我ケレハ。大將實尭御覽シテ。ソレ軍法ヨト仰セラル。心得タリト云ナカラ。大力ノ兵共舟底ヨリ踊リ出、大石材木投掛レハ舟人モニ打破レ。滓ト成テ失ニケリ。殘シ舟ハ是ヲ見テ。我先ニト漕ニクル。味方ノ手勢共ヨリモ。臀カ島ニ陳ヲ取。軍士共ヲ休ラル。然ニ俄ニ西風烈シクシテ。伊豆ノ沖ヨリクル浪ハ雪ノ山ノ如ク也。大將ハ御覽シテ。天ノ惠モ有ヘキニ。先此度ハ引ケヤトテ。安房ノ國エ歸ラル、。同大永六年五月。大將御出サル、ハ。去年三浦合戰ニ北條方ニテ軍大將ト呼ハレシ。芳賀。淸水。内藤ナト、云武士一人ナリモ討サル故。又當年モハヒコル由聞傳エタリ。口惜サ無念ニ思フ。今度ハ何國迄モ追掛押詰討ヘキソ。早打立ト仰ケル。正木安西承リ。其儀ニテ有ナラハ上總勢ヲ指添。彼ラヲハ臀カ島ニテ相待ヘシ。時刻ノヒテハ叶マシ。軍法道具揃ナハ。船漕出セト下知スレハ。水主梶取承リ。櫓拍子揃テ漕出ス。扨北條方ノ手立ニハ。里見方ノ大力ヲ捉落ス方便カヤ。熊手鳶口突棒捩股綟掛鎗ナトヲ持セ。雜人ハラヲ小陰ニ置。又侍シキ者ニハ甲冑ヲ帶シ。鎗長刀ヲヒラメカセ。例ノ陣場エ漕寄ケル。里見方ハ是ヲ見テ。アレ〱見タカ旁ヨ日暮マテハ遠矢ヲ射ヨ。時分ヲ待テ相圖セン。故ニ弓取共船ヲ遙ニ漕退テ。遠矢ヲ射テソ待タリケリ。早誰彼ノ時ナレハ。大將御出サル、ハ。彼士侍今コソト下知シ玉ヘハ。船底ヨリ。燒人形ヲ取出シ。舟梁ニ立並ヘ。舟押カクレハ案ノ如ク。北條方サア大力カ出タルトテ長柄ノ道具指伸テ。人形ヲコソ攻ニケル。海族共ハ心得テ

テ。吶々聲ニテ押寄ケル時分ハヨシト窺見テ。大力共舟底ヨリ大石材木。取揚々々投込ケレハ。舟人共微塵粉灰ニナリニケル。此勢ヒニ肝ヲ消シ。側ナル舟ニ飛移リ。蹈外シテ落ルモ有。舟蹈返シカフル人。臥タル舟ノ數ニ乘。振エワナヽク有樣ハ。目モ當ラレヌ風情也。扨海原ヲ詠レハ。手負死人破船モ。血シホニ染テ流シハ。立田ノ紅葉山風ニ吹散サレシ如ク也。母衣旗纏寄太鼓浪ニユラレテ洗濯ス。掛ル處ヘ上總勢按ニ按テソ押來ル。大將ハ御覽シテ最早多勢ニ成ヌルソ。何方マテモ追掛ヨト。陸地ヲ指テ急キケル。大將仰出サルヽハ。暫時扣ヨ兵共。北條カ逃道ハ大佛道ニ有ヘキニ。扇カ谷エ引ケルハ如何樣子細可有トテ。究竟ノ兵ヲ六七人勝立。山影ニ隱置。相圖次第ニ可出ト下知シ玉ヒテ。夫ヨリモ且ク休ミ御座ス。如案北條方按ニ按テソ押寄ル。大將御覽シ相圖ノ太

鼓ヲ打セ玉ヘハ。隱レシ勢一度ニトツト掛寄ハ。溜モ不合北條方指扣ユル氣色モナク小田原指テ引ニケル。掛ル處ニ敵ノ火カ味方ノ火カ。其分ハ不知トモ八幡宮ニ火起テ。社内不殘燒上ル。大將御覽シ。掛ル時節ニ源家ノ氏神燒ル事是不吉也。イサ本國エ歸ントテ。安房ノ國エ歸ラルヽ。或日軍ニ立シ者共ヲ不殘御前エ召出サレ。今度兩年ノ合戰ニ少モヒケヲ不取ハ。皆ノ働拔群故ソ。分々ニ隨テ知行加增ヲ與ヘン。最早事靜ニモ可成ヌ。皆々氣遣有マシト仰ニアツトリヤウセウシ皆一同ニ罷立。角テ六七年モ過ケレハ。世間豐カニテ戶サヽヌ御代トソ悅ケル。天文癸巳七月廿七日ノ夜。家老黨召集メ。涼ミノ會ヲ成サレケル。茶ノ會酒宴畢テ後。吾兄義通逝去ヨリ此城ニ移リ。未心モ落付サルニ北條方蔓ル故。兩年ノ戰心ニ隙ナカリシカ。打隨エテ六七年心靜ニ成ケルニ。

見義通ノ遺言ニハ。竹若十五歳ニ成ナラハ。兩國ヲ渡セトナリ。早竹若モ元服シテ義豐ト云間。當年ニハ兩國ノ大將トシテ。武運長久ノ祭禮ヲ可行ト思ハ如何ト仰ラル。面々ハ承リ。誠ニ仁ノ道タルヘシト。皆一同ニ手ヲ付頭ヲ低テソ申ケル。然ニ宮本ニ御座ス義豐公會合ノ事有トテ。近習外樣ノ家中共エ廻文ヲ遣サル。一人トテモ缺斷ナク。廿七日ノ日暮ニハ皆々御前ニ相詰ケル。君仰出サレケルハ。其方タチモ知ル通吾幼稚ノ時ヨリ中里源左衛門。本間八右衛門守職ニテ。此城ニ在住スル處。不運カナ七歳ニテ父ニヲクシトキ、御最後ニ叔父實堯ヲ召レ。並ニ家臣木曾。堀内。母之家老菅谷本間ヲ近付テ。竹若元服致シナハ。兩國ヲ渡サル、筈。四人ノ家老證據人ニテ御遺言ナサレシニ。吾元服シテヨリ已來ハ北條家ハ蔓ラス國ニ騷動アラサレハ。疾ニモ可渡所ニ。吾廿ニ成ヌルニ。一向其沙汰ナキ事ハ。面々何ト思ト間セ玉エハ。堀内新左衛門。本間刑部左衛門。中里源左衛門。眞田大學。勝山隼人。鎌田孫六ヲ始トシテ。一坐ノ者共言上申ス。サレハ去ル大永兩年三浦合戰ニ。古來ヨリノ百騎頭正木。安西。山田。黒川抔カ働キ同樣ニ思召ヤラ賞祿同樣ニ下サレ。古來ノ者共計功アル樣ニ思召ケレ𪜈サノミ功有トハ不見　又軍法ノ分別ハ里見代々ノ智略ニテ。他家ノ不知秘密𪜈。海陸ノ戰ニハ時々ニ隨テ替ル事。御代々ノ軍書ニ詳ナリ。面レハ已々カ手柄𪜈思ハレス。實堯公ノ御近習ナレハ。偏ニ彼カ手柄ト成タリ　又軍ノ色ヲ見テ。軍法ヲシカクルハ　誰眼ニモ見ユルヿ。扨粉骨ヲ碎キ。身命ヲ投打テ。敵ヲ討首帳ニ記セシ者共ニハ。當坐ノ褒美。或ハ役替ナトニテアイシライ。新來ノ若者ハ少モ悦不申候。今ノ躰ニテハ中々國渡ノ事可有𪜈不存。

若御渡ノ心有ナラハ、二三年以前ニモ御理可有筈。今ニ其沙汰ナキ事ハ。上總久留里ニ在ス義堯ニ可讓乃ミニヤ候ハン。是非押寄テ弓矢ニテ御取返シ遊ハセトロ々ニ申ケル。其中ニ木曾修理之助。楠六左衛門申サレケルハ、各ノ申サル、事一理アリ。乍去大將ノ身トシテ。賤モ兒ノ遺言ヲヒルカヘシ。吾子ニ與ントハ士民ノナス事ニモ非ス。思フニ今日本國中惣亂ニテ。彼此ニ合戰發リ。末ノ落居不知時節。御一門ニテ合戰アラハ。相模下總ノ敵共起リ來ラハ、御滅亡シ玉ハン事眼前ノ事タルヘシ。吾々カ存スルハ。稻村殿エ幾度モ諫言仕ルヘシ。若又不叶トテモ。叔父ニテ在ハ弓箭ニテハ向ハレマシ。是非合戰ハ御止アレト。詞揃ヘテ申ケル。義豐公聞シ召。其方達カ諫言ヲ不用ニハアラネトモ。喩叔父ニテ在ストテ。父ノ遺言無ニナスハ。敵人ニハアラサルカ。稻村エ諫言スルニ不及。今日迄沙汰ナキハ子細有ヘキ事ナルソ。但シ此義豐ハ兩國ノ大將ニハ不足ナルト思テカ。或ハ家臣抔ヲ侮テノ事ナルカ。兎角樣子有ヘキニ。只押寄ヨト有ケレハ。木曾修理之助重テ申ケルハ。押寄テ討取事手ノ内ニ握ル如クナレ圧。上總ヨリハ義堯ノ寄玉ハンハ必定也。而レハ万喜。眞谷里黨オソイ加ルヘシ。其ノミナラヌ。房總ニテ討洩シタル浪人ノ子。幾年月ヲ送リ兼。御代ノ替ヲ待受テ。御奉公ニ出モ有。末野武士テ居ルモアリ。彼ラ一味スルナラハ。多勢ニ無勢ノ戰ニテ。味方敗軍左モナクハ。叔父甥圧ニ亡サレ。他人ノ爲ニ身ヲ捨玉ハン事眼前ト存ル間。軍ハ御止下サレト。涙ヲ流シ申ケル。義豐公聞シ召。譯モナキ言事カナ。父ノ敵ヲ討後ハ。如何樣ニ成トテモ何ソヤ夫ヲ可恐ト。御立腹甚シク。イサ打立ヌカ兵ト。大音聲ニテ言エハ。本ヨリ進ム若者共。中

ニモ中里源太郎。三浦半四郎ヲ初トシテ。早勢揃シタリケリ。扨稲村ノ實堯公。正木安西ニ仰付ラル、ハ。近日ニ吉日ヲ撰ヒ。兩國ヲ可渡祝義ノ用意致セヨト仰ラル、處エ。俄ニ押寄太皷ヲ打。簱胡簶批キ立鬨ノ聲ヲ上ニケル。正木安西是ヲ聞。是ハ何事ヤト櫓ニ上リ。何者ナルソ夜中ニ及狼藉ナル騷音。其名ヲ名乗ト呼ハツタリ。大勢ノ中ヨリモ駒一陣ニカケ出シ。鐙蹈張鞍盖ニツ、立上リ。大音擧テ伺様。我ヲ誰トヤ思ケン。宮本城ニ隠ナキ中里源太郎金次也。吾君義豊公廿歳ニナラセ玉エ𪜈。國ヲ渡サヌ大欲ノ叔父實堯ヲ恨ン爲。今夜限ニ寄ラレタリ。覺悟アレト呼ハツタリ。城中ノ人々ハ扨ハ相違ノ出來タリヤ。夫物ノ具ヨ打物ヨト上ヲ下エト返シケル。挑燈松明振立テ。早城中エ亂入。上下人馬隔ナク。嗅ヤ〳〵ト切込ケル。城中ノ者共ハ甲冑ヲ帶スル間モナク。立タル儘ノ素肌ニテ。打物提渡合。爰ヲ最後ト戰ヒケル。城方ノ討死ハ正木藏人。安西人部。黑川外記。忍足左京。堀江新藏。板倉源内。本田勝右衛門。山田左衛門。峰上小平次。柴田勘平。究竟ノ若者共素肌故討レタリ。其外手負數不知。大將實堯御覽シテ。最早是迄。是非ナキト御自害成サレケル。惜哉今少シ義豊公靜ニ候ハ、。互ニ目出度渡ラセ玉フヘキニ。五十歳ヲ一生ト成シ玉ヲモ。中里源太郎。三浦半四郎抔ニ天魔カ入替リ。君ニ滅亡進シ故。上下士民ニ至迄。叔父ヲ亡ス罪人ハ。吾身ヲ亡ス基也。追付見ヨヤ亡ヘシト。口々ニコソ囁キケル。

第四世　里見太郎義豊公　在城始ハ宮本後ハ稲村

義豊公ハ義通公ノ長子ニテ御座シケレ𪜈。叔父實堯公恣ナル不儀有テ。去七月廿七日ノ夜軍ニ負。御自害ナサレケレハ。稲村ノ城主トナラレ。安房州上總・兩國ノ大將ト奉仰ケル。或日義豊公

仰付ラレケルハ。此度ノ様子久留里義堯聞ナラハ。定テ押寄來ルヘシ。城々ヲ圍ヘトテ。宮本ノ城ヘハ宮本宮內。鎌田孫六。稻村ニハ木曾修理之助。眞田三河丞。勝山ニハ大野宇兵衛。勝山隼人ヲ指置ル。龍崎外記。楠六左衛門兩人ニハ加茂坂ニ炬ヲ燒セ指置ル。箇樣ニ八月初ヨリ十二月末方迄用心シテ待ケレ𪜈。義堯公ノ方ヨリハ其沙汰更ニナカリケリ。

第五世　里見刑部太輔義堯公　在城久留里

義堯公ハ實堯公ノ長子ニテ。久留里ノ城ニ在シケルカ。天文三甲午四月四日ニ家臣正木。山田。安西。山本。多賀抔ヲ御前ニ召レ。去七月廿七日ノ夜。父實堯公甥ノ義豐ニ亡サレテヨリ以來。一日片時憤休事ナシ。早速本望逹セント思シカ𪜈。彼カ心ヲ考ルニ。道ヲ不知畜生ナレハ。イツ迄生テモ同シ事。一度ハ吾手ニ掛ル者ト思故。今日迄助シカ。流石(サスガ)父ノ敵ナレハ。共ニ天ヲ戴クハ不孝ノ罪ノ重キ故。假令畜生タリトテモ。明日打立。安房國エ押寄ン。皆々如何ト問玉エハ。言ヲカヘス者モナク皆々アツト領掌ス。暫有テ。多賀。山田。今日迄ノ御延引。不思儀ト存候ナリ。禮儀不知ハ畜生也。義豐公ハ幼少ノ時ヨリ。實堯公後見ト成玉ヒテ。城中ハ不及申。兩國ノ侍エ政道嚴ク申付ラレ。義豐カ代ニ成テモ。今ノ通ニ勤ヨト。常々仰付ラレタリ。叔父ヲ亡シ玉フ事天罸争カ遁ルヘキ。現在ハ扨置未來永劫罪人也ト申セハ。正木。安西申ニハ。得恩不知ハ畜生ニモ劣レリ。古語ニモ鳩ハ三枝ノ禮烏ハ反哺ノ孝有トヤ。而ハ今ノ義豐公ハ禽獸ニモ劣タル人也。何ノ緣ニテ武士ノ子トハ生玉フカヤ。房州ノ味方ヱモ此旨早ク知スヘシト。礒村エ早飛脚ヲ遣シケル。イサ打立ト下知スレハ。四月五日ノ明方ニ房州エト押寄ケル。安房ニ殘シ味方ノ勢。

礒村迄馳來。上總勢ニ出會テ義豐公ハ久留里ヨリ押寄玉フト聞届。昨夜軍勢手配シテ、君ノ御留主ヲネラハント。山道行ント評定極リ候ト大息切テソ訴ケル。未圍ノ内ナルヘシ。是ヨリ直ニ山傳、平久里通エ御出アレト申上レハ。去ハトテ礒村ヨリ打越テ明テ六日ノ早旦ニ犬掛村ニテ兩方逢互ニ名乘抜合火花ヲ散シ戰タリ、稻村方敗軍ニテ先手ニ騷々シク、中里源太。三浦半四郎。菅谷彌八木曾兄弟モ討レケル。頭立タル若者共討レケレハ、其外ノ軍兵共過半討レテ見エケレハ雜兵共ハ是ヲ見テ。皆散々ニ迯失ケル、堀内新左衛門。先引玉エ、吾借ト稻村指テソ引退ク、扨勝山ヤ宮本ハ瀧田ニ合戰起ルト聞。吾モ々々ト馳來防キ留ント戰エ𪜈多勢ニ無勢ノ事ナレハ。切𪜈突𪜈事𪜈セス。烈ク攻テソ掛リケル。新手ノ者共制込々陣狩シテ切テ拔。勝山宮本見合テ、稻村指テソ引退ク。勝代タル上總勢透モアラセス攻寄ケル、龍崎外記、楠六左衛門。鳥坂ヨリ取テ返シ。叫キ喚ンテ切掛レハ。寄手ハ引分テ中ヲ開テ通シケル。其ヨリ寄手モ陣取テ扣タリ、城方モ暫勢ヲ休メケル、扨城方ノ者共ハ。手分ニ所々エ出シ者、皆々一所ニ集テ。四月六日ノ晝時ヨリ。夜ノ四迄戰テ大勢城方討レケル、一騎當千ノ若武者共。犬掛ニテ討ルレハ。替リ戰者モナシ、雜兵共ヲ割入ント、掛廻テ下知スレ𪜈。イツシカ迯失テ。一人モ見エサレハ。大將ヲ始トシ。モウ討死ヨリ外ハナシ。イサ討死ト云儘ニ、宮本宮内、鎌田孫六。眞田三河勝山隼人。大野宇兵衛、龍崎外記。楠六左衛門。本間刑部。安西民部。堀内新左衛門。木曾修理之助、其外近習外様ノ侍最期ノ軍今ナリト。狐塚ニ陣取レシ義堯公ノ本陣エ、一度ニトツト押寄、テ、鯨波ヲソ上ニケル。本陣ニハ万喜カ黨油斷

セヌソ掛合ヨト聲々ニ呼ツタリ。城方ハ是ヲ聞惡キ渠ラカ高慢カナ。出物見セント云儘ニ。當ルヲ幸ト切込テ。手負死人ヲ乘越飛越。切立ラレテ寄手ノ方不叶トヤ思ケン。四五町計引退ク。傍ラニハ萬喜。正木一處ニ成テ扣シカ。返シテ掛ル城方ノ中ヲ割テ押隔。其間ニ義堯公備ヲナシテ置玉フ城方ハ是ヲ見テ。今ハ敵ニ嫌ナシ。討死今ソト云儘ニ。東西南北切テヌケ切カカリ。暫ク戰ヒ颯ト引テ見テアレハ。二十騎計ニ成ニケル。其内ニ十餘騎ハ手負也。早寄手ノ内ヨリモ案内知タル若者共。城中エ忍入テ火ヲ付タリ。人々君ノ躰ヲ見テ深手數多負玉フ。此有樣ニテ叶マシ。御腹召レト山陰エ切ヌケ。君ヲ鎌田ニ渡シツヽ。迹ヨリ來ル敵ヲハ。一度ニ渹ト割コンテ。四方エハツト追散ス。鎌田ハ君ヲ引立テ肩ニ掛。山陰ニテ御切腹サセ奉リ。御介錯仕御首ヲ隱シ置。山陰ヨリ躍出。修理三河ニ打向ヒ。君ハ御生害成サレタリ。イサ暇乞ノ軍セント。三人並テ切テ出。數十人切倒シタリ。修理三河見合テ側エ颯ト引。サラハ鎌田跡ヨリ來レト。兩人並テ腹掻破テ相果タリ。寄手ノ者共是ヲ見テ。首ヲ取ントカケ來ヲ。鎌田悅ヒ閻魔殿エノ土產ニセント。二人抓テ引倒シ。兩脇ニ引挾ミ瀧川ニソ飛込タリ。私云。昔ヨリ云傳テ瀧川ノ淀ニ鎌田カ淵ト今ニアリ。河伯在テ往來ノ人ヲナトル。扨此合戰ニ敵方ニ名ヲ得タル兵。安西右京。山本清六。宅間藤内。早川權之丞。御子神藏之助。宇津宮彥次其外數多討レタリ。天文三甲午年四月六日ノ夜。義豐公行年二十一歲ニテ薨シ玉フ。其年中秋義堯公世ノ順逆ヲ案シ玉イテ。法躰セハヤト思召。御一門諸家中エ御咄アリケレハ。皆々申上ケルハ。昔ヨリ大將ノ御法躰樣々有ト雖。多クハ不吉也。士行儀ヲ苦ニ思ヒ。法躰ノ身ト成ケレドモ。誠ノ法躰ニアラネハ。惡行日々ニ增者ア

リ、喩ハ平ノ淸盛。相摸ノ高時抔カ如。又大將ノ位高モサノミト思テ法躰スルモアリ。昔ヲ云ハ多田滿仲公。近クハ北條時賴也。如此樣々ナレ氏。何モ年長ケノ思出ナリ。君ハ未三十ニ不足在テ。何ナル事ヲカ思召。御法躰ノ御心掛ソ。サリトハ苦勞ニ存ルト皆一同ニ申ケル。義堯公聞召。去ハ吾義豐ヲ討シ事。父ノ敵是非モナシ。而氏嫡子迄亡シテ。吾大將ト成テ侈ン事。人倫ノ道ニ非ス。天道サソヤ惡ミ玉ハント思ナリ。又吾大將ニテ侈リナハ。天罸ヲ蒙。兩國共ニ他人ニ取レナハ。先祖エ對シテ不孝ナリ。自今已後ハ義弘ヲ大將ニ定ムヘシ。皆々忠孝勵マレト。御淚ヲ流玉フニソ。一座ノ人々過ト計ニ感心シ。共ニ泪ヲ流ケル。其後御法躰成サレテ。里見入道泰叟正五沙彌ト奉號。御年三十一歲ノ時也。天文三甲午十月其後ハ軍有ト雖。只後見ノ爲ニ出陣アレ氏。大將ヲハ義弘公ニ御定メ成サレケリ。扨方々ノ城々ニハ。先キノ如ク小田喜ニハ正木大膳太夫。勝浦ニハ正木左近督。池和田ニハ多賀藏人助。万喜正爾ハ万喜ニ住居セラレタリ。下總國巢田家黨ノ押ニハ。木曾ト鳥山トヲ置タリ。稻村合戰ノ已後ハ。龍崎。菅谷。安西等ハ海邊ノ城ニ置レタリ。五年ノ內世間靜謐ニ治リシカ。天文七年戊戌十月北條氏康。氏政父子謀叛ヲ起シ。下總國鴻ノ臺ニ大勢ヲ出シケル。三浦社家公嫡子祐家公。又里見入道。同義弘公兩大將ニテ發向シ戰玉フ。御運ノ末カ。祐家公北條淺右衛門督カ鑓先ニテ咽ト胸トヲ扒サカレ。御年四十ヲ最後トシ。朝ノ雲ニ入玉フ。御父社家公深手數多負玉ヒ。世ニ賴ナク思召。御自害成サレケル。御年七十三歲ニテ老武者ナレハ道理也。早負軍ニ見ケレハ里見方モ敗北シタリ。是ヨリモ下總ノ三浦ノ跡ハ潰レタリ、上總モ少々北條方ノ

手下ニ付。小田原方ト成ニケル。而ニ上總國椎津ノ城主眞里谷信政小田原方ト成テ。十年餘一味同心シタリ。天文二十壬子ノ秋里見ヲ亡サン爲小田原エ内通シ。謀事ヲ廻ラシケレハ。小田原ヨリ万喜ト信政カ方エ一味同心ノ褒物トテ。三浦殿ノ持添ノ知行ヲ過半分テ宛フタリ。殘處ヲハ小田原エ取ラントシタリケル。万喜心ニ思樣。義弘ハ我娘ノ養育シタル君ナレハ。譬眞ノ孫ニテナクモ。義弘ハ三浦社家公ノ婿ナレハ。一度孫ト名乘。一度大將ト仰キシ甲斐モナク。今更捨テ敵北條ニ組セン事。思モヨラヌ巧カナ。吾正木ト示合セ。信政ヲ打殺シ。三浦殿ノ知行取返シ。里見殿エ付申サント。萬喜正木一味ニナリ。入道殿ヲ後見トシ。義弘公ヲ大將トシ。同十一月四日ニ椎津ノ城ヲ押取卷閧ノ聲ヲ上ニケル。扨小田原ヨリ常ニ用心ノ爲ニトテ。信政方エ軍兵多ク付置タリ。去ニ依テ信政ハ勢强ク思ツヽ。掛レヨ引ケヨト下知ヲナシ。朝ノ四ヨリ夜ノ四迄息ヲモツカス戰タリ。里見方房州勢モ暫來レハ。新手ノ者共立替リ入替リ。獅子象虎ノ勢ヲナシ。大勢ヲ撓倒セハ。手ニ立者ハナカリケリ。城方ニテモ打物名人ト沙汰シタル侍共。第一ニハ武田左近。同四郎。同次郎。同丹波。第二眞里谷源三郎。同宇右衛門丞。同左京。高山左門。西川彥六究竟ノ兵共按ニ按テ出ケレハ枕ヲ並テ討レタリ。正木ノ手ニテ堀江。新藤。富田。大澤。杉岡。西畑討レタリ。万喜ノ手ニテ西野。山口。原田。金澤討レタリ。信政今ハ詮方ナク。己ト城ニ火ヲ掛テ。腹搔破テ死タリケリ。此戰ニ城方ニテ一千三百人ノ死人。手負ハ其數不知。是ヨリ已後永祿七年マテ十二年ノ間。上總ハ不及申。下總モ大方里見ノ手下ニ屬スルモ万喜正木ノ功ソカシ。扨是ヨリモ三國共ニ靜レハ。最早氣遣

ヒ有マシト民百姓ニ至迄悦事限リナシ。

第六　里見左馬頭義弘公　在城上總國佐貫

義弘公ハ義堯入道ノ長子ニテ万喜少弼ノ孫也。然ルニ入道ハ父ノ敵ナレハ。從弟ナレ𪜈義豐ヲ討テ大將ノ位ヲ義弘ニ讓リ玉ヒケリ。而ニ去ル五年已前ニ椎津ノ城主眞里谷信政ヲ討シ時。北條カ手勢大ニ討レ。其上巧シ知行里見ニ取ラレ。先念ニヤ思ヒケン。亦上總地エ押寄ヘキ由風聞ス。大將義弘公言樣彼カ不寄先ニ此方ヨリ向ントテ。弘治二丙辰年三月十日大將軍ニハ義弘公。入道殿ハ後見ニテ。万喜正木與カニテ都合其勢五千余騎軍船數艘ニ取乘テ。船印宗印風ニマカセテヒルカヘシ。三浦ノ沖エソ漕出ス。北條方ハ是ヲ聞。此方ヨリ可寄ニ却テ寄ル嬉平ト。督カ島ニ陳取テ。氏康氏政父子共ニ。手ノ者數多引具シテ。矢シリヲ揃テ待居タリ。味方ノ大將御覽シテ。アレ射テ取レト下知シ玉エハ。若モ々々ト弓押取指取引詰射ル程ニ。亂軍ニ成ニケル。敵モ味方モ船寄テ。互ニ飛乘飛移リ。命限リニ戰ケル。里見方ノ侍ニ東條六郎。木曾又五郎。水練ノ名人ニテ力量人ニスクレシ故。敵ノ中ニ能武者ト見クルヲハ引組テ海底ニ溺沈ミ。兩人共ニ死タルカト思エハ。忽浮出ル事二三度也。北條勢ハ是ヲ見テ。未浮出シト矢尻ヲ揃射矢ハ雨ノ降如。大將軍ハ御覽シテ。アレ討スナト下知シ玉エハ。味方ノ勢立寄テ。舟底ヨリ材木大石取上々々投掛レハ。船押退テ逃ニケル。六郎モ又五郎モ遙ノ外ニ浮ニケル。沖ノ軍ハ味方ノ勝利。是ヨリモ島ニ上リ。本陳ヲ攻落サン。イサコイ來レト上ル處ニ。味方ノ侍龍崎掃部足ノ甲ヲ折目掛テ射通サレ。馬ヨリモ眞逆サマニ動ト落死シタル躰ニモテナシテ。密ニ矢ヲ拔捨タリ敵方ハ是ヲ見テ首ヲ取ント二人進ンテ蹲來

ヲムツクト見テ太刀拔持。一人ハ切伏。一人ハ手ヲ負セ立歸ントスル處エ。又五人カケ來レハ。足立庄九郎主從二人馳合。二人ヲハ切殺シ。三人ハ手ヲ負セ引退ントスル處エ。敵大勢ニテ馳來リ。已ニ危ク見エケレハ。味方大勢割入テ。四方エハツト追散ス。大將ト正木トハ透モアラセス攻玉エハ。氏康父子ハコラエ兼。島陰ヨリ船ニ乘。小田原指テ逃ニケル。小田原方ノ中ニテモ。得タル者計首帳ニ付ラレケル。北條淺右衛門督。芳賀新左衛門。成田佐右衛門。今津加右衛門右四人ハ万喜ノ手ニテ討レタリ。佐藤新次郎。荒川小八。山角右門。西條半彌。仲條小六右五人ハ正木ノ手ニテ討レタリ。

鈴木藤九郎ヲ黑川隼人カ討。海老名小次郎ヲ佐久間喜八カ討。尻崎加助ヲ宅間萬吉カ討。金澤七郎ヲ早川右門カ討。已上十三人ハ北條ニテ鬼神ト云レシ者共也。其外ノハ武者ハ記ニ不及。此度ノ戰ニ手負死人七百余人ト風聞ス。其內ニ味方モ有ン。角テ軍靜リケレハ。三浦ノ新井ナル城ヲ修復シテ。家中ノ者共六七十人。替々番手ニ付置玉フ也。扨又椎津合戰ニ高名シタル兵ハ。勝リ立。馬鞍ヲ御免ニテ万喜ト正木ニ付玉フ。兩人ヲハ房總兩國ノ旗本ニナサレ。則下總國ヲ領ニ給リケル。去程ニ諸人心ニ思フ樣。追付小田原ヲ討隨エ玉ハン事。鏡ニ掛テ見ル如シト悅勇ム事限ナシ。然ニ入道殿ノ北ノ方去年十月十八日御逝去シ玉ヒシヨリ。入道殿如何シ玉フラン。瓢度心ニ思召ケルハ。扨モ此間ハ夥キ味方カナ。箇樣ニ大勢ニテハ却テ敵ト成モ難計。併正木ハ母方ノ祖父ナレハ。孫彥ニ敵對ハ有マシ。万喜ハ緣者一片ニテ心ハ他人ナレハ。舅吾ハ婿義弘ハ孫ナレ𪜈惡心ノ者勸ルヤ。此程ノ万喜カ面色何トカ由味

薄々ト見ソ。但シ娘死ケレハ元ノ他人ト思テカ、更ニ合點ユカヌ抔ト疑心ヲ起サレケル。万喜角トハ露不知。或日渡城ノ折柄ニ。入道殿ノ御顔ツク〲ト詠居テ何事カ有ヤラン。入道殿ノ御心晴々敷モ不相見。但吾娘ハ死ヌ。今ハ孫計其身ハ昔ノ他人ナルニ。節々ノ渡城ハ先益ノ事ト思テカ。此方ノ心ニハ、喩娘死タリ𪜈。大將軍ノ事ナレハ。禮儀ハ不亂。勿論孫ナレハ。何ソ見放スヘケン。去トハ大將ノ御心ニ不似合カナト。互ニ疑ヒ染々トノ咄モナシ。近習ノ侍此躰ヲ見テ。扨々カヽル亂世ニ入道殿ニハ如何成天魔入シソヤ。何𪜈笑止千萬ト一門家臣ヲ始トシ、囁蓁シ暮シケリ。扨督カ島合戰以後何事ナク治リ　最早九年過行ケリ。北條方無念ニヤ思ケン。永祿七年甲子夏。万喜ノ方エ内通シテ。承ハ此程ハ里見ト不和ノ由實說ナラハ北條家ト一味シテ。鴻ノ臺ニテ戰玉エト。人ヲ以再三進ケル　少弼ノ返答ニハ。里見ト不和ナリトテ。戰程ノ事ニナシ。別テ不和ニテモナシ。敵ニモ味方ニモ付心ナシ、吾ハ吾ニテ居ル迄也。ト答ラレタリ。北條ハ悦勇ミ。龍虎鬼神ト云レタル。里見万喜カ各別ノ心行終ニハ吾黨ニ可付ソ。イサ打立ト云儘ニ。大軍ヲ催テ鴻ノ臺ニ出ニケル。入道殿。義弘公。正木万喜諸共ニ陳場ヲ指テ急カルヽ。氏康父子ハ是ヲ見テ。ヤレ掛合ヨト下知スレハ。敵モ味方モ入亂、火花ヲ散シテ戰ヒケル。里見方ハ軍ニ馴シ兵ヲ先手ニ立テ。五十騎余討倒シ。颯ト引テ見玉エハ。万喜ハ引テ不見ハ。敵ヨリ矢一筋モ射掛サレハ。味方不思議ニ思ツヽ、万喜ニ付ラレシ旗本共。正木ニ引付。入道父子ヲ陳狩シテ引取セ申ケリ。正木大膳ハ討取シ首ヲ集。名ヲ得タル首。廿許撰出シ。中間ニ持セ。優々ト引ニケル。氏康父子ハ是ヲ見テ。上總ノ道筋立

塞キ。是非共大將ヲ討留ントヒシメキケル。而𪜈大膳ハ陳狩シ。義弘公ハ軍勢ヲ揃ヘ。彼コ此ヨリ取テ返シ。追散シ。近付者ハ切テ捨。入道殿ヲ何事ナク引セ申。義弘公ト大膳ハ。一所ニナリシツ〳〵トコソ引レケル。先朝軍ニ勝タルニ。首帳ニ付ヨト仰ラル。敵方ニテ軍大將先ニ進ミシ遠山丹波。富永三郎左衛門尉。其外名アル武士ハ高木治部。山角越前。仲條出羽。太田四郎左衛門。池沼三河。濱名近江。已上六騎。其外二騎正木ノ太刀先也。其余ハ記ニ不及。惣テ一千余人ノ手負死人ト申也。其内ニ味方モアラン。三百人不相見。小田原方モ鴻ノ臺エ引退キ。陳取テ扣。人馬ノ勞ヲ休メケル。里見方モ道ノ程廿余町引退キ夜中ヨリ戰ヒニ勞レシ人馬休ントテ陳取テ御坐シケリ。正木多賀ノ物語ニ。扨小田原方ハ椎津合戰ニ加勢シ。又三浦ノ船軍モ三度。鴻ノ臺モ今度ト二度。兩處五度ノ合戰ニ能兵ハ殘ラス討レ。今ハ太田兄弟計侍頭ト相見タリ。最早無勢ノ事ナレハ。安房上總エハ向マシ。今宵ハ人馬ノ勞ヲ休メ。早旦ニ成ナラハ。本國エ歸。陳中觸ヲソ廻サレケル。侍共ハ是ヲ聞。暫勞ヲ休ント鎧甲ヲ脫捨テ。打物ヲ枕トシ。前後モ不知高鼾。本陳方モ御悽キト相見テ。御酒宴ナサレ御坐ス。然ニ敵ヨリ遠目ヲ付置。時分ハヨシト云儘ニ。取テ反シ。本陳ヲ心掛。亂入切立ル。寢入切ツタル兵共。太刀音ニ目ヲ覺シ。物ノ具ヨ打物ヨト一具ノ鎧ニ二三人取付テ我ヨ人ヨトセリ合ケル。甲計テ出ルモ有。鎧着テカラ手テ出ル者モアリ。敵味方入亂レ上ヲ下エト返シツヽ。互ニ人ヲ見分スシテ。平切ニ討程ニ。同士討大勢切リタリ。ソノ中ニモ中山新藏。平澤源太。山名八郎。瀨川小平六。宮崎助六カレラハ小田原ニテ今四天王一人武者抔ト呼レシカ

枕ヲ並テ討レケル。扨味方ニテハ正木彈正。多賀新九郎。菅谷源次郎。本間佐助抔カ討レケレハ。入道父子モ不叶シテ。久留里エ引玉フ。北條方ハ勝ニ乘テ追カケ來リ。池ノ和田ノ城ヲ押取卷。箭軍ヶ始ツヽ。日數ヲ重テ居タリケル。入道不思儀ニ思召。何樣味方ノ中ニ心替リ出來タルカト氣ヲ付。池ノ和田ノ方エ通者ヲハ搦ヨト仰付ラレケル。依之處々ニ隱番人ヲ居、夜々通者ヲハ改ケル。或夜文持タル男一人通リケル。文ツラヲ見ルニ味方ヨリ北條方エノ上書也。忽搦テ入道殿エ引ケル。入道殿聞召。扨社ト早々强問有ケレハ。末同類モ無之。某カ主人計ニ候ト含。直ニ白訟ス。ヤカテ主從二人首ヲ刎。獄門ニ掛ラレケレハ。小田原ノ兩大將本國エ引ニケル。里見方ハ後ヲ取シ時ナレハ。遂行敵ヲ追カクル迄モナシトテ。互ニ止テ戰ハナシ。池ノ和田ニテ矢軍有シ迄也。扨里見方ハ朝軍ニ勝タル故。敵取テ可返トハ氣カ不付。人馬カ勞シ不便サニ。緩々休シ油斷サヨト齒咬ヲナセ𪜈甲斐ナシ。小田原エ押寄テ打果サント思エ𪜈。下總ハ北條カ手下ニ成。万喜ハ不和ニテ不賴。上總モ大方万喜方。今ハ正木大膳計也。口惜キ事共也。我小勢ニ成タルヲ。小田原方ハ目下ニ見テ寄來ルハ必定也。油斷スルナト仰ラル。扨万喜ハ小田原組ナレハ。里見カ待由內通ス。氏康力ヲ得テ。イサヤ上總エ押寄。先佐貫ヲ蹈落シ。直ニ久留里エ押寄ヘシ。今度ハヲクレ里見カ事ナレハ。己ト敗テ亡ヘシ。我向フ迄モナシ。氏政計テ埒明トテ。其勢都テ三千餘騎。永祿十丁卯二月廿日小田原ヲ打立テ。西上總エソ押ニケル。明ル廿一日佐貫ニソツキニケル。御船山ノ爲躰。半腹下ハ石山ニテ峨々ト從テ一行ノ細道ニテ九曲ノ難所アリ。是社究竟ノ陳所ソト。頂臺ニ攀リ旗纒ヒル

カエシ陳取テ扣ケル。城方是ヲ見テ。和田甚助ト木曾庄兵衛ハ名譽ノ賢見分者。先ツカワシテ敵ノ樣子ヲ見セラル丶。兩人見受ツ丶立歸テ申上ケルハ。今度ノ合戰ニハ先手ノ軍兵雜人奴ヲハ大勢ニテ追散シ。返テ陳ヲ取ナラハ定テ敵カ進掛ラン。其時横合ヨリ防勢ヲ以中ヲ割分。前後ヨリ討玉エト申ケル。義堯入道ハ城ヲ固メテ御在ス。正木大膳ハ百騎黨ヲ引牽シ。八幡山ニ隱シ置防勢ニ定ラル。義弘公ヲ大將ニテ陳場ニ出サセ玉ヒケル。寄手ノ大將氏政ハ。時延ルソ打立ト幣振テ忿ケル。城方ノ者共ハ敵近付ヲ待受テ。同鬨ヲ合ケル。矢軍初ルト等ク小田原ニテノ功ノ者。太田源七兄弟ハ左京介ノ陳所エ。眞一文字ニ蹲込テ。秘術ヲ盡シ戰ケルカ。更ニ勝負ハ付サリケリ。兩方勞テ颯ト引。後陳ニソ讓ケル。二陳ノ掛合寄手弱々ト引返。味方是ヲ見テエ丶推シタリ方々

ヲ彼カ風情ハ石山ノ坂中迄追蹲サセ。取テ返シ細道ニテ切崩サンノ計事ソヤ。長追スルナ者共ト。靜立テ見テ居タリ。北條ハ是ヲ見テ里見ハ鴻ノ臺ノ軍ニ負。今度ハ臆病神ニ引サレテ只轟々ト立居ソ。剩正木大膳ニモ見捨ラル丶ヤ。正木黨ハ一人モ不見ソ追カケ計ト下知スレハ。我劣ラシト寄來ル。敵ニ俛マテ斧ヲ付。手元近ク寄付テ。大膳ハ是ニアリト。大岩ノ陰ヨリムク々々ト湧出。向フ者ノ眞額小額左右ノ鋍逃者ノ綅着。高股胴ノ骨。大袈裟。小袈裟。車切。唐竹割ト云者ニ。四尺二寸ノ大太刀ニ三尺八寸ノ指添ヲ左右ニ持テ斬立ラレ。將棊倒ニ折重リ。死人ノ山ヲ築ケル。ハツシテ逃ル奴ヲハ義弘公ト左京介備ヲ直シテ待掛タリ。寄手ハ案ニ相違シテ。心空クイ所エ味方相圖ノ勢共ヲ。三方ヨリ攻カクレハ引退ケ𪜈案內不知難ニテ大勢討レテ死シタリケル。中ニ

モ蕪沼ノ涯ニテ餘リ强ク攻ラレテ沼ノ中エ追入ラレ。爰ニテ大勢討レタリ。太田源六兄弟モ此處ニテ討レケル。北條氏政是ヲ見テ。手ノ者四五人引具シテ。白泡ハマセ捨策打テ小田原エソ逃走ル。扨討取シ首共ノ中頭立タル者計首帳ニ記ケル。

敵方之首

藤澤外記ヲ木曾庄兵衛討。羽嶋藏人ヲ正木大膳太夫討。黑田丹波ヲ黑川權平討。西條佐右衛門ヲ正木新藏討。仲條佐右衛門ヲ中黑源左衛門討。平塚原次郎ヲ南條小六郎討。

右六人ハ五十騎組ノ頭也。此外ハ夥シケレドモ小身者ヲハ不記。此度ハ手負死人ノ惣高二千二十八人也。其中ニ五百三人味方也。大將義弘公副將軍正木大膳太夫同左京介ヲ始トシ。本望達シ目出度トテ勝鬨ヲ洶ト上テ悅勇。久留里エソ歸ラル丶。入道殿仰ニハ。安房上總下總半國三浦四十余郷切隨シ所ニ。去ル鴻ノ臺ノ夕軍ニ。油斷セシ故下總ハ小田原ニ取ラレ。上總モ万喜方ハ小田原ニ成。無念ニ思所ニ。剩三浦新井ノ城ニ付置タル番手ノ者迄。鴻ノ臺エ一人モ不來テ。跡アキ城ト成シ故。小田原ヨリ番手ヲ居置トヤ。返々腹立也。下總トハ各別也。一ケ所モ取レテハ不叶。早々番手ヲ遣シ。小田原ノ番人等攫出シテ番サセヨ。ト眼色替テ仰ラル。義弘公モ家臣ラモ其事ニ氣カ不付シテ。皆々誤夫々番人ヨト謨ル丶。里見右近丞。山本清兵衛。山田佐右衛門。堀江板倉抔ヲ遣シケレハ。城ノ者共何ノ子細ナク小田原エ引タリケリ。依之安房ト上總半國。三浦四十余郷計也。里見ノ持分減少シタリ。△或時家中ノ者共。君ノ御前ニテ申上ケルハ。此程小田原ヨリ万喜ノ方エ人ヲ遣シ。安房上總ノ道筋西面ノ海邊案内撿見仕ル由。別而房州正木浦ト多

田良浦ニ氣ヲ付ル由。百姓ヲ能見知申聞候間。御用心有ラレカシト申上ル。義弘公聞召シ。實ニ左モ有ントテ。入道殿エ披露アル。入道殿聞シ召。我兼テ心ニ存ル處ニ扨コソ能告タリ。房州ノ浦邊ニ城微シ。內々岡本ノ城ニ城ヲ築度思シニ幸也。用意アレト仰ラル。從其岡本兵部少輔氏元城地ヲ見立テ。元龜元庚午ノ夏御普請ソ始ケル。同三年壬申夏成就シタリ。次ニ洲崎瀧山ミヤウカ子三ケ處ニ番手ヲ居置。軍船カ亂妨取ノ舟カ來ル時ハ。相圖ノ太鼓ヲ鳴シ。百姓町人等財寶妻子ヲ山ニ入隱テ置。皆々立合打殺トノ仰付也。其時手柄シタル者共ニハ。田畑山林屋敷諸役等分々ニ應テ御褒美ヲ被下ケル。其後義弘公城一見ニ御出有シ道邊ニ。何ヤラ高札立テアルヲ御覽被成ケルニ。

福原ノ都人トハキ、ツレト年貢諸役ノシナノアシツヨ

トソ書タリケリ。後御歸有テ。田畑守方ノ代官福原信濃ヲ召レ。汝カ賄所ノ年貢取付十年已來ノ分ヲ持參セヨト仰ケル。福原カ思ニハ大將ノ御身トシテイナ事ヲ望玉フト存ナカラ。仰ナレハ持參シタリ。君御覽スルニ。其所ノ田畑帳中ト下ノ土舛也。繩水帳ヲ御覽スルニ。余鄕ノ次也。然ニ年貢ノ取付ト引合スレハ夥キ高免也。剩每年ノ免狀同俵石也。夫故潰百姓多出來テ中間奉公或ハ傭取ニナル也。福原ヲハ代官職ヲ押上ラレ。無役ニテ御扶持計ニテ置ケル。外ニモ惡事有カト其所ノ役人共ニ御穿鑿ナサレケレモ。其分ニテ外ニハ無故。後ニ善七郎ト云惣領ヲ奉公ニ出サレタリ。此福原ハ京ノ者也（己カ生所ヲ名字トナス）。如是御代々御慈悲深キ君方故。土民在家ノ男女迄。御本名ヲ不唱シテ。唯万年君樣ト申ケリ。其御慈悲ト申ハ。幸ニアラヌ義豐公ナレモ。父ノ敵ナレハ是非ニ不及

討玉フ。嫡子方ヲ討ハ不孝ナリトテ。爲訪菩提ヲ未御年若シテ法躰ナサレ。今ハ入道樣ト計申ケル。其御子ナレハ。當君モ在家ノ者共ノ亂妨取ニ不合樣ニ。所々ニ番手ヲ被仰付。勝手爲暮ニハ田畑取納ヲ改ラル。貫萬年君ト云ハ尤也。扨其一兩年以前小田原ハ甲斐國武田信玄ニ追ラレ。難儀セシ故ニヤ北條氏康死タリ。又天正元癸酉ノ春ハ駿河ノ家康信玄ヲ亡テヨリ已後ハ。彌迫ラレ里見ト和睦シ。我娘ヲ義頼ノ妻トセハ。縁者關クナリ。末ノ爲ニモ成ントト思ヒ。使札ヲ認正月中旬ニ和睦ノ使者ヲ遣シケル。里見モ兼々思ニハカホト衰タル上ハ。万喜ヲ始或ハ他國ヨリ寄來ランモ不知。左モアル時ノ爲ニハ縁者トナリ。味方ノ廣コソヨシトテ。相違ナク返書ニ使者ヲ相添テ遣サレケル。氏政ハ悦六月中旬ニ岡本ニソ使者ヲ立。追付娘ヲ遣ハサントテ。先祝儀ヲ遣ケル。已ニ吉日ヲ定テ天正元癸酉六月廿八日ニ義頼婚禮ナサレケル。扨岡本ニ城ヲ立。所々ニ番手ヲ居テ已後北條家モ靜亂妨取モ止ヌ。扨北條カ里見ト和睦ノキモ信玄ト家康ニ逼ラレテ。向後ノ爲ノ縁組ナランカ。里見モ万喜カ心ヲ兼々思。北條ト一味セハ我ニ怨ハ有マシト思。婚禮ヲセラレタラン。扨又義堯入道モ歲霜已ニ六十三。天正二甲戌六月朔日逝去ナラセ玉フ也。義弘公ハ又久留里エソ御歸ナサレテ。佐貫ニハ替々番人ヲ三十騎宛ツケテ置玉フ。

第七世　里見太郎義頼公　在城房州岡本

義頼公ハ義弘公ノ長男ニテ。岡本ニ新城立テ已來ハ。房州ノ騷動ヲ靜サセ玉イケル。然ニ正木左京介ノ娘妾ト也。若君二人御坐ス。一人ハ千壽丸トテ十五歲ニ成玉フ。二男彌九郎丸トテ十二歲ニナラセ玉フ。或時義頼公久留里渡城ノ折節ニ。義弘公ノ御前ニテ。某カ次男彌九

郎ハ少年ニ候得共。器量骨柄人ニ越。大力ニテ候間。彼ヲハ軍大將ニシ。幸彼カ母ハ正木氏ナレハ。安房ノ正木大膳ト名乘セテハ如何候ハント御問有ハ。父上聞召可然ト有ケレハ。其ヨリ安房ノ正木大膳ト社名乘ケル。追付南條ノ鳥山カ城ヲ取立テ。可爲得先當分ハ藤井ノ屋敷ニ居住セヨト仰付ラレタリ。而ニ天正五年ノ春。上總國小田木ノ正木大膳謀叛ヲ企ル由風聞スレ圧。未露顯故。義弘公御扣油斷ナク在ス故。何ノ沙汰ハナカリシカ。然ニ天正六戊寅五月廿日俄ニ御病氣受玉ヒ。行年四十九歳ニテ薨シ玉フソ是非モナキ。其ヨリ後上總ニハ大將ノ御住宅ハナカリシ也。或日義頼公家臣。安西。角田。岡本。山木ヲ召レ。是ヨリ南ニ城ナシ。舘山ノ古城跡昔平ノ判官貞政ト云シ者居住セシト承。如何サマ能景山ソヤ。前ハ洋々タル大海ニテ兩嶋アリ。而モ廻船着岸ノ津也。八幡浦ニハ富士山ノ影ヲ移シ。夕日ニ輝ク躰ヲ見テ。鏡カ浦トハ名付タリ。向ヲ遙ニ見渡ハ。三浦小田原眼前也。亦南北ヨリ軍船來事モ居ナカヲ見レハ。用心ヨシ。來陽普請企ト家臣ニ仰付ラレタリ。然ニ上總ノ正木大膳ハ義弘公御逝去ヲ聞ヨリモ。七月五日ニ打立テ。早房州地エ切込テ。濱荻村轡崎ノ城代。角田丹波ヲ討落シ。長狹マテ切テ入。岡本ヨリモ若武者共大勢討手向ト聞テ引返シ。上總ニ有合里見方ヲ攻ニケル。然圧強惡無道ノ僻者ナレハ。父彈正ニハ遙ニ劣。慳貪放逸無慈悲故。家臣郎等返忠ノ者多シ。其故眞里谷又四郎ト云者ニ。眞唯中ヲ指通サレ。爰ヲヤラシト追躡ケル。大事ノ肝サキ通サレテ。心ト足ト相違シテ。次第々々ニ弱リケル。又四郎立歸リ。嗟々未死カト笑玉エハ。ヱヽ口惜ヤト云儘ニ。腹攪破テ死タリケル。是天道ノ憎カヤ。慳貪強勢無慈悲ノ業。積

々シ事ナルカ無故下郎ノ手ニ掛リ。無益ノ死ソ淺間敷。小田木大膳亡ヒテ後。四人ノ家老モ替ケル。山本。堀江。板倉。長谷川此四人也。角テ年月歴程ニ。天正十五丁亥十月廿六日義頼公行年四十五歳ノ夕部風ト共ニ曉ノ雲ニ隱レ玉ヒケル。

第八世　四位侍從里見左馬頭義康公　在城舘山

義康公ハ義頼公ノ嫡男ニテ織田信長ノ婿也。或日家臣四人ヲ召レ。父上ノ御願舘山ニ城ヲ可築由。セン家老等ニ仰付ラレシ處ニ。大膳謀叛ヲ起セシ故。今日迄延引セリ。御願可滿也ト。其ヨリ普請企。天正十八庚寅ノ夏普請成就シ。又大坂ノ城主大閤秀吉公小田原エ下リ玉ヒ。北條一族ヲ亡シ玉フ。里見義康旗下ナレハ小田原エ發向セラル。高名手柄有シ故。其時ノ御褒美ニ上總國ヲ賜リケル。其替地ニ三浦四十余郷ヲ上ラレ。依之又兩國ノ大將ト成玉フ。

其後慶長五庚子九月。徳川家康公濃州關ケ原ニオイテ凶賊ヲ亡シ玉イ。同八年癸卯ノ春家康公江戸ヨリ國替致トテ上總ヲ取上。鹿嶋ニテワツカ三万石出タリ。是ヨリモ里見家日夜ニ困窮勝リケル。關ケ原ノ合戰ニモ御發向ナサレナハ。如是ニ不可有ト近習外樣ノ諸侍歯カミヲナセ𪜈甲斐ソナキ。是ハ正シク家康憎ミ玉フ。其子細ハ。小田原合戰ノ時ハ大坂大閤ヨリ下置レシ知行處ナレハ。憎シト思エト難取上。今ハ征夷將軍ノ位ニ上リ玉フ故。關ケ原ノ合戰ニハ病氣故ニ不參ノ由。度々願ヒ玉エ𪜈。憎故ニ不聞分。終ニ上總ヲ取上玉フ無念千万ノ事也。ト君ヲ始一家中胸ヲ痛ヌ者ソナキ。君ハ此事御心ニ欝リシカ御病氣樣々變化シテ。今ハ醫モ不被及御年三十一歳ニテ。慶長八癸卯十一月十六日薨シ玉フソ無常ナル。

第九世　四位侍從里見忠義公　在城舘山

忠義公ハ御年九歳ノ冬。御父義康公ニ後レ玉フ故。家臣岡本。山本。堀江。坂倉四人後見シテ御守育テ奉。早十八歳ニ成セ玉エハ。母上四人ノ家老ヲ召レ。忠義モ生長ニテ婚禮ノ頃至レリ。而ニ織田相摸守氏長ハ。吾親類ノ事ナレハ。彼カ息女ヲ可妻。一家不離末々ノ頼ニモ成ヘキ事。皆々如何ト有ケレハ。是君ノ御爲ナラント皆々同意仕。頓テ迎取玉フ。御附人ニハ印藤采女正。同河内助兩人御前ノ近習タリ。角テ年月歷ル内ニ。別テ印藤采女正甚君ノ機嫌ニ入。出頭彌不淺レハ。古來ノ家臣諸侍頭ヲ可揚樣モナシ。而ニ慶長十七壬子ノ夏。舅相摸守殿エ鉄炮百挺送ラレシト。城中ノ諸侍聢ト誰モ不知處ニ。弓鉄炮ノ足輕共白砂エ不殘召出サレ。汝等ハ晝夜共嘯咄ヲスルト聞。重テモ有ナラハ。一々仕置致ソト水彈ニテ。人々ノ面エ水ヲ彈カセ玉フ。是鉄炮ノ事成ヘシ。加樣ニ威勢振舞テ皆々ノ口ヲ留ント云巧。是印藤カ謀事。兎角此城ニ長居セハ。必危事有ント。他國ヨリ渡シ者。大方浪人シタリケル。非人ハ國ノ費トテ。國中ノ非人共一人モ不殘殺シケル。カヽル惡事ヲ成テモ。古來ノ家老一言モ諫申事ナラネハ。身ノ行末ヲ思案シ。浪人致ス人モ有。少々ノ事ニモ立腹有テ。扶持離ルヽ人モ有。諸事采女カ業ナリトテ。牙ヲ嚙ヌ者ハナシ。ケ樣ニ御心持玉ハヽ。御代ハ如何有ンソト皆々片唾ヲ呑居タリケル。印藤カ才覺カ御先祖足利義實公鶴谷八幡宮エ奉納有シ寶劔ヲ（癸丑）八月上旬申下シ。守家カ打タル腰ノ物ヲ代リニ立サセ上玉エハ其夜鶴谷八幡宮震動スル事夥シ。而ニ甲寅年六月中旬ニ御城ノ堀ノ眞中ニ深サ二丈餘ノ所ニ稻一苞一夜ノ中ニ生出タリ。往來ノ諸人奇妙ニ思ヒ立留テ見物ス。日數廿日計過大キナル穗廿二本出タリ。七月下旬

迄有シカイツ樀ルトモナク終失ニケリ。又元和元丁卯正月元朝御祝儀ノ盃臺人モ障サルニ微塵ニ崩倒レタリト。御前ニ在シ頭衆御給仕計見シ事ナレハ。外ニハ隱ケリ。同五日ノ早旦ニ御臺所ノ釜唄（鳴カ）事夥シ。又十一日ノ御具足祝ノ刻座敷ノ中ニ有。大火鉢ノ炭火ニ。赤キ茸三ツ四ツ生タリ。近習家中至迄ケ樣ノ事ハ不吉トテ顯露ニハ不言也。同年八月上旬ニ家康公ヨリ。大膳殿エ國替ヲ可申付トノ御使者下リケレハ。早速出府致サレシニ。江戸ヨリ直ニ子細ナク。備前國エ預ケ人ト成玉フ。間モナク九月上旬ニ忠義公エ使者來リ。早速來着可有トノ事ナレハ。片時モ早ク急トテ。馬右王來左馬トテ黑白二疋ノ名馬アリ。何モ劣ヌ名馬ヲ引カセ。大手ノ坂迄御出アレハ。馬右王辻跌テ倒臥。忽ニ死タリケリ。又來左馬ニ御召有テ。晝夜ヲ不厭御急キ。八日ノ暮ニ屋敷エ到着ナサレ。御上エ樣子伺ハ。明ル九日御使者下リ。此方エ渡城ニ不及。伯耆國エ配流ニ申付ル也。所以ハ其舅相模守隱謀ノ企ニ。其方一味同心ニテ。鉄炮百挺迄ラルヽ由。露顯明白也。依之其方叔父大膳ヲハ。備前國エ預ント有ケレハ。忠義公ハ聞召シ。遏ト計ニ御色替リ見サセ玉フ。元和元年丁卯九月九日二十二歲ニテ里見一家沒落シ玉フナリ。

一。忠義公ノ御前樣。四歲ニ成セ玉フ姬君ト一所ニ。江戸代官町エ召寄ラレ。百俵ノ御扶持米賜テ御坐シカ。後ニハ姬君ハ守人ニ預置。鎌倉エ引込成サレ。比丘尼ニ成セ玉ヒケリ。

一。大膳ノ奥ミノ御前ト申ハ。生國美濃ナレハ藤井ヨリ直ニ本國エ歸ラル。

一。城中城外ノ諸侍普代相傳ノ者共ニハ。猿栖森ヲ伐荒サレシ如クニテ。彼處此處ニ吟イ行

シ有樣ハ。哀ト云ヘ愚カサヨ。子共持シ女房共。昔ニ今ハ引替テ。在家ノ者ノ雇ト成。日雇洗濯仕立物寒暑ヲ忍テ賃ヲ取。夫子共ヲ育ム躰。哀ト云ヨリ外ハナシ。

一。其後岩城ノ内藤左馬頭ト。小田喜ノ本田出雲守兩人ニテ。所々ノ城々ヲ破却ニ參ラレタリ。

一。忠義公御壯歲ニテ御坐スレハ。左遷ノ憂御泪明暮乾ク間モナシ。御氣イト、ウツモレ玉ヒ。御病ノ牀ニ付セ玉ヒ。印藤坂倉御看病仕リケレ共。次第ニ勞レサセ玉ヒ。終ニ元和八壬戌八月十九日。二十九歲ヲ一期トシ。謫居ノ夢ト成玉フ。印藤坂倉介錯シ。無常ノ煙ト成シ奉。御骨拾ヒ高野山ニ納メ。石碑ヲ建。本國エ歸リ。御菩提道場ニ位牌ヲ奉立。御追福ノ弔禮執行仕リ。天運トハ云ナカラ。哀成シ事共也。

安房國司里見家靈簿

先祖　生國下野足利郡
杖珠院殿建空興公居士　足利刑部少輔義實
長享二戊申四月七日　菩提寺白濱邑

里見第一　生國房州安房郡白濱邑
慰月院殿大幢勝公居士　里見刑部大輔義成
永正二乙丑四月十五日　菩提寺白濱邑

第二　生國同斷
天笑院殿高山正皓居士　里見上總介義通
永正十七庚辰二月朔日　菩提寺瀧田邑

第三　生國同斷
延命院殿一翁正源居士　里見上總介實堯
天文二癸巳七月廿七日
菩提寺始稻邑後移廟本折村

第四　生國房州稻邑
高岩院殿長義居士　里見太郎義豐
天文三甲午卯月四日

菩提寺瀧田邑天笑院今改高岩院ト

第五　生國上總須西領久留里邑
東陽院殿岱叟正五沙彌　里見刑部大輔義堯
天正二甲戌六月朔日　菩提寺本折邑

第六　生國同斷
瑞龍院殿在天高存居士　里見左馬頭義弘
天正六戊寅中夏廿日　菩提寺同斷

第七　生國同斷
大勢院殿勝岩泰英居士　里見太郎義頼
天正十五丁亥陽月廿六日　菩提寺本折邑

第八　生國房州岡本邑
龍讃院殿傑山芳英居士
四位侍從里見左馬頭義康
慶長八癸卯霜月十六日　菩提寺同斷

第九　生國同斷
雲晴院殿前拾遺心叟賢涼居士
四位侍從里見忠義
元和八壬戌中秋十九日　菩提寺同斷

跋書

予此書於記置。非可備他見儀。頃日名里見記。處々書出事如雲霧。披見。過半北條五代記書入。里見惡書。北條家之案書見。其故北條里見敵對。里見家無僞於書入事尤也。如是書皆北條方出矣。又或本見。里見落城後浪人之咄於聞。自分淺智以記有。其故如何。稻村合戰時。義豐瀧田討死書是大僞也。瀧田菩提寺故。推量自才覺取込仕業也矣。

或本曰。久留里有合戰書是大僞也。鴻臺軍時北條方池和田迄追蹲來。矢軍計。城取卷一兩日虛慮々々ト居故入道殿不思議思召。何樣味方內返忠者有。池和田通者穿鑿。遠目付置給。如案從味方敵組久留里城案內仕。忽搦捕首討梟掛給。北條子細無小田原引。如是久留里押寄事。

誠五代記悉可書事也。五代記其事不見。如此僞書記出。吾君之亡跡。讒言虛言。諸人讀聞。耳叢心顚倒。迚歸君迹少爲報恩。從父祖。普代相傳之家中。見聞處。眞僞集。後世人之胸臆入虛言僞書之泥土拂爲也。後見輩見此書。彼此辨眞僞。吾所生非他家。從祖父吾三代御恩澤之甘露水嘗者共也。故消君之戀跡。先君九代高德書集。以末世愚蒙皆引君之礜石以讒言虛說。鄙口押入。予見聞眞穴之騷靜云云。

于時　　　　　　　　浪人

寛永八辛未五月中旬　　　山田某筆記

此書根元。里見在世之家中。父子孫彥普代相傳武士。百騎黨頭山田遠江介云者之筆記云傳タリ。

年來事　里見元祖。義實公忠義公落城迄。百九十八年。忠義公落城以來寛保三年迄。百二十九年ニナル。

以宮內省圖書寮本謄寫校合畢

里見軍記終

續群書類從卷第六百十二

合戰部四十二

土氣古城再興傳來記

酒井小太郎定隆殿被レ出ニ奉公ニ事

上總國土氣城主元祖ハ酒井小太郎定隆ト申テ。智勇備文武達人也。元遠江國之住人ニメ。從ニ御一門ニ其時之公方足利義尙公ニ被レ成ニ御奉公。去レ共御知行少知ナル事ヲ無念被ニ思召ニ。御知行不レ殘御一門ニ御預ケ。主從四人ニテ關八州ヲ心懸。武者修行ニ被レ出。其時御供申セシハ。今ノ平山土佐守先祖ト。藤代佐渡守先祖ト。竹內出雲守先祖此三人ナリ。是出雲守中書殿ト樂之御事ナリ。妹聟成。曲輪ノ內ニ御住宅也。佐渡守ハ一歲土氣谷ニ被レ居候事モアリ。土佐守ハ土氣ノ內。知行ハ駒込村ニテ。藤榮惣治左衞門兩人ニテ知行ス。此三人先祖御供ニテ御出ノ頃ハ。康正二丙子年ト左門殿被レ仰。其時分關東殊ノ外成大亂ニテ。京都ノ公方者將軍義尙公關東鎌倉之公方ハ成氏公在ス。彼君エ罷出。君臣悅シ稽首シ。躊躇無ニ他事ニ給仕シ給ヒケルニ。其時ノ管領上杉右京亮憲忠ヲ討罰シ給フ所ニ。其家臣長尾景虎カ一族。佐ニ逆心ニ成氏公鎌倉ヲ落テ。御一家ノ御城ナレハ。古河城エ移ル。其時ニ定隆殿思召樣ハ。尤一度主從ノ約束ヲナシテヨリ已來。主ハ恩ヲ以テ。臣ハ忠ヲ以事ルコナレハ。主從ノ約ヲ違フ事。雖レ不レ有ニ勇士之道。我本國ヲ出シヨリ。君ニ仕ヘ忠ヲ盡サン爲ノミニハ非ス。名ヲ立家ヲモ發セン計也。今此君ニ奉レ仕。不レ達ニ本意ニ則根ヲ捨如レ附ニ枝葉ニ爰ニ房州ノ國司里見義豐ト申ハ。安房上總兩國ヲ領シテ。且清和源氏ノ名家數代弓箭譽レアリ。我常ニ欲レ試ニ其士ノ軍慮ニトテ。三人ノ御家臣ヲ率テ。文明年中古河ノ城ヲハ出テラレケリ。

日泰聖人ト定隆殿船中御物語附法力ノ事

其頃下總國千葉郡濱野鄕ニ。日泰聖人トテ知

行兼備頂徳アリ。御諱ハ日秦、字ハ心了。後ニ號圓頓房心了院。有時母深夜ニ一珠ヲ手ニ取。光耀スト夢ニ見則懷孕セリ。永享四壬子年ニ。洛陽白河ニ誕生シ給ヘリ。幼時法華ヲ習ヒ給フニ。未幾八軸ヲ皆通理シ給フ。夫ヨリ尋敵悟天台ノ教章遊歴三井南都學倶舎律部瑜伽唯識。其性亦慈仁ニシテ寒ル者ニ脱衣。貧人ニ與資。鎮著法衣。三時ニ梵行無有懈惓。文明元己丑年於濱野郷昔ノ興廢寺。自構一宇。即如意山本行寺是ナリ。兩總列什門累派。法華弘通伽藍ノ權輿也、秦師住是緇素黎民ヲ教化シ給フ。或時高座ニ上リ權實二教ヲ説給ニハ。郷邑ノ男女參集聽聞結縁シケリ。説法舌和ニシテ辨智詞滑カナリ。集會之萬人ハ隨喜ノ涙ヲ流シ。結縁群參ノ道俗ハ歡喜ノ袖ヲ絞ル。无始罪障ノ雲消カト被思ハ。本有月輪之光照カト疑ヒ有、カリシ事共也。其頃武州品川本光寺エ

御越。彼寺爲相續。暫ノ間御逗留ニテ法華弘通シ給、夫ヨリ亦本國濱野郷エ趣キ給ン迚。品川ヨリ至曉船ヲ泛給ヒケル。其時分ハ品川ヨリ濱野郷エ渡海ノ折節ナレハ。定隆殿主從モ房州エ赴ントテ此湊エ來リ。其夜一宿シテ同船ニ乘リ給ヒケル、海上ヲ行事既一里計ニシテ。猛風忽ニ起テ漂流南ノ外海ニセシカハ。乘合ノ旅客周章事無限。衆人少モ不給騷。舷ニ立テ則唱誦シ神呪之肝文ヲ封玉女神ノ呪法ヲ。巨海ノ暴水ニ投給ヘハ、忽順風歸帆逃危難。最如斯有ケレハ。昔大聖上尊ノ在世説法ノ時。ハ、大龍王參向テ申ケルハ。佛徳尊高ニシテ萬徳自在也。三世ノ智惠ヲ極テ。十萬世界ニ明ナリ。然トモ。猶御心ニ叶サル御事ヤ御座ト申ス。時ニ佛答テ曰。我能萬徳圓滿ニシテ自在ノ身得レトモ。心ニ叶ヌ事二種有。一ニハ婆婆ニ久住シテ常ニ説法シ衆生ヲ利益セント思ヘト

モ。分段无常ノ境ハ百年ノ間涅槃之雲ニ隱ナントス。是心ニ任セヌ愁也。二ニハ我涅槃之後若善根ノ衆生有リトモ。爲魔王障碍セラレ。所願成就ノ者不可有。其善根ノ衆生ヲ誰ニ預ケ可置共覺ス。是亦大キ成歎ナリト宣フ。時ニ八大龍王座ヨリ起テ佛ヲ三匝シ。威儀ヲ調ヘ尊顏ヲ守リ奉リ。二種ノ大願ヲ發テ曰。我願クハ佛涅槃ニ入テ後。孝養報恩ノ者ヲ可守護二ニハ我願クハ佛入涅槃後。閑林出家ノ者ヲ可守護二ニ我願クハ佛入涅槃後。佛法興隆ノ者ヲ可守護云々。日泰聖人忝クモ佛法興隆ノ人タレハ。龍神納受シ。浪風忽ニ靜リケリ。定隆殿聖人ノ視威容倍尋常人思ヒ。謹テ武運出世ノ法ヲ問ヒ給ヒケル。泰師答テ宣ク。不過妙經ノ力用。武衞時將軍賴朝ハ。昔日永曆元年齡十四歲ニテ伊豆國ニ罪セラレ。往走湯山隨妙法尼。能法華ヲ唱給ケル。偶遇文覺拜父ノ髑髏。而且暮ニ法華ヲ讀誦シテ。父義朝ノ菩提弔。加之刑戮平氏雪先祖ノ耻。其上領天下兵馬權。止是妙法力用而已。定隆重訊弓馬ノ家ニ生レ。多ノ擊讎敵。此罪難滅乎否ナリ。昔示鼻祖ノ妙判ノ大概。曰夫沈針水不止雨空。蟻子ヲ殺セル者ハ入地獄。屍ヲ切ル者不脫惡道。何況ヤ人身ヲ受タル者ヲ殺セル人ヲヤ。但大石モ浮海船ノ力也。消大火事非水ノ用耶小罪ナレトモ懺悔セサレハ惡道ヲマヌカレス。大逆ナレトモ懺悔スレハ罪滅矣。人石ヲ以テ置水上必ス沒ス。若百石ヲ持置船上必不沒。若直死ハ入泥梨。如石ヲ水ニ置。若臨死稱南無妙法必ス不入泥梨如百石ヲ船ニ置。是妙經ノ大船ノ力用ル效驗軌測也ト宣ヘハ。定隆感喜微笑シテ。且謝曰ク。治國握掌時。爲領內ノ黎民悉ク令歸依泰師ノ妙宗。今日ノ布施ニ行參セント。兼テ約束ヲ被成ケル。斯ル

談話未終船ハ先程濱野鄉ノ岸ニ着ケレハ。船ヨリ上リ給ヒ定隆ヲ誘テ入如意山中跪三寶ノ尊前。愼テ戴經受戒セルノミ。然テ入客亭奧御物語有リ。定隆殿モ毀湯漬ノ飯杯夫ヨリ御暇乞申主從共安房國ニ通リケル。

土氣古城再興之事

爰ニ安房國司里見義豐殿ト申ハ。清和源氏之末葉也。先祖大膳亮義盆迄ハ越後國住人ナリシカ。後醍醐天皇御謀反ノ時。以一家ノ好有新田義貞ニ屬シ。數度軍忠アリ。安房國賜守護代。夫ヨリ相續テ當國ニ居住シ給。然ニ今義豐至時代以自力上總一國ヲ斬隨。兩國ヲ知行ス。去程ニ定隆主從ハ房州ニ着シカハ。暫ク爰彼ニ徘徊セシニ。無程御前ヘ被召出上方ノ弓矢ノ沙汰。亦ハ諸國就兵亂陣ノ張リ樣。軍ノ備。逸々御尋ノ處。詳ニ答之シカハ。義豐殿。御悅喜有テ。即以隆士卒ノ棟梁トスルニ。行先不廉云事無ク。其頃下總ノ逆徒等動蜂起シテ房總兩國エ亂入ス。此故ニ民屋商家ニ至迄日夜安堵ノ不為思。義豐親子費之。彼動亂ヲ為防。上總下總ノ境中野ト申所ニ定隆ヲ居エ置ク。依之下總ノ道塞リテ敢テ一度責來ル事無ク。サテコソ房總兩國靜謐ニシテ。百姓ハ耕作ノ業懇ニ營ミ。商ハ己カ家職ヲ快ス。去レハ古語ニ曰。得其人則其國以興リ。失其人則其國以テ亡スト謂リ。遂ニ平定シテ國內永ク一統セリ。其頃武相兩國未靜カトカヤ。義豐義弘彼ノ武德ヲ感テ任越中守且上總一國ノ中三分二ヲ賜ル。因茲要害宜キ城ヲ築ニ。土氣古城ハ四方嶮岨ニシテ諸卒楯籠ルニ便リ有リトテ。即長享元年ヨリ同二年ニ至テ悉ク再興シ。士卒ヲ率テ移リ給ケリ。夫ヨリ尚詰々ニハ關所ヲ堅ク居エ。在々所々ニハ國法ヲ不猥。於士卒者以有忠賞ヲ行。不忠ノ者罪セ

シカハ、彌國中靜謐ニシテ上下萬歲ヲソ諷ヒケル。

國内改宗并善生寺本壽寺山號ノ事

斯ル折節濱野郷ニ泰聖人御出アリ。而モ旗下ノ諸侍會列シ。御家中不殘名字ノ百姓迄參列セシカハ。越中守定隆以下知ヲ青竹ニテ四方結埒ヲ。綺閣ヲ飾テ則泰師ヲ屈請シテ饗應シ。物盡美ヲ聖人御所望有ケレハ。以是閑中ニ乞爲精舍給ヒケル。定隆殿不及ニ一儀御請ヲ申ケル間。然ハ寺號山號ヲ可附トテ。泰師郎名ニ如意寶珠山本壽寺時定隆曰。當城ヨリ南ニ當テ眞言ノ一寺アリ。此モ同令皈一乘山寺號ヲ改ムヘキ由被仰。因茲本壽寺ノ山號二字ヲ取テ。所謂號寶珠山善生寺。今勝ノ字後代改由亦定隆曰。某先年暫ク中野村ニ居住仕候。依テ彼所モ某支配ノ地ニ御座候間。彼所ニモ營一宇。彼爲ニ村民悉一乘ニ結縁仕度候。願ハ泰師入院シ給エト被申シカハ。卽中野ニ入給。道場ヲ構エ。如意山本城寺ト申ハ是也。泰師又爰ニ住メ能權實ノ旨ヲ談シ給ヘハ。遠近ノ里人悉ク群集メ宗門ヲ改。皆什門ニ傾ケリ。去レハ定隆ハ泰師ノ智至テ深キ事ヲ隨喜ノ餘リ。我於有國ヲ領ノ刻。不殘什門ニ令皈依。船中ニテ宣ヒ國中ノ貴賤ハ泰師ノ德至テ高キ事ヲ慕カ故。皆一宗ニ歸伏シテ祈ル現當二世。其上若有聞法者。無一不成佛ノ明文ニ叶ハン事。豈疑ヒ有ン乎。依之定隆殿長子左衛門佐定治殿ニ家督ヲ讓リ。大永元年辛巳ノ春。八十七歲ニテ髮ヲ剃リ。名清傳入道。三男孫五郎殿隆徹ヲ被召具東金ノ城ヲ取立。御隱居被成シカ。同二年壬午四月廿四日ニ終ニ逝去シ給フ。卽改名ス玄通院日傳。是則土氣東金中興兩酒井ノ元祖也。御内室ハ去ル永正五年戊辰六月晦日終ニウセ給ヒケル。戒名ハ清涼院殿妙泰ト申也。東金ハ

ヲハ子息中務丞胤治殿ニ相續ス。此書ノ序ニ竹内出雲守トハ。中書殿日樂ノ御事ト有。若胤治殿ヲ中書殿ト申。御死去有改名ヲ日樂ト申也。中書殿日樂ト云人外ニ無シ。然ハ胤治殿ハ御家中ヨリ養子ト見及タリ　此故ニヤ玄治殿御時代土氣東金不和ニ成シ事有。其濫觴ヲ傳聞ニ。東金ノ家中ノ曰ク。土氣定治殿ハ雖爲長子ト御本腹ニハアラス。主君隆敏殿ハ雖庶子ト本腹ナリ、惣領ト云ツヘシ、然ニ土氣下風ニハ立間敷物ヲト云。土氣ノ家中ノ云ク、惣領家无紛レ。入道殿モ定治殿ヲコソ惣領ト被立ナリ、其上土氣両酒井ノ根本ニ非ス乎。東金ハ其枝葉也。庶子也、何ソ東金ノ風ヲ立ンヤト云、此爭ニ依テ兩酒井如氷火。中惡ナリシニ臼井ノ城主原式部大輔殿。總州兩國ノ旗頭中立ニテ和睦有テ互ニ御出入有シト也、玄治殿ハ弘治元年乙卯四月廿五日ニ御死去ナリ。則改名ハ祐玄日清ト號。家督中務丞胤治殿相續シ給也。頃ハ永祿四六月宮谷八幡宮造營ヲ切爲道也。同七年甲子正月ヨリ二月廿日迄。下總國於國府臺大成合戰アリ。其時ヨリ。關八州大略小田原ノ城主平ノ氏康氏政幕下屬セシニ。房州里見義弘殿ハ彼下知ニ依不從カハ、氏康父子ノ人々房州里見ヲ可責トテ大勢ヲ催シ。小田原ヲ打立ケル。義弘御親子先達テ傳聞シカハ。居ナカラ敵ヲ待請戰ン事武略ノ不足ニ似タリ。人馬懸引自在成弘野ニ出テ。可戰トテ、房總兩國勢ヲ以。下總國高府臺出向。去程小田原勢夜日ニ繼テ來リシカ。房州勢見ケレハ時ノ聲ヲ發シ。貝ヲ吹太鼓ヲ打テ責近。房州勢心得タリト備ヲ堅シ相懸リニ懸テ追返シ。相戰事數日雖戰暮更ニ勝負ナシ。義弘殿斯テハ何迄カ戰ントテ。味方ノ勞ヌ先一責急ニ責ントテ。荒手ノ兵ヲ先トシ馬ノ鼻ヲ雙テ敵ノ多勢ニテ扣エタル處ヘ拔連テ討テ懸リケル程。小田原勢ハ數日ノ戰ニ勞レ助ノ兵モ無シ。其上敵ヨモ寄事非シト

油斷シテ居タル處ヘ。大勢一度ニ喵ト懸リケレハ。終ニ小田原勢戰負捨鞭ヲ打テ吾先ト逃タリケリ。房州勢勝ニ乘テ進程ニ。市川加齋ノ邊迄追懸タリ。義弘殿下知シテ曰。長追スヘカラス臆病神ニ引立ラレテ逃敵恐ニ不足。勞タル人馬ヲ休歸陣スヘシトテ鎧甲ヲ脱テ櫃ニ入歸國セントスル處ニ。康父子以謀小金ノ勢ヲ招キ寄テ房州勢ノ後詰ヲサセ。折節西風烈シカリシニ四方ノ相圖ヲ定。市川加齋ノ在家ニ火ヲ放前後ヨリ立挾ヲ貝ヲ吹。一文字ニ喵ト懸シカハ房州勢途ヲ失ヒ。大將殿ヲ始。兩國ノ諸士周章前後ヲ失。敵ヲ防キ兼テ或ハ馬ヲ海ヘ乘込。或敵ニ取込ラレ差違死モアリ。此時名ヲ得タル侍多ク討死セシナリ。義弘殿モ馬ヲ早テ迯落シカ。敵夫ト見鞭打テ追懸タリ。其間纔ニシテ既ニアヤウカリシ處ニ。中務丞胤治子康治山邊郡ノ家人等。稻毛浦ニテ取テ返シ。命ヲ限リ防キ戰ケル。左衞門次郎康治殿生年廿五歲。勢ヒ懸テ大勢中ヱ切テ入ル。胤治殿見給ヒ。康治討スナ續ケヤ者共ト下知ス。父子眞先ニ進ム誰カ一人殘ルヘキ。切先ヲ揃亂入テ八方ヘ斬テ廻リケル。小田原勢此勢ヒニヘキエキシテ十町ハカリ引退ク。胤治殿兵ヲ一所ニ集見給ニ討死多キ中ニ。若菜豐前カ父稻毛ニテ戰死ス。豐前モ髮ノ生際疵ヲ受ク。富永三郎左衞門討死ス。康治殿モ左髮ニ一ケ所。右ノ腕ニ二ケ所。左ノ腕ニ突疵二ケ所。股ニ二ケ所。以上七ケ所手負タリ。如斯身命ヲ捨防戰ケル其間。義弘殿ハ千葉迄落延給ヒケル。夫ヨリ敵方餘リ長追ナク。日モ暮故カ次第ニ引ケル故。味方安堵シテ千葉ト土氣トノ間ナル大谷有ヲ便ニ。人馬ヲ休息シテ已カ國々ヱ引退。頃ハ永祿七甲子年二月廿七日ト云々。

池野和田落城附多加藏人自害事

爰ニ西上總市原郡池野和田ノ城主。多加藏人。同舍弟兵衛大夫兩人ハ。里見義弘殿ニ屬高府臺合戰ニ雖ㇾ加ㇾ勢。義弘利無シテ引退キシカハ。藏人モ己カ居城池野和田ニ楯籠用心嚴ゞ居タリケル。去程氏康殿高府臺ノ合戰ニ討勝。其勢强大ニ成テ亦々里見ヲ可ㇾ責トテ。直ニ上總迄進發。子息氏政殿被仰ケルハ。最房州ヲ責ン事雖ㇾ可池野和田ニハ多加藏人。土氣ニハ酒井中務丞胤治楯籠。其外長南小田喜萬騎如ㇾ斯ノ城々ニ敵大勢楯籠レリ。前成敵ヲ不ㇾ攻メ後ノ敵ヲ房州ヱ趣ハ。後詰セラレ身方難儀ニ及事必定也。前成敵ヲ追拂後房州ヲ責ン事心安候ト被ㇾ申ケレハ。氏康殿尤ト同。然先池野和田ヲ責ヨトテ。十重廿重ニ取卷。荒手ヲ入替々々智謀ヲ廻ラシ。息ヲモ不ㇾ繼カ攻タリケル。去共城中固堅シテ百餘日マテソ堪タリ。漸ク城中兵粮盡テ强兵モ防兼テ見ヱタリ。多賀藏人今ハ是迄ト思ヒ。兄弟鑓ヲ提門外ヱ走リ出突伏切伏散々ニ戰。樊噲カ雖ㇾ有ㇾ働。多勢ニ不勢不ㇾ叶。兵衛太夫ハ討死ス。藏人後屹ト見タレハ早兵衛太夫ハ討タレヌ。今ハ久鋪戰ヲ何カセントト大廣間ヱ走リ皈リ。腹十文字ニ搔切臥タリトナン。小田喜城主正木大膳モ池野和田ノ後詰ヲセシカ不ㇾ叶シテ引退ク。其時ノ落書ニ

正木ニテ結タル桶ノ箍（ヌカ）キレテ水モ溜ラス池野和田哉

中務丞胤治親子ハ。池野和田落城ト聞テ。扨ハ氏康當城ヘ攻來ン事必定也トテ。用心爲シテ寄來ヲ待居所ニ。氏康殿如何思ヒ給ヒケン。還テ和融ノ使ヲ以被ㇾ申シハ。疇昔先祖北條氏茂早雲入道ト貴公ノ先祖淸傳入道殿トハ朋友ノ交深ク互ニ水魚ノ交リ思アリ。今又我對ㇾ胤治更ニ意恨ナシ。自今以後其方ヨリ怨ヲ結スンハ氏康何ソ敵センヤ。昔ノ好ヲ不ㇾ忘今氏康ニ

カヲ加ヘ給ヘ。其淸傳ト早雲申合ノ文書有トテ扱ニ及。胤治殿力ニ及スコノ時ヨリ里見ヲ背キ小田原ノ幕下ニ屬シ。長子左衛門治郎(後任伯耆守ニ)人質ニナシ。氏康殿ノ御供シテ小田原ヘ被レ登ケル。

野田合戰并竹内太郎左衛門手柄

附民部卿忠文事

池野和田落城シテ後。中務胤治殿背ニ房州ニ小田原ノ幕下ニ依屬テ。里見義弘殿。子息義堯立腹有テ。土氣ハ代々當家ノ幕下也。然ル處胤治先祖ノ好ヲ忘レ。小田原ヘ從ニ下知ニ。剩ヘ向ニ當家ニ欲レ彎レ弓放ニ矢條々甚不義ノ至リ也。彼等カ无道ヲ不攻シテ其儘ニ差置ハ。今日迄二心無キ武士ト見エシモ。明日ハ敵トナツテ如ク胤治カ謀ヲ結ン事顯然タリ。且ツハヨノ見セシメ也。其ノ上ニ窮鼠却テ嚙レ猫ヲ云事有。努々不レ可レ緩。胤治父子ヲ責落跡ノ所領ヲ闕所メ勤忠ノ輩ニ可ニ宛行ートテ。六百餘騎ノ軍勢ヲ催シ。上總ヲ差テ向ヒケル。既ニ關井戸草苅村ニ懸テ。千葉ト土氣トノ間ニ大成田谷有ヲ形取陣ヲ取ル。此事土氣ヱ聞エケレハ。兼テ大勢ヲ催シ鴻臺ヱ出テ出張ス。時兩陣鯨波ヲ發シ。互ニ亂入テ戰タリ。土氣勢モ義ニ進ミ今度ノ合戰ニ後ロヲ見セテハ後日ノ嘲リ。一期浮沉是時ニ有。荒手ノ兵ヲ入替東西ニ靡。南北ニ分レテ萬卒面進メ一擧ニ死ヲソ爭ヒケル。房州勢長途ニ勞レ。其上可ニ入替ー荒手ノ勢ハナシ。終日戰ニ草臥終ニハ備ヲ亂シ。馬ノ足ヲ立兼。吾先ニ逃ケル。爰ニ竹内太郎左衛門ト云者有。敵ノ色メキ立テ逃支度ヲスルヲ見テ。兼テ案内ハ知道ヲ廻テ先ヱ欠拔敵ノ逃テ行道ノ傍成小笹ノ影ニ隱レ居。元來半弓ノ上手差詰引詰射タリケルニ。徒立チ馬上以上十四五人矢庭ニ射落。其振舞比類ナクソ見エタリケルニ。房州勢是ヲ見

テ唯一人トハ思寄ス。敵大勢ニテ道ヲ遮ト心得テ、蜘ノ子ヲ散カ如ク散々ニ成テ八方ヱ逃ケル、其頃野田合戰ト申セシハ是也。士氣勢ハ勝時ヲ咄ト擧ケ。靜カニ陣ヲソ引タリケル　康治殿被仰ケルハ。今度ノ軍忠ニ於テ何レ雖无甲乙。竹内太郎左衛門カ働ハ諸人ニ勝レ覺レハ。抽賞宜ク可ニ沙汰宣フ所ニ。富田伊豆守被申シハ、最有忠輩ニ恩賞ヲ可被宛行事定法ニ候トイヘトモ。太郎左衛門ハ此度ノ合戰ニ十人餘ノ武具衣裳ヲ剝取　過分ノ有徳ニ　罷成候エハ。別ノ御恩賞ニ及間鋪ニテ候、其故ハ太郎左衛門一人ノ手柄トハ雖申。勝誇タル御方ノ大勢後ロニ扣タルヲ賴テ、一人拔出テ敵大勢ノ討タルニテ候。身方大勢後ロ楯候ハスハ太郎左衛門ハ一人也。敵ハ大勢也、縱ヒ猛威ヲ振舞トモ。一人ト見ハ敵取テ返。太郎左衛門可討ル。身方大勢ニテ大風ノ吹カ如ク追懸シ程ニ敵取テ返ス事モ無。太郎左衛門無恙思ノ儘ニ武具ヲ剝取。己カ所得ニ仕候。敵ヲ討テ或ハ手ヲ負セ。或ハ追シリソケナントシ。一命ヲ輕ンシテ働候士卒餘多御座候所ニ、彼一人ヲ被召出恩賞諸人ニ勝候ハヽ、殘ル士卒ノ働ハ一向無キニ似テ、上ヲ恨ルノ本ニテ候　隆穩便ノ沙汰被致候得トソ被申ケル　康治殿實モト思召御氣色成ケレハ、板倉長門守被申シハ。恩賞ヲ不被下ハ僻事タルヘシ。士卒陣ニ向テ命ヲ輕ンシ、謀ヲ成テ敵ヲ欲討ント恩賞ニ預ラン爲也。伊豆守一人ノ手柄ニ非ト被申條心得カタシ。惣テ陣ニ向テ我ハ人ヲ以テカトシ。人ハ我ヲカトスル事皆以如斯。太郎左衛門謀事有故ニ。諸人ヲ出拔先ヱ廻リ。十人餘ノ敵ヲ討テ落ハ一人ノ手柄ニ非ヤ。武具ヲ剝取ハ上ノ御恩賞ニ非。自身ノ所得也。忠有輩ヲ不賞士卒向陣不可働。其上折指邪ヲ算立恨憤テ上

ヲ侮則ハ必法敗ル。法敗レハ亂國ノ本也。速ニ恩賞ヲ被行候得ト再三ニ及諫言。伊豆守更汰ニ依先同心。太郎左衛門終恩賞ニ洩レタリ。日月雖誠照覆雲ヲ奪光康治殿速恩賞ノ沙スヘシト被仰シカ共伊豆守カ佞言ニ傾給ヘシハ誤也。賞中其功則ハ有忠者ハ進罰當其罪則ハ有咎メ者退クト云リ。長門守被申如ク其分々ハ隨ヒ御恩賞ヲ不行則ハ士卒陣ニ向テ勇事無シ懈怠ノ本也。將謀ヲナメ雖戰ト士卒ニ怠リ有時ハ難得勝利。然大將ノ損ニ非ヤ。昔平親王將門追討ノ節。小野宮殿依一言民部卿忠文終ニ恩賞ニ漏レ。面目ヲ失フ。依之惡靈トナル事傳聞處也。怨靈ヲ宥メ可申トテ。忠文ヲ神ト祝ヒ宇治ニ離宮明神ト云ハ是也。誠ニ其恨ノ通シケルニヤ。小野宮殿御子孫ハ絶ケルカ如シ。斯ル例モ有ソカシ何ソ前車見覆ヲ後車ノ誡トセサルヤ。是故長門守ト伊豆守互ニ中惡敷成テ打過キケリ　頃ハ永祿八年ノ事也。

本納城落城之事

或時同國長柄郡本納城主。黑熊大膳亮心ニ思ヒケルハ。士氣ハ代々房州里見家ノ幕下ニ屬セシニ。今房州ヲ背キ小田原ニ屬ス。因茲房州里見家憤リ深シ。是時一戰ヲ思立。房州ヨリ加勢ヲ乞請。士氣城エ攻入胤治父子ヲ討取。彼カ支配ノ地ヲ押領セント思ヒ　先房州エ加勢ヲ乞ヘシトテ。頓テ使者ヲ被立ケリ。誠事ノ洩安キハ禍ヲ招ク中立ニテ　先達此事士氣エ聞エシカハ。胤治殿父子大勢ヲ催シ。房州ヨリ加勢來ラヌ先ニ責ヨトテ。態ト夜更ケ人靜テ打立ケリ。既ニ城ノ後ロ成サヤトノ山ヨリ石弓ヲ投入。或ハ鐵炮ヲ放テ責入ケル程ニ。折節一騎當千ノ者共ハ。房州エ赴ク。其上夜更ノ事ナレハ。帶劍解緩々ト寢入タル所エ。大山ノ崩ルカ

如ク攻入シカハ。名有者少々居タレトモ。周章取モノモ取敢ス。八方ヱ迯散シケル程ニ。大將黑熊大膳亮タマリ兼テ切腹ス。殘ル者共跡方モナク迯散シカハ。辰刻落城也。寄手ハ勝時ヲ上タリケリ。康治殿被仰ケルハ。東方大道ハ當城ニ行當テ無用心也。町ヨリ南ノ方ヱ廻ルヘシトテ。則濱海道ヲ用ル也落城已後築立シ故以後堤ト云リ。サテ城代三人置。板倉甲斐守。摩呂因幡守。板倉左衛門佐也。委細ハ兩郡ノ男女知之故具ニハ不記之房州ヱ赴シ者ハ加勢ヲ安々ト乞請。悅テ道ヲ急シカハ流山麓ニ着ク。斯ル所ヱ落人共來テ大息繼テ落城ノ旨ヲ物語ス。使者ニ行シ者共淚ヲ流シ齒ヲカムト云ヘトモ甲斐ナカリケリ。加勢ノ者共ハ房州ヱ歸リシカハ。大膳亮家來共ハ急キ法日村ヱ來リテ。吾々隱謀ノ企セシヲ。己カ土氣ヱ告知セシニ紛レナシトテ。科ヒナキ者共十人忽殺害シ。何レモ立並テ一度ニ腹ヲ切タリケリ。サテ殺サレシ十人ノ塚ヲハ。法日ト萱場ノ境ニ築立テ置也。夫ヨリ房州ヱ內通野心ノ者有時ハ。逆寄ニシテ切隨ヘ。街ニハ頸ヲ切テ掛並フ。詰リ々々ニハ關所ヲ申付。胤治殿父子ハ片時モ油斷ナシ。夫ヨリ以前里見義賴ト取合雖數年經。當時何ノ妨モナシ。サテコソ上總半國御手ニ入リタリ。十四ケ年ノ內ニ十里四方ニ敵一人モナク。士氣東金ノ民百性安閑ト月日ヲ送ル。永祿十二年ノ頃ヨリ。姉ケ崎摩呂。谷長南萬騎。小太喜。勝浦。右ノ城々小田原氏政ノ御手ニ入屬ス。其時土氣東金兩城ハ。朝夕合戰ノ談合止事ナシ。サレハ名字ノ百姓ハ御扶持方被下。田畑ヲ耕時ハ畔疇ニ鑓リ長刀。或藤柄ノ小脇指大小ヲ伏置。城中ニテ鐘ヲ突。太皷貝ヲ吹トキハ。耕地ヨリ直ニ上リ先帳面ニ付キ。一番鐘ヲ突時ハ兵粮ヲ遣ヒ。二番ニ太皷

ヲ打時ハ鎧甲ヲ着シ。其外萬支度ヲ調。三番ニ貝ヲ吹時ハ。御家中其外名字ノ百姓迄不殘城内ヱ可相詰由御觸出也。如斯ノ相圖ヲサタメ置キ康治殿更ニ御油斷ナシ。サテ中務丞胤治殿天正五年丁丑五月十三日御逝去。法號日樂ト申也。

康治殿縣大明神ヱ參籠之事

天正七年伯耆守殿御祈禱ノ事アリ。諸家中御供ニテ於縣大明神三日御酒宴被成事有。狩野右京亮ヲ被召寄年若辨慶ヲ繪ニ書キ。若柴豐前貽之實殿ニ掛置。爲後代書付置者也。

板倉長門守　判

一位殿噂之事

伯耆守殿弟ニ僧ト成ツテ一位ト云惡僧有。生ツキ惡ニシテ善心ノ辨ヲ知ラヌクセ者ニテ有シカ故ニ。亦ハ一子出家スレバ九族天ニ生スノ儀思召カ故。房主ニ被成シカ。天正十八年正月廿三日宮谷本國寺日典上人土氣ヱ振舞ニ御出被成シニ。其晝一位殿本國寺ヱ參申樣。愚僧コソ今日ヨリ此寺ノ住僧也。皆々其分可心得トテ。直ニ寺ヱ入テ磬臺ニ登ル。寺檀大ニ驚キ。早速土氣ヱ申上ル。殿樣以ノ外御立腹ナレハ。雖成早速ニハ。日典上人ハ先畑ケ中村ニ御住居成ケレハ。御立腹彌增。御役人ニ申付追拂セ給ヒシカハ。一位殿モ雖爲立腹有先不及力。直ニ房州ヱ赴キ里見殿へ罷出。土氣ノ城ヲ愚僧ニ給リ候ハヽ。兄伯耆守殿ヲ討取首ヲ御前ヱ備申サント委細ニ披露セシカ。其内病ニ取付長南迄來相果タリ。頬ハ骨ノ痛病也。淺間敷哉。縱ヒ佛道修行ノ心迄ハ無クトモ。何トテ法ヲ猥テ上ヲ輕ンシ。其上恩愛ノ兄ヲ討タントハ計リシソ。去レハ經ニモ百千歲カ間百羅漢ヲ供養ストモ。一日ノ出家ノ功德ニハ不及。譬人有テ七寶ノ塔ヲ建事高サ三十三

天ニ至トモ。一日出家ノ功徳ニハ猶難及ト見エタリ。斯ル無道ノ心ヲ以。莫大ノ功徳ヲ得ヘキカ無覺束。日典上人ハ翌年ノ正月マテ畑中村ニ御座シテ歸寺被遊候。我等隨分ト骨ヲ折中候故。如斯書置者也。

板倉長門守道治　判

小田原落城并氏政自害同系圖ノ事

永祿十二歳ノ頃ヨリ。關八州ノ諸大名大略小田原ノ城主北條平ノ氏政殿幕下ニ屬セシヨリ以來。兩總州モ靜謐ニシテ緇素黎民共ニ安堵シ。誠ニ歸雁歌霞ニ。遊魚戲浪雲雀冲野ニ。林鶯囀。雖獸尙春ノ樂ニ遇フ心地ナリケルニ。盛者必衰ノ習ヒ。關東既ニ天正十八年寅ノ七月六日ニ。小田原落城始トシテ。同八月迄ニ關八州ニテ七十三ケ所落城セリ。其頃羽柴太閤秀吉公日本國ヲ大略雖切從。小田原ノ城主氏政氏直未御手屬。因茲大勢ノ軍兵ヲ催シ。小田原ノ城ヘ押寄。遠巻ニセメタリ、常陸國。下總。安房。上總所々城々ヱハ御家臣淺野彈正少弼。石田治部少輔。芝田眞田等ヲ大將トシテ被攻之。或ハセメ落シ。或ハ降參計ルニタカハス。譬ハ大風ノ草木ヲ如靡。伯耆守康治。子息與左衛門尉重治。同庄三郎直治親子三人ハ去ル春ノ頃ヨリ。小田原ヱ籠城セシニ。太閤秀吉公ヨリ土氣迄書札ヲ被下。因茲諸家中不殘集會シテ、終日雖評議決定シカタキヨリ。金谷ニ平賀ト云者アリ。彼レ道中達者ニテ甲斐々々シキ者ナレハ。彼ニ書狀ヲ爲持。小田原ヱ遣ス所。戰國ノ習ヒ。處々ノ關所夥數シテ鳥ナラテハ難及。平賀斯テハ叶マント思ヒ。頓テ海中ニ飛入。七里カ間ノ波ヲ安々ト游越シ。小田原ニ進寄ケル。誠ニ匹夫武士ニアリタキハ。走馬强力水練ナリ。戰場ニ至テ用ル事多カラン。夫ヨリ城内ヱ入テ卽御狀ヲ差上ル折節。氏

政ノ御前ニハ八州ノ諸大名相詰。軍評定成ケルニ。是ハ取次ノ武士太閤秀吉公ヨリ伯耆守殿ヱ御狀トテ差出シケル。康治殿於御前開之見給ヘハ。關西加勢淺野彈正少弼ト申合ヨトノ御文章也。氏政殿ヲ始一座ノ武士是ヲ怪事無限。康治殿此書狀ヲ火ニ入二心無旨神明ヲカケ起請シ差上シカハ。氏政殿モ疑ヲ晴事底意ナクハ見ヘシカ共。役所ヲ替ヨト被仰付。不及是非始ノ役所ニハ原式部太夫殿組內成ヲ引替。御廐ノ邊ニテ合戰スヘキ場モ一向無之所ニ。兩酒井ハ座シタリケルト。去程ニ太閤秀吉公日ヲツキ。數日雖責之以ノ外强シテ不落處ニ。城ノ東井細田口ヲハ氏直ノ弟太田十郎氏房防之。此口ヱ向シ寄手ノ大將羽柴下總守一旦ノ謀ヲ以。秀吉公ト氏直ト和睦有ルヘキ使ヲ立處ニ。氏政父子運ノ盡ル期ニテヤ有ケン。其深意ヲ不悟シテ。是ハ秀吉同心金斷ノ心地ト思ヒ。和融可有返事シテ。既ニ七月六日出城有シニ。元來計略ナレハ終和睦ナシ。因玆氏直ハ高野山ニ登リ蟄居シ給リ。氏政ハ子息氏直ト秀吉ト依和平無。同十一日於城內切腹シ給フ。秀吉公ハ北條ノ一族悉ク征伐シ給ヒ。以其勢ヲ直ニ陸奥出羽ヱ進發シ給ヒケル。抑北條家先祖早雲入道ト申ハ。小松內大臣重盛十六代ノ後胤。伊勢駿河守照康カ次男新九郎長氏也。智仁勇ノ三德ヲ備テ武勇萬人ニ越タリ。駿河ノ國主今川五郎氏親ハ叔母聟ナレハ。駿河ノ國ヱ下向シ。氏親ノ扶助ヲ蒙リ。伊豆ト駿河ノ堺ナル高國寺ノ城ニ居タリ。爰ニ足利ノ大將軍義政卿ノ四男左兵衛督政知朝臣ハ。伊豆ノ國北條堀越ノ城ニ御座シケルカ。延德三年四月五日卒去シ給フ。嫡子左馬頭義通。次男茶々丸殿。北條堀越ノ城ニ御座シケルヲ。明應元年四月五日前左兵衛督

政知朝臣ノ第三周忌ノ忌日ニ當テ悉クセメ亡シ。夫ヨリ近國ノ武士我モ々々ト附隨。其時氏ヲ改法體ノ姿トナッテ北條早雲瑞公ト號ス。同明應三年極月廿八日伊豆國北條ヲ打立テ。小田原ノ城主大森筑前守實頼ヲ責落シ。夫ヨリ入替テ。小田原ノ城主トナリ、武威ヲ關八州ニ震也。

濱野村本行寺叅上附多賀内膳落馬ノ事

爰ニ池野和田ノ城主多賀藏人カ一子多賀内膳ハ父藏人滅亡ノ刻未タ依レ爲ニ幼稚其死ヲ遁レ。同國長柄郡舟木村ノ内八反目ト云所ニ深ク忍ヒ。牢人ノ身トナリ。朝三暮四樂ミテ、世ノ安否ヲ窺フ處。永祿七年池野和田落城ヨリ廿七年ニ當テ。小田原落城ス。此時内膳思樣ハ。既ニ康治ハ先祖ヨリ代々我父ト同ク。房州左馬介義豐方ニテ有シニ。胤治其堅石ヲ破リ。氏政ノ幕下ニ屬セシコソ遺恨ナレ。先高府臺ノ合戰ノ時。父藏人一人ノミ忠義ヲ存シ。尸ヲ曝シ戰場ニ。子孫ノ繼營ヲ失フ。此野心ヲ可レ晴時節ナシ。其上禮記ニハ父ノ讎ハ共ニ天ヲイタヽカスト云リ。今幸ニ關白ノ勢ニ降參シ。氏政カ下知ニ屬セシ在々ノ餘黨ニ懸合ヒ、鬱憤ヲ欲レ散ントテ。天正十八年寅七月下旬同朋大島小太郎ト申合。豊臣軍師ノ大將淺野彈正方ヱ降人ニ出ル。去程ニ士氣ノ城ニ殘リシ康治譜代恩顧ノ勇士等。評議シテ云樣ハ。既ニ小田原ハ去ル十一日落城ス。依之關白ノ軍兵西ノ濱邊ニ亂入リ、無ク尺地モ彼勢ニ從フ由風聞有リ。然ハ此城ニ死期ヲ待テ敵ニ取ラレ。ヤミ々々ト可ニ切腹ス事無念ノ至也。濱野郷如意山ハ御先祖清傳入道殿ヨリ。御代々御寄依建立ノ伽藍ナリ。分内モ廣ケレハ士卒楯籠便モアリ。城ニハ見セ勢ヲ少々殘シ置。彼寺ニ隱レ居テ後ロヨリ押寄。敵案ニ相違シテ猶豫スル處、心ヲ一ニシ

テ前後ヨリ切先ヲ雙切テ懸ラハ。何萬騎ノ敵ナリトモ一度ハ散サテ可レ置カト。名ヲ惜ミ命ヲ輕ンスル勇士等評定既ニ定ケリ。是事多賀内膳如何シテカ知ケン。頓テ淺野彈正方ヱ披露セシカハ。康治家人等ノ籠サル先ニ本行寺ヲ放火スヘシトテ。傍輩大島小太郎被レ爲二案内者一ニ。差副二三十騎計ニテ本行寺ヱ被レ向ケル卽多賀内膳情ナクモ火矢ヲ以テ本堂ノ方ヱ放ツ。猛火南北ヨリ吹懸テ諸堂一時ニ灰燼トナリヌ。自レ夫陣所ヘ歸トテ。於二途中一落馬シテ血ヲ吐忽ニ狂死セリ。大島小太郎見レ之サレハコソ知德權化開闢ノ大伽藍ヲ燒失シ。御罰ヲ蒙リ。我權花先達ノ身ヲ以テ斯ル精舍ヲ滅亡シ。當來ノ罪業永刧苦ニ可レ沈。雖レ然難レ背二一旦ノ主命一此猛惡ニ與ス。兎角我命ヲ炎火ノ中ヱ亡失シテ。其罪障ヲシヤセンニハトテ。夫ヨリ取テ返シ。葦毛ノ馬ニ乘ナカラ。炎ノ中ヱ走リ入リ燒失ケリ。頃天正十八年寅八月朔日。兩人同日ニ死失タリ是誠ニ如意山本行寺可レ及二衰微一兵火也ト。緇素黎民ノ男女暗然トシテ愁念頻也。

士氣落城幷酒井與左衛門庄三郎殿家康公ヱ被レ召出一事

去程ニ士氣ノ城ニ籠シ康治譜代ノ諸侍ハ。濱野鄕ニ陣ヲ取テ。上方ノ勢ヲ後ロヨリ攻ヘシト兼テ計略ヲ廻ス處ニ。多賀内膳ニ被二推量一計略既ニ相違シテケリ。依之此城ヲ枕トシ討死スヘシトテ。金鐵ノ如クナル武士共敵寄トヒトシク切テ出。命ヲ不レ惜防キ戰トイヘトモ。多勢ニ無勢不レ叶シテ。卽城ヲハ淺野彈正少弼ニ渡ス。康治公御親子三人ハ氏直ト同出城セラレシカ。八月十日小田原ニテ家康公ヱ御目見有テ。漸ク二十日時分ニ御歸國被レ成若榮豊前所ヱ御入。其後中次村小庵ヲ結ヒ暫ク御住

居也。御入國繩入ノ節。田地百石御領内ニテ被宛行。牢人ニテ御座マシマセシカ。亦小田原ヱ御越ナサレ　康治殿ハ石淋ト云御煩ニテ、慶長十三年戊申十一月三日ニ御逝去。即法號曰慶ト號。土氣ノ城ハ酒井越中守定隆殿ヨリ。此伯耆守康治殿迄五代ニテ亡。長子與左衛門尉重治殿。同庄三郎直治殿御兩人ハ三浦監物殿御取持ニテ。家康公ヱ被召出。兄與左衛門殿ハ御知行　武藏國尾羽根ト云所ニテ九百五十石拜領ス。御舍弟庄三郎殿ハ御知行上總國粟生野村二林日當村千澤村千石。此庄三郎殿ハ伏見ノ御城御番頭被仰付。御勤ノ處。組ノ内五味金十郎ト矢倉ノ三階ニテ口論被致。腹ヲ被突通ナカラ。代々相傳ノ端刀ヲ拔キ拂ヒ給ヘハ。金十郎ハ二ツニ成テ死ス。御自分モ痛手ナレハ御座ニ御死去。時ニ元和三年丁巳十一月三日ノ事也、改名授記院慶含ト號。御息源五郎殿ト申テ未御幼少ナレハ。鳥居左京殿御預リ。其以後松平大膳太夫殿ニ御預ケ。酒井彌惣左衛門殿ト申御扶持方分ニ二百俵ノヨシ。與左衛門殿ハ。江戸ニ御住宅ニテ。寛永七庚午五月廿三日御卒去ト云。改名遠量院日壽ト號。右ハ板倉三郎左衛門治勝口書ニアリ。御兩家共ニ御子孫繁昌シテ江戸ニアリ。與左衛門殿御子息ハ酒井市郎右衛門殿ト申候。以上。

一小田原落城ヨリ土氣落城迄ハ。酒井庄三郎殿御書付ヲ用ル。

一與左衛門樣庄三郎樣御噂ハ。板倉三郎左衛門治勝口上書ヲ以ス。

一野田合戰八幡宮一位殿御噂ハ。板倉長門守書置ヲ用ル。

右何レモ年號月日慥成者也。

酒井家代々并法號之事

初　酒井越中守定隆。初小太郎後清傳入道。　法名玄通院

日傳。（大永二壬午年四月廿四日）

法名清凉院殿妙泰大姉。（大永五辰六月晦日右御奥）

二　酒井與左衛門佐定治。（後行傳入道卜云）　法名幽玄院日玄ト號。（天文九庚子年三月廿三日去）

三　酒井左衛門次郎玄治。　法名祐玄日清。（弘治元乙卯年四月廿五日）

四　酒井中務丞胤治。　法名日樂。（天正五丁丑年五月廿三日）

五　酒井伯耆守康治。　法名日慶。（慶長十三戊申年十一月三日）　妙今。（左御奥天正十五丁亥年月不知九日）（與左衛門殿庄三郎殿）御母儀也。

遠量院日壽（寛永七庚午年五月廿二日）　酒井與左衛門重治殿御事。

授記院慶含（元和三丁巳年十一月三日）　酒井庄三郎直治殿御事

跋

酒井家之記錄一卷。藏於上總國山邊郡土氣村本壽寺者舊矣。癸丑歲予蒙台命製上總國之地圖之時。請得諸本壽寺使傭書者寫之。以爲家珍云。

寛政乙卯歲三月　勢州秦檍丸識

以宮内省圖書寮本并三十輻所收本校合畢

土氣城雙廢記 上總山邊郡

城主家傳

一酒井小太郎定隆（サダタカ）後任越中守。八十七歳ニテ淸傳入道ニ成ル。中興小太郎生國遠州北知惣領ニ渡シ。康正二年丙子中春關八州兵亂ニ付。鎌倉御公方成氏公雖被召出（トシイ）。其頃上杉之一族企逆心之間。成氏公雖古河御城御落城アリ。然間文明年中房州之國主里見ノ義豐ヘ罷出。文武之以達者ヲ。兩總州之境中野村ト云處居住ス。義豐一子義弘之時代。武藏相模兩國之大亂ニ付。長享年中ニ土氣之古城ヲ再興シ。上總三ケ二知者也。大永元年辛巳ノ春八十七才ニ而號淸傳。長子左衛門ニ家督ヲ讓リ。東金ヘ隱居。

一左衛門佐後ニ號行傳。房州里見義弘ニ属シ。大永六年十二月十五日ニ鎌倉渡海之節。所々ニテ働ル不及驗ニ。天文七年中小弓之御所ト北條氏綱ト。於高府臺對陣。里見家属シ出張シ。其後左衛門次郎玄治。此時代雖一揆發ルト。一家武力ヲ以テ所々之一揆治之ヲ。委細不及記。二男大藏ト云。成ニリ板倉氏ト。一酒井家人ト成ル。此仁殿ハアレトモ足ナシ。馬上之達者長門守親父也。

一同中務丞胤治中書ハ。永祿七甲子正月房州里見義弘。義堯御親子ニ属シ。下總國於高府台出張ス。小田原氏康氏政御出馬合戰房州敗北ス。同年之冬氏康氏政西上總之内池ノ和田迄御出馬□（及落城然所イ）□多賀藏人□（小田原北條イ）北早雲淸傳ト任舊交及催促。胤治氏康ノ幕下ニ属シ。則チ長子左衛門次郎後ニ任伯耆守ト。康治小田原御供之事。

一左衛門次郎康治。此時代房州義賴ト取合數年ヲ經タリ。本納之城主黑熊大膳之佐。企謀叛之條。卽時ニ打破ル。山邊之者共具ニ知候

所也。小田原へ證人上ル。何茂康治子共父與
左衛門重治某シ無禰。天正十七丑年ノ秋分
親子三人小田原へ籠城。翌年寅七月落城。同
八月上旬歸國居城。

直治在判也

淺野彈正ニ渡ス當家五代ニシテ亡候也。

元和元乙卯年正月十一日板倉龜千代殿
右之通酒井五代直治殿ヨリ御書付居御在判
被成被下候。此直治殿ハ伯耆守二男ニテ。與
左衛門殿御弟ニ而上總國粟生村。千澤村。日
當村。千石當御世ニ罷成。家康公ヨリ御拜領
被成候。其頃伏見御城御番頭被仰付。相勤申
候處ニ。五味金十郎ト申仁ト少之事ヲトカ
メ。口論被遊候而。双方共ニ元和三年十一月
三日御遠行被遊候。御子息源五郎殿ト申而。
鳥井左京殿ニ御預ケ。其以後松平大膳大夫
殿ニ御預ケ被成候。大膳大夫殿ニ而ハ酒井
彌惣左衛門殿ト申。先祖小太郎殿ヨリ。右土
氣之城主五代之先祖小太郎殿ヨリ此方之
御事。酒井庄三郎直治公ヨリ段々ニ御書付
被下候。本書往昔之儀ハ。遠江國酒井之家ニ
在之由。小太郎以來之事成ト直治殿御口上
ニ被仰下候。

治勝判

一板倉長門守親大藏相傳之書物タルヲシルス
一土氣城主元祖ハ酒井小太郎ト申テ。御生國
ハ遠州之人ニテ。文武ニ達セシ人ニテ。數代
之武家ニテ候。御一門ハ御公方義尙公御奉
公御勤被遊。小太郎殿モ御同前之所。去共小
知成ハ御一門ニ御渡シ被遊。主從四人ニテ。
平山土佐守先祖。藤代佐渡守先祖。竹內出雲守先祖。關八ケ國ヲ御心掛ケ。武者
修行ニ御出被成候。其時之三人之衆ハ右ニ
記ス。此三人ニ先祖御供。此出雲守ハ中書殿
御妹聟ニ成。曲輪之内ニ住宅有之。土佐守住

宅ハ土氣之內。知行駒込村ニテ。藤榮惣左衛門兩人ニテ知行スル。佐渡守ハ一年土氣谷ニ被居候事モ有。此三人之先祖御供ニテ御出候頃ハ。康正二年今左衛門殿被仰候。其時分ハ關東殊外成ル大亂ニ而、京都之公方義尙。關東鎌倉之公方ハ成氏ニ而御座候。彼之君へ罷出、君臣御悅喜之所ニ。其時之管領者上杉之一家。彼ノ公方樣ニ對シ謀叛タルユへ。御一家之御城成ハ古河之御城へ御落城被遊候故。世ノ有樣ヲ御覽被成候故。彼小太郎殿右之三人之者共御供ニテ、安房國里見殿家者元來ハ五人衆ト申。彼國持來ルトイへ共。諸事相談調へカタキニ依而。五人之內壹人ヲ大將軍ニ定。殘テ四人ハ四老トナシテ。万（事カ）ハ被行事ヲ勘候ト聞。此家ナラテハ有間敷事ニ而相談究メ。先ツ房州差テ御出被遊。其頃迄ハ安房上總兩國ノ主ヲハ里見義豐殿ト號シテ。代々房州ニ御在城被成候。其時分ハ上總ヨリハ濱野村ニテ品川江渡海ナリ。折節小太郎殿濱野村口泰上人ト御同船被遊。終日之船中ニテ御噺之中ニ。法力ニテ武士之出世之事共相尋。御祈禱御賴被成、舟ヨリ上リ。直ニ御寺迄御同道被成。湯附食拵アケラレ。御暇申。安房國へ御通。漸々國主ニ近寄。終ニハ御前へ被召出テ、上方之弓箭之沙汰。又ハ諸國兵亂日夜ニ不限。鳴ヤム隙モ無之故。隣國隣鄕切捕軍之行ヲ御相談之處ニ被仰上候。小太郎殿ニ一ツモ文武之道欠タル事ハ不被仰上候故、國主被思召ニハ此仁ナラテハ。兩國ノ堺ニスヘキ人不可有ト思召。上總ト下總之境ニ中野村ト云所ニ住居被成。下總ヨリ切々手ヲ入。敵何トソ通路ナキヤウニト委細ニ御賴被居候故。上總之民百姓安閑無異ニ暮候。然共義豐ヨリ義廣

御時代ニ至リ武藏相模之大亂發リ。明暮合戰無止事。然共房州上總二ケ國ハ靜ニテ。長享年中ニ土氣之古城ヲ取立。御移リ被遊候。其頃上總三ケ二程里見殿ヨリ御拜領被遊候。其頃ハ越中守定隆ト號ス。少之間御休御住居被成候。然所ニ濱野村日泰上人樣土氣迄御出被遊候。俄ニ御座敷ヲ作事被成。上人樣ヲ御入被遊。御馳走ハ無限。上人樣御意ニハ元來品川ヨリ同船之節ハ。武士之出世叶イナハ。布施ニ御領內不殘法花宗ニ可被成トノ御約束タカヘス。御所望之由被仰候ヘハ。則越中守殿御法力難有候段申伸。御座敷ヲ直ニ御寺ニ被遊。山號ヲ如意寶珠。寺號ヲ本壽（覺イ）寺ト日泰上人被仰出候。然所ニ越中守殿御望ニハ。御尤至極ニ奉存候得共。幸南方ニ一ケ寺アリ是ヲモ法花ニナシ。山號寺號改名可仕由申上ケ。右四字ニ仕本壽寺ニ御附被遊候。內二字彼寺ニ附殘リ二字ヲ本壽寺ニ御附被遊候而ハ如何ト被仰候得ハ。泰師御尤ニ候。御意ニ而一寺茂寶珠山善勝寺ト改名被遊候。夫ヨリ段々御城下御知行之內。不殘法花一宗ト罷成。濱野村土氣兩所ヲ御通ヒ被成候事數年也。去共土氣、武士之出入御六ケ敷可有御座由ニ而。元來中野村先年某開起龍在候處ニ御座候。爰ニモ寺ヲ取立中度由賴上候ヘハ。望之コトク寺モ立。折々御入被遊候。彌以上總靜ニ罷成候故、越中守八十余歲ニテ髮ヲ落シ。淸傳入道ト號シ。東金之城ヲ取立隱居被遊。土氣城ハ長子左衛門助殿ニ御讓リ。是モ後ニハ髮落行傳入道ト名乘リ。其一子左衛門次郎玄治ニ家督ヲ渡ス。此時代ニ在々所々心替リ之者共有而。常陸國佐竹殿家來衆ヘ文ヲ遣シ。軍兵ヲ呼時モ有。佐倉ヘ文ヲ遣シ人ヲ寄セ戰時モ有。玄治殿身

ヲヤツシ御家中ト同前働。四角八方ヘ敵ヲシリソケル事。其頃之老若共存所也。此紙面ニハ中々乘リカタキ事共也。玄治殿御子息之内ニ片輪成ル人有リ。スネヨリ下足クヒナシ。去共馬乘之達者成事ハ御家中ニ無之左衛門次郎殿如何被思召候哉、板倉氏ト成シ大藏ト名乘セ、長門守子ニ持、大藏兒酒井中務丞胤治家督ヲ續キ、其時代ニ下總國高府之臺ニオキテ、小田原御城主北條氏康氏政御親子御出馬。房州ニテハ御屋形義弘。義堯御親子御出馬。彼地ニテ大キ成合戰初ル。永祿七年甲子正月中ヨリ二月迄。夫迄ハ如先規之房州屋形樣ニ屬シ加勢スル所ニ。義弘打負ケ。千葉迄敗北ス、初之合戰ニハ勝利ヲ得、成程小田原勢市川。笠井。江戸ノ邊迄敗北之處。敵之方ニ功者之武者有テ。小金之人數ヲ招寄セ。後詰ト定。少シ息ヲ休候所ニ。房州勢勝ニ乘テ甲ヲ脫ヨロイ抔モ櫃ニ入。勞馬ニ秣ヲカヒ、歸國可仕處ニ、俄ニ惡風吹キ掛ト。小田原勢四方之相圖ヲ定メ。貝ヲ吹キ一文字ニ瞳ト掛リ候故、風ニ木ノ葉ノ散ル如ク大將ヲ始メ海ヘ馬ヲ乘入レ。命計ニテ逃ケ去テ候。其時分名有者兩勢打死スル也。小田原勢ハ、上總之方ヘハヤメ候故、義弘モ諸大名モ周章騷事限リナシ。然處中務丞胤治親子山邊之家人等、稻毛浦ニテ返シ合テ散々ニ合戰ス。其時ニ左衛門次郎康治廿五才ニテ表疵七ケ所負被成候、七ケ所之傷小ビン一ケ所。左ノホウ。右之ウデニ二ケ所左ニ少シ突疵二ツ。股ニ二ケ所。何レモ深疵ニハ無之候ヘ共。御本復被成候ヘルハ。冷敷有之候事。若菜豐前守之父モ、稻毛下ニテ討死スル。豐前モ敵之方餘リ長追モナク日モ暮ル故。次第ニ引候故。皆々安堵仕

候テ。馬ニ息ヲツカセ候テ。千葉ト士氣之間ニ大キ戍田谷有ヲ便リニ休。皈宅有之。永祿七年子二月二十日成ケリ。先年天文戊戌十月七日。小田原氏綱御出馬被成。下總國小弓御所源義明公ト合戰有。其時ニ里見義弘安房上總兩國ノ勢加リ。合戰スルトイヘ共。小弓城主御子親ナカラ打死。其時分小弓城ツフレ候。代々高家之時也。其時モ兩國之武士敗北ス。義弘ハ上總指テ落行也。是モ高府之臺ニテ之事也。永祿ヨリ前方之物語也。永祿中彼ノキヲイニヨツテ。上總國池和田ト云城ニ多賀藏人在城スル所。北條氏康公御親子ナカラ御出馬。夜ヲ日ニ次テ御責被成故落城スル。多賀藏人。舍弟兵衛大夫討死。城ヲ請取。城代ヲ申付。氏康公中書方へ御上使ニテ被仰候儀。此方先祖ノ早雲ト其方先祖ノ清傳トハムツマシク暮候。文ヲ以テ及再參御催促被成候故。不及是非里見ヲ背。小田原幕下ニ屬。長子左衛門次郎康治人質ニ被遊。小田原へ御供ニテ御皈陣被遊。然ハ小田原へ寄附スル事ハ。永祿年中ノ事也。扨亦在々所々房州へ心指之侍共。樣々人數催シ。士氣城へ折々雖爲敵寄ルト。中務親子ハ驚事モナク。數年心ヲ緩ス隙モナク。士氣ヨリハ逆寄ニテハ敵ヲ討シタカヘ少モヨハミヲ不見。在々所々ニ頭ヲ懸ケ幷ヘ候故。十四ケ年之內ニ十里四方ニ壹人モ敵ナク。詰リ々々之番所皆申付。房州ヨリ何之妨モナク。民百姓心安キ日ヲ暮候。扨祉上總半國ヲ手ニ入。其上人數多ク有之而。一ト年セ本納之城主黑熊大膳佐ト申城主。房州里見殿エ心ヲ通シ。士氣城ヲ責亡シ。彼ノ所領ヲ拜領可仕トノ行テニテ。房州エ人數ヲ所望ニ罷越候處。胤治康治御親子御出。左右ノ山ヨリ責入。大

弓ヲ鉄砲ニテ被打入。本納衆ヲ失ヒ。殊更能キ侍ハ房州行ニテ留守也。大膳助タマリ兼切腹ス。辰ノ刻ニ落城ス永祿年中ノ事ナリ。大膳之使者房州衆ヲ流山ト云所迄同道スル所ニ。右落城之由ヲ聞キ。房州衆ハ皈ル。大膳家來共ハ科モナキ法目村ノ者共ヲ拾人切殺シ。何レモ切腹ス。殺候拾人之塚ヲハ法目村ト萱場村之塚ニツキ置也。于今拾人塚迚アリ。扨テ康治城之躰ヲ見下思召。此東ノ方ヘ道當城ニ當テ無用所也。町ヨリ南ノ方ヘ廻リ可申御意ニテ則南ノ方ヘ廻シ。海道ニ用ル也。落城以後塚築候故。以後塚ト云ナリ。爲城代ト三人置也。板倉甲斐守。同右衛門佐。麻呂因幡守具ニ兩郡老若男女知之故委細記ニ不及。永祿十二年頃方々切捕候故。東金領モ土氣領モ廣リ候ヘハ。小田原ニテハ姉ケ崎。久保田。摩呂谷。長寺。万騎。太田喜。正木大膳太夫之城。勝浦ハ正木左近之大夫如此城主共。皆々氏政公之御手ニ入被遊候故。彌以テ其城内之百姓ハ心安ク日ヲ送ル。下總ハ不及申。常陸國半國手ニ入。關八ケ國氏政御時代ニ御手ニ入候得共。山邊郡兩城之武士ハ安閑ト月日ヲ暮シ。右之處小田原不付時ハ。壹年ニ一二度ツヽハ戰ヤム事ナシ。其時分ハ土氣東金兩城ハ明暮合戰談合計ニテ油斷無之。然ハ名字之百姓ハ酒井殿ヨリ扶持方ヲ取。田畑ヲ耕ニモ畔アセニ鑓長刀藤柄ノ大小ヲ立置キ。土氣ニテ鐘。大鞁。貝吹候時ハ。耕地ヨリ直ニアガリ。先帳面ニ付也。一番ニ鐘。二番ニ大鞁。三番ニ貝吹ヤウニテ。諸事支度有之。一トシテ事之闕ル樣ナキ。康治被成候。兩酒井三代目小田原ニ同心ヲ背義有之候テ。水火ノ如ク相違之儀共有之所ニ。ウスキノ御城主原式部大輔殿仲立ニテ。兩

酒井中直リ。互ニ御一門成ハ御出入有之。然所ニ世中ニ生者必衰之ナライ程難遁事ハナシ。天正八年ノ秋比。關東八ヶ國之武士滅亡(時脫カ)來テ。寅ノ七月六日辰ノ刻ニ小田原落城ス。七月中ヨリ八月迄關東ニテ城數七拾三ヶ所。羽柴太閤秀吉公日本國之勢ヲ以責亡シ如此。氏政ハ七月十一日御切腹。氏直ハ高野へ御登リ被遊。然處伯耆守康治ハ小田原ニ籠城之折節。上方ヨリ太閤之爲御下知土氣迄書札雖被下置ト。小田原へ御詰候故。金谷ニ平賀ト云者有。道中之達者故。エラヒ被出。是ヲ遣所ニ。小田原表ハ關所稠敷。鳥モ翔リカタク見エル故。海中七里ヲ游越。小田原ニ近付。秀吉公ヨリノ書狀ヲ差上候所ニ。氏直ノ御前ニ伯耆守殿相詰候處ニ。取次之者秀吉公ヨリ御狀ト申上候故。康治御前ニティ見仕候得共。上方勢ニ屬シ。淺野彈正ト可申合セ御文章。康治御前ニテ火ニ入。起請文ヲ上ケ候得者。氏政御親子御意ニハ神妙也。役所ヲ替ヨト被仰付。始之役所原式部大輔殿組內成ヲ引替。御馬屋之當リ。合戰スヘキ場所曾テ不存所ニ兩酒井有之テ。異見者ニ候。八月十日小田原ニテ家康公へ御禮申上。漸々廿日時分ニ下着ス。若栄豐前守所へ御入被遊候。其後中須村小庵ヲムスヒシハラク被成御座候。御入國之繩入衆。田地百石領內ニテ被宛行。浪人ニテ御座候處。其後小田原へ御越折節。石痲ト云御煩ニテ慶長十三年申ノ十二月三日御遠行被遊。御子息與左衛門。弟三郎殿。大綱城主三浦監物殿御取持ニテ。家康公エ被召出。御知行給候。御親父ハ主殿人相氣高樣相見被申故カ。上總樣被仰上樣ハ。伯耆守ハ家康公エ疵物ト被仰候。其時分專ラ風聞ニ候。如何被成候歟。此兩人

ハ被召出候。兄與左衛門殿御知行ハ。武藏國ヲソネト云村九百五拾石。弟庄三郎殿御知行ハ。上總國栗生野村千澤村日當村ニテ千石。右之通初紙ニモ記ス。前後同前也。

長門守自身覺書之者也

一永祿八年之事成ニ房勢六七百騎ニテ。關井戶。草苅村之方ヨリ馳來ル。千葉ト土氣之間ニ大キ成ル田谷有ヲ分捕。土氣ヘ可責入由告來事アリ。兼テ大勢催シ瀧臺ヘ出ル敵モ間近ク寄。馬上ニテ討モ有。カチ立ニテ竹內大夫左衛門ト云者。半弓之上手ニテ。片原ニ隱居テ。寄立之侍。馬上之侍拾四五人射殺シ。無比類手柄仕。伯耆殿被聞召及。太郎左衛門ハ扨モ手柄カナ。如何スヘキト被仰候所ニ。富田伊賀守申上候ハ。太郎左衛門ハ此度拾四人ノ武具ヲ脫取。大キ成有德者罷成候。其通ニ相成由申上候故。長門守大キ立腹申。康治公ヘ樣々申直候得共。伊豆守更ニ一道不仕候故。意趣ニテ互ニ中惡敷候テ打過候。長門守書付ニ有之候。其頃ハ野田合戰ト申タル也。

金杉攝津守殿如此書付。前崎谷之金杉豐後守殿被遣候狀ニ有之。寫置候。

一伯耆守弟ニ一位ト云惡僧有。曲者ニテ有之故。坊主ニ被成候。天正十七年正月廿三日本國寺土氣ヘ振舞ニ御出候時。其晝時分宮谷ヘ一位被參。拙僧住寺ニ可被成由ニテ。直ニ寺ニ入。寺旦共ニ驚。右之由土氣ヘ申上候得ハ。殿樣大キニ御立腹被成候得共。早速ニ難成。日曲上人ハ畑中村御入被成候。彌以御立腹ニテ御役人ニ申付。追拂被成候。直ニ房州ヘ參。土氣城拙僧ニ可被下由申上。兄伯耆守ヲ殺シ可申儀。委細披露仕。病ニ取付長南迄參リ候テ相果候。煩ハ骨ノナヘル煩也。日曲

其內ハ畑中村ニ。翌年寅正月迄被成御座候テ。歸寺被遊候。某隨分骨折申候

天正九卯八月　日　板倉長門守

一胤治ハ數度手柄成事共有之。永祿元年之頃房州加勢太田美濃守後ニ三樂齋ト云。武藏國岩附之城主方ニ小田原ニ屬シ仍テ爲敵。永々籠城之所。角田河洪水ニテ武藏下總飢饉ニテ兵粮遣ニ及我（餓）死兵粮所望ニ房州へ所望候得共。義弘土氣東金長南指添。荷駄共一千金駄遣之所ニ。小田原方ニ城主遠山左衛門、北條治部少輔其外加勢之人數、市川ヲ越散々合戰ス。江戶衆行列ヲ亂ス右之外討負候故。又此方ニテモ油斷仕候所ニ。小田原跡ヨリ荒手ヲ入替責候故。命辛々ニテ敗北ス。其時胤治馳來テ得勝利ヲ。義弘太田美濃守御同道ニテ。推津其城へ御入被遊候。將又時刻ヲ不移。北條左衛門左馬介跡ヨリ行列ヲ不亂責掛リ候得共。日モ暮候故無程引返ス。氏康御馬千葉へ御入被遊候。中務丞胤治ハ手勢一人モ不死。前後ニ皆敵ニテ通路難成佐倉之方ヲ心掛ケ。原道ニ乘出シ。少シ息ヲツキ。馬ニモ秣ヲカイ正月九日之晩。後ニト軍兵共ヲ引具シ歸城ス。去程ニ房州へ荷駄幷太田美濃守岩付エ送候。然間義孝ヨリ下總之內闕所之地給ル。家中之武具類拵新敷仕候人モ有之候。委細ニ書付候。紙面ニハ不被盡候。後代爲覺書也。又餘ノ方ニモ覺書可有之候。談合可允之候。以上。

永祿三年正月吉日　板倉長門守

大藏口上ニマカセ。寫之モノ也。

年號我等代ニハ天正元年ニ寫之者也。

一天正十年之頃。伯耆守殿念願之儀有之候間諸家中集リ。於縣大明神ニ。三日之御酒宴之

事有リ。
狩野右京佐筆ニテ。牛若弁慶繪圖ニテ掛之。
若菜豐前守掛之。後代之爲覺ニト書置者也。
午十月十九日　長門守
右此書ハ酒井一家必傳之書物也。
以宮內省圖書寮本謄寫校合且參照內閣文庫本幷三十輯所收本畢

土氣城雙廢記終

土氣東金兩酒井記

一酒井備中守親子三人　北野幸谷村妙德寺ヘ御牢人シテ居給フ。其後江戶ヘ御出。三浦監物之御取持ニ而。御當家ヘ被召出。夫ヨリ伏見御番頭ニ被仰付。知行土氣東金兩酒井子息ニ千石宛給候也。土氣城主酒井伯耆守子息與左衛門ニハ。日當村。千澤村ヲ拜領ス。酒井備中守子息掃部助ニハ。三州桑名ニテ千石給候。伏見御城御勤番所ニ。御同役五味金十郞ト致口論。兩方三人打果ス。掃部助子息源五郞ニ。鳥井左京助御預リ。與左衛門子彌三左衛門ヲハ。九州毛利大膳大夫右之分也。
一大永六年十二月十五日。本納城主黑熊大膳亮幷大關城主留山六郞重康。古戰之欝憤。於于今不散。企謀叛。黑熊ヲハ土氣酒井伯耆守則景ニ攻落サス。亦大關ヲハ東金ニ而攻。此

城四方浮沼ニテ難攻落。數日攻戰與云ヘ共不落。畠山五郎重康武勇弓馬之達者ニ而輙難責落。東金勢之大將ニ。石橋三郎左衛門。栗原兵部介謀狀ヲシタヽメ。城中江矢文射ル。重康之兩家老。今關勘解由左衛門。山岸重力之助矢文ヲ見テ。曩飯亦アイツノ矢文ヲイカヱシ也。重康之晝眠シ給フ所ヲ。障子陰ヨリ山岸重康ノフヱノクサリヲ射通シケル。ヲキアカラントスル所。勘解由左衛門御首ヲ打落ス。酒井備中守方ヘサシ出ス。

一酒井伯耆守康治之次男大藏守。大網町板倉之養子世家ヲ繼。酒井之家来ト成給フ。此仁股者有供無足弓馬武勇之達者ニテカタヲ幷フル人モナシ。子息也。後ニハ板倉長門守ト號ス。

一東金之城主酒井備中守玄次之次男。中務丞因治中書ハ。永祿七年甲子七月房州里見義弘ニ賴。上杉一族企謀叛。其頃里見ト一通也。委土氣ニ有之也。

一土氣東金兩酒井御一家之法號

大永二年壬午二月廿四日

清傳入道之法號　玄酒院日傳。是ハ清傳入道之御同所也。

永正五年戊辰六月晦日

清涼院泰妙

天文九年庚子三月廿三日

涼源院日玄　是ハ土氣伯耆守康治前ニ法躰シテ行傳入道ト號。

弘治元年乙卯四月廿五日

祐源院日清　是ハ東金之城主酒井備中守玄治。

天正五年丁丑五月廿三日

源涼院日樂　是ハ東金之城主玄治二男中務丞因治。

天正十五年丁亥十月九日

清量院妙含　是ハ土氣之城主酒井伯耆守御内儀。與左衛門庄三郎御母。

慶長十三年戊申十一月三日

東金後備中守玄治次男

元和三年丁巳十一月二日
遠甘院日壽　是ハ酒井與左衛門重治
寛永七年庚午五月廿三日
授記院慶含　是ハ上氏酒井伯耆守二男。庄三郎直治。
東金城主
酒井備中守玄治之家老　諸侍名
酒井清藏　家老大谷ニテ古河出雲守
酒井清四郎　家老椎名豐後守
大名分吉侍　渡邊甚左衛門
中村攝津守　家老松井隼人
齋藤四郎左衛門　藤田長兵衛　石重郎右衛門　伊藤九郎左衛門
古河右衛門佐是ハ出雲守弟ナリ。　市東筑後
小安彈正忠　小安兵部　同刑部丞
大多和内近亮　大多和豐前　岡本周防
今關河内　今關勘解由　鈴木信濃
岡本民部少輔　鈴木三河　飯田大和

鈴木監物　吉田大和　早野伊賀
飯田三河　早野土佐　古川信濃
古川舍人佐　幷木備後　小幡筑後
山下和泉　栗原佐土　高知尾因幡
市原近江　市原右衛門佐　宮野丹後
小安若狹　鍬田土佐　小熊豐後
中田對馬　藤田伊勢　中村土佐
酒井孫九郎　小川播磨
御醫師一色臥水　今御殿之内ニ而尾敷跡アリ
砥隱伎正　藍　大和　醫師石田治部少輔
石田丹後　宇佐美兵後　木戸壽新
三上修理大夫
御旗本諸役人面々
飯田助五郎　飯田源右衛門
布留川清左衛門　海老根庄左衛門
川嶋清右衛門　野口外記
小川彌五郎　中田半三郎

川島善左衛門　中村新右衛門
鈴木新兵衛　頓阿彌彥左衛門
中村次郎四郎　村越市左衛門
松戶四郎左衛門　村半右衛門
市原藤左衛門　田中孫左衛門
內山善兵衛　藤田十郎兵衛
川島次郎左衛門　石渡隼人
源田孫左衛門　鵜澤內匠
鵜澤惣左衛門　中田藤左衛門
藤田新兵衛　田邊外記
遠藤小八郎　秋葉民部
中田新兵衛　日下部帶刀
大村孫左衛門　長崎力之丞
內山主計　石川淸左衛門
小宮主計　矼源四郎
野瀨外記　戶田源左衛門
古川右衛門　戶田內膳

鵜澤與五左衛門　中村源六
藤田縫殿丞　三橋隼人
島田淸左衛門　山本小四郎
中田與三衛門　石橋三郎左衛門
山本主殿佐　小川次左衛門
伊藤九郎左衛門　市川七郎左衛門
古川太郎兵衛　蜂屋半兵衛
早野次郎兵衛　中村源左衛門
椎谷甚七郎　佐藤又兵衛
佐藤又內　鵜澤市左衛門
椎名孫七郎　山本四郎兵衛
早野半六　小安次郎左衛門
大木與兵衛　山本新兵衛
木村大學之介　岡本太郎左衛門
市原勘解由　山本縫殿之丞
篠崎十左衛門　木村源三郎
成毛新兵衛　瀧治部少輔

戸田□勝允
藤倉惣九郎
古川惣七郎
木村帶刀
折木外記
古川太郎兵衛
秋葉民部
藤田兵庫
藤田源八

田間村面々

北村藤左衛門
北村次郎左衛門
古川伊豆
石井彌八
猪野新左衛門
海保主計
大田小六

川島法師新治
野中平左衛門
小幡彥四郎
片岡主計
早野喜兵衛
小熊豐後
飯田日向
笹崎十郎左衛門
篠崎源左衛門
鈴木監物
中村四郎左衛門
石井九郎兵衛
遠山五郎左衛門
小安大藏丞
勝田八郎左衛門
內山太郎左衛門

第六天禰宜
彌喜大夫　同役　彌權兵衛
カチ遣矢脇上手
瀨尾藤兵衛

道庭村面々　是ハ備中守目掛腹子也。

酒井右衛門亮　行方十郎左衛門
同四郎右衛門　櫻井平次右衛門
山崎縫右衛門

家子村面々次第此下切テ見ヘ不申候

御知行五千石　則御知行場所
家子村　姫島村　湯板村　森村　求名村

此崎貳枚切テ見ヘ不申候

一上杉尊貞比丘尼

家老　佐藤兵庫之助
（同孫左衛門
同孫十郎
此兩人源左衛門尊貞子カ書方不明

上杉源左衛門尊貞子息
鎌倉成氏將軍御一家ニテ御イタハリナリ。
宗繼齋　葛原九郎右衛門　西川內匠介

東金ヨリ附人
飯田內藏助　鑓田玄馬允　塚瀬隼人佐
同
鵜澤與五右衛門但代官役也。
是ヨリ末三枚切テ見ヘ不申候。
小野幸谷村面々
塚田右馬之介　同　帯刀
同孫三郎　礒勘解由
鳴川次郎左衛門　鳴川五郎左衛門
同　主計　市（原カ）東右衛門
高知尾內匠介　同小三郎
遠山雅樂介　小川新左衛門
高山勘解由　宮川藤右衛門
豐田次郎兵衛　ロ鳥九郎左衛門
外村助右衛門　吉岡新兵衛
同左衛門　松戸孫右衛門
土屋平右衛門　吉岡與次郎
市（原カ）東伊勢守
東士河領面々

鍬田土佐守　小安右京助
鍬田隼人佐　宇津木市之丞
並木備後守　中村庄左衛門
行川內匠助　本田九郎左衛門
岡村藤右衛門　□隱岐守
澁川面々
小關兵部少輔　成川玄蕃允
南白龜面々
竹岡兵庫助　長嶋四郎左衛門
川野杢之助　御遠生治部少輔
大當次郎左衛門　齋藤平右衛門
藍右近次郎　板倉六郎左衛門
川野庄左衛門　鶴岡平左衛門
黑川孫九郎　加勢新左衛門
瀧澤村
石田藤右衛門　今井兵衛太郎
三ヶ尻村

古川與五右衛門　　同民部少輔

慶增八郎左衛門

以宮內省圖書寮本謄寫校合畢

土氣東金兩酒井記終

合戰部四十三

國府臺戰記 一名鴻臺前記

國府臺御沒落之事

抑下總の國こふのたい御戰の年號をかんかふるに。天文六年十月上旬の比とかや。まことに御所さま御滅亡の由來をくはしく尋ぬるに。かの君は清和天皇の御末。政氏將軍の次男高基樣の御舍弟義明とそ申ける。御兄弟の御中不和にならせ給ひて。みちのく御一見とそ聞えける。爰に上總の國の守護代にたつたのふんそう眞里谷三河守。千葉の御內に原の次郎と所領にあらそふ事年久し 依之三河守陸奥へ使者をたて。義明の御發向を申なし。彼原の次郎かたへ籠る小弓の城へおしよせ。三とせの間に攻落し。義明の御座をおゆみにこそたて申。房州上總の兩國の侍共ふた心なく彼君を守護し奉る。本よりかの將軍は。弓矢を好ませ給へは。房州上總兩國の軍兵をうこかし。原の次郎か家の子高城越前父子を御退治あり。同下野守父子を御放追有て。其後程なくして原の次郎を攻ころし給ひて。御心中に思召けるやうは。丸にむかつて弓矢をとる者あるへからす。はたしては關東の將軍にならん事何

の疑ひあるへしと思召るゝ處に。爰に北條の新九郎氏綱と申て。當世の弓矢取なり。かの氏綱心中におもはれけるやうは。扨も父にて候者關東へ亂入。相州に旗をあけ。自にむかつて申されけるやうは。いつか關東を討滅ほし九郎に官をすゝめつゝ。鎌倉に御所をたて見まほしさよし宣ひし。今みつからか代となつて。武藏の國を討亡し。やかて關東を我手にいれんと存するに。義明のいきほひに恐るゝ事の無念さよ。されは古人の言葉にも。しやつ〔尺〕くわく〔蠖〕の身をつゝ〔かい〕むるも。[illegible]へんかためと聞ときは。かの君に我身をつゝめまひらせて。時節の風を待てほろほと申て。其後は八州に我身をのへん事は一定也。先あやつり申せやとて。さん〳〵しゆきよく〔金銀珠玉〕を調て。かはり〳〵に使者をたてこんほう申せと其甲斐なし。北條おもはれけるやうは。りやくにかゝらぬ敵をは直にはたへを打合て勝負を決せんとそいかられける。好事門を出されとも。惡事千里を走るとかや。此事小弓へ告きこえ。そのきにて有ならは。中途に地利をかまへ置。おそひきたる處を唯一きりとおほしめし。よきちはいつくに有やらんと御尋ね有けれは。かしら人々申あけられける處多しと申とも。とね川なかれのすえ。いちかはと申ゆんてにあたつて。こふの臺と申山有。かの山と申は。むかし日本武の王子東のゑひすを御たいちの後御上洛のをりふし。かの山に休みゐて。麓の川のあさゝふかさを見給ふに。いつくともなく鴻と申鳥ひとつ飛來て。川のあさ瀬を踏そめて。尊にみせたてまつりしかは。尊あまりの御よろこひに。かの鳥にむかつて汝に此山をいたす也と宣へは　此鳥勅を請て常に此山にすみける。見る人是をなつけてこふのたいとは申也。此山は

あふきのやつの御内に。太田の道灌かうすいの城にむかつてかへ地にとるとかや。麓の川をたよりとしてむかふる敵を待給へは。房州上總下總三ヶ國のにんふにて。三日三夜にきつかせ。御所樣の御舍弟元頼のわかきみをさし添申。三ヶ國の侍共に仰付られ給ひて。よせ來る北條をまたせ給ふそゆゝしき。去間。北條殿は此由を打聞て。關東の諸侍の御請を申さぬ先に。いそき勝負を決せんと。十月四日に小田原をうち立て。五日と申辰の刻に。武藏國にきこえたる江戸の城に着給ふ。ちやくとうつけて見給へは。二萬八千餘騎とかや。去間。氏綱はきんこくさいと申て。日來はねころそたち也。當家にしゆくゑん深ふして。弓矢を取て一度不覺の名をとらす。かのきんこくを北條殿の御前に召出し。いかにきんこく承れ。今度御所勢にはせむかひ。是非に勝負を決すへし。汝先かけ仕り。目さましき軍申せやとて。春こまのすくれたるをきんこく給はり。なゝめによろこひて氏綱に申けるは。御當家のひやうきと申は。くんしん一にあつまりて。吉凶をえらひ給へは。かけひきともに不覺なし。御所方の弓矢と申は。君の心ひとつにして。御評談もましまさねは。くんしんの心調はされは。少しのおくれましまさは。弓矢なをる事あらし。いかさま此入道か先かけ仕り。見參にまいらんとて。御前を立けるは。老武者とは申せとも。鷲くまたかのことく也。去間北條殿は。夜半にまきれて淺草川をうち越。おほつ(松戸)の宿はまた夜深きにとをりすき。敵をまつとの堤にて。評議のやうこそおもしろけれ。氏綱は床机に腰をかけ。御休にてまします。氏康を始として。諸侍をまねきよせ。下知せられけるやうは。扨もみつから關東へみたれ入。世をたも

つ事は三十餘年。夫我朝は神國なり。神は非禮をうけ給はす。さためてほんそうかへさるへし。年去或神書には。神ひとりたつとからす。人のうやまうに依て威光をますとうけたまはれは。たとへ源氏の氏神なりとも。伊豆箱根三島をはしめ奉り。若宮まてもさいこうし。ゆみやをいのりたてまつり。神は正直の頭にやとらせ給へは。けふのいくさになとかしるしのなかるらん。うけ給はれは。義明はゐのしゝ武者とやらんにて。むかふはかりをやふらるへし。其義にて有ならは。たうほうの人數を左右へおしわけ候ひて。御所方のつはものを眞中に取籠て。新手をいれかへせむならは。たとへ四王星刹のいきほひにてましますとも。終には討取申へし。先弓手の大將には。はこね殿はしめとして。まつた。おいし。しみつ。かの。笠原に申付。扨めての大將には。とを山。さんこく。山中。をはた。ため。あら川。其外の侍とも。御旗本を日懸。我等父子はまん中にひかひつゝ。敵味方のかうおくを見物せん。年月の一戰はけふにすきたる事あらし。はやうつ立と下知せらるゝ。軍兵ともは。是を聞。懸りたいこをはやめつゝ。まつとの川を越けれは。御所陣の内よりも。しゐつ。むらかみ。ほりゐ。かしまを始として。五十騎はかりさかみたいにうちあけて。敵の人數を見合る。いそき御陣へまいり。きみに申上るやう。北條人數を見申に。一二萬にもすきぬらん。かの川をこすならは。御一戰はおほつかなし。川をこしたるやつはらか。一二千もや候らん。軍心のなきさきに御人數をつかはされ。うしろのかはへおひ漬て給はゝ。むかひにそなへる旗本もいきほひをうしなひ申つゝ。定てたいさん申へしと。をの〱申上けれは。御所様きこしめし。軍の勝

負は人數の多少によらす。天道のまつりこととをまつとなり。とし比北條にはたをあはせぬゆへにより。關東さたかならす。此度御たいしなされては。八洲をしつめへし。たふ〳〵と川をこさせ申あけよと宣へは。御前外さまの人々は。あきれたる風情なり。去間氏綱はいそき川をとりこして。惣手を左右へおしわけて。父子の人々はまん中にひかへつゝ。御所せいを待たる有さまは。いまた時にはあらねとも。立田あそひのには鳥の。共を待かことく也。去間御所さまは此山を御らんして。三ケ國のくんひやうをそうの手さきにそなへさせ。北條にさしむかふ。半時はかりは言葉たゝかひ。其後はやいくさ。ことおはれは。はやたちうちになりけれは。互に合する時の聲。しゆらたうよそになかりけり。本よりも北條はかねてたんする事なれは。三日月なりにおしよせて。御所勢の旗本をまん中に取籠て。ひみつになれとせめたりけり。三ケ國のつはものともは。きみを敵にへたてられ。弓引迄もなかりけり。かゝりける所に。おほきみをはしめたてまつり。御舎弟元頼わかきみ兩三人は。馬よりおりたゝせ給ひて。四方よりもよせくる軍兵を東西へはらひ給へは。さつとひきたるその跡は。さんのみたせることく也。おしかへしおしもとし。七十三度におよふまて。あら手をいれかへせめ申せは。さしもにかうなるきみたちも。よはりはてさせ給ひけり。わかきみ宣ひけるは。いかに元頼きこしめせ。丸は大事の手をおひたり。腹をめさんとのたまへは。元頼きこしめし。當家に腹を切事はひとつ子細候なう。北條かたうになにのしたかひ候へき。旗本にみたれ入。氏綱とさしちかひしゆうのあひてに仕給へと。きつていらせ給ひけり。北條はこれをみ

て。きみたちにてましますぞ。のがし申事なかれと。なきなだをとられけり。御前の侍に。いしまき。くわはら。大同寺。伊藤。あさくらをはしめとして。こゝを専度とたゝかひければ。痛はしや雨きみはこゝろはたけくましませとも。御手はおほくおひ給ふ。御身もつきはて。終にはうたれ給ひけり。かゝりける處に。おほ御所さまは。北條を御目にかけ。其ひまを見たまふに。たけ七尺におよひたるおのこ。くろかはおとしの腹卷に。半月うつたるむしや一人。五尺三寸ぬき持て。大音あけてよはゝるやう。北條殿の御内に。あんとうと申者は。おそれにて候へ共。御所さまの御あひてにまいりあはんと云捨。御まへにはせきたる。義明は御らんして。やさしき者の振舞やと。しはらくあひし給ひて。かふとのまん中ふたつにさつと打たまへは。あしたの露ときえにけり。敵兵はこれをみて。おそれをなしてちか付す。大せいの中より。よこ井神助と名乘て。三人はりに十三束取てからりと打つかひ。半時たもつてはなしけり。このやかはしりわたつて。御運のつきる所かや。御所樣の召れたる御きせなかのあまりより。うらかくはかりたちたりけり。さしもにかうなるきみなれとも。御こゝろもみたれつゝ。雨眼を見出し給ひて。北條か旗本をはつたとにらませ給ひて。七尺三寸の御劒をつえにつかせ給ひて立死にこそうせ給ふ。然とは申せとも。あたりに近つくものはなし。かゝりける處に。相州の住人。松田彌二郎と名乘て。三尺一寸ぬき持て。御前にはせ來る。御きせなかのあふりを二刀うかゝひ申せは。本よりたましゐさり給へは。弓手へかつはとつとまろひ給ふ。松田此よし見まひらせ。御くひを給りけり。かの君の御最期は目を驚かす計りなり。こ

ゝに物のあはれを止めけり。御所様のめされたる鬼月毛と申て。御ひそうの御馬あり。君の御さいこを見まいらせ。まへの足ををりて。二聲三聲いはひしか。敵陣をかけまはり。御いくさはより。おゆみへは五十餘里のみちなるを。たゝ一時に御所中へかけ入て。御ゑんのきはにとうとふす。あらき息をほつとつき。たからかにこそいはひける。おりふし御所中の女房達は。月見殿にあつまりて。くわんけつまつさい中とおほえたり。しかるにかの馬のいはうこゑをきこしめし。上下の女房たち。一度に座敷を立給ひ。此馬を見たまふに。かなたこなたにてをおひて。きなるなみたをなかしつゝ物いうさうに見けれ共。六根ふく(不具)の物なれは。たゝいはうはかり也。古しへ義經やしまのうらの合戰に。佐藤次信御矢代に立ければ。太夫くろを給ひける。この馬次信かしかいを三度

めぐり候ひて。終にむなしくなりはてゝ。めいとに行とそうけ給はる。夫はけん(賢)の御代。これは末代愚成世にかゝるためしも有けと。上下萬民をしなへて。袖をしほらぬ人はなし。かゝりける處に。佐々木四郎へんみの八郎。さのゝ藤三まちのゝ十郎。此人々は敵におしへたてられ。君の御さいごにあはさる事むねんにおもはれけん。むまたてなをし。敵陣へかけ入り。おもひ／＼にうちしにせんとする處に。こゝにこたかき所より。よはゝる聲のきこゆるを。人々きつと見てあれは。邊見の山城守の手おひて忍はせける。人々馬より飛ており。いかに／＼と申ければ。山城申されけるやうは。いかに方々きこしめせ。大せいにへたてられ。君の御大事におくれ申のむねんさよ。乍去爰にて腹を仕り。君におつ付申へし。いそき方々は小弓へはせまいり。乙若君をくそくし申。いつ

地へもおち申。御ほんいを待給へと山城申されたりけれは。人々此由うちきゝて。扨も山城はあやまりにて候そ。他人のてうしんか身のてうになるへきか。おもひ〳〵に討死して。きみの御供申てこそ。末代迄も面目也。はやかけ入んとする處に。山城此由を見て。なふ人々しはらく物をきゝ給へ。先王のほろふを見て。後王に忠せよと。黄石公ものこしおく。はやきんたち御滅亡にてましませは。乙若君をのこし申。鳳鳥の時を待。二度世に出給はゝ。めいとにおはせしきみ達も。定て悦ひ給ふへし。さあらん時に。はうはい達我跡とひてたひ給へとかきくとき申されけれは。さしもかうなる人々も。たうりにつめられて。互にしやうしのいとまこひ。けにあはれにそ覺ける。かくて山城守は腰より扇を取出し。敵の方をまねかれける。北條殿の御内に。山中の修理亮此由をみるよりも。二三百騎にてはせきたる。山中はこれにあり。わとのいかなる人やらん。其名をなのれとせめけれは。山城聞て。みつからは御所方に逸見の山城とて。兼ても存て候らん。ろうむしやの事なれは。大せいにへたてられ。君にをくれ奉る。能々かいしやく仕給へとて。腰の刀をするりとぬき。腹十文字にかき切。五そうをつかみ出し。はやいとまとそこひけれは。山中此由をみるよりも。なさけあるものなれは。一しゆはかうそきてえける。

うつわれもうたるゝ人ももろ共におなしうてなのなかにならまし。とたちをふるかと見えけるか。頭はむかひに落にけり。かの人のさいこのしき。ほめぬ人こそなかりけれ。かくて佐野。町野をはしめとして。いそき御所中へはせまいり。若君に申上るやう。さても我きみは北條に取こめられ。はや御しやうかいにて候

そ。我等も御供仕り候を。山城入道申やう。若きみを御供申。いつ地へもうつし奉れと。さしきつて申されける間。甲斐なきいのちながらへて。御前にまいりて候なり。いそきおちさせ給へと。おの／＼申上ければ。若君きこしめし。いつ地へ行。たれやの人かしゆこせん。たゝいま御腹をめさんと。御けんに手をかけ給へは。人々此由を見まいらせ。能になくさめ奉り。房州さしておとし申は。神妙にこそおほえたれ。さる間御所中の女房達。上下二百八十餘人一度にとつとさけひ給へは。けうくわんちこくの有さまも。かくやらん。きのふまてはみやうもんの床にまし／＼て。ゑいくわのたまをもてあそひ。けさはひきかへてしやけんのたいたうを。我さき／＼におちゆかせ給へは。あらきまさごにはせかゝり。御足より出る血は。道芝をそめけるは。めいとのみちもかくやらん。あるひは駒のひつめにかゝり。むなしくならせ給ふも有。或は士民の手にわたり。よしなきやうになるも有。是や平家の大將宗盛のみやこおちも。これにはいかてまさるへき。こゝに物のあはれをとゝめけるは。大きみ樣のすくれて御志あひにてましますあひすのきみと申せし人。門外はるかにおちゆき給ふか。賢人二君につかへす。貞女兩夫にまみえすと云ことをはおもひ出し。御所中へひきかへし。我つほねへいりて。はたには白きあわせを着し。上には羅れうの衣をかさね。くれなゐのはかまをくゝりをしめ。みたれかみをたかくあけ。すみすりなかし筆にそめ。もみちのたんしにかきなしたるみつくきのその跡みれは。おもしろや扨もみつから十七さいのとしよりも。廿一さいの秋の末まて。片時もきみの御座をはなれす。御なさけ色まさり草。なるみの葉

のつゆのみきりのことの葉にも。かのけんそうくわうていのやうきひにちきれる比は。文月七日のちかひにも。てんにあらばひよくの鳥。地にあらはれんりの枝と。むつことにのたまひし。いまみのうへにしらまゆみ。ひきはかへさし我心。きみ諸共にわたりかは。ふち瀨のなみをしのかんと。筆もとゝろにかきなかし。おりしも秋の末なるに。おもひ出てかくなん。

おもひいるみはふか草の秋の露たのみしきみは木からしの風。となみたとともにをしたゝみ。にほひのたもとにおさめつゝ。西にむかつて手を合。すでに高聲に念佛申。したを喰切はきすてゝ。きたまくらにふしにけり。かの女房のさいこのしき。けにやさしくそ覺ける。爰に若きみさまの御めのとに。れんせいと申女房有。きみの御生かいときくよりも。天にあこかれ。地に伏て。なけきかなしみ申せしか。せめて我きみの御しかはねを見まいらせんと。人目をつゝむ事なれは。小弓をはまた夜ふかきに旅立て。ゆけにゆふきのうらなみに。袖もちすそもしほたるゝ　これやめいとのさかひわたりかはともおもひやる。三川を越て過行は。これやいなけのまつ山や。その松風もみにしみて。心ほそくもけみ河の。川瀨の千鳥友よふも。佛に逢かとおとろきて。佛神に賴をかけて船橋のしの〳〵に通過。あしに任て行程に。いち河ふねのわたし守。我おもふきみはありやなしやと事とへは。たれをまつとのをかの邊や。さかみたいにも着しかは。若きみさまの御へう所にまいりつゝ。ちくさのはなを手折つゝ。袖よりあまるなみたをは。手向のみつとなそらへて。かきくとき申やう。きのふまては將軍かうゐの御すかた。くゐのひむつらあさやかに。くわいせつのたもとをひるかへし。け

さはまたひきかへて。このふか草の よもきかもとを終のすみかとしたまふ物哉。いにしへ西行とやらんは。さぬきのいんの御へう所へ。えいきんせられし事 おもひ出されてかくなん。

よしや君むかしの玉の床とてもかゝらん後は何にかはせん

とロすさみけれは。頓て塚の下よりも若君様の御へんかと覺しくて。

はま千鳥あとはおゆみにかよへともみは草野へに音をのみそなく。とあそはしけれは。れんせい ことさらに涙をなかし申處に。御へう所の內よりも。若きみさまの 御れいこんとおほしくて。かうちうをたいして。れんせいかまゝら神に立寄給ひて。なんちこれまて我跡をとむらふ事。うれしさよ。みつからはしゆらたうに有なから。たましひはてんにあつて。大くんしやうといへるほしとあらはれ。ふたゝひ此かいに生をうけ。入せうのしゆくんとなるへし。なんちあまりになけく事なかれ。乙若君にくはしく申つたへ。今度ちゝ御大きみ 御めつほう三の御とか有、一には御いせいたけく候まゝ。御ひやうききつきやうを えらひすして。天道をそれしりたまはす。二にはそうりやうけをさしおき。八しうのしゆくんとなるへしと。御心中におほしめし候間。天道わたくしなし。三には眞里谷ちよかん入道房奉りしに。いく程なく御かんたう有けれは。頓てむなしく成。此おもひあくりやうとなつてきをうらみ奉る。これらの御あやまり故。神めい佛陀の御はなしやらん。たちまち御運つきさせ給ふとおほせもあへす。御なみたにしつませ給ふところに。きたの方より大風さつと吹て。みなみにおほかねをならし。にしにたいこ

をとう〳〵とうつて。四かくの中央。一たうにとゝとさけふ中よりも。ゝとよりさまの御聲にて。わかきみは。なとおそなはり給ふ。いまこそ！ゆらの時なれとよはゝり給ふ。若きみもこゝろへたりとの給ひて。はしり出させ給ふ。れんせいも御跡をしたひ奉りしに。しのゝめもあけゆけは。草はう〳〵として。塚のみ殘れり。れんせいけふさめたるこゝちして。なく〳〵そこを立去て 有山寺にはせまいり。三十一と申には。髪そりおとし。こきすみそめに身をやつし。諸國七たうめくりつゝ。れい佛。れいしやを伏拜み。かの御ほたいをとふらふ事のあはれなり。哀なり。

天正三年乙亥八月十一日

以宮内省圖書寮本校合畢

國府臺戰記終

鴻臺後記

相模國北條氏康と。安房の國里見義弘合戰あり。然るに太田美濃守武州岩槻に在て謀反を企て。義弘と一味するによつて。義弘義高父子下總國へ發向し。高野臺近邊に陣を張る。武州江戸より。北條方遠山丹波守。富永三郎左衛門尉等馳參し。からめきの川を前に隔てゝ備たり。下總小金より高木治部少輔出向てそさゝへける。此由小田原へ告け來るに因て。小田原城留守居として。北條幻庵。松田尾張守。石卷下野守を頭として殘し置き。時日を移さす。氏康氏政父子出馬し。高野臺を中に隔て相向つて陣をとる。かゝりし所に。義弘夜中に盡く引退くよし告來るによつて。氏康先手の衆からめきの瀨をとりこし。敵は高野臺を二里程引て備へたり。味方はこれを不知。遠山富永人數を臺へとりのほせ。既に敵を待受たる軍なれ

は。きそひかゝつて互に死を爭ひ戰ふ。敵方に正木大膳さいを振て眞先に進み。總手を亂し切てかゝる。味方くつれ。坂中にて遠山丹波守。中條出雲守。河村修理亮を始め。百餘騎討れ敗軍す氏政旗本の陣にあつて下知して云。敵勝に乘て長途を過く。これを討へしと團扇を揚け給へは。命は義によつて輕し。面をふらす一足も引す。まつしくらに責かゝる。既に切くつし敵をおひかへし。首四五十討取り。本陣に旗を立られたり。大軍の威敵を氏政旗本はかりにて切り勝給ふこと前代未聞の猛大將と諸卒感したり。氏康は後陣此義を知り給はす。氏康諸老を召集めて曰。遠山富永をうたせ無念やんことなし。時日を移さす一戰を遂へしと。評定とりく也。氏政をゝせけるは。先場の戰ひに味方を切崩し。敗北するときにいたつて。我郎從二人敵にまきれ入り。陣中を見てきたれと云ふてつかはす所に。二人見とゝけかへつて申すは。敵先陣の戰ひに遠山富永を討取り。其勢に高野臺へ蓋くとり揚り。諸勢入り亂れ酒宴して。千秋萬歳をうたひ。一隊つゝにひきわけて。備ふへき覺悟もなく。敵來ることをも辨へす。主は所從をたつね。從者は主人のあり所をも不知。軍法の行はかつてなく。算を亂したる體たらく。これ義弘か運の末ハ災を招くに非や。味方急によせかくるに至ては。敵の前勢は臺を降て向ふへし。次の勢は半にたち。跡勢は臺に殘り。三所に（脱か）前士の戰を跡の士卒見物するより外のことあるへからす。前の一隊は蟷螂か斧。彼れを切りくつすに至ては。跡はなを然らん。此度の合戰に於ては。氏政前陣との給ひけり。氏康かさねて今朝辰の刻の戰を考ふるに。敵は東方に陣し。出る日の光を輝かす所に。味方西より向ふて劍先を爭

ふこと。これ孤虚の辨へあらさるか故。遠山富永勝利を失ひたり、然るに今はや未の刻も過き。東の敵は入る日にして。味方の後陣影きえぬ。時の占言事を得たり。其上當年は甲子也。甲子は殷の紂かほろほされ。武王は勝る年なり。義弘は紂に同意し氏康は武王に比して彼れを討ん。しかのみならす先祖の吉例をなし。早雲氏茂は。永正元年甲子九月は。武州立河原に於て上杉民部大輔顯定と合戰し打勝て顯定敗軍す。從て父氏綱。大永四年甲申正月十三日武州江戸に於て上杉修理太夫朝興と合戰して打勝。朝興を追討す。就中今年今月は甲子正月八日に當る吉例なり。さて又。天文七年戊戌十月七日。この高野臺に至て。小弓の御所義明と一戰して打勝ち。義明を亡す。甚以て戰の場所をかへす。いかてか先例をたのまさらんや。あまつさへ孤虚支干相應する事。我に天のめくみする所也。時刻を移すへからすとて。無二の一戰治定す。然るに臺より東北は節所にてよせところ惡し。諸勢を二手にわけ。兩旗本先陣也。氏政軍兵を率し。臺より南三里下へうちまはり。臺をとりまき敵をもらさずうちとるへきてたてなり。折節霞たつて臺へ近くとりよるといへとも。敵はこれを不知。義弘下知して曰。今朝辰の刻の合戰思のまゝに勝利を得。富永遠山は安房上總の合戰に。何時も先陣にさゝれたる兩大將を打とりけれは。敵はをくれをとり。先陣の備はさそ引退きぬらん。曉天にからめきの瀨をとりこし。此の勢に明日ひと合戰し盡く打亡さんこと。手の内にありと觸らるゝ。日もくれかゝり。小雨そゝきけれは。少し勞をやすめんために。鎧を脫き。馬に水草かい。明日の合戰を心かけ。今を由斷するこそ運命つくる時刻なれ。此は永祿七年甲子正月八

日申の刻に至て。氏政軍兵近々と押よせ。鯨波をとつと揚〳〵。氏康は直にせめかゝり。亦関の音を二所にあけをめきさけんて責かゝる。義弘按外の仕合と驚き。臺を折くたりて。閧の音を合せ。兩方へ分つて拒きける。鐵炮矢さけひの音天地をひゝかし。首を取つとられつ。血けふりを出し。半時はかりは勝負も未見えさりしか　義弘つゐにうちまけて盡く敗北す。突伏切伏。追討すること將棊たをしに異ならす。敵方討死の人々には。正木彈正左衞門尉父子。勝山豐前守父子。秋末將監。里見民部少輔。同兵衞尉。正木左近大夫。次男平六。平七。菅野神五郎。加藤左馬允父子。長南七郎。鳥井信濃守父子。佐貫伊賀守。多賀越後を始め。五千餘騎打死す。上總國しいつかゝえの本。ねりわた此外の城々。此の勢に皆盡く城を開きて落行ぬ。此度の合戰は。氏康。氏政。兩旗本にて切勝たり。北條新三郎。河越より馳來り粉骨を盡す。同く源三。同上總守父子。氏康末子助五郎。新太郎若輩たりといへとも。比類なき走めくり。諸士の忠節擧て記かたし。

右の趣は。氏康より合戰の翌日。小田原の城代伯父幻庵へ一戰の始中終をかきのせつかはさる狀の文言を寫し侍るもの也。

太田美濃守は。二百騎はかりにて馳參し。舍人村をはしめ。一人も不殘うたれ。美濃守は二ヶ所手負束をさしてにけゆきぬ。其節の落書

よし弘かたのむ弓箭の岩つきてからきうきめに太田美のはて

とそ讀たる。氏康云此度の合戰に。累年の宿望を達す。然るに謀反の張本人。太田美濃守討もらすこと無念千萬。義弘は討死の沙汰ありといへとも首未きたらすと。件の狀に記せり。然る處に義弘馬にはなれけるに。安西伊豫守馬

よリ飛てをり。義弘を乘せ。主從二人上總山へわけ入ける。はなれ馬をは落人見付て乘て行たり。義弘の乘馬を見て。やかて討死必定の沙汰ありけれは。房州討もらされの者とも主借を討せ。いきかいあるへからすと。にけゆく道すから。寺々へ尋よつて皆出家し。一人も入道せぬはなかりけり。三日すきて義弘かつさをわけ出て。房州へ歸けり。時に氏康高野臺に旗をたて。

敵を討こゝろのまゝの高野臺ゆふへ詠して
勝浦の里

とよめり。合戰ことに狂歌を記し侍る。皆これ氏康氏政興してよみ給へるによつて。皆人をほえ侍る。

爰に里見越前守忠弘息に。長九郎弘次とて。生年十五才初陣なりしか。月毛の駒に乘り。母衣をかけ。弓を持て只一騎はるかに落行て。相摸國住人松田左京亮康吉これを見て。あつはれ大將たり。優曇華と馬にむち打て。追かけ押並てむすと組んてとうと落たり。康吉剛の者なりけれは。物の數ともせす。組ふせ首をとらんとせしかは。容顏美麗にして花の如くの小人也。いかてか刀をたてん。助けはやと思けるに。味方雲霞の如く馳來りて。首を奪ひとらんとす。力不及首打落し。さすかに猛き康吉も。涙にくれて前後に迷ふ。つらつら思けるは。我かゝるうき目にあふ事。弓箭にたつさはるか故なり。百年の榮耀も風前の塵。一念の發心は命後の燈とす。凡三界輪廻。四生皆是無明之眠中妄想の夢そかし。此度の仕合こそ發心の種ならめと。歸國に不及山寺へ入り。出家入道し。名をは浮世と改め。墨染の衣を身に纏ひ。一筋に里見長九郎弘次の跡をとふ。皆人これを見て。それ道心を發すといふは。世中の常な

きことはりを知りて名利を捨る心よりをこる。朝には紅の顔せありといへとも。夕へには白骨となる。よろつ心に任せぬあたなる世を觀するか故也。

古今集にも

世のうきめみえぬ山路へいらんには思ふ人こそほたしなりけれ

とよみしに。家を捨妻子を捨。世を遁れ山に入る。康吉か心の程こそありかたけれ。昔し熊谷次郎直實敦盛を討て。穢土を悲み。世を遁れはやと思ひ。西國の軍靜り。黑谷の法然上人の御弟子となり入道し。蓮生坊と名付たり。今更康吉か弘次をうちて出家遁世する事。時替り人異なれとも。其志は同し。やさしかりける次第也。

鴻臺後記終

評高野臺之古戰言曰

夫兵凶器也。戰逆徒也。不得止用之。其利如何となれは。敵勝則閼亡閼勝則敵を討。然則いつれか無非死地。故兵者國之大事。死生之地。存亡之道也。誠に將は國之司命也。雖然天下亂れ。民困窮に及ひ。悪逆の政をなし。人民此日いつか亡んと哀。則其君として窮民を救はさる者討す。是は亦可也。凡天下之者天下之天下也。天下の利を同ふする時は何事にか敵あるへし。本天下敵なき也。古語曰敵非敵。閼非閼。云々。昔明王賢君用兵こと。全以非人欲之私爲戰安民也。既に武と云ふ字は戈止と書たり。然に戈を便とし。國を取んと欲。一戰を企。士卒を亡す事不仁の至也。義弘公北條の領知を伐り執んと欲す。道に非す。皆私欲を以の一戰なれは。敗軍の事理の當然也。王者の兵を用ゆる。行として勝すといふ事なし。是仁者敵なき故

なり 後漢光武帝。一度毎用兵鬢髮白くなると云り 故なうして軍兵を亡すこと悲むへきこと也 然るに義弘公人欲を以輕く兵ものを用ひ多討死 これ將の罪也。古人曰 有武無文則安至强、有文無武則流柔故志道は。文武之道須臾も離るへからす 義弘公文を根とし、武を枝葉として戰給はゝ、當らすといへとも遠からす、又氏康公是非に不及一戰ありと云、とも。王者の用兵所以(以下ヨミガタシ)論敵不討勝利有可上兵は討謀有唯任怒仁將の無心合戰なれは軍兵を多く討とり勝給ふ 異朝ともに其罪によつて亡ること記に不及 氏康公終に子孫に至て。秀吉公の爲に亡、

下總國安國山總寧寺來由之事

開山通玄和尚は道元和尚六世の的傳也。寺を四ヶ所開く。丹波永澤寺。越前龍泉寺。能登妙高菴 下總總寧寺也。

當寺は常法幢之地也 門前に坂あり。法王坂と云ならはせり。內に石棺あり。法王の棺と云傳へたり。此兩事據なし。徵とすへき書もなし考へからす。

○氏康は氏綱の子、早雲の孫、北條家至此甚盛。領關八州。

○義弘馬頭義豐の男、號兵庫頭。領上總安房。

○義高號太郎義弘の嫡。

○太田美濃守康正入道號三樂。

○遠山丹波守直景江戸城代。

○富永三郎左衛門尉家居葛西。他本作四郎左衛門、未知孰是。

○加羅鳴起在松戸渡。

○正木大膳亮時綱。里見家先隊之將也。

○氏綱は早雲氏茂の嫡子。號左京太夫。大永中入江戸、此時上杉朝興移于川越。

○天文七年戊戌。他本作天文六年丁酉。未知孰是。

○小弓。下總地名。又作生實。左衞門督義明者。鎌倉基氏六代。左馬頭政氏之二男。居小弓。故稱小弓御所。

○安西伊豫守實元。一說實元自稱義弘。力戰數回而死。實元建紀信之功之際。義弘遂遁于房州云。

○葛浦行德之入江也。

以宮内省圖書寮本校合畢

續群書類從卷第六百十四

合戰部四十四

長倉追罰記

かつするときんは。胡越もこんていとなる。隔つるときんは、肝膽も疎遠となる。ましてやいはんや末の世は。闘諍けんこの敵味方。君臣父子のあらそひ。とんしんちのはかりこと(マヽ)を、いち(帷幄)やうのうちにめくらし。しんさん口四のかちまけを。千里の外に得るとかや。抑比は。永享七年乙卯の六月下旬の事なるに。常州佐竹の郡。長倉遠江守御追罰として。御所の御旗進發し。岩松右馬頭持國。大手の大將承り。八月中旬にはせむかふ。茂木の郷に着陣す。同かれか要害に馳向て。六千餘騎にて張陣。かの籠城のありさま。四方切て。東西南北に對すへき山もなし。前は深谷。後は又岳峨々と聳たり。東に山河漲流、西には溪水をたゝへたり。是を用水に用る。日本無雙の城と見へたり。先大手に向て大將の御陣。鎌倉殿御勢。其次に大將岩松殿、公方勢引率。野田。德河。佐々木。梶原。簗田□野をはしめとして。すきまもなくつゝき。左は山內殿。那和。前橋。金山。足利。佐貫。佐野を初めとして。上州一國同幕をうちつゝき。右は扇谷殿。江戶。品川。河越。松山。ふかやをは

しめとして。武州一揆も打續。東は那須の一黨。其次海上。油井。大須加。相馬。總州一揆張陣。西は又小田。結城。宇都宮。相續て陣をはる。北は小山藥師寺。佐野小太郎。高橋傍士塚陣屋をならへてひしと打。大手搦手入替々々攻戰といへ共。総に堅固に持かため。同年十月廿八日。結城宇都宮相續。籌をいはくの中に廻し。長倉遠江守開陣畢。彼の遠江守。名を日本に上。譽を八州に振。此時某打めくり。次第不同にうちなかすまくのもんをそかそへける。御所の陣かとおほしくて。梢の冬のなか空に桐のまんまく二引。御一家もみなこれ同し。竹に雀は上杉殿御兩家。九ともへは長尾か紋。水色に桔梗は土岐の紋。齋藤かなてしこ。鹿は富樫之助。伊勢國司北畠殿のわりひし。大内介かからひし。甲斐武田とわかさの守護は武田ひし。半月に丸ひしは興津左衛門。越前の織田と由佐の河内守か瓜の紋。秋元も是を打。朝倉かみつもつかう。飛騨國司姉小路殿は日光月光。月に九えうは千葉之介。八えうは上總介。三引兩は三浦之介。小山は左巴也。朝比奈も是同し。但遠江の朝比奈はけんひし也。宇都宮は右巴なり。行方岡部も是を打。永井と那波は。三星に一文字にて。昔の因幡守廣元か末葉毛利の一家にて。一品と云字の表體也。三文字松河は赤松と小笠原。四つ目結は佐々木判官。十六目結は本間の四郎。海老名は庵に瓜のもん也。松に鶴は高井左衛門。さんきにさるは洲西かもん。午の尾かへふねつる。楠浦加月にほし。極樂寺か水車。三本杉は狩野介。但たかの羽を打事も有。山中かさかりふし。めひきかこは松田かもん。葛西はかしは。大石の源左衛門はいてうの木。五ほん筋は結城七郎。但ともへを打事も有。永樂の錢は三河國水野か紋。中條はさ

ゝの丸あしなし。すはま小田の大輔。しゝにほたんは多田の三郎　萩の矢も是をうつかふら矢は。武藏國の住人太田源次郎也。十六葉の菊いちんは野田福王かもん也　團に菊は兒玉たう。津田はあほひ。わちかひは高家のもん。たてつなは二階堂。同六郷も是を打。しゆろの丸は富士の大宮司　きほたんは杉かもん。內藤備前かりうこにてまり。備藥師寺か菊水。小山の藥師寺かとちえの紋。久下は一番と云文字。あけはいでうは伊勢守ひろたりも是を打　まひさきは御幡のもん　北條殿三うろこ。同横井も是を打。大仁入道は巴のもん。緒方佐伯も是同し。神保か藤の丸。椎名かをもたか。大石羽尾か飛つはめ。十文字は島津左馬頭。一文字伊東六郎。鷹の羽は菊池もん。熊野鈴木は稲の丸に榊也。とひなり鱸はまな板にまなはし。三河鈴木は藤の丸。大すなかしは泉安田。三本からかさ名越の紋。小もんの皮は秩父殿。かりかねは安倍との。八つほしは飯塚　すみをしきに三文字は伊豫の國の河野の一黨。備前こしまは品の字。駿河小島は八の字。下總の境はともへ。是は千葉のそうとかや。さゝりんとうは石川。もつかうは熊谷　車は伊勢の外宮の宮方榊原が紋也。鳥居のもんは。八幡の神職。宮崎の法印か紋也　七星は望月　梶の葉は諏訪のほうり。三たうしは皆岐の八郎　宮原も是を打　矢はつくるまは服部　松に月は天野藤內。帆かけ舟は熱田大宮司。山城かすなかし。水にかりは小串五郎。栗飯原かかやくのもん。ひしつるは南部かもん。庭のうちの二頭のまひ鶴は。天智天皇の後胤葛山備中守。御所も是を打。扇に月の書たるは。常陸の佐竹かもん也。地黑菱は板垣。松皮に釘貫は阿波の三好かもん也。一宮は出雲也。左巴は下枝の紋。まひ遊鷹は櫛置のも

ん。根引松は常葉のもん。下條は梶の葉。折野は木瓜。坂西は丸のうちにまつかはのもん也。山中は日扇。溝口は井桁。但三葉かしはを打事も有。高畠は違かぶら矢。松の尾は丸の中にまん字。二木はちきりを打。松岡は瓜のもん也。赤澤は松皮に十文字。遠州の小笠原松皮菱に水落。九曜星は標葉也。山邊。西牧は梶の葉を（はまひちかひのつるをうつイ）打。犬甘平瀬島は一黨後聽其外。幕の數々當世はやる國々の作り名字の幕つくしうてほうたひに立ならふ。能々見れは長月の秋の末葉のをき。すゝき。尾はな。かるかや。をみなめし。野分の風に打なひき。時雨や露にくちはてゝ。ふゆの野陣ゝまくそろへ。中々難盡筆。

以東京帝國大學史料本幷附屬圖書館本校合畢

長倉追罰記終

園部狀

抑園部宮內大輔方小川之非者。依爲強敵。境地夙夜苦勞。樣々計策要害（官カ）堅固也。踏果年不振面。偏ニ小田之被守幕下來候歟。殊吏府內御膝下之樣被踞候上。息女三郎殿號宮仕罷參候。如此之儀。一向ニ政治御機色ニ不入。則被背御意候哉。雖然園部之事者。譜代相傳之臣下。代々小田へ被勵忠節候上。這般之以題目。源三與折檻如何之由被存候歟。先以私領之內寺庵に被致住居。以數通之書翰。信田田狀方ヲ韻越訴之段。若干雖被申上候。兎許無之。然處。小田左衞門大輔御巽見者。御近邊葛蒲澤邊へ在寺可然候。其上被御詞添出仕之儀。輙可被成御申段歟。尤□詞無二言。御正路之儀ト存被致在寺已五三日及。幡谷彌三郎。園部藏人爲使羽檄如織。殊被申上。金吾御挨拶如何樣候哉。一途之御疑モ無之。結句屋代野口以輿行金吾被纐御

覺悟。於當寺之内可爲生涯之段。逼塞之由園部從脇近方申來候歟。誠大輔失餘擒。被及朦昧候事。無餘儀候。然ル間。在寺其外之人々。心ヲ付被見其氣色候而。誠ニ別心之趣。皆々滿悅。當寺之事ハ遷ム無甲斐被思。山之庄松岳寺へ被懸心。召連七十餘人各得其足取出。既及越山。如案之北郡山之庄之□満瀧俗之山端遮而。彼樹下此之石上草着已爲取園歟。園部無據存。打拜取襲前後具左右切而押透。無程松岳寺へ馳入襲去ル失調法從門外歸候歟。園部氣休而理々有忠無候。菓此之御制何事候哉。歎而有餘事候。畢竟一世之ハ不運由。暮々侘之。則穿人家風各被出蹴髪剃除シ。墨衣ヲ纏身。脇寮閑居ト云々。聽而如此之儀。(皆カ)小川へ申續ケ候間。要害可抱様無之。替々及退散。眞實中之萬民數年離舊里。村南村北迷出。不知山野ノ事。不便之次第也。當日野口。馳入要害被致堅固。

聽而金吾移被申候歟。寔政治之烈御威光。近國他國之諸士馳來。崇敬饗無比類候。殊園部在寺除(垛イ)及廿日餘。然處。有御指南方。今程出寺可然之段密通有之歟。則夜ニ紛レ被致出寺。暫有半途足弱等之向後相尋。總州へ被送。我者好而結城政勝奉賴。被致堪忍候。園部領中之僧俗。在世之好不忘。凌遠國波濤尋上。如被申者。小川之事者。元來爲名地上。金吾御移以後者。尚以塗壁結茂鷹堀掛門橋新殿中造作堅固搆。不異修羅花臺城。其外宿町屋棟並搆見世棚。辻小路毎日一點之塵不置。御繁昌追夜次日當亦募小田之權威故也。用心以下之事ハ。心ニ恐ル、人モナシ。一向爲御悠之由申來候歟。園部聞之。天道惡人驕天道者盈虧沒。此語可然時分ト心得。運命任冥慮。偏遂鬱懐思立退散。其外方々之傾者共共通此儀候處。何モ啐啄(喰イ)之間。寺家出。被人目忍候上。山野日暮。谿谷明夜。無程

小川へ近付。翌日爲首尾上。皆々馳集。人數被
調候處。及五百餘人。則三方へ手分。外城忍入。
峰哆唎(マヽ)城内城外迄(無之イ)驚耳目忘方角起迷事。自孤
獨次第也。𦖋而園部藏人起合切而入。雖然鎗(鑓イ)鎌
被救無程死亡。則中城攻入。實城計ニ取詰。夜
之見合爲大切之間。氷(マヽ)而待曉天之鐘。皆々備役
所城決(マヽ)入壁付一同乘入之。破鍔削鎗散々戰。去
ル間。城内衆(マヽ)行列相亂。金吾始爲宗勇兵卅餘人
命抛儀路惜哉 白雪膚曝 土佐(マヽ)事不被當目次第
也。攻衆四五人打死。園部面雖矢手負候。金吾
給御骹(骸カ)乍押衆淚(マヽ)一切□之。下賤無道人共ハ御
引汲而。當地御移故如此之儀候。誠無功之賞不
議富褐(マヽ)之媒者。野代野口之事候。全某非迷慮之
儀。一旦不義强所存意候。𦖋而殘生小田へ馳參
奏此儀。政治則(卽カ)剋被出馬。牽羽梨之宮被催人數
候處。及七百餘騎。可被責返之段。頻而府内へ
雖被仰越候と。慶就御挨拶樫(マヽ)々と無之故。渡海

遲々ニ候處。無程小川へ落着之由申來候間。無
曲被納御馬候。園部事ハ案候子細。且ハ主命
恐。且ハ一往之野心遂迄。又克在和不在衆云古
語。爲(マヽ)所詮爲音要害取除鄉(マヽ)但之以指南野次口
へ在留歟。元部今般之働譽。東八州無其隱候。
將又彼息藏房ハ結城在乘國寺尉結小野之四家
奉賴。重而本意排一三味候。殊更此度小川仕
合之事。憖府内之以御悶。金吾御改易之由。世上
ニ唱候歟。然間。政治恨捽(揮カ)胸懷。内々府内へ可
御訴之旨。度々雖思召立れ候。既江戶行方悉ク
府内之幕下。爲鹽味之上。御働御聊爾之由。洞
々家老各被申候歟。殊ニ額田と石神境之地ニ
付而。連々鉾楯。此度蜂起候歟。然間。忠通途
立馬雖及調法候。依兎角之儀。風解洛(路カ)消之儀無
之。因玆鄉但佐竹上下不思樣ニ候。爰元政治被
見合候や。佐竹櫟而綣付。義詮樣招出御申。江
戶之衆押北郡被出馬。被催人數候處ニ。及千五

百餘騎。不移時日、府内鬼魔塚と申地ニ指寄。國月鋒矢形備持新堀被埋候處。從府内軍弓生子出合。矢軍及終日候歟。乘就馬廻僅二百餘騎、國分寺之後松山引廻。魚鱗鶴翼之形被出備候所。小田軒猿驅寄慥被成見候也。無程越切處。鳴軍鼓覆天地林木振攻掛。則慶就直劔戰開運命事ハ只今也。各加下心雨〔勢〕懸（マヽ）之移數刻及防戰、去程宍戸之初手悉敗北。惣手見被成、聊手足崩立事、譬は風前之塵、春野之蜘子散。或ハ攏手肚（マヽ）立擾〔拔カ〕捨。或秣鞣苅弃。彼方此方之藪溝逃散事、日鼓敷次第候、政治馬廻者以前之備不解、雖見浮雲隔畔而可助樣無之。宍戸家老河股、古尾。池田爲始。究竟者卅餘人、不去仕場打死、嬲而乘就自仕場攏人數。以前之在所直備。一同作勝時之聲者。修羅帝尺天成恐。阿鼻焰庭迄響計候。以小擊大事。古今共不思義（マヽ）之次第候。是偏乘就軍道之儀。記捿故候歟。又至道惡ニ候や、何樣馴之譽遠近無其隱候（マヽ）。殊更宍戸御事ハ。於府内不成一重御家方、其抛重監此度指出之御働、老儀之筋目相違候故歟、取分宍戸へ失勝利候や、政治翌日田餘被下馬、在鄕及放火、早々歸陣之由候。嬲而慶就。江戸行方鹿島人衆被催候處及二十餘騎ニ北郡へ相働懸。在鄕放火、先以被納馬候歟、乍之事ハ其比號夜詰、稍城責取、鄕内不殘一塵燒拂。主城計之樣ニ候。然間、籠城地下人等過半掛落。是果而難拖樣〔ナシイ〕ニ候、誠君道於正者。其臣爭可奉背や聊之儀以園部御追放故。他國ヨリ劇亂心外ニ候。千丈堤ハ螻蟻穴費候歟。久々世上見浮沈淺間敷存候。諸每難露筆以任令期重說後翰候恐惶謹言。

蘭部宮内太輔判

以帝國大學史料本并附屬圖書館本校合畢

園部狀終

常陽四戰記

永祿二年己未四月廿八日。常州信太（シタ）郡小田（オタ）城主讃岐守氏治入道天庵と。越後の上杉輝虎入道謙信と眞壁郡山王堂に於て合戰の子細は。小田天庵弓矢年來强くして。結城。佐竹。宇都宮をはじめ。近邊の諸將皆攻詫て牒し合。諸方より攻れとも遂に叶き勝利なし。此折節。謙信。上州へ越られしを幸とて。諸將各使者を以て。謙信の出馬を乞。小田氏を退治下さるに於ては。幕下に屬すへしとなり。謙信。早速同心ありて。八幡可令出馬と計。返事自筆にて短尺のことく書て。諸家の使共に授け渡さる。眞壁なとの使者歸着にて。闇夜軒道無にて。右の返事披見じ入る時節。はや謙信先手の人數。宇都宮氏家原へ相見へ申との注進故。諸將其迅速なるに先以て仰天す。謙信は都合八千の着到にて。晝夜押行。四月廿七日の夜。山王堂に着陣。則彼堂を本陣とせらる。翌日の合戰は。彼堂の下の原にての事なり。所謂山王堂の崖下（岸イ）と原との間。指渡し四町深泥なり。其向の方四方三十町計の蘆野あり。小田天庵。三千計の人數にて居城より打出。大島村。酒寄村を經て。諸塚（モロツカ）の邊より筑輪（ツクハ）川を渡り。彼蘆野へ出。川を後に當て。押飛村の邊に旗を立。先手をは山王堂に向ひ。深田を前に當て備たり。廿八日辰の刻計に。謙信の人數しつ／＼と山王堂を下り。一文字に深田を越懸り來る。小田の先手。是を揚立しと。弓鐵炮鑓長刀にて打殺し射散し突倒す。手負死人數をしらす。越後勢。少も屈する事なくして。其討れたる人馬を泥土を埋か如く。踏付々々越來し。遂に小田勢を原中へ追返し。入亂れ前後覺す相戰ふ事。辰の刻より申の刻迄也。小田打負て引退くる。天庵。最前渡したる筑輪川を乘渡し。居城へ遁んとす。餘りに乘馬

つかれし故。川上へ馬の頭を引向。水を飲しむる事良久し。越後勢。是を大將と見て追懸。川端より弓鐵炮。雨の降ごとく放し懸けれともあたらす。難なく川を渡り。以前の道筋を經て小田へ歸城す。最初謙信の出馬を賴たる諸大將。火急の出張と其威の猛きことに驚き。面々の城々へ引籠て門戶を固め。此戰場へは出合す。謙信勝利の後。追々に群參して謝辭を演る也。謙信。右の諸將を先手として。小田の城へ押詰らる。天庵。四五日計籠城して防戰也。寄手大軍にて取卷。名將の指揮にて攻立ければ。小田家老信太（田イ）鴨之助と云もの申けるは。防戰兎角叶へからす。天庵には藤澤の城へ引退。時節を待て運を開かるへし。某し此城に殘りて切腹すへしと諫め。潛に天庵を退去なさしめ。鴨之助自害して落城也。謙信は勝凱作て。其儘上州へ歸られけれは。翌日。天庵藤澤より打出小田城を取返し。先の如く在城也。件之鴨之助は。新治郡坂戶の城主也。當城元來。宇都宮の持たりし所に。近年小田方へ攻取。鴨之助在城して。眞壁郡笠間方角の敵共をあひしらひ。天庵は宇都宮那須邊へ働し。今度小田方。山王堂にて大敗。鴨之助は小田城にて切腹の次第。宇都宮の家老小宅三左衞門。小栗城に有て聞付。城へ取懸。速かに乘取還り居れは。湖田尾張。竹岡備前抔と云剛の者。三左衞門與力にて。宇都宮沒落の時迄。坂戶に在住仕りし也。

右山王堂の一戰。稻川石見といふ眞壁か侍。其比十八歲たりしか。彼軍場の芝野の上明神山にて見物す。雙方攻戰の間は。戰場煙霞のことく時々成て。物の色目見へす。戰畢て霧のことく晴しとなり。湖田。竹岡もひさしく存命。坂戶の次第（左イ）なと物語すと云々。

眞壁の城主右衞門尉氏幹。入道道無として。小田天

庵多年相挑めり。元龜四年癸酉四月。天庵。筑波山の續き青柳山を打越。眞壁と山一つ隔たる小幡村迄働く。道無。是を聞出張す。敵は眞壁の西口より寄來ると聞て打出けるか。西口へはをし來らす。をはたに敵ありと申ければ。山手へ懸り徑を經て小幡に馳出。其比大田美濃入道三樂齋。其子梶原源太資晴。柿岡に住す。源太は佐竹の媒にて。道無の聟たりしゆへ。父子。此由を聞。微勢を率して出張しけれは。なか〳〵對當すへき敵ならねは。小幡の近邊に。要害無雙の古屋形有しに取入。敵引は突て出。敵返せは彼屋敷へ引入。かくの如くする事數回にして。時刻を移す所に。道無か勢。ゆふくろ山を越來。其旗本見へければ。天庵。三樂父子を捨。眞壁勢に向て備を立。小幡の地形。三方は山續て中の平地の纔十町足さる狹き所なり。小田勢。是に充滿なり。眞壁勢。山上より下し懸て相戰ふ事良久し。道無下知して。弓も鐵炮も敵の前を打せす。跡の同勢を打ける故。小田勢。裏を崩して引退く。眞壁勢追打にす。道無嫡子安藝守十六歲。次男式部少輔十五歲也。道無。坂本信濃といふ剛のものに取かはしむ。安藝守。敵と組て山上より上になり下になりころひ落。從者。是を助けんとするを。信濃叱して助けしめす。旣に平場に落着。敵。上に成て首かゝんとする時。馬取の某し（後に芝内膳といふ。）敵の右の手を取。幷吉田隼人といふ者駈よりて。安藝守に首を捕らしむ。式部少輔も組討の高名したり。小田勢敗北して。最前の道路を經て小田へ引入。眞壁勢。山を上り追打ぬ。小幡より山田迄上道四里の間。天庵。一度も返す事なし。三樂は此戰に構はす。逃る敵の側を斜に先立て押行に。小田近く成時。馬に策打て小田城へ乘込。門を堅めて楯籠る。天庵。

入事叶はすして、一里計後の藤澤の城より毎度働出迫合有り。三樂。樓櫓を揚遠候を置て、天庵が働き出る様子を見切。近き時は早鐘をつき。遠き時は狼煙を擧て。眞壁へ告しらしめ。相圖を定めて加勢を受る故。小田を堅固に保て。太閤小田原陣の時迄。三樂齋其子太田美濃守資晴在城と云々。

茨城郡笠間の城主大和守入道心休（三萬石領す。）と。同國猿子（マシコ）某し（一萬石領す。）此兩家ともに。宇都宮尚綱の幕下にして。猿子は一族。心休は家老たり。或時。笠間領開（カイヘ）毛村の百姓と。猿子領日野山下の百姓と野山を爭ひ口論せしか。遂に闘爭に及ひ。開毛の百姓。日野山下の百姓を殺害す。此より事起て兩家相戰ふ。猿子方には加藤大隅（後秀頼に仕へて。大坂陣前に病死。）富谷（トミヤ）城にあり。笠間方は谷中玄蕃允。橋本の城に居れり。是雙方の境目なり。所謂富谷と橋本の間。一里計あり。天正九年辛巳より互にいとみ合。笠間方。弓矢强くして。猿子方度々敗軍。既に三ヶ年に及ふといへとも。宇都宮より兎角の取扱なし。猿子。是を憤り結城晴朝を頼み援兵を乞。同心においては。日野。山下。岩瀬。富山。五千石計の地を獻し幕下たらんと云ゆへに。結城より士大將に騎兵二百。歩卒三百計も差添。猿子を救ふ。加藤。大隅城を明け退き岩瀬へ移り。結城の援兵を富谷へ居しむ。其已前富谷より出兵して。飯田村の畠に備へ茶磨山に遠候を置。麾を持せ相圖を定て。笠間方の人數の打出る多少を告知らしむ。笠間方。橋元并郭外の人數共馳出て。大涯の泥土を隔て。芝野に備へ相對す。猿子方の兵。二手に分れ。一手は加藤大隅。一手は其子大藏將として。兩方より深田を越てかゝり來る。笠間の兵。防戰といへとも叶はす。猿子勢。利に乘て笠間勢の山に懸て引退くを。

追討する事際限なし。谷中玄蕃允をしらせ塚といふ所にて。猿子か兵、因幡と云もの。其弟源十郎と兩人にて討留たり。心休甥羽黒といふ所に在住所俗は根古屋殿と申けるか。于時十六歳。笠間郭外の兵を召れ。打出られしか。敗して退くとて馬に離れ。溝中に立留り。退兼たる體を見て。玄蕃か嫡子孫八。馬より飛下り。彼根古屋を我馬に抱きのせ。孫八。歩行して平澤と云所へ懸りて退く。此道。左右深泥にして道狹く。跡よりおくれて引退く人數。前路にさへぎられ。敵は競ひ來て後に有。漸く死を遁れ馳歸る。石塚といふ者父子四人討死。同姓大學といふものも。櫻川の崖下へ伐倒されしか。茨茂りて見へす歸れり。此日。笠間方の兵。大きに敗蹟す。其時。天正十一年癸未五月廿四日の事なり。

谷中玄蕃允討死して。其子孫八●纔に十八歳。橋元は境目にて大切の所なれは。孫八計にては如何とて。笠間より江戸美濃といふ侍を指越。本城に居しめ。孫八をは二の郭に置。孫八思ひける(は脱カ)。吾父にをくれ年若きにて。居城に城代を居へらるゝ事。無念の次第なり。所詮美濃守と武勇を爭ふへしと覺悟を極め。それより毎度敵出るゝと先登にすゝむ。玄蕃か甥安達大膳。此子細を聞。孫八。若輩にて美濃守と武勇爭ふ事不便の志しなり、見すへしとて。心休に相斷り。橋本の城に來(チカ)りて。孫八と一所になり。美濃守と先登り爭合戰をすへしと評議し。諏訪の峰。礒部。池上三ヶ所に伏兵を設け。其かたち鼎の足のことし。安達大膳廿歳。孫八は十九歳。歩卒百四五十騎を率し働出て。敵をおひき。伏を發し。三方より挾て打立へし。其内。池上の伏を以て。敵の人數の打立跡へ懸り。富谷城を乘取へしと相圖を定打出。折節。富谷近邊

の畠に大角豆を摘女兒ともこれ有を。七八人捕へきたる。この女兒共をめき呼ふに依て。人數を出され。伏兵の來るを待。其聲を聞。富谷方より發兵して。七百にて追來る。大膳。孫八步卒をまとめ。かはり〳〵跡先に成て引退く。富谷勢。頻に追て。既に櫻川の邊にいたる。響に相圖の鐵炮を放しけれとも。霧深くしてその響たしかに聞へす。伏兵未發せす。櫻川に玉かけい橋とて。ちいさき橋あり。狹くして多勢渡りかたきゆへ。渡り瀨にかゝりて退く。追來る敵共の內。靑柳豐後。同肥前。伊達出雲なと先登して。近々と追詰。出雲。大音揚て去年今月今日。笠間方に大きに討れぬ。今又運命既に盡ぬ。その所を越さすして悉く討取へしと申けれは。孫八答て。實に去年今月今日。味方多く討せぬ。此方の運盡けるか。其方へ報は上の山を見るへしとて。諏訪の峰へ指さしぬ。靑柳豐後。首を廻してきつとみれは。笠間勢。諏訪の峰より鬨を作て敗出。磯部の兵も鬨を合てかけ出追來る。敵兵。氣を失ひ。兩靑柳。伊達馬を乘廻して。人數を散亂させしと下知す。大膳。孫八も乘廻して人數を下知す。諏訪のみね磯部へは。相圖の鐵炮たしかには聞えされとも。如何樣響に遙に響たりしと云もの有し時。久しき間打出見んとて起り出たり。既にして兩所の兵。漸近つきしを見て。大膳。孫八下知をなし。人數をかけ三方より取包んて攻立ける故。猿子方。大きに敗る。此所。四方山にて打圍み。しかも左右足入にて。進退不自由なれは。討るゝ者誠に多し。孫八。伊達出雲と渡り合。しはらく太刀打しけるか。出雲蹶て倒るゝ所を。孫八すかさす討留たり。出雲は黑白を過る兵にして力量有。孫八運命强して蹶臥たる故。討獲たり。夫より逃るを追て亂戰す。孫八。

又武者一人を組伏たり。見れは去年今日。父の玄蕃を討し源七郎なり。天の與る幸ひとよろこひ。下部とも下り合生捕にして。後孫八か手に掛。是を斬る。惣して笠間勢。富谷の城下まて追討。猿子方大崩れになりて討死する事。去年。味方の討れたるに倍して夥し。池上の伏兵は此手に合はすすきし故。城を乘取事叶はすして引取りしとなり。心体は敵もし人數を廻し懸り來る事もやあらんと。郭外へも出す。羽黒の近邊に旗本を立られしと也。谷中孫八。此後父の名を稱して玄蕃允と改めしと云々。蓋は天正十年後の軍は皆むたなる骨折と成りぬ

文化八年辛未正月八日書寫了

中山平四郎源花押

同年夏五上浣書寫畢　温古堂

以東京帝國大學史料本并同圖書館本校合畢

常陽四戰記終

水谷蟠龍記

水谷誕生之事

結城上野介政勝の旗下に。水谷出羽入道蟠龍とて。知謀の勇者侍ける。常陸國下舘に居住せられける。この蟠龍老母の曰く。天文十二年癸卯年正月十七日の夜。子の尅はかりなるに。齢八旬にあまる老僧きたつて。左り衣の袖より金色の玉を取出し。母の口中に入ると夢見て懐妊せし程に。彌信心をおこし。日々に普門品三十三卷つゝ讀誦せられけるの間。何となく十三月。腹内にやとらせ給へり。既に天文十三年正月十七日の子の尅に。誕生せられける程に。幼名を玉若丸と申侍りける。しかるに親の水谷左兵衛尉政俊。玉若丸七歳の時に逝去せられける間。祖父入道全久に養育せられ給へり。弓手の眼に。瞳二ツまし〳〵て。利根。言葉にのへ

たく、七歳より新當北傳と中鎗術の達者を師と定め。一流を學ひ。又吳子。孫子か術をならひゐて。實に類ひなき童子なり。

玉若丸奉行人等御感之事

巳に下々の事なりけるほとに。十二月九日に。中間貳人つれて結城へ用事有けるゆへ。飛脚に遣はされけるに彼貳人にて、布壹端買取しを。此代、我出したり、又某出しけるとて。たかひにあらそひ止む事なし。終に奉行の裁許におよひけるか。理分あきらかならさるとて。雙方わけとれと了簡す。玉若丸聞召て貳人の(をカ)中間を庭前に被召出、被仰出けるは、貳人として布の兩端をもちて引へし。力ためしにして、引取者こそ勝なれとのたまひけり(れカ)、貳人の中間。是非なく布の兩方を持。立分りて力にまかせて引程に。眞中よ(にカ)り引切けり。さて壹人の中間は悦ひ顏と見けるに。壹〃は泪くみてこそ見へにけり。玉若丸御覽せられ。彼悦けるこそ盜人なれとて。からめしめ、楞間にかけ問れけるほとに。一々白狀におよひけり。急度。頭を切て獄門にさらし。壹人はほうひをたまふ。時の奉行人寺尾新左衛門。眞田與十郎理非分明ならすとて。かんとふせられける。後訴訟によつて召歸されけり。此時、玉若丸九歳なりけれとも。ケ樣にさいきよ有けるは。類ひなき少人なり。

大串合戰之事附起元之事

一古河卿晴氏公より飛脚式波を打て。結城に到來す。執事玉岡八郎左衛門尉政時。受次て被申上けるは。武州大串左衛門入道武藏子息小次郎重義。舍弟兵衛尉氏知。宇都宮下野守廣綱に志をふくんて。讀光院高基公御存生の內より色々不義有之けれとも、御先父

政氏公。ふかく願れけるゆへに。高基公も親の御遺言を。もたしかたく差置れける處に。今度晴氏公の郎等野勝七郎光時と申者を。武州草加にて討たりけるほとに。大串父子にいきとほりたまひ。急度尋ねて給はれかし。武士數百騎御供あれかしと申越されたり。子息七郎晴朝殿を初として。伊左八郎兵衛政貞。山川三郎成勝。厚木越前守。小川十郎朝成。石橋十郎。飯田民部。野田右衛門。間々田次郎左衛門。東大膳。白川彌市郎。藥師寺藤七郎。吉田半十郎。竹井七郎。青木九郎兵衛。谷貝藤八郎。鈴木新左衛門。渡邊外記。岩松五郎作。佐野左兵衛佐。小栗小四郎。小山五郎大夫。寺戸七郎右衛門。寒川四郎左衛門。尾鹿刑部左衛門。益子三郎。金山伊織。大内縫殿。長沼太左衛門。荻田彌十郎。坪山源吾。小川和泉介。是等皆結城在居の諸士。大串の討手に誰か能候はんと各評定ある。小川十郎朝成申されけるは。今度大串の合戰なるへし。子細は小田讃岐守氏治なとにも。彼と同心なるよし承る。又千葉の一族の心底も。何角知謀の勇士ならすは。差向申されま間敷候。多賀谷權太夫政朝。水谷左兵衛入道全久に被仰付。いかゝ侍んと申上られける。政勝殿をはしめとして。座中可然と評定相究り。兩人に仰付られ。古河の公方の御教書を被下ける。兩人。辭退に不及歸宅せられ。出陣の用意とそ聞へける。

攻大串事附玉若丸手柄之事

一永祿元年戊午八月廿日。多賀谷權大夫政朝の勢三百餘騎にて。大手の大將に向れける。水谷左兵衛入道全久。貳百餘騎を牽し。搦手の大將なり。三ツ巴の旗印。風になひかせ。しつ〳〵と押寄る。大串の一族出陣してま

ちかけたり。寄正四百騎。城より壹町はかりへ出陣を取。多賀谷。水谷もみ合。ときのこゑを上。虎韜に連りて押掛る。大串か一族は鶴翼にかまへて。鞆に十死一生と相戰ふ。八月廿三日。夜の東より明ける時より。翌廿四日の午の尅まて戰ひけるに。寄手七十八騎討れけれは。大串の方にても。武士百餘騎討れ。兩方輩に相引に引退く。爰に寄手の方より十五六才なる少人の。郎等五十騎ともなひ敵近く乘寄て。念佛堂彌陀臺を小橋に取て。大音上申されけるは。抑是は淸和天皇の末葉逸見冠者淸光の八男八代與惣次信澄に凡十六代。水谷判官信俊の養子。結城八郎太郎刑部太夫基光次男右馬頭貞光。水谷を繼てより。此方七代の末孫左衛門尉政俊一子玉若丸。行年僅十六歲。親政俊死去。後なん有て實名共不定。無位無官の若もの。手なみのほとを見よやとのゝしつて掛りける。大串か一族百騎はかり。口のすきたる小冠者あますなと。眞中に取込め。知理なく責戰ける。水谷は義を重く。名を後代に留んと。切先に火煙を出し、生て壹人も歸る氣色なく戰ける程に。大串勢。案の外に打れ。負腹を立て攻戰。智謀勇義の水谷兵。勢つかれ半死半生に打なさるゝ所に。祖父全久はるかに見て。白八文字の笠印は。味方の者と覺へたり　討すなと下知なせは。貳百餘騎一度に切て掛る。玉若丸。是に力を得。無二無三に責入は。城の兵。知理なく攻られて十方に散亂す。玉若丸。名字侍四十六頭をとり。猶々進んて攻けれは。兵氣色を失ひ。次第々々に落行ける程に。殘りすくなに成にけり。城將大串も。今は是までと思ひ。入道したりけれは。子息小太郎重光を初め一族十九人甲を

脱て入道か頭を。多賀谷に渡して。其身は降人と成にける。依之。多賀谷。水谷。結城政勝殿を以て。晴氏公へ披露の上。暫太平にこそ成にけり。

同歸陣之事附玉若丸實名定る事

一兩將歸陣有し。結城に着ければ。多賀谷太夫政朝は。大串入道か頭を實撿に入る。水谷全久は。さして手柄もなく。首尾能からさる處に。玉若丸。大串入道か甥の彌次郎重光か頭を先として。名字の頭四拾六級まて。實檢に入ければ政勝殿。不斜思召。古河卿へ訴へ。金三百枚。玉若丸に給る。廿日過て。永樂千貫文ヶ所を給はり。殊に左京大夫勝俊に任せられけるこそ。譽といふも類なかりけり。

多賀谷水谷不和之事附成田合戰之事

一去る間。多賀谷太夫政朝は。大串か頭を實檢に入るといへとも。自死の首なる程に。敢て恩賞をも給はらす。却て水谷左京大夫に。褒恩を給はりけるに依て。心中不和に成にける。永祿四年辛酉三月三日の事なるに。多賀谷大夫か執事成田主馬介知尾と。左京大夫に行乘て通りける。小川野にて左京大夫に行逢たり。日頃。主の多賀谷に意趣有に依て。勝俊に下知せられけるは。下妻の成田と見ゆる。打とれとありければ。鶴見内藏介俊行。道中に差ふさかりて申けるは。又者の仁義。下馬をこそ可致に。馬上の笠は推參なり。首共に笠をぬかせんと云程に。貳百餘騎拔連て打て掛る。成田も心得たりと。しふに陣を張て暫く戰けれ共。案の外に知理なく責られて。成田か兵五十騎討れ。其身も數ヶ所手を負て。軍中をまぬかれ。下妻に迯歸り。多賀谷にかくと訴ける。太夫甚立腹し。俄に軍兵五百騎を率し。同四日の明ほのに。

水谷方へ押寄せ。南北より取懸け。無二無三に切入んとす。城の内にも。兵とも大手の門をひらき切て出。暫く戰ける處に。土屋三郎方より飛脚を以て。結城にかくと告たりける。政勝殿。以の外に思召。御代官として玉岡八郎政清。山川三郎虎勝。伊佐八郎兵衛政貞。馬に白淡はませて急き來りて。陣中に馬を乘入。暫しとせいして。大音上け申けるは。相互にいきとをりを捨。和睦有へしと。理を分て申けれとも。兩方。更に聞入す。やゝもすれは掛合んとしたりける所に。政勝殿。直に御出馬有て。雙方に向ひのたまはく。夫多賀谷。水谷は。結城の爲には鳥の兩羽の如く。多賀谷。水谷も亦。兩輪の如くにおもふこと不淺。兩勇とも和睦して。意趣を殘すへからすと被仰けるに。依之。兩雄和睦して。多賀谷は下妻に歸り。夫よりして多賀谷。水谷兩家の意趣靜りけるなり。

勝俊家中祟之事

一頃は永祿五年壬戌四月九日迄天氣能。十日より打續雨降ほどに。五月朔日に空晴。七日迄不降。又八日より降ける。大雨降洪水にてきぬ川夥敷滿水。舟いかたの往來もなく。加波山。筑波山より來る薪。路邊古田の如くにて。人馬の通ひなく。薪は倍直段高直なり。五月廿三日。夜の番に相當り。薪のあらされは。大日付中島九郎左衛門。三の丸の竹垣の崩れたるを。少しつゝ其夜の薪としたりける。其下々は殊更薪のあらされは。九郎左衛門さへ。竹垣をぬすめはとて。我も〳〵と盜取。然る間。四五日の間に。竹垣百間はかり拔ける。依之。執事鶴見内藏介。平澤七郎。頻りに詮議有により。廿三日夜の當番十人はかり撰置れ。一々詮義上。九郎左衛門をは

成敗と定めける。勝俊。此事聞召。鶴見。平澤を召出され。今度家中の盗せし輩は。少しも科あらす。科は只汝等なり。如何と云に。我に忠とはかり心得て。家中。民のつかれを知らす。是家臣とは申されす。專ら主の行儀を考へ。家中の志をためし。民の疲れ知るを以て家臣といふ。汝等は知らさるゆへ。家中も汝等か科なり。又人は情あるもの也。足輕壹人は竹垣百間にほしかし。（マヽ）相かまへて人を害すなと被仰。却て九郎左衛門に褒美を給りける。勝俊はヶ様に家中をあわれみけるほとに。君義あれは臣も忠を賴と也。

領内不作の事

（一脫カ）已に今年。日損。水損。風雨等の災にて。領内不作なるに依て。納米納永未進有之程に。奉行代官名主等。色々詮義の上。翌年永祿六年癸亥十二月廿日餘迄相延けれとも。納領無之に依て。百姓の母や妻を引出し。水籠に押入て。食事を乏ふしていましめけるこそ淺間敷けれ。寒氣は頻にして。肌を通し（通リ）骨髓にしみて泣聲。初は天にひゝき。むけんの罪にもことならす。後には絶入るやうにそ聞へける。勝俊聞給ひ。奉行人等こそ。不出來の政道かな。其者共。いそきめすへしと仰ける程に。宿所々々へ歸りける。扨其後。物成三分一納所可仕之由宣ひける。其時。鶴見內藏介申上けるは。是程御物成減少仕候而は。御臺所續き申間敷とそ申ける。勝俊の曰く。夫民は正直のもの。武士はたけきもの。細工は謀計の者。商は臆病の者也。これ四民の內に。民ほと正路なるものはなし。なけれはこそ納領なけれは。先家財寶として。借米をいたし送るへしと仰られける。依之。御家の寶共を結城の和久美藤藏と云者に人。借米し

て臺所を續けける。明て七年甲子の歲、滿作なるに依て。此頃三年の物成納領したりける。借米も取返しけるとなり。ケ様に民に憐みあれは、民もまた儀正し。彌々上をおもんしけるとそ。

家中善惡之事

一城の東の竹藪の內に。五間貳尺。三間半の土藏有。是に御先祖代々の寶物を納め置給ふ所也。番頭貳人。同心廿人にて。各番をいたしけるか、城にはなれて靜なる所とて。番の節。或は連歌誹諧杯して遊ひける。後には色々慰事長して。番頭須藤次郎兵衛。秋元兵部。目附大山勘三郎。殊之外博奕すきにて遊ひける程こそあれ。勤番は疎意になり。番所より出火して。所々にもえ付たり。されとも火消奉行中村權兵衛。萩田彌右衛門。同心六十人にて駈付。何事なく消留たりけり。是に依て。穿鑿せられけれは。秋元兵部。大山勘三郎言上申けるは。今度の科は。我等兩人に究りて候へは。御慈悲に自餘の科を御ゆるし。我々兩人を重科にふせられ給れかしと申上、勝俊のたまはく。命は是一生の□事。主は是命の□事。主の爲世の爲、命を輕んずる武士は。勝俊か命にも代らんとて。兩人に褒美を給り。須藤治郎兵衛、火事の夜欠落したりけるか。上頃あらはれけるを召捕て引出し、勝俊御覽して。命を重く義を輕く命を助る武士い。おくれし主をふり捨て。敵に降參して。扶持せし主を敵となし。時代にさかへる輩は。中々勝俊か先途に不立して。却てあたなるへし。生害せよと宣ひ。則頭を切て五所の宮に引さらす。勝俊。ケ様に家中を征しけるゆゑ。彌々家中。命を不惜忠孝をはけましける。

結城殿の聟になる事附勝俊法心之事

一結城政勝の息女小藤姫と申て。十六歳に成らせけるを。永祿八年二月四日に。左京大夫勝俊へ送られける。其上。京都に奏し。左京大夫を改め。出羽守に任ぜられ。都鄙安堵の御判を給ふ。五所の宮五ケ庄を領地せられけるこそ武功なれ。翌年。小藤姫懐姙まし〳〵て。七月十七日に御平產成けれとも。後產滯て。廿九日の午の尅に。終に空しく成らせ給ひける。出羽守。落涙限りなし。有へきにあらされは。乘國寺六代いかん和尚の弟子となり。法名を蟠龍居士と申ける。今年廿歲。善惡無二の勇者にて。菩提の道をとはれけるこそ。誠に殊勝なれ。

中村合戰之事

一去る天文年中。宇都宮備前守長房と。宇都宮下野守貞綱と不和成に依て。足利古河晴氏公。結城上總介政勝。佐竹修理大夫義昭。小田讚岐守氏治。那須權太夫隆資なと申分せられ。益子信濃守入道すひこ。水谷吉賀左衞門政俊を使者として。宇都宮へ被遣る處に。芳賀伊賀守貞經一族三百餘騎にて。雀の宮に待伏しけるに。益子。水谷。案の外に兵を討れ歸宅す。依之。東國亂るゝ事限りなし。那須。佐竹數度合戰に及へり。重て水谷蟠龍思はれけるは。宇都宮とは敵なれは。益子と一和して宇都宮を責亡し。佐竹修理大夫殿子息の內にて。宇都宮を絕さんと思ひ立て。軍機なして。永祿九年十月七日。蟠龍三百餘騎にて。久下田に發向す。中村日向入道玄甫貳百餘騎にて馳向ひ。應様に陣取て。射手をすゝませ待かけたり。蟠龍知謀勇なる大將にて。中村か勢をおそれたる風情にて引退く。中村小太郎長時。勝に乘て追懸

る。蟠龍。下館まで引歸れは。長時。さもそうすと。中村に歸宅す 其夜は霜月夜にて雲出。村雨降出てくらかりけり、蟠龍。三百餘騎にて夜討にこそはしたりける。中村。案の外に攻討れ。大きに動轉し。築地より飛とて。あやまつて頭を打付。自死することそむさんなれ。小太郎長時は。宇都宮へ(久下田カ)のかれける。蟠龍。中村を討て。暫く下久田に出城を構へ居住せられける。

眞岡伊織久下田に寄る事

一扨も蟠龍御父左衛門尉吉賀。源氏政俊の十三年御忌の爲に。いかん和尚。久下田に來光有て。御父の芳全寺の追福ありて。則其地を建立し給ひ。蟠龍山芳全寺と號しける。其寺にて千部讀誦なりける處に 芳賀一族眞岡伊織介貞家。二百餘騎にて久下田に發向す。蟠龍は百餘騎を城に籠殘し。其外平澤十郎。村田次郎左衛門。岡島大膳。鶴見內藏介 渡邊源五郎。鈴木八左門衛。彼是都合百五拾騎。大島に隱れ相圖を極め待かけ。兩方より取包み。鹿野の眞中にて責打けれは。眞岡貞家。案の外にて。兵悉く討れ散亂するを。水谷。追懸々々打程に。伊織介か侍に。日下和泉と云者。討れけることこそ悲しけれ。

重而宇都宮より押寄る事

一宇都宮より討手の大將武田治部大夫信陸、八百餘騎にて發向す。同四月廿三日。卯の尅押寄。時を作りて切て入る、城の兵。打て出暫く戰て城に引入。遠矢なと射て。進んて戰もせさりけり。信陸下知して曰く。此儀 いつまて隙を取へき。一もみに責よと。八百餘騎から堀に飛入て。築地を堀かへさんとしたりける。蟠龍。時を窺て上より大木小木を投かけ。矢鐵砲きひしく打掛けゝる程に 寄

手八百餘騎半死半生に打なされ。堀より迯上らんとする處を。水谷か兵共。三百餘騎にて四方より攻けれは。寄手雜兵は云に及はす。名字の武士五百騎討死す。武田も。秋山左衛門尉廣政に討れける。明る廿四日。首實檢有て。城の小石橋にてとふらひけるこそやさしけれ。蟠龍手向の歌に。

こゆる人またも來たるに手向るそ五行の水のあらんかきりは

いかん和尚も。一唱(偈カ)となへられしも有かたき。

結城政勝逝去之事

一已に結城政勝殿。御病氣しきりにて。一族家士。結城に相詰て。醫師秘術を盡しけれとも。究りにや。元龜元年八月朔日。御年五拾六歳にて空く成らせ給ひける。大雲院殿法名勝長と號しけり。七郎晴朝殿。御家督せられ。執事として水谷。多賀谷相守り。結城の旗下美々敷。門前に市をなす。蟠熟(龍脫カ)々世の有樣を考るに。他のさかるを見て。自のを信せよ。おとろふるを見て。自さかんなるを勘へよ。宇都宮尙綱は。那須權頭隆資に討れ。親の貞綱は切腹せられけれとも。廣綱嫡子國綱。宇都宮を責。又那須隆資は。千本常陸に討れ。又國分大極淸基抔も。佐竹義昭の爲に國を失ふ。小山。長沼なとも亡失けれは。水谷も今日盛んなれは。明日の失家や。さらは道こそ第一なれとて。閑居して下館の城をは。甥伊勢守勝高に續せ。其身はしはらく案事すまさせ給ふなり。

高鹽合戰之事

一下野國芳賀郡田那の庄の內。山本と云所に。高鹽平入道と云者。益子におゐて。去ル天文二年。寺を建立する。大平山鷄足寺と號し。

天海舜政大和尚を住持とせしめ。高鹽入道。同六年六月廿六日に卒す、入道の子息伊勢守。同律の少輔高鹽入道と即我儘に行事の意趣に依て。益子より高鹽追討せん爲に。加藤大隅。土屋刑部左衛門。向田子五郎胤直。立原左近。成田新七。魚梅平八等七十三人にて。天正十一年九月朔日。山本に押寄る。合戰して利を不得打負ぬ。同月廿六日。又彼等誅討の爲。先高綱親藏人。田井の住人高松大隅介。子息彦八郎。同住人關大隅將監。子息彌次左衛門。高根澤遠江介。市塙左京。舍弟新左衛門。高橋兵部左衛門。本庄住人三神筑前。子息上野介。村上丹波。子息彌六左衛門。飯村伊勢將監。子息入道元舜。舍弟大膳。飯村兵部左衛門。子息源一郎。舍弟六郎は。等皆紀の旗下なり。北條清十郎行重預り人。茲之黨は。加藤上總 叔父入道長久。舍弟左近、子息藤内。同次郎左衛門。同七郎左衛門。土佐子息彌右衛門。金枝隱岐。栗原但馬。同豐後。山本圖兵衛。根路文五郎。泥府宮内左衛門。上野主水。栗崎民部。引田圖書。子息藤内。大峯彈正。添谷近江介。押向地伊織。胡田和泉介。柳久太夫。同内膳。立野民部。細川右衛門。大山駿河。金子治部左衛門。日渡主殿。藤田文左衛門。其外與力の人々には。筑後守貞義の末孫平太郎。同河原一黨。小宅采女允。田井の住人須藤隼人。水谷入道蟠龍。館右馬允。結城 大田か勢大軍にて。終に高鹽を追討しける。

一 斯て天正十一年九月朔日。益子 宮内太夫家宗。高鹽伊勢守政平と合戰に及し時。家宗。高鹽を侮て兵悉く討れける。依て水谷伊勢守勝高と。太田五郎左衛門入道三樂を賴み。同廿六日に。高鹽立籠る 田野の庄山本の城

を責下す。則彼領を奪取。舘因幡介を代官として。山本を守らせける。高鹽伊勢守政平と。笠間左衛門尉時廣か郎等なり。依之。笠間代官として。滿川勘左衛門尉忠脩。三百餘騎にて。益子家宗か郎等加藤大隅宗安か楯籠る富谷の城を責にけり。釆女一味の兵に。金敷左馬介淸久。齋藤久米之判官傳輝。彼か一族には。仲田主馬介増武。松平豐前守岩丸。飯塚內藏。道大允太夫房長。猪國蒔田與九八。別當ふけん拆とて。兵法の達者楯籠る。滿川左右なく戰負て。笠間に引退く。爰に笠間の郎等に。田野の住人羽石內藏入道時政。一族手勢百餘騎にて金敷の城を責下す。金敷左馬介淸久。戰負て結城に有之。左馬介淸久。二度金敷の城に歸復す。然るに二月廿九日の晩に。夜討して金敷を責下すは。淸久。政時か爲に討れければ。晴朝怒り給ひ。羽石追討の爲。大將には水谷父子に仰付られける。

水谷出陣之事

扨も水谷出羽入道蟠龍。後世の（一脱カ）いとなみし給ひて。大將次第と申されけれとも。是非なく賴まれ。大將を蒙りける。子息伊勢守勝高。搦手の大將として。一族彼是三百餘騎にて發向す。小栗但馬にも。百五十騎にて加勢す。小林野に出られければ。益子宮內太夫家宗。百騎はかりにて味方す。爰かしこより走り集り。蟠龍七百餘騎にそ成にけり。向北の方を見渡せは。三つ巴の旗下に猪のしゝの紋の幕打て。二三百騎にて扣たるは。芳賀淸十郎と見へたり。水谷。是を見給ひ。彼に馳向ひ。横合の軍して詮なしと。根本より北田井に欠越けるに。路邊に一ッの社あり。其社の扉おのれと開き給ひし故。水谷。下馬し

てかつかふの頭をかたむけ。掌を合せ立願有。抑氏宮（此カ）は。本地は虚空藏現世大星宮。此度の合戰に。勝利を給ふにおゐては。修道奉行社領廿五町寄附奉らんと念願有は。前なる神木の上より。生頭一級落たりけり。諸願是迄と中村に引けは。七井五郎勝忠。飯村六郎。同大膳味方す。益子に暫く逗留して。三月廿七日の夜半に。益子を立て。寅の刻に田野に押寄。時を作りて攻たりけり。

責羽石を事

一斯て城の内には。大將羽石内藏允時政。子息十郎政秀。舍弟左衛門尉時義。其外阿保遠江守良實。足立大膳亮知兼。大泉小太郎左衛門秀兼。小泉次郎兵衛秀秋。同七郎。中原庄左衛門尉。長堀律師松光。松崎内匠介久本。阿保六右衛門良房。同八左衛門良清。秋山源左衛門。仁平大膳。加倉井因幡介久國。大島内膳。小林九郎。柳田新左衛門。小倉長左衛門。高鹽守右衛門。高畑五郎左衛門。礒部越前守忠光。芳賀清十郎貞直。小宅釆女助高清。眞岡十郎貞清。彼是都て三百餘騎。城の南北にわかれつゝ。切て出て十死一生とそ戰ひける。翌廿八日。暮方には城の兵貳百餘騎討れけれは。寄手も百貳拾騎程討れけり。斯て其夜は。敵味方暫く休息しける處に。水谷全久次男五郎勝甚。年十八歳に成けるか。一族三十七騎牽して。城の内に無二無三に攻入けれは。城の兵共。鑓長刀を手に／＼持。みちんになさんと打て掛る。伊勢守勝高。是を見て。五郎勝甚を討すなと下知して。一陣に馬を乘入けれは。五百餘騎一度に。とつと門木戸を押破て入にける。城内一度に破れ。防くへき手たてなく。十方に迯まはる。水谷。勝に乘て知理なく責立ける程に。矢鐵砲を

も打つへき隙なく。爰かしこに討死し、。殘る者僅に一族廿人はかり。城の東に迯延ひ。寂期の躰と見へにける。嫡子十郎は。夕部に落殘る一族廿九日の夜を明すに。小の月にて。明日は卯月朔日なれは。城をたもつて。一夜を千夜と。今宵限りに泣明す命の程こそ哀なれ。爰に千ヽ寺に隱せし龜鶴君は。如何と問れけれ(脱アラン)。然處に。道入寺祐悅の方より。便りの文と來りける。內室。急き開き見給ふに。夫千入寺は。益子か郎等北條淸十郎行高。寺中に責入に依て。天正寺金剛坊長慶醫王坊。曲輪の圓心坊をはしめ。僧等若黨廿四人討死す祐秀法印は。般若經を負て、山本東覺寺へのかれて候。龜若殿も北條か爲に討れしなり。されとも大心坊。北條をは討候へとも。龜鶴殿は討れけると。讀も果ぬに母上はむせふ泪の隙ならるとも迚ものかれぬ我命。何時まて物を思ひけんと自害するこそ哀なれ。舍弟左衛門尉時義も。一族六人害(自脱カ)し。其身も疵數ケ所なれは。是まてと腹かき切。殘りの者とも。思ひ〳〵に討死して。內藏介時政。壹人死殘て大門に壹人出。大音上けて呼はる樣。抑是は天津兒家根の御苗裔栗田關白大政大臣兼家の末孫。宇都宮尙綱次男笠間左衛門尉明朝に。五代の孫羽石內藏介時政なり。水谷蟠龍に見參やつと呼はれは。蟠龍は馬一陣に乘出し。あらけふ〳〵しの名字かな。系圖は誰も同し事。抑我は淸和の末孫大和守賴親の次男福田次郎賴遠次男。奧州岩城を領して石川判官有光か養子に、逸見源氏にて代を繼。古賀御前淸倍(マヽ)に十六代。結城より代取て七代。水谷出羽入道蟠龍と名乘掛け。眞一文字に切て掛る。互にあらそひしかとも。羽石終に討れける。今年

五十八歲にて。卯月朔日未の刻に。草葉の露と消にける。蟠龍は喜悅の眉をひらき。暫時作て歸陣有る。今度の武功に依て。田野四百貫の所を領知せられける。

羽石十郞重而謀反の事附田野黑の事

一羽石十郞政秀は。早黑と云名馬に乘て。三重の堀を飛越。しはらく其害を遁れ出。常州笠間新治の勢を催して。重て本意を達せんと思ひ煩ひ。笠間殿を賴みける。此事。四方に隱れなく。今井勘右衛門道豐傳へ聞し。水谷へ告知せけり。去程に。同十月七日。笠間へ行道にて。水谷の郞等平澤五郞智義に行逢。討れける社はかなけれ。彼早黑といふ馬を奪取。結城殿へ奉る。此馬の名をかへ。結城殿は。田野黑と申名馬は是なり。

高森合戰之事附中郡責之事

一依之。阿保遠江守良實は。笹子宮內太夫家宗に降せられける吉田周防を養子として。其（脫アラン）儘被差置ける。其外。阿保六右衛門良房。飯田八左衛門良淸。同助九郞光良。同十兵衛。安立仁平。長堀高畑勘左衛門。眞崎九郞兵衛。岩瀨十兵衛。柳故兵衛等をはしめとして。都五百餘騎。今井勘左衛門か黑羽の城を責落す。依之。片見伊賀守晴信。常陸に發向す。依て阿保良久。本木源太。中原嘉兵衛。山口修理。稻田新五郞。箱田和泉。片臺三右衛門。彼是百五拾騎にて。上野にさゝへ防き戰けるか。一騎も殘らす討れけり。悉く片見伊賀守に切したかへられ。中都にさゝゆ（途）るもの一人もなかりけり。然る間。橋本に要害を搆けるゆへに。笠間左衛門尉時廣。福原主膳朝廣六百餘騎を引率して。橋本に押寄る。天正十三年二月廿三日に。片見か郞等谷中玄蕃高廣。三拾貳騎にて富岡にさゝへ。十

六度迄追ては返し〳〵。防戰しかとも。谷中か兵悉く討れ。其身も手疵を負。加波山に隱れ居たりしを。朋友天野縫殿と云者に生捕られ。終に討れけるこそ惜けれ。笠間福原兒弟は。橋本に攻登り勢ひかゝつて責にける。城の內には。盆子。七井。礒部三百騎にはたらきける。笠間に知理なく責立られ。已に危く成ける所に。水谷伊勢守勝高。三百餘騎にて橋本の後詰として。高森迄發向す。福原主膳。百七騎引分て橋本を打捨。櫻川にさゝへけり。水谷の荒手無二無三に攻立ければ。福原。一戰にも及はす散亂す。勝高下知して。あますなと追討ければ。福原主膳。是非なく神宮に馳入て入道して隱れけれとも。生捕られけるこそ淺ましけれ。去る程に。橋本に押寄たる笠間左衛門尉時廣は。櫻川の戰ひに福原。負て敗北と聞しかは。橋本を引拂。笠間に歸陣有けれとも。水谷の强兵。勢にかゝりて橋本の城兵と一ツになり。稻田まて追掛る。笠間左衛門尉。大きに驚きせんかたなく。稻田西念寺を以て。降參せられけるに依て。水谷下舘に歸陣なりける。

眞壁太田合戰之事

一水谷伊勢守勝高は。已に常州を切したかへ歸られける處に。眞壁左門衛入道道無。五百餘騎にて。天正十四年四月朔日。大泉にさゝへける。依之。軍機翻て。水谷三百餘騎にて田野に陣を取。小宅三郎左衛門入道貞高。坂戸の城より眞壁か勢を。遠矢に射懸けて攻下す。眞壁。案に相違して。小宅に責立られ。自餘の敵にそくはくの兵を討れ。門田惡敷とて引退く。爰に武州江戸の城主。太田道灌持資の舍弟。岩付の城主太田五郞左衛門尉入道三樂。今は子細有て。常陸新治郡片野に付

居しける。嫡子五郎資春。次男六郎義持。聟に長倉遠江守等を初として。新治の勢を率して。片野の城を打立。天正十四年八月廿九日に。大釜に發向して。板敷山を切ふさき。中都を切取んとす。依之。片見伊賀守。橋本を立て馳向。今泉に陣を取。暫く戰ひしか共。知謀武略の三樂に。知理なく攻打れ。十方に散亂して。剩其身も手疵數ヶ所を負て死去しぬれは。三樂に奪れける。去る程に。今度は水谷伊勢守勝高。七百騎を以て松田野に發向有る。三樂も松田野に向て。水谷勢と掛合せ。生死知らすして戰ける。頃は天正十五年二月十九日には。兩方相引に引退く。水谷の勢百五拾騎討れけれは。三樂方には三百餘騎討れ。皆死一生に成て片野の城に引退く。磯部越前守忠安走り向て討死する。是を三樂も首尾として。片野にこそは引取ける。名將とこそ聞へける。水谷暫く橋本に逗留して。下舘に歸られたり。知謀の勇將とこそ見へにける。

水谷芳賀和睦之事

一天正十五年十月の頃。水谷伊勢守勝高は。大軍を率し河内郡に責入けり。依之。宇都宮下野守國綱の代官として。御舍弟芳賀左衛門尉貞國。近邊の勢を催して。上三川に陣を張て。與力の勢を相待たりける。今泉但馬入道春雪。藥師寺安房守勝朝。横田左近。大紋彌四郎。蒲生五郎八。清水大和守。横田大和守。同五郎左衛門。子息五郎。今泉四郎兵衛。吉田助作。今泉刑部左衛門。川田右衛門尉。皆川山城守。小倉長左衛門。彼是都合七百餘騎にて。備を取かゝる所に。結城七郎晴朝。御直に出馬有て。宇都宮と同志し給ひ。芳賀。水谷を和睦せしめたまひけれは。重ねて宇

都宮の戰ひは。なかりけりとそ聞へしとなり。

以東京帝國大學圖書館本謄寫校合畢

水谷蟠龍記

常陸國久下田の城主水谷蟠龍は。誕生以前より不思義有人也。□□□□（虫損）大永三年癸未正月十七日の子の刻に。御老母御夢に。八十餘りの老僧額より光を放ち來り仰せけるは。汝に寶を授とて。口中へ玉を入る。彼玉。腹中に次第に落入り腹はるやうに覺ゆれは。夢則さむる。此月より御懷胎有て。次の年大永四年甲申年正月十七日の子の刻に。御誕生なり。月も日も時も御夢とおなし。まことに希有なる事なり。以上胎內に十三月宿り給ふ。左の御目に瞳み二つ有。これは御老母。常々千手觀音を信し給ひて。每月十七日の早朝に。身を清め精進し給ひて。普門品を三十返つゝ讀誦し給ふなり。此故に。定て觀音の御利生の御子にてあるへしと。人皆申ける。誕生以後。孩子の內に終に啼給はす。七歲より好て弓馬兵法を習ふ。八歲の頃

は師匠におとらさる程也。九歳にて法花を習ひ。毎日一巻つゝ讀誦し給ふ。十歳より萬事の理非を辨し給ふ事は。尋常の人にすくれたり。(天文元)十一歳の時。中間二人。口論頻りなるを聞召給ひて。御裁許なさる。中々年寄衆も及さる事に候。十二より馬を習ひ。十三四五の時分は。師匠よりも勝れたり。惣して何によらす。諸藝に器用なり。十七の歳天文八年己亥に。結城政勝公。□□□□より上意を得。　武州大串陣なり。蟠龍望て御供。大手は多賀谷。搦手は水谷に仰付らる。三月□日□刻にからめ手を打破り。城中に責入る。敵三百騎あまり。北南兩所より切て出るを。一方へ捲りよせ。追つ返しつ一時半程戰ひ。首四十六取。殘る勢は皆城中へ引く。□□□□彼陣場に彌陀堂同しく鐘あり。蟠龍。是を持せ歸る。殿りは蟠龍同く(なイ)蟠龍叔父の水谷全久兩人。鐘を揃へ二行に乘り。いかにもしつかにのき給ふ。政勝御旗前二町半程。さきの事なれは。目の下に見ゆる。誠に晴かましき軍なり。則御旗本に參り。右の首とも一々にならへ。蟠龍甲を脱て伺公して。政勝の實撿に入れ給ふ。政勝。大きに御悦喜有て仰せけるは。異國張良か働も。是程には有まじく候。しかれはなにやらん。大勢に擔はせ來るとみへてあるか。なにゝて候ぞ。蟠龍申されけるは。拙者初めての軍。手柄のしるし後季の子孫に見せ申さんために。軍場に鐘御座候を持せ來り候。政勝仰せけるは。若武者なるか。智恵は八十の翁よりも深く。世にめつらしき功の者かなと。□□□□歸陣の後。水谷三度の功名の品々。一々上へ披露を遂給へは。御悦喜限なし。是は時の褒美とて。金子三百兩被下候。其後廿日過。□□□□加增として永樂千貫の所を頂戴す。鐘は今城の鐘是也。鐘の銘に武州吉

見の郡大串郷窪田村阿彌陀堂の鐘とあり。私云。伊勢守殿御國替の時。芳全寺に納む。今に是あり。

蟠龍十八の年。天文九年。多賀谷か家老成田主馬と云者。こゝやかしこにて覺へある者也。去時。蟠龍へ乘うちいたす故に。蟠龍。押懸うたんとす。主馬取て返し。追つまくりつ半時ほと戰ふ。去なから蟠龍にかなふ事にてはなし。安々と打留る也。多賀谷立腹し。使者にて申樣。主馬に慮外あらは。共にことはるへき事に。左はなくして打捨に致す事。我儘の振舞なりと申來る。蟠龍返事には。ことはりたて致し。時を移すは臆病者の事なり。我等は慮外者をは。何時もゆるし申事まかりならす候。多賀谷立腹して。其夜の明方によせ來る。蟠龍。大手の門をひらき切て出る事三度。多賀谷か人數こと〳〵く敗軍す。政勝御自身。馬を出し仰けるは。多賀谷と水谷は。政勝か爲には。車ならは兩輪。鳥ならは兩翼のことし。一人欠ては。政勝か家の破滅也。雙方與平。政勝に免して堪忍し給へと。樣々仰給ふ間。互に和睦になる。政勝。御悅喜限りなし。則中を御なをしなされ御酒盛の時。高砂をはやさせ。御自身御舞なさる。家中の侍。上下ともに武勇ある名將かなと譽ぬ者はなし。

蟠龍十九の年。天文十年五月半の比。永雨降。三の丸の竹垣。何者か百間ほと破り盜む。家老共。腹を立。穿鑿致せは。足輕百人の業なり。故に統領十人縛り。鬮をとらせ。一人成敗に究め。此由。蟠龍へ伺へは。大きに立腹し仰けるやうは。盜賊の大將は家老共にて有。何とてそれ程に下の詰るやうには擬候そ。八木錢を持ぬ故によりて。是非に及はねはこそ。命をもかへり見す。盜み候そ。足輕に咎はなきそ。縱咎

ありとも。我等かためには。譜代の者こそ鐵の楯にも増りたれ。其子細は。我一人。鐵城にこもる共。敵多勢ならば何とてたまるへし。又縦、武藏野の眞中に陣を取とも。各をはしめ譜代の者とも、上下共に一つに心を合せ防き戰候はゝ、卒爾には打れまし。然は百間の竹屏り。一人の足輕こそ大事なれ。それ／＼はやゆるせと仰ける、扨又、此中足輕共。故なき穿鑿にあひ。さぞや苦勞致すらん。俵子百俵薪百駄、百人の足輕に〔ナシイ〕とらせよと仰給へは、皆感涙をなかしけるとかや。

蟠龍二十の年、天文十一年、耕作惡敷よし聞召。年貢等。常の三つ一つ取へきよし仰付らる、家老共申けるは。左樣にいたしては。家中の育み成難く候と申す。蟠龍。則家重代を六腰取出し。質に置けと仰付らる。此義、徳者に談合すれは、惣して質の物は。有直の半分のものにて候と申。然は何程もなく候よし申ければ。扨は賣切りにいたせと仰ける。家老共申けるは。御家の重代。永代失ふ事は如何、御分別あるへしと申ければ。蟠龍仰けるは、刀千腰にも替かたき譜代共を助るからには。苦しからす。其子細は。刀千腰さして敵に向ふたり共。一人にてはかなふまし。縦すこしにて出たりとも。家中上下の心によつて。敵をは收むへけれ。然る時は。家中こそ家の重代よと仰ければ。是非に及はす賣、家中上下に配る。次のとし耕作好し。百姓一同に心をあはせ。右の重代を買返し差上れは。蟠龍仰けるは。君に明あれは臣に忠有と哉らん云。古人の語も。今こそ心得て候。我欲心をはなれ。家の重代を賣。民を助るは君の心明らかなるに。少しは似たり。又賤き百姓とは云なから。其恩をしり。當年少耕作よきとて。買戻し差上る事。臣下の忠心にてはなき

か。誠に聖人の言葉に僞りはなきと仰られ。御泪をなかし感し給ふ也。良有て仰けるは。當年貢。常の三つ一つゆるせと仰ける。村々の百姓。みな一同に登城いたし。樣々斟酌仕れとも。君子に二言なけれは。終には御免し給ふ。百姓餘り忝さに。涙をなかし退出いたす也。

同廿一の年。臺所に火事出來。危く燒んとする所を。家中走り着消す。是に依て。城の東藪の中に。五間に藏を立。二間は番所に用。三間の内に。先祖代々功名の感狀數通。同しく所領加增の書付等を始として。惣して家の倍高の道具。其外高直の諸道具を籠おく。然而根岸兵庫。河上勘解由兩人を頭として。足輕廿人申付。晝夜番をいたさしむ。殊に番所に火を用る事。堅禁制す。然は彼番頭兩人談合には。此番所は人の通はぬ地なれは。好き博奕打所そといひ。忍ひ／＼に相手を誘ひ。晝夜共にうつ。其時打勞れ。殊に酒に醉臥。其隙に火鉢より火事起る。彼者共。火事よ／＼と呼て則逃る。家中かけ着。取出すといへとも。十の物一つも出さす。大形燒失す。家老共。彼頭兩人尋出し。死罪に行ふへきよし申上れは。蟠龍仰けるは。寶をやき損する上に。大事の譜代二人殺す事は。重々の費なり。右臺所の火事故。隨分念を入るといへとも。燒失する事は時節にて有。全くかれらか咎はなし。早々召返。本のことく仕へし。心こそあほうなりとも。臆病には有まし。萬一の用に立は譜代也。夫々はやく召返せと被仰付候也。

同年の正月。村々の百姓おとなしき者共。御禮申上候嘉例にて。備一重并食酒にて。終日の御馳走なり。百姓とも申候は。例年より當年は。餅の廻りちいさく御座候とねたる。蟠龍仰けるは。餅の大小は。おのれら次第に年貢さへお

ほく上るならは。ふじの山程にしても。とらせんと仰らるれは。百姓申けるは。我等は下萬なれは。上を恐れすむさと物を申事。御嗔り有へきに。狂談(にイ)を御意なされ。御機嫌能候并。不思議なる御生れかなと申笑悅ひける。

廿二の年。天文十三年正月元日に。政勝仰けるは。水谷は當年より某蟄に望むと仰。頓て其月の廿八日に御輿入給ふ。中々間ヶ敷事也。御家中の侍大小共に。崇敬難敷けれとも。蟠龍。少も憍り給はす。猶々懇懃に成給ふ故。御家中の諸人。大きに褒美す。婿入の祝義として。御所(嘗カ)領五ヶ村を拜領す。廿三(五行イ)の歲。彼の御姫君御逝去。其より女人決戒(此間百字計虫喰)御訴訟のことく叶ふなり。同年の八月二日の夢に。龍。岩の上に蟠り。無常の法を示す。(此間虫喰)乘國寺六代威岩和尙にたより參禪參學仕。則剃髮して蟠龍と號す。同年の十月。蟠龍。結城へ申上る樣は。某父。宇都宮旗下中村玄角を討とる故に。宇都宮取返さんと心懸る。下舘に住居にては。取返さるゝも治定に候之間。久下田に新城を築き。宇都宮を防き可申。さて又樣子能候はゝ。御下知を以。宇都宮を討取申度候と仰上給へは。政勝。其義尤と仰けり。故に蟠龍。頓て天文十三年十月廿日に。繩張をなされ。霜月三日迄に惣堀を究め。先小屋懸をなされ移り給ひ。はや同月八日には。矢岡伊織追逃し取る。是も宇都宮旗下なり。小身なる故に。朝の間に追逃す隙も取らさる也。

廿四の年。天文十五年丙午正月十七日に。宇都宮家中武田治部と云者注進の樣子は。來る廿三日の卯刻に。久下田へ押寄。打取へき軍の評定相究り候と申來る。此治部は。元は結城の者蟠龍烏帽子子也。蟠龍。かねて合點の事に候間。結城へ其由申上れは。政勝仰けるは。宇都

者は大身なれは。定て大軍なるへし。加勢三百騎遣はさるへき由仰來る。蟠龍悦喜し。弟の□□□□兩人。叔父の佐久を始。家中大小の侍殘らす集め。軍評議の時。蟠龍仰けるは。惣堀の北の大木戸に。□□□□大將にて騎馬五十騎。雜兵以上五六百計にて陣取。一戰戰つて敵强くかくる時。大手迄颯と引へし。敵必勝に乘て追へし。亦芳全等の寺中に。□□□□騎馬七十騎。雜兵六七百程草(軍イ)を伏。敵。曲塀を渡り來らは芳全寺門先へ押寄。彼敵の後を堅押へし。扨引來る武者は。大手より取つて返し。敵を蟠龍か前へ誰向よ。我切て出るならは。異國の樊會。我朝の辨慶成とも。逃すましと仰ける。扨結城の加勢は東木戸に百騎。南木戸に百騎。亦百騎は蟠龍か後に置へし。若我勞れなは入代るへしと仰ける。扨廿三日の丑の刻に。右之兩大將。蟠龍の下知のことく人數を引揃へ。彼陣場へ出て。今や遲しと待けれは。時も日も治部注進と相違なく。廿三日の卯刻に。敵來て鬨をとつと上る。此方にも待居たる事なれは。同しく鬨を合せたり。扨右の評議のことく。一勢戰ひ。敵つよくかくる時。大手迄一參に颯と引。案のことく敵勝に乘て追來る。能時分を見合。寺中の武者共。一度に押寄。塀(堀イ)を隔て。門先より坂中迄陣を取。後を堅押へ給ふ。然は彼勢は取て返し。敵を蟠龍の陣場へおしむけ。打てかゝる所を。蟠龍。切て出て追つ捲つ切給ふ。敵悉く敗軍し。跡へ逃る所を。門先の陣場にて。散々に打給ふ。上の池に落水を飮て死るも有。下の沼にはまり。泥にむせて死するも有。南東へ逃る者は。結城勢の手にかゝる。去なから宇都宮の武者共は。軍は下手なれと。逃足上手に候へは。隨分切と思ふたる漸(ものゝイ)上下八百□□より外は討さる也。相殘る者共は。籏靭穗指

物等を捨て、皆ちり〳〵に逃るなり。此方打死の者。騎馬廿八騎。雜兵八十一人□□去なから。首を取られたる者は一人もなし。明る廿四日に。□□北の方石島(右イ)前惣堀の邊路(ヨシ)の左右を隔て。穴二つ堀せ。右は侍の死骸。左は雜兵の首死骸取籠埋み。芳全寺威岩和尚を請し吊也。和尚下火の頌云。因果同分八百餘。葬唯(ナシ)二穴沒君臣。卽心卽佛菩提道。平等性智無怨無親云々。蟠龍も水を向け香を燒(火イ)て唱へ給ふ。祖師の語に云。滿瓶傾不出。無大地飢人。又歌云。

手向るそ□□五形の水のあらんかきりは。次に侍にも中間にも。同音に念佛千返計となへさせて。畢に蟠龍唱へて云。願以此功德。平等濟一切。同發菩提心。往生安樂國咄々。

蟠龍六十三の年。天正十三乙酉三月廿七日。田野合戰田野城主羽石內藏允盛長は。笠間旗下晴朝へ。少子細有て逆心の心有。故に晴朝。三月廿日に。蟠龍を召。彼羽石を討へき由御意なり。餘人にも可申付候へとも。此羽石は殊の外の曲者と聞。若討損しては晴朝か恥辱なり。貴殿儀は數度の戰に馴たる人なれは。賴候と仰ける。蟠龍。安々と御請申。軍の用意隱密にいたし。同月廿七日の夜半に打立。廿八日の寅の刻に。田野に着。則凱を上。使を以て逆心の品を具に申斷る。城中俄に騷動す。蟠龍。軍中へ仰ける樣は。此軍は時刻を移さはかならす笠間より加勢來るへし。早々蹴ちらして退けよ。兵ともけにもと存。我も〳〵と打て入。其要害はよし。殊に羽石も名を得たる武者なれは。心の儘にも攻られす。とやかくとする隙に。はや笠間より加勢來る。城中上下三千餘りに成し。晴朝。笠間より加勢あるよし聞召及はれ。究竟の兵とも二百騎。早速(剎那か間イ)に遣はされ給ふ。亦益子(マシコ)賺虎入道重綱。宇都宮旗下なれ共。晴朝

へ好身有者にて。殊に近所なれはとて。蟠龍へ加勢す。蟠龍。結城武者。同睡虎入道に向て申されけるは。各の志。生々世々忝候。去なから敵の方に入(人カ)勢何程有とても。皆臆病者の類ならん。軍は無勢多少にはよらぬ者。皆武士の心による事なれは。某安々と打取へし。心易思召。各は皆東西の山にのほり御見物あれ。若又も笠間より加勢來るならは。是を押へて給はれ。偖城中の分は某に御任せ候へ。若某勞れなは。此團扇にて招き申さん。其時替り給れと申定。父子一つに馬を雙へ墓(幕面イ)地に打て入。二三の木戸を打破り。もみに揉て攻けれは。羽石か勢討るゝ者よりは。逃る者こそおほかるらん。三夜四日の合戰に。三千計の者共。漸三百計に成給ふ。羽石。蟠龍に向ひ大音に申樣は。最早今日か最後に候間。葉武者に首を捕れ申ならは。野心に引れ無間地獄に落へし。水谷蟠龍は隱れなき弓取のよし。日比承及ふ。願くは手にかゝり。極樂世界へ參り度候と申。蟠龍つく／＼と聞て。大音に申やうは。羽石殿の御心中察入候。誠に葉武者の手にかけ申さむより。慮外なから某か手にかけ。閻魔への訟にさせ申さんといひ。互に駒をしづ／＼と寄。其間近くなれは。互に鑓にてかゝり追つ捲つ。半時程安を專途と戰けるか。終には蟠龍に打負。年齡五十八にて。天正十三乙酉四月朔日の未の刻。相果給ふなり。相殘勢は思ひ／＼に討死する者もあり。又逃落る者もあり。蟠龍も此時手六ケ所負給へ共。皆淺手に候也。然て羽石か首。晴朝へ捧け候へは。晴朝御悅喜限りなし。則田野四百貫の所。蟠龍に被下。都宮村百貫の所を益子睡虎入道に被下。(四行イ)其餘は皆結城へ納る。田野勢討死の(此間八十字計虫喰)此方の討死(此間百四十字計虫喰)(七行イ)右の妻子共に。俵粮を被下。弔を

被仰付。五月五日に家中の侍中間百姓に至るまで。側の多少に應して加勢を被下。（ナシイ）田野の百姓には二年作り取に被仰付。是は蟠龍。慈愛の人と日比聞及ふ故に。此方へ加勢する百姓過半あり。其外羽石最負の者には。其最負の念を休め。此方へ思ひよらせんためなり。右如是蟠龍一代度々の軍に。無勢にして多勢を亡す事は。常々に家中は不及申。百姓等に至る迄。大欲をはなれ。大慈悲を肝要とせられ。老たる者をは親のことく。年の増る者をは兄のことく。若き者をは我子のことくになされ候の間。侍は不及申。百姓中間草履取等に至迄。命を惜むものは一人もなき故也。大將は只常の心か大事也。人に臆病なし。臆病は只大將の心に有と。軍書に有もまことに候。

蟠龍功名。世に隠れなき故に。內府より忍に奉書を被下。其略文に云。關東中に侍多しといへ共。貴殿事は數度の功名其隠れなし。まことに賴母敷候。此繪任見來表書印迄に候云々。繪は達磨也。其賛に云。

來時已沒當門齒。去時唯有一雙履。慈嶺邊々逢宗雲。十分影露醜舉止。

田野より名馬出る。田野黑と名付。右の御返禮に蟠龍上之。其御返状之略文に云。遠路田野黑爲牽給。餘見事之故上之御厩入候云々。其以後白符の鷹を被下之。其御狀之略文云。此鷹從上奉拜領之間。寵上意贈之云々。蟠龍。此鷹秘藏いたされ。七十の時。我形を鏡に移し。自筆に御影被遊候時。鷹も我と諸共に成佛いたす様にと被仰。御影の內に御移し給ふなり。

右此物語は。彼陣場々々へ出たる者共に。直に咄させ書留る。議論なる所は。蟠龍へ伺之候之議有之者也。

慶長十二丁未年二月四日書留之

芳全四世德岩叟判

右古本は六十年餘捨置候に付て。虫喰紙破損之故。不合點之所多候。大形に見分取計書改。後季のため置之。

寛文十二年壬子六月廿日

芳全七世來空叟

元文三午年春館舍おいて書寫

義產花押（判イ）

以東京帝國大學圖書館本校合畢

水谷蟠龍記終

續群書類從卷第六百十五

合戰部四十五

土岐累代記

濃州土岐氏守護起本之事

抑當國ハ東山道ノ要國タルニ依テ。昔ヨリ國司守護其器ヲ撰マル、所也。人皇六十二代村上帝ノ御宇ニ。源滿仲天暦年中ニ當國ノ守ニ任シ給ヒテヨリ。其子攝津守頼光。同弟河内守頼信。頼光ノ子右馬頭頼國。其子美濃守國房迄源氏五代守ト成テ代々斷絶ナク承嗣アリ。白河ノ御宇。承暦三年己未七月。濃州ニヲヒテ反逆シ給ヒ終ニ阿波國ヘ配流セラレシヨリ。前美濃守頼義ノ二男賀茂次郎義綱當國ノ守ニ任シ。其子美濃守義俊迄相續テ是ニ任ス。是迄源氏七代也。永保二壬戌年國房赦免セラレテ本官ニ復セシヨリ。國房土岐郡ニ住シ。是ヨリ其子左衛門尉光國。其子出羽守光信。其子伊賀守光基迄四代。世々濃州ニ住ストイヘトモ。美濃守ニハ不被任。後鳥羽院ノ御宇。元暦文治ノ頃。源頼朝僉諸國地頭職ニ至テ。梶原平三景時。相模守惟義。小笠原十郎泰□等當國ノ守ニ任ス。夫ヨリ文治建久ノ頃。光基子左衛門藏人光衡始テ美濃守ニ任シラル、ニ及テ。土岐美濃守ト號シ。當家ノ祖トス。濃州神戸城ニ住

ス。然レトモ守護職ハ光衡一代ニテ終リヌ。其子出羽守光行神戸城ヨリ土岐郡淺野ノ里ニ舘ヲ搆テ移ラル、ト云ヘトモ。當國ノ守ニテハナシ。後鳥羽院ノ判官代ナリ。其後關東ヘ下向シテ右大將實朝ニ随仕ス。其子伊豫守光定モ淺野ノ舘ニ住ス。其子伊豫守光包ナリ。其子伯耆守頼包入道存孝ニ至テ絶テ久キ美濃守ニ任セラル。後醍醐天皇ノ御宇。其身ハ濃洲高田ニ住セラル。後關東ニ下向シテ北條家ニ随仕セラル。其子甚多シ。末子伯耆十郎頼貞美濃國ヨリ在京シテ。當今ノ御隠謀ニ與シテ六波羅ヲ可亡ト計シカ。従弟土岐ノ船木左近藏人頼員（父左近藏人頼重ナリ。頼包入道存孝弟ナリ。）カ反忠ニ依テ及露顯。元徳元己巳年九月十九日ノ早天六波羅衆山本九郎時綱ト戰テ生害ス。然レモ父頼包入道。兄民部大輔頼淸彈正少弼頼遠兄弟ハ淺野大富ニ在リケレモ。何ノ申旨モナカリシナリ。父入道後又足利家ニ屬セラレケル。其子共將軍ヘ屬シテ。所々ニヲヒテ武威ヲ顯シケル。入道存孝ハ暦應二己卯年　月廿二日。土岐郡高田ニヲヒテ逝去ス。遺骨ハ同郡島光善寺ニヲサム。定林寺殿前伯州太守雲右（石イ）存孝大居士是ナリ。頼淸ハ淺野ノ舘ニ住シ。頼遠始ハ伯耆七郎ト號シ。父ト一所ニ高田城ニ在ケリ。其器量父祖ニ倍セシカハ。暦應ノ頃惣領職ヲ賜リテ。美濃。尾張。伊勢三ヶ國ノ探題トナリ。父ノ家督ヲ繼テ則隣郷大富ニ舘ヲ搆ヘテ住シ給ヒケルカ。所アシキトテ暦應ノ末ニ厚見郡長森ニ一城ヲ築テ移給フ。其後在京シテ足利家ニ随ヒ。數度ノ軍功不可勝計。靑野原ノ戰ニ自ラ大ニ働。左ノ目ノ上頰當ノハツレヲ切付ラレ。療治セントテ居城長森ニ引退ク。其後武威ニホコリ。暦應五壬午年九月三日京都東ノ洞院ニテ。持明院上皇御幸ニ參逢。頗及狼藉。其罪ニ

依テ。同十二月朔日六條河原ニヲヒテ害セラル。夫ヨリ弟土岐兵庫頭頼明惣領職ヲ賜リ。長森ノ城ニ住ス。是モ貞和五己丑正月五日四條繩手ノ軍ニ。周濟坊其外一族ト共ニ討レケル。其甥大膳大夫頼康ニ惣領職ヲ賜ル。濃州ノ太守勢尾ノ守護ヲ兼ラル。此頼康ト申ハ頼清ノ長男ニテ。始ハ左近將監トテ淺野ノ舘ニ居ラレタリシカ。其器量タクマシク。後民部大輔ト號シ。昇殿ヲユルサレ。大膳大夫ニ任ス。入道シテ善忠ト申ケリ。是ヨリ當家勢ヒ強大ニ成ヌ。府城長森ハ地狹クテ。國政ニ不自由トテ。觀應ノ頃厚見郡葦手ト云所ニ新城築キ。一國ノ府トセシム。其外同國三輪ニ一城ヲ立。弟揖斐出羽守頼雄ヲ入置給ヒ。長森ノ城ニハ其弟土岐宮內少輔直氏ヲ入置給フ。此直氏ト申モ器量勝レタル人ニテ。尾州小川ノ城ニ。小川中務丞ト土岐。東。池田ト申合。仁木京兆ニ同心シ立籠リタリシヲ。直氏手勢六百餘騎ニテ推寄。廿四日戰ヒテ難ナク城ヲ責落シ。小川中務カ首ヲ切テ京都ニノホセ。池田左近藏人ハ從弟ノ事ナリケレハ。尾州米田豆ケ崎ノ城ヘソ迯リケリ。各本家ニ隨ヒケル。頼康ハ池田郡瑞岩寺ニ於テ卒。嘉慶元丁卯年十二月廿五日也。建德寺殿前光祿大夫高巖忠公大居士トソ申ス。頼康ノ子大膳大夫康行。其子大膳大夫康政入道シテ善昌ト云。三代葦手ノ城ニ住シテ當國ノ太守ナリ。然ルニ康政康暦年中當城ニヲヒテ謀叛ヲ起シ。將軍義滿公大ニ怒リ。氏族ノ池田左近將監頼益ニ命シテ是ヲ討セラル。康政勢ツカレテ息刑部少輔頼時トモニ自害ス。幕府其戰功ヲ感シ給ヒテ。頼益末族トイヘ圧惣領職ヲ賜リ。美濃守ニ任セラレ。左京大夫ト號ス。是ヨリ頼益葦手ノ城ニ移リ給フ。此頼益ハ前大膳大夫頼康ノ甥ニテ。池田左近將監

頼忠ノ長子ナリ。頼忠ハ延文ノ比ハ當國ノ池田郡池田ノ舘ニ居給フ。弓馬ノ達人也。鷹ノ繪一流相傳ノ人ナリ。又可兒郡池田ニモ一族アリ。池田修理大夫ト云。是池田三左衛門ノ祖ナリ。頼忠後ニ刑部丞トモ又美濃入道トモ云。所領恩補有テ尊氏公ヨリ御下文ニ曰。可令早領知美濃國武儀庄ノ内野所安弘見加藤郷等地頭職之事。右爲勳功之賞所充行也。者守先例可致沙汰也。如件。觀應二辛卯九月廿日。尊氏判トアリ。頼忠ハ池田ニテ卒シ給フ。禪藏寺殿眞兼居士是也。寺ハ池田郡願成寺村ニアリ。其子三人。長男左京大夫頼益。二男ハ右馬權頭之康。三男ハ伊勢守光兼ナリ。頼益相續テ池田ニ住ス。後尾張海東郡萱津ノ郷ヲ領ス。暫爰ニ住スル故世ニ久シク萱津殿ト云リ。萱津ヨリ革手ニ移ル。應永六己卯ノ冬一族宮内少輔詮直叛逆ヲ企テ。居城長森ニタテコモル。將軍ノ命

ニ依テ左京大夫頼益長森ノ城ニ取詰。忽城ヲ攻落シ。詮直ヲ召取。首ヲ刎。一圓ニ切隨ヘ。長森ヲ刷捨。革手ノ城ニ入給フ。後革手ノ城ニヲヒテ卒ス。常保壽后居士是ナリ。其子左京大夫持益相續テ國政ヲ司ル。勢州北畠家。幷國人平氏ノ某關東ノ左馬助退治ノ時。一方ノ大將トナリ。勢州ニ攻入。府中ノ城ヲ攻破リ。大ニ戰功アリ。后革手府城ニテ卒。承國寺殿常祐大助居士ト云。其子左京大夫持兼早世。家系及斷絶時ニ。土岐家ノ長臣稻葉山ノ城主齋藤帶刀左衛門藤原利長入道ヲ始。伊賀稻葉氏家其外一族ノ人々相計ヒトシテ。土岐氏ノ末族饗庭備中守元明ノ長子ヲ養テ家督ト成ス。國中ノ武士等皆國主ト仰ク。土岐左京大夫[illegible]美濃守源成頼ト申ハ是ナリ。家臣齋藤帶刀左衛門利長。其子利藤等稻葉山ノ城ニ在テ國政ヲ執行ヒケルニヨリ。國中ヲタヤカ也。成頼ハ明應六丁

巳年閏月三日米田ノ舘ニテ病死ナリ。遺骨ハ厚見郡金寶山瑞龍寺ニ葬ル。瑞龍寺殿前濃州太守國安宗安大居士ト云也。成頼ノ子頼繼家督ヲツキ、在京シテ將軍義政ニ隨仕シ。忝クモ御名ノ一字ヲ賜リ美濃守政房ト申ケル。其子左京大夫頼繼太守ナリシカ。弟土岐次郎頼藝ニ奪ヒトラル。此頼藝迄ニテ守護職ノ家系斷絶ナリ。頼藝ノ子數多有ト云圧。皆チリ〲ニ成給ヒケリ。

土岐美濃守成頼濃州守護之事

葦手ノ城主美濃守成頼在京シテ。將軍家ニ奉仕セラレヌ。應仁元丁亥年ノ大亂ニ家臣齋藤帶刀左衛門利藤。伊賀稻葉氏家等召倶シテ。山名入道ニ與シ大ニ戰功アリ。其後葦手ニ飯城シテ一國ヲ平治セラレケル。土岐ハ代々天台宗成ケルカ。中興伯耆守頼包入道分國土岐郡中島郷ニ光善寺ヲ菩提所トシ給フ。故ニ逝去ノ後遺骨ヲ納ムナリ。今寺ハ絶破シテ石塔郷民ノ屋シキノ内ニアリ。定林寺殿前伯州太守雲石存孝大居士是ナリ。其後頼遠父ノ城下高田ニ定林寺ヲ建立シテ。夢窓國師ノ開堂也。其後貞和ノ末ニ同國大野郡清水ニ釣月ト云一寺ヲ立。夢窓國師隱居シ給フ。其ヨリ又東美濃ニ移リ數ケ所ニ寺ヲ建給フ也。其後永祿年中秋山伯耆守東濃ヘ亂レ入シ時。秋山カ郎等仁木藤十郎ト云者山ノ内郷明白寺幷高田定林寺放火シ燒亡セリ。今高田ヲ定林寺村ト云也。其後大膳大夫頼康文和年中葦手ノ城ヲ築シ後。城ノ北ニ當テ一寺ヲ建立ス。靈茶山正法寺ト號シ。相國寺末寺トシテ夢窓國師ノ法孫嬾椿和尚呼下シ開山ト成シ。土岐一流ノ氏寺トス。頼康父民部大輔頼清ハ攝州堺川ニテ病死。依之菩提寺池田郡小島ノ瑞岩寺ヲ建立シ。數ケ所莊園其外一筆觀音ノ繪ヲ寄附アリ。則頼康入道シテ後。瑞岩寺ニテ逝去ナリ。遺骨

共ニ納ル。是ヨリ康行。康政。頼益。持益迄代々ノ遺骨ハ葦手ノ正法寺ニ納ム。六代成頼ハ關山派ヲ皈依シ給フ。家臣帶刀左衛門利藤入道妙椿カ計トシテ。成頼存生ノ內ニ稻葉山ノ麓ニ。天台宗ノ寺地アリケルヲ地形ヲ改メ創シ。應仁元丁亥年八月取立テ。關山派ノ一寺ヲ建立シ。金寶山瑞龍寺ト號シテ成頼菩提所トス。莊園ヲ瑞龍寺ニ寄附セラル。然ルニ子息政房ノ代ニ葦テハ。先祖ノ追善執行ノ時ハ。葦手ノ城下ノ正法寺ニヲヒテ行レケル。先祖代々ノ菩提寺ナル故ナリ。成頼一人ヲ瑞龍寺ニ弔フ。成頼ニ子息五人アリ。長男ハ太郎頼繼ト云。父ト共ニ上洛シテ幕府義政公ヨリ諱ノ一字ヲ賜リテ。左京大夫政房ト改ム。二男ハ山形郡大桑ノ古城ヲ取立。近邊ニ充行。大桑兵部大夫定頼トナノル。此大桑ト申ハ。昔新羅三郎義光ノ孫逸見又三郎重氏此所ヲ領シ代々大桑氏ト號シケル。其子孫斷絕而土岐ノ持分ト成。文明年中定頼ヲ大桑ニ分知シテ。大桑ノ城主トス。三男ヲ佐良木三郎尙頼佐良木ヲ領シテ。彼村ニ住ス。此三人ハ先腹一腹ナリ。四男ハ四郎基頼。五男ハ萱津五郎成敎。此二人ハ當腹ノ勸ニ依テ。四男四郎基頼ヲ家督ニ立ント成頼思ヒ給フ。加納城主齋藤新四郎利國入道カ家臣ニ石丸利光ト云者ヲ語ラヒ。基頼ト同意セシメ。明應三甲寅年十二月大寶寺開堂ノ供養ニ事寄。兄政房ヲ討テ。基頼家督ニ立ント計リシカ事アラハレテ。利光。利國ト大ニ戰フ。不叶シテ基頼利光兩人自害ス。其以下ノ逆徒悉ク討死ス。弟ノ萱津五郎成敎ハ八歲ナリ。基頼ト同腹ナレハ。危シトテ母ノ計ニテ郎從ニ介抱サセテ。遠州ノ一族蓮池ノ領主池田彥右衛門方ヘ立退セ害ヲ遁ル。政房ハ當家ノ正統。コトサラ長臣齋藤帶刀左衛門利親。同新四郎利國。伊賀稻葉

氏家ノ良臣國中ノ武士政房ヲ補佐シ。太守ト仰キケレハ。父成頼モ面目ナク思ヒ給ヒ。革手ノ城ヲ政房ニ讓リテ。其身ハ城田ト云所ニ館ヲカマヘ。移リ住シテ。明應五丙辰ノ秋。池田郡安國寺ニテ剃髮シ。法名宗安入道ト云。後城田ノ館ヲ出テ。米田ノ庄ニ隱居シ給フ。明應六丁巳四月三日。米田ニモ病死シ給フ。遺骨ハ瑞龍寺ニ納ル。瑞龍寺殿前濃州太守國文宗安大居士ト號ス。長男政房ハ中興ノ名將ニテ。革手ニ在城シテ。家臣齋藤新四郎利良。長井藤左衛門長弘等國政ヲ執。伊賀稻葉氏家等國中ノ武士國守ト仰ケレハ。國中甚太平ナリ。政房子八人アリ。長男ハ太郎盛頼也。家督ヲツキ。左京大夫頼繼ト申シケリ。二男ハ二郎頼藝。三男ハ三郎治頼。常州信太ノ庄江戸崎ニ住ス。四男ハ勢州梅戸ノ養子。梅戸民部大夫光高ト云。五男ハ濃州大野郡三輪ノ城主。揖斐左近大夫基春ノ養子。揖斐五郎光親ト申ケリ。六男鷲巢六郎光敦ト號ス。七男ハ七郎頼充。八男ハ八郎頼香ト云。後ニ兄五郎光親ト一所ニ。三輪ニ住シテ三輪與三左衛門光長ト號ス。後ニ西脇ニ住ス。嫡男太郎頼繼ニ家督ヲ讓リ。政房城田ノ館ヲ取立移リ住シ。夫ヨリ又米田ノ館ニ隱居シテ。永正十六己卯六月十六日逝去ナリ。遺骨ハ正法寺ニ納ルナリ。次郎頼藝ハ鷺山ニ城ヲ築テ在住シ。革手ヘ出仕セラレケリ。

土岐家騷亂之事

土岐左京大夫頼繼ハ。太守ニテ革手ニ在城セラレケル。爰ニ京都妙覺寺日善上人嫡弟ニ。法蓮坊ト云不雙ノ發明器量ノ者アリ。當國ノ太守ニ隨ヒ。後ニ立身シテ齋藤山城守ト號シケルハ。此法師ノ事ナリケリ。此法師本國ハ。京都西ノ郊ノ町人。奈良屋某ノ子ニテ。法華宗日護上人ト濃州ニ下リ。南陽坊ニ住シケルカ。如

何思ケン。三衣ヲ脱捨舊里ニ皈リ。父ノ家ヲモ不繼。賣人ニ成。山崎屋 松波庄五郎ト名ヲツケ。永正ノ比。每年美濃ニ下リ油ヲ賣。常在寺日護上人ノ吹嘘ニ依テ。長井洞ノ住。長井藤左衛門長弘方ヘ出入シ。藤左衛門執成ニテ。稻葉山ノ城主 齋藤新四郎利良ニモ目見シ出入ス。每年油ヲ持來リ齋藤長井ノ兩家ヘ馴ヒタシウス。元來庄五郎出家タリシ時ヨリ。遊山翫水ヲ好ミ。亂舞音曲他ニ越タリ。依テ長井氏一向ニ愛シテ不斷屋形ニ居リ。前太守ニモ御目見シタリケレトモ。當太守賴繼ノ代ニ成テヨリ甚キラハレケル。目見ヲモユルシ給ハス。庄五郎カ面魂尋常ノ人相ニアラス。大事ヲ引出スヘキ曲者ナリ。君子ノ親ム者ニアラスト。城中ニ入事急度停止ナリケレハ。庄五郎深ク憤リ。長井カ舘ニ居テ。鷺山ノ城主 土岐次郎賴藝ハ行跡猥リニテ酒宴ヲ好ミ給フ。是幸ト長弘節ヲ見合。鷺山ノ城ヘ庄五郎ヲ連行。賴藝ニ目見サセケレハ。賴藝ノ氣ニ入テ 城ヲ不下日夜ニ詰テ追從ヲイタシケリ。庄五郎 太守賴繼ノニクミ給フヲ恨ミテ。賴藝ヲ進メ 太守ヲ討テ國ヲ奪給ヘト折々進ケレハ。賴藝モ 血氣ノ勇士ナレハ。兄ヲ討テ國ヲ奪ノ惡心出來。內々諸士ヲ語イ。ヒソカニ大軍ヲ催シ。鷺山ヨリ打テ出。旗葦手ノ城ニ取掛攻戰フ。城中俄ノ事ナレハ。旗本ハ遠路ニテ 不欠合難ナク城ヲ落ス。太守モ追出サレ。越前ノ朝倉義景ノ方ヘ 落行給ヒケル。斯テ賴藝ハ葦手ノ城ニ移リ入テ 一國ヲ治メ。左京大夫賴藝ト號シ。長井藤左衛門長弘ヲ執事ト成シ。國中ニ 威ヲ震フ。彼松波庄五郎ヲ取立可申旨。長井ニ命シ給ヒケレハ。藤左衛門家老ニ 西村三郎左衛門ト云者ノ 遺跡ヲ 嗣セ。武士ト成シ。西村勘五郎ト號シ。長井屋敷ニ勤ケル。其內ニ主人長井ヲ討テ 世ヲ奪ント

思立、密々諸士ヲ語ラヒ。長井洞ノ屋敷ヲ取巻、享祿三庚寅正月十二日ノ夜。主人長弘幷内室トモニヒソカニ殺害シ。長井夫婦ノ遺骨ヲ菩提所長良ノ崇福寺ニ葬リ、桂岳宗昌居士室ヲハ法林宗珠大姉ト號ス。稲葉山ノ城守齋藤新四郎利良、幷長井ノ一族大ニ怒、大勢ヲ以長井洞ヲ引包。勘九郎ヲ討ントヒシメク。勘九郎拔出テ、革手城ニハシリ入。太守賴藝ヲ賴ミ命ヲ乞フ。太守不便ト思ヒ、齋藤、長井ノ兩家ヘ扱ヲ入。常在寺ノ住僧南陽坊日運上人昔ノヨシミヲ思ヒ、サマ〴〵ワヒシ給フ。齋藤長井城下ニ詰テ。是非共勘九郎ヲ可被下願ヒケレハ。其日運幷太守俛迄扱レシ故、無是非靜リケル。其後勘九郎ヲ、太守ノ命ニテ、長井ノ名跡ヲ嗣セラレ、長井新四郎政利トナノリケリ。次第ニ立身シテ、土岐家ノ執權ノ臣ト成ケレハ。長井齋藤モ恐レテ、彼下風ニ從付。又名ヲ改長井太郎左衞門秀元トナノル。然所天文七戊戌年稲葉山ノ城主。齋藤利良病死シテ家斷絕シケルヲ。太郎左衞門秀元ニ可嗣ト。太守ノ命ニテ稲葉山ニ移リ、則利良ノ家系ヲ繼。齋藤山城守秀龍ト號シ。弟ヲハ長井ヲ讓リ、長井隼人佐道利ト名ノラセ。武儀郡關ニ城ヲカマヘテ置ニケリ。

土岐太郎法師丸事附齋藤山城守讒言

斯テ左京大夫秀龍日ヲ追テ權勢ツノリ、左京大夫ヲ改山城守ト云事、生國ヲ思フ故ノ名トソ聞ヘケル。常ニ己ハ革手城ニ詰テ、賴藝ノ膝下ニ居タリケル。然ニ山城守大ニ驕リ。好色ニフケリ。太守ノ妾ニ三芳ノ御方トテ。美女オハシケリ。山城守一向此御方ニ心ヲ掛。或時近所ニ人モナカリケレハ。太守ニ向テ彼御方ヲ乞ケリ。否ト宣フ程ナラハ忽ニ刺殺スヘキ體ニ見ヘケレハ。太守宣フ樣。左程思フナラハ召連

レ參レトアリケレハ。山城守大ニ悅ヒ。稻葉山ノ城ヘクシテ皈ケル。此人懷妊ニテ有ケレハ。出產ノ後男子ナラハ齋藤ノ家ヲ繼セ可申旨。吳々被仰付ケレハ。長子トシテ齋藤新九郎義龍トナノラセケル。太守ニ子七人オハシケリ。長男ハ土岐猪法師丸ト云。賴藝ハ愛宕山權現ヲ信心セラレケル故。愛宕ハ猪ヲ使者トセル故カクハ名付タル也。後ニ太郎法師丸ト改。次男ハ次郎ト云。三男ハ三郎ト申シ。四男ハ四郎。五男ハ五郎。六男ハ六郎ト云。此六郎ト申ハ三芳ノ方ノ子ニテ。齋藤新九郎義龍ノ一腹ノ兄ナリ。三芳ノ御方山城守舘ヘ入給ヒテ後ハ。殊外惡ミ給ヒシ故。賴藝ノメノト林駿河守通村ノ二男。林七郎右衛門通兼三歲ナルヲ介抱シテ。自分ノ下屋敷厚見郡江崎ト云所ニカクマイケル。駿河守在所ハ同郡西ノ庄ト云所ナリ。六郎後ニ一色藏人賴昌ト申テ後ニ通兼

ヲ召連 岐禮ニ參リ。父ノ老後ヲカイハウシテ後。稻葉一鐵ノ情ニテ淸水ニ住ス。七男ハ齋藤義龍ニテ。是賴藝ノタネナリ。後一色左京大夫義龍ト名ノリテ。稻葉山ノ城ニ威ヲ振ヒ給ヒケル。太郎法師丸ハ其器量伯父左京大夫賴繼ニ似給ヒテ。國中無雙ノ美童ナリ。山城守太守ノ寵ニホコリ。數度不禮ノ働ノミナラス。秀龍法師丸ノ男色ニメテ。度々艷書ヲ通シタリケレハ。太郎法師大ニ怒リ。主從ノ禮ヲ失フ事奇怪也トテ。或時太郎法師丸ヲ始。氏族ノ面々施下ノ小童數輩。葦手城下ニテ。的場ノ前ヲ馬乘ニテ山城守出ヲ。太郎法師丸怒テ小里孫太郎。原彌次郎。蜂屋彥五郎以下若輩ノ面々的矢ヲツカイ。城內殿中迄追込ケリ。トカク法師丸山城カ不義ヲ戒ント。或夜秀龍出仕ノ皈ヲ待請。乳母村山越後守ノ末子市之丞ト云若輩者ヲ語ヒ。殿ノ廊下ノ闇キ所ニ待受。一太刀ト

切付ラレシニ。山城守劒術ノ達者ニテ。拔合受流シ。這々逃テ稻葉山ニ皈ル。斯テ山城守ツク〳〵思フハ。此人ヲ其マヽ指置ハ能事ハアラシト。如何ニモシテ失ハント巧ミ。夫ヨリ折ニフレ法師丸ヲトナシカラヌ樣子ヲ讒シケル。或時登城仕テ太守ヘ申ケルハ。太郎御曹子ニハ。伯父揖斐五郎殿ト御心ヲ合セ。謀叛ノ心見ヘ候。御曹子ハ御幼少ノ事ナレハ。何ノ御心モ有マシケレトモ。揖斐殿御曹子ヲ進メ。御代ヲ奪ヒ可取內存トサマ〳〵讒言シケレハ。太守元來愚將ニテ。是ヲ誠ニ思レケリ。然トモ流石父子兄弟ノ事故。其通ニ打過ケル幾程ナク揖斐五郎在所ヨリ參勤シテ。葦手ヘ登城セラレ。賴藝公ヘ申上給フハ。去ル頃鷲巢六郎同道仕。此所ヨリ瑞龍寺ヘ參詣仕所。戶羽ノ新道ニテ山城守ニ行合シテ。山城守馬ニ乘ナカラ。禮儀ヲモ不仕。横合ニ本道ヲ馳通リ候間。頗奇異ノ曲者カナト。六郎光敎諸鐙ヲ打テ追懸シカ。山田カ舘ノ邊ニテ見失ヒ。是非ナク皈リ候。夫ノミナラス法師丸ニモ常々無言ニテ。甚無禮仕儀是一向御寵愛ニホコリ。己カ凡下ナリシ事ヲハ忘レ。御長男ヲ始。吾々迄無禮仕事無念ナリ。願クハ法師丸吾々ニ山城守ヲ賜リテ首ヲ刎。向後旗下ノ見コリニ可仕ト。達テ望レケレトモ。賴藝元來山城守ニスカサレ。太郎モ五郎殿モ惡ク思入給ヘハ。何レトモ無答。扨ハ山城守カ申處尤ナリ。如何ニモシテ法師丸五郎ヲモ失フヘク思給ヒケレハ。事ナク不興ノ體ニ見ヘケレハ。五郎殿甚面目ナクテ三輪ヘ皈リ給フ。其後賴藝ノ執事臣。林駿河守通村。杉山刑部丞佐合。修理亮以下登城シテ。太守ヘ申ケルハ。昔ヨリ讒臣ノ言ヲ信シ。國ヲ亡シ。父子兄弟不和成事其例多シ。法師丸殿ヲ害セラレ。御後悔甲斐有マシト大ニ諫ケレハ。賴

藝モ不及力思ヒ止リ給フ。又或時山城一向ニ讒スルニ依テ。則山城守ニ命シ密ニ法師丸ヲ討ル、由聞ヘケレハ。乳人村山越後守。國島將監。中島監物以下土岐譜代ノ面々大ニ怒テ。法師丸ヲ城ヨリ出シ。村山カ舘ニ入參ラセケル。山城守是ヲ聞。稲葉山ノ城ヨリ大勢ヲ率シ。村山カ屋敷ヲ取卷。太守ノ命ナリト僞リ攻戰フ。村山。國島。中島三人事トモセス。手勢ヲ率シ。鵜飼山ニ陣ヲ取。敵ヲ廣野ニ引受。爰ヲ全ト防キ戰フ。斯ト聞ヨリ揖斐五郎。同與三左衛門。原紀伊守。石谷播磨守。片桐縫殿助。遠山加藤太。松平越後守以下ノ武士等。追々馳加リ。數日合戰ヲ挑故。尾州古渡ノ城主織田備後守信秀父子ノ間ヲ和談サセントテ。葦手迄出馬有テ取扱ル、。依之雙方陣ヲ引タリケル。其後江州六角大膳大夫定頼ハ。太郎法師ノ母方ノ祖父成故。使ヲ以テ此旨ヲ申入。又越前ノ朝倉モ從弟ナレハ申送リ。父子兄弟ノ和談ヲ致シケレハ。一往國中無爲ナリ。然レトモ其後山城守心モトケス。又頼藝ノ心モ不快ナレハ。法師丸ハ村山カ舘ニ居給ヒケル。山城守居後ノ事無覺束。如何ニモシテ村山トモニ討亡ント巧ミ。折々ハ葦手ノ城ニ參リ。法師丸ノ事揖斐五郎村山ヲ讒シケレハ。頼藝モ此人々ヲ憎ミ思ハル也。依之長男法師丸ヲ捨テ。二男二郎ヲ太郎法師丸トシ。家督ニ立ント葦手城ニテ元服サセ。土岐左京亮頼師ト名乘セケリ。

葦手城沒落事

土岐左京大夫頼藝ハ。山城守佞臣ナル事ヲ知リ給ハス。朝夕ヒサモトヲハナサス寵愛シ給フ。然所ニ。山城守多年國家ヲ奪フヘキ志深キ故ニ諸將ヲナツケ。國中ノ諸士ニ心ヲムツヒ隨ヘ置。太守ヲ疎ム樣ニ仕ナシケレハ。葦手ノ城中ニテハ君臣ノ間モ心々ニ成テ。太守ヲウ

トムノアリサマ成ケレハ。秀龍時分ハヨシト潜ニ大軍ヲ集。天文十一壬寅年稻葉山ノ城ヲ打立。葦手城ニ寄タリケリ。葦手城ニハ思ヒヨラヌ事ナレハ。周章フタメキ散々ニ成テ落行ケル。太守賴藝防キ戰フニモ不及落給フ。寄手城ニ火ヲ掛ケル悲哉。先祖賴康ヨリ八代ノ在城一炬ノ灰燼トナル。太郎法師丸モ村山ヨリ一番ニ馳付。父賴藝ト一手ニ成。大軍ヲ蒐破切ヌケ給フ。村山國島モ爰ヲ專ト戰フ。揖斐五郎光親モ手勢ヲ率。三輪ヨリ馳付。村山ト一所ニ成。大勢ヲ追散シ。武功ヲ顯シ。太守ニ見給フ。法師丸モ揖斐五郎殿モ不義ナキ事ヲシロシメシ後悔シ給フ。則兩人勘氣ヲ免サレケル。鷲巢六郎光敦ハ道程遠キ故。其日ノ暮カタニ馳付。殘ル大勢ヲ追散シ。賴藝御父子ノ尾州ヘ落給フ。殿ヲソ仕給ヒケリ。斯テ太守賴藝尾州古渡ノ城ニ入テ。織田備後守ヲ賴ミ給フ。信秀則熱田ノ一向寺ニ入置。夫ヨリ濃州ノ國侍不破河內守。稻葉伊豫守。安藤伊賀守。氏家常陸介等ト示シ合。多勢ヲ以テ濃州ニ打入ントシ給フ事ヲ聞。山城守不叶トヤ思ケン。和談ヲ乞。揖斐五郎光親ノ城。三輪城ヘ賴藝父子ヲ移シ入。揖斐五郎。同弟與三左衛門ハ淸水島兩下屋敷ニソ退キケル。其後信秀ノ計ヒニテ。賴藝ト秀龍ノ間ヲ和睦サセ給フニヨリ。暫ク國穩カナリ。サレトモ太郎法師丸ハ尾州ニ留置信秀烏帽子子トシテ元服サセ。土岐小次郎賴秀ト名乘セテ。後ニ宮內少輔賴榮ト改。信秀ノ方ニ置給フ。其後信秀ノ計ヒトシテ。賴藝父子ヲ大桑ノ城ヲ修復シテ移シ給ヒケリ。

大桑落城之事

土岐左京大夫賴藝ハ。織田信秀ノ情ニ依テ。天文年中大桑ニ入城シテ。山城守カ仕方深ク憤リ。如何ニモシテ可亡ト。父子共ニ密々計略ヲ

廻シ給ヒケル處ニ。山城守方ヘ聞ケレハ。秀龍大ニ怒テ。即時ニ大軍ヲ引率シテ。天文廿二癸丑年大桑ニ押寄ケリ。大桑ニハ思ヒカケナキ事成敵防兼タル所ニ。揖斐光親其日思ハス參合給ヒテ。一番ニカケ出防キ戰フ。參リ掛リノ軍ナレハ。續ク味方ハナク。其上深手負テ不叶シテ在所ヘ引退ク。山城守勝ニノリ。城ニ火ヲ掛焼立ケレハ。頼藝父子近習ノ侍山本數馬不破小次郎以下七騎。一往越前ヘ落サセ給ヘ。重テ一戰可然ト申ケルニヨリ。父子共城ノ後青波ト云所ヘ出。夫ヨリ山傳ニ數馬カ在所。大野郡岐禮ト云里ニソ落給フ。山城守ノカサシト追手ヲ掛タリ。其大將ニハ河村圖書國勝。林駿河守通村。兩將ニテソ追タリケル。此時駿河心ヤ替リケン。佐原ト云所ヨリ行方ナク落行ケル。河村モ三代相傳ノ主君ニ弓ヲ引シ事。冥罪恐レアリト思ヒケレハ。山本カ方ヘ密ニ矢文ヲ射テ內通ヲソシタリケリ。山本數馬心得ヤカテ七騎ノ侍ト共ニ後ノ山ニ登リ。喪服ヲ着シ。太守御父子御生害シ給フト披露ス。葬禮ノ取行ヲシ。柴ヲツミテ火ヲ放テ火葬ノ體ニ見セケレハ。河村ハ川ヲ隔テ戰フ體ニ亂矢ヲ射カケ。相圖ノ勝鬨ヲ上ケ。井ノ口ニ引取。稲葉城ニ入。カクト告ニケリ。是ヨリ主從七騎越前ノ方ヘ落給ヒ。朝倉義景ヲ頼マレケルカ。シカ〱ト取合體モナク。甚疎ケレハ。斯テハ爰ニモ不快シテ。遂ニ上總國ニ落行。彼國ノ萬喜ト云所ニ。幽ナル體ニテ居ラレケル。武運ノ盡ケルユヘニヤ。眼病ヲ患テ程ナク盲者ト成ケレハ。入道シテ名ヲ宗藝ト號シケル。天正十壬午年。稲葉伊豫守通朝入道一鐵。此頃ハ大野郡清水ニ居住シテオハシケルカ。カクト聞セラレテ痛ハシト思ヒ。昔ノヨシミヲ不忘。君臣ノ義モタシ難トテ。同國厚見郡江崎ノ里ニ

忍ヒ居ラレケル。一色藏人賴昌（始ハ江崎六郎ト云。）ヲ御使ニツカハサレケル。賴昌天正十壬午二月十八日江崎ヲ出。其日淸水ニ參。十九日太田ニ泊リ。木曾路ヲヘテ三月二日ト申ニ。上總國滿喜ニ着ケレハ。アリシニ替ル父ノ有樣。見ルニ泪モセキアヘス。彼是トシテ日ヲスゴシ。四月七日ト云ニ。岐禮ノ里ニ着ケレハ。新タニ小キ舘ヲシツラヒ。下女二三人置。イト念頃ニ見ヘケレハ。賴藝モアリシ昔。此里ヲ落シ事一鐵ノ志淺カラヌ事ヲ感シ。御落涙ヲソ被成ケル。夫ヨリスクニ賴昌ハ七郎右衞門ヲ以テ先達テ。淸水ヘカクト申ツカハシケル。一鐵法師ニモ翌日參ラレ。念比ニ申サレ。數馬ニイサイ申付飯給フ。數馬後ニ山本次郎左衞門ト名ヲ改。始終附隨ヒ。奉公ヲ致ケル。然ル處一鐵公ヨリ合力トシテ。二百石數馬ニ拾人扶持給ヒ。賴藝心安ク暮サセ給ヒケルカ。程ナク病ニフシ。老病ノユヘニヤ。同年十二月四日八十一歲ニシテ卒シ給フ。菴室ノ號ヲ用テ。東春院殿前左京兆文官宗藝大居士ト號ス。此時左京亮賴師ハ京都ニ住居シテ。見松齋ト申ケルヲ。病中ニ呼下シテ。宗藝臨終ノ節ニ。當家累代相傳ノ系圖ニ太刀。旗。幕。綸旨。宣命將軍代々ノ御教書。家傳ノ軍記等大移ハ見松齋ニ讓リ給フ。其外太刀鎧武具等藏人賴昌數馬兩人ニ移（ユツ）リ給フ。東春菴ノ西南ノ隅ニ遺骨ヲ納ム。山本次郎左衞門ハ始終ノ奉公誠以忠至ト可謂。山本子孫今ニ有。一色藏人賴昌ハ父ニヲクレ。夫ヨリ淸水ニ參リ。稻葉一鐵父子ノ世話ニアッカリ大野郡淸水ニ住シテ程ナク。天正十三乙酉年九月。稻葉殿御親子郡上ヘ所替ナリ。依之後ノ領主揖斐ニテ。西尾豐後守殿ヘ随仕ス。子二人アリ。長男ハ一色賴母賴澄ト云。二男ハ淺野造酒進昌吉ト云ナリ。賴澄後ニ天正十七己丑年。豐

後守殿。舍弟新地五千石秀吉公ヨリ賜リ。外三萬五千石ノ內ニテ。豐後守殿ヨリ分シ高シ給ヒ。一萬石ニシテ淸水ニ住シ給ヒケル。西尾主水殿ト申。此時淸水ニ附參ル。慶長五年關ケ原軍ノ時。主水殿ハ石田ニ組シ給ヒケル故。御家斷絕ス。此時又淸水ニ浪人ス。然トイヘトモ。慶長十九年大坂陣ノ時。谷瀨兵衞ト名ヲカヘ。石川主殿頭殿。大久保權右衞門殿與下ニテ御供シ。家康公于田御陣ノ時。大坂方ノ瀨蹈ノ兵二人ヲ。瀨兵衞一人ニテ生捕ニ仕ル。則權右衞門殿取次ニテ御帳ニ付。御褒美トシテ黃金二枚頂戴ス。其後林丹波守殿御郡代ノ時。江崎甚大夫ト改。御手代與相勤ム。江崎ト名字ヲ改シ事ハ。父一色藏人江崎ニ住シテ在シ故。此在ノ名ヲ名乘ナリ。弟淺野造酒進昌吉ハ。後ノ豐後守殿弟主水殿ト申ニ隨仕シテ。江府ニ居ル也。賴昌一色ヲ名乘コトハ。賴藝北ノ方ハ丹後國宮津ノ城主一色左京大夫ノ娘ナリシカ故ナリ。母ノ三芳ノ御方ト申ハ。北ノ方ノ妹ニシテ。父左京大夫四十二ノ二ツ子トテワラノ上ヨリ美濃ヘ下シケルヲ。北ノ方養ヒ置。後ニ美人トナリ給フ故。賴藝寵愛シ給フナリ。齋藤義龍ノ一色左京大夫ト改ラレシモ此故トソ知ラレケル。宮津ノ城主一色左京大夫ハ。元土岐ノ氏族ニテ。厚見郡一色ヲ領シ給ヒ。一色左京亮ト申。古今ノ勇士ニテ。後伊勢ヲ領シ。又伊豫國ヲ領シ。丹州ヲ賜リ。拾餘萬石ノ城主ナリ。是ヲ土岐ノ一色殿トモ。厚見殿トモ申ケル。林七郎右衞門通兼ハ。古今ノ算者ニテ。稻葉ニ屬ク國役ヲ勤ケルカ。後ニ大神君ヘ召出サレ。同國高須ヲ領シケル。其後大ニ立身シテ稻葉ト名乘ナリ。宗藝ノ菴ヲ菩提寺トシテ。東春山法雲寺ト云。山本次郎左衞門末孫大檀那也。

土岐諸流末葉之事

斯テ土岐左京大夫頼繼ハ、越前朝倉方ニ在テ計略ヲ廻シケルカ。天文十一癸未年齋藤國ヲ奪ト聞。朝倉ニ加勢ヲ乞爲退治。天文十六戊子年八月美濃ニ發向シ。山縣郡大桑ニ在陣シ給。運命爰ニ蠢ケルニヤ。此所ニテ病死シ給フ。法名玉岑元掛ト號ケル。頼藝長男宮内少輔頼榮ハ。稲葉一鐵ノ聟トナリ。美濃ニオハシケル。息五人アリ。長男ハ太郎法師政義。後越後守光義ト改。二男ハ三左衛門茂頼トテ。外祖一鐵入道。足利將軍義昭公ニ目見ヲサセ。御諱ノ一字ヲ下サレ。土岐織部昭頼ト名ノル。三男ハ一鐵子分トシテ。稲葉靱負頼永ト云シヲ。義昭公召出サレ。京一條ニ勤仕シテ。勘解由良頼ト名乘。四男土岐又次郎榮興。後ニ掃部介光榮ト申ケル。五ハ女子石谷右京亮光廣妻ナリ。此宮内少輔頼榮ノ子孫悉ク備前池田三左衛門輝政。加州小松中納言殿家中ニ在トカヤ。宗藝入道ノ二男左京亮頼師見松齋宗令ト號、父ノ正統ヲ繼テ京都ニ浪人シテ養シ子二人アリ。長男ハ土岐左馬助、二男ハ縫殿介ト申ス。左馬助子內匠ト云。其子二人長男ヲ土岐出羽守、二男兵庫助トテ。將軍家ニ奉仕セラル。是正嫡也、家傳此家ニ有ナラン。縫殿助子土岐九郎左衛門甚右衛門トテ尾州亞相義直公ニ召出サル。宗藝入道三男三郎ハ早世。四男四郎左衛門後道菴ト號。其子土岐四郎左衛門紀州亞相頼宣公ニ奉仕ス。宗藝五男土岐五郎左衛門後ニ主水ト云。法名久安。其子土岐主水其子市正。其子大膳亮ト號シテ。將軍家ニ奉仕ス。宗藝入道六男ハ六郎。後ニ一色藏人ト云。七男ハ齋藤義龍ナリ。後ニ一色左京大夫義龍ト號。土岐氏ハ代々濃州ノ太守トシテ。勢尾ノ兩國ヲ兼ケレハ、氏族繁多也。其大概ハ淺野三栗ノ兩氏ハ。光衡ヨリ出。淺野判官光時。三栗五郎光仲是兩氏

ノ祖淺野ノ里ニ住ス。三栗光仲ノ墓ハ土岐郡淺野ノ南ノ山際ニアリ。三栗塚ト云。小里。萩原。猿子。神戸。深澤。吉良。石谷。小島。宇津。芝居。原。相原。大竹。饗庭。郡家。小彈正。八居。多治見。東池田。蜂屋。久尻。金山。土井。是二十三氏ハ出羽守光行ヨリワカルナリ。

船木。福光。外山。今峰。北方。小栂。荒川。井ノ口。穗保。鹿生。明智。妻木。黑俣是十三流ハ。伯耆守賴包（系圖ニ賴貞）入道存孝ヨリ出ル。揖斐。池田。島田。西脇。山尻。世安。稻木。久々利。宇田。陶器所。一色。肥田。瀨羽崎。此十三氏ハ民部大輔賴淸ヨリ出ル。萱津。鷲巢。洲原。西鄕。月海。金森。是六氏ハ美濃守成賴ヨリ出。丸毛。桑山。世保モ同氏ナリ。蜂屋氏ノ末孫將軍家ニ奉仕ル。石谷氏ノ末井伊掃部頭家ニアリ。原氏ノ正統原隱岐守久賴。關ケ原陣ニ討死シテ後。其子孫當國池田郡東野六井ニ蟄居ス。又松平安藝守ニ仕ルモアリ。庶流原中務丞政賴ノ末孫。森美濃守成瀨隼人正家ニアリ。萱津五郎ハ八歲ニシテ。明應二甲寅年。葦手騷動ノ時。郞從共遠州蓮池ノ領主池田彥左衛門家宗所ヘ立退。後彼養子トナリテ。池田九郎左衛門成敎ト號ス。天文二十二。癸丑ノ年。六十七ニテ卒去。長光院ト申ス。子孫今川家ニ仕フ。後將軍家并駿河大納言忠長公ニ仕フ。西脇氏ハ揖斐出羽守賴雄四代ノ孫。與三左衛門光長始テ西脇ニ仕。其子孫慶長年中。上州小松宰相長重ノ家ニ仕フ。又飛州ノ金森家ニモアリ。小里氏。松平丹波守家ニアリ。滿喜道鐵ノ末ハ戶田釆女正ノ家ニ仕フ。

濃州稻葉山由來之事

夫當國稻葉山ハ不雙ノ勝跡。所謂和歌ノ名山也當山三ツノ名アリ。金華山。一石山。破鏡山トモ申ナリ。此所ニ謂和歌凡二十一首。萬葉集ニ

見ヘタリ。仁明帝ノ御宇中納言行平卿勅命ニ依テ。陸奥國ヨリ金華石ヲ引セラル。此石濃州ニ着ス。其頃又俄ニ勅詔有テ行平ヲ京ニ召上ラル。行平彼石ヲ捨テ上洛セラル。後ニ此石召テ山ノ神ト崇メテ。金大明神ト號ス云々。行平卿此時歌ヲ詠セラル、事世ニ知ル所也。夫當大明神ハ。人皇十一代垂仁天皇第八之皇子。五十瓊磯城入彦命ヲ祭ル所也。清和天皇御宇貞觀元己卯年二月。正一位因幡社ト勅額ヲ賜ル蓄奥ノ院峰權現ハ陸神ニシテ。五十瓊磯城命ノ后ト云。又峰ノ權現ハ垂仁天皇ヲ崇ルトモ云。所謂岐山ト號ス。麓ノ里ヲ岐阜ト號スル事ハ。往古ヨリノ稱號ニテ。明應ヨリ永正迄ノ舊記ニ多クノスル所ニシテ。后世織田家ノ名付ルト云事信スルニタラス。但一說ニ。往古ハ加納ヲ沓井吉田ト號シ。岐阜ヲ今泉忠節井ノ口宗田ト云シヲ。織田家入城ノ時ニ及ンテ。沓井吉田合テ加納ト云。今泉宗田迄ヲ岐阜ト稱スト云々。

濃州岐阜稻葉山城初築代々城主之事

稻葉山ノ城ハ。人皇八十二代土御門院ノ御宇。建仁年中二階堂山城守藤原行政始テ築所ナリ。其子伊賀守朝光爰ニ住ス。其子伊賀次郎光宗此城ニ居シテ。始テ稻葉氏ト號ス。伊賀次郎氏ヲ始テ稻葉ト改シ事ハ。京都在番ノ折カラ。圓座ト云物ヲシキモノトセリ。公家ニ見ナレヌ珍キ物カナト叡聞ニ達シ。稻葉ナリヤト勅詔アリシトナリ。彼一器ヲ勅シ給フ故カ。又伊賀次郎稻葉山ニ住スル故カ。何レニモ難有勅ナリトテ氏トセリ。其弟稻葉三郎光資。其子稻葉左衛門光房代ニ勅勘ヲ蒙リ。飛州ヘ蟄居ス。光房十一代ノ末稻葉飛驒守ト號。土岐大膳大夫賴康ニ與力シテ濃州ニ出。同國象山ノ城ニ住ス。飛驒守通祐ノ子稻葉備中守通以。其子伊

豫守通富代ニ。西美濃曾根ノ城ニ住シテ。伊賀稻葉氏家トテ美濃三人衆トテ土岐家ノ與力第一ノ人々ナリ。其子伊豫守通朝入道一鐵。其子右京亮貞通ハ同國大野郡淸水ノ城ニ住シテ。天正十三乙酉九月。同國郡上ノ城ニ移リ。慶長五庚子年。豐後國臼杵ヘ移リ給フ。左衛門佐光房ヨリ時代遙ニ移テ。人皇八十八代後深草院ノ御宇。正元年中ニ再ヒ二階堂行藤暫ク此城ニ住スル内ニ。武儀郡吉田郷ニ。長谷寺ヲ建立セリ。其後人皇百一代。後小松院ノ御宇。永德。至德ノ比。土岐家ノ家老齋藤帶刀左衛門利長入道此城ヲ再興シテ居城トス。文安二乙丑八月加納ニモ城ヲ築テ。葦手稻葉山ノ枝城トシテ。執事ノ嫡タル者始ノ程ハ加納ニ入ラシム。執權ト成テ稻葉ニ移ル事代々是ナリ。是亦臼井ノ口城是ナリ。彼齋藤ノ家ノ先祖ハ。大職冠鎌足公四代ノ孫。魚名公ヨリ十六代ノ嫡

孫。齋藤帶刀左衛門藤原親賴ト云者。人皇七十四代鳥羽院ノ御宇。美濃國ノ目代ニ成テ。當國ニ下向スルヨリ。武士ト成テ代々相續テ。齋藤中務丞賴茂ニ至ル。然ルニ康安年中。葦手ノ城主土岐大膳大夫賴康ノ武威廣大成故。齋藤賴茂。彼賴康ノ長臣ト成リ。代々土岐家ノ執權トナル。利長入道ニ至リ。葦手城下ニ住ス。利長入道ハ武勇ノ者ニテ。稻葉山ノ城大破ニ及タルヲ見テ。名城ヲ考ヘ。再興シテ移リヌ。然レトモ其身ハ葦手ノ城下ニ詰テ。執事職ヲ勤ケリ。又齋藤帶刀左衛門利長迄代々禪宗ヲ皈依シ。利長主君成賴ノ供シテ京都ニ居ル間ハ。日峰和尚ニ參禪シ。又本國ニ皈リテハ。雲谷ノ木上ニ參學シテ。武儀郡ニ洛陽寺ヲ建立セラル。利長ノ長男帶刀左衛門利藤（マヽ）ハ。加納ニ住シケルカ。父ノ死後ニハ稻葉ニ移リ。執事ニ居リ。利勝（マヽ）ハ日蓮宗ニ皈依シ。其身ハ平生葦手ノ

城下ニ在ケレハ。則葦手城下ニ日蓮宗持是院ト云寺ヲ建立シテ。後ニハ執事ヲ子息帶刀左衛門利親ニ讓リテ。一向住僧ノ如ク外ニハ禪法ヲ用ヒ。內ニハ大乘妙典ヲ持テ。則隱居シテ持是院入道妙椿ト號シケル。權大僧都法印ノ僧綱ヲ經テケリ。是ヨリ齋藤家代々法華宗トナリテ。妙全迄ニ至ル也。妙椿入道カ計ヒトシテ寶德二庚午年三月。京都日蓮宗妙覺寺ノ住僧。世覺院日範僧都ヲ請シ。稻葉麓ニ一宇ヲヲ建立シ。鷲林山常在寺ト號。寬正六乙酉年八月。一條關白殿ニ額ヲ乞奉リ。則山號共ニ成シ下サル所謂此日範上人常住寺ノ開山ナリ。第二世ハ蓮乘院日審上人。京都妙覺寺ノ住僧成シカ。妙椿又請シテ。文明十一己亥三月常在寺ノ住僧トス。文明十二庚子二月廿一日。妙椿入道葦手城下持是院ニテ逝去ス。開善院殿權大僧都法印大年妙椿居士ト號。開善院ト號スルハ是ヨリ先禪寺ヲ建立シ。開善院ト號スル故也。妙椿入道百ケ日追善ノタメ。子息帶刀左衛門利親常在寺ニ祖師ノ像ヲ建立セラル。加納城主齋藤四郎利國。法名妙純利親伯父。明應三甲寅禪宗ヲ皈依シ。十二月大寶寺建立開堂成ル。此日ニ至テ利國入道妙純ト家臣石丸利光ト合戰ニ及フ舟田亂ニ詳也。此寺ノ開山ハ。悟溪和尙ヲ請シテ始祖トス。後ニ興宗和尙居ラル、ナリ。斯テ帶刀左衛門利親ハ。近江國ニ發向シ。明應五丙辰年冬討死シケリ。其子齋藤勝千代幼少ナルニ依テ。齋藤家ノ一族稻葉山ノ麓。長井洞ノ長井藤左衛門大江長弘後見トシテ。齋藤勝千代丸利良後新四郎。ヲハ。稻葉山ノ城主ニ居テ。長弘ハ池田郡白樫ノ城主ニテ。代々居之。然レトモ葦手ニ遠キ故。文珠ハ本巣郡ナレハ程近シトテ。館ヲ立テ。又一宇ノ寺ヲ建立シ。文珠菩薩ヲ本尊ト崇ケリ。又夫ヨリ長良ニ館

ヲ造リ。是ニ移ル。去文明元己丑二月山神ノ告ニ依テ。屋敷ヲ轉シテ寺トナシ。神護山崇福寺是也。同二年庚寅四月十五日開堂ナリ。其身ハ瑞龍寺西稻葉山ノ南谷ノ間ニ屋敷ヲカマヘ。舘ヲ造リ。此所ニ住シテ（長井洞ト云是ナリ）。利良ノ後見ヲセラル。明應七戊子年妙覺寺日護上人ヲチヨウシヨウシテ。京ヨリ呼下シ。常在寺ノ住僧二世トス。十二月七日ナリ。永正十三丙子年妙覺寺日善上人弟子日運上人ヲ呼下シ。常寺ノ四世トス。此日運上人ハ本ハ美濃國出生ノ人ニテ。長井豐後守光秀（又利隆ト云リ）カ弟ナリ。幼少ヨリ上京シテ。日善上人ニ隨ヒ。學才辨舌ノホマレ有人ナリ。始ハ西陽坊ニ下リテ居ラレタリ。岐阜鷲林山常在寺代々始祖開山世覺院日範上人ヨリ二世蓮乘院日審上人。三世日護上人。四世日運上人。五世日饒上人。六世日覺上人。七世日韵上人ナリ。

織田備後守稻葉山城責事

斯テ齋藤山城守秀龍ハ。太守賴藝ヲ追出シ國ヲ押領シテ。ホシイマヽニ國ヲ惡逆シ。又前大守賴藝ノ舍弟。土岐七郎賴充ト八郎賴香ヲ始ヨリスカシテ兩人共ニ聟ニナシ。一族トシテ置タリ。賴香ハ西脇ニ住シテ。西脇與三左衞門光□ト云。土岐ノ氏族始終ヨカルマシト思ケレハ。七郎賴充其心武ク智ノ勇士ナレハタヤスク討カタク思ヒ。毒害ニテ殺シ。八郎賴香ヲ羽栗郡ノ無動寺村光德寺ニテ腹ヲ切ス。此賴香女子一人アリ。江州ヘ往テ六角左京大夫義賢入道承禎ノ妻ト成シトカヤ。扨山城守長男新九郎齋藤兼美濃守ト名乘セ。大ニ奢テ國民ヲムサボル。又日蓮宗常在寺ハ前々一命ヲ助リシ高恩ノ寺ナルニ依テ日運上人ノ世ニ寺院ヲ新ク修造シ。數ケ所ノ庄園ヲ寺領ニ寄附シ。子ヲ一人迄出家ニナシ。日運上人ノ門弟

トナス。則常在寺五世日饒上人。六世日覺上人是ナリ。山城守剃髮シテ。山城入道道三ト號シケル外ニ。男三人女子一人同腹ニ出生ス。齋藤新九郎後ニ孫四郎ト改ム。次ヲ齋藤喜平治後ニ玄蕃ト改ム。其次ハ齋藤新五郎ト號シ。梶田ノ領主トシテ近郷ヲ領セシム。夫ヨリ尾州織田家ト合戰始リテ。折々ノ合戰不止。天文十五丙午年織田備後守大軍ヲ引率シ。濃州へ攻入。稻葉城ヲ攻ラル。秀龍入道兵ヲ出シ。瑞龍ノ西南ニ陣ヲ張リ。防戰テ中々入タテス。要害堅固ノ名城ナレハ。責アクンテ城下ノ四方民屋ヲ悉ク放火ス。瑞龍寺モ兵火ノ爲ニ寺院一宇モ不殘燒失ス。後再興シタルトゾ。織田モ兵ヲ大半討レテ尾州ニ引退ク。然ルニ又同十七戊申九月備後守大軍ニテ濃州ニ亂入シテ。稻葉山城下ニテ大ニ戰。織田家又大ニ敗軍シ。兵數千討死ス。宗徒ノ士織田因幡守同與三郎モ討レケリ。

此勇ミニ乘シテ同年十一月齋藤道三大軍ヲ差向テ。大垣ノ城ヲ攻。城ニハ尾州勢織田播磨守ヲ入置。ステニ兩方和睦有テ。道三娘ヲ備後守長男三郎信長ニ遣ケリ。斯テ齋藤左京亮義龍ニ稻葉山城ヲ讓リ。其身ハ鷺山城ヲ普請シテ。是ニ移リケルトイヘトモ。實ハ義龍先太守賴藝ノ胤ナレハ。心中ニハ害シテ次ノ子孫四郎ニ國ヲ讓ラハヤト思ヒケリ。

齋藤父子矛楯附道三生害之事

斯テ織田家ト和睦ノ後。尾濃兩國太平成ケレハ。國民安堵ノ思ヲナス所ニ。齋藤父子ノ合戰忽出來テ。終ニ當家滅亡ノ時至ル事。天罰ノ至ル所也。此故ニ。又國中兵亂起リテ。國民薄氷ヲフム思ヒヲナス。道三當腹ノ子孫四郎ヲ寵愛シテ。右京亮ト名乘セ。嫡子義龍ヲ如何ニモシテ害シ。右京亮ニ國ヲ立ント巧ミケル。是ヒトヘニ義龍ハ先太守ノ胤成故ニ斯ハ計ヒケ

ル。義龍是ヲ聞大ニ怒リ、我齋藤ノ家名ヲ繼トイヘトモ、實ハ先太守賴藝ノ胤ニテ。忝モ源賴光ノ嫡孫也。彼ハ松波庄五郎トテ、商家ノ下賤ナリ。先太守次郎タリシ時。長井長弘カ取持ニテ、鷺山ニ入込。父賴藝ヲ進メテ。伯父賴繼ヲ追落シ。賴藝ヲ太守トセリ。其功ニ依テ寵愛ニホコリ。アマツサヘ後ニハ長弘ヲ討。太守賴藝ヲ追失ヒ奉シ事。無道ノ至極ト云ツヘシ。アマツサヘ我ヲ害セント計ル事無念ノ至ナリ。サアラハ、此方ヨリ取詰テ。今ニ思ヒ知ラセント、ヒソカニ關ノ城主長井隼人佐ト相談シ。家臣日根野備中守弘就。同彌次右衛門兩人ニ申付、弘治元乙卯年ノ秋、兩人ノ弟ヲ鷺山ヨリ稻葉山城下ノ下屋敷ヘ呼寄。齋藤右京亮。同玄蕃允二人ヲ忽討テ捨タリケリ。稻葉山ノ家中ヨリ。此旨鷺山ヘ告タリケレハ。道三大ニ怒テ。國中ノ武士ヘ下知シテ。稻葉山ノ城ヲ攻落

シ。左京大夫義龍ノ首ヲ見セヨトイキマキシテ下知シケレ氏。元來入道カ惡逆無道成ニヨリ。義龍ニナツキタル國勢共。悉ク稻葉山ヘ馳加リ。鷺山ノ手ヘハ十分一モ行サリケリ。鷺山ノ老臣林駿河守通村入道道慶、川島掃部助、神山內記、道家助六郎ヲ發テ、長良ノ中ノ渡リニ打テ出ル、稻葉山勢モ大軍ヲ川ノ東ヘ押寄。川ヲヘタテ、相戰フ。敵モ味方モ同シ家中ナレハ、雙方一族緣者ナリ、義龍ノ旗大將林主馬ハ。鷺山ノ大將林駿河守入道カ甥成ケレハ、別テ晴ケマシキ軍ナリ、然トモ義龍ノ勢ハ大軍ニテ、荒手ヲ入替々々透モナク攻ケレハ、道三叶スシテ鷺山ヲ去テ。山縣郡北野ト云所ニ古城アリ、鷲見美作守ト云者ノ居タル明城アリ。此城ニ道三引籠ル、駿河入道ハ、鷺山ニ在テ日々戰フ。同二丙辰四月山城入道手勢ヲ率テ。北野城ヨリ城田村ヘ出張シ、岐阜ノ體ヲ窺ケル

時節能トヤ思ケン。同月十八日ニ中ノ渡ヘ發向ス。義龍モ出馬セラレ。川ヲヘタテ、散々ニ戰フ。終ニ道三打負テ。同廿日ノ暮方ニ主從ワツカニ討ナサレ。城内ヲ心掛引ケルヲ。義龍ノ勢長良川ヲ押渡リ追詰。小牧源太。長井忠左衛門。林主水三人ニテ道三ヲ取込。突伏テ首ヲ討落ス。證據ノ爲トテ長井忠左衛門入道カ鼻ヲソキ取ケリ。義龍此印ヲ實撿ノ後。長良川ノ端ニ捨タルヲ。小牧源太拾ヒ取土中ニ埋ム。今齋藤塚トテ川ノ邊ニアル舊跡ナリ。此小牧源太ハ尾州小牧ノ者ニテ。幼少ノ時ヨリ。山城守側近ク仕ハレ。非道ノ事數度ニ及ヒ。怨ヲ含背ナレハ。人モ多キ中ニ勝レテ道三ヲ討ケル。然レトモ多年ノ恩ヨシミヲヤ思ヒケン。斯念頃ニ其首ヲ取納ケリ。義龍歸陣シテソレ／＼ニ恩賞ヲホトコシテ。夫ヨリ齋藤氏ヲ捨テ一色左京大夫義龍トソ名乘給ヒケル。一色ヲ名乘給フ故ハ。道三ハ實父ニテナキ儀ヲ。世間ヘ知シメン故ナリ。又土岐氏ニ一色ヲ名乘古事有トモ。幼少ノ時。厚見郡一色ニ居給フ故トモ。又母ノ三芳ノ御方ハ一色左京大夫ノ娘ニテ。母方トモ云ナリ。先其心ハ一色ハ母方ト云。祖父丹州宮津ノ城主武勇人ニ勝レ。世ニ隱レナキ勇將ナレハ。其武威ヲ子孫ニ傳ントノ心ナルヘシ。義龍一國ヲ平均シテ。當城ノ麓井ノ口ニ正法寺傳燈寺ト云二ケ寺ノ大寺ヲ取立。禪法ヲ皈依シテ別傳ト云長老ヲハ傳燈寺ニ住セシメ。當州ノ諸宗別テ禪宗五山派開山ノ四流トモニ。傳燈寺ノ支配ニシテ。諸法度共ニ可承旨相定ラレシカハ。依之諸宗一統ニ吾々カ本寺ヘ訴ヘ大ニ騷亂セリ。則公方家ヨリセイシ給ヒケル故靜リケル。常在寺ハ由緒アル寺ユヘ。領下村日野村芥見村三ケ所ノ内ニテ。寺領五百石寄附セラル。庫裡方丈鐘樓悉ク造立

セラル。葦手ノ正法寺ハ。土岐家ノ菩提所ナリト云トモ。城下ニ正法寺ヲ造立セラル故ニヤ。捨置レケレハ。次第ニタイハセリ。然ルニ義龍病ニ伏テ程ナク。永祿四辛酉年五月十一日稻葉城ニテ逝去シ給フ。行年三十有餘歳ナリ。則常在寺ニ葬ル。雲峰玄龍大居士ト號。日來禪宗ニ皈依セラル、故。辭世偈有。

三十餘歳　守護人天　刹那一句　佛祖不得

長子喜太郎龍興。家督ヲ繼テ。右兵衛大夫美濃守ニ歷任シ。故齋藤ノ一族トモ心ヲ合セラレシカハ。國中義龍ノ時ヨリモ靜ナリ。齋藤ノ跡ヲ繼ハトテ。齋藤右兵衛大夫龍興ト名乘レケル。尾州織田上總介信長此弊ニ乘テ。濃州討取ヘシト大軍ヲ以亂入ス。齋藤龍興兵ヲ出シテ。稻葉山ノ麓。瑞龍寺ノ西。岐阜ノ町口ニオヒテ大ニ戰フ。織田家大ニ敗シテ兵大勢討死ス。其骸骨ヲ取集テ一ツノ塚ヲ築ケリ。織田塚ト名付。不思議アリ。雨フリ月闇キ夜ハ。土中ニ聲シテ大軍ノ凱歌ヲ揚ル音シケレハ。里人トモ怖レテ。案外ト云道德ノ禪僧ヲ賴ミ。頌ヲツクリ。塔婆ヲ立テ。念頃ニ追善ヲナシケレハ。是ニ亡卒ノ怨念モ散シケン。其後アヤシキ事モナカリシトナリ。斯テ尾濃又和睦有テ暫國中太平也。

齋藤龍興沒落事

織田上總介信長。心中ニ種々ノ計略ヲ運シ。濃州ノ旗下、稻葉伊豫守通朝ヲ始。氏家常陸介ト企。安藤伊賀守。不破河内守ヲ味方ニ付テ内通セシメ。永祿七甲子年九月朔日大軍ヲ引率シ。濃州ヘ打入。稻葉山城下東西南北ニ火ヲ放テ燒立。息ヲモツカセス攻戰フ。此時ニ葦手ノ正法寺モ兵火ノ餘炎ニ掛リ灰燼トナル。土岐家數代ノ舊跡此時ニ燒亡ス。其後再興ノ人ナシ。正法寺ノ名ノミ殘テ退轉ス。此時瑞龍寺モ燒

挪ケレトモ。當寺ハ悟溪一派ノ舊跡ナル故。後又再興アリ。城中叶難ク龍興降ヲ乞。城ヲ明渡シ。江州ヘ落行。淺井備前守長政ヲ賴ミ居ラレケル。大伯父長井隼人佐道利モ關ノ城ヲ落テ龍興ト一所ニ江州ヘ落行。後ニ越前ヘコヘテ。朝倉義景ニ與シ。永祿天正ノ間。所々ニテ武功アリ。龍興天正元癸酉年八月八日。江州姉川ノ軍ニ討死ス。又長井道利ハ後將軍義昭公ニ仕ヘテ。攝州ニテ討死ス。其子ハ稻葉能登守由通ノ家ニ奉公ストナリ。

齋藤家氏神之事

夫齋藤氏ハ利仁將軍ノ後胤ニシテ。子細有テ聖廟ヲ崇奉ル。昔加州富樫ノ一族。越中井ノ口ノ輩。越前齋藤氏ノ面々。何レモ菅家ノ靈ヲ崇メ。加州敷地ノ天神ヲ此三氏ノ氏神トス。此故ニ齋藤氏暫モ住セシ所ニハ。此神多ク勸請セスト云事ナシ。加納。岐阜。長良。文珠。關。北方等白樫。堀津。加賀ノ井。三井。八神此所々ハ皆齋藤氏ノ面々住シケル故。彼社ヲ立テ。今ニ何レニモ在リ。齋藤家ノ紋ハ梅鉢ヲ付ル故。菅原氏ト云事誤成ヘシ。美濃ニ昔ヨリ梅鉢ヲ付ル者多シ。是皆齋藤ノ紋ヲ賜リテ付ルモノカ又其氏族タルモノ成ヘシ。齋藤家當國ニ久シク住居スル故。子孫諸流ニ分ル。其大概ハ林。近藤。後藤。佐藤。堀。吉原。河合。都築。岡。中村。矢木。青木。松木。白木。豐田。大谷。安藤。各務。加賀。野江。三井。村山。花村。是美濃侍ナリ。

織田家代々岐阜在城之事

永祿七甲子年九月仲旬。織田上總介信長。稻葉山ノ城ニ移リ。岐阜ト稱ス。當城ノ麓常在寺ハ。元ノ寺領五百貫ハ召放レケレトモ。由緒アル寺ナレハ。當住日韵上人ノ申ニ依テ。日野村ニテ百貫文ノ朱印ヲ賜フ。其後江州安土ニ城ヲ

築テ移リ給フ。信長息男信忠ヲ岐阜城ノ守トス。天正十壬午年六月二日。明智謀叛ニテ。信長。信忠父子トモニ京都ニテ生害ノ後。當城ハ信忠ノ長男。秀信ノ後見トシテ。神戸三七信孝當城ニ住セラル。天正十一癸未年柴田修理亮勝家ニ同意アリ。秀吉ト取合發ル。依之三七信孝當城ヲ去テ。尾州野間ノ内海ニテ廿六歳ニテ切腹ナリ。此時ノ亂ニ。常在寺モ兵火ニテ信長ノ賜リシ。朱印其外遺物トモニ燒失ス。然レトモ其後寺ハ再興アリケリ。其跡ヘ少將豐臣秀俊住セラル。是秀信ノ後見タリ。秀俊ハ朝鮮軍ノ時。肥前ノ名護屋ヘ出陣シテ。彼地ニテ病死セラル。慶長五庚子年岐阜中納言秀信公。石田ニ與シテ岐阜城ヲ攻落サル。終ニ紀州高野山ニ入テ卒シ給フ。此時ノ兵火ニ瑞龍寺モ炎燒ス。然トモ再興アリ。常在寺ハ信長ノ給ハリシ日野村百貫文ノ朱印地。秀信公迄相違ナク給ハリシカ。慶長五庚子年秀信亡ヒ給フ後。寺領斷絶ス。常在寺ニ今殘物トテハ。道三ノ畫像ト。義龍ノ壽像計リナリ。道三ノ像ハ信長ノ北ノ方。父ノ爲ニ建立ナリ。又義龍ノ壽像ハ。子息龍興ノ建立。常在寺ノ本尊文珠菩薩ハ。昔長井藤左衛門長弘代本巣郡文珠ノ城落城ノ時。此文珠堂兵火ニ掛ル。其時本尊ヲ取出シ。齋藤氏ノ由緒アル寺ナレハトテ。常在寺ニ安置スルモノナリ。

池田家之事

清和天皇七代。從四位下左衛門尉三河守源頼□ト號。永長二承德元丁丑七月十二日卒。七十三歳也。其子從四位下。兵庫頭仲政。其子四男瀧口右馬允泰政。母方ノ叔父。紀泰貞ノ子ト成ケレハ。攝州豐島郡池田庄ノ領主ナリ。藏人紀泰政ト改。泰政子二人アリ。長男池田薩摩守泰光。二男ハ帶刀望□（マサ）ト云。泰政十代ノ末池田

九郎教依攝州池田ニ住シ。楠左衛門正行カ後家ニ嫁シテ男子ヲ産ム。實ハ正行カ子ナリ。池田十郎教正ト名乗セテ。後兵庫家正ト改。其子池田六郎佐正ト號シ。先祖ノ領地美濃國池田ノ庄ニ住シ。藏人佐正ト名乘。源ノ姓ニ改ラル。佐正ノ子孫池田勝三郎恒興。近江國ニ住シテ母ハ信長ノ乳母ナリ。故召出サレ諱ノ一字ヲ賜リ。信興ト改。又將軍義輝公ニ見エテ。輝ノ字ヲ賜ハリ信輝ト名乘ラル。武義郡志津城ニ居ラル。男子四人有リ。長男ヲ池田勝九郎政教後紀伊守之助ト云　室ハ義龍ノ娘也。二男ヲ三左衛門輝政。三男備中守長吉。四男河内守長政ト申ナリ。

追加

天文年中美濃國可兒郡八十一隣(クヽリ)ノ城主ヲ土岐三河守ト申ケリ。同近郷兼山ノ城ヲ合テ領之。先祖代々久々利庄三千貫ヲ領ス。是ハ土岐大膳大夫頼康ノ弟。土岐悪五郎ノ後胤也　悪五郎ハ建武年中ヨリ此所ヲ領セリ。文和元年壬辰三月廿四日。八幡ノ合戰ニ和田五郎ニ討レタリ。三河守名ヲ得タル勇士ニテ。天正十壬午年三月信長甲州武田ヲ征伐ノ爲發向ス。此時三河守所ニ三日逗留アリ。八十一隣ヨリ岩村越ニ甲州ヘ發向ナル。信長ノ近臣森勝藏長可ト云者アリ。父ハ森三左衛門可成トテ。濃州蓮臺ニテ信長取立ノ侍ナリ。近江國ニテ討死ス。勝藏ハ三左衛門二男ナリ。天正十年信州川中島ヲ賜リ。武藏守ト號。其年六月二日信長京都ニテ　土岐ノ　明智日向守光秀害セシト聞シカハ。川中島ヲ立テ　濃州ニ登ラル。武藏守末弟ニ。森仙千代丸ト云アリ。是ヲ岐阜ノ城ノ人質ニ入置。然ル處。武藏守城内ヘ相圖ヲナシ。城ノ麓ニフトンヲ張。其内ヘ狹間ヨリ飛込セ。連テ兼山ニ打入。事故ナク城ヲ乘取居城トス。久

々利ノ城主三河守ヲ手立テ以和睦シテ、其後度々兼山ヘ請シス入油斷ヲ見スマシ。三河守退出ノ所ヲ城ノ麓ニテ討セケリ。直ニ久々利ヘ取カケ。何ノ手間モ不入城ヲ乘取ケリ此所土岐家重代ノ鵜ノ丸ト云太刀（豐後行平。）武藏守手ニ入。是ハ仁平三癸酉年源三位賴政近衞院ノ御宇。於宮中鵺ヲ射タル時頂戴セシヨリ。故有テ土岐惡五郎ニ傳ハリシ太刀也。其後武藏守存ル旨ヤ有ケン。伊勢太神宮ヘ奉納アリ、則御師尾崎石見守（山口信濃守タ）所ニ在ト云々。扨父三河守死骸ヲ久々利ノ長保寺ニ葬リヌ。前三州太守雲溪龍公大居士ト號。兼山ノ向ニ加茂山ノ城主肥田玄蕃允米田ノ庄三千貫ヲ領　武藏守卽時ニ攻落ス。玄蕃ハ行方ナク落行ケリ。兼山ヨリ三里西加治田ノ城主齋藤新五郎トテ。道三末子也。武藏守只一戰ニ城ヲ取　新五郎加治田ニテ討死ス。苗木ノ城主遠山久兵衞友政カ城ヲ攻落ス。友政關東ヘニケ行ケリ齋藤新五郎ノ子齋宮トテ。岐阜黃門秀信卿ノ小性立ニテ　慶長五庚子年岐阜落城ノ時。長良川ヲ渡リ、北方ヘ落行後。松平大和守直政ニ奉仕スト云。武藏守長可ハ兼山ヲ居城トシ。加治田。苗木。久々利三ケ所ヲ領シ、父三左衞門爲ニ兼山ニ臨濟宗ノ可成寺ヲ建立ス、扨武藏守長可ハ。池田勝入ノ聟ト成。天正十二甲申三月廿七日。兼山勢三千餘騎ヲ率シ。尾州小牧山ヘ發向シ、靑塚ニ陣ヲ取。同四月九日長久手ノ合戰ニ敗軍シテ武藏守モ家康公ノ御勢ヨリ打掛ル鐵炮ニ、甲ノ眞向ヲ射レテ死ス。武藏守首ハ三州衆ノ大久保七郎右衞門與力本多八藏取之、武藏守前武州大守鐵園秀公大禪定門ト號。武藏守子ナシ。舍弟仙千代丸ヲ養子トセラル。太閤ヨリ家督ニ申付テ、森右近大夫忠政ニ任セラル。兼山城ヲ下サレ。天正十三乙酉年兼山侍從ニ任。同

十八庚寅年所領信州川中嶋ヘ所替仰付ラル。其跡ハ當山ニ石川備前守貞清暫居住。是モ程モナク上州大山ヘ所替有テ城地斷絶ナリ。右近大夫忠政慶長八癸卯年美作國ヲ賜リ。津山ノ城ニ移ル。津山中將是ナリ。

青木加賀右衛門本國美濃業也。始ハ土岐美濃守頼藝ニ仕ヘ。後齋藤ニ仕ヘ。又織田家ニ仕ヘ後秀吉公ニ奉仕ス。慶長十八癸丑年八十六歳ニテ病死ス。青木甲斐守先祖ナリ。

土岐家傳記諸々ニ有トイヘトモ此記ハ我家ノ傳書ニテ不他見所。元和元乙卯年林丹波守殿望ニ依テ記之。則自分ノ手柄ノ事モ。後代ノ爲ニ(本ノ寫)可記被申。書加ヘテ爰ニアラハス者ナリ。

今歳享保二十乙卯年ニ。虫喰不見所多キ故ニ新ニ再寫ス。

江崎甚大夫頼澄

江崎金左衛門祖父谷瀬兵衛ト申者。先年大坂御陣之刻浪人ニ而。石川主殿頭殿。大久保權右衛門殿手ニ罷在。權現樣より爲御褒美。黄金二枚拜領仕候事。

右御褒美拜領仕候意趣ハ。大坂夏御陣之刻。石川主殿頭殿。大久保權右衛門殿御兩人ハ。御先ヘ被仰付。攝州高付ゟ被相詰ニ付。權右衛門殿人數三百餘被召連。所々御順見ノ砌ひらかた堤切戸ニ而。長曾我部カ手之者淀川瀨蹈仕候を。祖父瀨兵衛見掛。堤原ニ殘居。川越之方へ一人かけ付。瀨蹈之者二人共生捕仕候。跡より權右衛門殿家來中島長三郎。野原所左衛門ト申者參委細見屆申由。右生捕之樣子權右衛門殿へ申達候得は。生捕之者共二條御城ゟ引遣シ被申候所。權現樣伏見へ御出馬ニ相成候故。生捕之者共召連。御跡したひ伏見へ罷越候處。伏見より又手田へ御陣替被遊。御人數組可被

仰付候間。權右衞門殿も千田へ被罷越候樣ト。本多上野守殿より御觸狀參着。權右衞門殿も即刻千田ゑ被罷越候。其刻生捕も千田へ參着仕。本多上野守殿御取次にて御披露御座候處。御首途御機嫌被爲思召。生捕之者共五月六日朝御小屋前ニ獄門ニ被爲掛候。其節大河內平十郎殿御奉ニ而。爲御褒美黃金貳枚祖父瀨兵衞頂戴仕候由。右之段平十郎殿能御存之由ニ御座候。同五月七日森口ニ而眞田方之馬上鎧武者之(ヲカ)。祖父瀨兵衞組討仕首捕申候。則其節石川主殿頭殿。大久保權右衞門殿御取次ニ而。首御帳ニ委細付申候由御座候。以上。

二月

右書付者。權現樣台德院樣御代。感狀御書幷御褒美等先祖へ被下置候儀有之候ハヽ。御家中諸士。手代御足輕迄。右之品々有之候ハヽ書出候樣ニと御觸ニ付。右之通書付。山內治大夫殿御取次ニて。差上申候留ニ御座候。

以上。

右之留書は。尾州江崎金左衞門正知より。父ノ金左衞門正英大納言樣ゑ書出しと申候留。江崎甚兵衞方へ被申越候付。爰ニ加者也。

林七郎右衞門由來之事

林駿河守通村ノ先祖ハ。飛州高山神主八千石ノ領主。林左近大夫通貫ト云人ノ末孫ナリ。通貫子ナクシテ。稻葉左衞門佐光房當國へ蟄居ナリシヲ養子トシテ家ヲユツリ。林左衞門佐通房ト名乘セ其身(頭カ)ハ隱居セラレケル。後ニ一子出來テ。內匠助通盛ト云八千石ノ內三千石引分テ領スル事。代々也。通房十一代左衞門佐通祐ノ代ニ。土岐大膳大夫賴康へ與力シテ。美濃へ出ルニ及ンテ。本家ヲ通盛ノ末內匠助通貞ニユツリ給ヒケル。其子通賴弟正通相續テ

其子通村弟通利ノ爲ニ國ヲ追出サレ、美濃ヘ來テ土岐頼藝ヘ仕ヘテ。駿河守ニ進ム。夫ヨリ頼藝沒落ノ後ハ、齋藤道三ニ仕ヘテ長臣タリ。其子新左衛門同仕ヘテ、道三落居ノ時。同國合戶ニ蟄居ス。二男七郎右衛門ハ江崎ノ里ニ住シテ、土岐頼藝ノ六男六郎頼昌ヲ養育シテ。同國淸水ニ行テ。稻葉一鐵齋ニシハラク仕ヘ。夫ヨリ西國ニ立越。筑前國名島ノ城主中納言秀秋公ニ仕ヘ。宗兵衛正三ト號、其子稻葉內匠助正成トテ。濃州關原軍ニ戰功有リテ　內府公ヘ召出サレ。佐渡守ニ任ス　私曰。七郎右衛門娘三州內府公ノ許ヘ。先年奉公ニ出大ニ立身シテ御局タリ。是則內匠姉也　關原軍ノ時內匠助ヘ內通アリ。筑前中納言ヲ內府公ヱスヽメ給ハヾ。大ニ立身ナラント云送ラル。是ニ依テ秀秋公ヲスヽメテ、反忠ヲナサシムモノナリ。此ヿ　福島左衛門殿段々取計ヒ給ヒヌ。此時石田方ニモ此事ヲサトリ、內匠ヲ呼寄。色々ノ頼ミアリ。軍利アルニオヒテハ、江州ニテ拾萬石ヲ秀頼公ヨリ賜フベシトテ。連名ノ證文ヲ送リ當座ノ引出物ニ。金三百兩ヲ送レリトカヤ。稻葉一鐵齋ノ事モ此仁ノ計ラヒニヨツテ。福島殿セワナサレ。味方ニ子ク也。

以宮內省圖書寮本校合畢

土岐累代記終

續群書類從卷第六百十六

合戰部四十六

土岐齋藤軍記

土岐齋藤軍記目錄

土岐系圖

源二位頼政 ─ 兼綱伊豆守 ─ 頼茂近江守 ─ 頼氏土岐元祖 下野守

─ 頼忠土岐 兵庫頭 是ヨリ六世孫美濃守左京大夫成頼 ─ 政房美濃守 ─ 盛頼太郎 美濃守

─ 頼澄

─ 頼藝二郎 美濃守 ─ 元頼

─ 頼滿

─ 頼秀太郎頼秀ナ元頼氏アリ二郎頼師ナ頼充氏アリ頼滿氏アリ

齋藤系圖　四字今補フ

利永越前守 ─ 利藤越前守 ─ 利國新四郎

─ 利親新四郎 ─ 利良新四郎 ─ 長弘越中守 左衛門尉

─ 利隆濃後守 ─ 利安兵衛尉

利賢右衛門尉

美濃國守護之事

抑當國は。東山道の要なれは。往昔より守護國主も人をゑらはるゝ所也。村上帝の御宇。滿仲當國の守に任し玉ひ。是より其子頼光頼信迄知食しけり。頼光の嫡子頼國其子國房迄。斷絶なく承嗣し玉ひけるを。國房承暦の頃勅勘を蒙て解官せしより。頼義の二男加茂次郎義綱守護職を拜し。其子義俊相續て此ニ任シけり。其後程經て文治建久之比より建治のころまて。土岐光衡。梶原景時。相模守惟義。小笠原十郎四郎泰綱。かはる／＼當職に任しけるか。皆其身一代にて事止ミ。夫より時代はるかに相隔りて。後醍醐帝ノ御宇。土岐頼貞守護に任せしより。後奈良帝ノ御治世に至迄。十一代相續テ此國を治メ待りき。天文の頃の國主を左京大夫頼藝と申しける。家臣齋藤山城守道三か逆心故。土岐は守護職を離れ。左京亮は越前の

國へ落行ければ。是より道三。義龍。龍興。三代國を押領しけり。永祿七年九月。織田信長か爲に國をうはわれ。龍興遂に江州へ落侍りき。是におゐて信長清須より岐阜に移り。秀信に至るまて已に三代是を領しける。去ル慶長五年八月。中納言秀信逆心石田に與するによりて。大神君諸將に仰られて征し給ふ。是より當國の守護斷絶せり。

長森城之事

源滿仲より四代孫[illegible]田美濃守國房。始テ土岐郡に住せし。其子孫長當國の住人となり。代々土岐郡に住し侍りき。光衡代に至りて郡部に移り。其子光行を淺野に住せしむ。其後四代相續テ當郡に住す。頼員は高田之里に住し。其子頼遠は大富の里に住し侍りしか。建武暦應の比。土岐惣領職を賜り。國務を執行に便りあしければとて。大富の城を捨て。始テ厚見郡長森の城を構て爰に移りき。青野か原の合戰に頼遠疵を蒙りて長森の城に退クとは此所也。往昔文治の頃か。澁谷の金王丸か住せし所とかや。

革手城の事

頼遠死して後。周濟坊惣領職を拜して長森城に住しけり。甥の大膳大夫頼康代に至て。美濃尾張伊勢の守護を賜りければ。府城甚せはしとて。革手の城を築て是に移り居れけり。頼康之孫大膳大夫康政。將軍家の命にそむき。叛逆の色をたてしかは。將軍義滿公同氏頼益に仰せて是を討せらる。大膳太夫康政。嫡子持頼。共々生害しに訖ヌ。頼益は其親族を捨て公命を重ンするは。此度之戰功ナ感シ思召。土岐の惣領職を頼益に賜ふ。革手の城に移り侍りき。頼益頼宗より以來。池田郡に住する故に。土岐の西池田と申ける。頼益始は尾州萱津に住する。萱

津トモ申けり。成賴老して當城に住し。明應五年の秋成瀨池田郡の安國寺にして剃髮し。法名を宗安と改メ國を嫡子政房に讓り。自は城田之城を構て是に老居せり。政房賴藝代迄相續て川手城に住せり。政房後に城田に移り。米田において永正ノ末ニ卒し侍りき。賴藝も始は鷺山の城を構て居侍しか。家督の後革手に移り。世中物騷なれはとて。長井豐後守利隆を城代として當城に指置。自は山縣郡大桑の城を築て此所に住シ。諸國の使節たとひ台命を帶する所の使といへとも。此所にて饗。大桑に通する事なし。天文の頃に當て盜臣道三逆心を企大軍を催して革手大桑の兩城を攻落し燒拂訖ヌ。是より兩城共に斷絕し侍りき。

大桑之城之事

當城は。新羅三郎義光八代の孫。逸見又四郎重氏始テ賜テより。子孫氏を大桑と改。世々此所に住しけり。明應の頃は。成瀨の息男矢部大夫定賴。當城を改築て是に居り。天文の頃。盜臣齋藤道三逆心故に。太郎賴純。二郎賴藝。國を出て。二郎賴藝は尾州織田信秀を賴て古渡へ立退き。熱田の一向寺にしはらく居られけり。太郎賴純は越前の國へ落。朝倉左衛門大夫義景を賴み居られけり。尾州織田信秀。土岐の舊臣不破安藤稻葉氏家に申合せて大軍を催して押寄せけり。齋藤叶ふましとや思ひけん。則和融して賴藝をは揖斐に城を構へて入置けり。其後朝倉尾州織田信秀と心を合せて。賴純賴藝兄弟大桑の城へ入置。道三を討へき色見へけれは。道三大きに仰天し。大勢を催し大桑の城を攻けり。城中の兵共落足に成けれは。近習之山本數馬不破小次郎以下彼是七人候を揃へて。一先越前の方へ立退。重テ軍勢を催し攻亡すへき由申に依テ。賴藝せんかたなく城の後

青波と云ふ所へ出。それより山つたひに數馬在所岐禮まて落行ける。然所を道三河村筑後か嫡子圖書。林駿河兩人に任せて討せけり。林駿河はいかなるゆへか有けん。佐原と云所より行方不知落行けり。河村は神海と云ふ所ゟ備を立テ。井野河原にて川を隔て相戰。圖書相傳の主君に向ひて弓を挽矢を放ス事本意にあらす。天の照覽も如何と思ひけれは。山本方へ矢文を送りて內意を通しけり。是に依て七騎のものとも喪服を着し。屋形を包ミ生害をとけられたる由を披露し。山の上におゐて葬禮の義式ヲ執行ひ。柴を積ミ火を掛けれは。圖書凱歌をとなへて引退けり。是ゟ主從七騎は山道をつたひて越前へ落。朝倉を賴けるに。心底難計見へけれは。潜に上總の國へ落行けり。角て彼國の滿喜と云ふ所に舘を構へ住しけるか。眼うれひて盲者となり。剃髮して名を宗藝とそ申ける。天正拾年の夏稻葉伊豫の入道君臣の義を重シ。二度當國に迎へ取。岐禮の里に新に舘を構て。米貳百石をまいらせ。士女五六人を付ていたはりけるか。同年十二月假初に病に臥テ。八十有餘にして終に此世を去り。法名文關宗藝と申ける。日頃住しける舘を東春菴と申ける故。則追號を東春院殿と申ける。其塚東春庵の西南の隅に有り。山本次郎左衛門と後に申けるは數馬か事なり。東春院の臨終迄隨身して忠をつくせし者也。今其子孫彼里にあり。

正法寺之事

土岐は往昔天台宗にて侍りしを。賴貞より禪法に歸依ス。土岐郡におゐて數ヶ所の禪刹を建立しけり。賴遠長森の構てより以來。賴家代に至て。厚見郡革手府の北に當て。一伽藍を建立して。靈藥山正法寺と號。土岐一流の氏寺

となしにける。次第に繁榮して。國中無雙の名藍なり。開山夢窓國師の法孫嫩桂榮和尚なり。天文永祿の頃迄。法流相續て伽藍も恙なかりしを。義龍代に至て伽藍も漸々頽破に及ける。義龍永祿四辛酉年病死しけれは。織田信長其費に乘て大軍を催して稻葉の城を攻。岐阜の東西南北悉く放火したり。此時も兵火のために燒れけれとも。重テ修造にも及はす。是ゟ伽藍斷絕し侍り。

稻葉山之事

當山は和歌の名所なり。當所に三名有。金花山。一石山。破鏡山とも申也。當山の歌共一首万葉集に入集せり。仁明帝の御宇か在原中納言行平詔を奉ニ。陸奥より金花石を引來テ。美濃國に着ク。又詔を下して都に召上せらる。行平彼石を捨て上洛し給ふ。後に神に崇て金大明神と號し侍る。行平卿此時和歌を詠ス。世人口にある所也。

抑當社大明神は。人皇十一代垂仁天皇第八の皇子にて。御諱を五十瓊磯城入彥命（イツニシキイルヒコノミコト）と申奉る。貞觀元己卯年二月正一位因幡社と勅額を賜ル。

因幡社之舊記を見ルに。當社は本地阿彌陀如來。奥の院は峯の權現と申奉る。本地藥師也。蓋シ奥の院とは內宮之義歟。然は陰神にして五十瓊磯城の后と崇ル所ならんか。一說に峯の社は垂仁帝を崇奉る所にして。御親之神なりと。未タ孰か是なる事を知らす。本地は阿彌陀藥師と云ものは何のよる所そや。

五十瓊磯城は垂仁の皇子也。峯之社は后也。垂仁帝也。彼は夷狄の靈此は我朝の神。何レそ相等しき事あらん。本地垂跡とはなんの謂そや。皆是浮屠氏人を惑すの費なり。甚信ルに足ラス。

岐阜幷稻葉山城之事

山を岐山と云ひ。里を岐阜と申事は。昔よりの義也。明應より永正の頃まての舊記に多ヶ岐阜と見へたり。往昔は加納沓井吉田と申。岐阜今泉忠節幷ノ口と申けるを。信長岐阜入城の後。沓井吉田ヲ合テ加納と號シ。忠節今泉井ロ宗田を岐阜と定メらる。岐阜と云は古き名にして。信長の名つくる所にあらす。當山城は建仁の頃。二階堂山城守藤原行政始テ築所也。其子伊賀守朝光是に居れり。伊賀次郎左衛門光宗相續テ當城に居れり。其後時代はるかに隔て。正元の頃か。二階堂行藤しはらく是に居れり。在城の間に武義郡吉田の郷に新長谷寺を建立ス。其後應永永享の比か。齋藤帶刀左衛門尉利長。幷古城を修覆し居城せしより以來。新四郎利永。長井藤左衛門長弘まて住しけるを。享祿三庚寅歲正月。西村勘九郎主の長弘を討て。自ラ永井新九郎政利と號。當城に住し。其後義龍龍興迄三代當城の主たり。永祿七甲子年九月。尾州ゟ織田信長大軍を催し。來て當城を攻。龍興は城ヲ捨近江國へ落行。淺井下野守藤原長政に與して。越前の敦賀におゐて。天正癸酉年八月八日討死せられけり。去ル永祿七甲子九月より。信長當城に移り。其子信忠孫秀信迄相承メ城主たり。然處に慶長五庚子年八月秀信鈞命を奉りなから。逆臣石田三成に與せられ。大神君諸大名に仰せて岐阜を攻させらる。諸將は木曾川を越テ城の南西より押寄ス。池田輝政計當城の案内なれは。城山の後水の手口より攻上り。終に攻落シ訖ヌ。秀信卿は川手の閻魔堂まて出馬なりしをとり子にして。上加納村圓德寺と云一向宗の寺へ入まひらせ。夫ゟ紀州高野山へ送り侍りき。是ゟ斷絕。其後公領となり。岡田將監府中事を司と

る。

加納城之事

當城は齋藤帶刀左衛門利永。文安二乙丑年八月築處也。革手府之後見たり。執權の嫡たる者是に居れり。天文年中より暫く城主斷絕し侍るを。慶長六年奥平美作守平信昌當城を賜ひて地を改テ新に築キ。松平攝津守源忠政。同飛驒守源忠隆與して當城に居られ侍りき。其後大久保加賀守藤原忠秀賜テ居られしか。後寬永十六己卯年松平丹波守藤原光重賜也。

瑞龍寺之事

當寺は齋藤帶刀左衛門尉利藤入道大年居士か建立の地なり。大年居士悟溪和尚に歸依シテ。外護の旦越たり。應仁元丁亥年八月天台の舊跡を點して伽藍を建立し。主君成賴の菩提所となす。土岐は先祖より代々相國寺派にて。革手正法寺の旦那成り。成賴一人開山派に歸依し。數ケ所の庄園を彼寺に寄附せられけり。政房成賴のために法事を勤らるゝ時は。皆革手の正法寺にて勤られけり。賴藝も相承ス。正法寺にて法事を勤らるゝ也。天文十五年。尾州織田信長と瑞龍寺之西南にて大に相戰。此時に備後守信秀岐阜の四方ゟ火を掛け攻よせけるか。瑞龍寺も兵火の爲に燒れ訖ヌ。永祿七年慶長五年の合戰にも。武家の燒れ侍れ共。猶斷絕なく。法流繁榮して。悟溪一派の本寺たり。大年居士外に三字を建立して自の位牌所とす。開善院是也。

大寶寺之事

當寺は齋藤新四郞利國。明應三年始テ建立し。同十二月開堂悟溪和尚請メ開山とし給ふ。與宗和尚と居らしむ開堂の日に當て。利國入道妙純と。其臣石丸利光と合戰有。委には舟田亂記に見へたり。

天神社之事

齋藤氏は田村利仁將軍之後裔也。故あつて菅神之靈を尊敬し奉る。加賀國富樫の一類。越中國井口。越前國齋藤一族亦菅神を氏神とす。加賀國の敷地の天神を富樫井口齋藤三流の氏神とす。然に依テ齋藤か暫クも住せし所は此社を勸請せすといふことなし。凡加納。岐阜。長良。關。文珠。北方。白樫。堀津。加賀ノ江。三井。八神等。皆齋藤一族の住しける所にして。彼社を勸請せり。齋藤數代此國に住せし故社あり。彼家の印紋に梅鉢の紋を用事此故成へし。堀前田一類も。皆齋藤の一家成を。梅花の紋を付るによりて菅原氏と稱するもの。後チ世の大なるかやまりなり。此國に梅花の紋付ヲ着ルるもの多皆是齋藤の紋給ツテ。付る所也。

崇福寺之事

當寺は土御門院の文明元己丑年二月。齋藤左金吾。自の居所を點して建立する所也。文明二庚寅歳四月十五日。開堂山神の靈瑞あつて建立する故。神護山と號。左衛門尉享祿三年正月十三日。其臣西村勘九郎か爲に夫婦共殺害せらる。法名を桂岳宗昌と號ス。其妻の法名を法林宗珠とそ申けり。其靈牌を東福寺に立侍りぬ。左衛門尉元は池田郡の白樫と云ふ所に居けれとも。府城程遠くて。政務を主とるに便りあしゝとて。利親死去之後は勝千代か後見として。文珠の城を搆て此に住し。長良に館ヲ立て此所におゐて。國中の政務を執行にける。或時山神の告ケ有て館を點して寺とし。瑞龍寺の西北稻葉山の南の谷間に新に館を搆て此に居れり。近年此所に一向宗の坊舍を建立して。本願寺の談議所とす。俗呼其地號長井洞。

常在寺之事

齋藤氏帶刀左衛門尉利永迄は。禪宗崇敬して

利永在京の時は。雲谷和尚に參學して。直指の心印を得て。武義郡に汾陽寺を建立ス。其子利藤より日蓮宗に皈依して。革手の府に持是院を建立。晩年自ラ爰に居れり。法名を妙椿と號ス。權大僧都法印の僧綱ヲ經。外にて禪法を信し。内には妙經を持けり。其後は嫡家代に妙全に至迄。皆當宗に皈依しけり。寶徳二庚午年三月。京都ゟ妙覺寺の住僧世尊院日範僧都ヲ請して岐山ノ下三字を建立せり。卽鷲林山在常寺と號す。寛正六乙酉年八月。一條院の關白に額を求めしかは。則山號寺號を遊はし下されける。第二世蓮乘院日審も妙覺寺の住僧たりしを。文明十一己亥年三月。妙椿僧都招請せり。同十二庚子年二月廿一日。妙椿卒侍り。法號を開善院權大僧都大年妙椿と申ける。百日の追福のために。祖師の像を造立せらる。三世日護上人。明徳七戊午十二月七日大歡紹興大德。第三回忌追福のために。妙覺寺より請法事を相勤。則常在寺に住せしむ。永正十三丙子年本山の日善上人の弟子。日運上人を請メ住職とす。此一乘院日運上人と申は長井豐後守利隆か弟にして。幼少ゟ日善上人に隨身して。學は顯密の奥旨を極メ。弁舌は宿樓那にもおとるましき近代の名僧なり。始メは南陽坊とそ申けり。其頃日善上人嫡弟に法運坊とて西郊者成しか。内外の學にさとく。南陽を常に引廻けるか。あるときいかなる心つきけん三衣を脫きすてゝ。墮落して舊里に皈り。又奈良屋某か家をも繼ス。山崎屋松波庄五郎と名乘。毎年美濃國へ通ひ油を賣けり。常在寺の日護上人の吹擧に依て。齋藤家へ入出し。齋藤長井の得意とて成けり。此男出家の間も遊山翫水を好にける故。亂舞音曲に堪能成ければ。長井藤左衛門愛する事限なし。大守も其行跡亂かわしく。酒

宴を好ミ。遊興を専とし給ふ故。藤左衛門節を以て大守に見へさせケリ。大守寵愛甚しく。長井か家老西村三郎左衛門か遺跡を継せられけり。角て西村共主長井か行跡の正シからさるを見て。享祿三庚寅年正月十三日岐阜におゐて夫婦共に殺害し侍りぬ。是によつて齋藤長井の一類共押寄て討ンとしけれは。潜に國を出て。大守の方へ参りける。長井か一類共大守へ申請テ首を刎ント申けるを。南陽坊日運上人むかしの法看たるに依テふひんに思ひけれは。大守を頼み。長井か一類共と和融させられけり。大守より内通有ける故。江州佐々木義秀來て向後遺恨なきやうにとて。烏帽子なとして秀の字を與へて秀龍とそ名乘。此恩賞に依テ日運上人の代に。寺院修造シ。數ケ所の庄園を寄附し。子共二人出家せしめ。日運上人の門弟とそなしける。則常在寺第五世。日饒上人。第六世日覺上人是也。義龍興共に渇仰の首を傾ケ。庫裡。方丈。鐘樓。諸堂塔頭に至まて。玉を琢て造立し。領下村日野村にて百貫文賜りしか。天正十一年兵火の爲に朱印を燒失し。秀信卿ニハ朱印は給らされ共寺領は相違なく賜りけり。慶長五年秀信卿生害の後寺領も斷絶し侍りき。今殘ル所の物。道三畫像義龍壽像而已なり。此道三畫像は平大納言信長の室の寄附せらる所なり。義龍眞影龍興の畫所なり。本尊文珠菩薩は。前に左金吾桂岳宗昌建立ス。本巣郡文珠堂の本尊也。文珠の城此頃兵火の爲に堂宇燒拂し。是より永ク堂舍斷絶しけり。是に依テ齋藤家の由緒あるを以て。當寺に安置する者也。

齋藤氏來端之事

當氏は。大織冠四代の孫魚名卿十六代之孫齋藤帶刀左衛門親頼。鳥羽院の御宇始テ美濃國

の目代に任せしより。中務丞頼茂迄相承て當國の目代也しか。尊氏卿の代。土岐大膳大夫頼康美濃尾張の守護となる。威勢甚盛成しか。いつとなく終彼家臣とぞ成にけり。此齋藤久布當國に仕ける故。子孫頗ル繁榮し國中に充滿たり。先大抵を記ス。小林。近藤。赤塚。後藤。佐藤。堀。前田。吉原。河合。都築。岡。中村。矢木。青木。松井。豐田。白木。安藤。大谷。各務。加賀江。三井。村山等也。此外末々。齋藤も新四郎利永に子なくして。嫡流は天文七年斷絶し侍りぬ。庶流は其數しらねは記に遑あらす。永祿七年の合戰に。龍興叔父長井隼人助關を城を落して。龍興と共越前に行。後に將軍義照君に與し奉。攝州に於て討死ス。其子井上小左衛門と申けるか。太閤秀吉公につかへて。黄緞の人數くわはりて。武功天下に隱なし。慶長五年大坂陣の後。稲葉右京亮藤原典通につかへ侍りき。齋藤齋宮と申けるは加治田の城主新五郎ノ子にて。岐阜黄門秀信卿に小性たりにて仕はれ侍りしか。慶長五年の合戰に。足立中務武藤助十郎抔と女姿に出立。駕に乘り。白晝に長良を越へて。北山へ落行けり。後に松平大和守直基に仕へ侍し。此外に慶長五年頃迄加賀江に有けり。彌八郎又は三井彌市郎。子か祖父花村修理亮抔彼末葉たり。三井子孫は加賀の國有。加賀江華村は。慶長五年中納言秀信卿に與せしゆへ。御當代には仕官も成かたけれは。各子孫行方知らす。

齋藤三代岐阜住居之事

長井藤左衛門長弘。始は池田郡白樫といふ所に在城せしか。嫡家利親明應五歳の冬江州合戰に討死せし故。其子勝千代幼稚なる故。後見の爲とて。稲葉山埜に館を構て。國中の政務を執行侍りしか。享祿三年の春。家臣の西村助九

郎に殺れ侍り。其後は助九郎我と名を改て。長井新九郎　名乘けるか。齋藤の一族共大に怒て大勢を引具して攻けれは。密に國　出テ。大守の元へ參り。一向に賴ける故。賴藝扱を入和解せられ。それより次第に昇。右近大夫山城守までに成テ。遂に賴藝をも追出し。則當國を押領。嫡子義龍を美濃守左京大夫と成し。稻葉之城を讓り。自鷺山の城に隱居し侍りき。此義龍と申は。賴藝の種なりしか。齋藤か家にて出生しけれは。彼家を續キ侍りき。道三常に賴藝の寵愛故。側近侍りしか。或時賴藝の妾に三芳と申美女有けるを。道三是非に所望し。あたりに人もなかりけれは。否と云ルニおゐては。刺殺さん氣色に見へたりけれは。賴藝さほとに思はは具して參へしとて給りけり。此女折節懷妊にて有ける故。道三か館にて出生し。新九郎とそ名付ける。其後實子二人出生して。二男勘九郎後孫四郎とそ申ける。三男喜平次後には玄蕃と申ける。孫四郎を右京亮に成し。惣領職に立んと思ふ心出來て。常に義龍を隔ル色見へけれは。義興口惜き事に思ひ。叔父隼人佐を語らひ。弟二人を稻葉山下屋敷へ召よせ。日根野備中守に仰せて討せけり。使を以て道三にしかくの事を告知らせけれは。道三大に仰天し。弘治元年の秋國中の軍兵を催しけれ共。皆悉ク義龍の方へ馳參し鷺山に來る者十か一もなかりけり。川島掃部。神山内記。林駿河守入道道慶。道家助六抔と云家老共。角てあるへき事にあらすとて。長良の中の渡シに打出。川を隔て相戰ふ。敵も味方も同家の臣として。道三旗大將。林道慶義龍旗大將林主馬伯父と甥との事なれは。別してゆゝしく下知しられけり。其外も皆親子兄弟一家の事なれは。後日の嘲をや思ひけん。一入勝而働けり。道三方

小勢にて叶ふましとや思ひけん。引退キ。山縣郡北野村に鷲見美作守か居たりし明城へ取籠。道慶鶴か山に穴城を搆て居り。道三は北野より城田村に來り。岐阜の景氣を伺ひける。時節よしとや思ひけん。同二年四月十八日。二度中渡シへ乘出し。川を隔て相戰ふ。終に道三討負テ。同廿日の暮方に城田を差して落ッとする所を。小牧源太長井忠左衛門。林主水追掛渡合せ首を討けり。證據のために鼻をそひて取けり。義龍實撿の後は長良川の邊に捨ッ。小牧源太是を土中おさむ。今齋藤塚と云ふは是也。此小牧源太は本國尾州小牧のもの成り。幼少より道三傍近ッつかわれけれとも。非道の事數々にて。恨を含折節なれは。人多キ中に進て道三を討けれ共。流石君臣のよしみも捨かたくや思ひけん。角念頃に首を取おさめける。義龍は永祿四辛酉年五月十一日病にふして終に逝去せられけり。日頃禪法に歸依して心源を明らめ玉ひけれは。辭世の偈をそ致されけり。

三十餘年守護人天　刹那一句佛祖不傳

法名を雲峰玄龍居士とそ申ける。未ッ三十餘にて盛の花をちり行事あわれにそ覺へける。此折節を伺ひて。尾州織田信長大軍を催して。稻葉城へ押寄せ。瑞龍寺の西岐阜の町口にて大キに相戰ふ。織田一類大分討死しけり。其骸骨取集て一の塚を築て。織田塚と申けり。雨抔降り天氣のくもりける節は。土中より凱歌を揚ける間雲日と申禪僧を賴。頌を作て塔婆を立テ念頃に追善をなしけれは。此志にや感しけん。其後怪敷事も止けり。此合戰和融して止けれ共。猶信長心には種々の計略を回し。同七年九月牧方の軍勢を率して押寄。稻葉山の東西南北を放火し。已に攻入ッとせし所に。西

方三人とて齋藤の下にて宗徒の不破河内守。安藤伊賀守。氏家常陸介。稻葉伊豫守抔龍興にたかひて。信長に內通して。角ては城をかゝゑん事叶かたしとや思ひけん。扱を入。城を明て江州へ落行キ。淺野備前守を賴居て。永祿より天正の頃迄所々の合戰皆兩將に從て軍功有り。終天正元癸酉年八月八日。越前敦賀合戰に討死しぬ。此にて岐阜城主齋藤三代斷絕しぬ。

岐阜城主織田三代之事

永祿七年九月朔日。龍興敗亡の後。同月中旬ゟ信長當城に移り。後に江州安土の城を搆て。當城をば嫡子秋田城之助信忠に讓り。自ラは安土に居城し玉へり。信忠父子共に天正十年六月二日。京都に於て生害し給ふ後。岐阜中納言秀信とて。信忠の嫡男おはしけり。抑織田申は。人皇五十代桓武天皇第五の皇子をは。葛原の親王と申けり。此皇子より十三代の孫。新三位資盛に十二代。織田三郎敏定と申けるか。其頃尾州の守護を武衛と申ける。三郎敏定武衛義敏の臣として。甲斐朝倉武衛の三職とてよはれける。文明三年甲斐朝倉を詰ヒ。義廉を討て。其地を押領し。終に又甲斐を殺ス。同五月義政越前を朝倉に賜。尾張を織田に賜イケル。是より次第に威勢つき。敏定四代の孫信長代には天下を知られけり。然共官大納言までにして。征夷將軍の宣命はなかりけり。是に依て將軍の數に。秀信父共信長は入さりける。信長にあまたの兄弟あり。男子十二人。女子四人おはしけり。息男十一人。息女六人までおはしける。信長は天文三甲午年五月廿八日に誕生。童名を吉法師と申けり。大納言從二位右大臣まて昇進し玉ひて。天正十壬午年六月二日。土岐明知の光秀か爲に生害し玉ひぬ。信長は京都本能寺にて生害し。信忠は二條御所にて生害

信長行年四十九歳、法名摠見院殿泰巖大居士。信忠行歳三十六歳、法名大雲院仙岩大居士とぞ申ける。信忠生害之後。信秀後見として信忠の弟（信長ノ三男）三七信孝當城に居られしか、越前柴田修理の亮勝家に與せらるゝによつて、天正十一癸未年二十六歳にして生害し給ふ。信孝尾州内海にて生害の後は、三位法印一路の息大和大納言秀俊、（秀吉甥美濃守秀長養子）其比三善少將と申けるか後見にそ付られける、太閤秀吉朝鮮退治の時節、肥前の名古屋發向、此所にて病をおこし卒し玉ふ、此後は前田徳善院法印玄以に何事も御合されけり。秀俊の息女二人おはしける。森美作守。毛利甲斐守の室と成。男子はおはせさりけり。然處慶長五庚子年石田治部少輔三成逆心に依し、大神君六万九千三百騎を率して。七月廿八日江府を御出馬。先陣福島大夫正則、徳永法印。各々駿馬を賜り。彼二人は美濃國の案内者なれは仰付らるゝ所也。岐阜中納言信秀卿も。始は大神君の御供の人數にて有けるか、石田方ゟ一向頼み申故。木造左衛門尉、百々越前守。如何有んと蜜（マヽ）談しけるに。木造百々此義然るへからす。已に關東の御人數に替りなから。今更變改せられん事。後代の嘲も如何成と様々異見を加へて見れ共。諫言を入玉はす。然らは徳善院の指圖を以て。何方へ成共御返事有へしとて。木造百々は宿所に歸り。上洛の支度を致しけり。夜に入て樫原父子か勸に依て。三成方よりの使、殿中へ召され、御盃を賜り。樫原を召具せられ、江州澤山へ參玉ひけるを。木造百々夢にも知らす。京都におひて。玄以法印の差圖を請歸る所に。三成人を出し。中納言秀信卿。是に候間。入來れよかしと申。兩人仰天し。是非なく澤山へ立寄けり。是より御敵の色をそ立られける。去程に關

東勢。八月十四日清須に着て。川越の評議をせられける。池田三左衛門尉輝政、淺野左京大夫長成。一柳監物直盛。有馬玄蕃頭。松下兵衛尉。山内對馬守、堀尾帶刀、彼是七人。川上の河田黑田の渡を越らる。福島大夫政則。長岡越中守。京極侍從。黑田甲斐守。加藤左馬介。藤堂佐渡守。田中兵部少輔、井伊掃部少輔。本多中務少輔は、川下の小越の渡ヲ越へんと相定ル所に。輝政の臣伊木清兵衛。村山織部杯當國の案内者なれは、相圖を待ス。岐阻川の先陣を致ける。秀信卿は川手の閻魔堂まて出馬也、佐藤六左衛門。木造左衛門、百々越前守。飯沼十左衛門。武者大將にて五百騎計上加納へ馳向。足輕千計鉄炮を揃へて相戰ふ、直盛ノ臣村山茂左衛門大塚權大夫。岐阜武者藤田權左衛門と戰て首を取、飯田勘平大塚ヮ組ンて大塚を打。池田備中守鑓を合テ勘平を討。大神君感狀を賜。武市忠左衛門。前田半左衛門討死ス。武市は一柳參生捕。津田藤三郎。兼松久四郎。赤緦にて渡合勝負なく引退ク。岐阜兵大半討死ス。佐々彌三郎。使番にて新加納より馳戻。敵の大軍岐阻川を越由を申ス。敵は一戰利を得て。川手の荒田橋迄責寄せる所に。百々越前守。飯沼十左衛門相戰ふ。又上加納にて瀧川半市。中島傳左衛門以下。五人返合々戰ふ。廿三日未明に諸軍勢岐阜の町口まて押寄ぬ。正則の臣福島伯耆守。梶川新助、先を馳て功名有。津田藤三郎山下御殿の前にて多勢を與て諸人の眼を驚ス。福島正則手勢百餘人。七曲口より責入、京極侍從は百曲口ゟ攻上ル。川原水の手。井川通は本城へ責口遠キ所也。此手は池田輝政上らる、此口は當山一の節所也。伊木兵衛。村山織部。乾十郎左衛門。其外當國武士多けれは。案内ヲ能存ける間、難なく殿守の下迄攻付ヶけり、正則の臣大

橋茂右衛門。星野又八郎功名あり。城の兵津田藤三郎。飯沼十左衛門、大岡角助。伊東長八。和田孫太郎。武市善兵衛。大野善八郎。木田彌た衛門。大に相働、福島山の下にて見物し感心せらる。上格子前福島内寺島□衛敵と組て首を取、角、本城近ヶ責寄ければ。秀信卿生害あるへしと仰ある所に。木造以下諫中に依て降參し給ひけり。池田輝政昔臣のよしみを思ひ、秀信卿をとらへ、上加納の一向宗の道場へ入奉る。供武士小姓以下十四人。赤はたかの躰にて警固の武士は白刃をよこたへ、前後打固。岐阜ゟ上加納迄の道すから。哀といふもおろか也。扨圓德寺にて。輝政の士乾十郎左衛門。村山織部。伊木清兵衛左右を取廻シ。御鎧をぬかせ。金瓢簞の馬印。大身の持鑓一筋。鎧一兩。甲一刎。此寺に殘とゝめらる。夫ゟ尾張國知田郡へ送り。此所より御船にて紀州へ送参らせ。高野山に入玉ひしか。同月晦日病死し玉ひけり。行年廿壹にておはしける。息女一人有けるなは。江州佐々木六角右兵衛大夫義郷の室に遣され。氏武の母にてをわしける。敵本丸へ責入ンとする時。料紙を召され。此間隨身の者共に感狀を賜けり。誠に年久くおはしけるか。此節にのそんて。志の程諸將も感涙を流されけり。格子の下にて中島傳左衛門。布川三郎兵衛、齋藤新五相働。中島は討死ス。長岡藤光内澤井方八首を取、正則内吉村又左衛門先陣に參て新櫓を乗取　同家の臣渡邊彌兵衛。長尾隼人屏際まて押詰ル。隼人か家人内野平左衛門一陣に近テ二丸迄攻入。此外見聞せる事記スに遑あらす。信長永祿七年入城より以來、慶長五年に至迄。父子三代年暦凡三拾七年。是を織田三代と號。此ゟ城主斷絶訖ぬ。

池田輝政の事

源三位頼政卿の弟に。左馬助泰政とて有けるか。母方の伯父紀朝臣奉貞(マヽ)の子成て。性を改名を奉政(マヽ)と改。美濃國池田の庄は。外祖の領地なれは。此所に住し。池田藏人とそ申ける。末に至ては姓を源と改めけり。勝三郎源信輝代迄。累世池田の庄に居られけり。始信長に仕へて信の字を賜り。後に義輝公に見へて。輝の字を賜て信輝と號。後武儀郡志津野城におはしけり。其嫡子を紀伊守之助。（藤九郎政教トそ）申也。二男三左衛門輝政とそ申けり。天正十二年の二月。織田信雄と秀吉と。尾濃相戰ふ時。信輝入道勝入。森長一（武藏守金山ノ城主）大に相戰ふ。長一一陣に進て鉄炮に中テ死ス。法名を鉄関秀公と號。永井傳八直勝。生年廿八。白ラざいを執て勝入と戰。終に勝入をつき殺。安藤彦兵衛直次。勝入の息池田紀伊守之助と戰て之を斬。永井傳八後には右近と改らる。安藤彦兵衛後には帶刀と申てけり。共に大神君の御幕下成。長一首をは本多八藏取。本多は大久保七郎左衛門與力也。勝入二男三左衛門輝政。信長の仰に依て。岐阜山に殿守を揚ケ。要害の惣城を構。山下の屋敷を拵。新橋を造せらる。其後は三州吉田の城主に成。慶長十九年の大坂陣の節は。播州姫城を賜て居住シ夫より淡路に移り。備前國を賜て岡山城に住せられけり。勝入。其嫡紀伊守之助は當國大垣の城主にて有けり。紀伊守之助の室は齋藤義龍の女なり。

一説ニ長井隼人女なり猶可（考脱カ）

大桑落城之眨

土岐はりてのりたちのせぬ四の袴
みのはやふれて一のなりけり

天正十歳十二月。頼藝御歳八十有餘メ世をさり玉ヒヌ。法名。

東春院殿文關宗藝大居士

本巢郡岐禮ニテ區終

土岐事端之事

抑當國は。清和源氏の嫡流として。代々禁内衛護の名家にして。武名を還する者也。攝津守頼光に。三世の孫多田美濃守國房。始ァ土岐郡に住しァ夫以来。五代相續ァ當國に居れけるか。光衡代に美濃の守護職に任し。始ァ氏を土岐と改めしより。子孫永く當州の住人と成。繁昌する事筆に及かたし。先其有増を云に。光衡の下にて。淺野三栗二流に分し。又其子光行か。小里。萩原。猿子。郡。戸部。深澤。氣良。小宇津。石谷。芝居。相原。大行を嫡流として。饗庭。郡家。小彈正。八居。多治見。東池田。原。蜂屋。久尻。金山。土居。廿二家にそ分レける。舟木。福光。外山。今峰。北方。小柿。荒川。井口。穗保。麻生。明智。黒俣は頼貞より分れ。西池田。嶋田。揖斐。山尻。世安。稻木は頼宗の子孫なり。明智。久々利。守田。陶器所。肥田瀬。羽崎も同流也。萱津。鷲の巣。須原。西郷。日原。月海は頼忠か分レケル。大桑。佐良木。長山。本庄は成頼より分レタル。滿喜村。梅戸。揖斐。鷲ノ巣。菅沼。一色も同末にて分かれける。かくのことく子々孫々繁昌して。光衡か頼藝迄十一代。年曆凡五百有余歳。覺を並へて住ミけり。光衡より頼員迄はさせる威勢もなかりしか。頼員尊氏の代に當國の守護職に任せしより。次第に威光輝キ。仁木。細川。土岐。佐々木。今川。荒川。畠山とて。其代の高家として。天下の諸大名崇敬する事舉て算ふるにいとまなし。然處に成頼と申は。饗庭備中守ノ其子にて有けるか。左京大夫持益に子なけれは。齋藤利永入道宗甫居士はからひとして養取。持益の家を嗣セケリ。持益にも嫡子持兼とて侍りしかと早世せられけり。成頼に子供あまたおはしけり。嫡男の美

体法師元服して頼繼と申けり。東山殿に見へ奉り。政の字を賜テ後に政房と改められける。其弟を大桑兵部大夫定頼。三男を佐良木の三郎尚頼とて。同腹の兄弟三人おわしけり。四男四郎元頼とて。當室の腹にて。別て成頼の愛子なり。當室の勸によつて。長子政房を押込。元頼を家嫡に立ンと思ひ。齋藤陪臣。石丸利光を語らひて。明應三年十一月。大寶寺開堂に事よせ。政房幷齋藤公性僧都ヲ討ン謀しか。事已に顯れて。終に本意を遂ス。元頼幷石丸利光以下悉ク自害シ畢。同五年の秋。池田の安國寺にて剃髮し。米田庄に於テ終り給ふ。其子政房と申は。當家中興の名將にして。上を敬ひ下を愍ミ。神を尊ミ仁義を專とし給ひけり。息男多ク持ける。長男を太郎盛頼と申ける。其生レ付キ萬人に勝テ。聰明叡知にメ知仁勇の三德をそなへたる勇將ナリ。永正十四丁丑家督となる。

同十六己卯年父政房におくれ給ふ。其頃京都松波庄五郎ト云商家。油ヲ賣テ長井か家に來りけるか。亂舞音曲に達しけれは。長井吹擧にて政房へも見へけり。頼盛常に申さるゝ何樣此者かつらたましゐ尋常にあらす。大事を企ントスル相有り。君子ハ親ムへき者にあらすとて出仕を停止せられけり。庄五郎是を深憤り。盛頼の弟頼藝とて。其質生なから三軍の師をも墓程の勇將メ。能六藝に達シ。兄盛頼にもおとり給わぬ器量なりしか　未タ年若クたはしたる故。諸事風流成るを好み玉ひける故。庄五郎幸と是に便りて。旺々頼藝を勸メテ。盛頼を責亡シ。頼藝を家嫡に立ンとたくみける。頼藝も血氣の勇者なれは。兄を討て惣領職を領せんと思ふ心つき。卽大軍を催して。川手の城を責させけるに。俄事なれば遠路を隔テ幕下の者共は此事夢にも知らす。一人も來ラス。せ

んかたなく城を明て。盛頼は越前國朝倉方へ落行玉ひけり。其後惣領職と成玉ひけり。是より庄五郎次第に出身シテ。享祿三年正月長井を殺しテ。自ラ長井新九郎と號シ。天文十一年に頼藝ノ攻テ國を奪ひ。自ラ齋藤山城守秀龍と號シ。頼藝弟を三郎治頼。四男は伊勢梅戸の養子として。民部大輔光高とて申ける。五は揖斐五郎光周。六は鷲巣六郎光敦。七男七郎頼光。八男は八郎頼香とておはしける。三郎治頼は。常州信太の庄。江戸崎の城主なり。七郎頼光。八郎頼香をは。秀龍絆として契を厚ウして。潜ニ謀を廻して。兄弟共殺シ畢ヌ。兄頼光は其心極めて悟におはして。殺スへき便りなけれは毒害し。弟頼香をは羽栗郡無動寺村光德寺ニ於テ生害させまいらせけり。女子壹人おはしける。江州佐々木六角判官義賢の室と成玉ふ。盛頼後には頼純と申けるか。天文十六年齋藤退治の爲に朝倉を催して。二度美濃に來り。山縣郡大桑地村に於テ終り給ふ。法名玉峰元珪と申ける。頼藝にもあまたの息男おはしける。嫡子ヲ太郎法印と申ける。初猪法師丸と申。父頼藝。愛宕山權現を信仰シ給ふ故に。猪は彼御神の使者なれはとて。童名に付られける。其生付き穎悟にして。伯父頼純に。姿心共に露たかわぬ器量にして。國中無雙の美男なり。秀龍常に頼藝の寵愛甚敷にほこりて。無禮數度に過たり。或時稲葉か舘におゐて。太郎法師を初メ。一門之旁幕下の少童共數輩的を射けるか。秀龍出仕之ため馬に乘て此前ヲ無禮に通りけれは。太郎法師。并小里孫太郎。原彌次郎。蜂屋彦太郎。其外小人數十輩的矢を以て。殿中まて追入けり。秀龍太郎法師に好色にして。折々艶言を通しけれ。主從の禮を忘ルニ。奇怪のしかた法に過たりとて。殿中廊下に

して。出仕の歸ルさを待かけ。傳の村山越後か末子市之丞とて。未タ若輩なる者計召つれ。夜に入テ歸りけるを。くらき所より只一討にと切かけ玉へとも。秀龍さうなき。劍術の達人なれは請流シ。ほう〳〵迯て歸りしか。つく〳〵心に思ふよう。角て此人を差置なは。行末の大事たるへし。速に失なわはやと思ひ。賴藝に樣々と讒言を構て申けるは。太郎法曹司。揖斐五郎殿と心を合。叛逆の企テ有。御曹司には未タ御若輩に候得は。何心もおはせさりけるを。揖斐殿の沙汰として。御曹司を大將とし。御謀叛を思召立。御世を簒イ玉はんと結構のよし。言葉を盡し讒シける。賴藝も不審リ思召けれ共。流石に兄弟父子間。重テ其沙汰にも及はす過玉ふ所に。揖斐五郎參り玉ひ。去比鷲巢六郎を同道せしめ。此地より瑞龍寺へ詣せしむる所に。鳥羽の新道に於テ。秀龍に參逢ふたるに。

齋藤馬に乘りなから禮義にも不及。横あひに木道通馳せ過候故。頗奇異の曲者かなとて。六郎諸鐙を合テ追かけ侍りしか。山田館の邊にて見失侍りぬ。是のみならす太郎法師をも常になひかしろにし。無禮中々詞に伸かたし。此逾（マヽ）御寵愛にほこり。往昔の凡卑なりし事を忘れ。御家嫡を始メ。一門の面々に法外の不禮を働候事。去迚は口惜キ仕合に存ル處也。只願くは太郎法師我々に給テ。彼齋藤か首を刎。幕下の懲惡のいましめなさはやとそ申されける。賴藝とこゝの返事にも及ひ玉はず。すはや秀龍か申處に僞りはなかりけり。何にして太郎法師を殺。光親をも亡ほさはやとそ思ひ立られけるか。近臣林駿河守。杉山刑部丞。佐合修理以下申けるは。往昔ゟ讒臣の言ヲ信シ。御兄弟御親子不和になられ。後に悔み玉ふ事是多し。御生害の後。いかに悔思召も甲斐あるましく

候と。達々諫申ける故。暫思ひ止り玉へとも、猶秀龍遁するに依テ、ひそかに太郎法師を秀龍に押殺玉ふ由聞ければ、太郎法師の傳。村山越後守　國嶋將監　中嶋監物迎イ取　越後入道か村山の舘に入參らせけるか、秀龍此事を聞こ賴藝の仰と僞りて押寄打ッとしけれ共、三人の者共頗勇士なれ、鵜飼山に陣取テ。敵を廣野に引請大に相戰ふ、揖斐五郎。大妻與左衛門に原紀伊守。石谷播磨守。少々馳來はり、數月合戰に及處に、尾州織田信秀　頃日沙汰聞及はれ。父子兄弟間和睦させしめんため、川手迄來られしか、此事を聞て陣頭にかけ來り、兩陣かけ廻り異はれければ、其日の軍は止みにけり。角テ賴藝に申て、兩方共に陣を引せられけり。其後江州佐々木定賴は。太郎法師母方の祖父なれは、便りを以此由を告知らせ、越前朝倉義景も叔父なれは呼寄せ、父子兄弟の和融をは致されけれ共、然共秀龍か所存計かたければ。太郎法師をは越後入道か元にそ預置ける。齋藤も向後の爲を思ひければ。いかにもして失はやと思ひて、折にふれて讒ける間、賴藝も猶不審はれ玉はぬ内に、道三大亂を起シテ。賴藝も國を出玉イぬ。此合戰に太郎法師一番に馳付玉ひ　村山。中嶋。國島抔。殊の外相働。敵あまた討取ケリ。揖斐五郎も早馳來り玉ひけり。是ニ依テ賴藝も色なをらせ玉ひ。五郎光親も太郎法師も勘氣を免されけり。道のり遠ければ　鷲巢六郎は其日の暮方に馳付玉ひ、賴藝の跡をおさへて岐禮迄落させ玉ひけり。二男次郎法師と申けるは。兄太郎法師勘氣之後は家嫡成玉ひけり。太郎法師をは。尾州織田備後守信秀烏帽子子として小六郎賴秀とそ名乘らせ玉ひけるに。二男次郎法師元服の後。左京亮賴師とそ申ける。三郎は早世にて。女子壹人おは

しけり。四男四郎法師。後四郎左衛門と申。五男は五郎法師。後に五郎左衛門と申けり。太郎法師後に宮内少輔頼榮と申けり。子息あまた有りケルカ。長子を太郎法師元服して。越後守光義と申ける。光義初を政義と申ける。頼榮には下腹也。父頼榮村山越後入道か家にして生長成けれは。其恩義を忘れましきためにとて。越後ノ受領をめされけり。二男は小次郎後織部とそ申ける。中頃は三左衛門茂頼と申けるを。外祖父稲葉伊豫入道一鉄携テ。足利將軍義照君に見へ奉せ。忝も御諱の字ヲ賜リテ。織部照頼とそ改メラル也。男をは小二郎と申けるを。一鉄養子として義照君へ仕へさせ。稲葉靱負佐頼永と申。後勘解由良頼と改メけり。四男は又次郎元服の後は榮興と申けり。其後又改名掃部助光榮と申けり。五は女子石谷右京亮源光廣の室也。六モ女子ナリシカ。某の室トナラレケルカ知ラサリキ。扨左京亮頼師ノ嫡男ヲ。二郎法師ト申ケル。後ニハ左馬介トゾ申ケル。二男ハ是ヨリ山本淨信カ説ト付入ヌ。縫殿助トソ申ケル。左馬助嫡男ハ内匠助ト申ケル。内匠助長男ヲ出羽守。二ヲ兵庫助トテ。大樹の幕下ニ仕へ奉テケリ。頼師後ニハ見松齋□ト申テ。京都ニヲワシケル。天正十年ノ冬。宗藝臨終ノ時。累代相傳之旗幕大刀系圖旨宣命御教書其外軍記等迄見松齋ニ讓レラケリ。四郎左衛門。後ニ道菴ト申ケル。其子四郎左衛門。代々紀伊亞相頼宣卿ニ仕へ奉リ。後ニ宗見ト申ケリ。五郎左衛門後主水ト改メ。法名ヲ久安ト申ケリ。其子も又主水ト申ケル。主水ノ嫡子ヲ市正ト申。其子ヲ大膳亮ト申ケル。各大樹ノ御幕下ニ仕へ奉ケリ。縫殿助ノ嫡子ヲ九左衛門。其子ヲ甚右衛門ト申ケル。代々尾州ニ在テ。亞相公ノ幕下ニ仕へ奉リケリ。土岐ノ

氏族多シトイヘトモ。今世ニ有所ノ者ワ庶流ニシテ正流ニアラス。蜂屋石谷ノ正流大樹ノ幕下ニ有リ。又石谷某井伊掃部頭直孝ノ家ニ有リ。妻木モ明智ノ一家ニテ。嫡家長門守忠頼ハ。大樹ノ御幕下ニ有リ。原ノ正統隱岐守久瀨關ケ原ノ合戰ニ生害シテヨリ。其子孫當國池田郡東野六ノ井に蟄居せり。又松平安藝守綱長公ニ仕ヘル輩モアリ。庶流ノ分レ。中務丞政秀ノ末森美作守長政ノ家來ハ。成瀨隼人正ノ麾下ニアリ。小里正統和田助右衛門某ノ子孫ハ松平丹波守光重ノ家ニアリ。滿喜ノ正統道鉄子孫ハ戸田釆女正ノ家ニ有リ。宮內少輔頼秀ノ末は池田三左衛門輝政家松平加賀守利綱ノ家ニ有リ。此外彼氏姓ヲ稱スル輩繁多ナリトイヘモ。僉傍出ノ系メ信スルニ足ス。余カ先祖修理亮彼家臣トメ。歷代隨逐スル故、其見聞スル處ヲ筆ニ記シ。後代ノ爲ニ貽シ侍リ。余又近代ヲ書加ヘ。此記ス所ノ外嫡家正統ノ家モ多カルヘシ。尚重テ考載ヘキナリ。

延享四丁卯歲七月寫之

以宮內省圖書寮本謄寫校合畢

合戰部四十七

兼山記

齋藤大納言之事

一濃州可兒郡中井戸ノ庄雁山ト申スハ。天文ノ初齋藤大納言シツラヒ給ヒ。暫ク居住ス。山高メ雲聳エ。前木曾川ノ流幸ニ要害ト成。南ハ眼精逕尾陽三遠。霞浮碧雲前山遮。是亦敵謀便在。大手ハ岩廉特萬木根並九曲成細道騰ノボル事八町也。搦手千樹生茂。深山霧暗。案內無テハ山ノ方角難知。寄口一方也。寔隣國不雙名城也。抑此大納言ト申ハ。生國不レ成ニ分明。當國岐阜ノ城齋藤山城守道三トテ。其比近國ニ威ヲ振フ人ノ連枝ニテ有ケル歟。不審。大納言ノ名モ官モ命號計非ス。山門三井寺抔ノ見喝食等。加樣ノ名多童名ニテハ非スヤ。其子細ハ齋藤山城守連枝ノ內。出家ノ聖在山門登ルト聞。其後山門出。再ヒ弓箭ノ家ニ立歸ト云傳。此人ノ繪像。淨音寺ノ什物ト成テ在リ。髮ヲ亂シ鎧ヲ着。床机ニ腰掛居ル所有レ之。讃ヲ見レバ才德勝タルハト見タリ。禪學專トシ直指人心之的傳ニ至ル。戒定惠之三學ニ通達。圓頓止観眼ニ晒ス入定之床ニ於テハ。大日之奥藏ヲ究。歌管絃之達者。大刀早業打物取人ニ為レタリ勝レ。其比近隣ニ久々

利士岐惡五郎トテ。大力之若武者有リ。骨肉逞大男也。武勇人勝テ今辨慶世之人稱レ之。大納言時々交會。或時惡五郎鷹之城ニ來。大納言出合。城中ニテ對面ス。大納言云。貴方兼大力之由聞爲レ及。是御覽セヨトテ、傍松之木二尺廻有レ之、取撚曲、大納言之撚松トテ、明暦之比迄有レ之。惡五郎驚タル氣色ニテ歸。此近邊ニテ後迄我敵ト可レ成人也、何トソ謀ヲ廻可レ討之心肝膽ニ通リ隙窺待之、心籠時節期漸秋最中之比。鷹之城ヨリ使者以申入タル旨ハ。久々利之山之紅葉色ヲ増。殊今晩月晴可レ申。御來駕奉レ仰云遣。扨用意搆厠壁ニモ不レ爲、障子拵。其影侍共隱置。大納言來給時。障子越ニ鑓ニテ突殺シ相圖極待爲レ居。大納言運盡。早速來對面シ。四方山之物語リ有。奇菓珍酒數盡遊興有。夜陰ニ及月見之亭ニ入。座敷亂醉ニ及。大納言燭ヲ持刀右ノ手持厠入時。隱爲レ置人數前後從ニ左右ニ以レ鑓指通。終ニ首ヲ討ツ。大納言者刀モ拔ヤラスシテ討ル、誠ニ開ク猛士モ終ニ謀ニ落テ討ダリ夫ヨリ惡五郎近鄕威振ヒ勢日々加ル也。

森家之事

一爰ニ清和天皇七代之末。八幡太郎義家之六男源義隆ヨリ森氏トメ相續、其子森ノ冠者頼隆、其子伊豆守頼定。森太郎義泰ヨリ後。弓箭ノ家雖、保其名世上ニ觸事ナシ。永祿ノ初。中井戸ノ庄雁山ヲ信長卿之下知ニ依テ居住ス。森越後守可勝源氏ノ末葉森氏之嫡々也同國中島郡蓮臺ト云所ニテ生レ給。八十餘歲ニテ雁城ニテ果給フ。其時ヨリ此城兼山ト名ク。越後守代ニ至リ改。凡雁ハ風ニ驚者也。故改レ之云云。子息三左衛門尉可成。信長卿ニ仕ユ。忠功他ニ異也。信長記詳也。元龜元年九月十九日。朝倉淺井勢ノ押ノ爲大將ヲ蒙リ。江州滋賀ニ而討死ス。御

臺所御愁傷不大形。其比父越後守爲菩提一寺ヲ爲シ建立ト而境地ヲ見立。大龍山ト名ケ。造立ヲ營ム事不終內果給。從夫中絕事延引ス。元龜之比迄此寺造立之沙汰無之。御臺所重而思立。此寺ヲ建立。則可成寺ト號。法事如形執行。越後守ヲ大龍ト付給事。九五者天ニ有。大人ヲ見ルト云易ノ心ヲ以。森家ノ門葉飛龍天ニ有カ如クナラン事ヲ思而。名ケ給ト云。三左衛門子共　多有之。嫡子勝藏十四歲。二男蘭丸八歲。三男坊丸七歲。四男力丸六歲。五男仙千代四歲。此仙千代者天正之比人質ニ岐阜之城エ被召置。信長卿不便思召、勝藏ヲ呼出シ跡目之事無相違被仰出。隨分如父忠功ヲ可致。兄弟數多有之ト聞召問。弟共モ呼出可被仕。忝此ニ被仰。兩眼御淚。爲浮給。同三年七月。信長卿勢州長島ヲ攻給時。始而御供被仰付。歲十六歲ニ而爲勝働有之。信長卿御悅喜不淺思召。家來ニ者林新右衛門。同長兵衛。各務兵庫。細野左近。大塚次右衛門。豐前縫九郞。同市之丞。佐中五兵衛。奥村亦八郞。同平太夫。汲田九助。長谷川五郞右衛門。野呂助左衛門。渡邊越中。可兒勝六。其外一騎當千之者多越後守ヨリ隨者共也。一命ヲ塵芥ヨリ輕クシ。骸ヲ戰場拋無二之忠功ヲ爲致トセシ者共也。

信長卿武藏ト云名ヲ被下事

一信長卿天下ヲ掌之內握リ給。內裏修理之爲ニ伏見ニ御座ヲ被居。國々之諸大名不殘上洛スルニ於テ。瀬多ノ橋ニ關ヲ居。家名實名ヲ尋注。可通旨爲タリ被仰、森勝藏家中之面々引具シ瀬多之橋ニ指懸リ給。關守之侍共並出上意之間下馬ヲシ。家名實名ヲ名乘可被通ト云。勝藏聞給。急ニ而候有御兒。濃州之住人。森勝藏ト申者。御帳賴候ト云捨通ントスル處。關

守之侍共馬ノ口ニスカリ。其分ニ而者通スマシ、共上乗打叶フマシトテ、鑓長刀ヲ出番所立騒色メキ通サシト云、武藏見給、元来心得ヌ者共也。乗打トハ何事ソヤ、公方之御前ニテアラハコソ、汝等如キ侍之爲ニ分ト。此勝藏ニ下馬トヤ推參也ト。太刀ヲ抜、二三人ノ首打落シ、諸鐙ヲ合懸通給、關守ノ侍共大勢追懸。大津膳所ノ町口ノ木戸早ク可打ト呼ハル。町人共兩所ノ木戸ヲ打ントス。勝藏見給。夫侍共火ヲ懸ヨト宣エハ。町人共驚キ、木戸ヲ開ク。夫ヨリ駒ニ白泡噛セ、伏見ノ御殿ニ著査ニ御前エ罷出、瀬多ノ事委細言上シ。切腹仕ル覺悟ノ旨被仰上。信長卿打笑セ給、昔五條ノ橋ニテ人ヲ討シハ武藏坊トヤ。汝モ今ヨリ武藏ト名ヲ改ヨト、誠御機嫌ニテ被仰ケレハ。滿座ノ人々實ニ忠アル武士ノ例哉ト浦山シク思ケリ。其年ノ内ニ侍從ノ位ニ上リ。森武藏守長可トソ申ケリ。

[illegible]弟衆公ニ被召出附武州公御働ノ事

一天正五年五月。森蘭丸、坊丸、力丸三人共ニ信長卿被召出。御近習ニ而可被召仕被仰付。其内ニモ蘭丸器量人勝發明ナレハ。御寵愛無限思召故ニ。御側ヲ離給事ナシ。信長卿武田勝賴攻給時。御嫡信忠卿數萬ノ軍兵相添關東エ指向ラル。武藏守手勢引具シ。御供ニ而信州伊奈郡小笠原掃部ノ城エ武藏守取掛攻給。早速城渡降參。旗下ニ成。飯田ノ城押寄。散々戰勝利ヲエ給フ。城乗取首三百餘。信忠卿エ進上ス。高遠ノ城エ取懸。息ヲモ不レ繼谷務兵庫。渡邊越中。豐前縫九郎。同市之丞。細野左近。林新右衛門。同長兵衛。井戸宇右衛門。其外家中一命輕攻戰。此城モ悚スメ落ニケリ。信忠卿御感無レ限。今ニ始ヌ武藏守カ働ト而。御悦喜不斜。御感狀被レ下。則信州

エ四郡、更級高井水内埴科被下。海津ノ城拵住居スヘシト被仰付ケリ。普請ノ營為成就スル處。近邊ノ野伏一萬餘海津ノ城押寄鯨波揚ル。未堀モ塀モ出來セス逆茂木モ無レハ。各外エ打出追捲ツ。火出ル程戰ケリ。野伏共不堪。散々打負引退。追詰々々追討首三千餘討取、信忠卿エ實檢ニ入レ奉ル。御悦喜不斜。則小幡備中。春日周防カ人質ヲ預給。舍弟蘭丸京都ニ有間。各務兵庫ヲ為城代。暫居住、信忠卿者關東平均打納京都エ上洛シ給、悉信長記有。

武州公御上洛之事

一同年六月二日。信長卿明智カ為ニ御切腹有。蘭丸。坊丸。力丸、三人共ニ本能寺ニ而討死之由。早馬ヲ以告來。長可驚給。扨無是非次第也。扨ハ可上京ト而。家中一同ニ被召寄處。小幡備中。春日周防、長可ノ舘ニ來。預置タル。人質御返シアレト。口ヲ揃而申。武藏守聞給。信長卿已ニ討死為給ハ。我ヲ早背ト為見。我則信長卿也。エコソハ返間敷ト大怒而宣ハ。兩人ノ者共扨ハ鑓先ニ而可請取。路次ニ而難儀可有。笑止サヨト云捨已ニ立ントス。近習ニ在シ渡邊越中。井戸宇右衛門。可見勝六。膝ヲ押エ立揚リ。ヤア鑓先ノ勝負。旁者定而兼而手並ハ為知如也。不入事ヲ云ンヨリ。早歸リ私宅ニテ上洛ノ供ノ用意可致睨ミ付而云ケレハ。此威勢ニヤ恐ケン。一言モナク座敷ヲ立ニケリ。武藏守仰ケルハ。早ク首途セヨトテ。六月十一日海津ヲ立テ。城ノ近邊ナル千熊川ニ打望。向ヲ見給エハ。混甲ノ武者。二三千騎。馬煙ヲ立而待懸タリ。大將見給。定而小幡備中。春日周防等、方々ノ野伏共ヲカタライ相待ト見ヘタリ。慢訛スル十陣ノ備可致被仰、先井戸宇右

衛門殿ヲ仕レト被仰。畏候ト云テ鑓取。黄糸ノ腹卷甲ノ緒ヲシメ。三尺五寸有ケル十連針ト云太刀ヲ横エ月毛ノ馬ノ太タクマシキニ乗申様打破御通候。跡ノ儀御心易思召候エト申。此宇右衛門ハ心剛シテ力人ニ勝レ。軍旅賢士也。故武藏守モ殊頼母敷思召。扨先陣ハ林新右衛門二百五十騎。二陣ハ豊前縫九郎父子二百騎。三番渡邊越中百五十騎。四番大壽數百騎。五番佐中五兵衛百五十騎。六番細野左近三百餘騎。七番三町隔テ井戸宇右衛門百五十餘騎。靜ニ馬ヲ打セケル。川向ノ野伏共武藏守ト見テ。則鯨波ヲ作リ。鑓衾ヲ作而待居タリ。先陣林新右衛門少モ猶豫セス。馬ヲ川ニ乗入レ。後陣モ續テ渡ス。待居タル野伏共半町計退テ。入亂テ相戰。林新右衛門馬ノ驅場吉故。一當々テ通ケレハ。野伏共大形ハ士民百姓ノ歩行立也。荒馬ニ驅立ラレ。軍形亂タル所。二陣入替テ驅破ル。其時新右衛門驅拔ケレハ。三陣モ亦打破ル。猿ノ馬場迄ノ内。野伏共爰彼逃隱。大將御馬廻衆矢一筋モ不射出通給。井戸宇右衛門跡ヲ慕野伏等モ無之故。鑓之鞘ヲモ不脱通ケル。寔無本意體也。其日ノ泊ニテ人質共皆指殺。兩人召具上リ給。

一 道家彌三郎注進附武州公智略之事

一本山ノ宿ヲ過給時。誰トハ不知。編笠着タル男大將ノ御馬ノ前ニテ笠ヲ取捨畏。武藏守御覽。珍シヤ彌三郎。何ノ爲來ルソト宣エハ。殿樣御登ノ事。先達而濃州ニ聞エ。肥田玄蕃ハ大將トシテ。遠山久兵衛。平井頼母。木曾義政。土岐三河守内談ニテ。福島ニテ可奉討。若仕損ハ道ニ於テ以伏勢可討取定テ。福島ニモ可奉討用意可有之。其上御家人ノ内。大森ノ城主奥村亦八郎モ君ヲ奉恨。長谷

川五郎右衛門ト內通致シ。軍ノ用意夥敷候。急ニ兼山エ取掛來由風聞候、御心得ノ爲。是迄伺候仕候ト申。武藏守聞給、能社告知スル物哉。心易被思ヨトテ、家衆內談在テ。馬ヲ早打給、抑此猶三郎ハ本兼山ノ城下ニ在時。馬ノ目利上手成故、時々御呼被成、庭乘抔仕故、念比被仰者也。後御褒美抔賜ト也、扨大將福島著給。直ニ城中エ入、使者以被仰シカハ、木曾驚立出。一禮在而直書院ニ入レ申。暫有テ子息茶ヲ持出ツ、義政長可進。長可不存。扨武藏守子息ニ向、扨モ能器量哉、嫡子カ二男歟ト問給エハ嫡子云。武州仰ケルハ。無心ノ至候得共、我無子、弟共ハ不殘本能寺ニ而討死仕無便候、今度養子ニ仕度ト有ケレハ。木曾聞而畏候、雖然未幼少ニ候、今少養育仕進可申返答有。長可聞給。養子ハ幼社能候。是非此度同道可致被仰、木曾不能辭約諾ス。然ハ此度召連可申。信州ノ人質共ヲ貴殿暫預申度由宣。安御事ト有ケレハ、則人質二人共木曾預。嫡子ノ手ヲ取立出。乘替、抱乘一禮メ出給。義政日比ノ企相違ス。急隱謀ノ方エ早馬以申達ス。勢共可引取了簡有之旨申遣ス、集勢散々引退。武藏守大井ノ宿暫休息シ。木曾カ子息ニ侍二人相添、今度御子息養子ニ申請候、然共道ノ程敵滿々タリ、殊餘リ幼少ト云、自然ノ事於有之、如何存候。先暫預置度候、重而安座ノ地ヨリ迎ヲ可遣旨念比被仰遣、駒ヲ早メテ兼山ノ城エ入給也

御母儀御愁傷ノ事

一武藏守兼山ノ城ニ着給、直ニ御母公ノ御前ヘ出給。兎角ノ一言モ不被仰出、深御涙ニ咽給。御母公立寄。鎧ノ袖ヲ取涙咽給、暫在而如何武藏守、扨モ無是非次第哉、世ノ聞ニ武士程墓ナキ物ハ無、元龜ノ初ニ左衛門殿ニ

後シ時。兎ニモ角ニモ可成ト思ヒシカ共。汝等兄弟五人在故。是ニ慰テ漸年月ヲ經ル程ニ。今ハ成長シ。鎧投掛。弓押張。矢搔負馬ニ打乘出ルヲ見テハ。寔器量ノ者共哉。我子ニ增ル者ハ有マシト。人ノ不持物ヲ持タル樣ニ嬉敷テ。朝夕見上見下詠愛スル時ハ。三左衛門殿ノ事ヲモ忘。月ヨ花ヨト思ヒ。心ナカラモ我ハ果報成者哉ト。人ニモ語。自モ思也。蘭丸。坊丸。力丸三人共ニ信長樣エ被召出。中ニモ蘭丸器量人ニ勝發明他ニ爲越ト聞。武運ノ久シカラン事ヲ神ニモ佛ニモ祈。我百年ノ命モ哉。子孫ノ榮ヲ見タシト願シニ。思ノ外ニ三人者本能寺ニテ一所ニ討死スト聞。在ニモ在レス。共ニ自害ヲモシテ果ナント千度百度思。又或時ハ心ト心ヲ取直シ。御主ノ供仕。花ヤカニ討死スルハ武士ノ面目ト思宥而欲忘共。朝夕人ノ語ルニ付テモ。忘隙モ非レハ。何ノ因果ニ存命シテ。角ハ襟スル事ヨトクシテ。子共ノ方エ參ント。持佛堂ノ如來エ御暇申。一蓮ノ臺ニ迎サセ給ト。日ニ幾度モ心ヲ亂レ共。御事モ登仙千代モ聽テ皈候ハント待侘シニ。夫サエ道ニテ危事有シト聞シニ。無恙參着。適逢事ノ嬉サハ。現共不覺仰ケレハ。武藏守淚ヲ押エ。御歎去事也。雖然生者必滅。會者定離ノ習非可驚給。殊以武士ノ家生。戰場出テ活テ歸ト思者一人モ無之。賞ヲ貪リ。利ヲ思時ハ。名字ヲ穢耳ニ非ス。子孫ヲ斷滅スル事。歷世其家ニ生給上ハ。女性ニテ候共。其理不知給乎。御歎ヲ止メ給。念佛ヲ不怠昔サセ可給。御前ノ御廻向今生ニテハ我等仙千代カ祈禱ト成。未來ニテハ父可成樣。并ニ三人ノ者共。一蓮ノ緣ト成可申ト。樣々諫申。母公聞召。誠昔ノ大聖孔子モ。子ヲ先立悲給ト聞。

文道ノ大祖猶如此。況濁亂ノ末世ニ於テヲヤ。又三人ノ子共最期ノ時。我戀思ケン角可在知ナラハ。念比ニ顏モ見。暇乞ヲモ可レ爲。左ハ無テ被召出嬉ニ取紛。染々ト非爲。別事ノ悔ヨ。討死セン十日計以前。三人共文ヲ爲遣。何モ同文體也。取分テ頃日者頻懷敷思也。此夏ノ內ニ殿樣御下向可有。然者三人共暫御暇ヲ願。其元ヘ參。御目懸侍ント申越嬉サ。今哉々々ト待處ニ。思ノ外ニ討死ト乎。三人ノ者共文ヲ袖ニ入。朝夕戀敷時者。操返詠侍トテ。御袖ヨリ三人ノ文ヲ取出。武藏守爲見給。武藏守モ世ノ理ニ感。深淚咽給。御前伺候ノ侍女房達。皆淚ニ咽ケル。武藏守宣ハ。早奥ニ入。御心ヲ慰申候エト仰ケレハ。女房達御母公ノ御手ヲ取奥入奉ル。其後御剃髮有テ。勝壽院妙迎ト法名ヲ付給。日夜ノ念佛無怠。六親佛果菩提。殊ニハ亡靈可成公并ニ。三人ノ子共一蓮ノ緣ト成給エト。念給事無他。凡無常迅速ノ習。誰此世住果ン。慶長二年八月二日。病ヲ受如眠正念ニシテ。臨終給。妙迎禪尼ノ繪像。今ニ常聖寺在洛陽南本願寺中興開山ト云ハ此禪尼也。

御舍弟衆御吊付肥田玄蕃攻給事

一武藏守仰ニハ。蘭丸。坊丸。力丸。討死シ。殊信長卿御生害。然上者上洛無益也。岐阜ノ城ニ在仙千代ヲ奪取。人多テハ叶ハマシ。宇右衛門一人供仕レ。畏候ト申。下人少々召連。主従六人ニテ岐阜之城ニ忍入給。彼地ニ成シカハ。日暮人靜。唯一人人質ヲ家ニ忍入。傅ニ付居タル各務長助十三歲。仙千代殿十四歲ニ二人共ニ手ヲ取引出。兼テ用意シ城ノ後十丈計ノ谷ニ。大キ成蒲團ヲ張。井戶宇右衛門其外ノ者共卑待。二人共ニ蒲團ノ內エ飛入セ。拔馬乘セ。豆淺ノ渡ニ指掛。川岸ニ望。

淺處エ馬ヲ乘入無難川ヲ越、尾張ノ地着給エハ、夜ハ程ナク明ヌ。夫ヨリ馬ヲ早メ。其日笠山ヘ入給、御母公御悅無限。寔七世ノ孫ニ爲逢心地也。其翌日蘭丸・坊丸・力丸ノ三七日ニ相當ル、葬禮ノ儀式ヲ營、吊ヲ可爲其用意仕レ、此節肥田玄蕃ヲ可攻也。故ハ玄蕃此法事ヲ聞、守護怠在ラン歟、其隙ヲ窺追崩可申。傘テ勢揃ヲナシ。相圖ヲ定可置トテ。六月廿二日ノ早朝ニ。家中ノ面々旗天蓋、其役人ヲ定、僧侶數多引連、葬禮ノ營在。御吊事終レハ、其日ノ申ノ刻計ニ先陣後陣手分シ、木曾川ヲ安々ト乘越、向ノ岸ニ上リ、城山ノ頂ニ登旗ヲ指上給エハ、近邊ノ野伏共、我先ニト馳來、抑此木曾川ノ濫觴ヲ尋ルニ。信州木曾ノ山奧ヨリ流出テ五十里ニテ南濱ニ入。大盤石川中ニ横レリ。傘山ノ嶮事。兩岸共ニ百尺ノ絕壁。流水石ニ激波漲、船筏ノ往返不容易。常暴風水增リ、宇治川利根川十倍蛟龍ノ窟中ト可云、然數百騎一同ニ乘入步兵ハ舟筏或石板乘テ渡。一人モ不流向ノ岸ニ着。夫ヨリ此所ヲ今渡ト云。武藏守悅喜不淺。諸子每ニ手炬一ツ持之、是勢ヲ多見センカ爲也。則諏訪山ニ驅上リ敵城ヲ足下ニ見、鯨波發谷神答テ夥シ。玄蕃不思寄魂ヲ消、一戰不及落行タリ。傘山勢喚聲ヲイタシ追掛落行勢ノ內ニ黑糸ノ鎧ヲ着、塗籠籐ノ弓ヲ持。唯一人踏止リ、散々射、弓強手利テ徒矢一ツモ無、傘山勢猶豫、其時玄蕃ノ家來去者在聞及ツラン。各務小左衛門ト云者也。近寄テ刀之刄ノ程ヲモ心見給エト高聲ニ名乘、其隙玄蕃之助吉田之渡リヲ乘越西ヲ指テ落テ行、小左衛門者勇士也、當國ニ肩ヲ並ル無人。雖然運盡。一戰ニモ不及、敵ニ後ヲ爲見事。時節トハ乍云無

念ノ次第ナリ。

武州公各務小左衛門ヲ被召出事

一此起ヲ尋ニ。米田島ノ内馬串山者。玄蕃之領分也。然ニ武藏守下屋敷ニ望。以使者所望ス。玄蕃立出使者ニ對面シ。御所望相心得候、雖然自分モ下屋敷ノ覺悟ニテ。追付普請申之由返答ス。使者皈テ此旨ヲ伸。武藏守聞給。侍ノ云懸事否ト云條不心得、以之外ニ腹立シ。折ヲ以鑓先ニテ可取ト宣ヲ。御前ニ在シ各務孫太郎聞之思樣、此事若亂ニ及ヒナハ。我子小左衛門ハ賀茂山ノ家人、我又長助共ニ森ノ家ニ在之。親子兄弟敵味方ト成。思ハス可死。如何ニモシテ此事ヲ玄蕃へ通シ馬串山ヲ乞請、殿ノ機嫌ヲ直シ。和睦ヲ儀ヲ繕ハント潛ニ私宅ヲ出、賀茂山ニ行。子息小左衛門ノ宿所ニ立寄右ノ粗ヲ語レハ。小左衛門暫思案シテ。是ハ小事ノ内大事也。先家老肥田兵内ニ相談セントテ。親子打連兵内ノ館ニ行。件ノ子細ヲ語レハ。兵内不敢聞モ。是心得ヌ事哉。人ノ領内ヲ押テ所望センハ傍若無人也。上エ申無迄モ亂レニ及事ヲ恐レ。馬串山ヲ渡シナハ。玄蕃武藏守ノ威勢ニ恐レ。我領分ヲ割分テ。武藏守ニ取レシト。後世ノ人口ニ殘シ事旁以口惜次第也。運ハ天ニ在捨置クヘシト云。親子無是非立皈ル。此意趣ヲ思年月ヲ經ル程、武藏守信州ヨリ登リ給時。近邊ノ武士共ヲカタライ。稲島ニテ可奉討ト巧ミシハ尤也。然ニ玄蕃泣落ノ時。各務小左衛門跡ヲ慕ヒ爲行ヲ。父孫太郎追掛暫ク相待候エ。汝年老タル親ヲ捨何方へ行ク。主人ノ在所尋ント思ハ、、重テ思慮ヲ可廻ト制ス。老父ノ詞雖默一所ニ打連來ルト也。其後武藏守仰ニ。去ル賀茂山ノ軍。各務小左衛門ト名乗弓ヲ彈侍者何方ニ落

タルソ。寔ニ一騎當千ノ侍ト可云。尋出抱ヨト也。孫太郎承リ私世悴ニテ長助兒ニテ候。存命罷有由申。武藏守聞給。頓ヶ呼出給。小左衛門御前ニ出。武藏守見給。汝ハ長助ノ兒カ。玄蕃家ニテハ何程領シタルソ。向後我ニ仕ヨ。幸父弟一所ニ在。譜代同事ニ可思念此ニ仰ケル。小左衛門承。玄蕃ガ家ニテハ纔ニ二百石取候。御奉公仕度候トイヘ共。二君仕申事非本意。兎角世ヲ遁出度仕度ト云。武州公聞召理也。乍去侍ハ亘リ物。親子兄弟ノ中ヲ引分。或ハ古キ好ヲ捨敵トナル事。古ヨリ類多。是皆子孫相續シ。民ヲ惠マン爲也。理ヲ非ニ曲テ我家ニ仕ヨトテ。二百石ノ折紙ヲ盃ニ添テ賜。小左衛門辭無所頂戴ス。達テ御賴在事ハ。御小姓長助カ兒タル故ト也。

大森之城合戰附長谷川彥左衛門手柄ノ事

一森武藏守ハ如鬼神云恐シ。肥田玄蕃ヲ追崩シ悅給事無限。御家中不殘御悅トシテ。傳脊ヲ興。同廿五日ノ朝宣樣。大森ノ城主奥村又八郎。幷ニ上惡戸ノ長谷川五郎右衛門兩人。共ニ城ヲ可明渡。若及異議可蹈潰旨。豐前市之丞。鑓谷宇右衛門兩人被仰付。兩人御請ヲ申。手勢百五十騎ニテ大森ノ城ニ押寄。鯨波ヲ揚。又八郎櫓ニ上リ。定テ兼山勢ニテ可有。今日ノ大將ハ誰ニテ候ソト申。市之丞馬上ニテ軍ノ法故鯨波ヲ發シ候。城ヲ明渡可被申云。又八郎聞。仰無是非候。雖然無下ニ城ヲ明渡申事殘念至極也。是エ御入リ候テ。我等ノ首ヲ取。武州へ入貫檢給エト云。然共志之矢一筋仕覽。暫御待候エト櫓ヨリ飛下リ。若者ニ防矢爲射。奥ニ入物具堅亦櫓ニ走上リ。矢狹間廣々ト開。指詰引詰散々ニ射。矢種ヲ射盡其後切而出。雖力戰。兼山勢者多勢也。入替々

々相戰。味方不殘敗北ス。亦八郎不及力。城ニ火ヲ掛煙ニ紛落行ヌ。勝鯨波ヲ作リ。直ニ上惠戸ニ押寄。長谷川五郎右衞門者兼テ相心得ケン。門指堅高キ所ニ上リ。小兵ニ候得共一矢仕覽トテ。指詰引詰散々射之モ。矢先ニ辟易シテ兼山勢猶豫ス。見之主從十一人切テ出相戰。一人モ不殘打死ス。五郎右衞門腹ヲ切。同名彥左衞門立寄介惜シ。首ヲ深隱シ。屋形ニ火ヲ掛落行ヌ。市之丞打取。首共取爲持兼山へ歸陣ス。鎧立所之矢三筋折掛。直ニ御前ニ罷出旨趣言上ス。武藏守此矢ヲ拔カセテ御覽在。十五束三伏在。此矢誰カ可射問給。鍵谷宇右衞門申ハ。金谷ノ住人長谷川彥左衞門ニテ可有之歟。親類ノ好故同意仕ト存候。寔勇士ニテ候ト申。武州モ長谷川可成ト笑給フ。

牛ケ鼻合戰附渡邊越中拔懸ノ事

一武藏守宣樣。木曾義政ニ一味シ。我ニ爲敵輩不殘可蹈潰。先手分ヲシ可寄ト宣處ニ。梶田ノ城主齋藤新五郎。肥田玄蕃助。長尾隼人。岸勘解由語イ。牛ケ鼻出張仕ル由告來ル。武州聞給。乳犬ノ虎ヲ如犯者共哉ト宣。則御出馬也。肥田玄蕃梶田ニ落行。齋藤カ館ニ入。是非賴ノ由ヲ申。新五郎安々ト請合。心安思召候得本望遂サセ可申トテ。岸勘解由。長尾隼人方へ。以使者御出馬候得ト申遣ス。兩人時刻ヲ不移來ル。新五郎立出對面云。肥田玄蕃。森武藏守ニ追被崩。此所エ落來。差措時者武藏守彌威勢强。我々如ノ者共物ノ數共思マシ。此度一同ニ心ヲ合。武藏守ヲ可討取。同意於有之ハ大慶不過之。無他事相賴。兩人ノ云樣。武藏守近年隣國ニ振威勢如鬼神云恐ル。寔傍若無人ノ生得ニテ。人ヲ人共不思心底也。其儘安穩ニ指置ハ。我々如キ少身者ヲ

ハ何共思マシ。武藏守ヲ可討時節到來此時也。思立給フ段幸也。早速蹈潰、玄蕃殿ニ本意ヲ爲遂申。我々カ綾覺モ安堵可申。急ニ御用意可有ト申。新五郎。玄蕃。不斜悦。近比大慶不過之。以謀可討取。我牛ケ鼻出張シ、城ヲ拵。飛驒川ヲ前ニ當旗ヲ揚ン、然鎌山勢木田島ヘ可寄事不思寄也。其時足輕ヲ出シ矢軍ニ日數ヲ可重。鎌山ノ城ニハ老人女童計相殘歟。蹤ヲ寬長尾隼人ヲ大將ニテ、鵜沼ヲ越。鎌山ニ忍入。中井戸ノ町ニ火ヲ掛。鎌山勢十方ヲ失。敗北スル事無疑。此儀如何ト云。兩人諾。日本一軍法。此外不可有。各可有用意トテ。牛ケ鼻ニ出城ヲ拵。堀ヲ穿。塀ヲ塗櫓ヲ上。擐立。木戸。逆茂木ヲ川意シ。雲霞ノ如楯籠ル。此事早速鎌山ニ聞。武藏守出張シ木曾川ヲ乘越。馬串山陣ヲ取ル。御供ニハ細野左近。林長兵衛。渡邊越中。各務兵庫。武市善右衛門。可兒勝六。同藤助。大塚次右衛門。佐中五兵衛。佐合庄左衛門。波田九助。豐前市之丞。戸田勘右衛門。纐纈新藏。若尾勘九郎。關辰千代。鍵谷宇右衛門。關九郎次郎谷木小十郎。大熊新右衛門。井戸宇右衛門。梅村佐平治。酒向九兵衛。奥村平太夫。多田甚左衛門。仙石九藏。野呂助左衛門。玉木三藏。都合千七百餘騎。既ニ其日未ノ刻成小山寺ノ觀音ヘ御參詣。御供少々召具。山ノ麓ヲ廻リ。岩陰ニ馬ヲ乘離甲ヲヌキ。下人爲持。川水ニテ御手水有之。本堂エ御參リ。靜ニ御祈念在リ。川向ヨリ指詰引詰射之。雖然川ノ面濶キ故皆仇矢ト成。敵味方見之。人間ノ業不。非能大將哉ト卷舌恐シト也。暮ニ及。馬串山ヲ引退。軍者明日辰ノ刻ト諸軍エ相觸。其夜未明渡邊越中。人ニ先ヲ越レシト。未仄暗ニ川岸打望。雖然小雨降。霧滿テ川瀬モ

難見。向ノ岸ノ上。馬ノ足場不分明。猛勇ノ越中モ難叶。暫霧ノ晴間ヲ待。雖然先陣ノ印ニ矢一筋射之。大音聲ニテ今日拔掛ノ先陣渡邊越中。矢一筋參セント云テ爲射掛。霧深故矢坪ハ不知ケリ。此聲驚追々驅來。渡邊爲拔掛シトテ。我先ニト諍ヒ川端ニ望。辰ノ刻計ニ成漸霧モ少ハ晴。向ノ川岸ニ仄ニ見ユ。然ニ緋威ノ鎧ニ龍頭ノ甲ヲ着。黑馬ニ乘横弓ヲ切岸ニ望。高聲ニ肥田玄蕃カ家來。澤田與兵衛ト名乘テ矢ヲ發ス。其矢渡邊越中ノ甲ノ鉢ヲ射削。傍成椋ノ木ニ立。二ノ矢ヲ欲射處ニ。兼山勢鐵炮ヲ連打放シ。澤田ヲ馬ヨリ打落。亦兼山勢ノ内米田ノ住人若尾角右衛門カ放ツ矢。甲爲着武者ヲ射落シ。武藏守御覽シ。角右衛門ヲ則侍ニ被成懸ン所ニ。城中ヨリ混甲ノ兵二百計川岸ニトリ立矢軍ス。越中見兼テ川エ馬ヲ乘入。武藏守見給。渡邊討スナトテ麾ヲ振給エハ。千七百餘騎一同川エ馬ヲ乘入。多勢一同ニ乘入シカハ。水派浪退。一騎モ不流。向ノ岸ニ驅上リ。鯨波ヲ發。此勢ヒ恐。待請シ勢其城中ニ引退。兼山勢續テ攻寄力戰ス。兼山勢百騎計討レ。城中ニハ二百餘人討死ス。殊ニ一騎當千ノ肥田兵内。澤田與兵衛。今西藤右衛門モ討死ス。齋藤モ玄蕃モ續ク勢無之故怺兼。本望可遂トテ。裏ノ門ヨリ落失ヌ。岸ハ蜂屋ニ落止リ。長尾ハ土有知ニ隱ル。齋藤モ肥田モ力盡。其日ノ酉ノ刻計ニ早馬ヲ以。郡上ノ城主遠山左馬助ニ頻ニ加勢ヲ乞。左馬助使ノ急ヲ見雖不得其意。侍ノ賴由ノ一言難默トテ。旗一組ニ二百騎加勢ス馬上ニテ高紲ヲ掛。散ニ懸出ス。兼山勢ハ翌日未明桃田ノ在家ニ火ヲ掛。直ニ城エ押寄。一ノ城戶ヲ攻破ル。二ノ城戶ニテ支タリ。兼山勢乘勝攻戰。城勢不怺。或落。或降。

或自殺ス。齋藤新五郎主從三人落失。肥田玄蕃子ヲ刺殺。夫婦刺違。下人介錯シ。城ニ火ヲ掛ニ己モ自害ス。遠山左馬助ノ加勢。上有知迄馳來リ。煙ヲ見。城ニ早火爲掛。然ル處落人ト見エテ物具シタル侍通シカハ。梶田ノ軍ノ樣子ヲ問ニ。答曰。只今落城ト云。然レハ馳行テ無詮トテ。郡上エ引歸ス。

三ケ所ノ城御手ニ入事

一武藏守。其日ハ梶田ニ陣ヲ取リ。人馬ノ息ヲ休。首共實檢ス。牛ケ鼻ヨリ兩度ノ戰首數四百六十ノ餘也。爰佐々才藏トテ。馬廻ノ侍在リ。首十六ノ內。唯今持參二ツト書付ヲ以差上ル。大將如何才藏。相殘ル十三ノ首。何方在共不知ト宣。才藏承。首ハ取捨ニ仕候。何方ニ在共不存候。定テ此四五百餘ノ內可有之ト申。大將不思議ノ事申者哉。四百餘ノ首ハ各主在。汝ノ取處ノ首證據在ヤ。才藏承。私ノ爲取首ハ。何レモ笹ノ葉ヲ入置候。口ヲ御吟味可被下ト申。大將一々口ヲ爲開見給。申ニ不違口ニ笹ノ葉爲入首十三在。大將權手ヲ打。汝十六ノ首ヲ取シハ古ノ朝比奈。畠山亦ハ義貞ノ家來。栗生篠塚ノ如ク敵ヲ童ノ如ク不思者不可取。定テ陣中ノ捨首ニテ在ン由々何ニモセヨ神妙ノ至ト打笑。御感狀御褒美添被下。佐々ノ名字ヲ改。笹ノ才藏廣綱ト被成。滿座ノ面々感笑ス。翌日蜂屋岸ノ城ニ取掛リ給フ。一戰不及降ル。其勢ヲ合テ上有知山ニ取掛。長尾防矢少々射。城火ヲ掛ケテ落去ヌ。案ニ相違ノ臆病者哉トテ。其日者上有知ニ御逗留在テ仕置被仰付。翌日未明郡上打入左馬助カ城取掛ル。城中ヨリ以使者旗下可附由ヲ申。大將人質ヲ乞。則左馬助別腹之弟ヲ出。請取乘替ニ乘セ勝鯨波ヲ作リ。兼山ニ歸陣四五日之間人馬之息ヲ休。皆

々被召出。此度軍忠輕重ニ隨。知行。感狀。褒美。腰物等被下。下部者手柄之淺深任侍被成。爰ニ井原小市郎ト云者。常御馬添在シ。此度歸陣ニ中井戸之渡ニテ飛損。大小鍔本ヨリ折タリ。南無三寶ト云テ。二之柄ヲ袂ニ入。稍計腰ニ在。面目ヲ失。御馬之口ヲ離。軍勢之跡ヨリ直ニ我家ニ歸ル。女房子共出迎。殿樣御機嫌能御歸陣。御家中衆討死多候ヤト。濃々ト尋問。小市郎物不云内ニ入。女房恠。心地惡敷候哉。無心元ト猶尋問。小市郎云樣。此度御皈陣之時。中井戸川ニテ飛損シ倒レシ時。大小鍔本ヨリ爲折。是貧ヨリ如此。寔無是非事也。諸人ニ笑ル、而已ニ非ス。定テ追付御成敗可被成。如何成過去之業因ソヤ。夫婦之中ニ小次郎ヲ儲ケ。彼レ成人セハ殿樣エ御扶持ヲ願。軍之御供ニモ出サント。朝夕爲願者皆僞事ト成ヌ。我御成敗ニ逢ナ

ハ。御身者又他人ニ嫁シ。小次郎ヲ養育シ。及十歲ナハ僧ニモ成。我跡吊申樣ト語泪ニ咽。女房聞。否夫迄之御科非シ。御身數年之御奉公相勤。親之小市者三左衛門樣御供ニテ。江州テ流失中果給。故ニ御身幼少ヨリ御切米頂戴シ。御恩山如ク也。寔御慈悲之殿樣也。浪人迄ト思也。夫婦小次郎カ手ヲ引。袖乞シテモ可過ト云處。足輕一人來。仰ニ候。急可參ト云。小市郎聞何方エ可參。使之云。御城之落緣之前エト云。使語テ云。御家中衆不殘登城ニテ。唯今御酒宴最中也。小市郎如何樣之御仕置ニ成共。御恨ニ非可存。我身誤有之。不及是非次第也トテ。妻子濃々ト暇乞ス。使之者哀覺テ云樣。今日ハ御悅之日ニテ。如此之沙汰不可有。追付目出度可被歸トテ。小市郎打連テ出ヌ。女房其儘身ヲ淸メ。天照大神宮。八幡大神宮。洲原。白山。戸立。觀音。漢大

寺之藥師如來。殊氏神貴布禰大明神。此度之難ヲ遁レ。二度我家ニ歸リ候樣ニ奉祈。切米出次第御初穗幷ニ御酒ヲ捧可奉ト。伏倒感涙流祈誓ス。小市郎御城ニテ。直ニ御前之白洲ニ畏ル。大將御覽シ。折レタル大小者如何ニト被仰笑給。小市郎赤面シテ。當春餘リニ勝手不如意指詰リ候故。質置候。首度之御陣急御發馬故。請返候事難叶。柄鞘者初ヨリ殘置候ト以信言上ス。大將聞召。不便之次第也。寔ニ金銀者力不及物也。雖然戰場ニ出ル身之。人ヲ可切トハ不思歟。無事ヲ好男哉。此後精ヲ出シ可申迚。祐定之刀。水田之脇指ヲ被下。小市郎夢之覺タル心地ニテ頂戴シ。御前ヲ罷立。滿座之人々寔慈悲成大將ヤト感心シ。暫ハ一言無發者。加樣之主君之爲ニ命ヲ捨ン事。露ヨリ輕シ。御目之前ニテ討死シ。前報ヲ可謝恩ト。一同思シトカヤ。

高木妻木二ヶ所之城降參附土岐三河守最後之事

一巳ニ其年モ暮。天正十一歲癸未正月之規式事終テ。大將宣樣。高山之城主。平井賴母。妻木ノ城主喜太郎兩人ヲ可亡。豐前市之丞。此度ノ大將申付也。若シ加勢有テ及難儀時ハ。賽ノ神ノ峠ニテ狼煙ヲ可揚。加勢可遣ト被仰。二百餘騎被指添。市之丞承リ。雖有次第也。誠當御家ニ楯突者。恐クハ不覺早速踏潰罷歸可申ト。潔ク御請ヲ申上。翌日軍勢ヲ引率シ。兼山ヲ立。平井賴母。世間ノ體ヲ窺見。當國ニ居テ。背テハ可惡トテ。賽ノ神ノ峠迄出テ相待。兼山勢ヲ見。旗ヲ卷。串ヲ拔。降人ニ出。則人質ヲ請取。其勢ヲ合。妻木ノ城エ爲押寄。喜太郎酒肴ヲ調。大將エ以使者申樣。是迄御迎ニ罷出候。御味方可仕ト云。市之丞對面シ。嫡子ヲ人質ニ請取テ。兩人ヲ召

具兼山ヱ歸陣ス。武藏守見給神妙也トテ。兩人ヲ夫々ニ預ケ。高山ノ城林長兵衞ヲ入置給。又久々利ノ城主土岐三河守ヲ可攻。其用意可仕。彼ハ勝レシ兵也。容易ハ難討以謀可討。先使者ヲ遣テ云。其後ハ打絕互ニ疎遠ニ罷過候。近年ハ合戰打續休息無隙。參會ノ席無之。依之少申合候事有之候間。御來入待申トナリ。三河守立出使者對面シ。御口上ノ趣承知仕候。早々參入仕。御相談ノ儀可承事雖本意候。相勞ル事有之。不能其趣。重テ折ヲ以申可通迚使者ヲ皈ス。武州聞給。中々卒爾ニ不可來トテ。重テ使者ヲ遣給。御勞リニ依有之。御出無之段承候。頃日ハ散々ノ取合。御疑心尤ノ儀ニ候。貴殿ノ事主君信長卿他ニ異ナル由。每度被仰出候。此邊ニテ肩ヲ並ル者無之樣ニ御噂被仰。依之廻文狀。自將軍頃日到來。就夫貴殿ノ外相談可仕方無之。御疑ヲ散セン爲ニ。弟ニテ候仙千代ヲ人質ニ進入候也。無底意御出可有之。若夫ニテモ御同心無之ハ。自此方遂伺公可申達トテ。少童一人仙千代ニ拵。乘物ニ乘。侍二人付。使者同道シ。右ノ旨趣ヲ述。三河守心解。承入候御念入兩度ノ御使者殊爲人質御舍弟仙千代殿被指越。近比痛入候。兎角ハ明日遂伺公。可申述トテ使者ヲ返ス。武州此旨ヲ聞。悅喜無限。兼テ支度シテ待處ニ。翌朝人質ヲ爲同道三河守來リ。直ニ兼山ノ城ニ登。武州立出對面シ。奧ヱ請シ給フ。三河守座ニ付。久敷無音ノ段一禮終テ。頃日兩度ノ御使者殊爲人質御舍弟仙千代殿御越痛入候。何ノ疑可有トテ。人質ヲ返ス。武州宣樣。御入魂ノ段近比大慶仕候。御相談者將軍家被仰下ハ。貴邊我等兩大將ニテ。近鄕又ハ他國ヱモ働武勇ニ任セ切取可申。若其內手ニ餘ル者有

之ハ。早淡注進可仕御馬可被出ト也。是見給エト倒セ鋼女ヲ為見給フ。三河守諾シ。兎角ハ貴公ノ御指圖承可申トテ。四方山ノ物語有。酒半ニ成如何事有ケン。吸物不煮シテ出ス。盃終テ暇乞シテ立給。兼テ相圖ニテ近習ノ侍七八人。坂中迄送ル。杉ノ洞ノ大道ニテ三河守一禮シテ馬ニ乘ル時。戸田勘左衛門拔打ニ切肩先ヨリ脇腹掛テ二ニ成ル。供ノ侍拔連打テ懸ル。隱勢一度ニ打テ懸レハ。散々ニ逃去。則三河守ノ首ヲ打落シ。武州ノ實檢ニ入レ。則久々利エ侍大勢遣シ。妻子家來ヲ追出シ。仕置等被仰付。戸田勘左衛門ニ城ヲ預ケ。侍共少々領内賦置給フ。

土岐三河守由來ノ事

一三河守先祖ヲ尋ルニ。土岐大膳太夫ト申人在。其弟ニ土岐惡五郎ト云者。昔建武ノ亂。將軍義詮ニ組シ。八幡ノ合戰ノ時。和田五郎ノ手ニテ討死ス。此惡五郎打物取テ。早業太刀ノ剛ノ者也。生得惡逆無道也。或時都五條ノ橋ニテ。武藏坊辨慶カ跡ヲ追。千人切リヲ思立。往來ノ人ヲ切ル事二三百人。或時太刀ヲ川中ニ落ス。尋之ニ不見。惡五郎深ク祈氏神。心中ニ求。然時鵜一羽飛來。彼太刀ヲクワエ水上浮ヲ。惡五郎希異ノ思ヒヲ成。此太刀鵜ノ觜ノ跡在。則太刀ノ名鵜ノ丸ト號シテ。土岐家永代ノ重寶也。家名モ惡五郎ヲ以通稱トス。三河守亡テ後。此太刀武藏守ノ手ニ渡リ。城ノ鬼門ノ寺。地藏院ニ籠給。依異夢ノ告ニ。大神宮エ納給フ。宮司鹿崎信濃家ニ今ニ有之。三河守未年若成時。惡五郎ト稱ス。夜ニ入狩ニ出鹿ヲ心掛。鵜ノ丸ノ太刀ヲ横エ。弓ヲ持テ唯一人久々利山ノ麓ヲ馬ニ乘テ行。比ハ八月中旬。月明ニメ如白晝。何ニテモ出ヨ。天魔鬼神ノ變化ニテモ微塵成ン

物ヲト。我慢ノ心出來ル。然處ニ向ヲ見レハ。夥敷物ノ何共不知物。自ニ林中ニ出。惡五郎見テ之ヲ欲射伏ト。弓弦切タリ。南無三寶トテ馬ヨリ下リ。太刀ヲ欲ニ拔ト不拔。惡五郎無是非次第哉ト嚙ヲ成ラス。然ル處ニ其長一丈計ノ山伏一人。忽然ト出。惡五郎ヲ急度睨。惡五郎少モ不驚。爲ニ手捕ニト飛懸レハ。彼山伏消失ヌ。不心易思。太刀ヲ見レハ如常拔。弓ノ弦モ不切。希異ノ思ヒヲ成ニケリ。夫ヨリ何トナク恐敷成。身モ振ケレハ。馬ニ打乘歸リシカ。漸長保寺ノ門前迄歸餘リ恐敷思故。門ヲ扣ク。番ノ者立出誰ト問。久々利ノ城主惡五郎ト答。强テ門ヲ押明內ニ入。客殿ノ障子ヲ引明ル。住持出合。深更ニ御出恠ト云。惡五郎力ヲ得。右ノ次第ヲ悉ク語ル。住持モ同宿モ希有之事哉トテ手ヲ打。其化生ノ者ハ如此カト云ヨリ早ク。鼻モ目モ無ク。白瓜ノ如キ物無限出來ル。惡五郎扨ハ今夜命ヲ失也。無是非モ仕合無念也トテ。太刀ヲ欲拔。亦不拔。今ハ是迄ト思處風吹來リ。煙ノ消ル如ク寺モ無ク。坊主モ無ク。唯野原也。馬ニ乘。漸夜明方ニ久々利ノ城ニ皈也。如此ノ猛者モ運盡謀落被討。寔ニ齋藤大納言ヲ謀ニテ討シ其報ト。世ノ人云之。長保寺ニ位牌在三州大守雲溪龍公大居士ト也。三河守亡。幼少ノ子二人。御臺普代ノ家人供ソ城ヲ出落行ヌ。戶田勘左衛門入替。仕置申付。城番ヲ付置。其身ハ粂山エ皈リ。久々利ト云ハ當國ノ名所也。萬葉集第十三ニ有。日本記ニ曰。景行天皇美濃ノ國御幸也。假ニ泳宮ニ御座。八坂入姬ヲ妃トシ。七男六女ヲ產給ト云云。于今宮在リ。日本記區玖利ト書。

苗木ノ城軍ノ事

一同年五月ニ武藏守家中ノ面々ニ宣様。近年戰

打續無暇。雖然方々ノ働。向所無不入手。迚苗木ノ城ヲ可攻也。先使者ヲ以有無之事可聞届。如此ノ使 侍ハ可惡。貴船ノ社僧圓仁坊。兼々心易出入ス。彼ヲ以是非ヲ可聞トテ。圓仁坊ヲ呼出。御口上被仰付。圓仁坊早速苗木ニ行。遠山立出。圓仁坊對面ス。口上。森武藏守被申ハ。近年兵亂打續。世間不靜。然ルニ美濃一國ハ。大方討從。或城ヲ明テ退在。或ハ自害スルモ在。或ハ人質ヲ出。旗下ニ成ルモ在ル。貴邊如何在之哉。愚僧聞届可申旨被申越候ト申。遠山氣色ヲ替。近比率爾成次第也。返事雖不及。貴僧歸リ可被申者。委細使僧ノ口上承候。我ヲ可被致旗下由。我數代源氏ノ末葉ニシテ。此所ニ在リ。片腹痛キ口上哉。定メテ討手ヲ可被向。兼テ思儲事也。少モ驚事無之。矢合可仕ト。歸テ可申ト返事シ給。扨家賴ヲ呼出。定テ近々武藏守可寄來。用意セヨト申付。其身ハ奥ニ入ル。圓仁坊皈リ。右ノ旨委ク申。武州聞給。早速討手ヲ可遣。彼城大手ハ木曾川。三方ハ岩石高クシテ。駒ノ馳引難成。容易ハ難攻地也。臨川岸矢軍計可致トテ。大塚次右衛門。二百餘騎。則木曾路ノ方ヲ經テ押寄ル。林新右衛門五百餘騎。中井戸ノ渡リヲ越。細日ヨリ笠木山ノ麓添押寄ル。苗木ニモ用意シテ。大手ハ木曾川ヲ前ニ。當三百餘騎矢尻ヲ揃テ待懸タリ。搦手ハ千原川迄出向。川岸亂杭。逆茂木ヲ引散シ。三百餘騎。稻麻竹葦之如ク打圍テ待懸タリ。兼山勢千原川之岸ニ着ト等ク。互ニ鯨波ヲ合。兩陣鐵炮少々打出シ。矢軍ヲ初ケル。林新右衛門麾ヲ取。岩原大栅之人々者無キカ。敵ハ小勢ソ。川ヲ爲渡ト下知ス。五百餘騎一同馬ヲ乘入。向フ之岸ヨリ射ル矢雨之如シ。漸向之岸ニ掛上ル。敵力戰ス。

兼山勢辟易シ。不覺少引退所。新右衛門駒ヲ扣エ。獨驅シテ討ル。十陣ヲ鶴翼ニ備。敵ヲ中可包ト。頻リニ馬ヲ進。兩陣入亂攻戰。川ヲ渡ル勢ハ死戰也。苗木之兵ハ小勢也。散々ニ被掛立。兼山勢勝乘。追懸々々首百餘討取。直ニ城下之町迄攻寄ル。大手ハ大塚次右衛門雖寄。船ヲ引橋ヲ引。兩陣矢軍時ヲ移處ニ。搦手之軍破レ。敵城中ニ亂入ル由告來ル。大手之勢旗ヲ卷降人ト成。或ハ落行。城中纔ニ五十騎計成。遠山今者不叶。普代之者ヲ引連關東エ落行。內緣付舘林之邊暫忍タリ。則林新右衛門ニ城ヲ預給。其後慶長之比ニ。家康卿之下知ニテ。本知苗木拜領スト也。

尾州羽黑合戰之事

一同十二年甲申二月。家康卿秀吉公不和ニ成テ。兩方ヨリ御賴由使者來ル。武藏守兩所之使者ヲ返シ思案ス。文武兼備メ。天下ヲ知可給ハ秀吉公也。雖非本意。子孫相續之爲也。秀吉公エ可從トテ。同年二月末。家中引連。尾州羽黑陣ヲ張。家康卿聞給。森武藏守ハ名有侍也。可討取。雖然中々容易難計。油斷不可有ト宣處。早一チ文字懸。右往左往ニ懸破リ。數百騎一ニ成。家康卿本陣ニ切懸リ。散々ニ切崩ス。横合ノ勢本陣之危ヲ見テ備ヲ立直シ。跡ヲ切ントスル故ニ。武藏守無力引退。家康卿御覽シ立腹シ宣ハ。旗下之備不一和故也。諸將亦穿議在ニ。翌日ハ人數ヲ二手ニ分。小牧山之近所前原邊ニ伏勢ヲ搆エ。先手之將兼山勢ヲ欺誘。一引々退ハ。兼山勢勝乘可追來。能程引請。左右ヨリ伏勢ヲ發シ跡ヲ可包ト相圖ヲ究。前後左右ヨリ鯨波ヲ作掛中ニ取籠可討。如此相計歟。鬼武藏守モ何ソ可餘ト宣ヒ。所々ニ備テ待爲居。如案兼山

勢勝乗操立々々攻戰。相圖ノ程引請。四方ヨリ隱勢鯨波ヲ作掛々々攻戰。粂山勢度ヲ失散軍シ。先手ノ野呂助左衛門父子討ル。殘勢纔五十騎計ニ成。内田ノ渡ヲ越。鵜沼ニ懸。粂山ニ引入ントシ給共。頻ニ貝鐘ヲ鳴シ。鐵炮稠ク打事雨ノ如。武藏守宣様。此度程後シ事無之。森家ノ名ヲ汚ン事口惜次第也。一人モ活テ歸事不可有。我ハ討死ニ究ヌト宣。諸勢畏候ト申。各勇進タリ。坡ノ東山ニ當ル中野ト云所ニテ。馬ノ息ヲ休。勢ヲ揃。武藏守其日ハ花色純子ノ直垂ニ。白糸ノ腹卷。龍頭ノ五枚甲。鶴ノ丸ノ籠手臑當。鉄ニテ厚サ三分白銀ノ筋金ヲ渡。三尺二寸ノ太刀。二尺七寸ノ打刀。鶴ノ本白ニ山鳥ノ羽割爲合矢ヲ負。弓ハ下ハニ爲持。馬ノ脇ニ在海津黒トテ五寸ニ餘ル馬ニ。鶴ノ丸ヲ金ニテ据タル鞍爲置乗給。馬添ハ井原小市郎。舍人四人。左右ニ付驅給。各續テ出。大熊新右衛門筆役ニテ爲仰林新右衛門。同長兵衛。各務兵庫。細野左近。妻木喜十郎。大塚治右衛門。武市善兵衛。可兒勝六。同藤助。戸田勘左衛門。豐前縫九郎。同市之丞。同釆女。關長千代。佐中五兵衛。田中次郎兵衛。中島與右衛門。松浦源太郎。宇佐美新右衛門。川村勘次郎。長沼喜右衛門。佐藤善内。長瀬宗十郎。多田豊右衛門。富松重助。多田治右衛門。岸九藏。高見次郎兵衛。土屋藤太夫。波田九助。後藤平左衛門。左田次兵衛。纐纈新藏。桑原六郎兵衛。加藤助三郎。同又右衛門。長田孫十郎。玉木三藏。若尾甚九郎。手島助十郎。奥村平太夫。若井與三郎。伊藤忠助。柴田小兵衛。野尻小右衛門。塚原市藏。押原小右衛門。武藤善右衛門。平田善助。高網孫助。千石九藏。小島藤次郎。長尾三藏。宮島藤助。栗木惣右衛門。山田

才藏。美浦淸右衞門。日下六藏。前田甚藏。塚田與太郎。川瀨七藏。五十川喜左衞門。森川大藏。酒井又藏。廣瀨源四郎。江口勘七。井野甚藏。小森久藏。酒勾九兵衞。佐野喜藏。餌鳥三右衞門。山下伊助。谷木三十郎。吉田喜右衞門。松村與右衞門。秋山久藏。今西左太夫。字佐美貞助。戶島馬助。小池吉助。奧田庄九郎。安江左近。原助八。梅村四郎兵衞。小林源內。長尾源右衞門。岸勘解由。平井賴母。大洞五右衞門。細野孫右衞門。佐々孫十郎。野呂甚助。宮田甚太郎。高井孫兵衞。昆野源藏。龜田六郎兵衞。遠山源助。鈴木作藏。山田喜三郎。濟木忠右衞門。長瀨善右衞門。佐伯太郎。林平之丞。渡邊越中。山田忠右衞門。佐藤傳右衞門。中川武左衞門。寺村次右衞門。丹羽彌三郎。川村庄助。川合七藏。吉原三藏。薄田兵藏。桑原十藏。伴藤右衞門。落合太郎助。兼山仁右衞門。同半之助。大野虎藏。草鹿傳右衞門。伴久右衞門。若尾彌平次。長谷川彥助。神原甚吉。服部仁兵衞。竹內源內。藤井彌三。佐々木與助。村瀨千代。鈴木久藏。薄孫左衞門。村井佐助。稻山助左衞門。矢木平助。西尾久市。羽豐田甚右衞門。尾藤勘次郎。坂口勘解由。太田傳右衞門。肥田孫右衞門。大口新藏。大谷小四郎。西三太夫。服部五郎右衞門。水野七郎右衞門。前野孫三郎。安藤和平次。森權六。其外亦家中。岩原。大林。岩名。各務。等名字ノ侍。百五十人餘。都合二千三百餘ト書タリ。各金石ヨリ堅ク。討死ト極シナリ。

二宮神靈附甲州伊佐和川物語ノ事

一武藏守味方若干被討。今度ハ備ヲ替可向ト。小牧山ノ東北二ノ宮ノ森ノ麓ニ陣ヲ取。朱ノ玉垣ノ花表在。如何成神ト思召所ニ。神主立出。武州ノ御前ニ參リ。古ヨリ此神深ク穢

ヲ忘給精進潔齋ニ非スハ、花表ノ内エ、不
申。殊ニ不淨ノ人馬入込事無勿體。又諸人木
ノ枝ヲ折事。神慮難計。速ニ御陣場御改可然
ト申ス。武州聞給。惡敷神主ノ申樣也。及異
儀ハ鐵炮ニテ可打殺ト宣。我大義ヲ思立。全
ク非私。神慮モ鑑可給云云。然處ニ社壇ノ上
ニ。長一丈計ノ蛇出テ。軍勢ノ方ニ向ヒ。鳴
事聲高シ。神主見テ。彼御覽可在。當社ノ御
神體也ト云。諸人口ヲ驚ス。武州見給。如此
ノ蛇ヲ飼置。士民共ヲ迷シ。金銀ヲ取ル井原
ハ不居歟。彼計エト宣。小市郎承リ。腰刀ヲ
拔寸々ニ切ル。例ノ如何物喰ハト宣。則二口
三口食。殘リハ。社壇ニ捨。神主身ノ毛立
退。奈良井德法ト云醫師御前ニ在申テ云。井
原ノ働心能候也。先年甲州ニ候時。國ニ伊佐
和川ト云所有之。甲府ニ龍神ノ法ヲ行僧在
之。彼川ニ行。毎夜川岸ニテ法華經ヲ讀誦

ス。或時龍神。女ノ姿ニ化シテ來リ。僧ニ告
テ曰。難有御經ヲ聽聞シ。欲至佛果ニ。獵師
共來リ網ヲ下シ。我眷屬ヲ取殺ス。故ニ瞋恚
ノ餘無止事。三熱ノ苦ミ常立登ル。御僧ノ謀
ニテ。獵師ノ不來樣ニ計給。僧答テ云。自古
殺生シ來ル獵師。今以止事難成。神通自在之
身。大魚ト成網ヲ破リ鵜鵲ヲ妨ハ。自殺生可
止ト云。龍神則二丈計ノ鱸ト化シテ。深淵ニ
在テ。鵜用ヲ妨ケ。網ヲ破ル。獵師暫獵ヲ止
ム。其後獵師共集リ。長五六十間ノ大網ヲ拵
エ。彼淵ニ下シ。數十人ニテ彼鱸ヲ安々ト引
上ル。古今希成大魚トテ。寸々ニ切殺ス。寔
ニ神ハ人ノ敬不敬。禰宜ノ慣ニ寄リ候ト申。
此物語ニテ。諸軍色ヲ直ス。大將備ヲ改。慶
ヲ取。向ノ山ヲ見給ニ。旌旗風ニ靡キ。敵如
雲霞。四方ニ滿々タリ。武州宣ハ。豙山エ欲
引入。道中々難通歟。尤一方ヲ打破リ可通。

雖然敵多勢也。可慕跡カ。其上敵ニ後ヲ見スル事。森家ノ疵也。兎角討死ト究。旁一騎驅シテ討ルナ。一所ニ圓クシテ中ヲ破リ。旗ノ紋ヲ印トシテ可驅。家康ノ備ト見ハ。射共切共不搆。無二無三ニ押寄。旗本ト可打合。是九死一生ノ軍也。旗本ト見ハ一文字ニ馬ヲ入。家康ト鑓ヲ合。本懐ヲ可遂ト。馬ノ頭ヲ向給。御供ノ人々一同ニ馬ヲ進ム。其比世ノ人鬼武藏ト號シテ恐怖スル大將也。雖然味方今無勢也。心ハ强勇共。四方皆敵也。軍勢興ヲ醒セシ有樣也。諸士申樣。軍ハ始終ノ落着肝要也。一往小石谷カ又ハ大滿寺邊エ御馬ヲ被入可然也。續勢無之。人馬ノ息ヲ休。御合戰ト申。武州許諾シ給。御馬ヲ欲入給ニ。野モ山モ敵充滿ス。其上酒井。大久保。土井。富田カ勢。横合ニ鐵炮打掛ル故。難爭進退爰ニ究メ。勢ヲ圓メ可押寄。一騎驅スナ。長林ハ下ノ備本陣ト覺ユ。旗ヲ卷貝鐘ヲ止。向ノ備ニ目ヲ掛可進ト下知シ給處ニ。東方ヨリ鯨波ヲ作。掛馬煙ヲ立押寄ル。桔梗輪違藤ノ丸ノ紋也。武州ノ勢ヲ中ニ包ント。鶴翼ニ備。兼山勢魚鱗ニ備押寄ル。殊ニ日頃名ヲ知面ヲ知タル兵也。一足モ不引退攻戰。兼山勢今日ヲ限ノ死戰。一足モ進共一寸モ不退。此勢ニ被驅立。敵少猶豫ス。武州勝ニ乘。梅坪ヨリ無音堤迄。息モ不休戰。扨大砂入田村ノ森陰ニシテ。各馬ヲ休。味方大勢討レ。殘少ニ成ニケル。終。

以宮内省圖書寮本謄寫校合畢

堂洞軍記

龍興榮花の事

夫たかひに替る事。紅葉黄落の植木に似たり。然は世中の有様。夢とやいはん幻とやいはん。爰に美濃國主を齋藤右京太夫龍興とそ申ける。然るに龍興酒宴遊興に長し。楊桃の春ををしめるよそほひ。毛嬙西施をあさむくへき遊君を集め。朝暮遊ひたはむれ。舞うたふ上。君の禮に背き。政道正しからねは。依之氏家常陸助。稲葉伊豫守。伊賀伊賀守。各書付を以御諫申上候へ共。御取上ケなければ。是非なく織田信長公へ内通して。別心のおもひ立こそ口惜けれ。此事隠れあらされは。佐藤紀伊守。岸野勘解由。密に語ひ仰けるは。西方三人書付を以。段々御諫め申上候へ共御取上なければ。依之信長公へ内通之由聞及候。如何思召候やらんと仰ければ。勘解由氣色を損し申けるは。關永井隼人と堅く申合。かはねは戰場に埋むとも。名を後代に留へき事こそ存候へ。夢々別心おもひよらすと仰候へは。紀伊守我等も左こそ存候へ。いさきよく討死仕らんとて退出せられけり。其後永井隼人正。岸野勘解由方へ參られ。則勘解由佐藤兩人出むかひ。尾州信長公當國へ出馬有へきよし。左候はゝ兩城堅く相守候

へと仰られけれは。勘解由畏なから佐藤とのゝ御心底はかりかたく候と。まゆをひそめて申されけれは。紀伊守から〳〵と打笑ひ。貴殿も聞合候通。龍興公御仕置不宜に付。三人衆書付を以御異見申といへとも御承引なく。依之信長公へ内通の思ひ立との風聞口惜事とうはさ申候へ。御うたかひ耻敷社存候へと仰けれは。隼人正聞給ひ。人の心難計。世の亂れなれは勘解由も左こそ申されけん。左候はゝ貴殿の息女勘解由へ遣され候へ。行々は勘解由子息孫四郎と一所にも可成候得は。互に水魚の思ひをなし。此度の軍に勝事を得給へと有けれは。佐藤とのかねて信長公へ内通有けれは。其色をさとられしとおもひ。兎も角も仰にや背き候半と。なをさりならぬ心さしの娘壹人勘解由かたへ送られける。心の中如何とそ思はれける。扨又永井隼人正は。兩城堅く示合たまひ。翌日關へそ歸り給ひける。

西方三人衆心替の事

其ころ西方三人衆と聞えたるは。伊賀伊賀守。氏家常陸助。稲葉伊豫守。右三人の衆密に會合して語られけるは。つら〳〵國の樣を考みるに。今龍興の政道不宜。下一人として春秋に富る事を得す。萬民手足を置に所なし。かくては敵の爲に國を奪はれ給はんこと遠かるまし。我々愚案をめくらすに。織田信長は内には三綱五常の儀を糺して。周公孔子の道にしたかひ。外には萬機の政を忘れ給はねは。諸卒風を望んて。萬民徳に歸して樂む。いさや我々も此君頼して。武功をも勵み身を全せんと申されける。何卒今一往の御諫を申。夫とも御承引あらぬうへは是非なし。左樣致さはやと申されけれは。此儀に同して諫書をそ認。御異見申といへ共。御承引なく。此上は力なしとて。密に

信長公へ使を以御味方に可參と申ければ。大將大きに御悦ひ。願ふ所の幸ひ天のあたふる所也とて。村井民部之丞。島山所之助二人差遣され。よく〳〵しめしあはされける。

稻葉軍之事

信長公は。内々三州の城を攻んと企有けれ共。右三人衆内通に依而。先美濃路へ出馬有へしと評定有て。此は永祿七年。子八月朔日に。郡合其勢壹萬三千餘騎。尾州小牧山を打立。井の口の城へ押寄。未明に瑞龍寺山にかけ上て。時の聲をそあけにける。城中には思ひよらぬ事なれは。あはてさわきて。上を下へと返しける内に。所々より火矢を以城を燒崩しけるほとに。さしもの大城一時の烟となりける。斯る處へ。右三人の衆兼ての内通の事なれは。ともに火をそかけたりける。何かは以てたまるへき。一戰にも及はす。我先にと落たりけり。大將右京太夫龍興も。力なくして一方を打破り。いつくともなく落たまひける。然る處へ右三人衆。信長公へ新に君臣の禮をなし。翌日諸方に鹿垣を二重三重にゆはせ。井の口御改有て。岐阜とそ名付給ひけり。夫より城番を附後には信長公の御名城とそ成にける。

齋藤山城先祖の事

齋藤右京太夫龍興の由來を委く尋るに。三代以前齋藤山城守と申は。其昔都におひて賤き笠張りにて有ける人と生れ。空敷朽果んも口をしく。如何成侍とも成り。小知をもけかしたきものをと心中に深くおもひければ。先つ淸水へ七日七夜そ籠りける。滿する夜の夢にみのふまへてかさをはれといふ夢みて。我なからも不思儀に存し。はかせに是を尋ければ。成程是は難有御つけ也。急き美濃路へ御越有て。能大名を御頼みあれと申ければ。さあらはと

てはかせ申にまかせ。美濃國へ心さし罷下り候處。其ころ美濃國の大將を。土岐美濃守時益と申て。大桑の城郭を構へおはします。彼笠はり便り求て。此君に仕へ。中間奉公を勤けり。夢のつけ頼母しく。晝夜奉公油斷なく相勤。土岐の御氣に入事かぎりなし。あるとき鷹野に御出あらんと催されける。如何しけん御鷹それて。彼中間か部屋梁九尺長二間の長屋の中に。三間柄の鑓をかけ。身方二間は內に。石突は外へそ出て有ける。其鑓の柄に彼鷹とまりけり。土岐との直に御居へ被成。此ちいさき長屋の內に。三間柄の鑓を嗜事。只者にあらすと感し思召て。御知行百石被下置。夫より立身して齋藤山城守と申。御家老迄經上りけるこそ不思儀なれ。夫より下々に情をかけ。段々首尾を繕ひ。時至り。土岐殿打亡し奉り。國を押領し。大桑は城內せはしとて。井の口稻葉山に城を構へ。美濃國を切したかへ。剩へ信長公を聟に取けるも。彼夢の告にや有けん。夫より山城守男子三人もふけゝる。長男は義龍とそ申ける。或時山城守他行有ける跡にて。義龍母義に向ひ申されけるは。山城守殿は美濃一國隨へ。信長を聟に取ほとの威勢有といへ共。筋なき侍のやうに承り候。武士は氏を威勢に仕もの成るに。口惜き事に社候へとの給へは。母君泪をおさへ。おさなき心にたこそ口惜くおもはれん。去なから其方には并なき系圖有けれは密にめのとに御尋候へとて。宍たさめ／＼とそなき給ふ。義龍不思儀におもひ。めのとに密に御尋候へは。めのと承り。音高しとて小聲に成申けるは。御父山城殿は筋なき郷の笠賤と承り候へ。ある夜の夢の告により。大殿さまに奉公被成。日々立身あり。御家老迄經上り。終に大殿樣を亡し。御臺樣をうはひ取。國を押

領なされし也。古は大桑と中所に御在城有しに。城内せはしとて。此稲葉山に城をかまへ。若君の御事は。其時御母君の腹内に御座候へは。土岐の御筋目にてこそ候へ。穴賢人に洩し給ふな。御舍弟御兩人は。山城守とのゝ御子息なれと。悉く語れは。義龍彌無念におもひ。後見日根野彌右衛門（頭註）日根野彌右衛門弘龍ハ備中守と云初メ齋藤道三ニ奉仕後信長秀吉ニ仕フ祖父ヲ日根野加賀守ト云父ヲ同長左衛門といふ弘龍若名を徳太郎といふ日根野懸の陣は此人の作也と云ものをかたらひ。山城守とのは我親の敵成。何とぞ討取我無念を晴して哭よと涙と共に被申ければ。彌右衛門承り。此儀は某に御任せ候へかし。先御家中不殘。下々迄御情を懸られ。若君ほと成殿はあるましと。一家中におもひ入させ。其節に至り某存寄御座候へは。夫迄は御色にも出し給ふなと。能々諫め申て。時至らん程をそ待たりけり。されは義龍の才智世に勝れ給ひければ。彌右衛門申通り。一家中へ不殘御情かけ給ふ程に。今は此君の御事ならは。御馬の先に立。御命にかはらんものをと思はぬものもなかりけり。あるとき山城守殿。御鷹野に出たまひければ。彌右衛門時こそ至れと若君をかたらひ。御舍弟御兩人御振舞を催し。義龍彌右衛門兩人手つから膳をすへ。折をうかゝひ兄弟の御首。水もたまらす打落。扨大手かためて門をさし。やくら〳〵に弓鐵炮を仕懸け。用心嚴敷搆へければ。山城とのゝ鷹山より俄に取て返し。合戰に及ふといへとも。一家中一味の上は是非なく討死したまひけり。誠に榮花さかん也といへとも。主を殺せし天罪のかるへきにあらねは。いく程もなくしてあへなき死をし給ひけり。其後日根野彌右衛門は。備中守にそ成にける。義龍政道正しくおはしましけれは。信長公の下手に立事なかりしに。龍興の代に至り。おこり強く。政道正しからさるに依

て。信長の爲に終に亡ほされ給ひける。

堂洞合戰之事

去程に。永祿八年丑の八月下旬に。織田信長打殘たる美濃くに山城とも打したかへんとて。都合其勢二萬餘騎を引率し。御出馬有ける。先猿尾の山城をせめ落して。初軍よしと悅ひて。さる尾を改て勝山とそ名付けり。鵜沼云所より。金森五郎八を御使として。加茂郡加治田堂洞掛上の城主岸野勘解由方へ被仰越候おもむき。勘解由事堅固の士故。不便に思召。御馬を不被向事哀御味方に可參候。命に子細あらしと被仰遣候處に。勘解由承り。近比難(共カ)有忍召。殊更金森との懇意之趣忝仕合候へは關永井隼人正と堅く申合せ候へは。討死仕へく候。いかに孫四郎心底御目にかけ候へと有ければ。孫四郎罷立七つと。五つに成若共を召れ。金森か前にて兩人の細首水もたまらす中に打落しけり。めのと此由をみるよりも。あさましき事。三つに成若をかきいたき。何國ともなく出にけり。哀成ける事共也。金森五郎八急き本陣へこそ歸りける。扨も紀伊守より人質に取ける娘をは。竹鑓をもつて生なからつらぬき。長に丸山にこそ被立けり。佐藤の內西村次郞兵衛といふもの。其夜取歸り。龍福寺におゐて葬りまいらせけり。斯て金森馳歸り。右之趣申上ければ。大將大きに御腹立有りて。さあらは罷歸り(向イ)てけちらせと。翌日廿八日に大將直に御馬向られける。勘解由兼て期したる事なれは。大手搦手の手分して。よせ來る敵を待居たる。先大手長尾口へ佐藤紀伊守。嫡子右近右衛門。信長勢に加りて。二千餘騎にて。雲霞の如くなひき合て。時のこえをそ上たりけり。關隼人勢も馳合て。勘解由に力を付る。信長勢これを見て。一人も殘らす打て取れと。三千餘騎取て返し。

追立々々攻ければ。大勢に切立られ。關城へ引籠岸野孫四郎は。手勢五十騎にて。大手の門を開かせ。大勢の中へわつて入。命かぎりに七八度ほと追返し戰ければ。味方一騎も殘らす打れて手負事十三ヶ所。今はこれ迄と。上帶切捨おしはたぬいて。腹十文字にかきやぶり。うつふしに伏たりけり。湯淺新六郎馳寄て。首をきつさきにつらぬき。大音聲を上け。岸野孫四郎を湯淺新六郎打取たりと呼はりけり。勘解由は大勢の中に掛へたゝり。城中へ引歸し。かた時もるか。此由を聞より。面もふらす戰けれは先へとこそ思ひしに。早くも討たれける事よとて。腹かき切て伏にける。大手搦手一度に攻破り。城に火をそ掛たりける。軍は辰の一天に始て。午の刻にそ落にける。孫四郎母儀。孫四郎打死を見て。からからと打笑ひ。則引道していふ。

先立もしはし殘るも同し道此世のひまをあけほのゝ空。と云て。自害して死たりける。前記には勘解由とさし違て死たると有り。

關加治田軍之事

永祿八年八月廿五日。關隼人。加治田表へ出陣有へきのよし風聞有けれは。信長公加勢として齋藤新五郎五百餘騎にて馳加り。弓鉄炮之者とも。都合二千餘騎にて二手にわけ。西大手口へは齋藤新五郎。佐藤右近右衛門両大將にて堅めらる。搦手は紀伊守を大將にて。東北をかためらる。永井隼人は。三方を打捨。人數を丸備にして。絹丸捨堀り押寄鯨波をそ上たりけり。城中もかねて期したる事なれは。おなしく時を合せける。先鉄炮を打懸。其後互に切先を揃へて戰ひける。然處に右近右衛門敵にあたり。甲をいさせて痛手なれは。終に打死しけり。かゝる處に味方の勢の中より。湯淺讃岐と

名乗て。命をいつの爲にか惜むへき。つゝけや者共と。太刀眞向にあしかさし。大勢わつて入り。爰を最期と切まくる。敵も叶はしとやおもひけん。肥田瀨川迄引退く。猶も手いたく追詰られ。隼人勢此軍にも打負。關城にそ引歸す。さのみなおはせそとて。大將新五加治田の城へ引返し。湯淺か手柄。御褒美有。御腰物下されける。

關城責の事

齋藤新五郎。翌日一日は人馬の息を休て。同九月朔日には關城を責へしと軍評定有ける所へ。龍興の落人等。隼人勢に加るよし聞えしかは。かくていかゝと。使を以信長公へ御加勢をこそ賴まれけり。左あらはとて。岐阜犬山勢を差越れけれは。人馬いやか上居重り。夥敷見えけれは。關城に楯籠軍勢共是に氣をのまれ。二戰にも及はす落失けり。扨こそ關も安々と。信長公の御手には入にけり。其後齋藤新五郎は。佐藤紀伊守の養子にそ成給ひけり。永祿十年初春。加治田をは新五郎へ御讓り被成。伊深村屋敷へゐんきよして。天正六年寅三月廿九日病死。則龍福寺にて葬り。其後新五郎は。信長の御供して京都へ上り。天正十年午六月二日に。明智日向守別心ゆへ。信長京都本能寺にて御切腹。御嫡子城介殿。二條の御城にて明智か爲に御切腹。此とき齋藤新五郎も。二條御城にて打死し給ひけり。

兼山加治田軍之事

加治田の城は。齋藤新五郎より。伯父齋藤玄蕃へ預ヶ置けれは。京都のよし聞。兼山の城主森少藏。いさや此亂に。加治田の城を攻めんとて。小山の出張へ人數出し戰ひけれは。此事牛かはなる寸居より。早馬を以て注進しけれは。玄蕃大きにさはいて。左あらはふせかんとて。

名有一族には湯淺新六郎。西村次郎兵衛。小關勘助。大島茂兵衛。佐藤勘右衛門。梅村佐平治。是等を頭として。其外都合百五十餘騎。密に夜にまぎれ。牛か鼻の出張へ忍はせ。相待所に。兼山勢是をは夢にもしらす。小勢なりとあなとり。難所もいわす夜討に押入所を。人々名乘かけ〳〵。弓鉄炮を放ち懸。一度にとつとおめひてかゝれは。兼山勢案に相違して。難所々々に追詰られ。半死半生の体にて。兼山へ引退く。少藏怒りをなして大勢を催し。加治田へ取懸ヶ。先堂洞の峰へかけあかり。時の聲をそ上にける。玄蕃下知して西大手搦堀へは。湯淺新六。西村次郎兵衛。佐藤勘右衛門。梅村茂兵衛。大島左平治。清水大手へは。白江喜左衛門。小關勘介。清水瀧關へは。多賀喜八郎。吉田彌惣。向野洞小屋場へは。野田七郎左衛門。大野治兵衛。小屋洞へは。小屋庄藏。益田庄兵衛。此人々をかしらとして。口々をそかめけれ。北山の手は。難所をたのみに新藏主絹丸藤助。米取場へは臼田新兵衛。清水九兵衛。かうか洞の峰へは。井口兵右衛門。下川部彌右衛門。人々わつかにてそかためける。近藤五右衛門。戸田孫右衛門。村瀬又兵衛。林權右衛門。森田九郎右衛門。是等の人々を先として堅めける。東かわには大將玄蕃を先として。井戸宇右衛門。龜井喜平治。關源助。同久兵衛。一橋助右衛門。右京權內。坂東八郎。平野甚八。岡村善次。其外鉄炮足輕一騎は。廿人立。自らの供五人つゝ相添。雜兵百六十騎にて。藪陰に忍ひ。敵よせたらは横に掛破らんとのはかりこと也。兼山勢は四方の口々の堅めをかねて忍ひを遣し。みすまし。いかゝおもひけん。惣人數を一備にして。南二つ寺の麓川岸へそ押寄たり。藤治兵衛是を見て。味方此由をし

るましと思ひけれは。急き人を遣し。添畑けにのろしを上たりける。兼山勢は。早川渡り責掛る。其時藤治兵衛百騎計にて堅めける門を開いて命を惜ます戰けるか。然共大勢に取こめられて。既に危く見へける處に。大將玄蕃藪陰より横鑓に掛り給ふ。是に味方色を直し。半時計りそたゝかふたり。かゝる所に。味方の陣より黑革綴に。五枚兜猪首に着なし。三尺八寸の太刀を眞向にさしかさし。大音揚て。某は齋藤玄蕃の内に。直井太郎左衛門と申ものにて御坐候。兼山勢の其中に。我とおもわん人あらは。一騎打の勝負をいたし。兩陣の息を休め申はやと呼りける。森少藏内に。眞屋新助とて。其名を得たる大功のものあり。元來人の言葉を聞て少もためろふへきものにあらねは。すゝみ出て名乘りけるは。森少藏の御内に。眞屋新助と申者御坐候。直井殿の力を引見はやと存罷在候。眞屋力之程御覧候へと。太刀引そはめ二打三打よとみへしか。押ならへて無手組て。兩馬か間にとうと落。上になり下へなりけるか。眞屋か力や増りけん。さしそへさや計殘りけり。太刀にて切んとし申けれとも。岩間におしつけたれは。寸のひて力なし。如何せんとためらふ處を。直井心早き者なれは。草摺をたゝみあけ。三刀さす。さゝれて弱る所をはね返して。首を取太刀の切先につらぬき。大音聲を上て。兼山勢其内に鬼神といわれし眞屋新助を。直井太郎左衛門打取たりと呼りて。味方の陣に入にけり。かゝりける處に。東西堅めたりけるものとものろしを見て。敵一方より寄せたるは。馳合て力をそへよと云儘に不殘裏山を忍て。上の屋敷へ乘越。大門をひらき。七百餘騎。名乘掛〳〵兼山勢を中に取籠。一人も洩すま

しとて戰ひける。兼山勢この戰ひに掛立られ。川岸へそ引退く。猶危く見へける處に。落合藤右衛門といふもの取て返し打死しける間。その隙に少藏もはるかに落延給ひけり。其日の軍に首數五十一迄取たりけり。味方も四拾人こそ打死したりけり。扨こそ其日の軍は加治田勝候て。少藏兼山へこそ引れけり。○玄蕃とのより褒美の事。直井太郎左衛門へ國光御脇差。井戸宇右衛門國次御刀。白江喜左衛門行光御腰物○軍評議之事。軍の始は兼山勝。軍の終は加治田勝軍の芝居をフマユル。

齋藤新五郎跡目之事

天正十年午六月二日に。信長公明智別心にて。京都本能寺にて御切腹。御嫡子城之介二條の御屋敷にて打死。其節新五郎も一所に打死。然共子息貳人持れ候へ共。程なく玄蕃との病死にて跡も立不申候。家子も過半は兼山へしたかひ。最早長沼治兵衛はかりにて。岐阜中納言秀信公へ被召抱。漸絹九百五十石を領地して。捨堀の屋敷にて成長して。御兄新五郎。舍弟市郎左衛門とて長沼治兵衛はからひにて。秀信公へ被召抱候由。然處に慶長五子八月三日。石田治部少輔謀叛之時。秀信公組なされ候故。權現樣御向ひ被遊候節。長沼治兵衛入道は。八十餘にて秀信公へ被召出七回にて打死したりけり。扨こそ若新五郎市郎左衛門岐阜軍にて。池田三左衛門との內衆に渡り合。未名乘合鑓疵を請。痛手にて家來かかたにかけ。關梅藏寺へ退き疵直り候得は。池田三左衛門へ被召出て。知行拜領之由に候。

一永祿七子八月朔日。井之口城主齋藤龍興落去より。元祿十三辰年まて百三十七年。

一同八丑八月廿八日。堂洞落城。同辰年迄百三十六年。

一同八年九月朔日。關落城同斷。

一天正十年六月二日明智別心にて。信長父子切腹百十五年。

一同年兼山加治田取合同年數。

一慶長五。子八月廿三日。岐阜中納言秀信公落去百一年。長沼三徳も八十餘にて討死

一上有知なと尾山御殿。但六反畑に御屋敷有之山慶長五子年落去　佐藤才次郎殿

一同村おくら山御城きつき法印二男　金森法印殿岡五郎八殿

一關山城主。永祿八丑年落去　齋藤山城守伯父之内齋藤隼人正殿

一加治田堂洞城主。同年落去　岸野勘解由殿子息孫四郎殿

一同所山城主。但屋敷歟　佐藏紀伊守殿子息右近右衛門殿討死

一小野山城主。是は井ノ口城主のわかれ之由　齋藤六左衛門殿法名宗祐

一兼山城主。　森少藏殿

一大桑城主。土岐美濃守殿

一太郎丸屋敷城主。是は只今土佐國松平土佐守殿家老深尾若狹守同此サカハ城主

深尾和泉守殿

一勝山城主。川尻與兵衛殿後肥前守

一鵜沼屋敷城主。大澤和泉守殿

一井の口城主。齋藤山城守殿

一志津野山城主。是小野山より出張之由　大谷小三郎殿

一金山城主。右同斷之由　加賀見備後殿

一倉地山城主。兼山のわかれ　森武藏守殿

以宮內省圖書寮本校合畢

堂洞軍記了

續群書類從卷第六百十八

合戰部四十八

飛驒國治亂記

抑飛驒國治亂之事。往古は何人か治しやらん。中興保元之頃。人王七十八代二條院時。平淸盛公は。日本國を治給ふ。其身は太政大臣になり。一門皆々公卿になし侍れともそれ〳〵に官位を下し。投遠國には二心なき侍とも守護申付。越中に次郎兵衛盛次。伊賀に平內左衛門成景。上總に五郎兵衛忠光。飛驒に三郎左衛門景總なと〻名乘らせ。此ものとも入部すると云事もなく。代官を置しと見えたり。其節當國は南北四拾里。東西貳拾里の眞中にて。宜敷所は三福地にてや有けん。山城を搆居たりと見え。平家沒落の後は。一國主なきかことく。野武士の强者共大將となり。五箇村拾箇村。五百名三百石つ〻分領し。折〻境を爭ひ。合戰やむ隙なし。平家一門。西海に落行。木曾義仲も亡ひ。京都も北條時政守護の時分の事なりしか。平相國淸盛の舍弟。修理大夫經盛卿の妾。經盛卿の子のいまたいとけなきを懷にいたき。京近邊をさまよひしか。元來美人なり。宿緣にや北條此上郎を見始。とやかく相かたらひ彼孤子ともに鎌倉につれ下り。年月を送る。此子成

長して元服する。江間小四郎輝經と名乘。然に時政天下の執權なれは。それに隨ひ。小四郎も威勢を振ひ。然處に頼とも頼家卒去したまひ。實朝の代に成り時政も卒す。時政の實子。陸奥守義時執權を勤む。兼々小四郎と不和成しか。小四郎時政卒去を幸ひ。謀叛の氣色見えしかは。義時廉直成るにより。父時政のふびんかりし事をおもひ。實朝の上意と號し。小四郎を飛驒國へ流す。則高原殿村に留り居住す。小四郎持來りし平家の重寶。小島の太刀青葉の笛一文字の薙刀等也。小四郎子孫十七代迄續といへとも。十五代迄は武道にうとき故か。銘々名をしらす。十六代左馬頭時盛武勇たくましき故。高原郷を手下のものとなし。尚を三千石を不足として。越中へ切入。新川郡七萬石を切隨へ。中地山に城郭を搆へ。武威を振ひ給ひけり。輝盛時代になりても。彌以繁昌なり。

是は時盛の嫡子なり。常陸之助輝盛と云ふ。輝盛智慮を廻らし。甲斐の信玄に隨ひ。治國のほそをかたくしたまう。然に其むかし平家も亡ひ。源氏も三代にて久からす。北條も九代にて沒落し。後醍醐天皇二度天下を取給ひ諸國に司をすへ置給ふ。當國にも姉小路宰相頼鑑朝臣を國司に被成。建武二年小鷹利郷信包の城に住給ふ。是も二代三代は名をしらす四代目は參議中將藤原盡鑑朝臣。小島之城にも住給ふ。是迄は國中靜なり。然とも新田楠打死し。南朝の宮方日々に衰へ。足利尊氏天下を取る。されとも。いまた一統せす。仍而當國は暫く無事成り。漸く尊氏三代目鹿苑院義滿之代に至て。飛驒征伐有へしとて。朝倉左衛門尉。甲斐小太郎。京極近江守。小笠原信濃守に被仰付。朝倉左衛門。甲斐小太郎は美濃國上冗間を經て討入る。京極近江守。小笠原信濃守は。

越中へ廻り。笹津を越し。下中山に懸り討入小島を境とす。國司靈鑑大に驚き。俄に國中の武士を驅催し。防戰ふといへとも終に責崩され。應永八年八月六日落城にて。國司靈鑑は朝倉家臣井上新兵衛と云者に討とられ給ふ。仍而國司四代目にて亡ひけり。其間年數凡八拾三年也。其後當國は甲斐小太郎持分の樣にて有しかとも。得と治るといふ事もなし。漸年月押移りて。曾氏も拾五代凡貳百三拾九年の治世にて亡ひ畢。依之織田信長しは／＼天下を取るといへとも。貳拾餘箇國の主にて尾州に居住す。永祿の頃は。甲斐に信玄。越後に謙信。安藝に毛利輝元。越前に朝倉義景。近江に淺井備前。其外諸國に貳箇國三箇國の大名多く。互に國を爭ひ。自然と天下を奪ひとらんと。蜂のことくに起り謀る計り也。其間にはさまりし當國。山國故かさのみ隣國よりかまふ者もなし。依之在々所々に鋒を爭ひ境を奪ふ計也。其中にも益田郡櫻洞城には。江州守多源氏。佐々木の末葉多賀太郎子孫に。三木大和守直賴。息右兵衛督。後入道して玄山と號す 其子右京大夫自綱入道常休庵。益田郡を治たり。家臣右近將監堀越前守とて能侍有り。吉城郡小鷹利城には。牛丸又右衛門重親。一家五拾餘人。士卒百人計楯籠。杉崎の城には。小島時光。鹽屋筑前守。向井右近大夫等楯籠。田川歸雲城には。內島兵庫頭氏理。本マヽ 川尻備中守。山下豐前守等楯籠。一之宮には右衛門大夫。三宅居住す。江名子村には。畑六郎左衛門休高居住す。尤杉崎江名子一之宮。共に小身各三木幕下のことくにて暮しけり。一宮右衛門大夫は自綱妹聟也。其內鹽屋筑前守は。勇氣强。手勢計にて越中へ討入。越後謙信に通し。笹津近邊を切隨へ。猿倉の城に居住して。天正四年の春雪消しかは。上杉謙信を招越中

へ引込。所々相働。筑前守先懸に而。中地山に籠所之江間家來を追拂。直に飛驒へ責入。先つ江間か殿村之城之留主居を責る此時江間一家過半討れ。危かりし所に。兼々謙信加賀を乘取望有之故。越中に軍勢を置れしか。此者共より注進しけるは。君飛驒へ御越之儀。金澤へ知れ候よしにて。加賀勢後を取切らんと責來るよし風聞有之由。早々御引取被成可然奉存候と申來りけれは。謙信江間を捨て。直に越中へ引取。加州へ御馬を進候由。依之江間無恙忍へたり。織田信長傳聞。前田又左衛門利家に先鋒にて柴田修理亮。同伊賀守。佐久間玄蕃。金森五郎八。原彥次郎を差向らる。加州宮之腰にて對陣に及。相方相軍にて引退し也。其後越中の諸將鹽屋を惡て謙信越後へ引れし後にて。一黨して猿倉を一時に責崩し。鹽屋を討取る。此所にて鹽屋一家不殘亡ひけり。又廣瀨之高堂之城主廣瀨山城守は。兼々三木と不和なれは。甲州武田信玄へ使者を遣し。飛驒一國征伐したまへ。拙者先掛仕らん。向後幕下に被成候へ。但小八賀鄉へ千光寺と申眞言寺は。十九院衆徒も大勢御座候。是は三木か祈禱寺にて。此度三木御責被成候はゝ。必定後詰可仕覺候。此寺先味方に被成候て可然奉存候と。委細申送りけれは。信玄は江間か隨ふ上に。又廣瀨かヶ樣申送故御喜悅有て。使者へ懇に御挨拶被成。御返被成。先千光寺へ使者を被遣申入らるゝは今度飛州征伐思ひ立候處。其御寺は古來より承及たる尊寺に而候得は軍勝利之祈禱則味方賴上度旨被申送けれは十九院の衆徒評定一決して返答被申けるは。使者の趣致承知候しかし。三木自綱儀は。當寺代々之旦那にて御座候。今度貴方之御味方は得仕ましく候と使者に返し。此上は信玄より討手來るへし。要害を構防

へしとて。鳥越か峰に城廓を搆。矢玉の用意して。三木へ加勢を乞けれは。三木返事には此方にも防戰用意仕候其元に先に責來候はゝ後詰可仕と申遣。一圓に加勢をせす。燒失に及けり。信玄使者歸參して右の返事申けれは。此上は力およはす手始に千光寺を責へしとて。山縣三郎兵衛を大將にて。其勢五百餘騎を差遣さる。山縣案内者を先立。大根川より小八賀へ出町方村に陣をとり千光寺前後の繪圖を考へ諸軍を進責上る。十九院の衆徒待まふけたる事なれは。矢玉をおしまず打出し々々。いかさま三木より加勢來るへし。後詰の勢と同事に打て出んとて。只矢車にはかりして待居たり。されとも三木いかゝ思ひけん。一騎も加勢を不遣。寄手は態と惡口しておひき出さんとす。はやりをの若大衆三木か加勢せさるを聞。門を開て切て出る。寄手は兼て好む所なれは。八方より取卷。火花をちらし戰たり。衆徒の中にも。强弓引。大筒等射出し。打出す。衆徒は寶光院玄海。普門院高輝。吉祥院尊順。說法院。不動院。蓮花坊。阿闍梨。彼等の打出す。矢玉に當る者は楯も武具もたまらはこそ。さしもの甲州勢思ひの外なれは。暫くあくんて見えたりけり。去共山縣は信玄貳拾四將の壹人。殊に思慮深き武士なれは。態と日を暮し。夜に入一同に時の聲を上責上る體すさましく見へけれは。大衆是に驚き。壹騎も不殘。皆鳥越か峰に下り立。爰をせんとゝ防けり。其隙に後の方柏原村より。貳拾騎計忍ひ明松を持せ。手々に本堂。庫裡。方丈。鐘樓堂見ゆるを幸に。明松を投付。火を付ちらしけれは。一時に燃上る。衆徒肝を潰し立歸り消さんとすれとも。大火に及けれは叶はぬ所と。散々に落行。終に落城に及けり。惜しひかな。痛ましひかな。此日いかなる惡日そや。

千光寺代々の重寶。別して釋迦如來錦の御袈裟。其外色々の重物一時の煙と立上る。ヶ樣之大伽藍を滅亡させし武田山縣か行末。久しからしと思はぬ者もなかりけり。山縣彌勇氣を振ひ。勝時を作り。猶軍慮を廻らし。直に三木を責んと既に打立んと用意する所に。甲州より飛脚到來して。越後の謙信又川中島に出陣せし間。山縣早々引取へきよし申來る。仍而山縣軍勢引連。急に甲州へ引限けり。三木は思の外なれは。案に相違して悦ふ事限なし。山縣三木を責は。休庵滅亡すへきに。天の助とそ見ゆし。危かりし也。時に廣瀨山城守せんかたなく自身三木に敵對仕。かたくいろ／＼と三木方へ手を入和睦して。剩休庵妹を娶とり。全二心なき體にて心易暮けり。去共猶欲心止すして。小鷹利の牛丸。小島時光等を亡さんと。明暮工夫を廻らしけり。爰に高原郷殿村の城主。江間常陸助輝盛は。兼々甲州に立越仕へし所に。かの越中七萬石。新川郡中地山之城に籠置し家臣。神代川上和仁等も。謙信の利刀に驚き。ちり／＼に成。七萬石の中。地山も有か無かに成しかは。輝盛甲州より立歸相殘るもの共を召集。殿村の城を守らせ。其身は又甲州へ立越。信玄に仕へ。右中地山の次第を申上しゆ／＼智略を廻らし居たりしか。頃は天正八年の正月。急度思案の廻らし。高原殿村圓城寺は舍弟なれは。甲州へ呼とり。信玄へ人質に遣し。加勢の人數被下候はゝ。飛驒國中乘取り御手に入んと被申上けれは。信玄御滿足にて。右圓城寺を還俗させ。江間右馬亮と名乘せ。輝盛被仰付樣は。人質に不及。右馬亮數勢を預け遣す間かれを先陣として。首尾能飛驒責ほろほすへしと。其金幣を被下けれは。常陸之助大ひに喜悅して。諸軍勢を引率し。急甲州を打立本國に立

歸る。先つ殿村城に入て。越中邊に隱れ居たる侍とも急々に呼寄。本より近邊に有所の家來は。壹人も不殘召集。右信玄公御上意之趣申聞せ。加勢手勢共に馳走しねきらひ。兵粮馬草の用意澤山に拵へ。近日に打立んとす。三木此事を聞。以之外驚き廣瀨小島一之宮江名子。何れも面々互に身之上の事候。隨分出精し防可被申と招寄。別而小鷹利牛丸又右衛門方ゟ以使者。永く懇意に向後共無二心可仕候旨。此度之儀偏に奉頼存と申遣けれは。一旦の僞とはしらす。成程一命を捨御味方可仕堅約。他事なく返事して松倉へ被參。斯て休庵兵粮馬草夥しく用意して。日頃疎ゑんの者迄輕薄を以て招寄。葉武者以下迄馳走しねきらひ。軍勢點撿するに。雜兵凡貳千騎餘りに成けり。此勢にては。縱平場の掛合に而も負へきとは思はねとも。甲州よりいか成る軍師か來らん。案內難知。荒城鄉に待かけ。勢之多小をしらせす戰ふへしとて。荒城鄉八日町橋之上に下も今洞の峰迄に軍兵を分け置。陣をかたくはりて待懸たり。斯て江間常陸之助輝盛は。殿村留主居には甥江間右馬亮經正を置。其身は身近き侍三百餘騎。越中落之兵。甲州加勢旁合凡三千餘騎也。龍の雲を得。虎の山に登る心地にて勇み勇んて出馬にて。逢坂か原。山道故。靜々下り立向ふを見れは。色々旗を飜し。其勢貳千騎もあらんと見へ。山も川も軍兵ならすと云事なし。去共輝盛大丈夫なれは。少も騷かすして。八日町迄諸軍勢を下り付待合。靜に兵粮をつかはせ。軍の備を魚鱗につらね。神妙時を作り。軍兵を三手に分け。二方へ差向て。同時に軍を始けり。三木方にも待もふけたる事なれは。時の聲を合。一足も退しと防戰ふ。寄手は本より三木を卽時に討んと思ひ込んて前後をかへり見

す。無二無三に責懸たり。仍而三木方少し色めき見へければ。向氣之輝盛勝に乘て。八(寸イ)き計の黑栗毛之馬に。金覆輪の鞍を置。龍頭の甲を着し。錦直垂小金實之鎧を着し。小烏丸の太刀。重代の打刀。一文字の薙刀。輕々と引さけ。八日町の橋上に立上り。信玄より拜領の金幣を振立て。大音聲にて。敵は貳千にたらぬ小勢成るそよ味方は大勢壹騎に三騎おり重り。急に勝負を決せよや。けふの軍に勝すんは。いつの日にか勝事あらん。殊に敵色めくそ。引なかゝれと下知したまへは。馬廻りに扣し者とも。我を忘れて懸出る。依之三木方さん／＼に打なされ。右往左往ににけ走る。江間方軍兵彌勝ほこり何國迄のかすへきといきをもつかす追懸たり。爰に小島時光。牛丸又太郎。元來思慮有武士なれは。江間方勝に乘。八方へ追懸行。輝盛旗本の無勢成るを見すまし戰んと。八日町下も大洞の有ける方へ。貳拾騎計にてにけかくれ樣子をうかゝひ居たり。然る所に江間彌勝軍にて。輝盛の旗本しか／＼人有とも見へされは。小島牛丸幸後の方へ廻り。思ひかけなき所へ切てかゝる。輝盛はつとおもわれしか。件の薙刀おつとりのへさん／＼に振舞給へは。牛丸小島たまりかね。ちり／＼になりけるか。牛丸か家來共。横合より鐵炮を打懸しに。輝盛の運極め。鎧の透間に當りて。深手を負よわり給ふ所へ。牛丸又太郎親正。生年十七歲雖壹人切て懸る。輝盛少もさわかす。汝我か首を取らんとならは。是を印にせよとて。一文字の薙刀小烏丸の太刀を投出し。汝か假名はいかにと尋給へは。しか／＼の旨申上る。扨は苦しからすとて。首さし延討れ給ふ。牛丸悦ひ。御首と太刀薙刀追取本陣に立歸る。江間の家臣共跡に軍有と聞取て返し。此樣子見るといへ

とも近邊に敵はなし。我々後陣も不遠見長追せしゆへと後悔すれとかひもなく。死手の御供より外なしと。川上左衛門尉。同縫殿介。和仁右衛門助。神代三左衛門。其外忠義の侍共十三人。同枕に切腹す。此忠死の者共の死骸を塚に築。逢坂の麓に十三塚と名付。今に有り。今日いかなる江間の惡日そや。先祖輝經より代々弓箭に携つて。越中迄切入。譽を取し身の。時節とは云なから。是前業にや。八日町の士と成給ふ。則安國寺圓城寺之本寺。旦那寺成る間御死骸を持行。御葬送の規式有て。塚に築き今に有。痛はしといふも餘り有。又殘念の至り。一文字の薙刀。牛丸。後に金森家臣に成。長近卿へ差上。今に有よし風聞有。小烏丸の事は今國分寺にあり。何故國分寺に有や謂しらす。傳は千光寺記に。寶光坊其後阿舍利書記置れしは不審也。青葉の笛行衛しれす。殿村留主居江間右馬亮經正は。越中通越前に落行。金森家を賴居たりけり。斯て三木休庵は。今迄は手剛く思はれし江間家滅亡せしかは。最早國中に心にかゝる武士もなし。唯明暮歡樂耳也。去共。元來强欲にて何とそ飛驒一國は我壹人にて治度工夫し給へけり。爰に廣瀨山城守宗城は。是も欲深き生付にし有しか。兼而は牛丸懇意成しか。三木と緣を組しより。還而牛丸一家を亡さんと。家臣磯村長十郎。廣瀨祐之進兩人示合。手勢貳百余騎差添。ひそかに小鷹利を責んと用意す。又太郎はやくも傳聞。其身は城に殘り牛丸次郎左衛門親治。同左馬之助重治。伯父後藤帶刀重元大將にて。有合せし手勢百餘人相添。途中に出合。不意を打んと靜に古川に陣を取らせ。待懸させたり。斯とはしらす。廣瀨磯村暮に及責寄んと八つ半頃古川着暫息を休んとせし處へ。牛丸方時をとつと上しかは。廣

瀬方驚といへとも。鎧武者の事なれは。俄に備を立。先手の者とも切て出る。牛丸方小勢といへとも。兼而期たる事なれは。長蛇の備にて切まくる。依之戰軍して二時計にて暮しかは。互に引退けり。三木如何思ひけん。廣瀬牛丸方へ使者遣し。扱ひ入。和睦させたり。然とも廣瀬氏止事を得す。何卒牛丸を亡んと思ひ。此度は三木を頼相かたらひ。天正拾年正月廿七日。兩家の大軍小鷹利發向する。牛丸無勢にて敵對成かたし。一家打死亡ん事もせんなし殊に當國人心何れにても頼かたく何國へも立退。能主人を頼。此無念晴さんと思案極。年老足よわとも先達て落し。夜に入篝火を城中燒せ置。殘りしもの五十四人忍ひて角川迄落行けり。兩家の暮方に押寄。時の聲も揚といへとも。城より矢一筋玉一つ射出さす。人有共見へされは不審に思ひ塀打破りて見れは。敵壹人もなし。扨は落失たりとて小高き所に上り東西を見れは。下さしの方に明松のちら／＼と見へけるにそ。扨越中へ落行ん。追懸打留よとて。貳百騎計にて追かけしか。程なく落合にて追付。時を作り鐵炮を打懸切て懸る。牛丸落足ゆへ叶かたく思ひけれは。宗徒之ものとも先へ落し延させ。何れも覺悟を極め取て返し。命をおします切ちらす。兩家の者とも又右衛門か死物狂ひに手負死人五六十人に及けれは。左に我々か身にかゝりたる敵にてもなし。いさや引んとて引かへす。されとも牛丸方小勢故か。後藤帶刀重元を始貳拾四人討死す。殘り三拾人計漸々越中へ落行けり。兩家のものとも先首尾能と小鷹利之城を燒捨。勝時を作り引返す。斯て牛丸一家之人々越中に落付。牛丸左馬介重清は内々佐々木家によしみ有て。早速奉公に相濟けり。是首尾あしきか越前へ打通り。大

野城主金森氏を賴み奉公致されけり。右左馬介重淸は、往に家沒落の後は。備前守と改。佐竹氏に相濟今に有。斯て廣瀨山城は牛丸さへ亡しなは。牛丸一跡は早速我かものにせんと思ひしに。中々三木か自由にさせねは心底には憤るといへとも中々手向成かたく。折もあらはとさあらぬ體にて打過けり。然は三木威光日々に添ひ。月に隨ひ甚しかりければ。三木いよ〱慾心募り、先武勇にうとき鍋山豐後守。何之故なく責崩し。鍋山の一跡を奪ひとり城主左近太夫忠晴せんかたなく。是も越前へ落行れけり。三木は早速鍋山を手に入。舍弟右衛門督顯綱を則鍋山豐後守顯綱と號。鍋山の城主とす。顯綱子息信綱を鍋山左衛門尉信綱と號。是も鍋山に移置。其身は密に京都に登り。國司號申下し。歸國して姉小路大納言藤原自綱入道久安と號。先祖の家名を捨。息右兵衛尉秀綱を少納言となし。次男右衛門之助元綱を少將となし。自身一家を官位に勸。鍋山親子も官位に進んと思はれしか。是は賢人ふりし生付。殊に廣瀨を進すんは能るましと兎角廣瀨を亡し。其後の事にすへしと。親子三人の外官位は我意に任せ給はす。鍋山の城主顯綱親子は。元來邪なき生性に而。當鍋山先城主左近太夫忠晴は廉直成人成し。殊に舍兄豐後忠知死後に問もなき所に。久安情なき仕方と思ふ程の心より。官位の事我か親子に進さるこそ幸よと悅ひ。久安萬事の惡事跡みはて悲れけり。爰に廣瀨山城守宗成は。元來邪知深强よくなる生れなりしか。顯綱に逆心を勸め。後々は我國中を手に入んと志案して。有時酒合取持せ。鍋山へ參向して。顯綱親子に勸。久安公には今度國司號蒙らせられ大悅奉存。貴公にも御滿足たるへしと祝儀申納め。御子息方に

も御高官の由。貴公にも官位可被成奉存所。左もなき段久安公には不似被成方と奉存と。顯綱被申は。我々官位の望もなし。只久安公惡逆の程。子孫にむくわんと悲。何と被申ければ。山城被申は。久安公の惡事とは何事に而候ぞ。度々御異見申ために。貴公思召付承たしと有は。貴邊の御目にも見へ申へけれとも。我は思ふ所申にて候。先小鷹利の牛丸は貴殿と不和たるにより。貴殿に被賴。牛丸一家を責潰し。貴殿に其跡を一粒も分不遣。當城の先主左近忠晴を追出し。我を入置事。左近に何の罪有ての事ぞや。國司號の事。其家にも生れすして今大納言に成り息子共迄高官に進る事。是第一惡事と存と被申ければ。山城心によろこひ。仰の惡逆數へかたし。ケ樣の事と期したりせは。牛丸貴の節。我宅にて詰腹切らせ。貴公に松倉を可持物。今後悔せんなし。得と思案して見れは。夥敷惡事なり。秀綱元綱とても親の子也。同腹中にて有へし。我折を見合久安公を打取へし。貴公子息左衛門殿を松倉城主に成迄。我一命を捨て働可申と進ければ子にまよふ親心。廣瀨氏の惡心とは夢にも不知。妹聟の貴殿。惡敷事は被申まし。折を見合。兎も角も宜敷はからへ可被給と。酒狂の餘り遠侍の間も不知。大事語長座に及て。山城は暇をこひ。廣瀨へ被歸けり。斯とは三木夢にもしらす。一國一城治る事に工夫するに。一宮は聟也。江名子小島は小身。我家來同し事也。只亡度は廣瀨計也と。枕を割る。先顯綱親子呼寄。秀綱元綱一座にて。廣瀨山城は我妹聟たれは志をがんかと覺し也。心に懸るもの生置んも。我未來のさまたけ也。依之近々に打亡さんと思ふ也其方達はいかゝ思ふぞやと有ける時。秀綱元綱は

可然と被申。顯綱親子は又例の悪心よと疎々敷思ひ。顯綱被申候は。仰御尤に奉存候。乍去當國にては當家に勝る威勢有大名壹人もなし。又隨ぬものなし。當家の外廣瀨に勝る人數持たる者もなし。若隣國より責來る共。當家と廣瀨心を合防戰は。危事有ましとそんし候間。廣瀨を亡されん事御無用に被成可然と被申ける。久安聞召。内心には扨々我存念に違ふにつくき奴と思召共。さあらぬ體にて。是も我一家中。當國を一城にて。末代榮花を可殘すと思ふ故に申たり。成程思案すへしとて。顯綱親子を返し。四五日過て。家來荒川甚平とて。萬事功者。殊に忍ひの名人也。彼れに示合。鍋山へ使者に遣し。信綱を呼寄。酒の上にて討んとする。信綱先會の相談。今日は斯こそと思われければ頓て拔合無二無三に切なくる。手本に進むものとも貳三人切たをす。手負も拾人計に及けり。されとも敵大勢、身は素肌。數箇所の深手よわる所を。間もなく切付々々しければ。終に討死し給ひけり。久安頓て甚平に顯綱を討つ謀を云ふくめ。態と難詰書通を認。甚平に渡。軍卒百五拾騎態と暮に及。甚平に相添鍋山に被遣。甚平酉の時に顯綱の御前へ參り。件の御狀差出す。顯綱先子息信綱はいかにと尋給へは。甚平申様。彌御機嫌能。久安公御子息御兄弟と御一所に渡らせ給ふ。御安氣可被遊と實らしく申ければ。顯綱悅ひ給ひ。件の書面を見らるゝといへとも。久安日頃の書狀とは違ひ殊の外讀かね。文言ともに得心難被成に付。甚平是はいかにと有。甚平畏て立寄る。顯綱又御書面を見入おわする所を。甚平拔打に丁と切はつと驚き立上り給ふ所を。疊懸て切付。終に切殺し。御首を討落奉る。引提門外へ走り出る。御寢間近き所にや在けん。家來共もおり合

す。奥方御覽し大きにさわき懸たる薙刀おつとりおつ懸たまへと女中といひ。御手あわすすこし〳〵歸られしか。姫君と御親子自害して果給ふ。痛敷次第なり。然る處門外に勝時の聲上るといへとも。誰か戰んとするもの壹人もなし。適忠有老武者は自害する。殘るものとも は皆松倉へ降參してける。城に火を懸一時の煙となし。松倉の軍兵と打交り。皆々一所に參りけり。甚平御首を致持參。右の趣逐一に申上けれは。久安公手柄々々と譽給ひ。甚平に御褒美被下。休足いたせと御暇被下。獨右の首をつく〳〵と御覽し。骨肉の弟甥を殺し。心よからす思召か。もくねんとして座し給ふ。取次の侍罷出。鍋山より降參の衆中御目見奉願と申上る是へ通せと被仰けれは。皆々御目通りに畏る。助命の故御召抱被遊被下よと。一統奉願。久安公汝等此度甚平を打留るか。我家來と一合戰もして後に降參すへき所。命を惜しみ主の敵の事おもわす降參する。只今首をはねへき奴原なれとも。さしゆるし召仕の間。此度首をとらさるおんをわすれす。急度奉公すへしと有けれは。何れも難有事に思ひ。皆々御前を罷立けり。其中に壹人小さかしき男壹人久安公の御氣に入らんと思ひしか。居殘て申けるは。實に此度主人顯綱殿御親子を討給ふは。君の御家長久の元と奉存候と。ついしやう申上る。久安公聞召。現在の弟甥を討事。我家長久とは何を以て申すぞ。但家をあなとつていう云分かと。あら〳〵しく被申ける。件の男驚て申は。先月いつの頃か。廣瀨山城守殿鍋山へ御越被成密に御相談被成候を承り候。君に惡心段々積れは。後に至り我々身の上に來ん事決定。いかさま折を見合。久安公を討取へしと兩人御相談御極被成。互に密々と御申候て御別

れ被成候。然は君の御家長久と奉存候と。委中上ける時に。久安公くわつとせきあけ給ひ。扱々にくき顯綱親子か心底。近日廣瀨をも討取へし。汝此事口外へ此上は出すへからすと御褒美被下。御暇を被下けり。明れは小島江名子一之宮其外の者とも方へ急用有と觸廻し。皆々呼寄置。箇樣々々の事承る。明日勢を揃て。高堂城を責崩すへしと有けれは。我々不存といへとも事實正におゐては。御加勢可申上と有。さあらは其用意有へしと。皆々退出被致けり高堂城へ此事聞へしかは。山城守大きに驚き。只熱湯にて手を洗ふかことく周章ふためき正體なし。されとも家臣磯村廣瀨。其外の者とも漸々思案を落し付。謀を工夫する時に。山城守邪智の餘り一つの謀略を思ひ付。磯村長十郎耳元にさゝやき謀略を云含。歴々の武士五六騎引て松倉へ至り。廣瀨山城守より磯村長十郎使者に參たりと云入けり。久安聞召。軍中にも使者往來は古より有之事。不苦通せよと被仰。斯と磯村に申達。磯村臆仕たる氣色もなく城内に入。久安公のまへに出る。久安公被仰は。先日我身顯綱親子其方主人山城守と同意か我を亡さん內談を聞し故先顯綱親子は早速打取たり。明日は山城守と勝負を決せんと思ふ所に。何故の使者そと面に怒りを顯し被仰。磯村はつと思ひしか。爰そ一世の浮沈そと。畏て申上るは。主人儀君の御妹聟に相成。顯綱公も同し事なれは。致尊敬懇意に仕候得共。夫迄の事にて御座候。何の意趣を以君を奉討所存可有之哉。鍋山返忠の衆中。顯綱親子死後の事に候故。君への追從に申上候ものならん。主人におゐて神以毛頭左樣の所存無之候。然るを此度山城を討との思召不存寄難題時節到來とは申なから。無實の罪に沈む事口惜次

第。何分にも申聞致せよと申越候。偏に御尊察奉願候。其上にも御疑不明は。御恩有久安公に敵對仕所存無之候間。逆心無之趣證文何數にて而も書可進。其上に高堂城を明渡。山城守は不申及。家來迄不殘松倉へ參り。何樣の御給仕にても相勤可申候間。主人山城を始。城内のものとも命を御たすけ可被下と。言葉に少しもよとみなく。辨舌瀧の流るゝことく申上ければ。多くの諸武士かれに續く弁者あらしと譽ぬ人もなかりけり。久安公得と聞めされ。しはし御思案あり。是山城一家の者ともいけ取りせんには究竟一の事よと思ひ。態と面を和らけ給ひ。扨々今迄は貴殿へ申事は皆僞事。山城心底逆心無相違と思ひしに。城迄明渡さんと被申越からは。實の心底と見へたり。最早疑少しもなく。我胸中日の出たることくと。以の外機嫌能。磯村に盃を被下。山城守へも懇の御返答被成。疑念晴たれは。誓紙に不及。城を明渡されて此方へ降人に被出よと懇に可被申と被仰。卽山城親子待兼可被申。早々罷歸られよと御暇被下候て。磯村仕すましたりと悅ひ。高堂城へ立歸る。山城待請。首尾は如何にと尋らるゝ。磯村委細右之趣申上る。山城聞て謀成熟せりと悅ひ給ひ。則右之爲禮。廣瀨助之進。從者拾四五騎相添。騎馬にて松倉へ被遣。口上最前磯村長十郎差遣し申候處。萬端御許容被成下。我々親子從者に至迄。助命恙なき段千萬忝仕合奉存候。磯村申上候通り。いよ〳〵明日當城明渡可申候。御請取之役人可被遣候。其後我等親子從者共に。參上仕候。內衆御同事御給仕可申候。彌助命之義無相違御憐憲奉願存候と謹而申けり。松倉に至れは。高堂より廣瀨助之進使者之段申入る。久安公聞こしめし。ふしきにおほしめしけるかよひ入よと仰にしたかひ。

助之進はしつ〳〵と城内に入。直に久安公の御前へ出る。久安公被仰は。最前磯村委細に申遣所に。今又何之爲の使者そと仰らるゝ。廣瀬申上る。其御禮に參上仕候と。右之口上申上る。立安公聞召。扨々念頃の至千萬滿足いたしたり。立歸りて山城へ可被申は。最前磯村長十郎差越るゝ上に。爲御禮早速其方被遣候。懇意の至に存候。いよ〳〵右磯村へ契約の通り。毛頭相違有ましく候と御返事被成。助之進に御暇被下ける。助之進急き高堂に立歸り。右の段申上る。何れも悦ひ。山城被申は。若早速に久安出被申は。四人一所に飛懸り打取へし。若我々ちり〳〵に居て對面するとも。あわよくは命を捨さし違へ可被申。降人の法なれは。太刀刀を預るましき物にもあらす。各懐劍の用意可被致候と謀を申合。城渡の用意して明日を待。明れは。松倉には畑六郎左衛門休高一宮右衛門太夫三宅に。百騎計軍卒を相添。高堂差遣る山城守出向ひ挨拶終りて。天守二の丸屬々やくら〳〵。前の出城不殘明渡。右の兩人に相渡されけり。廣瀬の勢滅亡し不運の程こそはかなけれ。扨城には畑六郎左衛門休高を相殘し。百人の士卒に廣間玄關門々をかためさせ。嚴敷けい固仕たりけり。山城守宗城。嫡子兵庫頭宗遠。家臣磯村長十郎。廣瀬助之進。其外從者五拾騎計召れ。一之宮右衛門太夫三宅後陣引添。警固嚴敷邊りを拂ひ。何れも馬上にて松倉へ被參候。松倉になれは三宅下部を以て。三宅。山城公御親子。磯村殿。廣瀬殿。御供仕罷歸り候と申入けれは。暫く有て奥より侍壹人立出。三宅殿御苦勞。早々御休足可被成候事。次に廣瀬山城公御親子。家老の兩人追付對面可致候。乍自由唯今水風呂に罷在候間。しはらく外屋形にて御休足可被下候と懇に傳へよと

の事なり。其旨相心得可被申と返事有は。三宅さらあらは殿方もしはらくこなたへ御入可被成候とて。二の丸外屋形へ伴ひ行。態と一間へたて主從を置。五拾騎計の家來は爰かしこの部屋々々へ先御茶酒なと暫く景氣を向期（本マヽ）てけり。其後荒川甚平立出。唯今御對面可被成候儀乍去降人之法にて御座候間。兩刀を御渡可有との御事にて御座候と有れは。四人目を見合。銘々兩刀を拔渡されけり。其時貳拾三人立出て。いさ奥へ御出御對面被遊候へとて。御供する。四人に五六人程つゝ付けれは。道にて間々へ入。四人の間よほと隔樣に見へける時。磯村聲かけ。大殿靜に御越被成よといふ。山城はつと暫扣待間弓丈三丈計なり。靜々と歩行るゝ。漸久安公の屋形に至り。座敷之方見やれは。遙に奥之方に久安公子息方老中近習の者幷居。四人一所に奥へ入らんとするを。侍小性押隔て。久安公近所へ山城殿親子計り御家老兩人は此方に御座可被成と引留る。爰にてさすか切て懸りもならす。せひなく止り居たりけり。其間拾間計成。山城久安と一間隔て對面あり。此度不慮の事にて互に遺根被存。貴殿一家打亡し。恨を晴し申さんと存處。磯村被差遣降參との事故に。差止しは貴殿是まて迎たり。右相定之通り相勤被申よと。盃をかたむけ出さるゝ。山城親子口惜といへとも無是非頂戴奉畏彌御憐愍奉願と申上。盃相濟。久安仰には兩人共つかれならん御膳を可出。磯村廣瀨には後刻對面すへしと奥へ入給へは。四人ともに安堵の思ひいかさま今度は勝負すへきと奥從こなたを見給へは。こなたの兩人は奥を見やり。心にうなつき少の所へ御膳よしとて持出る。則是も兩人つゝ右之座敷にて進けり。屏風襖間引ける故主從姿は見へさりけり。其間拾間

もへたゝりしに、大勢込入二汁九菜の料理先家老兩人方へ出し引替取替する内に奥之間之次の座敷の襖を久引安公相伴可被成候。山城親子久安公まします座敷へ無理に呼入。二汁九菜の料理にて酒を進め。いろ〳〵の肴出し酒をしいらるゝ。家老。兩人方にても同樣にひたしひにしひてけり。兩方とも油斷せすといへとも。思はす心亂れけり。段々酒も長し日も暮合時に究竟の力者をゑらみ一騎に十騎つゝ組合手管にて押たり。酒も亂れ四人共によろつく時分を見合四拾人の力者二間へ別れ。一時に飛付組たりけり。四人共に懐劍を抜出しめつた突に突といへとも。大勢成故おり重り々々手取足取終に組伏。四人共に生とりにこそしたりけり。四人無念さ口惜さ縦ん限りなく。久安公に喰付思ひ大聲上けて。扨僞て馳走し。生捕しな。武士氣有はなせ尋常に勝負はせぬそ。臆病者比興者。降人を殺す法や有。武士の法を知らぬか人外め畜生めとわめきあせれと。甲斐もなし。情をしらぬ三木主從。所せん生て置故にやかましゝ一々首をはねよとて。押て打落す。三拾人計りの者とも。肝を潰し我々儀は何分にも御意次第可仕候間。助命奉願と降を乞。仍而命計り助られたり。三木一家の人々今こそ安堵の思ひなりと酒宴してそ遊れけり。則其身は高堂城に移り。息右兵衛秀綱を松倉之城主になし。次男元綱を小島城主にして。古城主時光をは外郭へ追出し。從者のことくいたし置。飛騨一國親子三人にて押領し。威を振ひ給ひけり。仍て此時三木になひかぬ者もなし。此以後善根を修し。宮寺建立をも被成たらは。三木の御家も長久成へしに幾程もなく沒落し。夢の夢にそ成にけり。

一。此時節金森五郎八長近入道法印は。越前之

國大野の青瀧山之城に而。御知行六萬石。去る天正三年信長公より拜領して御座被成候。飛驒之國は諸城悉三木に責崩され散り。三木壹人國中に威を振ふよし聞召被及。何さま飛驒は山國なれは。せはかるへし。勿論勢も小勢たるへし。殊に小勢の懸合計に而。大軍の懸引は不得手成へし。然は手並の程もつよからす。此間飛驒より段々我をたのみ來りし人々に相尋。攻伐して。飛驒一國切取にせはやと思召。江間右馬亮經正。鍋山左近太夫忠晴。川尻備中守氏理。石徹田彥右衞門尉元氏。牛丸又右衞門尉重親等召集。三木か軍慮を尋問給ふ。中にも又右衞門被申は。久安軍立はけ敷樣には御座候得共。是は飛驒中之大身にて。人數大勢持し故。軍立利き樣見得申。唯慾深きはかりにて。能謀略有る大將にては無御座候と申上けれは。川尻備中守被申は。夕へ之知音朝之敵と成よし承傳候。以之外心輕き生付と見得申候と申上らるゝ。法印聞召。扨は三木に左程奥深き軍術はなけれとも時々上軍にて一旦軍には勝し物と推量したまひ被仰けるは飛驒の繪圖をほしく思ふか。各寄合銘々覺之通り相談して書上可被申哉と被仰けれは。五人之衆中それは御心易事にて御座候。今宵中委細に書立差上可申と請合申上る。然は明朝迄早々仕立可申と御暇被下ける。五人の衆中悅ひ勇み。夜中に繪圖仕立。明日を待て差上る。法印請取給ひ。得とかんかへ。近日思ひ立へし。各左樣相心得可被申と奥へ入給ふ。各悅ひ退出す。四五日過て。法印右五人共に被召出。此程之繪圖に彌相違無之哉と有。五人之者毛頭如在御座なく候と申上けれは。しからは飛驒攻伐思ひ立へしと有て。田島勝太御使にて。郡上和良鄕遠藤左馬亮慶隆。同大隅守胤基兩所へ被申遣趣。手前

儀近日飛騨攻伐を存立候。手まへの勢計にては無覺束存候間。御加勢賴奉存候と仰被遣ける。御南所御返事には。此度飛騨攻伐思召立よし。尤の事に候。それに付加勢の儀被仰越得其意申候。何時にても御發駕の砌。手勢召連。御供可申候。急御用意可有之候と御返事有けれは。法印御滿足にて。則郡長瀧に小城を構。飛騨おさへとし。鍋山左近太夫。川尻備中守を入置給ふ。扨軍兵を揃。大野を御出馬可被成候。御用意最中の所に天正十年六月二日に。京都寺町本能寺にて。織田信長公。明智日向守爲に御生害まします。同信忠公二條の城にて御生害に而。金森ハ御嫡男忠次郎長則卿も。御最期の御供にて打死し給ふよし告來る。然共法印長近卿少も愁の御氣色無之。悴忠次郎。御主人御最期ハ御供仕たりとは。扨々武士之道に叶ひし物かな。武士はかくこそ有度物よと被仰。則長屋喜藏可重を御養子に被成。御家督御相續御極被成候。武勇たくましく御座被成候。依之羽柴築前(守脫カ)秀吉公。其志の勇美なる事を御感被遊。別して御懇意に被遊候に付。法印卿も無他事御給仕被成候。依之越中佐々内藏之介成政責の時。金森法印御供に而加賀利家先陣なり。此軍秀吉公御利運にて。成政降參し越中一ケ國前田利家に被下時。金森御親子軍功不淺故知行御加增可被仰付御上意有ければ。長近畏て差たる手柄も無之に。知行加增之儀御免被遊代りに飛騨國下し給り候はゝ三木討亡し飛騨一國一城治度奉存候と御申上被成候へは。秀吉被仰けるは其三木は佐々成政と兼々通し有し事聞及。幸かな其方時を不移馳向。三木一家打亡し。飛騨一國退治して。平均に治。永く其方知行可致と被仰出けれは。長近卿大きに悅ひ給ひ。卽刻御暇申請。越前大野に立歸

り。飛驒攻伐の御用意專なり。于時天正十三年酉八月三日也。法印御年六拾貳歲。御養子長屋喜藏可重貳拾八歲也。兩大將二手に別れ御進發九百七拾と申ホト成。御供の人々には。先御加勢遠藤左馬亮慶隆。飛驒降參の勢江間右馬亮經正。鍋山大夫忠明。川尻備中守氏理。石徹田彥右衛門尉元氏。牛丸又右衛門尉重親之五人は飛州之案內者故。先手を承り。古郷へは錦と勇みて打立けり。御譜代衆には。根尾庄右衛門。岩田彌助。田島勝太。遠藤宇右衛門。大塚權右衛門。田野村源次郎。外に森庄藏御賴にて。御供被申。其勢一千五百騎雜兵ともに三千騎。越中へ御かゝり被成。長谷を通り。飛驒の二つ屋口へ出。角川より急に人馬を進め。古川迄出給ふ。長屋喜藏可重公の御供には。先つ御加勢遠藤大隅守胤基。可重公に引續き出給ふ。次は田島太郎八。徒侯太郎左衛門。長屋甚藏。安藤。西脇。川合。大塚。日根野。齋藤。中島。寺戶。松山。野地。松永。森。分部。中村。手塚。柚原。國分。時牧。吉田。阿波賀。山之內。水野。山藏。葛井。一柳。矢野。馬場。猪子。平岡。飯沼。後藤。都合一千騎。雜兵共に貳千餘騎。おなし日大野を御發駕被成。郡上を經て。野々俣口より入らせ給ふ處。龍ケ峰に三木方の軍兵見へたり。嶮岨成る所に逆茂木を引。嚴敷見へたりけれは。先手衆中打破て通んと進を。可重留給ひ。三木此口を賴にすへし。引違へ益田口より不意に打入へしと有りて。郡上より和良に御出被成。下原へ懸り。竹原道を經て下呂へ出て打入給ふ。三木久安公。此事を聞召。大に驚き給ふといへ共。士卒迄臆せん事を恐れ。縱令は金森親子大勢成共。命を捨て戰んに。負るに定し事や有。小島時光江名子一之宮招寄。松倉には城主秀綱。畑六郎左衛門。一之宮右衛門太夫三宅。

其外之諸侍雜兵共に千騎計籠らせ置其身は高堂に小島の息元綱と。時光呼寄。究竟の兵五百騎楯籠り待かけたり。斯て金森氏。漸々長屋二ツ谷へしのひ出給ひ。先手古川へ出しかとも。廣瀬より逆寄にも寄せす心易かりけれは。法印扨は三木我か寄る事を聞。臆病にて籠城計大事に心得。打て出る心なしと推察仕給ひ。古川にて軍兵を揃へ。つかれを緩々とはらさせ。靜に高堂へ寄給ふ。于時天正十三年酉霜月七日に。しつ〳〵高堂の城へ押寄給ひ。先敵の勇氣を屈させん爲。陣とり備嚴敷して。三木か心底引見給ふに。法印御推量の通り。唯堅く守りて出合す。いかさま堅固に持　らへ。扨を好む體に見へけるゆへ。一軍もせす七日の間城を取巻居給へは。加勢の遠藤此時瀬川原に扣ておはせしか。法印公あまり緩々仕給ふをこらへかね。使者を以て長近卿には臆病を構給ふか。何故手延成仕方に候や。加勢より明朝は取懸り可申なと申被遣けれは。長近卿御返事に。御諫言尤に存候。少存寄御座候故。態と延引仕候。明朝未明に取懸り。責崩し御目に懸へし。御加勢暫く御待可被下と使者を御返し被成。其後御觸被成けるは。明朝は早々相責と被仰出ける。何も此程の三木か體よわりし様子に見へしゆへ。我先に高名せんと。夜の内より時の聲をあけおめきさけんて責たりけり。城には何れも戰ふ心なしといへとも。四方を取切られ。逃かたきを知りて。面々思ひ切てかけ出。爰を專一と防けり。法印長近卿。精兵百騎計すくり立。自身鑓をおつとり責かゝり。一足も引な〳〵と大聲揚て追立々々下知仕給へは。城かたのものこらへかね。ちり〳〵に落行て。戰死の者は少しにて。大半亡ひ果。城内人有とも見へさりけり。三木久安最早叶はしと

思ひ。元綱時光一所に討死せんと。兩人を呼給へと。兩人共にはや落失て出合す。久安せんかたなく。弓弦をはつし。甲をぬき。降人にこそ出られたり。長近卿命計御助け被下。久安難有仕合御暇被下候はゝ。高野山へ登度旨御願被申。仍て願の通り御暇を被下しかは。直に京都へ上られけり。天正拾五年京都にて病死せられし也。斯て長屋喜藏可重公は。松倉城の麓に御陣を御取被成。四方八方に軍卒を配り。壹人もゝらさしと責懸り給ふ所へ。高堂沒落にて。逃來る者とも城中込合けれは。秀綱樣子を聞肝を潰し。此城もこらへまし父久安こそ降參せらるゝとも。我いさきよく討死せんもの也。親こそ臆病たりとも。我討死の了簡そ。面々も武士の道を失ふな。城戸を枕に討死せよと下知して 木戸をひらき切て出る。寄手も長近の勢加りけれは。中々亂るゝ氣色もなく。其上勝

ほこりしものともなれは。一足も引す戰たり。秀綱自身鑓を引提て。命を捨突懸れは。郎從共も思ひ切て。一足も引しと戰ふたり。午の刻より申の刻迄互に引し引せしと。耻しめ戰しか。兩方ともに疲れ果。暫く互に扣たる。然所に可重の御陣の前を。其丈七尺も有らんと見へし武者壹騎。黑皮威の鎧を着し。五枚甲の緒を〆五尺計と見ゆる大太刀をさし。金莚のさし物さし軍配團をもち。月毛の馬に銀覆輪の鞍を置。打またかりて出來る有樣。むかしの朝比奈とも言へき體にて。大聲揚申樣。我は畑氏と申者なるか。我今迄手こわき敵に逢ねは。左のみ手柄の覺もなし。乍去此三木右兵衛督少納言綱秀に。一騎當千と賴れ。味方仕候。然るに久安公不運にて高堂落城に及候。しかし是は久安主從臆病の致所かと存候。此松倉城には我らの有らん限りは。左樣に心易得落城されま

し。ケ樣に申を惡しと思召人々は。出て勝負を仕給へと廣言し。士卒を下知し。あたりを拂て居たりけり。可重公御覽し味方にかれと敵對すへき武士のなきか。彼れを打留しものには高祿心の儘たるべしと。大章にての給へは。可重公の左備之陣より。其さま勇美の武士壹騎白星の甲を着し。紫糸鎧に金作の太刀刀十文字にさし。黑鹿毛の馬のふとくたくましきに。いつかけ地の鞍置。熊の皮の泥障をかけ。其身輕けにゆらりと乘。眞一文字に懸出たり。可重あわやと見給へは。ちか／＼とあゆませよつて申やう。我は是金森の御内にて物の數にはあらねとも。貴殿人もなけなる廣言耳にかゝり。聞にくさにかけ出たり。其日障太刀先打ゆるめまいらせん。いさ勝負とぬきはなせは。畑氏見て。やさしき武士の言葉やと拔合切結ふ。金森方にはこなたの武者。誰とはしらねとも。畑か出立のすさましきにおそれ。迚も得勝ましと思ふ故。只はつ／＼か手を握り。見物す。去とも互に術の覺有し者にや。切懸れは請なかし。互にかすり手もおわす。數度せんとゝ戰ひしか。斯ては果し。いさきよく勝負を決せんと馬の上にて引組たり。暫馬上にねじ合しか。兩馬か間に百と落る。定て畑氏勝つらむと見る處。首と金莚のさし物を高くさし上。月毛の馬に乘替。最前廣言しつる畑氏は。金森の御内に三藏雄殿介打取しと呼り。本陣に立歸る。可重公悅ひ。時にとつと譽ぬものこそなかりけり。秀綱遙に見て。畑氏を討れては。最早味方に勇者なし。何とぞ彼れか當敵を討取へし。叶わす時は同時に討死せよと呼はりて。大勢引くし打て出る。金森方得たりかしこしとひしゆつくしてもみにもんて切まくれはかなわしと一度にとつと城中へ逃入。門を打て出合

す。日も暮れは。軍は明日の事よと互に陣を取つて守りけり。去る程に城方には段々つかれ。迚も此城こらへましと思ふ故。皆々落支度になりにけり。爰に藤瀬新藏といふ三木譜代の侍返り忠之心さし有て。密に矢文を調。金森の陣屋へ射越たり。則可重に見せけるに。射越しゝ方を覺しやと御尋有は。城の辰巳之角より參りしと申上る。可重悦ひ給ひ。頓て法印の御前へ御持參被成。右の狀御覽に入。如何可仕哉と被仰上は。法印被仰ける樣は。新藏か文體のこと。今宵丑の刻城の後の方に火を懸へし。それを相圖に可責間。門を可開と。矢文の返事被致よと有。畏相認被射返。則御供に召連給ふ。山藏縫殿介法印の御前へ被召出させ今日手柄の段御稱美有。右の敵名は何と言しそと御尋被成ける。縫殿介申は牛丸又右衛門に相尋候へは。當國江名子と申所へ小城を構居申畑六郞左衛門休高と申侍のよし承り申。劒術はよほと勝れて見へ候へとも。力は左ほと無之樣子にて御座候が我と戰ひ候內に氣を付見申候得は。組討に仕候。其子細は右の大太刀にて我と戰ひ候內。折々太刀の切先ふら〳〵と下りし故。扨は人おとしにて差たるもの力は餘り無之者と推量いたし。組て勝負仕。打取申候と申上る。法印聞召。城方にて一騎當千と思ふ者を。早速討取事手柄々々と御褒美被成。折紙被成下候則當座の御褒美には。錦の陣羽織を御手つから被下ける　浦山ぬものなかりけり。斯て城主秀綱は。新藏か返り忠は夢にもしらす。今日の合戰味方に利なく。いつれもつかれはて落支度のものも多く見へけれは。其身も降參心出來。いかゝはせんと思案とり〳〵決定せす。案し煩ふ處に。城の後の方より火出たりと。士卒周章騷く。秀綱驚き。こはいかゝとあき

れはて。先火を消えとあせる處に。時の聲山をひゝかし。四方門々一度に破れ。外郭へ敵の軍卒込入れは。急本丸へ取籠。降參申相談極り。金森へ降參願入る。長近卿廉直の餘り。皆々御助被成。何國へも立退へしと被仰渡。何も思ひ々々に逃行けり。秀綱は久安時代より溜置し金銀取持せ。長近卿御親子へ助命の御禮申上。高原の方へ落行。信州へぬけ行れしか。大沼川と言所の郷民共見付。落人の通るそ。殺して衣裳太刀刀をとれよと呼つて。竹鑓山刀を手々に持。大勢立向ひかゝりければ。秀綱侍の死すへき時死されは。必耻の死をすると言は此事よと獨事後悔し。件の金子を川へ投込。我一念の込し金著土民の手に渡りなは石になれよと言つゝ。太刀を抜手元へ來る土民二三人切伏給ひけれとも。大勢折重々々。終に討れ給ひけり。金子今に川底に見ゆるといへとも。取上れは石に成よし言傳へけり。此節杉崎江名子所々の城々。悉沒落仕たりけり。是偏に法印御親子。武勇はけしき故。さしも強かりし三木氏を手の下に責伏給ひ。飛騨國平均に治給ふ。金森家の武勇の程そ類ひなし。爰に一の宮右衛門太夫三宅は。三木繁昌の時分は威を振ひしか。松倉沒落の後は影を隱し。益田郡の內に蟄居して居たりしか。誰しりたる者もなく暮しけり。斯て金森御親子飛騨の御仕置有増には成吉川蛤ヶ城に安藤庄助を被差置。御親子ともに白川通り郡上を越て越前に歸らせ給ふ。翌年御仕置のために。喜藏可重卿益田郡竹原通り御入部の處下原郷福來村にて。何者か鐵炮を打懸奉る。されは可重公之御運强立消へしてあたらす。還て右のくせもの生捕給ひけり。是三宅身近き侍に舟坂又右衛門と申者にて有ける。然とも可重如何思召けん。暫御助置被成候

此事三宅聞傳彌野心止す。三木武士殘黨をかたらひ。一之宮に待伏す。可重又右衛門か白狀にていまた三木殘黨有て恨をなすへきと。兼々思召候御心を被付。御入部之處。一之宮へ來かゝり給ふ處に。三宅五拾計にて時の聲をとつと上け一同に切てかゝる。何れも肝を潰すといへとも。軍に馴たる金森武士。ひし／＼と物の具して供先少しも亂さす。御先手田島勝太。笹俣太郎左衛門鑓を以て諸勢を下知して突崩す必死と定し三宅も。金森家之利刀先に終に打負引退んとせしをは。笹俣田島喰留て引せす。終に三宅を討取れは。殘るものとも散り々々に逃行を。追詰々々切伏突伏三宅妻子眷屬殘らす梟首にそしたりけり。則所之百姓に申付。首塚に築。今に有。押續ひて法印長近卿。飛州御入部下原迄御出被成。百姓共御案内御迎に罷出。竹原の方へ御案内仕候。法印川の樣子御覽有て。此川上は何國そと御尋有。是より拾里計參り。下呂村と申所へ出申候。則此川上のよし申上る。法印聞召。いかさま川緣に付上りなは登るへしと御思案仕給ひ。百姓とも呼集給ひ。下原より下呂迄新道を作らせ給ふ。七里の中山道。此時成就仕候得共。法印公も馬より下り步み給ふ。此七里の間すさましき難所なり。夫より古川へ御越被成。蛤ヶ城へ入給ふ。則城地に成へき所を御見立被成候。しかれ共高山に增りし所なかりしかは。高山に新城を築せ給ふ。年數凡十二年に而成就する。しかし御譜請に取懸り之節は。古川に屋形作り。可重公に一萬石を進。家老西脇右近を被付置。御部屋住にて御座候。高山御譜請の間。高田郡萩原にて屋形を拵。佐藤六左衛門を入置給ふ。其後御身は上有知に御座被成。太閤御築

昌ノ内は。伏見に御詰被成。御給仕。同孫兵衛曾我平八と上田佐太郎也。手柄之人々には。西嶋右近。同左衛門。同吉助。平井孫四郎。棚橋庄助。伊藤權兵衛。石神久次郎。渡邊小兵衛。飯沼源左衛門何も高名仕りたる衆也。手負之人々には。佐久間五左衛門。田島庄太。垣見九兵衛。葛西與右衛門等也。手負討死以上五拾餘人。中にも手柄の第一番は。飯沼源左衛門なり。城の北の方殊に嶮岨にて。上に惣塀有。其内に常は四五人程つゝ番廻りして居けるか。源左衛門か右之嶮岨をよち上る時は。折節番人居さりしか。源左衛門天のあたへと悦ひ塀脇にさしたる敵の旗を拔取て。折よくは城へ火を懸んと塀の上に立上る所を。稻葉方の軍卒見付出し不敵ものか塀を乘るか。あれ打とれといふ程こそあれ我先にと走り來る。飯沼すわ見付られしかと思ひ。件の旗を引さけ。嶮岨成所つたかつらえひつるなとにとりつき。跡をも見すして逃歸る。敵の兵鐵炮を打懸けしかとも。源左衛門運强くして不當。飯沼無恙本陣へ立歸る。比類なき手柄なり。斯て寄手も城方も此程の戰に大小疲れける間兩方とも戰ふ心もなく。二三日城をとりまきし計にて。堅く陣勢をはり。にらみ合たる計にて居たりけり。爰に尾州丈被成。太閤御他界の後は。京都柳馬場に御座被成候。

一。慶長五年。關ヶ原陣有之。此時に美濃郡上八幡之城主は。稻葉右京亮一鐵齋。石田方と見へける故。法印父子是を責んと。郡和良之住遠藤左馬亮慶隆。金森父子兩家にて取かけ。いとみ戰ひ給ふ。遠藤氏は若き大將にてまします故。急に勝負を決せんと。はやり過給ふ間。城より射出し。打出す弓鐵炮に當り。能侍數多討せ。引退給ふ。長近卿御覽被成。彼是と軍

卒に惡口させ。敵をおひき出し。陽にひらき。中を態とわらせ。引包んて突立切立。透間あらせす責給へは。城の軍兵扨はたはかられしよと氣を付。脇目もふらす戰へは。金森方にも打死手負出來。城方には猶又大勢死せしかは。互に戰ひ疲れ。兩方さつと引。城方には門を閉て出合す。金森方は手負をかひほうして陣屋へ引。暫合戰はなかけりり。尤軍は金森方勝たりといへとも。能武士數多く失ひ給ふ。先討死の人々には。牛丸又右衞門。田島太郎八。熊谷內藏之助。吉田孫四郎。南部宗四郎。安藤右兵衞。宇佐美記內。今井重助。馬場彌次郎。伊藤備前。栗鹿作十郎。長屋甚藏。鈴木新兵衞。田能村助右衞門。山城主は無二之石田方にて有けるか。一徹より是へ通せしゆへ。後詰致よし風說有之に付。金森遠藤如何と案し煩はるゝ處に。城方より扱之者有之。取はらひの內に關ヶ原も石田方打負。西國の大名散り〳〵に成り。石田安國寺生捕られしと聞へしかは。互に疑より發りし軍の事なれは。扱相調ひて事納る。又大坂陣には。生捕八人首數百五拾貳。金森手へ打取給ふ故。秀之高名軍忠によつて改。五萬石之大名に成給ふ。美濃上有知四郡。金田壹萬貳千石。飛驒三萬八千石。御知行被成候。然るに慶長拾三年中八月十二日。法印長近卿御逝去被成。則金龍院殿と奉號。今に京都紫原野に御菩提所有之也。其後法印之御實子貳歲の若君萬之助樣と申有之。此若君を駿府へ召呼。上有知一萬貳千石。後々此君に宛行可然旨。可重公に被仰渡。畏り御請被申上。首尾能被相成御座候所。不幸にして六歲にて御遠行被成。去るによつて法印附置給ふ若君の家老富田主水。島野四郎兵衞。池田圖書。三人に千石つゝ被下。御旗本に被召出候

よし。金田三千石は法印之後室。久昌院に被下置。久昌院御死去。後は。御取上被遊。出雲守可重公大坂御歸陣之後。京都祇園にて御逝去被成候。是を閑公と申奉る。依之可重公之三男。駿府に御座被成候重賴公へ。御家督被仰付。是則長門守重賴公と申也。法印閑公御父子之御力量。御軍功揚てかぞへかたし。先飛騨國往古治亂起。有增聞覺しを後々語ル慰に書記者也。

一。飛州古城之跡。城主々改吟味有増に印候。

益田櫻（本マヽ）洞古城之跡有。是は保元之頃の城主にて。向井太郎利國と申て。其後は三木大和守直賴に相續して、直賴長男義賴と云。義賴嫡男は自綱入道休庵迄相續。其後休庵松倉を築移り給ふ也。

一。大野郡三福地村古城之跡有。城主は平相國清盛公之侍。飛騨三郎左衛門景綱也と言。其後前之鍋山豊後守居城ともいふ説有し也。

一。同郡小八賀郷町方村。尾崎の森之上（マヽ）に古城有。城主は鹽屋筑前守也。後古川高野付之蛤ヶ城へ移りし也。

一。同郡白川郷保木脇村之山に古城之跡有。歸雲と云山なり。城主は內ヶ島兵庫頭と申也今も歸り雲と云也。

一。同郡白川荻町村古城跡有。城主は山下大和守と有。是か定て山下豊前守之事にて可有歟。

一。吉城郡高原殿村に古城之跡有。江間小四郞輝經より相續して。左馬頭時盛迄十六代領するよし時盛い嫡男常陸介輝盛代に。天正元年酉四月廿二日に。三木か爲に沒落し畢。

一。吉城郡八日町村之山に古城之跡有。梨子打ヶ城と云。江間殿之出城歟不審也。

以宮內省圖書寮本謄寫校合畢

續群書類從卷第六百十九

合戰部四十九

大塔物語序

大而天下之治亂盛衰。小而一事之得失成敗。非史不能覩固也。傍史之於正史。猶分派之與本流。正史本而傍史末。是亦不待論也。然而彼略而此詳。彼逸而此存者。間亦有之。此傍史之不可捨也。諏訪社大祝。今刺連今井信古。故家也。多藏古寫書。內有大塔物語者。記應永中小笠原長秀。爲信州守護事。嗚呼後小松帝之代。年紀綿邈。事跡難審。信州僻遠。載籍不具。且其抗命荷戈之家。卒然漸滅。宗祀不存。當時信州擾亂之情狀。及著姓甲族。據有土地者之名姓。除此書外。絕不聞有記之者。雖小冊子哉。實可謂空谷足音矣。今井氏原本。蠧蝕頗多。成澤寬經惜其歷年彌久或至大蠧也。懇請以謄寫之。捐財鏤梓。以公諸世。好古之士其庶幾有取焉。

嘉永三年龍集庚戌秋九月加藤維藩撰

□ □

大塔物語

去應永七年庚辰九日廿四日。於信州更科郡布施鄕合戰次第事矣。

夫政者。天下泰平計略。國土安穩根源也。而近代御政務。賞罰共直而。都鄙悉令靜謐。上下誇無事。万民歌歡樂。然間孰不貴憲法之裁斷。孰不仰儀直之御成敗乎。

抑信濃國者。小笠原信濃守長秀。親父長基。祖父政長。代々爲補任守護職處也。長秀募由緒經訴訟處。上裁既無相違。則賜安堵之御下文。應應永七年七月三日賜御暇。立京都。同廿一日令信州佐久郡下着。大井治部少輔光矩者。依爲一門。先馳越于光矩之館。披御敎書。令談合一國成敗之趣。同村上中務少輔滿信者。謂一家依有內緣之儀。以使節經案內。其外伴野。平賀。田口。海野。望月。諏方兩社。井上。高梨。須田。惣國人不殘以使者觸之。源家人々者素云一族。且爲上意間。不及是非之左右。爰大文字一揆人々者。爲故敵當敵上者。廻思案一切不用之。可申請別守護人旨。內々令評儀畢。去程小笠原信濃守長秀者。撰定吉日良辰。打入于善光寺。長秀其日出立路次之行粧。巍々。蕩々。綺羅耀天。景勢擺隣。先一番鎧韓櫃並長枝以下百合計昇續。其次色々馬共五十疋計牽連。次重籐節卷樓白木塗籠籐之弓。槽尾靡尻。切生。中黑。鵠羽。鸛本白。鶴焦羽作矢肩者百人。次以金銀爲蛭卷。朱柄鑓持百人。次白糸赤綴。縹。洗革。小櫻威等之色々筒。丸白柄長刀持百人。其次眞黑鵯毛馬。余長八寸飽太逞。置金覆輪。三松皮磨螺鞍。小房之鞦芝打長颯懸。那波鐙白磨轡含賀次。舍人五人牽之。凡此馬相好者。兩眼張鈴。兩耳莖竹。頸者如龍。後者築山。

股者似琵琶逆立。股爪地拘勝馬三長三短悉調無一欠所。此馬前肢勾中。後肢搔敷突片編木。噉白沫。懸牽手。倚舍人驤驍風情。只驊騮騄駬之半漢也。次容顏美麗。姿淳常。間童子五六十人。交綾羅錦繡之節。刷奇麗之衣裳。其次家子若黨三十余人。持銀作太刀。烈二行。眞中長秀乘塵取被扈從。前後左右強力達者力者七八人。強儀推參之下部十余人。或折花装束。或頸挿紅葉。色々思々出立。目樣貞樣而。异上件塵取爲躰。偏誤上方出御之粧。恰恰見物之諸人。莫不云驚目也。其跡者騎馬也。前打者頓阿云力阿彌。遁世者。此頓阿彌者面貞醜而其躰太賤。雖然於洛中者名仁也。連歌者學侍從周阿彌之古樣。早歌者伺阪波顯阿會田彈正之兩流。物語者古山之珠阿彌之弟子。辛香宏才者。讌師匠程之上手也。又狂忽而舞者催當座之興。歌者解座中之頤。件金襴之頸巾。誂盃窪。魚綾朽葉。綾純子色々小袖突耳根。所孌片飼之駒。被胡檳皮張鞍。無四度計打。以蝙蝠扇打鳴鞍山形。一聲歌打行。誠究淵底風情。言語道斷而。不及是非之批判。今日見物者。以頓阿爲規模。其次中河三郎。飯田左馬助入道。山寺五郎。武田上野守（介）。於曾七郎。古米左近將監入道。下條伊豆守。山中常陸守（介）。赤澤但馬守。住吉五郎。伊豆木美作守。下枝尾張守。標葉若狹守。櫛木五郎太郎。織戶肥後守。非深勘解由。鳴海式部丞。關豐後守。其外一族外樣人々。都合二百余騎。皆家折之烏帽子。狂文生襖袴。夏毛。炼二毛。熊皮等行縢。白篠節卷。棱白木之弓。野兜猿皮箙。鷹皮等箙。尾鹿毛。栗毛。葦（色カ）毛。瓦毛。黒鮫。連錢葦毛。雲雀毛。踏雪。月額等毛々。馬共。或被白鞍螺

鞍。或置豹虎皮等張鞍。思々乘連。眞深茂打開。中間力者小童出立。云中々愚也。其中若藤原者。弓與蟇目押取副。追出犬懸心。有馬掛出風情。或居連鷂兒鷂。有犬呼懸人。其次居鷹相好者。極白生。鷹頭淸々似秋月。眼如明星。頭者戴盤。頸懸持經。日覆毛家門刺庇。靑觜長。頤薄肩蜿々。而海中如二一岩指出岩稜白豪月明。而。三四之毛細。威光如大家。背似石難山之流。吳羽取毛疊伏綾。狹衣之毛如浪之漂。重鏤破鈴保翔毛通雜。亂鼻立針。亂糸亂練糸羽前納亂翠之下。翡翠毛隱爪。七並胡籙毛。厚重如椿葉毛。股長毛無。脛短近來名鷹也。譽之猶不足。見物諸人善光寺南大門及蒼花川高畠打履子。無所。凡善光寺者三國一之靈場。生身彌陀淨土。日本國之津。門前成市。堂上如

花。道俗男女貴賤上下。思々心々風流。不遑毛擧。若殿原者例目結十德。室町笠引籠。有爲口覆躰。或兒若僧中。童子戶隱山之。若山臥有彳亍風情。或傾城白拍子。夜發之倫纒紅紫之色。染蘭麝薰。此彼留連。有簱所。又有由女房英雄者。莅簾之際。立忍美女之隱。有變惑風情。其外異類異形之見物衆。如雲似霞。去程小笠原信州。打入于寺家。成安堵之思。則定奉行人。宗大犯三ヶ條。立押買狼藉闘諍軍馬等之制札。任傍例令遵行諸人沙汰。然間訴人國人群集。遂對面處。長秀會釋之様。不結紐不帶扇。增而不及一獻之沙汰。偏公家之上﨟兒。傾城之振舞也。緩怠至極之間。嘲哢乘上下之人口。始終可然不見。凡仁義禮智信之五常者。以禮義爲先見。雖然長秀久祗候公方。雖伺其法様。麒麟猶非無一蹎之誤。蓋以其謂

歟。爰大文字一揆之人々。未及是非左右馳寄于窪寺。相談事子細。意見區。衆儀不定處。禰津美濃入道法津宮高下總守貞兼。相擬云。所詮小笠原與當方取攻戰防戰之儀者。不暨菟角之談合。小笠原今度者承上意。戴御敎書令下向之間。不對面者。且似奉忽緒公方。先試須遂對面。其後定守護役之外。搆非據之新儀。至于掠當方知行之領地者。厥時迄于弓矢事云。上聞尤可爲潤色之儀云々。衆中傾耳側目不及返答之處。根津宮內少輔時貞云。此儀乍云可然。始終可取弓矢者。對面頗無益也。其故者養鷄者不畜猫。牧獸者不育豺云有本文。小笠原與當方代々非父子之敵乎。長秀持慕國者。惣國人之煩。當一揆之大事也。綺已違期者。後悔不可立。先云々。是又道理至極意見也。雖然以前談隱便之儀。先可有對

面之由。一揆評儀事畢。去間則致一獻之用意。送馬太刀。各致慇懃之禮。長秀開喜悅之眉。成一國平均之思。既八月廿日余之事也。臨西收期。地下之所務最中也。河中島所々者。大略村上當知行也。且稱非分押領。且寄事於守護之諸役。令入部致所務。是則小笠原滅亡之始也。暫國靜謐之間者。宜以正直之藥治訴訟之病。挑憲法燈。宜照愁歎之闇處。忽住貪欲之心。背法令文。恣行非據之强儀間。甘露乍變成毒藥。不賢之所致。非口惜事乎。去間號國一揆村上滿信佐久三家大文字一揆之人々。內々觸廻子細各令同心。所々入部之使出。或追立。或討煞梟社。弓矢手合。國忩劇之始成。大井治部少輔光矩。依有存子細扣途中。其外國人徵合取陣。可及合戰行儀。定已畢。村上滿信者。九月三日屯兵。擧旗打立。相隨

人々誰々。千田讃岐守。飯沼四郎。風間宮內少輔。入山遠江守。高相肥前守。雨宮孫五郎。生身大和守。重富四郎。小島刑部少輔。飯野宮內少輔。横田美作守。廣田掃部助。吉益藏人。廬續山城守。蒲野式部丞。都合其勢五百余騎打出。屋代城篠井岡取陣。伴野。平賀。望月。櫻井。高沼。洲吉。小野澤。皆加一手。其勢七百余騎。上島取陣。海野宮內少輔幸義。舍弟中村彌平四郎。會田。岩下。大葉。飛賀留。田澤。塔原。深井。土肥。矢島以下引率。其勢三百余騎。山王堂取陣。高梨。薩摩守友尊者。嫡子樟原次郎。次男上條介四郎。江部山城。草間。大藏。木島。吉田。菅間。於始而其勢五百余騎。二柳取陣。井上左馬助光頼者。舍弟遠江守。万年。小柳。布野。中俣。須田伊豆守。島津刑部少輔。各加一手。其勢五百余騎。千隈河々端取陣。大文字一揆之人々者。

仁科。禰津。春日。香坂。宮高。西牧。落合。小田切。窪寺。其勢八百余騎。當布施城後。芳田崎石川取陣。各相分十一手。方々取陣。思々旗笠驗。幕文祉讖。一文字二文字。一引兩。二引兩。木瓜。輪違亂文菱形龜甲。連錢裾濃。蝶丸。鶴丸。三葉柏。二本唐笠。三本松。天蓋。揆風耀夕日之景。禰亘爲躰。一黄。菊萱。女郎花。不異靡野風。長秀未聲寺家。軍內談也。長秀云梟者。暫栖龍寺宮。京都立使者可申成他國勢歟。雖爲小勢先可致一合戰歟云。飯田入道進出。不及合戰而注進。太不思寄。頓馳懸決雌雄。兎万死逢一生者。其時注進祗面白云。皆々同此儀。九月廿三日其勢八百余騎。自寺家打出。犀河打渡。横田鄉取陣。敵餘目猛勢。守透移于鹽崎城。爲待軍評儀。九月廿四日寅尅。自横田陣夜深打立。指鹽

崎草駒足櫟々打處。坂西次郎長國ハ。赤綴鎧ニ。〆同毛甲緒。宿鴾毛馬。有長五尺計乘任ニ。懸紅裾濃母衣金同丸云重代太刀有六尺三寸四尺欄中押取捧中。差霏駒手繩。馳出于旗手前鐙踏張堆立上擧大音云梟者。長秀被聞召候哉。敵勢者四千余騎。御方勢者八百余騎也。不可有牛角之戰。但見舊記。唐（唐土）項羽高祖之戰。吾朝源平兩家之諍。以小勢勝于多勢事。不可勝計。南樓之月。詩人翫之。立田初瀨之花紅葉。歌人知之云。龍得水昇。虎靠山眠。合戰之丁者。關武者社知物。長國恐譜代生弓矢家。盡續其業。究竟。今日師者。長國承奉行。軍可下知仕云。長秀呵良々々咲。尤々謂聞。諸軍勢聞之。誰不死折臂呀言。各々成一騎當千之思。我先進。又長國進出。敵猛勢。御方者小勢也。魚鱗鶴翼之行。還迹在之。

但走者不見地倒。欺敵者必亡云。若敵鎮返掛煩者。見理可懸。敵利鬼懸者身方鎮返。手繩與手綱押取紐可待掛。鼻勢手傷切。一勢剪頽者也。治定勝師爲大勢痛一陣破。殘黨不全。龍吟雲起。虎嘯風立。長國被下知。各吾不劣鬭。爰長秀馬迴之勢。百五十騎計。號曼荼羅一揆而。皆曼荼羅於爲纓。凡出常圓。源家大文字一揆之人々譜代無雙之勇士也。雖爲田村利仁餘吳。將門。致賴。保昌。及樊噲。張良化現。對彼等無左右非可合面矧小笠原勢爲躰可謂蟷螂取斧。向立車。去程長秀。松皮旗一流悄々差。園八百余騎眞中。守鹽崎城打程。夜者皛々明渡。自村上陣見之。觸迴陣中。或〆直馬腹帶。或縛理表帶。嚣嫱不聞物鳴音。爰千田讃岐守信賴者。一番馬引寄乘飛駄。今日軍者一

云逸物。名馬乘閇通々馳並坂西次郎長國與撑組。兩馬共動落。長國力勝成梟者。不落付取押搔頸。樟原郎等不討主。十余人落重同枕討死去程。高梨勢不堪颯引。小笠原勢又打勝守大將旌手。欲馳移于鹽崎城之處。大文字一揆之人々八百余騎。荒勢而磬梟。時聲跋擧。不餘不漏旭懸。海野。望月。須田。高梨。村上。乍云負師。村雲立。磬大勢自方々[illegible]懸。間。偏失爲方無力馳込大塔古要害。俄事其邊剪殖木結鹿垣埋屛築々地。穿堀。上櫓昇々楯。相待後攻之勢。去程。神家。大文字一揆大手搦手堅方々。押取籠取陣。四方攻口上城樓。續夜日責之。不撰月日。神無月成。俄馳入事。城中兵粮無一粒。既欲及餓死之間。飯田入道云梟者。曩祖八幡太郎義家追罰貞任宗任之剋。出山中逢大雪。軍兵被責飢寒。

徒死于時。義家獨其身暖而又不飢。燒鏑鏃煖軍兵。無恙令歸洛。其上周伯夷飢未必不賢。不如煞馬爲食物續身命可待後攻之勢諫。被曳梓弓弱疲臥下薦共。馬引張刺煞切取肉。自口流血各哺之嵐勵霜寒折節。彼此蹲龜連。或吸血振戰有樣。眼前餓鬼畜生道是也。攻口之軍兵共各擧城樓。直下者共不憚。向上只喰馬計也。爰古米入道一人。廿一日空腹而不食之。優長様也。去程。白駒翔暮山。靑菟走雲路間。十月十六日成。坂西次郎云梟者。彌々如何人々。我等今日左右廿一日空腹也。仍身力劣了。剩自害不可叶。又飢死事當家之恥辱。後代之瑕瑾也。去來一同爲自害。於然者面々永可給名字。各子共一人宛忍落。其路心安可切腹云々。皆々同此儀。古米入道子息將監。常葉入道嫡子下總

守各近付。汝等承。紛夜半忍出當城。參鹽崎。我等有躰長秀懇奉語。可廻後攻之籌策。若於路次有自然事。必於死出山三途河可追着。全非扶汝等。只為廻方便也云。彼等就々聞。屢咽淚謂梟者。縱我等雖為沙汰之姿。走入當城。可見前途。何況於弓矢取身乎。正奉見捨可死親。脫万死期永代事。生涯之恥數何事如之云。恰云給。進退惟谷話。古米常葉被詰當道理。不及重言之處。長國巧言援喩。無拐宥不及力。兩人續夜半忍出大塔城。悉走着鹽崎。長秀城中作法懃語申。長秀聞之。思儲事成共。惘然嗚呼宛。只咽淚計也。大塔者敵陣。差覗四方。日夜要心堆梟。難翔飛鳥。彼等可返遣方便悉盡了。失為方計也。而大井治部少輔光矩。其勢五百余騎。途中扣光子敵身方之落居未定

間。長秀遣使者。可預合力之由。平雖相憑。其返答不謀課。去程。大塔之人々者。若哉待相圖之燈火處。曾思其無雲。然京極中納言顯輔卿。送淡路之遊女歌云。

いかにせん燈火も今は立佗ぬ言もおよはぬ
淡路島山と

詠。今更被思出哀也。長浮世之理就々思連。電光朝露命。無常之風不吹程慧種菩押膚脫。腰刀尖拔給擣節。赤澤但馬守御前有梟。走寄抱留申。携刀奉制止之。有良暫但州被申梟者。古今携弓箭武士之習語者。能々聞召。當初源平之闘。平治二年左馬頭義朝。掛負遂慶（待賢）門戶之合戰給。尾張國智多郡住人宇津美長田庄司被討給時。兵衛佐賴朝十三而。比良研被生虜令上洛。於清盛入道之前既可被誅之處。依八條池之尼上之申狀。被遷流于伊豆國北條蛭小島。送廿一ケ

年之星霜給。爰高雄文學上人捧院宣。馳下北條頼朝可有謀叛之企之由。再三奉勸之。頼朝令追討平家事假令如蜘蛛張網覘歸鴈。雖然門學非直人勸給上者。任運天道。投身於國家。可打立而。引率江馬北條。押寄于山木舘。討取兼隆。栖籠于土肥杉山石橋邊。聽大庭三郎景近三千八百余騎。押寄于石橋山。散々責戰。多勢へ無勢不叶。而頼朝。被打成主從七騎。境節雨之夜師。闇々被墮落木葉。伏木中秘給。梶原平三景時。大庭手先懸成臬。如何思樣哉有欽奉扶。是八幡大菩薩御影向有與覺而。自其被召御舟。押渡安房國龍島。語東八ケ國之侍。謂三年三月。奢平家一門追遣西海浪。拳天下於手輪給。偏存命故祉承樣々申慰。御自害止。就而大塔之人々心内祉無慚。思籠鳥出。豈擇遠近林。念轍魚枯只求斗升水。去間楠木石見入道。文武二道之達人也。如何人々自害去皐嗟噫去年今日此比大内追討之折節成敗都討死。上名於雲井。可成花洛土身。今在僻遠國。成鄙土祉口惜。去來寂後哥讃

苦哉敷も都の花に別來て今日信濃路乃露と消ぬる。と

打詠腹十文字搔切北芒之露失。懸中尙留哀常葉入道留。嫡子下總守謀落次男五郎八郎彼等二人留置城中。雖後悔千萬非可憾誰。未習陣頭之棲若者共。廿余日空腹各失氣力疲畢打伏。月落城樓霜冷終夜常葉入道子共二人搔乘膝上覆縨笠驗遮手防彼等之寒。夜深人定物孤獨任來方行末思連。少不寐。只咽忍音之泪。醒々滞居有躰。不被當目。古米入道見之。彌々如何常葉殿。汲一河流。宿一樹之

陰非一世之契。況汝與我斷金芝蘭之昵既年久。今又同死後事。先世之宿因不淺而汝思子心切也。全非他上。同心之悲歎只在此事。吉々無處于噫。今者住臨終正念。各令自害可願同蓮之臺諫云。常葉入道恥古米之心。押揮流淚。八郎彌々押驚云梟者無慙哉。汝去三月半比。立出伊賀良庄時母頻搖名殘。見二人之事者既成長不及菟角申。八郎事者未成人出再不歸。戰場之慣也。彼留置。自然之時可立御用由。長秀申給、打蜜雲乍。余浮雲氣書詢云事之。小不違。我等父子三人自害而送次第之信者。何計歟。歎其恨。被想像。只今樣覺。後悔之泪不堰敢云。八郎流草唏哉思鈒。押揮落淚。數物不言而。然有本哥云。

陸奥乃そとの濱なるうつほ鳥子はやすかたのねをのみそなくと讀り

現爾々々無墓至于鳥翅。親子恩愛悲者切習。竊於人倫哉。理至極之歎也。彼八郎者此年來。伊賀良庄淨光寺梨本坊萃髮有梟。凡心操調和而。如隨水器。剛柔進退。而似雲聳嵐。芙蓉之眸顯柔和之相。丹花之脣成百媚。嬋娟粧窈窕容貞。翡翠之釵青黛之眉。悉相調更無醜所。西施之顏色無恥所。而見人迷魂。聞者搖心。一寺之寵愛衆徒之渴仰在此事。去三月中旬之比左右者。於彼梨本坊。臂於腐案上。曝眼於書窓。伺詩歌管絃之道。太優長人也。今度長秀頻請下爲近習。被召具。梟祗無由。彼八郎者生年十三成梟。嘍有云梟者。未知食候哉。去元曆二年。源九郎義經。平家追討其剋。於攝津國渡部福島。梶原與令致逆櫓之論。依彼遺恨梶原潜巧虎口之讒言。仍兄弟之御中不快。遙々起吾妻與給。文治五年閏四月中旬比、

爲篠原大郎其原泰平被討給時。長崎其子竹童丸、十三而射武藏房弁慶嘆嘲揚其名末代。又去建保年中。和田義盛謀叛之其闘。古郡兼忠三男鶴次郎十三而。射落花蘭。又四郎。馴水魚不嫌小水。不痛洪水。眠花小蝶不厭大木。不撰小草。被擧敵御方。曝體由井汀。揚名於雲井梟社傳承。竹童丸鶴次郎全不可劣。今度父之御共申。心安越死出山三途河。可留名於永代。差勇作云。浮入江水鳥不安下爲風情。打鳴呼心中。彼惣像惘也。於戯有生者必滅。天人終不免五衰之悲。可惱可憐。八郎十三廻星霜者。只一睡之夢。似槿花一日之榮。八郎留置古郷母之事發思出。詠其方之空。先途程遠馳思於鷲山之夕雲。愁涙進心不被繫心情恨々後會期遙也。那無一句之詩。八郎扇端角書付梟。

故郷在母猶子涙。旅館無人暮雨魂。

世乃中にさらぬ別はしけゝれと親に先立路
そ悲と

打詠乍。人目忍泣居。又坂西次郎長國者。心太優長。而嗜文武之藝。隨分珍重男也。郎等宮淵宮内左衛門慰近付。彌々如何承。弓矢取身之習。爲敵亡身事。少不痛。乍去懸心覺。留置伊賀良庄松壽丸之事也。當年至于七歳、日夜不放手彼之事。當成冥途之障書詢宣。宮淵只咽涙。暫不言。恨猶恨。悲猶悲。老後子悲也。聞彼見是。莫催涙。長國次第之信書置梟。

郷關只在白雲外。滿目干戈暗戰塵。

殖おきし我古郷の松風は浦みやすらん又と
問ねはと書

暫不差置筆眺望古郷之方。雲水淼茫莽斷愁腸。長國引替心云梟者。我等徒自害

而無詮。去來成樊噲破鴻門怒一同切出。遭逢于思敵爲討死云。皆々尤同心。器々出立。開大手一戸張。喚叫切出。神無月十七夜之事。臥待之月出離山端。無類于嵐雲。只如白日也。大手之一攻口者。禰津之越後守遠光固之。其一黨淡路守貞幸。右京亮宗直。同上總守貞信。三村孫三郎種貞。櫻井。別府。小田中。實田。横尾。曲尾。人々不非透間相戰。又諏方勢者。有賀美濃入道性存。其一黨梶澤豐後守泰時。上原。矢崎。古田。其外究竟宗軍兵相撰三百余騎手滋相支責鬪。城方之兵共殘少討死。相殘兵士者不省死生雜人交入亂登越屏鹿垣。我先騷動。潜堀水者。抇切潰抇突入。剝々辷。突々縋。或被剝取着物成赤裸蛇廻處。攻口之雜人共溢懸。以棒撿薙臥打倒。搔摕頭個細足投臥振廻。喚叫事。無云計。是物能々比。獄卒阿防羅刹等鬼王共。依罪人輕重以鐵杖打縛。是不過見。自業自得有樣。因果之程社無慙。爰坂西次郎長國。黑革威筒丸。〆同毛甲緒。自何輕氣出立。開搦手戸張。喚叫截出。搦手之攻口者。仁科彈正小弼盛房固之。同一黨駿河守盛光。千國見八郎。澤戸五郎。穗高。戸度呂木。池田庄料以下二百余騎相支。長國究竟之兵威作金筒丸柄中押取棒串。出所由良々々顚間所黄良々々顚。不嫌堀谷。踊越飛越。與大菩名梟者。遠聞昔。近見目。忝清和天皇御苗裔。新羅三郎末孫。小笠原次郎長淸。其子兵庫頭政長次男。坂西次郎長國。生年廿一歲也而。内心入鷲窟。營螢雪之勤。外嗜弓馬之道不違離幃之籌。文武二道之珍重男。倚會哉々々喚懸。詰口之番武者共。大勢心得。岸破地墮。猥騷長國搔散之端武者共

互合打物損無詮思。少高所走上跋扈輿立處。仁科彈正小弼盛房。白糸緘鎧。同毛甲緒。直綱六重代太刀有梟五尺三寸。汰平十文字渡合。菱打違。半時計責鬪。未決勝負之處。盛房手者。大勢落重眞中押取褁成水火之爭。其躰似獲聚蟻之青虫。長國宮淵主從後與後差合。嫡小膝傾甲綴。向樣追樣前後側不暱押付。往當。蜘手角南八花形亂文菱形。韃四方蠅返。水車。五色雲成二。散々彼程。彼切立大勢少成。突足處長國少思續息。打物曳抑。搔紛雲間之月通走拔。欲一間遂落之處。宮淵驚走連出來。城中人々奉始飯田殿。皆々打死候云思樣。名社惜弓取之身。而見捨眼前之舅飯田殿。雖爲強顏命生。互不可期千年榮花。只一筋思切。千隈川不有岸打浪。又立歸。大塔飯田死屍打重。腹搔破失。懸中取分

哀觀。常葉入道最後也。彼等父子二人。臨自害之前後。手與手取組。向西佰聲接取不捨之悲願。念佛唱高聲。差違自害。可憐齡也。五郎者廿一。八郎十三歲。於戲無門之月者藏雖顯寂滅理其悲更難忍。閔哉防難防邪見之刃。獸雖獸無常之風。凡耳目所觸莫不催淚。神無月十七夜事。時既屬初冬。草木皆含蕭索之色。紅葉隨風繽紛。盛者必衰之觀念。豈非是哉。諸行無常不一方。嗟噫松柏顯霜後。貞臣知世危。八郎之心操無不耻八。遠方近方便在知由中。常葉枝葉枯行。標葉下枝無殘。雙雲消。凡自害討死人々者誰々。飯田入道古米入道。節木石見入道。常葉入道。父子三人。西次郎。標葉出羽守。同若狹守。赤澤駿河守。武田上野守。大井大藏丞。關豐後守。織戶肥後守。下枝河內守。下條美作守。鳴海式部丞。井深勘解由左衞

門。布施兵庫助。宇木。中嶋。駒澤。荒屋。髮白。四郎。稲富源四郎。大境中務。嶋津大藏。和田太郎。於利六郎。宮淵宮内。橋爪小三郎。落合三郎以下。惣侍名字三百余人。雜人等死屍不遑羅縷。去間。明十月十八日。攻口之軍勢寅時打立。自身々々馳廻死者取頸。半生者差留目。落行者打留。或有被截落肘。或有被擲碎股膝者。半生之者共。彼此蚑散處押攢々々取首。言語道斷作法也。愛香坂左馬亮入道宗繼暫塞目心中被思梟者。六道無外只有眼前。弓矢取身之習。爭非人上。偏源起自貪慾之心。皆誇名利。易消不省露命。思而求百年之榮樂故也。倩案之。愛着執心之愚人。冥途苦患又々如斯。今彼等之爲躰。万兩金非物數。廿從十膳之王位不分獄。可厭者。婆婆電泡之栖。捨而可捐者。弓箭之惡緣道也。觀念而又馳廻下知。去間善光寺妻戸時衆。同十念寺之聖。大塔人々既自害開召。急至于彼合戰庭之爲躰見廻給。不被當目作法也。昨日今日左右者。將美々敷見々人々。皆成屍在郊原。人馬骨肉散亂。曠野紅葉如飄風。蔓草染血似紅錦暴日。緣邊親族之僧法師。或拾骨。或拘死骸。爲悲歎滿泣事無限。前代未聞當世不見之樣也。左右人遁世於商山之月。隱身於竹林之雲。聞彼見之人。此時不發心者。期何時哉。彼時衆達。此彼落散屍共一々取納。或成栴檀煙。或築墓塚。立卒都婆。各與十念。遍勵彌陀引接之願望。利益之。至于無墓形見筆跡取集。被送妻子方。爰櫻小路玉菊花壽云遊女。此日來坂西次郎結借寢之夢。不忘其情。立出大塔尋彼死骸。雨雷泣悲。奉濕時衆。懇取納歸于善光寺。讓墨染衣身偏訪菩提梟。優珍重樣也。一首哥角計。

思きやかゝる憂世に假ねして長き夢路を歎くへしとは

既大塔要害落居之間。惣軍勢旗廿流計。撓野風。引合十一手。差塩崎城。櫟々打程。纔差寄押取裏取陣。城中小笠原長秀。赤澤對馬守。榛葉七郎。常葉下總守。古米時盛。飯沼六郎。赤須又三郎。中越備中守。松岡次郎。知久佐渡守。宮田大和守以下甲兵。百四五十有梟其。去廿四日之合戰各拱手閣。大略瘡疵半死半生而無可立用様。長秀之浮沈又極之。然間大井治部少輔光矩者。小笠原一家之家督也。非可見放。國又一同之一揆也。不可有不同心。云捨云給進退惟谷間。打出丸子扣途中之處。小笠原及浮沈之由有其聞。流草難捨之間。平押入令談合村上滿信。致籌策之上者。無是非引籠當陣。諸軍勢各引散方々。畢長秀無甲斐命計。雖被扶生光矩。更無可雪會稽方便之間。則經海道令上洛云云。爰村上大文字一揆之人々。憚虎口之纔訴捧目安狀。注進合戰次第。村上中務少輔滿信。並大文字一揆之人數等。一同連著（署）申子細事。其狀備。

右當國守護職事。小笠原信濃守長秀賜安堵之御下文。去七月廿一日令下國。致一國平均沙汰之條無相違處。事於寄守護。諸役掠譴代相傳之私領。行非禮之間、愁訴至極。而不圖迄于合戰處也。是全非奉忽緒公方。若此條存紆曲者。正八幡大菩薩之御罰各可罷蒙候也。然則被差下滿廉之御代官者。彌可致忠節之旨。略言上如件。則達上聞。可被差下嶋田遠江入道。入道由御評定畢。爰留物哀。常葉入道之妻女也。於大塔子息八郎書捨。無墓筆桃。海松房自善光寺妻戶以時衆被送之。此時衆無幾程屆伊賀良庄。常葉

舊宅見給。其爲躰早晩。庭者被埋木葉無跡踏付人。荒籬之愁蘭含露泣。庭前老檜得風悲。侘人之可住宿見加良。歎加琴爪音。冷々如夜鶴憶子于籠中鳴。自打聞思合哀也。彼時衆立寄門前尋案内。聽白内蓬髮霜新翁一人立出。則語子細問。翁慘迷入家中。八郎母角告。女房聞之夢幻之心地而立出。時衆問事之次第。爲思儲歎之躰。少不言。只咽泣。無墓形見軍遊手髻海松房仅出而取之。女房請取而押當良倒伏喉嘆歎悲事無云計。時衆稍暫在。合戰之次第最後之泣（趣）懇語之。家中動滿顰眉食便有躰。絶比類。女房餘無遣瀨任彼時衆爲戒師奉。被剃髮。苔衣窶身梟社哀。此時衆思樣徐見世上之有樣。世間出世而不叶心。日々朝暮觸事。隨緣莫不摧心。未捨身社希

吉野山尙奧深分入覽憂事不聞所有哉打詠宛其任不歸善光寺。直高野山登。任身於彌陀引接之誓願。隱路於聖主來迎之雲文。

佛得道遂非疑見。可然善知識覺。左八郎之母不俺歎之事可忘共不覺。無甲斐命長柄。謂昨日今日暮飛鳥川流早水底之月日漸積共。無可待子。無可來親。客宿蹲踞居爲如何。

侘ヌレハ身ヲ蘋ノ根ヲ絕テ誘水有ハイナン
トソ思フト

詠ツヽ。三途瀨川先立路ヲ尋ツヽ善光寺ヘコソ詣ケレ。山城ヤ。古幡ノ里ニ馬ハ有ト。君カ爲ト恨侘歩行ニテ出ル旅ノ道。今日足引ノ山越ヘテ。伊那ノ篠原分行ハ。日モ夕暮ノ鐘ノ音聞モ悲キ身ノ憂。其夜ハ夢モ不結。又此宿ヲ立別レ。稻葉ノ山ノ峯ニ生ル。松トシ聞ハ如

何計ッ心嬉シ道ナラン。海士ノ苅藻ニ住ム虫ノ。吾カラト嘆キ思ヲ諏方ノ海ヤ。衣か崎ヲ外ニ見テ泣々行ケハ冬ノ日モ早ク山口ノ里トカヤ。常葉山奥ニ有テフ岩屋路ノ遠路近路人ニ事問ヘハ。爰ニモ里ハ有坂ヤ。一夜留マノ假枕。不明ト告ル鳥ヨリモ吾コソ增レ忍ネ音ノ。涙爭フ袖ノ露。丸子ノ里モ近付ヌ。而テ又末ヲ詠レハ。嵐ニ類フ浮雲ノ時雨テ渡ル月影ハ。千曲ノ川ノサヾレ石。君が踏ケン跡ナラバ。形見ノ玉ト拾ハマシ。坂木ノ宿ヲモ打過テ。西ヲ遙ニ見渡ハ。我心慰兼ツ更科ヤ。伯母捨山ノ峯續キ。壚崎ニコソ着ケレ。

あくかれてよるへも波の海士小舟憂壚崎ニ
かゝる身こそ憂ト詠つゝ

去程ニ臻ニ大塔ニ無墓尋ル跡ヲ。白骨新ニ積重ヌ塚有ニ卒都婆問之ッ常葉之墓驗ット云フ。立寄リ心靜ニ念佛申。日來ノ睨小夜ノ寐覺ノ睨言共書詢語共。山彥タニモ音モセス。無親不見子。只草茫々而露森々タリ。爰ニ蹉跎ト歎悲有樣。心ノ中被想像哀也。將泣々是ヲモ立別レ。自其直ニ詣善光寺ニ。伏拜生身ノ彌陀ノ。則成妻戸ノ時衆ト。晝夜六時ノ不怠。常葉ノ入道父子三人ノ後生。善所頓證菩提廻向ノ被訪。梟社難有樣ナレ。爰ニ香坂ノ左馬助入道宗繼。今度大塔ノ之人々ノ滅亡銘ジ心肝ニ。思淺猿不及歸宅ニ。自當陣詣窪寺ノ觀音ニ。三七日ノ通夜申ッ奉祈請ノ道心堅固ノ之心底ノ。大慈大悲ノ之誓願爭ヵ無其驗哉。則蒙ニ樣々ノ夢想ヲ。宗繼ノ所願成就シ。子息ノ刑部ノ少輔ニ悉ク讓ニ遺跡ヲ。令出家。登リ高野山ニ。於萱屋堂ニ三年致難行苦行ヲ。成念佛ノ行者ト。修行シ諸國ヲ。令利益群類ヲ。是併先因ノ所酬。難有云云。可仰可信。哀成事共也。

大塔物語了

文正元年丙戌應鐘上旬諏方上社栗林五日市

庭閑室而寫之文字可多誤候後見憚入候者也
堯深法師七十一才吉モ惡モ後代之形見也念
佛一返所望也

これの物語の一卷は。おのかぬりこめの蔵やらはんとて。取出したる物々の中の一種にして。かつ讀ていまたをはらさりしこゞ。成澤寛經とひ來て。あるかたちをつはらに見ていひけらく。これ此事ありしより七十年はかりのほとにうつしとれるにてそ有つらむはた後人のさかしらせしものとしも見えねは。今にしてはそのはつ子たち遠つ祖のことのあと。考むたつきの正史とこそおもほゆれ。故猶讀こなしなむものをと。はたこにをさめてもていにき。かくて此ほと原昌言にあとらへて。文字のさま違へすうつし取しめ。板彫人ゑらせてすり卷となせりとそ。これか末つかたに一言をとこひおこせぬ。おもはさりき。かゝるおもひよりあらむものとは。よしやさはれいなみいふへくもあらねは。そのよし一くたり書そへつ。

嘉永の四年といふとしのきさらき金刺の信古

附言

一。此書蓋沙門堯深所自書。文正紀元堯深年七十一。距應永庚辰僅六十七年。盖堯深獲於其幼時目擊。及鄉俗所傳而記之。其爲實錄不可疑也。

一。原本魯魚相望。訛謬不尠。且間有字畫無有。怪異叵讀字。欲存古寫書之眞面目。不敢考究是正也。

一。此書蠹痕及半體字。皆存而不删。不欲毫措手於其間也。觀者勿尤其非鏤梓之體焉。

一。應永庚辰至今四百五十年。大塔名既亡。問之古老。無有知其遺跡所在者。按更級郡有地名大當者。隸二柳邑。蓋古大塔之地也。其他書中所載。地名存否。氏族異同。略有攷據。他日當俟其就緒以附錄之。

辛亥之夏五月朔丁亥之日原昌言識

塙本大塔軍記者。此書之傳寫本。而有後世注書之攙入者也。今以東京帝國大學所藏木版本謄寫校合畢。

蘆田記

依田常陸助一代ノ儀。御聞被成度由被仰越候ツル。爾ト誰モ不存候。我等承候通書付申候。常陸介天文七年戊申歳生ス。若□ハ源十郎其後右衛門助。亦天正九年ニ常陸介ニ成被申。名乘ハ信蕃ニテ御座候。

一年十二三ノ頃。諏訪高島ノ城ニ信玄公ヘノ證人ニ居被申候。其後年月ハ覺不申候ヘ共。武藏ノ内上野ノ境御嶽ノ城ニ居被申候。我等爲ニハ祖父下野守信守被致在城候節。常陸介モ彼地被參。父子一所ニ二年カ在城ニ候ツルヨシ。家老ノ者近年マテ其物語仕候。上野ノ我等知行ノ内。淨法寺ト申所ニ罷有候時。御嶽ニテ事。不斷家老ノモノ物語仕候。御嶽ト淨法寺ト同前ニテ御座候。城ハ御嶽。町ハ淨法寺ニテ候ヘトモ。城ノ根ニ川御座候間。城ハ武藏ノ内。町ハ上野ノ内淨法寺ニテ御座候。

一其後信玄公。今川氏眞爲退治駿州ヘ進發。其時祖父ニ候依田下野守信守。同常陸介信蕃。カンハラニ父子共ニ在城カト聞エ申候。下野父子ノ先手サツタノ濱ニテ。父子共ニ粉骨ノ鎗。是故駿州退治ノ由。古者共申候ツル。久シキ儀間年月ハ覺不申候。駿河崩氏實牢人被成候年ノ儀ニ御座候カト存候。駿河崩ノ年ハ。駿河牢人ニ今在世ノ衆可有御座候。其々ニテ御尋可被成候。

一其後信玄公爲信長退治。元龜三年壬申年打テ御上リ候時。先味方カ原ニテ合戰御座候。其時分常陸介ハ證人心ニ信玄公ノ旗本ニ居被申候。是廿五ノ年ニテ可有之候。信玄公ハ東海道是大事ノ備ニ聞エ申候。搦手ハ我等祖父下野守信守搦手ノ大將ニテ。美濃口ヲ

打テ上リ被申候。美濃ノ内ヘ上村ト於申所。祖父下野守信守被致合戰。打勝テ敵ノ大將明智宗叔ヲ打取被申候。宗叔人數五千ニテ御座候ニ。下野守ハ七百ノ人數ニテ得勝利候旨。信玄公ヘノ注進ノ飛脚大手口於味方ヶ原信玄軍ニ御勝候。右左右ノ飛脚ト兩方途中ニテ逢申由ニ候。大手搦手𪜈ニ同時分ノ合戰。日モ三日𪜈チカヒ不申候カト聞エ申候。

一甲戌年ヨリ亥ノ年マテ。祖父下野守信守親ニ候常陸介信蕃。父子𪜈ニ遠州二俣ニ在城。亥ノ年ニ至テ五月廿二日歟ニ長篠ノ合戰信長公並ニ家康公御勝。武田勝頼公打負。甲斐國引退。其上家康様ハ。直ニ二俣城御責候ハントテ押寄五ヶ所ニ向城南銀方山辰巳鳥羽山家康様御本陣東アクラ口ノ山。北ミナハラ口ノ山。西トウ堂ノ取手。是ハワタカ島𪜈申候。御取。五月末ヨリ御責被成候。六月十九日ニ祖父下野守信守ハ病死。ソレヨリ陸常介信蕃其マニ城持堅メ。十二月廿三日七ヶ月城持詰罷有候後ハ兵糧無之。濱松近所マテ。城中ヨリ足輕ヲツカハシ。夜打强盜亂捕夜々ニ御座候ツレ𪜈。兵粮ナトハサヤウニ候時。城中ヘ入候儀不罷成候ツル・五月ヨリ十二月マテノ儀ニ候間兵粮モツキ果候ヘ𪜈。軍兵ヘノ氣付候トテ。常陸介謀ニ土俵ヲ三百余申付。藏ニ積ミ置。城中下々ノ者𪜈ニ見セ。兵粮ニ事カケ候儀ハ有間鋪候間。心易存候ヘト被申候ヘハ。軍兵𪜈得力候。十一月時分。甲斐ノ勝頼公ヨリ二俣ノ城ヲ明渡シ。甲斐國ヘツホミ候ヤウニト兩度申來候ヘトモ。常陸介申サレヤウニ。脇々ノ奉書ノ分ニテハ如何ニ候間。勝頼公ノ御直書ニテ無之ニ明渡申儀ハ。イカヽノ由。兩度被申候得ハ。三度目ニ勝頼公ノ御直書參候ニ付テ。十二月

中旬扱ノ談合候テ。家康公ヨリハ大久保新十郎殿榊原小平太殿。何モ無□ニテ證人ニ御越。又我等親ノ方ヨリハ弟ノ依田兵九郎。同源八郎兩人證人ニ參。二十三日ニ城相渡候ハン約束ニ候ツル處ニ。二十三日スコシ雨フリ申ニ付テ。親ニ候常陸介被申樣ニ。アメフリニテハ蓑笠ニテ見苦候ハンアイタ。雨ノ晴候時分。二十四日二十五日成ト已ト被申城ヲイテ不被申候。是ヲ家康樣モ御感被成ノ由承候。其上廿四日ニ天氣晴城相ワタシ。二俣川ノヘンニテ人質互ニ返シ歸陣被申候。

一其後常陸介ハ。遠州高天神ニ被致在城。ソノ內每日每夜ノ戰ハ無際限候間。不及記候。

一天正六七年ノコロカ。越後景勝ト北條三郎殿ト取合ニナリ候時。勝賴公ヨリ三郎殿ヘ加勢トシテ。親ニ候常陸介參被申候テ。小田ノ濱ト申處ニ無比類鑓。ソノウヘ景勝ヲ追崩。追討ニ數多討捕被申候事。

一天正八年辰ノ年ヨリ午ノ年ニ至テ二ケ年駿州田中ニ在城此內度々ノ迫合ノ軍每日ノ儀ニ候間。三年ノ內不及記候。シカル處ニ午ノ年ノ春。勝賴爲退治。信長公出馬木曾心變リユヘ。早速信州落居。信長公信州タカトウマテ打入候砌。家康樣穴山梅雪齋ヨリ內通被申。駿府江尻ヘンマテ御先手打入。家康樣御發向ノ砌マテ。常陸介信蕃。田中ノ城持治被罷有候ニ付テ。家康樣ヨリ勝賴滅亡ニキハマリ候上ハ。イツマテ期スヘキトノ御斷ニマカセ候ニ付テ。不及是非。田中ノ城。大久保七郎右衞門殿ヘ相渡申候。ソノセツ山本帶刀爲御使。既ニ木曾穴山兩臣マテ初。信長公ヘ一味。其外モ甲斐ヘ心變ノ砌。常陸介ハ只今マテ田中ノ城持詰被居候事。敵ナカラ

モ神妙ノ旨御感ニ思召。其上累年蘆田手柄ヲハ敵ニテ御存候ノ間。御家中ヘメシカヽヘラレ度御内存。御ネンコロニ被仰下候ヘトモ。末國ノ落居モ無之時分故。先信州小諸ヘ三月十四日歸宅。森勝藏小諸ニ被居候ニ付テ。常陸介則勝藏トタイメン被申候。其上信長ヘ御禮可申候由ニテ。小諸ヲ出。諏訪ニ城之介殿御座候アイタ。先城之介殿ヘ御禮可申ト存候ヘトモ。中途マテ家康樣ヨリ御飛脚被下。必城之介殿ヘ出仕無用。信長ヨリ甲斐國大名切腹可被仰付書立之參ニ。依田常陸介切腹ノ一ノ筆ニ御書付候間。必諏訪ヘ參候事相止。夜通ニ密ニ甲斐國市川ヘマイリ。家康樣御目見仕候樣ニト。家康樣ヨリ御飛脚被下候ニ付テ。則市川ニテ御目見仕。スクニ淩山路遠州二俣ノ奧小川ト申所ニ。上下六人ニテカクレ居被申候。其後六月二日ニ信長御果候ヨシ。家康樣ヨリ御飛脚被下。本多彌八ヘ一通常陸介ヘ一通御書被下置。ソノ御書。今度明知。信長御父子ヲ奉弑候。其折節和泉ノ境爲見物。家康樣御越其留主ニテ無何事。サカイヨリ大和路ヲスクニ。伊勢路御父子ニテ。大高ヘ可有御着ノ由ニ候間。早速常陸介ハ甲斐國幷信州ヘ參。兩國トモニ家康樣御手ニ入候樣ニ引付候ヘト御書ニ付テ。則甲斐國衆引付可申トテ。二俣ヲ出。甲斐國ヘ上下六人ニテ被參。甲斐人口柏坂ノ峠鐘ノ旗ヲ立候ヘハ。柏坂ノフモト五里三里ノ間。右ノ旗見エ。蘆田殿ノ旗ニテ候ト見知。横田甚右衞門ヲハシメ迎ニ出。甲斐ノ衆。コトヽヽク常陸介ニ禮ヲ申。ソレヨリ人數三千ニ成申候。其後信州小諸ヘ六月二十日コロカニ被參候。其時瀧川左近上野國ニテ氏政殿合戰ニウチマケ。信州

小諸ニ被居ニ付テ。瀧川左近ニ常陸介モタイメンニテ。其儀春日ト申處ニ在處ニ候間マイラレ。瀧川左近六月二十三日ニ小諸ヲ立。木曾路ヲ指テ。尾州長島落歸申候。其□ヘ氏政ノ先手。信州ヘ打入。小諸ヘ大道寺尾張守入カワリ居申候。家康樣ト北條氏政ト御取合ニナリ。氏政六萬ノ人數ニテ。臼井口ヲ進發ソレニツキ。常陸介ハ春日山ノ奥三澤小屋ト申處ニ籠リイラレ候。蘆田小屋ト申此事ニテ御座候。氏政ハ蘆田小屋責候ハントテ。彼行者ト申山越ヲ諏訪郡ヘ打入カチカ原ト申處ヲ通。甲斐國ミノハ原ニ陣ヲ取。家康樣ハ甲斐國新府中ニ被成御座。小田原衆ト新府御對陣ノヤウスハ。其許ノ衆クハシク可爲御覽候。其内常陸介ハ蘆田小屋ニ籠リ。氏政ヘ關東ヨリノウン贈ノ兵粮人數馬ヲ蘆田小屋ヨリ討取。氏政ヘノ陣ノ續ケナリカタク候ツル故。氏政モ開陣。其後未正月。蘆田小屋ヨリ常陸介ウツテ出。岩村田ヘ働。此時常陸介モサイハイヲ取。馬ヲ入追散シ。家中ノ者モ數通家康樣ヨリ御感狀ヲ取申候。其時ハ眞田安房守モ上田ヨリ出合。筑摩川ヲヘタテ軍見物。其時常陸介ト對面ニテ御座候。是ヨリウチツヽキ高棚ト申小城。小田井ト申小城共。其外四五ケ所ノ城ヲ取テ。殘ル小侍トモ其時常陸介ヘ出仕禮申候。大井民部ノ介。小山田六左衛門。平尾平藏。平原善眞。森山豐後。志賀與三左衛門。柏木六郎。望月卯月齋。其儀家中ノモノニ罷成候。田ノ口ト申城ハ。阿江木能登守居申候ツル。常陸介威勢ヲ以テ。田ノ口ノ城明退申候。其時小諸ヘ大道寺尾張守祖父岩尾ノ城ニ。岩尾ノ主居申候。此兩處ヨリホカニ佐久郡ニ敵一所モコレナク候ツ

ル間。岩尾ノ城ハホソヌケニ可罷成ヲ。二月二十二日ニ無利責ニ岩尾ノ城ヲ攻候トテ。常陸介自身ヘ先ヲ仕。自身屏ヲノリ候處ヲ。内ヨリ鐵砲ニテ押當打。弟ノ依田源八郎モ右同前鐵砲ニテ被打。先源八郎廿二日ノ晩相果。常陸介。

一甲斐信濃兩國　權現樣御手ニ入申時。大久保七郎右衛門被指遣。信州ノ内ニテ味方ニ成不申城々モノ儀ヲ申上候ヘトモ、御書付ニ御座候。先以此度左樣ニテ無御座候。佐久郡城壬午年十月末ヨリ、極月中旬マテ□間ニ、依田右衛門佐城々責落。又ハ敵降參ニテ出仕治之。大久保七郎右衛門被遣候儀ハ、翌年三月ノコニ御座候。是ハ右衛門佐打死ノ後拙者是其節十四歳ニテ御座候ヱハ。萬事七郎右衛門申付候。右ノ分計ニテハ。クワシク難被　聞召分候ハン間。具ニ書付仕候。天正十年壬午ノ秋ヨリ。依田右衛門佐計策ヲ以テ。眞田安房守引付申候。此義信州ニテ眞田安房守使ヲ以申。殊ニ先方ノ時分。武田信玄公。使番武藤喜兵衛武邊ノ行ヲモミキ、申候者ノ義ニ御座候。右衛門佐モ其所ヲ存寄。先眞田ヲサヘ引付。味方ヘ仕候ヘハ。殘ル侍トモ手ニタツ儀ニテ無御座間。安ヲ存。先眞田方ヘ。□□□□□ヲ申遣。家老ツカハシ。眞田方ヘ色々申遣。眞田對面。具ニ右衛門佐方ヘモヘンシ御座候間。ソレニ付。二度目ニ依田十郎右衛門ト申者ヲ眞田ヘツカワシ。彌和談ニ仕。三度目ニハ眞田安房守自身蘆田小屋ノフモト迄參候。右衛門佐モ蘆田小屋ヨリ罷出。眞田ト對面仕。直談ニ良久談合御座候ハン。其時右衛門佐申樣。家康樣ヘ深存寄候ハ、。起請文ヲ得カ以申上可然ト好ミ申候ヘハ。眞田尤ト納存仕候。則

起請文ヲ上申候。此時眞田望ミニ。乍恐家康樣御起請文ヲ申請度由申候ニ付テ、右衛門佐方ヨリ眞田上申候起請文ヲ爲持。新府へ使ヲコシ。眞田望ミノ段ヲモ申上候處ニ。家康樣コトノ外御滿足被爲成。家康樣モ御起請文ヲ眞田ニ被下候。是ヲ持右ノ使新府ヨリ罷歸申候。扨右衛門佐手前ノ起請文ヲモ相ソヘ。眞田方へ爲持遣申候へハ。眞田別テ忝存。御起請文□三頂戴拜見仕候由申候。其時眞田ニ一郡可被下由御約束ニテ御坐候ツル由承及候。其後不被下候トテ。眞田御不足ヲ存候付テ。右衛門佐申樣ニ。拙者手前ヘハ諏訪郡ヲ拜領申、眞田ニハ不被下候へハ。家前ノ御約束ノ筋目スタリ申候間、右衛門佐手前へ拜領ノ諏訪郡ヲ指上申候間。是ヲ眞田ニ被下候ヤウニト申上。諏訪郡ヲ指上申候。此替地ハ上野ニテ敵地ヲ被下候

へ。私伐平ケ候テ。如此御座候。

一眞田モ御味方ニ罷成候驗ニト申候。右衛門佐ト申合。岩村田ト申地ヲセメトラント申、眞田ハ八幡原ト申處ニ陣ヲ取。筑摩川□左ニ人數ヲ立ナラヘマカリ在候。右衛門佐ハ筑摩川ヲ打越。鹽ナタト申處ニ越上リ。則川ニテ濡候人數ヲアツメ。ソレヨリ岩村田へ働。其川口ニ敵突テカヽリ候處。右衛門佐自身眞先ニ馬ヲ入乘崩シ。人數二三百モ討取申候ヤウニ承候、其時家康樣ヨリ御感狀御直判頂戴之者トモ。右衛門佐依田善九郎同弟依田源八郎。家中ノ者ニハ依田左近之助。依田主膳。奥平金彌、依田豐後此者ニテ御座候。ソノマヽ眞田モ上田へマカリカヘリ。右衛門佐モ人數入其後ヤカテ岩村田ノモノモ降參仕。岩村田右衛門佐手入申ニ付テ。名代ニ依田勘介ト申者サシヲキ申候

ツル
一前山ト申城右衛門佐セメトリ申。則午霜月右衛門佐モ蘆戸小屋ヘマカリ出。彼前山ノ城ヘウツリシカト罷在候。
一高棚ト申城ヲ計策ニテ取申候。
一小田井ト申城手ニ入申。此外城々ノ小侍トモアナタヨリ降參仕候者。一番ニ平原善心。二番ニ平尾平藏。三番ニ大井民部之介。（是ハ備中子ニテ御坐候）小山田六左衛門。森山豐後。志賀與三左衛門。柏木六郎。望月卯月齋。是等ハ古知行三千石ノカフニテ御座候。イツレモ人數或ハ百或ハ二百餘持申程ノ小侍トモニテ御座候。右ノ分午ノ霜月兩月中ニ皆右衛門佐所ニ出仕申候。
一佐久郡午霜月ニ治リ。手ニ立敵無御座ニ付テ。此中苦身ノ由右衛門佐申被振舞候ハントテ。追鳥カリ仕候。其追狩ニモ譜代ノ家人並ニ右ノ仕衆モ罷出。追鳥狩仕リ。則鳥ヲ右衛門佐前ヘアケ。其鳥ノ料理御座候ツル由ウケタマハリ候。其上爲褒美金子紅ノ糸甲其外色々出シ度右衛門佐存候ヘトモ。片恨イカヽニテ。是ヲ各々ヘ出シ度候。中間ニテ鬮取ニ致シ候ヘト申鬮取ニ。皆々取。謹テ戴申候キ。右衛門佐申ヤウニ。昨日今日マテタカヒニ打ツウタレツノ敵ニテ候ツルニ。如此普代ノ被官並ノ仕合。滿足ノ旨申候由承候。
一癸未正月元日ニ。右ノ侍トモ代々ノ者。並ニ右衛門佐前ニ。太形折紙ニテ禮盃等モ譜代ノ被官並ニ候ツル由承候。此年家康様四十二ノ御歳ニテ候間。四十三ニ御祝直シ被成候御心持ニテ。閏正月ニ御祝被成候。御分國其分ニ御坐候。
一未ノ二月廿日ニ。田ノ口ノ城ヘ右衛門佐上

リ。並柴田七九郎モ同道候テ。佐久郡一目ニミワタシ候。高キ所ニテミ。是程殘所モナキ味方ニ成。小諸一城計敵ニテ候ニ。其外岩尾ノ小城一ツニクキ仕合ト申。明日ハ責ツフシ可申候間。柴田七九郎ニハ一人モ御出シ候ハテ御見物候へ。城責ヲ可掛御目由右衞門佐廣言ヲ申候。廿一日ニハ□□城ヨリ降參可申ヤウスニ付テ。一日相待。廿三日ニハ早天ニ取卷。右衞門佐モ城際ヨリ下足輕旗指ヨリ。眞先ニ右衞門佐屏ヲ乘候處ヲ。鉄炮ニテ押當。ホソノ下ヲ打被抜。亦弟ノ依田源八郎是モ屏ヲ乘所ヲ。左ノ章門(衍カ)ノ灸所ヨリ。右ノシヤウモン所へ鉄砲ニテハ爲打抜。惣軍取卷候へトモ。大將右ノ仕合ニテ。廿二日ノ晩ニ源八郎先相果。二十三日ノ未明ニ。右衞門佐相果申候。左樣ニ候へハ。岩尾ノ次郎カ城カカヘカネ。關東スシヘ出奔仕候。

一三月ニ至テ。大久保被仰付。右衞門佐子十四歳ニ成候間。万事七郎右衞門指引次第ニ尤ニ候。權現樣御意ニテ。十四歳ノ依田竹福丸ヲ御名字被下置。松平源十郎ト名ヲ被爲替。七郎右衞門同道ニテ。未ノ三月小諸參候。是ヨリシテ大久保七郎右衞門後見ニテ。佐久郡仕置申付候。

一大道寺尾張守。小諸ヲヤカテ明退。佐久郡中ニ敵一人モ無御座候キ。拙者ハ悴ノ時分ノ儀何ノ計方モ無御座候ツレトモ。家中ノ年罷寄候者共物語。毎度承置申候通申上候。以上。

寛永廿年未七月日

一先日古キ儀書付奉指上ノ處ニ。大納言樣御披見ニ入。御不審ノ儀被爲晴。御滿足被爲成ノ旨御意ノ由被仰下。忝仕合ニ奉存候。然者長篠合戰ノ後。依田右衞門佐。二俣ノ城五月

末ヨリ極月マテ籠城時。勝頼公ヨリ明渡シ申候ヘ由（キ脫カ）度々奉書參候ヘモ。明渡シ不申。直書參候ハ。明渡可申由。右衛門佐申張。直書參候付テ明渡申候。此段ノ及聞召右ノ勝頼公ノ判形ニ。今所持候者指上可申旨御意ノヨシ被仰下候。信長公甲州ニ打入ニ。芦田切腹可被仰付之旨御書立候ニ付テ。家康樣右衛門佐ヲ御隱シ可被爲置之御內意ニテ。如何ニモ密ニ上下六人ニテ。甲州市川ヨリ直ニ遠州山家ヘ被遣候時。在所ニ諸道具持置候テ。瀧川右近打入。屋內一ツモ不殘闕所仕候ニ付テ。書物道具以下紛失仕無御座候。六月ニ至テ信長公御果候間。其時右衛門佐ハ甲信兩國。家康樣御手ニ入候樣ニ才覺仕候ヘト被仰付。六人ノ躰ニテハ小諸ヘ六月十八日ニ罷歸候。六月末ニハ氏政信州ヘ打入。新府御對陣ノ仕合。芦田小屋ニテハ毎日主戰耳ニテ罷有候キ。中々道具書物ナトノ穿鑿全ク可仕日限モ無御坐候由。聞之申候。

一天正十年午七月廿六日ノ御書。依田右衛門佐方ヘ一通ハ寫指上申候。此時分ノ儀先書ニ申上候。

一天正十一年未年二月十二日ノ御書。依田右衛門佐方ヘノ一通寫上申候。是ハ前山ト申城伴野刑部栖籠罷有候ヲ。依田右衛門午霜月責落。伴野刑部ハ相逃ニ仕候キ。ヤカテ前山ノ城ヘ右衛門佐移罷有候內ニ被成加勢。小番ノ人數前山ヘ被遣候時之御書ニテ御座候。

一天正十四年戌年四月十五日。拙者儀於家康樣御前髮ヲ御自身ハヤサセラレ。御腰物拜領松平ノ御名字並康ト申御字被下置候。御證文ノ寫一通奉指上候。

一天正十八寅年。小田原御使ノ約家康樣ヘ秀

吉公ヨリノ御書一通寫上申候。此儀クハシク申上候ハスハ。御合點參氶可申カト存。具ニ申上候。此阿江木ト申ハ。所之名ニテ御座候。持主ハ依田能登守ト申候。彼能登守田ノ口ト申城ニ罷有候ツル處ニ。前山ノ城右衛門佐キヒシク責取申。恐威勢。田ノ口ノ城ヲ明退關東牢人仕八九年牢人分ニテ。小田原ニ罷有候處ニ。秀吉公氏政ト手切ニ罷成。小田原へ御出陣ヲ承。氏政へ頭内意申候ヤ。信州佐久郡阿江木谷へ彼牢人依田能登守伴野刑部兩將ニテ働掛申候。譜代ノ主ニテ候。彼阿江木谷ノ者モ悉能登守ト一味仕。敵ニ罷成候通三月十五日ノ申刻ニ告來申ニ付テ。是ニ候松平修理大夫康國。並拙者打ツレ。小諸ヲ卽時ニ乘出シ。一騎カケニ田舍道三十里ホト參候ヘハ。勝間ト申城ヘ參着。十六日ノ早朝ニ人數調ソツトウ坂ト申山ヲ越。敵方近ク參候ヘハ日暮。半時程足輕合御座候内ニ。旗ノ色モ見ヘ不申程ニ夜ニ入申ニ付テ。其夜ハカヽリヲタキ。其前ニ夜ヲ明シ。曉ヨリ打立取掛申候ヘハ。白山石ト申小城籠リ申候ヲ。則乘崩シ。林平ト申所ニ敵ヲ追詰。敵モ取テ返シ。敵味方入亂戰御座候。其ヨリ山ノシケミヘ敵迯上リ候處ヲ。先手ノ者モ追掛申候ヘハ。木立ノ内ニ鯨波ヲトツト上申候ニ付テ。木立ノ内ニテ取テ返シ崩レ候カト存。拙者馬ヨリ下立鑓作リ待掛申候ヘハ。亦味方ヨリ押返シ。不殘追打ニ仕。上州野□谷ト申マテ悉追打ニ分捕高名ヲ仕候。能登守ハ何ト迯延候ヤラン首モ見ヘ不申候。刑部ヲハ打捕申候。此仕合爲始拙者働ノ一ツ書ヲ仕。修理大夫方ヨリ夜通ニ家康樣ヘ註進申候所ニ。則秀吉公ヘ被掛御目。秀吉公ヨリ家康樣ヘ御書御座候。此書御

感狀ニテ候由。家康樣御意ニテ頂戴。于今所持仕候ヲ寫上申候。

一天正十八年寅年卯月二十九日。秀吉公ヨリ松平修理大夫方ヘノ御書一通寫指上申候。

一同年五月十一日之家康樣ヨリ拙者方ヘノ御判形寫上申候。四月中旬ニ松井田ノ城竹把ニテ。羽柴筑前守。並景勝。眞田。芦田四手ヲ以仕寄御座候。中ニモ修理大夫 拙者。屏際近ク諸手ニ勝レ責寄申候キ 乍去其時ノ書物御感狀ナトハ無御座候キ。其後上州石倉ト申城請取ニ參候テ罷有ノ内ニ 於陣屋之内氣違ノ樣成者御坐候テ。思掛モ無御座修理大夫相果申候。修理大夫跡式拙者ニ被下置候。繼目之御判ノ寫指上申候。

一同年八月朔日。秀吉公ヨリ拙者方ヘ御書一通是ハ別成儀無御座候ヘ共。總テ古キ書物共寫上申由御意ノ旨候間。如此御座候。

一文祿三年午八月廿二日ノ御書ハ。伏見御普請ノ時。秀忠樣ヨリ拙者方ヘ被下置候ヲ。一通寫上申候。此年十月ニ諸大夫ニ被仰付。右衛門大夫ニ罷成候。是ハ八月ノ御書故。新六郎ト御座候。綸旨ノ儀御寫上申候ニ及不申儀ニ御座候間。其儀無御座候。

一文祿四年未年七月廿六日。秀忠樣拙者方ヘノ御書一通。是ハ關白殿御切腹ノ時。拙者ハ江戸ニ罷有候ニ付テ。江戸ヘノ御書ニテ御座候。

一文祿五申年九月八日ニ家康樣ヨリ拙者方ヘノ御書一通寫上申候已上。

御書共凡十通

寛永二十年未九月廿日

蘆田記追加

信州佐久郡大井庄芦田城主。依田備前守信常子。

依田肥前守

信守

始住武上之堺御嶽城。又住駿州蒲原城。屬武田信玄數有功。又守遠州二股城。天正十年奉屬神君。同年六月十九日。

源十郎依田右衛門佐常陸介

信蕃

奉仕神君

天正十一年二月廿二日。岩尾城攻之時討死。年廿三。

善九郎依田伊賀守

信吉

依田源八郎

信春

與兄信蕃同時討死

竹福松平源十郎修理大夫

康國

御稱號及御一字　住上州藤岡城

天正十八年　月　日　於石倉城橫死

福千代新六郞右衛門大夫

康貞

天正十四年四月十五日。於御前元服賜御一字及御稱號御腰物。文祿三年十月叙任。後年出奔。入高野山剃髮。號加藤宗月。住越前福井。

以東京帝國大學史料編纂掛本謄寫校合畢

續群書類從卷第六百二十

合戰部五十

壽齋記

小笠原長時公諏訪頼重味方として。甲州の内弁柳と申所迄。度々働御座候處に晴信典厩を以頼重へ被仰は。武田味方被成候はゝ。晴信妹を人質なから妻子に可遣候。其上信州治り候はゝ。諏訪に村上跡を添て可遣と。色々無事を作り被仰候に付て。頼重同心被致也。頼重は長時公家老小見と申者の聟にて御座候。小見か娘を追出し。晴信妹聟に罷成り。従甲州上原の城に祝言有。就夫。頼重息女甲州へ人質に越被申。是は頼重先腹の息女なり。夫より頼重は晴信味方に成也。長時公被仰は。晴信諏訪頼重と縁を組候て。諏訪を甲州へ引付られ候事。伊奈林へ取懸へき智略の爲也。然は晴信旗本に成。諏訪頼重を踏崩。晴信へ取掛一戰可被成と被仰。伊奈衆。仁科衆一つに成て。長時公諏訪へ働被遊。頼重持分焼拂。上野原へ取懸。四五日責。頼重の者共討取本城計に攻寄候處に。晴信後詰につたき迄御出馬。先手板垣。飯富兵部。淺利。諏訪の内。青柳迄被參候。長時公方伊奈衆。小笠原民部少信貞。下條。箕

輪賴親　萬西此衆先手にて。長時公ハ旗本より掛て。板垣飯富兵部を切崩し。首百計討取。長時公實檢なされ。勝凱を作り。諏訪賴重降參にて人質を出し。長時公旗本に被成候付て。長時公林へ御入馬也。伊奈衆も歸陣仕候。其後もまた賴重晴信方に成候事。

一伊奈衆の內。箕輪と申所六千貫箕輪殿領知也。福與の城に在城の處に。諏訪賴重晴信の先手を仕。三月上旬に福與の城へかゝり懸。六十日計り取卷責申候。

一福與の城に籠り候武士。箕輪賴親侍衆。松島。大出。長岡。小河內。福島。木下。此衆箕輪殿家中にて大身の武士也。其外野口野や〔本マヽ〕澤々の者百餘騎。雜兵千五百籠居。右之衆城際にて日夜取合申候。其時箕輪殿內に。藤澤織部大泉上總とて强弓の射手有。福與の城大手にて此者共矢先に中り。晴信の者共多く死す。貳人の武士後箕輪殿供仕。中東の城に籠り申候。

一伊奈衆不殘悉後詰仕。箕輪福與の近邊三田丁と申所に陣を取。天龍川を隔。足輕軍御座候。長時公も後詰に上伊奈の內。籠か崎と申所を御本陣に被成。先手は北大手に陣をとり申候。其時某を万太郎と申生年庚寅の年十五歲。初て具足を着仕御供仕。天文十三年甲辰なり。

（頭注）按天文三年ハ甲午也十三年ハ甲辰也庚寅年享祿三年也コレヨリ天文十三年ハ十五歲ナレバ今十ノ字ヲ補フ

一下伊奈の內。小笠原信貞より多科惣藏を使者として。籠か崎へ參候趣は。御馬を福與の城根古屋へ被寄。是非一軍可仕由申來。伊奈衆に對して御懷思食事あるに依て。御馬を不被寄事。御一代の御分別違也。就夫伊奈衆引取申付。箕輪殿城無事に成。權次郎と申弟を晴信へ人質に出し。箕輪殿牢人也。就夫長

時公も林へ御引取被成候也、
一諏訪頼重晴信公妹に若子出來申に付。心安存、甲州へ被參候處に、甲州柳町と申所にて。晴信より頼重を生害也。其十六歳の正月末也。其夫諏訪下と晴信と軍御座候、其年中に諏訪甲州治り。晴信城代に板垣を置被申候、
一長時公家老中を召て。御意には。下の諏訪晴信より城代を被置事無念至極也、諏訪の城代追拂可被成旨被仰付。則南部の侍仁科、道外、瀬馬。三村、山邊、西卷、青柳、かりや、原。赤澤。島立、犬甘、平瀬右の衆。何れも大身旗頭なり。其外長時公御旗本衆、神田將監、泉石見、栗葉、さうしや。下枝、草間。桐原、瀬馬。村井。甕尻衆、征矢野。大池等也。二木豐後舍弟土佐三男六右衛門、豐後子万太郎、土佐子万五郎、弟源五郎兄弟也、此源五郎は草間肥前が養子に罷成、草間源五郎と申候。長時公近習仕林に居住。御旗本に罷在候。二木豐後。同土佐。同六右衛門。同万太郎、草間源五郎。是五人は西卷備と一所に罷在備立申候。惣軍兵林を立。下ノ諏訪へとり掛、晴信方。置候城代手きつく責申候、頃は四月中旬也、城際まて取詰。急に責申故。長時公へ城相渡可申候間。御馬少御退被下と城中より使者兩人出し候。城受取可申處に、仁科、道外、望申候者。下の諏訪被下候へ。左候はゝ甲斐の國迄の先掛仕。晴信と一戰仕候半と望申され候處に。長時公被仰は、我等稼のはなを望事推參なりと御意に付て。仁科、道外背を折ても何かせん。信州におらんよりは。晴信の朱印有とて。軍前をはつし備を仁科へ引取申候。城内より旗色を見とゝけ。就夫城渡不申候、然る處に晴信後詰の爲。上

の諏訪迄御着候。皆々申には。諏訪を道外に被遣間敷と。長時公被仰候は御一代の御不覺也。長時公其日は諏訪の內四ッ屋と申處へ御馬を被上。夜明て諏訪峠御陣御取被遊。其日巳の刻軍初る也。初の合戰に晴信の先手を切崩。四ッ屋迄敵を追下。首百五十。長時公方へ討取なり。其日の軍六度有之。內五度者長時公御勝利也。晴信方には旗本こたへ。六度目の合戰に瀨馬。三村。山部逆心仕。長時公御はた本にて追つ返しつ入亂。軍御座候。御旗本の能者共の過半討死仕候故。長時公も漸々林の手遣被成候處。村上殿小室へ働被申候由被聞召。早々引取被申候。瀨馬逆心に付て、西卷の二木一門本道を退事不罷成。櫻（梅イ）澤にかゝり。奈井へ出。奈井源右衛門所にて飯米合力をうけ。みたけ越しをして漸々西卷へ出候事。

一小笠原信貞家老の多科惣藏。溝口刑部を召て被仰候は。長時公下の諏訪城代板垣を責給ん爲。諏訪へ取懸被申に付て。下條殿談合のため溝口刑部被遣候處に。伊奈衆侍何も一身にして打立。下條殿、片桐。飯島。知久晴近衆。下伊奈を五月中旬に罷立。相澤駒澤迄相詰候所に。長時公諏訪峠合戰に敗軍のよし聞へ。信貞公被仰は。一日はやく罷立候はゝ。晴信方を切崩し候はんとなり。其日は平出を越相澤駒澤に陣をとり。竊に罷立候。伊奈の人數押への爲に。板垣信方を被置候に。下伊奈の人數は。相澤駒澤に相詰罷在候處に信方掛て小笠原信貞に切崩され。小尻まて追討に武田晴信方の首多討取。信貞勝凱を上らるゝ也。板垣信方は漸々下の諏訪へ引取申候。信貞被仰候は。大手敗軍に候得は。搦手勝利有とても。保科彈正晴信に心入

有し其上。松島大出なとも左樣に候へは。對陣に不及とて伊奈へ御引被成候事。

一其軍の後二三年か間。度々戰御座候。神田將監寐込に逢討死仕候。其時も能者多く討死仕候。山田將監は强弓の精兵にて。長時公御内一騎當千の兵也。長時公も惜り被思召候者也。寐込とは夜打の事也。出水石見。神田將監は長宗公も能思召被遣候者の事にて御座候。長時公御代相渡時も。由緒を被仰渡候。信貞公へは木下惣藏。瀧口刑部を被相渡。下伊奈鈴木の城江御在城也。木下惣藏なは多科の城へ信貞より被指置。則多科惣藏と申て。一騎當千の者也。是は長宗公御取立の者也。

一神田將監常に被申候に。我等儀長宗公御取立の者也。何樣の事有とも長時公へ能御奉公仕候樣にと。後室樣被仰付候。信貞へは木下惣藏を被渡。長時公へ拙者被渡候。依之何樣にも御奉公可覺悟仕也。然共長時公强御大將にて。我儘氣隨に被遊候故に。兩郡の大身成侍衆。皆不足を被存候。有時。西卷瀨馬。三村殿兩三人の衆御用有て出仕被申候時。長時公氣隨故出仕罷成す候故に歸被申候。又有時。万西(葛西カ以下同)。赤澤。鎌田兵衞尉出仕候に。是も氣隨故御逢不被成。亦山邊出仕之時も右同前也。ケ樣の事度々有之に付。兩郡の武士中不足に被存候。是は水竹と申者出頭仕。樣々成儀申上候故如斯也。

一神田將監七月初に出仕の時。征矢野甚助惣社久太郎。萬西次郎。大池右馬之助。桐原同道仕。照にてりたる日。坂を上り候とて。股立たかく取て。小飛かゝりに坂を上る。若き衆皆々申樣は。將監は何とて此暑に飛て上り候哉と被申候へは。暑くはなし。秋の露は

かりにて。身のぬれ候間。露をはらひ候て上り申候。若き衆いよ〳〵笑て申候は。將監殿は氣違ひ申候哉。是程ほこりの立て。日照りに汗にてぬれせつなく候半に。露の身と被仰候は可笑存笑ふ事にて候。將監申され候は。呉越の戰の節。呉王夫差の臣下伍子胥か申所無御存候哉。夫を思ひ出し候。長時公我儘に御座候へは。兩郡の武士不足多し。然に依之此城後は晴信の仕置に成。城家破却すへき其時は。鹿の臥處と成。露おゝかるへし。去れは濡るゝ事を思ひ。飛通り股立も高く取申候よと被申候　其後若き衆の落書を立る。神田將監存分おもしろき也。

　小笠原の御家をたをすものとては昔は糸
　竹今は水竹

一神田將監兩郡の行衞を常々被申候は。小笠原家甲州より信州の屋形に御居り候時は。標葉。下枝。小曾。櫛木。四天より其外御一門の者共に至。當國に有名を名乘に山邊は新野石見孫也。是御一家也。田奈倉は赤澤の末の子也。青木小見は小笠原代々の御譜代なり。兩人は下枝の末也。犬甘は時平大臣の孫也。平瀨は犬甘の後流　犬甘の庶子也。小宮桐原は島流とて一流の侍也。三村は筑紫侍也。西卷は志賀の院の皇子也。是西卷殿とて。小笠原代々賞翫被成候。金章寺は志賀院の末寺也。島立は小笠原惣領家なり。高島竹田は櫛木の流也。仁科は平惟盛の末阿部の貞任孫に息女有て。男子なし。伊勢の國三位の中將惟盛御子是を申下し。聟にして仁科に居す。主は隱居して日岐の城に移る。伊勢の國より御供申參者は。八木。八町。關。野口。是四天王也。其外の御供の者多し。其後仁科殿へ飛驒國江間四郎方使者有。仁科と江間「平の

内（衍カ）大臣」は平家大臣重盛公の流也。江間は惣領也」仁科は庶子也」其子細は江間には平家惣領に傳る青山の琵琶有。依之惣領に候間庶子の對面可仕候」殊に國並（主カ）に候之間。境目迄被申越」仁科殿返事に。尤其方に青山の琵琶有之」惣領に御成候も。亦庶子に御成候も此方には無構候。此方には清盛より重盛に渡され候唐皮の鎧有之。青山の琵琶は公家の賞也。武家には平家惣領に代々渡唐皮の鎧に。蝶のすり金物打たるは爰元に候へは。惣領の證據御尋に不及と被申越候」仁科は。右阿部貞任の流也」宗任は筑紫の松浦之流。ケ様の両郡の武士家高き侍に我儘氣隨被成様と。將監常々申せし也。

一某（天文十八年）廿歳の時。四月末に。晴信公御働。村井に陣を御取。長時公も御出陣にて合戰し。其日の軍。村井林の間にて敵を切崩候得ば。味方も崩申候」其後互に旗本にて。追つ。返しつ。入亂合戰御座候」其軍草間。肥前。泉。石見討死仕也。泉。石見は長家公御代より數度の軍仕たる精兵の强弓の射手にて。土不射と皆人申候」勝負矢は不及申」諸鳥を射申に。はつるゝといふ事なく。土射不申とて。みな人ケ様に申候」本は澤淸右衛門と申候。泉小四郎が子孫にて。泉。石見と長宗公御意にて名乘申候」ケ様の者討死仕候に付林の弱りに罷成」其外に御味方多く討れ申に依て。長時公林の城へ御引籠被成候。其時長時公を背き。晴信方へ成衆」山邊。瀬馬の三村。赤澤。深萱。万西」島立。西卷各也。長時公御内にて。五三千貫取候大身也」長時公御味方大身衆者」犬甘。平瀬。かりや。原」小見」其外御はた本衆計也。長時公御内に能者は討死」家老の者は逆心仕候へは難叶候て。林の城

御明被成度思召候得とも。何方へも道塞候に付。外方なく御座候所に。桐原計御味方を申。深篠の城主万西は桐原か爲には伯父にて御座候。彼万西桐原に申し。長時公の方人申さんより。長時を討申。晴信へ忠節を仕候へと申候得共桐原少も同心不仕。强御味方申。長時公へ申上候は。何も御内の家老譜代の者。御敵に罷成。私伯父万西迄逆心仕。結句拙者にも逆心を企候へと異見仕候間。少もはやく鹽田へ御退被成。村上殿を御賴被遊候へと申上。則桐原妻子を長時公へ人質に出し。右居城へ引取申。夫々村上殿を御賴被成候。村上殿無如在被存や。長時公を林へ御本意させ可申と被仰。淸野と申侍に被仰付。御馳走被申候。

一長時公林の城を御退被成て後。晴信公の林の城破却し。深篠の万西に居城を取立普請させられ。馬場民部少を城代にし御置。長時公領分を御仕置被成候。去とも犬甘平瀨の城に籠罷在候。然處に馬場民部。犬甘平瀨へ計策を入。互に其暖御座候。未扱不濟内に。長時公御本意の爲に深篠へ村上御働の由申來。就夫犬甘平瀨いきほひ强く。彌甲斐へ隨ひ不申候。同年十一月始に村上の人數あひたに陣取申候よし。深篠へ申來しに付。馬場民部其外深篠に罷在晴信の人數とも廿騎餘。十一月始に夜をこめ。かりや原崎迄物見に罷出候所に。村上衆一人も不參候付て。物見の人數罷歸候　犬甘大炊之助。我城には人數を置。手廻り十騎計にて。主はあかきり栗毛と申名馬に乘て。長時公御迎ひの爲に罷出。岡田町と云宿にて。馬場民部廿騎餘にて歸るを。村上衆と見て。犬甘方より使者を越申は。爰許へ御越候者村上衆と見て候。長

時公本意の爲是迄忝存候、深篠へ先懸爲可仕。犬甘是迄參候と申越。馬場民部犬甘こそ罷出候間。たはかり討申へくと談合申。犬甘への返事に長時爲本意村上是まて罷出候。深篠への先懸可被成由尤に候と返事仕。犬甘を乘くるみ申。犬甘見切早々退申候。深篠より人數出合取切申に付。犬甘の城へ移事罷ならす。犬甘の城を右に見。靑島と申所に掛。馬をも乘はなし。我一人に也て。西卷迄退。二木豐後所へ被參候。豐後能隱し置候後。西卷殿と相談申、飛驒通りに美濃のかくちやうへ。犬甘大炊介を送り被申。犬甘の城を馬場民部少輔大將にて。甲州衆信州降參衆一つに成て攻落し。夫より平瀨の城をも攻落申候、平瀨の城にて討死いたし候人多候。長時公御味かた强く致候故。右如斯也。

一　天文十九年(朱書)
某廿一歳。庚戌の三月末。村上殿長時公御本意のために。川中島の人數三千餘にて。長時公同道にて信州府中へ働、村上殿旗本東、原に陣を取被申候。長時公川を越。氷室に陣御取なされ候。其時御譜代衆の內長時公へ心持有者を被召出候。箕輪兄弟。万西兄弟。同次郎。征矢野。大池、標葉。惣社。犬甘。平瀨の衆。二木豐後。同土佐同六郎右衞門。豐後子万太郎。土佐子万五郎。孫四郎。藤三郎。其外親類共。何れも罷出申候。忽雜兵千四百余にて島立の城へ取かけ申候へは。島立降參にて譜代の御主の儀に候間。御味方に成可申候。鹽尻衆御供申。先を拵申に。何も逆心の者共。長時公に隨ひ候半よし申に付。深篠の城に馬場民部罷在候間。兎角是を攻落可被成と被仰。其談合の爲。氷室迄長時公御越被遊。氷室に御陣取。村上殿箕輪殿尤使者にて。明日深篠の城攻可申候間。御馬被寄深篠

な攻落申様にと被仰越候へは。村上殿尤と可被申と被定。長時公は島立に懸なき口。大手より島立を先手にて責可被成と。互に約束を御定。惣侍中に御觸被成候に付。何も支度仕候。然る處に村上殿鹽尻ゟ告來候は。晴信今日八ッ時分に下の諏訪御着候。則夜通深篠へ御移候由。長時公は御支度被成。村上殿へ使者被遣候得は。夜の内に川中島に引被申候由也。亦鹽尻より申來るは晴信公今日八つ時分に下の諏訪に御著夜通しに深篠へ御移候由申來候。長時公被仰候は村上堅く約束仕に。晴信着候由を聞。早く迯落候。殊に退様子我等にも不爲知事。返々も口惜次第也。ケ様の事少も聞候はゝ。村上と差違へ果さんものをと被仰。夜明てみれは宵迄多き人數そろ〳〵と退申候。漸々百騎計に罷成。雜兵共に集て千計の人數なり。然處

に。晴信先手の馬場美濃　飯富兵部兩人。さみその瀬あつさ川を越。西卷と一つに成て掛り來候よし申來候。長時公人數を集。備を御定被成候内に。野々宮と申所迄晴信の先手參候。長時公下知には。今日を限りの合戰なれは。長時より先にすゝむ者も有まゝ。自然先を拵すゝむものは。今生は申に不及。後世までも可恨と被仰候。爰に上條藤太と申者。長時公御意は何ともあれ。先掛を仕らんとて。鑓を取て眞先に進み申候。其時箕輪兄弟。當悦様。小笠原勘介　何も長時公と一つに成て。辰の刻軍始り。則長時公御馬を蒐入られ。千代鶴の御腰物。寸短く御馬上にて片手打に甲二つ宛に御切割成。敵十八騎切て落し給ふ故。甲州の御腰物とは此時より御思付被遊候。扨各々火の出るほと合戰仕候に付。馬場美濃。飯富兵部　西卷敗軍仕候に

付。西谷ゝ内上野と申所に退申候。晴信方の首三百取申。野々宮の前すつる氷と申川端に三百の首をかけ。長時公牀机に腰を掛。勝凱を御上被遊。其時當悦樣御手負小笠原勘齋も手負申候。野々宮合戦是也。

一長時公御意には。今日の軍に勝利を得候といへとも。晴信深篠に罷あれば。長時を背く譜代の者は。晴信方に成。村上は引返す。此上者晴信に降參にも不及。亦長時を捨て退。村上を頼も僉なし。天地離れたる長時哉と兎角腹切らんと被仰候處に。二木豐後罷出申上は。大將御腹召は後誰有て逆意の者共をしたかへ。亦犬甘平瀨か存立たる忠節を報給ふへき。只御自害の思召とまられ。私日比妻子を置候所こ。中東の小屋と申一段堅固の地を城郭に拵。兵粮澤山にこめ置申候。南北の切たる谷にて。東山の尾さき岩ほ也。西山に少續候か。是も深山に續き。中々人の可參樣無之候歟。日本より攻候とも悔（渋カ）て落る所にて無之候。是に御上り候て。浮世の隙を御覽候へと豐後申上は。長時公御尋有。人數五千程にて三年ほと籠城仕候分は。兵粮に事かき申事なし。矢を籠置申候と申上ル。長時公然者籠候半とて。御供の衆箕輪兄弟。折田四郎。大池四郎右衛門。當悦樣。小笠原勘齋。標葉惣社萬西の次郎。征矢野大炊之助。同甚齋。犬甘。平瀨の衆。水野四郎左衛門衆。其外長時公心指有衆御供にて中東へ御上り被成候。

一長時公。豐後。土佐。六郎右衛門をめして。中東の城持口の人數御定被成候。豐後子被召出。名を御替被下候。豐後子二人。兄萬太郎を二木彌右衛門に被成某事也。弟午千代を源三郎に被成候。後二木六右衛門事也。土佐子四

人嫡子万五郎を二木縫殿介に被成候。岩波直右衛門親也。二男源五郎を草間肥前に被成候。孫四郎を藤右衛門に被成候。是二木彦兵衛親也。何れも中東にて一口宛受取相働申候。

一中東へ御上り候て三日目に晴信中東の根小屋へ御馬を被寄。惣人数を以御攻なされ候。長時公譜代の侍。山邊。瀬馬。西卷。何も晴信公の先手仕参候。惣手より攻寄して。中東の城八分目迄攻上り申候。城に三千計之人數。長時公再拜を御取。御下知被成候。八分目より切崩候。武田方の首二百取申候。武田晴信は御室原と申所へ引取申候。然る所に村上殿への加勢に。越後國景虎公川中島に罷出。村上と一つに成て小室へ働被成候由申來に付て。四月始晴信公。下の諏訪へ御馬を被入候事。

一長時公中東にて。軍に御勝被成を見て。敵に罷成候御譜代衆。仁科。道外を初。皆々右音信して。矢兵粮籠被申候。某二十一歳庚戌年之事也。

一同年七月八日。晴信と持分働毛作をふり被成候。又九月末に晴信と刈働。中東の城取懸被申候。其時南の掛に寄手の先手寛大將に。三村十兵衛參り候。此手へ向たる味方の大將は二木市右衛門也。十兵衛に逢申けるは。重代の主君を敵に仕。弓を引事天命いかで遁るへき。後の世を考て見よと申。十兵衛申けるは。世になき長時の方人して。山籠して何の益や有とて。晴信に降參して本領安堵せよと被申ける。十兵衛にくまぬ者なし。亦東の先手には。二木善右衛門黒の長四寸計の馬にのり。其日の大將を仕。下知を致を。飯富兵部手より申けるは。其馬能馬也。自然

賣申間敷かと申ける。善右衛門聞尤。賣馬成間賣可申と答ふ。敵より申は。敵味方にて商は有物を。互ひに一人宛出し受取渡しをして買候はん間。賣申され候へと申候得は。善右衛門申者。賣可申候。併金銀迄もなし。下物を取てならは賣候はんと申。敵方ゟ申遣るは。下物には武具か太刀か。刀か。籠城にて候へは兵糧か。何にても望次第に越可申と呼はる。善右衛門申は。其方より被申ものにてはなし。下物とかけるは何にても越可申に付。善右衛門望申候。武田晴信の首と瀬間三村入道めか首。此二つ下物に取てならは此馬安き事と呼はる　敵夫は悪口也といふ。善右衛門申は。少しも悪口にてなし。子細をよく聞給へ。其方達も如存。諏訪峠の合戰に五度長時公勝也。六度めの合戰長時旗本ゟ掛て勝利有所に。瀬馬の三村入道めか後切仕るによつて。其軍長時公負に成。此遺恨に依て瀬馬か首。馬の下物に取度。晴信の首さへ取候得は在所へは樂に罷歸り候間。二の首を下物に取て。馬賣候半と申。敵方の者腹立矢を射懸け。夫より軍はしまり申候。此善右衛門ハ二木彦兵衛か親也。二三度懸合候て。晴信引取候。其年中東へ心合者とも御座候に城堅固に罷成。結句西卷の城をも攻。人數多討取申候。

一壬子六月長時公譜代衆思ひ付により。中東近所小室と申所迄。晴信公働被申候處に。長時公御馬被出。四五日取合御座候。武田方の首多く討取。長時公御目に懸申候。然處人數終に打負。中東へ御引籠被成候。夫より晴信府中の仕置に被成候て。諏訪へ御引取被成候。川中島村上殿。越後へ牢人より。伊奈の旗本衆も皆々晴信へ降參なり。小笠原信貞鈴

岡の城より牢人也。是は長時公御舍弟也。後洛陽のかつら川にて、三好殿先手として。永祿十二年正月六日六條合戰の時。公方義照の爲に信貞討死也。多科直藏〆討死仕候。甚介は征矢野大炊之助弟。光久寺の住寺玄覺坊是也。長時公御近習にて被召仕。後に貞慶公へ御付被成候。

一同年十一月末に。豐後土佐被官共之內三人申合逆心を企。晴信の朱印を取申由候承屆。其一類十六人成敗仕候故しつまり候。然とも下々無心許存候事。

一晴信公より小笠原慶庵を以。武田の旗本に御成候へ。左候へは一門之事候之間。如在有間敷由被仰遣候。御屋形樣御返答にっ。昔ゟ武田小笠原迚雖爲兄弟。在京して院に宮仕奉り。武田より上手の小笠原を。只今長時世に成武田の被官に成事。不思寄候と被仰遣候。

同年十二月晦日の夜。典厩樣御小僧樣。淸藏殿。當悅老中東を忍て御出也。御供の衆六右衞門。草間肥前。万西次郎。征矢野大炊之助。同甚介。大池。志津野織部。同助右衞門御供仕。川中島草間迄御退被成候。屋形樣御無事に退爲可申。二木豐後。同土佐。其外一門共。中東の城に罷有。御屋形樣草間ニ御着被成候。左右承。正月六日忍て中東へ罷出。草間へ參。長時公御供仕越後へ御越被成。景虎公を御賴。出入二年越後に御住居被成候へとも。川中島も皆々武田の御手に入。關の山境目に罷成候に付。攝津國芥川に御座候三好殿を御賴可被成とて。又次郎樣をは景虎に御預置。長時公は上方へ御登被成候。其節長時公二木豐後を被召出被仰付候は。其方信州に罷歸。晴信へ詫言いたし被官可罷成。長時本意の草の種と罷成候へと被仰付候。豐

後申上候は。御諚尤に候へとも。信州へ罷歸り。晴信へ奉公仕。御本意を待申事。中々存も不依儀也。是非上方へ御供可申と達而御訴訟申上候。又長時公御諚には。上方への供是非可致由尤也。しかれとも其方こらへせい有之ものなれは。何様にも晴信へ奉公仕候て。小笠原本意を相待可申。亦何様の無心有ともこらへせい肝要也。末を頼むよし被仰付。然らはとも角も御意次第と御請申上。路銀指上申。中東にて三年御いとなみ。又越後にて出入二年。御臺所豊後土佐二人にて御賄申上る也。此儀皆人存候。二木の者とも有徳に金銀澤山持候子細は。古へ堀野藤次と申者金銀を作り。奥州より京都へ罷上り候とて。信州を通り申候節。世間俄に亂國に罷成に付。前後道塞り成候故。西巻の内田戸と申所に住居仕。則妻を持娘の子一人御

座候。二木小七郎ゟ三代目の六郎右衛門と申もの妻に仕候。藤次相果候後。金銀財寳皆二木の手に渡。夫ゟ有徳に御座候。其六郎右衛門豊後土佐ゟ三代目以前の事也と申傳候。扨長時公上方へ御登御門送り申上。夫ゟ豊後信州川中島へ參候。とかくし山權現に豊後彌右衛門親子籠願をかけ。甲斐國へ參。馬場美濃を頼入。晴信へ詫言可申かと御鬮を取申所に。大日向上總頼申せと御鬮をり候に付。親子連にて大日向上總所へ參。右の旨頼候へは。上總申は。貴殿達は愚人夏の虫。飛て火に入るとのたとへ也。晴信公二木一門をは御にくみ被成候。詫言は成間敷候へとも。亦脇へ遣す儀も難儀なる事に候間。連立甲州へ御越候て侘言いたし見可申に付。ともかくも頼入候とて。上總と同道仕。甲州へ參り候。馬場美濃と致談合。信玄公御耳に入

御意には。此度府中の一揆の儀定而二木一門頭取にて可有之と御意也。小菅申上は。府中一揆の儀。瀨馬三村にて候。二木の者共妻子召連。深篠へ參候所。美濃用心仕。城の內へ入不申に付。其夜は馬出しに皆々罷有。夜明て妻子を本城へ取籠。馬上の者共何も馬場美濃と一所に掛出。働申候。美濃被申候は。忠節の由に御座候と申上。信玄聞召。惡に强ものは善に强し。長時に罷り在候時は。信玄に慮外仕しか。今又晴信へ忠節無比類次第也。猶以後何事出來候共。此者は晴信へ逆心仕間敷と御意被成。忠節なりとて。爲御恩八拾貫の所下され候。御朱印は三木八右衛門に相渡し候。逆心之者共も御仕置。瀨馬を御成敗被成候て。夫ゟ甲州へ御馬入也。

貞慶公松本へ御本意の事

松本は昔しへふかしのと申候さうふと申に武田ゟ城代也。

一午二月。信長公御發向被遊。武田勝頼公生害被成に付。松本をは木曾義政公。織田源五郎殿兩人にて御受取被成。其時甲信亂國に付。府中分の者とも妻子共を中東にくせ置申候。然る所に。小笠原貞慶公飛驒越被成。金松寺と申寺へ御着被遊。御供には溝口美作。犬甘主馬之助。二村勘兵衛。平林彌右衛門。志津野源之丞。其外拾四五人御供にて。二木豐後御尋被成候所。土佐申候は。前の豐後は相果。彌右衛門を豐後と申由申上に付て。溝口美作。犬甘主馬之介手ゟ瀧澤と申者を以て。此方より被仰遣候は。小笠原右近太夫貞慶公。信長公の御朱印御取候て。御本意のため御越被成候と申候。某申候は貞慶と御名乘被成候は何にて候や。長時公は奥州會津に御座候。其助殿は越中國戸山にて討死也。

典厩様は關東に御座候。貞慶と申仁不存と返答仕。犬甘溝口方々申遣候は。中東の城にて御小僧様と申て。長時公の末子にて候と重而申越。御小僧様は豐後存候。御幼少の時より御心能御座候つるは。扨は左様御平愈を御心に被懸候哉と悦。御譜代衆亦は一門の者共同道いたし。金松寺へ參者共二木豐後。其子八右衛門。二木六郎右衛門。子市右衛門。其子藤右衛門。其子九右衛門。二木善右衛門。其子彦〔藤〕兵衛。岩波平右衛門。是は二木縫殿介子也。二木六右衛門。草間肥前。金松寺にて貞慶公へ御目見仕。貞慶公御意には。信長公御目見に。上の諏訪に御越可被成間人數を備候へと被仰付。扨も御供衆丸山將監。同喜兵衛。まゝえ。飯田右馬之介。標葉小野右衛門。岩波佐渡父子。島作右衛門。高島。竹田。其外御譜代の衆。皆々御供申也。其節御進

物指上。小野右衛門兩山と申刀を差上。まゝへ馬を差上。其外何も差上物支度仕百騎計雜兵六百の備にて諏訪へ御越し被成。信長公へ御目見可被仰上と思召され候へ共。御禮不被成。殊に府中仁科木曾殿被遣に付。松本城木曾殿受取御移候故。諏訪より直に貞慶公は上方へ御上り被成候。其節右差上申諸道具。御譜代之内にて拵取申候。扨兩郡の武士不及是非。木曾とのへ御禮申候所に。甲信亂國の砌。貞慶公御供仕。諏訪へ參。木曾殿へ不付して。餘所に仕候。二木一門徒黨仕候と　中東の城へ追上られ。廿日餘り下り不申候に付。二木六右衛門。二木市右衛門。二木彌右衛門。同彦兵衛。同九右衛門。岩波平右衛門。飯田右馬介。征矢野甚右衛門。右十四五騎。雜兵百計にて。中東を忍ひて罷出。我々屋敷見舞に參。中東には豐後六右衛

候へは。信玄公仰られ候は。中東の城へ取籠三年迄晴信へ働候二木一門の事。にくき仕合に思召候へとも。譜代の主へ忠節仕候得は科にもあらすとて。二木一門御赦免被成。信玄御被官に被成との御朱印大日向上總の所に罷下る。其御朱印二木八郎右衛門方へ相渡。今に御座候。夫々信玄の御被官に罷成。山形三郎兵衛同心に罷成。（頭注）武田記山縣三郎兵衛衆札附彌右衛門同源三郎古畑伯耆守　二木一門御奉公仕候。二木の郡本領に候とて。知行として二木一門の者共に被下候。其後方々信玄御働御座候御供御奉公相働申候。其節瀬馬の三村か一家の者とも。信玄公へ申上候は。二木一門之者共。譜代の主長時を飛驒の國呼置候て。信濃へ本領可致手立相談仕。逆心之旨表裏申と申上候。則信玄公々二木豐後。おなしく彌右衛門。同六郎右衛門。同縫殿介一門妻子召連可參由被仰付。二木にて一門打寄。何も相談仕候所に。縫殿介申は。三村入道言葉をたくみ。日比の遺恨を以信玄へ表裏申上間。申分罷成ま敷所詮きたなき死仕候より妻子を害し。鎗の柄刀の續く程は働。腹切申方外は有間敷と申に付。皆一同に腹切。甲州へ參間敷覺悟に御座候。其時豐後申候は。尤縫殿介申所道理有。併先年長時公越後にて御意被成候旨は。本意の時の草の種と御頼被成候に付。其甲斐もなく皆々相果候て。誰か御見届達可申哉。其上僞を申三村は。忠信者に可成候。旁以心外なり。御意に隨而何も妻子を召連。甲州へ參。則山形三郎兵衛に御預置。御穿鑿御座候。若右之旨必定に候はゝ。二木一門の者共は磔にあけ。妻子の儀は串さし可有次第にて信玄支度被仰付。磔木串迄御用意被成候て。豐後三村を殿中へ被召出。信玄

公障子越しに御聽對決被仰付。其申分少も無形僞の段。堅豐後申詰候。三村申分は少も僞無之必定也。長時公飛驒に被罷有しと申。豐後申は譜代の主君に候へは。私の手立に罷成候はゝ尤に候へとも。只今時分誰有て一味仕。逆心を企可申哉。此頃は長時の行衞を不存候と申。左様に候はゝ。卽時に山本勘介を被仰付飛驒へ被遣。國中を相尋候へとも。長時公御座なく。早々罷歸登城仕言上申候は。國中に長時暫も差置者無御座候。三村表裏に僞申由言上申候。則聞召わけられ。二木一門御免被成。豐後彌右衞門。縫殿介。源三郎を信玄公御前に被召出。三村不屆之仕合。則曲事にも被仰付度思召候へとも。國々地戰之砌。重て善惡之儀申上ものゝ爲に付此度の義堪忍仕候て。中を直り。妻子とも甲斐中を見物させ罷歸り候へのよし上意に付事濟。妻子とも召連。信州二木へ罷歸候。其翌年。瀨馬。三村入道とも。信玄へふれへもき逆心を企。一揆を起し。深篠の近所村井出川まて燒働し申候。ふかしのゝ城は。馬場美濃罷有。四方を堅。用心仕所に。二木一門妻子引連。ふかしのゝ城へ參。馬場美濃方へ其段申遣處に。二木一門の者を無心許存候間。夜の內は城へ入不申候。比は正月晦日の事なれは。雪降こゝへなから。妻子馬上の者共も馬出しに相詰て。夜明て妻子共みな本城へ移置。二木一門は馬場美濃人數の先手を仕。村井。標葉。江原の間にて。瀨間三村の者共討取申候。其外生捕仕馬場美濃人數。深篠の城へ引取也。信州に一揆起り。深篠の城へ取懸候由。晴信公被聞召。下の諏訪迄御出馬也。小菅五郎兵衞被仰付。深篠様見せに被遣候。五郎兵衞罷歸。御前に出候時。晴信公

門計罷在候。其時木曾殿古幡伯耆。西卷又兵衞を召て。中東に罷在二木一門を御成敗可被成旨仰付に依て、古幡三百計にて討平に參候と承。屋敷見舞に出申候者共。中東へ退申所に。小屋と申處にて伯耆返し合。手重く喰詰申に付。二木六右衞門乘直りて馬上に弓を持。古幡に向て。日比傍輩今敵と成て。左樣に仕らぬものそ。我々の矢先は其方能可被存。餘り近く進候はゝ。一矢仕候半と申。伯耆申は。只はやく一矢射候へ。伯耆際なる松の木に矢中立申候。伯耆を射る事は手もなき安き事にて候へ共。伯耆は名ある侍成故に依て惜如斯。夫ゟ伯耆の者とも。六右衞門に懸申所に。六右衞門者共返し合勝負仕候を。何も見て。六右衞門打すなとて。二木彥兵衞。二木市右衞門。同九右衞門。同八右衞門。岩波四五騎の者共乘出し申候。木曾殿方の者彥兵衞を鎗にて突落し既に首を取申處に。市右衞門乘掛。馬上にて敵の首打落し申也。市右衞門たすけ申候故。彥兵衞介かり申候。味方の武者七八人討れ。敵を五六人討取申候。引退處に。古畑。再拜持殿仕。六右衞門と間七八間も可有。平林彌右衞門歩にて取て廻し（返イ）。古畑を馬上より取て落し。二の鎗を可突所に。古畑小もの三助と申者平林に掛申候故。平林亦退申候。就失伯耆追留り申候。平林は諏方ゟ貞慶公御上り被成候節。自然替る事も有之候はゝ。御注進のためと被仰。豐後市右衞門に御預置被遊に付。一所に罷在如斯御座候。味方の者とも一つに成漸々中東に分上り申候。扨中東に罷在二木一門の者共。何も可仕樣無之。迷惑仕候故。私中東を忍出て。義政の家老山村と申仁を賴みて。御佗言申候は。今度貞慶公御本意の

ため、信長公の御朱印御座候て御下り候に付て、御供申諏訪へ參候義は某一人の下知にて御座候。余所には少しも御科無之候間。此豐後壹人御成敗可被成。殘りの者共は被召置可被下と申上候へは。御聞分。則娘を木曾殿へ人質に出し越申候。其時一門山村を以て木曾とのへ御禮御被官に罷成候。其後兩郡の武士何れも木曾殿へ逆心仕候へとも、某木曾殿へ逆心不仕候。

一同年六月。信長公御生害に付。亂國に罷成候に依て。最前追出す當悅樣越後に御座候か。景虎の子景勝ゟ梶田八代兩人の物頭に。侍貳百騎被相添。松本の城へ御越なされ候に付。兩郡の侍國主と奉仰候。併當悅樣に付參候兩人の者共當悅樣に不任。我儘に仕置いたし候。依之某弟六右衛門と。密々致相談。此國當悅樣御仕置にてなし。梶田八代兩人か支配たる間。小笠原殿御國にてなし。所詮貞慶公を尋申。此國に御本意させ申越後勢を逐拂可申由談合を極て。御行衛を尋申候所。三河家康公に牢人にて御座候由風聞承に依て。有賀又右衛門。平澤重右衛門と申兩人を竊に頼。起證文書を征矢野甚右衛門筆にて書狀認。右兩人に渡。三河へ越申候處に。兩人の物無恙致參着。御返事を取罷歸候。夫より貞慶公三河を御出。伊奈の下條へ御越。平井彌右衛門。志津野源之丞。某兄弟方へ兩度被遣候。某兄弟不斜悅。前後の首尾相調待所に。下條の人數被召連箕輪殿御越。又箕輪殿人數被召連。鹽尻に御着のよし松本へ到來有之に付。私市右衛門兄弟松本を乘出。上下物見し。見物に鹽尻へ參候に出川にて松島善兵衛兄弟の者。某と共に逐付申候は。下伊奈の敵は何者にて候哉。物見の可

致御供由申。此者能者して候間。貞慶公御越之由申聞せ候へは。菟も角も御前へ可然樣に頼入と申故。某ともに鹽尻へ參候。其外一門とも城を明皆々鹽尻へ御迎に參。鹽尻にて貞慶公御前へ私兄弟罷出候へは。犀形樣御意には。今日本意必定可有かとの御諚也。某申上候は。今日の御本意。自然不被成候はゝ御討死可被遊候。某共も御供可仕と申上。貞慶公御意に者。豐後申所尤也。某も近來の望本意を可遂念願也。さもなき時は討死と極思召にて。御手つから某に再拜被下候。某所持仕候。貞慶公御供仕衆。溝口美作。犬甘主馬之介。茂呂村〔善イ〕吉平。平林彌右衛門。三村勘兵衛。志津野源之丞。以上十四五人。下條みの輪の人數二百計。其外鹽尻へ參御禮申上候。御譜代衆不殘御供也。午七月十六日に松本へ御越被遊。當悅樣御座被成處へ取掛責申候。城の内には。梶田八代物頭也。城内より打鐵炮にあたり。箕輪内松島大出之者。鹽尻衆討死也。扨三の丸二の丸迄攻入。本城計にいたし夜に入て此方より梶田方へ斷申候は。當悅樣伯父也。然者貞慶公小笠原の惣領に成に依て。松本へ本意被成候半つれとも。當悅樣被成御座候故。不叶仕合にて。互に遺恨も無之事にて候間。城を明御渡候へと。互に無事を申處に。梶田申は。委細承り屆申候。然は溝口美作。草間肥前兩人を人質に御越候へ。退可申旨に付。則兩人を人質に相渡し申候。七月十六日夜明方。當悅樣仁科ちくま通を越し。越後へ御退被成候。午七月十七日朝。松本の城へ貞慶公御移被成候て。御本意被遊候。此深篠の城と申は。天文十九年庚戌年野々宮合戰に。貞慶公御勝。中東に御上の時ゟ。天正十壬午年迄廿三年

に當り、御本意を被成。松本と貞慶公御名付遊され候。

一御本意遂され候得共。城廻り計御手に入候故。城中不開に依而。二木一門申合。同月廿日妻子を本城に籠申候。此時心さし有御譜代衆の內、其の妻子を城へ籠申候。就夫城中少し替り候へとも。城地ゟ一里外。古へ御旗本衆亦御譜代の者共、越後勢引付。我々か居城に栖籠。屋形樣には不隨。世間の樣を見合罷在に付、貞慶公御出馬にて御攻御蹈崩被遊候故。亦御馬を引受て、以後降參仕御旗本に罷成候。

一相田若年に付。家老堀內越前再拜を取籠城仕り。然共門、に御踏崩し御手に入。越前守大手の木戸へ走出討死仕候事。

一青柳は越後勢を引付。籠城仕。御馬引請度々合戰致候へとも。終に降參仕。後に御成敗被成候事。

一日岐は御馬引受。度々合戰候へとも。御踏崩し被成。然共無降參。落城以後越後へ退牢人也。

一古厩降參。御旗本に成候事。

一細貝降參。御旗本に成候事。

一春日降參。御旗本に罷成候事。

一大日向降參。御旗本に罷成候事。

一木曾口へ御働。御手に入事。大たこ夏道（立通イ）の取出御攻取の事。

一稻こき口かまへ御備の事。

一瀨馬本山口へ木曾口ゟ七八度働候時。能者とも地方へ討取候事。

一宇平取出御攻破之事。

一にへ川取出御攻破之事。

一鳥居峠にて御勝軍の事。

一やこ原表にて取合の事。

一わか澤かまり（きイ）御破の事。
一小いわら（うイ）取出御破の事。
一上野たいら（かはイ）にて。所務に三度御勝軍之事。
一福島御攻の時橋の上にて强一戰に勝利有事
一なはあけ松所務かり勝利の事。
一木曾義政。かんせん寺へ引籠罷在候事。
一貞慶公木曾殿居城福島へ御押詰被成候に付。古畑先手仕。罷出。川を隔軍御座候とき。松島善兵衛に向て。古畑惡口致候に付。善兵衛腹立。けわしく流越る川にてなけれとも。馬を乘入候岩波其外五六騎の者。善兵衛乘入しを見て。續て飛込。川向へ乘上。古畑を生捕。貞慶公御前へ出候へは。則はた足を打籠金被仰付。殊の外御にくみ被成候。其後二木の者共度々御侘言仕。漸々古畑を申請。御被官に被成候。貞慶公御代に罷成候に付。以前木曾とのへ人質に越し置候某娘御返し被下。只今小山吉左衛門妻にて御座候。
一伊奈口にて宮田の取手御攻破。高遠の城主御攻詰被成。如斯敵地へは。方々御働。勝利御座候へとも。御領地は敵一度も足をとめ不申候。偏に御屋形樣御武勇。厚御鑓先强候に依也。扨其後に府中兩郡の侍とも。貞慶公に隨ひ。主君と奉仰候。
兵部太輔樣御望に付。前後仕候へとも。拙者存知覺申候之通。荒增書記差上申候。
以上。
慶長十六辛巳年十月吉日　二木豐後入道壽齋
小笠原主水殿

以内閣文庫本謄寫校合畢

河中島五箇度合戰記

御尋ニ付書上候信州川中島五ヶ度合戰

一信州五郡ノ領主村上左衛門尉義清ハ。清和源氏伊豫守賴義ノ舍弟。陸奧守賴清ノ子白河院藏人顯清初テ信州ニ住居。顯清四代ノ孫藏人爲國。其子村上判官基國ノ後胤也。高梨攝津守政賴モ。伊豫守賴義舍弟井上掃部頭賴季三代ノ孫。高梨七郎盛光末也。井上河內守淸政モ高梨ノ一統。須田相模守親政モ同ク一家。島津左京進親久ハ。賴朝ノ御子島津忠久ノ後胤。何レモ信州ノ高家也。右ノ輩甲州武田大膳大夫晴信ニ打負。皆越後ヘ落來。長尾景虎ヲ賴申候。中ニモ村上義清ハ。多年武田ト取合。終ニウチ負。天文廿二年六月ニ越後ヘ落來。景虎ヲ賴本領坂本ヘ歸城本意ノ事ヲ被望。景虎此年閏二月初テ上洛廿四歳也。是ハ前ノ年天文廿一年五月。勅使將軍使有テ。景虎ヲ彈正少弼從五位下ニ任セラル。依之御禮トシテ上洛也。景虎則參內。昇殿ヲユルサレ。忝モ玉顏ヲ奉拜天盃ヲ被下。又義輝公ヘ御目見。種々御懇情有テ。五月歸國被致候處ニ。六月村上義清落來リ景虎ヲ被賴候。シカノミナラス高梨政賴　井上淸政　須田親政　島津親久。栗田。淸野以下皆々越後ヲ賴加勢合力ヲ乞ニ付。同十月十一日。田濱ニテ勢揃信州ヘ發向シ。武田ニ屬スル輩ノ領分不殘放火シ。又己ノ館ニ引籠見合居ル輩ノ領分ハ無構押通リ。川中島ヘ十一月朔日ニ着陣。晴信モ一萬ニテ出張。同十九日ヨリ其間壹里計ニテ日々セリ合。同廿七日景虎ヨリ平賀宗助ヲ使ニテ。明日有無ノ戰可致ト申遣。備配リ定テ夜ノ內ヨリ人數ヲ出シ。先手ハ長尾平八郎。安田掃部。續テ長尾

包四郎。元井日向守清光。同修理進弘景。青河十郎左右ニ備ヘタリ。左ノ横槍ハ諏訪部次郎右衛門行朝。水間掃部頭利宣。奇兵ハ長尾七郎景宗。臼杵包兵衛。田原左衛門尉盛頼。二ノ實ハ小田切治部少輔勝貞。荒川伊豆守義遠。山本寺宮千代丸後ニ庄亂行長吉江松之助定後。直江新五郎實綱。後陣ハ長尾兵衛尉景盛。北條丹後守長國。齋藤八郎利朝。柿崎和泉守景家。宇佐美駿河守定行。大國修理亮等七手ニテ四拾九備一手ノ様ニ組。丸備ニ作リ。廿八日卯ノ下剋ヨリ一戰ヲ始候。武田方ニモ十四段ニ備立防戰火ヲ散シ。敵味方手負死人數ヲ知ラス。下米宮橋ヲ追詰追返シ未ノ下刻迄合戰勝負區々也。然レモ越後方筑摩川ノ橋ヨリ上ヲ乘渡シ。武田勢ノ後ヘ廻シ候ヲ見テ　武田方總敗軍。横田源介。武田大坊。板垣三郎駿州ヨリ加勢。朝比奈左京

進。武田飛騨守。穴山相模守　中菅善四郎。栗田讃岐。染田三郎左衛門。帶刀刑部少輔ヲ初メ。甲州方五千餘討死也　則十二月三日ニ京都公方ヘ注進。大舘伊豫守披露。是則景虎ト晴信トノ手合ノ始也。其頃景虎ハ長尾彈正少弼ト號ス。關東管領上杉憲政北條氏康ニ仕詰ラレ。越後ヘ內通。管領職ト上杉ノ名字幷憲政ノ一字ヲ給ル。管領職ハ辭退シ。名字ハ景虎ヲ正虎ト改申候。天文廿三年春ノ義也。同年八月初正虎越後ヲ立。川中島ニ着。丹波島ニ陳取申候　越後ノ留主上條入道上杉定實ノ弟定實ハ謙信ノ姉婿。定實逝去ノ後ニ。後室チ少風入道ニ再嫁。上條ノ城主也。　山浦主水入道。山本寺伊豫守。大國主水入道。黒金上野介。色部修理。片貝式部七頭。其勢八千。謙信ハ則川中島ニ陣ヲ張申候　先手ハ村上義清。二ノ目川田對馬守。石川備後守房明　本庄彌次郎繁長。高梨源五郎頼治　四頭也。後

諸ハ柿崎和泉守景家。北條安藝守長朝。毛利上總介實俊。大關阿波守規益四頭也。浮武者ハ本庄美作守慶秀。齋藤下野守朝信。松川大隅守元長。中條越前守藤資。黑川備前爲盛。新發田長敦。杉原壹岐守憲家。上條薩摩守。加地但馬守。鬼小島彌太郎。鬼山吉孫次郎。黑金治部。直江入道。山岸宮內。柏崎日向守。大崎筑前守高濤。桃井讃岐守直近。唐崎左馬介。甘糟近江守。神藤出羽介。親光安田伯耆守。長井丹後守尙光。鳥山因幡守信貞。平賀志摩守賴經。飯盛攝津守。竹股筑後守春滿。各廿八備。侍大將二行ニ陣ヲ張旗ヲ進ル也。宇佐美駿河守定行一千餘。松本大學。松本內匠介千餘旗本脇備也。總軍弓矢奉行上田政景。（長尾越前守謙信姉婿。景勝カ親也。）飯野景久。古志景信。刈和實景四人ハ。皆長尾同名ニテ謙信一門也。越後勢都合八千也。サイ川ヲコエ。綱島丹波島原ノ町ニ鶴翼ニ陣ヲ取申候。

一武田晴信モ。同十五日河中島ヲ通。貝津ノ城ヘ入。十六日人數ヲ押出シ。東向ニ雁行ニ陣取也。先手ハ高坂彈正。布施大和守。落合伊勢守。小田切刑部。日向大藏。室賀出羽介。馬場民部。各七組。其勢七百先手ニ旌ヲ進立申候。二ノ目ハ眞田彈正忠幸隆。保科彈正。市川和泉守。淸野常陸介四頭。其勢二千。後詰ハ海野常陸介。望月石見守。栗田淡路守。矢代安藝守四頭二千七百。浮武者ハ仁科上野介。須田相模守。根津山城守。井上伯耆守五頭。其勢四千。貳行ニ立テ陣ヲ張。總弓矢奉行ハ武田左馬介信繁。小笠原若狹守長詮。板垣駿河守信澄三備。旗本麾頭ハ飯富三郎兵衞昌景。阿止部大炊介信春。七宮將監。大久保內膳。下島內匠。小山田主計。山本勘介。駒澤主祝八人。晴信將几ノ左右ハ。高家ノ侍一

條信濃守義宗。逸見山城守秀親。是ハ晴信姉婿ニテ本陣ヲ取廻シ。其外下山河内守。南部入道喜雲。飯尾入道淨賀。和賀尾入道。土屋伊勢。濱川入道六頭。其勢二千陣取申候。日夜互ニ足輕ヲ出シ。挑戰候得モ。イマタ合戰ハ無之候。

一天文廿三年八月十八日ノ曙。越後陣所ヨリ。草刈モ二三十人。未明ヨリ出テ。カケマハリ。甲州ノ先手高坂陣ヨリ。足輕百人ハカリ出。彼草カリヲ追マハシ候處ニ。兼テ工シ故。越後方村上義淸。高梨政賴カ足輕大將小室平九郎。安藤八郎兵衛。二三百人。夜ノ内ヨリ道ニ伏居。高坂カ足輕ヲ引包不洩討取ケルヲミテ。高坂彈正。落合伊勢守。布施山城守。室賀出羽介陣ヨリ百餘騎乘出シ。オメキサケンテ戰後。足輕ヲ追立候。上杉先手ノ際迄押寄候所ヲ。義淸政賴兩家ノ軍兵一度ニ突テ出。追討ニ打程ニ。武田衆百騎ノ勢一騎モ不殘討取申候。高坂。落合。小田切。布施。室賀一ノ守護ヲ破ラレ。元ノ陣差テ引退申候。武田方ハ先手打負被追立ヲ見テ。眞田幸隆。保科彈正。淸野常陸。市川和泉。二ノ目ヨリ突テ出。勝ニ乘テ追亂レタル上杉勢ヲ追返シ。追討ニ打立。陣所ノ木戸口迄付入ニシテ。義淸政賴モ既ニ危ク見ヘ申候所ニ。二ノ目ニ越後ノ士川田對馬守。石川備後守。高梨源五郎三頭。其外ノ浮武者ノ内ヨリ。新發田尾張守。其子因幡守。杉原壹岐守五頭。其勢二千計ニテトキヲ揚カケ出シ。武田勢ヲ追散シ戰申候。其中眞田彈正幸隆手負退申候所ヲ。上杉方高梨賴治ト名乘。眞田トムスト組テ押伏。鎧ノ脇板ノ透間ニ刀サシ申候内ニ。保科彈正取テ返シ。眞田討スナ者共トテ戰申候。眞田カ家人細谷彦助折合テ。高梨

源五郎カクサスリノハツレ。ヒサノ上ヨリウチ落ス。則主ノ敵ヲ取申候。是ヨリ保科ヲ槍彈正ト申候由。保科モ其時越後方ノ大勢ニ取籠ラレ。既ニ危ク見ヘ候ヲ。後詰ノ士海野。望月。矢代。須田。井上。根津。河田。仁科。九人是ヲ見テ。保科討スナ人々ト。大勢一度ニトキヲ上ケ追チラシ申候。越後ノ本陣近キ處迄切掛リ候所ニ。越後ノ後詰齋藤下野守朝信。柿崎和泉守景家。北條安藝守。毛利上總介。大關阿波守。三千餘トキヲ揚切テ出。追返シ推戻シ戰候。敵味方手負死人算ヲ亂シ數不知。謙信紺地ニ日ノ丸。白地ニ毗ノ字ヲ書タル旗ヲ二本押立。原ノ町ニ備ヲ立ラレ。其合戰時ヲ移シ申候。其內ニ晴信下知ニテサイ川ニ大綱ヲ幾筋モ張渡シ。武田旗本大勢彼繩ニ取付。向ノ岸ニ上リ。大野蘆荻ノ茂リタル中ノ細道ヨリ。旗差物ヲ伏セ忍出。謙信ノ旗本ヘトキノ聲ヲ上ケ俄ニ切テ入候故。謙信旗本一度ニ敗軍致候ヲ。武田方勝ニ乘テ追討致候　晴信勇テ旗ヲ進ラレ候處ニ。大塚村ニ備ヲ立申候越後方。宇佐美駿河守定行二千計。橫槍ニツキ掛リ　晴信ヲ御幣河ヘ追入候所ヘ。越後ノ士渡部越中守五百餘騎カケ付。晴信旗本ヘ切テ掛リ。宇佐美トモミ合。信玄旗本ヲ立挾ミ討取申候。武田勢人馬川水ニ流レ。又ハ討ル、者數ヲ不知。謙信旗本勢モ取テカヘシ。信玄旗本ヲ討取申ハ。越後方上條彌五郎義淸。（後畠山入道）長尾七郎。元井日向守。沼野掃部。小田切治部。北條丹後守等。其外靑川十郎。安田掃部。御幣川ヘ乘込。ヤリヲ合。太刀打高名仕候。其外手柄ノ士多シ。又討死ノ者多ク候。信玄モ三十計ノ人數ニテ川ヲ渡シ引除キ申候所ヲ。謙信川中ヘ乘込。晴信ヲ二太刀切付被申。信玄

モ太刀ヲ拔合戰被申所ニ。武田近習ノ侍謙信ヲ中ニ取籠候得共。切拂ヒ。中々近付ヘキ樣無之。其内晴信モ謙信モ間キレ押隔リ候。其節謙信ヘ掛リ候武田近習ノ士拾九人被切候。謙信ハ人間ノ振廻ニテ無之。只鬼神ニテ候ト申候。其砌謙信トハ不知。甲州方ニテハ越後ノ士荒川伊豆守ニテ有ヘシト取沙汰致候。後ニ正虎ト聞候テ可討留物ヲ殘多シト皆々申候由。信玄御幣川ヲ渡リ。生萱山土口ヲ心サシ。先陣後陣一ツニ成敗軍。其外甲州勢鹽崎ノ方ヘ遁ルモ有リ。又貝津ノ城ヘニケ入モ御座候。中條越前ハ小荷駄ヲ警固仕候所ヘ。鹽崎ノ百姓數千發リ小荷駄ヲ奪取候故。中條是ヲ切拂散々戰候故。此時上杉武田ノ兩軍入亂。散々戰候間。敵味方ノ手負死人數ヲ不知。信玄敗軍シ。戸口ト申山ヘ退被申候。上杉勢追詰。土口ニテ甲州方數百被討申候。信玄弟左馬介信繁。七十騎ニテ。後詰ノ陣ヨリ馳來リ。信玄手負被申候ヲ聞テ。其仇ヲウチトメ可申ト乘モトシ被申候。其時ハ謙信川ノ向ニ被居候。左馬介大音ヲアケ。夫ヘヒキトリ被申候ハ。大將政虎ト見候。是ハ武田左馬介ニテ候。兄ノ當ノ敵返シテ勝負セラレ候ヘト呼カケ被申候。謙信乘戻シ。是ハ正虎カ郎等甘糟近江守ト申者也。貴殿ノ敵ニハ不足也ト申ステ。川岸ヘ馬ヲ寄。待掛タル左馬介主從十一人左右ヲ見ルニ。敵一騎ニテヒカヘタリ。信繁モ一騎ニテ勝負スヘシ。皆々跡ヘ下リ候ヘト下知シテ。眞先ニ渡サレ候ヲ。正虎川ヘ馬ヲ乘入。左馬介ト切結フ。左馬介運盡テ高股ヲ打落サレ川ヘ逆樣ニ落入候。謙信ハ向ノキシヘ乘上。宇佐美駿河守カ七百餘ニテ備ヘ候中ヘ馳入被申候。一說ニ武田左馬介信繁ヲ討取候者ハ村

上義清也ト云。上杉家ニテハ謙信直ニ左馬介ヲ討取候ト申傳ヘ候。甲州ニテハ信玄二ケ處迄深手ヲオヒ申サレ。信繁ハ討死也。板垣駿河守。小笠原若狹守二ケ所三ケ所宛手ヲオヒ候故。終ニ敗軍也。越後勢モ旗本ヲキリ崩サレ敗軍シケルカ。宇佐美駿河守。渡邊越中守。横槍ニイリ。信玄旗本ヲツキ崩シ候ニ力ヲ得。甲州勢ヲ追返シ。モトノ。陣處シハキニ旗ヲ建。鶴翼ニ陣ヲハリ候。此時ノ戰ハ天文廿三年甲寅八月十八日。卯ノ尅ヨリ終日十七度ノ合戰也。武田方二萬六千ノ內。手負一千八百五十九人。討死三千貳百十六人也。越後勢手負千九百七十九人。討死三千百十七人。扨又十七度ノ合戰十一度ハ謙信勝軍。六度ハ信玄ノ勝軍也。謙信旗本ヲ破ラレ候得モ追返シ。本ノシハキヲ取カヘシ陣ヲハリ申サレ候。武田ハ信玄深手ヲオヒ申サレ左馬介討死。板垣小笠原ヲ初。總頭ヲ初。大將分テオヒ候故。此陣不叶。夜ニ入陣拂被引退候。謙信モ翌日引取被申候。是ハ天文廿三年八月十八日。川中島合戰之次第ニテ御坐候。十九日ニハ謙信善光寺ニ逗留シ。手オヒヲ先ヘノケ。手柄高名ノ軍兵共ニ感狀證文ヲ出シ。廿日ニ善光寺ヲ引拂。越後ヘ歸陣也。第三第四第五。

一弘治二年丙辰三月。政虎川中島出陣。信玄モ大軍ニテ出向陣取。日々物見ヲ追立。草刈ヲ追散シ。足輕セリアヒ有テ。信玄ノ謀ニハ戶神山ノ中ヨリ信濃勢ヲシノハセ。謙信陣所ノ後ヘ廻シ。夜カケニシテトキノ聲ヲアケ。一度ニ切カヽラハ。正虎ハ。勝負ニヨラス。筑摩川ヲ越テ引トルヘシ。其所ヲ川中島ニテ待請。立挾テ可討留ト相計リ。保科彈正。市川和泉守。栗田淡路守。清野常陸介。海野

常陸介。小田切刑部。布施大和守。川田伊賀守。十一頭。其勢六千餘ヲ戸神山ノ谷際ヘ押マハシ。信玄ニ萬八千ニテ備ヲ立。先手合戰初ルヲ待被申候。先手十一頭ハ戸神山ノ谷際ノ道ヲ經テ。上杉陣所ノ後ヘ押マハラント急ケレ𪜈。頃ハ三月廿五日。夜半ノ事也。道ハ難所。殊ニ春霞深ク。目サス𪜈シラヌ暗ノヨニ。山中ニ蹈迷テ。爰カシコト行程ニ。ヨモ明方ニ成申候。謙信ハ廿五日ノヨニ入。信玄陣中兵糧ノ烟篝火夥敷。人馬ノ音ノ騷動ヲ以。明朝合戰可取掛相色ヲ察シ。其ヨ亥ノ刻正虎物具シテ。八千餘ノ軍兵ニテ。チクマカハヲコシマヲサレ候。先陣ハ宇佐美駿河守定行。村上義清。高梨攝津守政賴。長尾越前守政景。甘數備後守清長。金津新兵衛。色部修理。齋藤下野守朝信。長尾遠江守藤景九頭四千五百。二ノ手正虎旗本差ツヽキ。廿五日夜寅ノ刻ハカリニ。信玄ノ本陣ヘ一文字ニ切テ入。無二無三ニ合戰ヲ始申候。信玄ハ思モヨラス由斷ノ折フシニテ。先手ノ左右ヲ待居ラレ候節ナレハ。一戰ニモ不及周障騷クトコロヘ越後ノ兵𪜈射立ツチ立切掛リ候。武田方飯富兵部。內藤修理。武田刑部信賢。小笠原若狹守。一條六郎取合防戰申候然レ𪜈越後方齋藤。宇佐美。柿崎。山本寺。甘數。色部等一度ニトツト突テ掛リケレハ。信玄本陣破レ敗軍也。板垣駿河守飯富一條。ヒタ甲百騎取テ返シ。高梨政賴。長尾遠江守。直江大和守備ヲ追散シ。ニクルヲ追テ進ム所ヲ。村上義清。色部。柿崎。横合ニツキカヽリ。板垣一條ヲ追マクリ追討ニ致シ候。小笠原若狹守。武田左衞門。穴山伊豆守三百騎。味方討スナ者𪜈トテ。トキヲ上テカケ入。越後方ニテ杉原壹岐守。片貝式部。中條越前

守侍着。齋藤左衛ヨリ引包ミ。オメキサケンテ切立候故、爰ニテ信玄方大將分、板垣駿河守、小笠原若狹。一條等討死、足輕大將山本勘介、初鹿野源五郎討死。諸角豐後守モ討レ申候　廿五日夜寅刻ヨリ翌廿六日卯刻迄推返シ推戻シ、三度ノ合戰。信玄打負敗軍。十二備被追立討タル、者數ヲ不知。正虎勝利ヲ被得候所ニ、戸神山ヨリオシマハシタル武田ノ先手十一頭。六千餘。川中島ノ鐵炮ノ音ニテ、是ヲ聞、スハヤ謙信ニ出シヌカレヌルハトテ、我一ニ筑マ川ヲコエ、眞黑ニ成テ押寄ル。信玄是ニ力ヲ得、取テカヘシ、越後勢ヲ立挾ンテ、前後ヨリモミニモンテ戰故越後勢敵ヲ前後ニ請、總敗軍トミヘ候ニ。新發田尾張守、本庄彌次郎、三百餘、高坂彈正カ立堅メタル虎口ヘ一文字ニ打テカヽリ。四方ヘ追散シ切崩ケレハ。上杉ノ餘勢共一

手ニ成。サイ川ヲサシテヒキ退ク。武田勢是ヲ見テ。越後總軍。此川ヲ渡ル所ヲノカサス討取ヘシト下知シテ。晴信ノ軍勢共、我モ々々ト甲州勢追カケ候處ヲ。上杉勢退クフリニモテナシ。車カヘシト云方便ニテ。先ヨリクルリトヒキ廻シ。一度ニカヘシ合セ。甲州勢保科。川田。布施。小田切ヲ眞中ニトリコメテ。一人モモラサシト攻戰フ程ニ。信玄方大將分河田伊賀、布施大和守被討取。殘勢モ過半被討ケル處ヘ、甲州後詰、栗田淡路、淸野常陸介、根津山城守、各横槍ニツイテカヽリ、保科小田切ヲ引取ケル。扨越後ノ諸軍先ヲ先ニ、段々ニ押タテ、シツ〱トヒキトリ、サイ川ヲ渡ル所ヲ、晴信ノサキ手飯富三郎兵衛、内藤修理、七宮將監、跡部大炊、下島内匠、小山田主計追來リケル所ヲ。本庄美作、柿崎和泉、唐崎孫之丞、栢崎彌七郎取テ

返シ攻戰フ所ニ。新發田尾張守。齋藤下野守。本庄彌次郎。黒川備前守。中條越前守。竹股筑後守。其子右衛門八百餘リ柳原ノ木陰ヨリマハリ來テ。聲々ニ名乘。某何某コヽニ有ト。ソコヲヒクナトヲメキ叫ンテ。一文字ニ突テ掛リケル。甲州勢元ノ陣サシテヒキ退ク。越後勢ハ勝ヲエテ。其足ニテ川ヲコエ。向ノキシヘ上リケル。甲州カタ猶モ慕ントヒシメキケレ𪜈。越後方宇佐美駿河守。千餘騎ニテ市川ノ渡口ニ旗打立。一戰ヲ待掛タルニ恐レ。其上甲州方ハ夜前ヨリ難所ヲ凌キ。終夜草臥。其マヽニテ四度ノ合戰ニカモ落精ツキ疲レ果。重テ戰ンヤウソナキ。甲州本陣ノ軍兵共入替リ追討ントセシヲ。信玄堅ク制シ給ヒ。一人モ追不來。越後勢ハ心ノマヽニ川ヲコシ。初ノ陣所ヘ引上陣取候。其日ノ合戰未明ノ内ニ三度。夜明テ四度。都合七度ノ戰ニ。越後方討死三百六十五人。手負千廿四人。甲州方討死四百九十一人。手負千二百七十一人ト記シケリ。其中ニモ大將分小笠原若狹守。板垣駿河守。一條六郎。諸角豐後。初鹿野源五郎。山本勘介ヲ初。信玄之士歷々ウチ死セシカハ。翌日廿七日。信玄引ノキ被申候。正虎モ手負死人カタ付マトヒ相引ニ引レ候。弘治二年三月廿五日ノ夜ヨリ。廿六日迄。川中島第三度ノ合戰ニ御座候。

一弘治二年八月廿三日。正虎川中島出張。先年ノ陣所ヨリ進テ川ヲコエ。鶴翼ニ陣ヲ取リ被申候。先年兩度ノ時ノ陣跡也。是ニハ村上義清。高梨政頼ヲ陣取セ。圓月ノ形ニ十二行ニ張申候。信玄ニ萬五千ニテ出張也。此度越後陣取長陣ト相見。薪ヲ山ノ如ニ積置由。甲州ノ物見注進スルヲ。晴信聞テ一兩日ノ内

ニ。越後ノ陣ニ夜中火事有ヘシ。其時一人モ進出タル者アラハ。子孫末類罪科ニ可行ト下知有。然所ニ廿三日ノ晩方。越後ノ陣所ヨリ小荷駄ヲ附出シ。人夫ニ荷ヲ持セ。諸軍旗ヲ押立陣拂シ引除ク體ニミヘタリ。甲州方ノ軍兵。スハヤ謙信カ引取ハノカサス。此引足ヲ追討ヤ者モトテヒシメキケルヲ。信玄一ノ木戸ノ非樓ニ上リ遠見シテ曰。謙信程ノ大將。暮ニ及テ陣拂退ヘキ樣ナシ。是ヲ追ハ乙度也。壹人モ出ヘカラスト制セラレケル。案ノ如其夜丑ノ刻。越後ノ陣處ヨリ火事出來騷動夥シ。然レモ信玄カタク下知シテ壹人モ不出。ホトナク天明。越後ノ陣處ヲ見渡セハ。道スチヲアケ。ヨロフタル武士。槍長刀ヲ持。六千ハカリ二行ニ進テ。寄ル敵ヲマチ居候。朝キリノ晴ル、ニ隨テ。ミハタセハ。二行ノ備左リ先手長尾政景。右ハ宇佐美駿河守定行。松本大學。中條越前ヲ頭トシテ十備。杉原壹岐守。山本寺伊豫守。鬼小島彌太郎。安田伯耆守備頭トシテ十二備。中筋ハ紺地ニ日ノ丸大四半毗ノ字書タル四半ノ下ニ。正虎將机ニ腰ヲ掛。其勢壹萬餘リ箕手ニ進ンテ。寄ル敵ヲ待カクル。甲州勢是ヲミテ。此陣前ヘ押カヽリテ有ナラハ。一人モ生テ歸リ難シ。信玄ノ智計リ難シ。只名將ト云ノミニ非ス。權化ノ人也ト感シ申候。其翌日晴信手立ヲ致シテ云。夜中ニ甲州方一萬人ノ人數ヲ兩山ノ木陰ニ密カニ伏置。扠馬ノ綱ヲ切テ越後ノ陣所ヘ放掛。馬ヲ慕テ人ヲ出スヘシ。必敵陣ヨリ足輕此馬ヲ目ニカケ可出也。其時其足輕ヲ討取體ニモテナシ。侍百騎乘出シ。越後ノ足輕ヲ追立ハ正虎ヲコノ者猛キ武士ナレハ。百騎ノ勢ヲ遁サシト追出ヘシ。其時足並ヲ亂シ敗軍ノ振ニテ此

谷キハヘ引入。兩山ヲ引廻シ。後陣ヲツキ切テ。其外ノ兵モ兩方ヨリ折タチテ。目ノ下ニ取マハシ。矢サキヲソロヘ筒先ヲ並ヘ打ヘシト定置。馬ニ三疋綱ヲ切テ越後ノ陣所ヘ追放シ。足カル五六十人出シ。コ、カシコヘ追マハシノ、シリケレハ。越後ノ陣所ニテ是ヲ笑ヒ。一人モ不出。信玄見被申。謙信ハ名將此謀ニノラサル弓取也ト被申。シカシ大河ヲコエテ陣取ハ不思議也。イカ樣信州ノ內。謙信ヘ內通ノ者有ヤラント大事ノ發ラヌ內ニヒキ取ヘシト內談シ。信玄夜中ニ陳拂シテ。上田カ原迄引取候ヲ。謙信總軍ニテオシ詰候テ。信玄ト一戰。卯ノ剋ヨリ未ノ刻迄五カトノ合戰。初ハ武田打負。過半退キ候得共。甲州方新手カケツケ烈シク戰ヒ。越後勢オシタテラレ候ヲ。長尾越前守正景。齋藤下野守朝信諸手ニ勝レモリカヘシ候。下平彌七郎。大橋彌次郎。宮島三河守槍ヲ入レ。武田ヲツキ崩シ申候。上杉方雨雲治部左衞門横合ニツキ掛リ。道スチヲツキ崩シ申候。宇佐美駿河守定行手勢ヲ以山ノテヨリ信玄下陣ヘ切テカ、リ候故。甲州方遂ニ敗北ニテ候。翌日信玄モヒキ取。謙信モ馬ヲ入レ被申候。甲州方千十三人。越後方八百九十七人討死。

一永祿二年四月。謙信上洛參內。幷公方義輝公ヘ拜謁。輝虎ト號シ。網代塗輿御紋御免。並文之裏書迄御免シ御歸國也。管領職ハ辭退。朱柄ノ傘屋形號御免。三管領ニ被準。其後永祿五年管領ニ被任候。

一永祿三年九月ヨリ。謙信關東發向。上州平井。厩橋。名和。沼田等諸城ヲ攻落シ。其年ハ前橋ニテ越年。

一永祿四年辛酉年春。輝虎小田原發向ノ定ニ

テ正月古河ノ城足利義氏ヲ被攻。三月ニ小田原發向。始テ上杉氏ヲ名乘ラル、。同八月謙信河中島へ發向。西條山ニ陣取。下米宮海道ト貝津ノ城ノ通路ヲ取キリ。西條山後ヨリ赤坂山ノ下へ出候水ノ流ヲセキ上。ホリノ如ニ致シ、西條山ヲ攻。候時ノ防ク便リニ致候。八月廿六日。信玄河中島ニ着、下米宮陳取。西條山ノ下迄陣トリ候故。越後方ハ前後ニ敵ヲ請申候。謙信夜軍ノ心カケニテ。色々手段被致。廿九日信玄下米ノ宮ヨリ貝津ノ城へ入申候。九月九日夜。武田總軍ヲヒキマトヒ。ヒソカニ貝津ノ城ヲ出。筑摩川ヲコエテ。河中島へ出テ。備ヲ立申候。越後方夜盜組ノ物聞モ見付テ告來ル故。謙信。直江大和守實綱。宇佐美駿河守定行。齋藤下野守朝信ト相談シ。其夜子ノ刻謙信モ人數ヲツレ。密カニ川中島へ出。西條山ノ下村上義清。高梨攝津守等。其外井上兵庫介清政。島津左京入道川下齋五手ヲ殘シ置。川中島備場ニテハ本庄越前守繁長。新發田尾張守長敦。色部修理亮長實。鮎川攝津守。下條薩摩守。大川駿河守五千餘。筑摩川ノ端ニ備ヲ立。貝津ノ城ヨリ若武田新手勢掛リ來。横槍可有カトノ押也。謙信備立ハ。左リ先手柿崎和泉守。右先手齋藤下野守朝長。長尾政景。二ノ實ハ北條丹後守長國。右備本庄越前守慶秀。左ノ脇備長尾遠江藤景。右ノ方ハ山吉孫次郎親章。中ノ手ハ謙信旗本。後備ハ中條梅坡齋。遊兵ハ宇佐美駿河守定行手ニ。唐崎孫次郎吉俊鐵孫太郎安満。大貫五郎兵衛時泰。柏崎彌七郎時貴五組。宇佐美カ手ニ屬ス。直江大和守實綱川ヲ下リヒカへ始テ。武田方ヨリ出ル物見十七人ヲ越後方待請。一人モ、ラサス討留申候。越後勢川ヲ渡リ。川中島へ

出タルヲ。武田方ニハ不存。其後ニ出サレ候物見越後勢。川中島ニハ思ヨラサル所ニ備ヘ申候故見付不申。信玄カ唯西條山ノ方計リ目ヲツケ候故。筑摩川ノ邊ニ本庄色部新發田貳千計ヒカヘ候ヲ。夜中ノ事故人數モミ切カタク。多勢トミトヽケ。是ヲ謙信先手ト心得候由。夫モ曉方見付候。始ノ程ハ越後勢川ヲコエタルハ不存候。

一明レハ十日朝未明ハナレヌニ。謙信カタヨリ貝太鼓ヲウチテ。武田ノ陳ヘ取懸候。武田勢思モ寄ラサルカタヨリ仕掛ラレ。驚テミエ候。謙信旗本紺地ニ日ノ丸ニ毘ノ字書タル大四半二本近々ト押カケ候ヲミ。備ヲ立直ス間モ無之。取合兼候得ドモ。武道第一ノ武田侍。弓鐵砲ヲウチ立射テ掛合。越後ノ先手柿崎和泉守備ハ信玄先手飯富三郎兵衛ニツキタテラレ。筑マ川ノ方ヘ引立候ヲミテ。色部修理長實ハ。兼テ待マフケタル故。横槍ニ入。飯富カ備ヲツキカヘシ申候。齋藤下野守朝信ハ。武田方內藤修理。今福淨閑手ヲ追立進申候。長尾政景。本庄美濃守慶秀。長尾遠江守藤景。山吉孫次郎。北條丹後守五備。何レモ先ヲ爭テ働出。大聲上テ信玄方ヲキリ散シ申候。謙信ハ八ヶ年前ニ信玄ト太刀打致シ討モラシ。口惜。此度ハ信玄ヲ是非ト心カケ。旗本ノ人數ヲ以信玄旗本ヘカヽリ働候テ追崩サル。武田十二段ノ備。皆々相違シ敗軍。筑マ川廣瀨ヲ渡リ迄追討ニ討レ手負死人數ヲ不知。信玄ハサイ川ノ方ヘ敗軍候ヲ。越後勢追カケ候所ニ。越後勢ノ跡ヨリ武田太郎義信二千計ニテ謙信ノアトヲ慕懸リ申サル。是ニヨリ越後方後備中條梅坡齋備ニテ取テ返シ。義信ヘ懸防戦候得ドモ。梅坡齋備色相惡敷見ヘ候所ヲ。遊兵ノ宇佐美駿

河守助來テ。中條ト一手ニ成。武田義信備ヲ追歸シ。勝利ヲ得。數十人討取申候。跡ニテ合戰始リ候ヲ。謙信聞候テ無心元存。返シテ義信ヲ防ント致候内ニ。義信ハ宇佐美切クツシテ引被申候ヲ。直江大和守。甘糟近江守安田治部丞三手ニテ義信人數ヲ倉品迄追討ニ致候。謙信總軍ハ前後ノ敵ヲ切クツシ。河中島原ノ町ニ伏居。腰兵糧ヲ遣油斷致候所ニ。イツクニ隱レ居候ヤ。義信八百計差物腰印モ取隱シ。越後ノ山斷ノ處ヘ俄ニ取掛リ候テ。謙信口ノ丸ノ所ヲ目ニカケ。急ニ取カヽリ候。越後方今朝ヨリノ合戰ニ草臥。殊ニ由斷故取合兼。少々先手ニテ防戰候得共。備モシトロニ成。多ハ馬ニ乘オクレ敗軍致候。越後勢打死等數不知。志田源四郎義時モ爰ニテ討死致候。謙信ハ家ノ重寶五挺槍ト申内。第三番目鍔槍ト申槍ニテ。自身手ヲクタキ働被申候。後ニハ波平行安ノ長刀ニテ散々戰ヒ候所ヘ。貝津口ノ押ヘ六備ノ内本庄越前守。大河駿河守カケ付テ。義信ヲオヒカヘシ候時。繁長自身太刀打。大河駿河ハ討死。長尾遠江守藤景手ト。宇佐美駿河守ト指合テ槍ヲ入。義信ヲツキクツシ候。是ニテ合戰ハ治リ申候。謙信ハサイ川ヲ後ニ當。其夜ハ陣取候ヲ。山吉孫次郎申候ハ。今夜貝津ノ敵無心元候。サイ川ヲ渡リ。御人數ヲ御入候ヘト諫候ヘ共。謙信ハ引入不候。十一日ノ朝。謙信下米宮渡口ニ備ヲ立。直江大和守實綱。甘數近江守景持。宇佐美駿河守定行。堀尾隼人ト云者ヲ差添。西條山ノ陳小屋ヲ燒拂申候。其後謙信善光寺ニ三日逗留シ。長沼マテウチ入。又長沼ニ二三日逗留シ。越後ヘ歸陣也。初メ謙信出張被致。西條山ニ陣取。八月廿六日信玄下米宮ノ渡ニ着陣。九月十

日ノ川中島大合戰ノ有之間マテ。小セリ合八度有之候ヘ共。少之事故書付不申及候。
一先年ヨリ五度ノ合戰。天文廿二年十一月ヨリ永祿七年マテ十二年。其中毎年輝虎川中島ヘ出張。信玄ト對陣ニ。刈田ナトノ節野合ノ物ハ之ニテ。三百四五百出合テ討ツ討レツ勝負有事數十度也。サレ𪜈信玄ハ輝虎ノ勇才ヲ憚リ。謙信ハ信玄ノ智謀ヲ恐レ。互ニ大事ト思慮ヲ廻シ。謀ヲ工ミ。種々イトマレケレ𪜈。何レモ劣ラヌ名將故謀ニ乘ス。
一永祿七年七月ニ。信濃口ノ押ヘ野尻ノ城ニ被置候宇佐美駿河守定行生害シ。長尾景政モ果申候故。信濃堺仕置トシテ。輝虎直ニ出張リ。川中島ヘ被出候。晴信モ出馬ヲナシ。十日餘對陣トイヘ𪜈例ノ事ナレハ日々小セリ合計ニテ勝負ナシ。武田家ノ一門家老信玄ヘ意見申候ハ。川中島上郡下郡四郡ヲ爭ヒ。十二年ノ間毎年ノ合戰止事ナク。兩虎ノ勢ニテ。終ニ勝負無之。毎度士卒ノ疲勞難申盡候間。貝津城付ノ領分計御納。川中島四郡ハ越後ヘ被遣。扠駿河表關東筋美濃口ヘ御出張リ候テ。御手ノ廣成候樣ニ可被成候。川中島四郡ニ御カヽハリ。剛强成輝虎ト取合。空シク年月ヲ送ラレ候事イカニト諫メ申候由。八月十五日ノ朝信玄被申候ハ。互ノ運ノタメシナレハ。安馬彥六ヲ召出組討ヲサセ。互ノ勝負ヲ見テ。其勝利次第川中島ヲ何方ヘモ納ヘシトテ。安馬彥六ヲ使トシテ此旨ヲ輝虎ヘ被申候。彥六ハ上杉陳所ノ一ノ木戸口ニ行所ニ。輝虎ノ陣ヨリ直江山城出向。彥六ハ馬ヨリ下リ。晴信被申候ハ。天文廿三年ヨリ十二年ノ間。晝夜戰有之トイヘ𪜈勝負ナシ。明日ハ互ニ勇士ヲ出シ。組討ノ勝利次第川中島ヲ納メ。向後輝虎信玄弓矢

ヲ止メ可申トノ断ニテ候。夫ニヨリ安馬彥六ト申者明日ノ組討ノ役ニ被申付。是迄參候。器量ノ人ヲ出サレ明日クミ打可致ト信玄申サレ候由申入候。直江山城守取次ニテ謙信返事被申候ハ。信玄ノ仰尤ニ候。此方ヨリモ出可申候。明日午刻組打可仕トノ趣也。永祿七年八月十一日午ノ刻。晴信方ヨリ彥六只一騎。物具爽ニ出立テ。白月毛ノ馬ニ乘テ。謙信陳所ヲ差テ乘向候所ニ。越後ノ陳所ヨリ小男ノ鎧武者一騎。小タケ成馬ニ乘テ出向ヒ　則馬上ニテ大音アケ。是ヘ罷出候者謙信家老齋藤下野守朝信カ家來。長谷川與五左衞門基連ト申者。小兵ナレ𪜈彥六ト晴ノクミウチ御覽セヨ。何方勝利候共。加勢助太刀致候ハヽ。永ク弓矢ノ疵ニテ候ヘシト呼ハツテ。彥六ト馬乘違ヒ。ムストクミ。兩馬カ間ニ落重リ候處。彥六上ニ成長谷川ヲクミシキ候時。甲州方聲ヲ上イサミ喜フ處ニクミホクレ。長谷川安馬ヲクミ伏上ニ成。彥六カ首ヲ取テ立上リ高ク差シ上。是御覽候ヘ長谷川與五左衞門組討ノ勝利如此ト呼ハリ候。越後方不覺長谷川シタリト一同ニ感シトヨミ申候。甲州方ハ無念ニ思ヒ。木戶ヲ開キ千騎計出ントヒシメキシヲ。信玄ミラレ。鬼神ノ如ナル彥六アノ小男ニタ安クミ取ラレ候仕合。味方ノ不運也。兼ゝ組討ノ勝利次第ノ約速ノ上ハ。川中島相渡スヘシ。違變ハ侍ノ永キ名折也。四郡ハ輝虎次第今日ヨリ可被致トテ。翌日信玄人數ヲ入ラル。是ヨリ四郡ハ越後領トナリ候。長谷川手柄ノ印也。則義淸高梨政賴川中島ヘ歸住本意ニテ御座候。是ヨリ武田上杉弓矢取合ヤミ申候。右之趣信玄家來須崎五平治。堀內權之進書留候。此兩人後ニ浪人致。越後ヘ

罷越上杉家ニ罷在候。尤遂吟味候テ書記シ候者也。此一冊須崎堀内書留候書ト。信玄子孫武田主馬信虎家傳之書ト。村上義清子息源五郎國清書候書ト併セテ。吟味穿鑿致書記候者也。

慶長十年三月十三日　上杉内
清野助次郎
井上隼人正

右一冊。當家中古人共書置申候所ニテ御座候。此度御尋ニ付。寫差上申候

寛文九年五月七日

右者。先年弘文院春齋ニ被仰付。日本通鑑御清選被遊候　酒井雅樂頭忠清奉リテ。上杉家ヨリ被差上候一冊也。

千賀源右衛門直談

一千賀源右衛門ハ。酒井修理大夫家來ニテ。弘文院春齋ノ門弟也　千賀語テ云ク。

一於江戸。學士弘文院林春齋。一日酒井内匠佐宅へ被參物語被申候ハ。本朝通鑑撰申候ニ付。成就可致候。夫ニ付信州河中島ニ於テ信玄謙信合戰ノ次第上杉家へ御尋被成候所ニ。上杉家ヨリ記錄差上。其旨趣紙數四十枚程可有之候　甲陽軍鑑ト年號月日合戰ノ體大キニ相違有之ニ付。何ト書載セ可申候哉ト　上へ伺彼是相談之節。御旗本歴々ニモ。信玄家筋家來門ノ衆有之。我等ニ被申候ハ。上杉家書出シ候通ニマカセ。通鑑ニ記シ候ハヽ。日本流布ノ甲陽軍鑑皆僞ニ成ノミニ非ス。甲州流ノ軍法ノ瑕ニモ可成歟。甲陽軍鑑近代ノ僞書ニモアレ。高坂彈正ト有之。文言迄虚言ノ樣ニ成行候ヘハ。年久シク習讀シ甲州流軍法。イタヅラ事ニ罷成候間　甲陽軍鑑ノステラレサル樣ニト。何モ被申候。其趣モ達上聽ニ。依之甲陽軍鑑之旨趣ト　上杉家書出之旨趣記ス由　春齋被語候。

南麻主計直物語

南光坊大僧正天海御物語ニ。此頃甲陽軍鑑ト云書物板行ニ出候ニ付。是ヲミルニ、川中島合戰ニ信玄ト謙信ト太刀打ノ年月日大キニ相違。其上信玄團扇ニテ請候ト有之事虚言也。其時分我等ハ會津不動院ニ住シ。武田ノ祈禱ノ師也。天文廿三年八月。甲州ヘ檀那廻リニ行所ニ。信玄川中島ニテ謙信ト對戰ト聞。直ニ河中島ヘ見廻ニ行シハ八月十七日也。信玄ニ對面シタルニ。遠方見舞ニ被參喜悅致候。但一兩日ノ内輝虎ト合戰可致候。貴僧ハ早〻被歸。來春甲州ニテ緩〻ト可申談ト有之ニ付。我等ハ歸候。路次ニテ思候ヘハ。大旦那ノ近日大事之合戰ヲ取結ヒ被申ヲ聞。イカニ出家ニテモ聞捨ニハ歸ルマシト了簡シ。夜通シニ立歸リ。下米宮ニ一宿シ。翌十八日山上ヘ上リ見物スルニ。御幣川ヘ兩方乘込太刀打也。其夜小屋ヘ見廻候ヘハ、御坊ハ歸ラレ候カト存候ヘハ、奇特ニ立歸被申候ト殊ノ外褒美也。其時信玄ハ手負寄掛リ居ラレ候。我等申候ハ源平兩家ノ戰ヨリ以來。大將ト大將ノ太刀打有事古今不承。扨〻御手柄也ト譽候ヘハ。殊ノ外顏色カハリ機嫌アシク。謙信ト太刀ウチシタルハ我等ニアラス。鎧甲一等ニサセ候。信玄眞似ノ法師武者也。知ラヌ人ハ信玄ト見可申候。中〻ニ我ラニテハ無之候間。必〻奥州伊達又ハ會津佐竹ニテモ。信玄謙信太刀打シタルナト、被語候事無用也ト。殊ノ外機嫌惡カリケル。乍去我等山ノ上ヨリ近々トミタリ。中〻ミ違ル事ニテナシ。信玄ト謙信ト直ノ太刀打也。甲陽軍鑑ニハ虚言ヲ書タリト云々。

南麻主計ハ上州瀧ノ澤ノ松島ノ城主慈眼大師ノ取次ニテ紀州ヘ被召出候也

一其後江戸御城ニテ。横田甚右衛門咄ニ、謙信

ハ太刀ニテ切懸候ニ。信玄ハ將机ニ居テ軍配ニテ請ラレ候ト語ル。慈眼大師大キニ横田ヲ御叱リ有。甚右衛門未生以前ノ事ヲ何トテ可存候ヤ。我等ハ其時直ニミタルニ。御幣川ヘ乘込馬上ニテ信玄謙信共ニ太刀打也。其節我ラハ四十五歳ニテタシカニミタルニ。川中ニテ馬上ノ太刀打也ト御語。甚右衛門ヲ御シカリ被遊候由。

傳曰。天海大僧正慈眼大師ハ。足利公方法住院義澄公ノ御末。母ハ會津蘆名盛高ノ孃。永正七年ニ誕生。御父義澄公薨御ニ付。母ト同道會津ヘ下向。外祖ノ氏ヲ冒シ平氏ト稱ス。寛永十九年壬午十月二日圓寂。爾時百二十四歳也。

一川中島一戰ノ時。信玄ノ御舍弟左馬頭殿ヲ。謙信自身長光ノ太刀ヲ以。被討取候ト申傳ヘ候。何レノ合戰。何レノ場所ト申事知レ不申候。左馬頭信繁諸度ノ合戰ノ時。筑麻川ヘ追コミ馬上ニテ太刀打有之所ニ。左馬頭謙信ノ太刀ヲ請損シ。左ノ股ヲウチ落サレ落馬ノ所ヲ越後勢續テ驗ヲ取ト申候。其時ノ太刀ト申候テ。今ニ長光ノ太刀物打ノ刄カケテ有之。二尺五寸計ニシテ赤銅作チヤ色ノ絲ニテ柄ヲ卷。成程ヨコレテ柄ニ一尺計ウテ貫アリ。是則川中島合戰之時。謙信被帶候太刀ト申候

一武田太郎義信。越後ノ陣ヘ御切入之時。謙信槍ニテ働被申候ト申傳候。其槍ハ上杉家ノ重寶五挺槍ノ中。三番目鍔槍ト申槍也。

一説ニハ。謙信長刀ニテ働有之ト申。是ハ波平行安ノ長刀ニテ上杉家ノ重寶也。

一八月廿六日。信玄川中島へ出テ九月十日迄小セリ合。八度有之候ト承及候。

一謙信ハ義信ニ後度ノ軍ニ仕ツケラレテ。初

論取テ返シ。廣瀨ト云所迄追討ニ義信ヲ討ルヽ也。此時武田義信ノ手柄比類無事也。是ヲ甲陽軍鑑ニ不記。作者此事ヲ不知カ。謙信モ若武者義信ニ逢テ不覺ヲトリ。一代ノ越度也ト後メタク無念口惜カリ申サレ候由。是ハ謙信我油斷也ト被申候。

一近年世上ニ車懸リト云備ヲ。川中島合戰ニ謙信用給ヒ。續廻リ目ニ旗本ト打合ト云。上杉家ニテ終ニ不聞事也。尤宗ノ法ニ車懸リト云隊カヘヨフアリ。是ハ敵カ我地ニ先達テ隊ヲ備メ。此方ノ行掛リニオシ懸リ。備ヲ立ントスル所ヲ。敵ハ待入之此方備ヲ立ル纔ヲ討ント工ム節。此方ノ懸リヨウ車掛ト云手立ニテカヽレハ。其功ニテ終ニ勝利ヲ得ル術也。去共五度ノ合戰ニ謙信有ノ車掛リニ備タル事ナシ。但第三度弘治二年三月廿六日。川中島ノキロ謙信車返シト云手段ニテ。信玄ヲ引包破リタルヲ聞誤テ云傳フルカ。

一川中島合戰ノキロ。和田喜兵衛ト云侍ヲ謙信手打ニセラレタルト言事。上杉家ニテハ終ニ聞サル事也。和田手討ハ上州高崎ノ城ニシテノ事也。昔ハ和田ノ城ト云。

一右ニ記ス第二度。天文廿三年八月十八日。川中島合戰ノ時ハ。謙信ト信玄ト太刀打也。第五度目永祿四年九月十日川中島ノ時ハ。越後方荒川伊豆守詮治ト太刀打也。信玄剛大將故自身ハタラキカクノ如シ。

一近年世間ニ出ル記錄ヲ見ニ。上杉家ニ曾テ聞サル事多シ。川中島合戰ヲ公方義輝公へ注進ノ狀有。皆後人ノ僞作也。但天文廿二年十一月廿八日。川中島下米宮ニテ合戰ノ次第ヲ京都大舘伊豫守方へ書付。越後申候書狀ハ。眞ノ狀ニテ。本紙京都ニ有之。横田源

介。武田大方。板倉三郎。穴山主膳。半菅善四郎。栗田讃岐守。染田三郎左衛門。武田飛驒守。帶兼刑部。并駿州。今川ヨリノ加勢。朝比奈左京進ヲ始。五千餘討取ノ文言也。此狀ハタシカ成本書。其外ハ皆僞ニテ信用成難シ。

一謙信ハ長尾信濃守爲景八番目ノ子也。享祿三年庚寅正月廿一日寅ノ刻。越後ノ國府內ノ城ニ於テ誕生。本卦ハ大澤履ノ六三ニ當ル。文ニ曰。履。虎尾咥人凶也。武人成大君。此故ニ虎千代ト號ス ䷉

傳ニ曰。爲景嫡男彌六郎晴景。童名道一丸。文龜三年癸亥ニ出生。大永三年爲景。神餘越前守ヲ京都ニ遣シ。公方萬松院義晴公ノ御一字ヲ申請。晴景ト號ス。天文十六年四月。府內ノ城ニシテ自害ス。四十五歲。次男平藏景康。童名寅千代。永正四年丁卯出生。天文十一年三月十三日。黑田和泉守秀忠逆心ノ時。黑田カ手ニ懸リテ死ス。三十六歲也。三男左平治景房。童名猿千代。大永四年黑田和泉守逆心ノ時。府內ノ城二ノ丸門前ニテ生害十九歲。四番目ヨリ女子ニテ四人ハ女子也八番目謙信也。

以東京帝國大學史料編纂係所藏木版活字本謄寫校合畢

川中島五箇度合戰記終

續群書類從卷第六百二十一

合戰部五十一

赤羽記序

余安政間、在東京、與會津藩士黑河內十太夫、廣澤富次、高津仲三郎、前後相驩有年矣、以其先嘗在我高遠。常使余談天正間戰爭。余好史。拍案快讀、皆相共聳聽焉。而余亦獲聞所未嘗聞、益不覺膝促席前也。其事皆出自赤羽記云。今茲訪赤羽四郎、獲其書。書中所載數條。頗多異聞。其中赤羽又兵衛鎗功。文明寺詭謀一々詳記之。又知保科彈正。去高遠始末。舊記中。絕無所見。獨此書詳。天正十年三月朔日。保科彈正在高遠圍城中。森勝藏設奇計、誘出彈正、遂要劫而去、夫人跡部氏、自刃城中。春日戶左衛門。伊澤清左衛門殉死。戰後滿光寺牛王和尚、荼毘遺骸。諡柏心妙貞。供香花祈冥福。以故保科家。尊崇異他。其記述甚明白。因想當時將卒戰死、舉世無傳彈正事者邪。然而舊傳言。夫人在笹曲輪郭內自刃。則與此書之所載相合。乃知彈正去城始末。此書所云云。斷無疑也。抑此書之傳播也。侯家創業艱難之狀。亦從而可顯也。豈不亦愉快乎。而今也十太夫仲三郎。已爲古人。富次遁跡牧師。而余亦老矣。不可得而商摧也。嗚呼明治中興。彼君臣。誤方向。流離困難。幾亡社稷。而

此書之依然現存。長存于今日者。抑亦非命邪。余之喜可知也。因自謄寫。收入蕗原拾葉中。併記其感慨云爾。

明治十一年十月二十三日。

信濃黑水老人中邨元起。

書於東京小石川不如學舍

赤羽記

○保科氏ハ。信州川中島善光寺ノ東ニ當テ。保科ト云在所アリ。則保科氏ノ御先祖。此所御出生ノ地也。

○右大將賴朝ノ治世ニ。川中島井ノ上ノ主井ノ上九郎光盛ト云者。一條ノ忠賴ニ一味ノキコエ有之故。右大將家退治之ス。光盛ハ京ヨリ下ル道ニ駿河ニテ被誅。保科小川原ハ。光盛ノ一類ニテ。旗下也。保科ノ太郎。小川原雲藤藏ト云。此節鎌倉ヘ來。兩人無違心旨ヲ申上。則御家人之内ヘ可列ト。因玆。三代將軍ヘ仕フ。然ニ北條家ヘ治世渡リ。保科氏浪牢之身トナリ。後ニ信州藤澤ヘ來。藤澤ノ者共ヲ賴。年月ヲ送ラル。彈正公ヨリ十代計先ト云。藤澤ノ者共保科ト云名字ヲ貰。或ハ籾粟ヲ以買之ケリ。保科ハ源家歷々ニテ。故有名字ト云テノ事也。

彈正公御世ニ至テ悉改之ラル。

○高遠ノ城主斷絶シケリ。地士僉議シ。諏方之惣領ヲ貫立之。是ハ生ツキヲロカ成故。諏方ニテ不立。是故貫取也。是頼次ノ先祖也。七代先ト云。頼次ヨリ三代目ノ城主生付賢ク武術ニ達シ。伊奈ノ郡ヲ不殘切取ル。十万石程也。其後遠江ヘ働。遠江ヲモ少々切取。此時狩野氏ナト頓來ル。今ノ狩野カ先祖也。其比ヨリ保科氏城主ヘ仕。北村ト云所ニ二十石取ラル。保科氏代々之墓所北村ニアリ。此城主ヲモヘラク。我ハ元諏方ノ惣領筋タリ。ケイヅヲ取度ヲモワレイロ／＼ニ方便セラレケル由。彌勒之者ニ一妙ト云法華宗ノ僧常ニ君邊ニ居ケリ。此事ヲ聞テ曰。我取テ可奉ト云テ。則行金子城ニ至。諏方ノ樣子ヲヨク見スマシ。七月七日ノ來ヲ待。七月七日ハ重寶トモヲ取出虫ホシヲスル。然ニ其朝ニ至リ。諏方ノ城内ヘ行。彼是見物ノ後。彼卷物ヲ取テ逃ル。守者是ヲ見付。追掛伊勢並ト云所マテ追詰ル。此所ハ諏方高遠ノサカヒ也。是マテ高遠ヨリモ士二十騎出ケレトモ。諏方大勢故出合コト不叶。然故彼僧自殺スル。諏訪ノ者トモ改ニ不及。文書ハ道ニゾヲトシツラン。死カバネニ手ヲ指事ナカレト云テ立歸ル。死人ヲイロヘバ社内ノ勤不成故也。其後高遠者立ヨリ見レハ。脇ノ下ヲ貫キ死ケリ。不便ノ事ナリト云テ。疵口ヲ見レハ。アヤシキ物少見ユル。ヨク／＼タツネミレハ。一卷ノ書アリ。是則ケイヅ也。是高遠ノ重寶トナリ。代々傳ル。此僧ノ着ケル袈裟衣血付ナカラ有之。是亦重寶ノ一也ト云。仁科殿籠城ノ節。信忠是ヲセメ落ス。此時重寶トモ右ノ書モ亡失セリ。

○是ヨリ暫ノ後上牧ト云所ニ。野底ト云所七十石有之ヲ。保科氏ヘ領セシム。

〇頼次ノ親ニ至テ。悉ク無禮ニアリケリ。然故諸士ウトンジ果。皆我々ニ成。是故勢大ニヲトロヘ漸二萬石余ノ身ト成。此節伊奈ト高遠取合有此一戰ニ保科氏城方ニテ打死セラレケリ。筑後殿御親父彈正殿ト云也。打死ノ場所ハ伊那ノ駒場ト云所也。是故ニ御子孫段々御取立。筑前守殿ハ千石余知行被領。頼次ノ家老ト成タマフ。

〇頼次ハ勢強武將也。甲斐信玄ノ旗下也。

〇頼次ノ妾アリ。妻女嫉妬故。城中ニヲカルコトカナワズ。城下ノ士屋敷ニヲキケリ。佐野清左衛門ト云士ヲ付ヲカル。頼次ノ御前ハ。諏方ノ頼重之妹ナリ。御前此事ヲキヽ。頼重ヲ頼。人數ヲカリ。彼妾ヲ打ントス。諏方ヨリ士五十來ルト云。或夜夜更テ。五十ノ士彼妾ノ舘ヘ打入ル。清左衛門起合。枕ニ置ケル三尺余ノ刀ヲ拔。内マテ切入ケル。諏方ノ士トモヲ切出シ。廣庭ニテ暫戰。八九人手ノ下ニ切伏。數多ニ手ヲヲウセ。門外ヘ切マクリ。暫戰時。右ノ腕ヲ被打落。其故刀ヲ左ニ持。内ヘ走入。彼妾ヲ肩ニ引カケ。スミヤカニ立退。此宅地後ニハ月岡庄兵衛居ケリ。圓敬若年ノ時。彼清左衛門ヲ度々見ラレケル由也。清左衛門可被取立ノ所ニ。カク片輪成上ハ。別ノ望モナシトテ。在郷ヘ引込。田地ヲ作ラセ居ケリ。大男奇妙ニスサマシキツラ成ケリト云。

右是迄ハ高遠ノ城主之大筋。保科氏之有增也。

〇頼次ノ家臣ハ。上林上野入道ト。保科筑前守殿兩人也。筑前守殿ハ。宮田ト云所七百石。諏方之界野底五百石。合千二百石也。

〇上林信玄ヘ申而曰。頼次謀叛ノ氣アリ。是故甲府ヘ呼。道ニテ害ス。上林カクノゴトキ讒言ハ。主人ヲタヲシ。己則地主タラン事ヲ欲テノ

事ナリ筑前守殿ハ。上林トアイヤケナリ。上野入道子ヲ彦三郎ト云。是筑前殿之聟也。此讒言ヲ筑前殿ヘハ毛頭不爲聞ニ訴也。是故筑前殿ヘ。信玄ヨリ御不審ニ。相役上野ハ忠義ヲ以謀叛ノ分申上ル所。其方事不及其儀ト。御答ニ。努々不存ヨシ也。其節則佛法寺ト云禪寺ヘ入寺ヽケ年マシマス。然ルニ實事段々アラワレケル故。筑前殿御身ノ上信玄思召直サル。然トモ。上林方ヘハトガメモナシ。

○信州佐久郡ニ志賀ト云所アリ。其地主ニ。志賀平六左衛門ト云者アリ。信玄ニ背故。信玄某ヘ御出馬也。筑前殿ヲ召。其方儀者案內者也。彼ヲ可打ト云々。畏入ト御請。則志賀ノ町ニ至リ角屋ノシトミノカゲニマタル。家來北原彦右衛門ヲ召具セラル。平六左衛門鹿毛之馬ニ乘。人數ヲ下知センタメ。町中ヲ乘行。彦右衛門走出。平六左衛門カ馬ノフト腹ヲ。長刀ヲ以テツク。ツカルト馬ハネタヲセバ。平六左衛門ヲリ立所ヲ。筑前殿走ヨリ。首ヲ打ヲトシタマフ。甲ノシコロヲ切落。首ヲ打ヲトス。大ヒゲ成ケル。其ヒゲヲ不殘切落。扨信玄御前ヘ。平六左衛門カ首ヲ持參被成ル。信玄ハ上ノ山ヨリ此働委ク御覽。御前ヘ御出トヒトシク。ハナハタ御褒美。其方ノ太刀ハ鬚切ト可號トノ御意ナリ。筑前殿仰ニ。此太刀物切也。可指上ト信玄之仰ニ。保科之重代ニセヨト。則作ヲ御尋。桒重也ト御答。於其場感狀ヲ被遣。盛景ノ長刀ヲ被進。家來彦右衛門儀尤ノ働ナリトテ。是ニモ感狀被下也。是ヨリシテ。筑前殿ヲ。信玄直參ニ召仕ワルヽ也。

○上林入道ハ。信玄ノ思召モ惡。是故身ヲ退。子ノ彦三郎ヲ出ス。信玄御死去ノ後。勝頼ノ世ト成テ。上野入道ハ。死子ノ彦三郎跡ヲ相續シケレトモ。諸人ノヲモワク。亡父主人ヲ讒害。

人非人之諸行ト指ヲサス。勝頼之ヲモワクトモニヨロシカラヌバ。世中都テ不任心。一戰ニ尸ヲサラサント思イツメラル。然ニ長篠ノ一戰ト云觸ルト。彦三郎是ヲ悦。最期ノ一戰ト思イ定メ出ラル。彼戰場ニヲイテモ。ハヤ打立時身ニ匂ヒヲトメ。爪ヲキリ居ケルヲ。脇ヨリミテ曰。此節其行ハチンチヤウ也。一句マイラント云テ曰。

ミカケヤミカケ爪ノサキマテ

ト云掛ケレハ。イマタ其言葉モキレヌ内ニ。彦三郎

トクサカルソノ原山（園原）ハミノ（美濃）サカイ

ト云捨テ打出。小高塚ノ上ニ指物ヲヲシタテ。其下ニテ甚シキ打死ヲセラル。其サシ物ニ。

サクトキハ花ノ數ニハアラヌトモチルニハモレヌ山サクラカナ

彦三郎ハ歌人ナリト云ツトフ。ヨロヅ述懐故。カクノゴトキト云。一家子孫ミナカレ果ル。是頼次ノヲンリヤウナリト云。

○筑前殿ハ勝頼ノ世ニ病者ニ成タマイ。二男之内藤大和ノ方へ立越マシマス。大和ハ内藤修理養子ト成ケリ。長篠へ打立。宵ニ修理勝頼へ直訴。保科源藏ヲ養子ニ仕度ト。則御許用。源藏ヲ大和ト云。是ハ彈正殿弟也。

○勝頼長篠御一戰ニハ。彈正公ハ御供ニテナシ。其分ケハ。弟ノ源藏殿。小姓奉公ニ勝頼へ出タマウ、然ニ源藏殿美質成故ヲ以。勝頼へ出頭無類ナリ。是故源藏殿ハバ云計ナシ。因玆彈正公ヲモヘラク。我カスカ成躰ニテ奉公センヨリツト思召。御賢息甚四郎公ヲ御引ツレ。信州御知行所へ御引込ヲワシマス。甚四郎公此時ハ。勝頼ノ御子御歳子へ御奉公也。九ノ御年ヨリ御出仕ト云。彈正公ハロウサイヲ御煩。一間四方ニ大板ヲ以籠ヲサヽセ。其内へ御引

込。外ヨリ。釘カスカイヲ以。丈夫ニトチサセ。雪隠一ツ通穴計爲レ明。二年其ニマシマス。折節ノ御伽ハ。當雪ト云醫者ヨリ外ハ。其アタリヘヨル者モナシ。爰ニ長篠御一戰有テ。勝頼散々打負タマウト。籠ノ内ニテ彈正公聞召。此籠早々打破レト下知シタマウ。故ニヲノマサカリヲ以。忽打破レハ。彈正公御出。湯漬食ヲ被召上。御鎧腹卷ヲメサレ。早速御裝束。馬ハ在哉ト御尋。イカニモ御座有ヨシヲ御請シ引出ス。其マヽ爲打乘タマイテカケ出。心指ノ者トモハ可續ト被仰捨。走出シタマウ。然ルニ參州界根羽ト云所ニテ。勝頼ヘ行逢タマウ。彈正公馬ヨリヲリタマイ。道ノ傍ニマシマス。勝頼是ヲミタマイ仰ニ。其成ハ保科カト。御答ニ曰。御詞ノ通ト。勝頼馬ヨリヲリタマイ。彈正公ノ御側ヘヨラセラレ。仰曰。今度長篠一戰ニ大ニ打負。山形。馬場。内藤ヲハシメ。隨一ノ者ドモ皆被打取。盤ノ手足ヲモガルヽゴトク成。モハヤ運命ツキ果ケルト思所ニ。其方ノ存命ヲモイヨラサル幸也。然ハマタ末タノモシ。其方ハ飯田ノ城ニ殘。伊奈ノ士トモヲ下知シタガイ。平谷。浪合ヘ出。一防可防ト。彈正公畏入ヨシヲ被仰。則飯田ノ城ヘ御入。伊奈ノ内ヲシタカヘタマウ。其節伊奈ノ内ニ萬才ト云者アリ。勝頼ヘ背。一類引連。一瀨ト云所ヘ引込。一瀨ハ伊奈ノ内ニテ。木曾ノツマゴヘユク所ナリ。彈正公此ヨシキコシメシ。時刻ヲ不移走付タマウニ。小屋ヲモカケ仕舞ワヌ所ヘ。ヲシヨセ。悉退治シタマウ。是ソノ節ノ御武功ノ一ツナリ。扨信忠ヲ暫被防ケレトモ。大河ノ出來ルコトクナレバ。防戰ツイニ不叶。其地ヲ引取。高遠ノ城ヘ御籠城ナリケリ。彈正公ノ御名。此時越前公トモ云ケリ。高遠ノ城ハ。仁科ノ五郎ヲヲカル。信玄弟也。人質ノ心ニ。地士ノ女房。

尤彈正公ノ御前モ城內ヘ取込ル。此時甚四郎公ハ。勝賴ノ居城新府ニマシマス。
○信忠數万ノ人數ヲ以テ高遠ノ城ヲ十重廿重ニ取廻。落城目前ニアリ。然ニ森勝藏信忠ヘ申商曰。此城中ニ保科ノ彈正籠レリ。何トゾ方便ヲ以。彼ヲ尾引出。其已後城ヲハセメ落ヘシ。信忠其故ヲトイタマウ。答曰。天下サウ／＼ノ功ヲナシタマウヘクンハ。人數ヲクルシメス。人ヲソコナワス。謀ヲ以勝ヲ本意トス。爰ニ上州巳ノ輪ノ城主ハ。內藤大和ト云。保科彈正弟ナリ。彈正ヲタスケ。彼ヲ以イサナワハ必定味方ニ可來。左アラバ。小田原ヘノ手引旁以大成方便ト可成ト云。信忠甚得心セラル。左アラバ先戰ヲヤメ。和ヲ可入トテ。戰ヲヤメ。城中ヘ狀ヲ以云ヤリ。後ニハ飯島民部ヲ以。和ノ旨ヲ被入。民部ハ上島川兵衛母ノ親。本ハ高遠者ナリ。後ニ信忠ヘ仕。和ノ旨ハ。保科彈正ヲ以可申入。子細有之。彈正ヲ被出樣ニトノ事也。城中イロ／＼僉議。小山田備中ナドハ得心セズ。然トモタブンノ僉議ニ應シ。彈正公二ノ丸マテ出タマウ。仁科籠城節。勝賴ヨリ下知ヲ以。渡部金太夫。小菅五郎兵衛ト云二人ノ勇士ヲ被付。兩人トモニ場數同事ノ者トモナリ。此金太夫飯島カ樣子ヲアヤシキ振舞カナトテ走出。長刀ヲ以民部ヲカケタヲス。此時彈正公ヘハ北原彥右衛門。上島川兵衛。田畑善右衛門。文明寺（五代先宗作ト云。當住ノ由。行算ト云。）此四人付奉出ケリ。二ノ曲輪ヘ出タマウトヒトシク。跡ヲシ切。取カケ攻ケリ。彈正公立歸。本城ヘイラントシタマヘドモ不入ナリ。城中フセキ戰トイヱドモ不叶。爰ニ渡部小スケ。兩士言葉ヲカワシ。力戰スル所ニ。小スケハ落行ケリ。金太夫言葉ヲカケ。ハジシムルトイヱドモカヱリ見ス。終ニ落。後ニハ小山田出羽ニシタカイ。アサマシキ死ヲ

スル也。扨城主仁科ヲ始。皆々遂死。城ノ中へ取込ケル者トモ。過半死ス。彈正公御前ハ。跡部越中娘ナリ。此節御籠城。春日戸左衛門今ノ戸左衛門先祖。春日仁左衛門母方ノ祖父。伊澤清左衛門付奉ル。本城へ火カヽリケル故。ヤクラノ下へノケ奉ル。然トモ。遁奉ヘキ様ナク。其ニテ指コロシ奉リ。兩士其ニテ切腹ス。戰散テノ後。滿光寺住僧牛王和尚彼地ニ至リミレハ。正シク御死體ヲ見シリ奉故。御遺躰ヲ取來。於寺中奉火葬ニ。御改名ヲ。栢心妙貞ト付奉ル。是故道儀公後マデ尊敬シタマウ。此落城天正十年午ノ三月二日也。此事新府へキコヱケレハ。甚四郎公モ御用意。登城マシマスヘキトテ。門マテ御出ノ所ニ。小山田將監方ヨリ使ヲ以被申越ケルハ。彈正殿ハ城ヲ落。サケケルト申來ナリ。早々被立退可然ト。是故直ニ御引ハヅシ。御前へノ御使ニ。彈正殿心替。城ヲ落ラルヽヨシ云來コト急ニ在之故。直ニ立退ナリ。何方へ成トモ。早々忍ハレ可然トノコト也。甚四郎公ハ。上州巳ノ輪へ被退。御簾中ハ眞田へノキタマウ。眞田安房殿息女也。

○勝頼亡テノ後。內藤ハ小田原へ付順ウ。彈正公浪人ノ御身ト成タマウ故。森庄藏ノ曰。我ニシタカイ。上方へ御登マシマセト。彈正公御得心。文明寺ノ曰。御得意非本意ト。彈正公仰ニ。上方へ登ナハ。身ヲ立宜カルヘシ。我ニシタカヱト仰アリ。文明寺亦曰。傳聞上方士ハ。イナカノゴトキニハアラズ。言葉ノ違コトモアリト云。其上譜代ノ地ヲ捨。今他國ニヲモムキ。イカンシテ大功ヲ立タマワンヤ。此方ニテ方便シ。高遠ノ主ト成タマヱト云。彈正公無御承引。文明寺近居寄テ曰。只今マテ付奉ルモ。一度御身ヲ立サセ見奉度存テノコトナリ。愚僧カ意ニ順タマワズハ。指違可申ト。因茲流石ヲ

モワクモ。捨カタク思召トヾマリタマウ。此御浪人ノ内。片時モ不離付奉ル者トモニハ。北原彥右衛門。上島川兵衛。田畑善右衛門。文明寺此四人也。此間アヤシク無心元コトドモアルト見ヱテ。右四人ノ面々御側ヲ片時モハナレス。彈正公ハ松本ノ小比奈田源太左衛門ト云テ。巽ノ在ケルヲタヨリ。源太左衛門方ヘ立越マシマス。

○眞田安房守ハ。上田小縣ヲ領。五六萬石之身上ナリ。後ニ沼田モ領ス。勝頼亡テ後。小田原ヘ順ケリ。甚四郎公巳ノ輪ニマシマスヲ。安房守方ヨリ被招。甚四郎公無御承引。何ノ面目在テ今安房ニマミヱンヤ。新府ボツ落ノ節。妻ヲ捨ケル。恥辱何ヲ以ススカン。安房守聞テ。重テ曰。勇士ノナライ。時ニヨリ親子兄弟妻マデ捨コト在事ナリ。アナカチ耻辱トヲモイタマウナト。强テ被來様ニト。及度々故。上田ヘ立越。眞田ニマシマス也。

○勝頼亡テ。信長ノ勢龍ノ雲ニ乘ゴトクニナリ。ミナヒラヲシニ手ニ入。關東ヱハ。瀧川左近ノ將監ヲ。八州ノ管領ニ下ス。皆是ヱ順ヒ。旗下ニ成。瀧川ハ上州ヱ來。內藤ヲ退ケ。巳ノ輪ノ城ニ居。

○此時筑前殿。甚四郎公。參州殿。大和殿ト所マシマス。城ヲハ明。在家ニ少キカギアケ有ニ移居タマウ。然ニ何者云出シケルヤラン。內藤一類謀叛ト云。因茲瀧川眞僞聞届ントテ。其在家ヲ幾重トモナク取マク。內ヨリ色々云分ル、此節小原右近幼少ニテ是ニアリ。其比鐵炮マレニアリケリ。折節其ニ鐵炮アルヲ見テ。取テ火繩ヲハサミ。引カネヲ引ケレハ。內ニ玉藥在テ。ナリ出。寄手ノタモトヲ打拔。因玆寄手ヨリ曰。謀叛無疑ト。取掛フミツブスベシト。然故內ヨリ曰。全左ニハ非ス。世悴ノアヤマチナ

リト云。寄手ノ曰。左アラハ打手ノ首ヲ切テ可出ト云。於爰各僉議。イカナレバトテ世忰ノ首ヲ可切樣モナシ。無是非一門ノ運命ツキ果ケル期ト見ヱタリ。快可打死ト相定。時ニ井深茂右衛門出テ曰。タヽ今ノ御僉議道理ノ前不及申ナリ。左アレハトテ。御一門ノ歷々一所ニ亡タマワン事。武將ノ非本意。面々カクツキ添奉ルハ。命ヲ以御恩ヲ可報謝トノ事也。幸此期ニ至リ。御一門之御命替事。武士ノ本意至極ナリト云テ。ヲシハタヌキステニ自殺ニ及ハントス。筑前殿走付。取ト、メタマイテ曰。忠義ノ者ヲ殺。面々安泰ニ可有事。是亦非本意。必自害ヲ可留ト曰テ。門脇ヘ出。敵ノ樣子ヲ見タマウ。爰ニ內藤ノ家ニ。半田。筑後。田ノ口ナト相議シ。赤石ト云テ領社ノ禰宜ノアリケリ。大力强弓ノイタツラ者アリ。高橋刑部從弟ナリ。是呼タバカリテ曰。面々ハ繩ノカケ樣不知。ヲシヱヨト云。赤石其分ヲ致。皆曰。然ハ其方ヲシバリミン。痛所イマシメ所サシツセヨト云。其故手ヲ廻シシバラレケリ。トクトシバリテ曰。何ヲカクサン。其方ヲ此度ノケシ人ニ可出。不及是非ト可存ト云含。赤石甚立腹シ。無情コトナリ。カクト御知セニヲイテハ。何シニイナト可申ヤ。武士ノ非本意ト云ケレトモ不叶。赤石申樣。堅固ス、シキ樣子成ト云。然所ヘ門ヲキヒシクタタク。內ニテ皆ヲモワク。打手成ラント人ヲ出シ聞ハ。瀧川使ニテ曰。信長今月二日京都於本能寺。爲明知御生害。此上ハ弔合戰ニ可登ナリ。御暇乞可申。皆登城被致樣ニトナリ。是故一同ニ驚。又一同ニ安堵ス。扨皆々登城。瀧川出テ曰。明日可登ト云所ヘ。小田原ヨリ二万ノ人數ヲ出シ。働來ヨシツゲ來。瀧川大怒。人非人ノ諸行。此上ハ小田原ト快可一戰トテ。手分ケヲシケリ。內藤ハ地士也。案

内者タル間先陣イタサレヨト。軍ヲハリ出ス。上州界ノ地ニ至リケレバ。小田原勢ト行逢。内藤軍ヲソナヘ。一戰シ。大ニ勝。瀧川感悦シ。此上ハ亦上方ノ軍ヲ可掛御目トテ。旗本七千ノ人數ヲ以カヽリ。大ニ戰。大ニ負。其故早々其場ヲ引取。巳ノ輪ノ城來。旗下ノ衆ヲ集テ曰。此間ノギトモ難謝。明日一日是ニ逗留シ。各ニ能ヲシテ御暇乞可申トテ。翌日能ヲ仕馳走シ。次ノ日發足ス。皆ヨリ人質ヲ乞取行。此時内藤殿ヨリ。龜千代四才。後ニ庄左衛門ト云。又五郎左衛門トモ云。筑前殿ヨリハ。甚四郎殿ヲ同道ス。甚四郎公ヘハ。茂右衛門付奉。

○諏方ノ地。和田ニ茂右衛門ミレバ半田。田ノ口ミヱ。盗賊シノビ者トモヲモカタロウトミテケレバ。扨ハ今宵盗取マイラセズハ。内藤方ヘ先ヲコサレナン。コサレテハイカニ思トモカナウマジト。ヲモイケルトキ。モハヤ日モクレケル故。諏方ノ地十王堂在ケルヘ奉入。番ノ者嚴シク警固シイケリ。茂右衛門其カタツラニヲリ。火ヲタキ。十王堂ノ板カベヲ切クダキ。火ヲタク。番ノ者トガメケレバ。答ニ。我ハマダ物ヲモ不喰故。食ヲ燒喰ト云テ。只物切クベケル。後ニハ番人モトガメズ。カク茂右衛門シケルハ。其ヲ口ニシシノビイラントノタクミ也。夜更人靜テシノビ入ケレバ。甚四郎公ハトクト御寢成ケリ。茂右衛門草鞋ヲ懷中シ。先トクトハカセ奉リ。扨ヲコシ奉ル。其ヨリ忍出。十王堂ノ庭ヲ出タマウニ。クリ石ニテクワラ〱トナル。番人目ヲサマシトガメケルヲ。足早ニ立退。道ヘ出ントシケルガ。道ヘ出タリセバ。追詰ラレントヲモイ。川原ヲ直ニ山ヘ上リケリ。嶮難ニ手ヲ立タル樣成山ヲ。木ノ根草ノ根ニ取付。過半上リ。跡ヲカヘリミレバ。マンドウノゴトクニタイマツ東西ヘ走チカウ。此

トキ味方ハ已上三人。主從四人ナリ。是ヨリシテ心安トテ。ソロ〱ト山上ヨリ山下ヲ見レハ。人家アリ。其故其ニ至リ。村ノ名ヲ問ハ。武石ト云。カヽル所ニ。郷民ドモヲコリ。三十餘人來。上方ノ落武者ナリ。可打殺ト云テ。取マク。茂右衛門曰。ソコツノ事スベカラズ。爰ハ誰ノ領地ゾ。眞田安房守ト云。扨ハ彌手指コトナカレト云所へ。向ヨリ人數大勢ニテ。一村ニナリ來ル。敵カ味方カトトエバ。眞田殿ナリ。人質二人迄トラレ。一人取返ニ行タマウカ。仕合イカヾトテ。郷民トモ走行。安房殿へ云テ曰。上方ノ落武者四人取込ヲケリト云。安房守ヲモヽラク。必定甚四郎ナラン。今宵落タリト云シ物ヲトテ。人ヲハシラセラルヽニ。果シテ甚四郎公ナリ。是故其ニ來リタマイ。双方ノ無事ヲ賀シ。則上田へ御同道。

○内藤ハ。此時小田原へ通。旗下ニナラル。

○安房守甚四郎公へ問テ曰。彈正殿行末ハ。イカント仰ニ曰。松本ノ小比奈田源太左衛門方ニアルヨシ也。其故安房守方ヨリ招ニコサル。彈正公則上田へ來ラシメタマウ。彈正公。甚四郎公。安房殿打寄。人ヲ拂。御相談。當時小田原勢强故シタガウトイヱトモ。今世間ヲ見ルニ。家康公ノ軍法健固ナリ。イカヾ何方ヘシタガワンヤト。兩公尤ト被同。家康公へ可被順ト。安房守曰。然ハ彈正殿モ。内藤方ヨリ人數ヲカリ。此砌高遠ノ城主ニナリ。家康公ヨリ朱印ヲトラレ可然トノ儀ナリ。彈正公仰ニ。此コト云遣トモ。大和得心セマシキト也。安房守曰。先遣テ見ラレ候ヱト。是故狀認被遣ル。大和ノ返事ニ。高遠。伊奈ハ小田原ヨリトク朱印ヲ貰。我領スル筈ナリ。隙ナキ故。人數ヲ不出。貴殿ハ。兄ノ儀ナレハ。惡ハイタスマジ。人數ヲ遣ベシ。シタカエタマワルベシトノ返答ナリ。彈

正公大ニ立腹シ。遣間敷ト云シ狀ヲ。安房殿助言故コシ。今無心ノ返事ヲミルコト。以ノ外ノ氣色ナリ。安房守聞之。日本一ノコトナリ。早々人數ヲ被借。可然退治ノ後ハ。自ラ自分ノ領知ニ被致ヨ。武將ノ短氣ハ不宜ト。因玆。彈正公。尤ト被同。則巳ノ輪ヘ立越。大和ト參會。人數五百借。友野十郎左衛門ト云者ヲ。大將ニシテ。高遠ヘ打入。下伊奈ヘ働。御手ニ入。天正十年午ノ八月末ト云。

○家康公ハ。此時新府ヘ働マシマスニ。小田原ヨリ。二萬ノ人數ヲ出シ。コロサントス。御ナンギハナハダツマリケリ。

○眞田彈正公ト云合ノコトク。新府ヘ使ヲ以曰。我眞田安房ト云。上田ヲ領ス。御味方可仕ト。保科彈正高遠ノ城ヲフマヱ在之也。是モ申合ナリ。定而御味方ノ儀可申上ト。兩人申合上ハ。此邊ニ手立者不可有ト。家康公ヨリ則御朱印出。御答ニ。其元不可有相違。但彈正方ヨリ何ノ左右モナシト仰越サル。是故安房守立腹。何コトニヲソナワラルゾト。彈正公モイソキ。思召トイエドモ。十郎左衛門ヲ初。皆巳ノ輪ノ者居故。思召ニマカセズ遲々ス。

○彈正公ヨリ御使立。山寺杢左衛門。祖父理右衛門。家内杢兩人ナリ。我高遠ノ城主タリ。御味方可申ナリト。則御朱印來ナリ。伊奈半郡ハ。無相違可領ト。伊奈半郡ハ二萬五千石有。サレドモ十郎左衛門居故。御朱印御開不成ナリ。天正十年午九月ノ事也。酒井左衛門尉殿ニ附而。御朱印御貰被成ナリ。

○家康公新府ニマシマシケルニ。小田原ヨリ二万ノ人數ニテ。取ツヽミ。カテノ通路切。人數籠ノ內ノ鳥ノゴトシ。爰ニ鳥井彥右衛門軍內ヨリ出。我勢ニ鄉民野伏ドモヲカタラヒ。後詰ヲシ。大忠ノ働ヲシタマウ。其故家康公大ニ

勝タマウ。眞田ハ佐久ノ郡ヲ取故。笛吹ヲ切フサギ。小田原ノ通路ヲ切。因玆小田原勢又途ヲ失ヒケリ。家康公彌危キヲマヌカレサセタマイ。岡崎ヘ引取タマウ。

○伊奈ノ士ヒソカニ箭文ヲ以曰。此節家康公ヘ御順タマヱ。御味方可申上ト。度々申上ル。トク御朱印ハトラルトイヱドモ。巳ノ輪者多居。故御開被成事不成。

○此節黑河内八郞左衞門ヲ御セイバイ可被成トテ。赤羽又兵衞ニ被仰付。又兵衞ハ元信玄ヘ仕ヘ。勝賴ノ世ニ成。不足在テ引込。在所ニ籠居ス。彈正公高遠ヘ可被爲入御志ノ時ヨリ奉順ル。因玆御心安被召仕。或夜御酒ヲ被召上時。手ヅカラ間ヲ被成。又兵衞ヲ召御シヤクニテ御酒被下。ヒソカニ被仰ケルハ。八郞左衞門ヲ可打ト。畏入ヨシヲ申上ル。池上新左衞門ヲ後見ニ云付ルト。以後新左衞門ニ仰曰。又兵衞ニ用事ヲ云付ル也。順付ヘシト計ナリ。翌日堀普請有ニ。又兵衞行ケレバ。八郞左衞門下知シテ居ケリ。又兵衞立寄。普請ノ指圖宜カルマジ。イカヾト云ケレハ。何ヲ云ゾ。世悴ナトガ知コトニアラズト云テ。早ケドレリ。時刻ヲウツサジト。引拔。上意者トテ。切ケレバ。クソノ上意ト云サマニ。三尺計ノ太刀ヲ拔打ニ拂切。側ニ八九寸廻ノ榎ノ木アリ。是ヲカケス切テ落シ。又兵衞首ヘアタリ。フヱ計カヽリ。首ノ骨不殘切拂。則切タヲサル・伏ト其マヽヲキ上リ。前ヘ落ル首。左ノ手ヲ以テ額ヲカヽヱ。右ノ片手ニ刀ヲ拔持。八郞左衞門ニモ太刀付ケリ。新左衞門走ヨリ。八郞左衞門ト仕合。又兵衞立カヽリ。言葉ヲカケ。太刀ヲツヱニツキ見物ス。新左衞門終ニ仕留。黑河内ハ大力ノ大男。彈正公モヤクラヨリ御覽。又兵衞登城。其趣申上退出ス。フヱヽモ少アタリ。息出湯水出ケルナリ。

然トモ。早速平癒ス。又溝口與左衛門御セイバイ也。是ハ鮫島右近ト云者ニ仰付。是モ堀バタニテ切アイケルニ。溝口堀ヱコロビケルヲ。鮫島ツヽイテ飛入。水中ニテ切合。終ニ溝口ヲ切殺ス。此者共御セイバイハ。イマダ小比奈田ニ御座アリケル時。伊奈衆ヘ被遣ケルハ。其ヘ立越。其地ヲ打シタガヱ度ト。秋山備後。春日河內兩人トモニ。彈正公從弟ナリ。同心ス。其ヲ伊奈衆立腹シ。殊ニ黑河內。溝口甚立腹シ。秋山。春日方ヘ押寄打殺ス。上島庄右衛門親秋山ヲ鑓付ケルト云。七十余成ケリ。右ノ品ヲ以。黑河內溝口ヲハ御セイバイナリ。　一瀨ハ少々內通モ有ケルト成。　是故案泰也。

○友野十郎左衛門。彈正公ヘ向。近居寄申上事有之由ヲ云。彈正公刀ニソリヲカケラレ。居ナヲラセ。仰ニ曰。カ樣ノ節ハ。　親ハ子ニ心ヲヲキ。子ハ親ヲウタガウ。ナンヂナンゾ近ウヨルヤト。十郎左衛門退。上意御尤ナリトテ。刀脇指ヲ拔。次ノ間ニ置。御ソバヱヨリ申テ曰。只今小田原勢ノ躰ヲ見ルニ。籠ノ內ノ鳥ノコトシ。私事是ニ長被指置。被召仕被下度ナリ。大和方ヘ逆心ト申ニテハ無之。御兄弟ノ御コトナレバ。何方モ同御事ナリ。妻子上州ニ候ヱバ。御前ヘ御奉公ノ上ハ。於彼地モサセル儀有マジキカ。御人少ケレハ。必御心ヲヤスンセラレ。指ヲカレ度旨申。彈正公聞メシ。仰ニ曰。尤ナリ。乍去其方ハ見合可歸ナリト。十郎左衛門亦申上ル。御意ノ御コトナレドモ。御返アルベキト不存也ト。又仰ニ曰。必定可返トノ儀ナリ。十郎左衛門曰。然ハ彌無御相違御返シ可被成トノ御誓言。承知仕度ト。因玆彈正公キンチヤウ被成。見セタマウ。十郎左衛門手ヲ合。拜シ奉リ。退出シ。其夜取物モ取不合立ノクナリ。是ハ彈正公ニハ。御別意ナケレドモ。高遠衆皆々

御味方ニ無二心ワケヲ見屆ケル故。スサマシク思イケルト也。此トキ大和ノ旗幕取落シ行ケリ。五百ノ人數トモニ。皆々アワテ、歸ル。於爰御朱印御開地。士ノ面々拜セシメタマウ。因茲皆々案堵スル也。

○彈正公高遠ヲ全納タマイテ後。伊奈ノ內巳ノ輪ト云所ニ。福余ト云城アリ。是ニ藤澤ノ次郎賴親ト云者居ケリ。正直公使ヲ以。家康公ヘ可順ト被仰候ヱトモ。不承引。因茲彈正公セメタマイケレバ。防戰ナリカネ。松本ヘ落行。此トキ赤羽又兵衛。田野口等先陣ニ進。城戸ヲ破。戰勝。天正十年壬午九月中也。退ハ一万二千石外ナリ。

○彈正公前ノ二万五千石ニ。巳ノ輪ノ一万二千石ヲ合。三万七千石ナリ、是全可被領ノ所ニ。不慮ノ儀ヲ以。一万二千石眞田ヘ行分ケハ。大閤小田原ト和睦ノ時アリ。此節上州。相州。入相ノ所ヲ以方國切ニ可被成トテ。改ラル、所ニ。眞田ノ領三万石小田原ヘ附。然故眞田ヘ可被遣替地ナシ。其故伊奈ノ內巳ノ輪一万二千石ヲ大閤ヘ御借。眞田ヘ易地ニ被遣。家康公ヨリ彈正公ヘ易地可被付トノ儀ニハアレドモ。終ニ不被遣。彈正公モ新參タルヲ以。思召ノ愚意ヲ被仰モ不成ナリ。

○天下一トウ家康公ヘ歸シテ後。諏方ト高遠知行公事アリ。諏方界澤底ト云所。五百石ノ所ナリ。諏方殿ヨリハ奉行役人ヘ彼是ト手ヲ入。賄賂ヲ以ツクロワル。彈正公ヨリハ。ナンノ御カマイモナシ。御知行ハ正シク彈正公ノ御領地成。諏方方賄賂ヲ入故。公事不果。諏方ガタ理運ニ可成樣子也。彈正公口惜ヲホシ召トイヱトモ。可被成樣ナシ。因茲古肥後守正光公。彈正公ヘ被仰テ曰。私ヲ酒井左衛門ノ尉殿ヘ被遣候ヱ。埒明テ可參候。少所存有之由ヲ被仰。

彈正公仰ニ。如何樣ニモ其方ハカラワレ可然ト也。因茲正光公左衛門尉殿へ御出被仰テ曰。諏方高遠知行公事。于今不埒明也。高遠ノ知行ニ紛ハナケレドモ。諏方ヨリ賄賂ヲツクロイ。手入セラルヽ故。大方諏方方勝ニ可成分ト聞ヱ候。彈正方ハ元來自分知行。何ノ手入仕候半哉。ケ樣ニ成行ト申モ偏ニ上ノ思召故ナリ。トカク此上ハ。此知行ノ儀。兎角ノ構無之也。一トセ眞田方へ被遣トテ。伊奈ノ巳ノ輪一万二千石上へ御カリ被成候。御訴訟申上是ヲ可申請ナリ。只今マデ。トカウ不申モ所存有之テノ事也。然ニ。カク非運ノ公事ヲ御取揚被成コト。角可有筈ニハ無之事ナリ。トカク此公事捨置ナリ。一万二千石ノ替地ノ御訴訟可申上ト存參候旨被仰。左衛門尉殿被聞。尤至極ナリ。少延引被致樣ニトノ事ニテ。其マヽ役人衆ヲ集。澤底ノ儀。保科殿領無疑ナリ。只今公事サイ許被致樣ニトノ儀ナリ。因茲即座ニ公事御勝。正光公御歸ナリ。彈正公仰ニ。年若ケレドモ才ノホド感入ナリ。此年ニ成トイヱドモ不行當。末頼母シキコトトテ御悅也。

○彈正公家康公御妹聟ニ成タマウハ。天正十二年午七月ノコト也ト云。岡崎ヨリ御輿入。此御女公ハ本松平三郎ト云人ノ方へ嫁シタマウ。是ハ櫻井ト云人。家高ニテ有ケル。子孫斷絕スル故。家康公此平三郎ヲ以。櫻井ノ家督ヲツカシム然ニ早世成故。其弟與次郎へ再嫁ス。是ニテ息達數多儲タマウ。與次郎死去ノ後。彈正公へ嫁ス。此御腹ニ御息多出タマウ。

○彈正公岡崎へ御聟入ハ。定吉一亂ノ後ナリト云。士七十騎召連ラル。彈正公ヒゲヲモ不被成。髮ヲモユイタマワズ。上ニサシコヲメシ。馬ニテ町へ入タマウ。御家人皆其通ナリ。田舍ヱビスト笑。旅宿ニ入セタマイ。翌日御登城ニ

ハヒゲサカヤキヲ被成。長上下小サ刀ニテ御登城。是故諸人猶更感驚。七十疋ノ馬ハ過半皆々ヘ進物トシテ被遣也。

高遠松本ト取相之事。幷定義之事。

○松本ノ主小笠原ノ長時ハ。甲斐ノ信玄ヨリ被追出。方々浪人トナリ。越後ヘ行。後ニハ會津ヘモ來。蘆名盛隆ノ世ナリ跡ハ子孫モナクツブル、。

○長時ノツカイケル下女ニ。手習ト云女アリ。是ヘ長時手付ケリ。長時牢浪ノ後。彼ノ妾男子ヲ産。是定義成リ定義成長ノ後。長時ノ子タルヨシヲ。母云含。因茲定義京都ヘ登。公家ヘタヨリ公家ノ聟トナル。其腹ニ出ケル子。兵部是ナリ。其緣者等才覺ヲ以。家康公ヘ言上。是松本ノ本主タルヨシヲ云。其故哀憐ヲ加。奧平平八郎ヲ付。定義ヲ松本ヘ被遣。此時松本ニハ。當雪ト云者已ニ此主タリト云テ。押領シ居ケリ。是ハ長時ノ甥ナリト云。是ヲ追出シ。定義居ケリ。當雪ハ越後ヱ行。

○定義事家康公御恩莫大ノ所ニ。秀吉之勢強ヲ聞。太閤ヘ通シ。旗下ニナル。眞田安房守木曾定義三人秀吉ヘ通。眞田ハ木曾ノ妻ゴノ城ニアリ。是故家康公木曾ノ內。妻ゴノ城ヘ御手向ハ。天正十二年甲申ノ九月ナリ。木曾ニタテコモラル、ヲ取詰所ニ。秀吉大軍ヲ以。後詰スル故。人數ヲ引上ル地形惡引上ガタキ故。彈正公ヘ殿ヲ皆乞。此節殿軍被成。家中ノ者多被打。殿ハツ、ガナク御引上ケル也。

○眞田事大府ノ御約束ニハ。信州一國可被下ト。然ドモ不被下。岡崎ヘ御禮ニ登樣ニト被仰ケル時。登間敷ト云。因茲取カケセメタマウ。內膳。足田。菅沼小大膳。保科都七頭也。保科ハ眞田アイヤケタルヲ以テノ故ニ。後ニ扣サスル。扨眞田ノ城ヘ取カクルニ。城健固ニテ。中

々手指コトナラズ。是故皆々引取。然ドモ城中ヨリ付シタカワン樣子ナレバ。引モ不被引。此故ニ彈正公ヘ皆々使ヲ以殿軍ヲ被致樣ニトノ事ナリ。是故彈正公ノ御返答ニ。ツヨカラン方ヲ可承トテ。則入替ラセタマウ。御人數塀ヤグ(マヽ)ラノ根ヘ付付ケル時。城中ヨリ御子柴指物ヲ引拔取ル。トラルトヒトシク、塀ヲノリ越。城中ヘ入。當敵ヲ打彼指物ヲ取返シ。ナンナク立歸ル。諸人奇異ノ働ト云。扨御人數ヲ二手ニ分被引セニ。敵付シタイ。就中野伏ナド付シタウ。此時ニ赤羽又兵衛ヲ後ニ置。後軍ヲ下知サシメ。跡ニ引シメタマウ。此事ヲ皆々脇ニテ見聞シ。彈正公小身ニテ。此殿軍ハ不敵ノコトナリト取沙汰ナリ。此事岡崎ノ城中ニ。樂書ニシテ一首ノ狂歌アリ。

保科メハ一レンニダモタラスシテ二手ニナ
シテ引ハシレモノ

○松本ヨリ小笠原定義三千ノ人數ヲ以。高遠ヘ寄來ル。此分ケハ此砌。敵トナリ。味方トナリ。思ヒ〳〵ニ變スル世ナレハ。味方セントモ云テモ。手切ノ働ナキ内ハ。誠トセズ。因玆定義大閤ヘ順。家康公ヘ手切ノタメノ働ナリ。定義寄來ヨシヲ。伊奈ノ士ドモ聞。龍カ崎ヘ出テ防ケレトモカナワズ引退。天龍ノ橋向ニ木戸在。爰ニテ又防戰。平出小兵衛大ニ戰。松本方松崎善兵衛城取。隼人ナド云者平出トハ。兼テ別懇ノ者共故異見シ。早々退ケト云。平出馬ヲ引ヨセノラントスル。然ルニ。馬大ニツケツマイヲシテ不乘。跡ヨリ大勢人數續故ニ。松崎城取達テイサメテ曰馬ヲ捨テノケヨト。平出是ヲ不入。終ニ馬ニ打乘退。松崎城取ハ巳ノ輪者。此時巳ノ輪ハ松本ヘ順。上井奈トモ是故直ニ高遠ヘ來事ナラズ。諏方ヘ廻リ。藤澤ヘ出。城ヘヲソク來ル故。彈正公御心ヲヲカル。

○定義人數西ノ澤マデ來ル。下ハ二ブ川。上ハ權現ノ森ナリ。城方防兼。ホコヂ町迄退。敵ハヤ建福寺ヘモミチ、、鉾持町ヘ敵追込。松本方ニテ。薄井助藏ト名乘。今日ノ一番鑓我ナリト云テ。ヲドリ上〳〵。味方ニ五六間先達進來。山伏出立也。赤羽又兵衞曰。此町ヲ退ハ。下ハ下里坂敵ヲカサニ可請。其上殿ハ向ヨリ御覽。面々打死ノ場所ハ爰也。續ケヤ面々トテ。一陣ニ進。薄井ト鑓ヲ合。手ノ下ニ薄井ヲツキタヲス。此時ノ一番鑓赤羽又兵衞。續者ニハ金子左近。田野口五郎兵衞是三人ナリ。此三本ノ鑓ヲ以。大勢ヲツキクツス。畑善右衞門ウスイガ首ヲトラントス。又兵衞セイシテ曰。如此時。首取法ヤアル。皆打捨ニセヨ。首ヲ取ハ却テ高名ニアラズト云。善右衞門尤トテ。首ヲ不揚働。松本勢日ニ餘ル大勢ナレバ。彈正公モ御覺悟ヲ被爲。居六地藏ヘ御出。一文字ノ御マトイヲ立ラレ。其ニテ鉾持町ノ一戰ヲ御覽。此一戰次第ニ御切腹ト思召。床机ニ御腰ヲカケラレ。一戰ノ內ニ死生ヲワカチタマウ。御簾中ニハ。文明寺奉付本城ニ在テ。方々ヲ下知ス。彈正公ヘ使ヲ以云越ケルハ。大將ノ腹切所ハ其也。必シモ本丸ヘ來ラン事ヲ思イタマウナ。御前ノコトハ此愚僧ニ任ラルヘシ。其元御自害ト見ハ。則御前ヲ奉害。城ヘ火ヲカケ。爰ニテ切腹可也ト。因茲彈正公モ御心ヲ被安ノ所ニ。御マエニ着座ノ士十人計モアラン。一人二人宛戰ノ樣子。見テ可參トテ。大方行後ニハ御一人ニ爲成タマウ。扨先手ノ一戰味方打勝。ツキクツシ。勝トキヲ上。追打ニス。ホコヂヨケノ山上ヨリ。石弓ヲ切ハナス。大軍道ヨリ二フ川ヘ打落サル、者數ヲ不知。因茲彈正公御馬被出諸軍ヲ下知シ。小原ノ臺迄追打ニシ。數多打取タマウ。城下ヨリ二十丁余有。是マテ追打ニシタマイ。

彈正公先へ進。道ニ馬ヲカケフサゲ。是ヨリ一人モ追ベカラス。ヲモウ子細アリ。木立松原ヲ横立ニ。馬ヲ可乘ト下知シタマウ。是ハ敵ニ勢ノホド不爲見。大軍ニ見センタメナリ。扨敵退散ノ後。於其場ニ。諏方殿へ狀ヲカヽセタマウ。其狀諏方ニ至ルト。其マヽ諏方ヨリ飛脚ヲ以。岡崎へ此旨言上。於岡崎是ヲ聞召。大感セシメタマウ。但旗本ノ面々曰。保科ハ武勇知謀無双ノ儀ナリ。然トイヱトモ。文筆ニ不達故。書中弱ク聞ユルトテ難シケル。其御狀ニ。

小笠原定吉大軍ヲ以。當城へ寄來ノ所。遂防戰。一戰ニ得利。悉打勝。隨一ノ敵數多打取ナリ。從其元モ。御加勢ヲ被出可打留者也ト。カ樣ニ遊ケル。此文法內加勢トハ有マジキコト也。人數ヲ被出ト可被書事ナリ。加勢ト有故。弱クキコユルト難スル也。

○此一戰敵ハ三千ノ大軍。味方ハ百ニ不足小勢ヲ以。打カタセタマウハ。偏ニ彈正公ノ御知謀故也。先一ツノ御方便ハ。文明寺弟子景印ニ僧十人計ソヱ。白山堂へツカワサレ。兼々コシラヱケル低コバタ。或ハ大般若經ナドクヅサセ。小旗トシ。是ヲ木々ノ木末ニユイツケ。或ハ持アルク。又城內ノ四方ニ內藤ノ幕旗ヲ立ラル。是又一ツノ方便。是ハ友野十郎左衛門取落ケル幕旗也。又上島川兵衛ヲ。權現ノ森へ足輕三十計ソヱツカワサル。是ハ前ニ猪鹿ヨリ敵ヨセ來ルトキコヱシ故。荒上へツカワサレケル。是ヲ權現ノ森へ遣サレケルハ。日向惣左衛門齊庵ト云先手へ御使ヲシケルガ。道ニテ誰云トモナシニ。川兵衛事權現ノ森へツカワサルヽニヲイテハ。大成手立ニ可成物ヲト云。齊庵尤トヲモイ。其方ヲ見ケレドモ人モナシ。トカク此義可申上トテ。取テ返シ。子細ヲ申。彈正公尤至極ナリトテ。高キ所へアカラセタマ

イ。荒上へ向ワセラレ。采ヲフラセタマヘハ。川兵衛心得。足輕ヲツレ權現ノ森へ行。小笠原セイヨセ來テ見レハ。白山堂ノ數十本ノ旗。木々ノ木末ニ飜ル。扨ハ是加勢トヲモウ內ニ。城中ヲ見レバ。內藤ノ旗是亦數十本アリ。是故扨ハ內藤コト。已ノ輪勢ヲツレコモリケルヨトヲモウ時。先手ノ軍打負ケル時。權現ノ森ヨリ鐵炮打出シケレバ。扨コソ後ヲツヽマルヽワト云程コソアレ。クヅレ立ケルホドニ。一返シモ不返。ホコチヨケニ至レハ。上ノ山ヨリ石弓ヲ切ハナセバ。數百人ニブ川へ被打落。打ルヽ者數ヲシラズ。カヨウニ手便方々ソロイケルト也。城方士ニテハ。土井ノ方右衛門ト云者一人被打ケル。戰ノ內ニ飯島治右衛門ト云者。ウスイガ首ヲ上。彈正公へ掛御目。脇ヨリ曰。又兵衛鑓付ケル首也。ヒロイ首トテ笑。彈正公仰ニ。其モ鑓下ノ高名ト云。先ヲカセゲト被仰。チツニハ打捨ケル首ナレドモ此砌ハケマセタマワン故ニ。如此ナリト仰ラル。彼次右衛門是ヲ云立ニシテ。越後へ行。身上濟ナリ。井深茂右衛門物見トシテ。天神山へ行。然ルニハヤ敵付シタイクル。是故城中へ入コトナラズ。ニブ川カワラヲチドリカケニ馬ヲ乘廻シ。終ニ城中へ不入。渡瀨ハアレドモ其ヲワタセバ。カラメテノ敵付入ニセン事ヲヲモイ。敵トニラミアイ。川原ニ後マテ扣ヲルレンゼン芦毛ノ馬ニ乘ラレケルト云。彈正公ハ。物見ノ茂右衛門遲歸ルトテ。殊ノ外待カネサセタマウト也。此一戰天正拾三年乙酉極月三日ナリ。ミソレ雪降。寒氣甚ニテ。川水モ濁テ淵瀨モ不見ケルト也。此年又兵衛三十七歲也。

○家康公へ彈正公ヨリ一戰ノ次第被仰上。於岡崎是ヲ聞召。御感ノ上。三宅彌次兵衛ヲ爲上使。高遠へ被遣。少勢ヲ以大軍ニ打勝。甚御褒

美ノ御感狀。幷ニ兼長ノ御腰物。御鎧一兩被進也。因茲於御城御馳走有。上使ノ曰此度ノ御合戰。御內ノ衆何モ可被粉骨ヲ盡ニ。中ニモヌキンデ働ノ衆ハ誰ニテ有之哉。龍歸言上ノタメ也ト曰。彈正公御挨拶ニハ。如仰今度ノ一戰トシテ。手ニ不合者ハナク候得共。只鑓一本ヲ以大軍ヲツキクヅシ。カク得勝利ナリト。三宅ノ曰。其ハイカ成事ニ有之ヤ。鑓一本ヲ以勝タマウトハイカガ。仰曰。赤羽又兵衛ト申秘藏ノ勇士ヲ持也。彼カ鑓先一本ヲ以。先勢打取ツキクヅス也ト。又外ニ一人有之。謀ノ一人アリト。上使ノ曰。彼等ヘ參會可仕ト。則文明寺ヲ召御前ヘ出ラル丶ハ。三宅ノ曰。是ハ御出家ナリト仰ニ。如何ニモ其通候。彼勇士ニ勝知謀ノ者也ト。三宅ノ曰。赤羽又兵衛ニ參會致度ト。仰ニ曰。又兵衛事掛御目度候ヘトモ。深手數多ヲイ中々登城成コトニアラズ。殘念ノヨシ被仰。上使ノ曰。彼宅ヘ可參ト。仰ニ曰。見苦敷茅屋御腰カケラレガタキト。上使ノ曰。其段少モクルシカラズ。於岡崎御尋ノ節申上ルタメ也ト。仰ニ曰。左ニヲイテハ私御同道可申トテ。御先ヘ御出。上使ヲマタセタマウ。上使則又兵衛宅ヘ來タマウ。又兵衛深手故。於寢間掛御目。上使ノ仰ニ。奇代無双ノ働。感入テ候。參會ノ印ニ盃コト可致ト。因茲盃酒及三獻。上使ノ盃又兵衛ニ被下。又兵衛盃取揚ル後。上使ノ曰。何ゾシルシヲ進度存ズレトモ。旅ノコトナレバ手本ニ何モナシ。彈正殿御物語ニ。御自分鑓一本ヲ以テ今度ノ一戰ニ打勝セタマウト承レハ。我等秘藏ノ鑓ヲ可進トテ。十文字ノ持鑓ヲ被下。則頂戴ス。上使モ押付歸タマウ。此鑓又兵衛日比秘藏シ持ヤリニスルナリ。

○伊奈半郡ハ。二萬五千石ホドアリ。家康公ヨリ御尋ニハ。イカホド知行有之ヤト御答ニ。一

萬貫有之トノ事ナリ。實ニ被仰テハ。公役六ケシク可有ト思召テノコトナリ。其後田子へ一萬五千石ニテ被遣。是御立身ト云ニテモナク。分ケ有事ト見ヘタリ。暫過二萬五千石ニテ。又高遠へ御所替也。

○道儀公高遠ニテ。御加増御拜領ハ五千石ナリ。分グハ。小笠原定吉。家康公ヨリ。又御尋ハ。松本ノ知行イカホドアリヤト。三萬石有之ト。實ハ八萬石余アリ。是故古カヱ三萬石ニテ被遣。是ハ前ノ不屆故知行御ケヅリト見ヘタリ。松本ハ玄番へ被下ナリ。八萬石也。玄番ボツ落ノ後。松平丹波ニ松本ヲ被下ル。七萬石也。一萬石殘タルヲ諏方へ五千石。道儀公へ五千石被進。是故三萬石ニ被爲成也。

○小笠原兵部。於大坂打死ハ。ヒツキヤウ道儀公ヘノセキヲ以ノ故ト云。

○六日ノ事ナリ。先手藤堂和泉。井伊掃部。榊原遠江是ハ信濃衆ノ組頭ナリ。都テ信濃衆生駒山ノ根ヨリ陣取ナリ。

○道儀公ノ御陣屋ハ。向ニ沙山有テ。大坂ノ方ハ不見トナリ。沙山へ上レハ大坂見ユル。小笠原ノ陣場モ此通ナリ。

○六日ノ朝保科三左衛門ト云者揚子ヲ仕。山ノ上へ上リ。大坂ノ方ヲ見ルニ。玉作ロヨリ。何カ黑物見ユル。因玆立歸。道儀公へ此旨申上。正光公仰ニ又兵衛行見ヨト。是故又兵衛彼所ニ至見。然トモ老眼故ミヱズ。立歸申上テ曰。老眼故分ケ一圓ニ見ヘズ。若者ドモ申ヲ承レハ。無疑敵ニテ可有之。早速御用意有ベシト。因玆御膳御急人數モ皆々早々可認ト被仰付。正光公モ御出御覽ニ。村々見ユル平野之方へ行。然ニ鎧武者二騎通ル。上ノ物見ノ衆也。久鬼。稻葉。本多百助ト云人ナリ。因玆井上市左衛門ヲシテ。是ヲ問ハシム。兩人ノ曰。敵也。油

斷スルナト。其故急ニ御支度御出。御先又兵衛ニ御旗御預被遣。此旗ニハ赤羽淸七御付被成也。道儀公モ御乘出可被成所ニ。最早敵ハ引取。又兵衛歸來。道ニテ道儀公へ御目ニカクル。如何仕タルヤト御尋。又兵衛申上テ曰。最早敵ハ引上候。殘念ノ仕合ドモニ存候。小出村ノ足輕藤藏首ヲ一ツ取候。引殘ノ敵一人ヨシ原ノ中ニカクレ居候ヲ。鐵炮ニテ打取參候。則首ヲ御覽ニ入。扨御歸ノ已後。上田角左衛門ト云士ヲ爲御使。小笠原兵部殿へ被遣。仰ニ曰。今朝ノ仕合。近比殘念ニ候。御陣所別條無御座候哉。爲御見舞使ヲ以。御左右承候トノ事ナリ。此時兵部殿ハ。床机ニ腰掛マシマシテ。家ロウノ面々ヲ大ニ御シカリノ時ナリ。兵部殿ニテハ。此敵來ヲ一圓不知。其故甚立腹被成砌へ。角左衛門行。則御呼出シ。口上ヲ御聞。委細ノコトナシニ。其ニテハ誰々手ニ不合ヤト。覺左衛門申テ曰。アノ方ニテモ少遲ク候而。存樣ニモ逢不申候。赤羽又兵衛旗ヲ爲持カケ出參候所ニ。引殘ノ敵少々打取マイリ候ト云。是ハ覺左衛門ヨセイニ云也。兵部殿以ノ外セキ。皆ハヨク寢伏而居故。敵ノツラダニミズ。柔弱至極ノ者ドモナリト曰。御息信濃殿仰ニ。日比餘軍禁嚴故。陣屋ノ外へ面出モ不仕。其故敵ノ通モ可存樣無之トノコトナリ。兵部殿曰。ヨシ〳〵此上ハ所存有物ヲト。齒ガミヲシ。道儀公へノ返答モ不被成。是故覺左衛門ハ返リ。此ヨシ申上ル。道儀公笑而マシマスト也。兵部殿御セキ有之事ハ。已前亡父定吉高遠へ寄來。大ニヲクレヲトラレケルヲ。日比口惜。何事ソアラバ一度高遠ヲ蹈ツブシソロワン物ヲト。口ニモ御出候ト也。然ニ大坂一亂ノ儀ニ付。就中兵部殿ハ信濃殿ニテハ信州ノ旗頭ナリ。一番ニ高名ヲトゲ。亡父ノ恥辱ヲ可雪ト。深ヲモワレケルト也。

然ニ此仕合ヲ聞。大ニイカラレ。翌日ノ軍ニ打死ヲトゲラレケルトナリ。大軍ノ大將カク打死可致筈ニモナクソヲラヘドモ。其時ノ下知ニ一騎ガケニモカケ出シ。一人成トモ敵ニ打合候樣ニト被仰合。一二三ニ乘出サレケル故。人數マバラニテ打死ノ由也。

○翌日七日天王寺口ニテノ事。朝又兵衞天王寺前ニ。少小高土手ノ有所ニ扣ヲル所へ。保科彈正公モ御出。一所ニマシマス。柴助右衞門モ。此所へ來ルト云。敵通時彈正公最早可出哉ト曰。又兵衞ヲサヱテマダ早候。能時マヱヲ立ソロワント。待ヲル所ニ 彈正殿頓テ聲ヲ御立打出ラレケル。然故皆一同ニ出鑓ヲ合。遂一戰戰ヒ亂タル所へ。 兵部殿父子一文字ニ乘カケ通ラル。又兵衞見テ。兵部樣カト云。中々ト曰。又兵衞曰。大將ノカクヘキ所ニアラズト云。兵部殿曰ニ。何事ヲ云ゾ。又兵衞ヨク見ヨ〳〵トノタマヒ。父子トモニカケ入ル。見ルニ最早兵部殿ハ鑓玉ニアケラレタマウト也。信濃殿モ一所ニ打死也。兵部殿家來。是マテ十人付來ト云。右近殿ハ溝中へ切込レタマウニ。家來フタニ成切レテ。右近殿ヲハスクイケルト也。

○又兵衞コト。大坂陣ノ比ハ隱居ニテアリキ。御賴ニヨリ御供。年六拾七歲ナリ。此節モシルシヲヱニツト云。手負北國ヲ直ニ下ル。此節大相國幷大將軍ヱ事在。樋口氏是へ代ル。

○御歸陣ノ已後。又兵衞ニ五拾石加增。隱居免二百石ノ上へ。五拾石。貳百五十石ニ成。又兵衞死隱居免二百石ハ。三男赤羽與惣左衞門ニ被下。今ノ仁兵衞祖父也。二男彌次兵衞ハ。原氏へ養子ニ行也。

○五拾石ハ三歲ノ末女ニ被下ナリ。分ケハ。又兵衞病中ニ。道儀公度々御光駕。末期ニ至テノ御參會ニ。氣色如何ト御尋。御答ニ。最早押付

可埒明ト。仰ニ。存置コトアラハ可申候。可相叶トノ御意ナリ。有難旨ヲ申上。云テ曰。三才ノ末女アリ。此段終マデノ残念ト。仰ニ曰。少モ苦労ニ不仕存。其方死後能ニ御イタワリ可被下コト也。又兵衛合掌テ。頓テ死。因玆彼女子ニ五十石被下。中澤六右衛門妻ニ也。又兵衛ハ天文十八年ニ生。元和五年ニ卒。年七拾一歳ナリ。正之公ノ御代ニ成。諸寺社又ハケ様成無益ノ知行ハ被召上。此節此知行モ上ルト云。

○又兵衛隠居ハ。六十ニ不至節ノ儀也。或時登城シ。申上テ曰。私コト年寄候ニ付。今日世悴武兵衛ニ。カトク三百三十石ユヅリトラセ。組ノ侍ドモニ引ワタシ。隠居イタシ候。是ヨリ御奉公ノギ。武兵衛可仕ト申上ル。仰曰。此方ヨリ心付。免許スベキノ所ニ。只今マデ及延引候隠居尤至極也。然ハ隠居免ニ知行二百石トラスルトノ御意也。又兵衛申テ曰。奉公迷惑ニ存故。隠居イタシ候。申請マヂキト。仰曰。左ニハアラズ。其方ハ摺切ナリキ。武兵衛トモニ左アラン。然ハ酒ヲノミ。心安過候タメ。二百石被下トノ事ナリ。御請ニ忝儀候。然ハ拝戴可仕旨ヲ申上ル。

○武兵衛事。四拾八歳ニテ。於信州高遠死去。

○父仁右衛門。則家督三百三十石ヲ領シ。直ニ番頭職分被仰付。於信州ノ事也。

○父仁右衛門最早御國替ノ節ハ。八百石ニ被成會津ヘ御國替ノ節。千石被成。但組頭職儀三十三年相勤。病氣ヅキ。六拾歳之七月御役義指上。同年極月七日ニ死去。

- 赤羽又兵衛
  - 武兵衛
    - 女松本新兵衛妻
      - 女浮洲二郎左衛門妻
        - 甚助
        - 女松本新兵衛妻
      - 男子
      - 男子
      - 女子
      - 新兵衛倉澤小右衛門二男也
    - 仁右衛門
      - 女三宅孫兵衛妻
        - 辰助早世
          - 午德
        - 女赤羽市右衛門妻
          - 女
        - 女小原久太郎妻
        - 久太郎初妻早世後妹嫁
        - 治兵衛
        - 半亟
        - 女山脇權介
        - 女國府左太夫
          - 左太夫
          - 太門
          - 女
      - 女倉澤小右衛門妻
        - 傳藏
        - 女
        - 女
        - 女一瀬勘三妻
      - 仁右衛門
        - 女
        - 又兵衛
        - 喜内
      - 女神賓左五右衛門妻
      - 女小原五郎右衛門妻
        - 女
        - 宇右衛門
        - 女
        - 男
        - 男
        - 男
      - 甚六郎
        - 女
        - 女
        - 女
      - 林彌一右衛門養子
      - 林彌五郎
    - 市右衛門
      - 女三宅五左衛門妻
        - 五左衛門
        - 忠太夫
        - 女飯沼源八妻
        - 女高梨伊助妻
      - 市右衛門
      - 九太夫
        - 男
        - 女
      - 土子織右衛門
        - 男
      - 女大森周庵妻
        - 女
        - 女
    - 女倉澤小右衛門妻
    - 女小原五郎右衛門
    - 女中澤次右衛門妻
    - 女一瀬次郎兵衛女
    - 女林兵大夫妻
    - 女赤羽甚六妻
  - 原彌次兵衛 原新左衛門養子
  - 與惣左衛門
  - 女一瀬甚五衛門妻
  - 女御子柴次郎兵衛妻
  - 女中澤六右衛門妻

小右衛門
女 畑又左衛門
女 樋口勘三郎
　女 中村次右衛門妻
　女 諏方藤三郎妻
　萬太郎
女 藤澤九郎右衛門
松本新兵衛
倉澤彌太郎
女 樋口清右衛門
五郎右衛門
久太郎
源五郎
半内
女 北原釆女妻
關内
源次郎
女 丸山四郎右衛門妻
　次右衛門 中村次右衛門養子
　女 三宅五左衛門妻
　女
勘兵衛
强八郎 一瀨甚五衛門養子成
孫太夫 寳井孫右衛門養子成
彌次兵衛 九郎左衛門
藤左衛門
宗的
　吉亟
　男子
　男子
仁兵衛
　仁兵衛
　高木與惣右衛門 是養子ニ行
　女 赤羽五左衛門
　傳四郎
　女
　男
女 北原九郎右衛門妻
　李亟
　女 中尾次郎右衛門妻
女 小笠原五左衛門妻
　五左衛門
女 神尾四郎左衛門妻
　遠山伴右衛門養子
　長五郎
　傳左衛門
七郎左衛門
女 横田九兵衛

安左衛門
男子
男子
男子
男子
藤九郎
女名倉六兵衛妻
男子
男子
男子
男子
女新美㷀左衛門妻
男子
女
女柴佐左衛門妻
女廣川吉右衛門妻
水右衛門
惣太夫
又内

次郎兵衛
女横田安左衛門妻
茂四郎
男子
男子
惣左衛門
女竹尾吉右衛門妻
仙千代
女永田三太夫妻
門奈傳右衛門
治郎左衛門養子
女

赤羽甚六郎
俊房　花押

赤羽記終

以宮内省圖書寮本謄寫校合畢

附録

○傳云。藤澤ヘ移リタマヒタルハ。卽正則公ナリ。御舎弟與次郎殿一同ニ御移リ。既ニ御秀候時。春近ト云所五郷ヲ領シ給フ。藤澤ノ臺ト云所ニ。御座シタル由。與次郎殿ハ。今ノ北村氏ノ曾祖ナリ。彼息保科三左衛門殿。息保科十郎右衛門。息北村十右衛門。並北村權藏也。

○彈正公ノ退治シ玉ヘル伊奈ノ萬才ト云シ者ハ信長記ニ伴西星名ト連書シタル者ナルヘシ。

○高遠ノ城ヘ後詰トシテ。渡部金太夫。畑源左衛門ヲ遣ス時ニ。寄手ノ陣ヨリ飯島民部ヲ入タル事。是ヲ質トシテ。彈正公ヲ招出サンタメ也。金太夫ハ。面々ノ持口巡見シ。本丸ヘ歸。彈正公ノヲハサヌニ腹立シ。件ノ民部ヲ長刀ニテカケ倒ス。其上彈正公ノ質ニ目放ズナト下知ス。先達彼籠中ノ介借ニ付置レタル面々。彈正公出給ヒテ。久シク入給ハヌハ。何様不審端多ク侍ル。御見合被成候得ト。密ニ申入ケレハ。早御心得有テ上ノ衣ヲ下ヘ返シ。端下女ノ病氣ニテ。南曲輪ヘ下ル振ニモテナシ。春日戸左衛門カ胴服ヲ脱テ。御頭ヨリ打懸カルゲニカヒ負テ。閫(末イ)一重ハ出ケルガ。廊下櫓ノ下ニ迯進シ由來ハ本書ノ如シ。但御生害ハ。三月朔日。葬ハ同六日ノ暮ノ由。且新府ヨリ後詰シタル畑源左衛門ハ。山田伯耆守カ子ニテ。彈正公ト從弟也。山田源左衛門共云。其先筑前守正利公。并原淡路守。小原美濃守。金子某ト。此山田伯耆守相聟也。

○彈正公森カ許ニ御座ケルニ。一日不時ニ物躁シク聞ヘテ。其後音モナシ。斯シテ森殿彈正公ヘ出合。是ヲ見給ヘトテ。一封ノ書ヲ披キ前後ヲ兩手ニテ隱シ。此文字如何ト問ル。彈正公

見給ヒ。紛レ御座ナク。誅罰ノ文字ニテ御座候ト會釋アリ。其時森兩手ヲ除カレ。逍遙軒幷保科彈正誅罰ノ事トアリ。先ノ物音ノ躁カリシハ。逍遙軒早誅罰也。森氏會釋セラルヽハ。彈正殿御邊ノ安否御心易カレヨ。上方ヨリ如斯御下知。何ニ御邊ヘ是ヲ露顯スベシヤ是ハ上方ニ此事委細無御存故。御下知ナレ共。此筋達テ上聞ニ達シ御命ヲハ續セ進ルゾ。始終我カ謀ニマカセ給ヘトゾ。會釋セラル。然ル處ニ。同年六月二日信長公京都本能寺ニテ。御生害ノ由告來レハ。森氏モ光秀退治トシテ。上洛ノ志アルナレハ。既ニ小室ヲ立テ。上洛セント思レケレハ。彈正公ヘ殿ヲ頼申サル。彈正公兎角御邊ノ御影ニテ一命ヲ續タル上ハ。何樣御計イニ任進スル旨御會釋ナサレ。此事カクト件ノ行尊ニ告給ヘハ。如本書此僧アラケナク。腹立ツル。斯テハ如何トノ玉ヘハ。所全異變セラレ。急キ此ヲ逐電アラセ給ヘ。殿ハ當國ノ案内者ナレハ。大事シテ退口ニ殿セサセ。鬼ノウチカヘシテ。頼ナキ仕方ニ侍ル。早々退治セラレヨト。異見シ進ル也。

○瀧川上方ヘ登ルトテ。人質ノタメ。內藤ヨリ龜千代。筑前殿ヨリ甚四郎殿ヲ同道セシ時。參河殿ヨリ九十郎ヲ出サル。後ノ民部是ナリ。扨人質取返シタル土地。本文ニハ和田トアレトモ。我聞ハ。一宮ト云處ニテ。一宮ノ神職ナド心ヲ合セ。龜千代九十郎兩人ヲ盜取トナリ。一宮ニテ盜取出ス。次ノ夜小田井ト云處ニテ。茂右衛門甚四郎公ヲ落申トゾ。

○天正十年二月。木曾左馬頭義政。武田勝頼ニ背キ。織田信長ニ歸服。是ヲ便リニ。信長信忠甲斐信濃ニ發向ナリ。三月十一日。武田家滅亡ノ上。深志ハ。木曾義政カ味方シタル忠賞ニ恩補セラレ。小笠原ノ本領松本ヲ木曾在城ノ時

ニ。當六月二日。信長御生害。貞義モ牢浪ノ身成。松本へ下リ。青柳、鹽尻邊ニ蟄居。普代地下等ヲ頼マル。一國味方ス。貞慶ノ士ニハ。溝口美作ト云士一人供スト云。去共松本一同ニ謀叛シテ。義政ヲ討ント計ル故ニ。義政不叶。貞慶ノ方ヨリ百瀬掃部ト云士ヲ質ニ取テ。深志ヲ落サル。時ニ背黒村三徳寺ノ住僧ナド味方シテ。彼百瀬ヲハ奪取也。斯テ貞慶深志ニ在城アリ。是ハ天正十年六月ノ事也。同十八年大閤秀吉小田原發向。貞慶モ御供也。尾藤甚右衛門ハ。去ル大閤筑紫合戰ニ。羽柴美濃守殿ノ後見トシテ。筑前國岩酌ノ城へ寄セ。夜討ニ逢。散々敗軍シ。行方シラス三屯シタルヲ。貞慶許容ス。今度日本中ノ大軍ノ群集ナレハ。殿下ノ御尤メモ有マジクト思ヒ。貞慶陣中へ同道也。此事殿下へ聞エ。以ノ外御腹立ニテ。則尾藤ヲ召サレ。小山ノ宿ニテ。御誅罰今モ彼宿ノ東方ニ古墳アリ。貞慶モ松本ヲ沒倒セラレケルガ。東照君ノ御嫡孫。岡崎三郎殿ノ御姬君ヲ。貞慶へ嫁シ進セ。御緣者ナレバ。樣々ニ御申成セ玉へ。武藏ノ國緑橋ニテ。一萬石ノ地。新恩ヲ蒙セラル。舊跡今ニ往還ノ西ニアリ。其後本領深志ヲ賜リ。大坂大變ノ以後。細川忠興ヲ肥後ノ熊本へ移サレ。彼跡豐前ノ小倉へ小笠原右近ヲ移サレテ今ニ至ル也。當雪ノ沙汰ハ吾未聞也。以上保科記附錄

○貞慶高遠ヲ攻テ敗北セシ時。何者カ一首ノ歌ヲ高札ニ書テ。松本ノ大手ニ立タリ。

高遠ノニブノ川風ハゲシクテ破テ北ル小笠原哉

○兵部殿討死ノ刻。小笠原ノ家中ニ。名譽ノ勇士大力ノ者アリ。小宮主稅ト云フ。後レ馳ニ走來リ。主君父子ノ討死ヲ見テ。甚怒リ訇リ。持タル鑓ヲ取伸。石村ヲ片手ニ握リ。左右ヲ拂テ

卷第六百二十一　赤羽記附錄　四百七十

退行。大勢ノ敵ヘ蒐入。奮戰シテ。主君秀政ノ死骸ヲ奪返シ。信濃殿死骸ヲ尋ルニ。敵味方討死多シテ不見分。小笠原衆追々馳來リ。所々尋ルニ。傍ニ弓小手指タル死骸アケニ成テ有ケルヲ。若ヤト見ルニ。御首ハナシ。去レドモ御裝束無疑。正シク信濃殿ナリシトゾ。

○鮫島右近溝口ヲ討シ後。皆々云ケルハ。溝口カ常々秘藏シテ。身ヲ不離持シ秋ノ野ト云カウガイ。定テ堀中ヘ落入ツラン。惜キ事カナト沙汰アリ。鮫島聞之。其コソ溝口ヲ討シ時。兼々彼カ秘藏ノカウガイ有之由。傳ヘ聞シ故。風ト思出テ見ニ有之取テ堀下ノ芝クレノ間ヘ指込置タリト云。依之人ヲ下シ尋ルニ。無疑有之。人々鮫島カ武勇ヲ感ス。

○赤羽又兵衛事。彈正公御代數度ノ戰功忠義ヲ盡ス。中ニモ天正十二年。小笠原貞慶亂入ノ節。鉢掘除ノ一戰ニ。抽衆無比類働。大軍ヲ追崩シ。正直公御利運トナル。此一戰ノ様子ヲ。結城少將秀康公御聞及ハレ。又兵衛方ヘ御狀ヲ被下賜高祿可召置ノ旨。種々御招ナサルトイヘ共。不承引。ケ様ノ物子孫ヘ傳ヘナバ。必シモ後孫ニ至リ。普代ノ主君ヘ不足シ。忠義ヲ失スル物也トテ。賜ル所ノ御書ヲ取テ火中シ。忽焚棄シカバ。正直公モ。忠義ヲ被感。彌御秘藏ナサル。正光公御代ニ至リテモ。如前々御惠ミ深。大坂御陣ノ節ハ。隱居ナレトモ物馴タル老武者ユヘ。御雇ニテ召連ラル。以上保科御由來記

此書舊有數本。其名亦不一。今姑擧余所見。曰保科記。曰保科記附錄。曰保科由緒記。曰保科御由來記。曰赤羽忠勤覺書。此諸本。大槩雖不甚異。然不免有小異同。今得無名一古本。其文雖古拙。而其事確實。實優於諸本遠矣。且如卷中首擧歷代先君諱。後附赤羽氏世系。是皆諸本所無。而獨此本有焉。則知此本蓋俊房親筆。而當時屬稿。未暇命名。而遽傳播於世。謄寫者。各自以意刪修命名也。是此書所以致有數本。而書名亦隨而異耶。嗚呼國初騷擾。文籍不傳。於今可窺。藩祖創業艱難之一班者。獨賴此書之存。則吉光片羽。豈可以尋常野乘視之哉。是以今手寫一本。以藏于家。書中文字訛誤者不少。諸本或有正之。而却致誤愈甚者。故今余本一依舊。而不敢復有絲毫變改也。但舊本所不載。而散見於諸本者。大抵雖係後人攙入。然其說亦間有一二可取者。則別收錄附後。以備參考。且如其書名。亦宜不可空。則不得已。竊肯以作者姓名。曰赤羽記云。覽者幸莫以余爲效尤。

文政二年己卯十一月二十日　中原泰謹識。

齋藤松太郎校

（第貳拾壹輯下奥附）

大正十二年十二月二十日印刷
大正十二年十二月廿五日發行
昭和十四年七月廿五日六版發行

發行者　東京市豊島區池袋二丁目一〇〇八
續群書類從完成會代表者
太田藤四郎

印刷者　東京市淀橋區戸塚町一丁目一〇九
永島喜代次郎

印刷所　東京市淀橋區戸塚町一丁目一〇九
新英社印刷所

發行所　東京市豊島區池袋二丁目一〇〇八
續群書類從完成會
振替東京六二六〇七　電話大塚七一一八